徳田秋聲先生評

作者が極力描寫しようとして女主人公と其旦那との[illegible]係などはモウパーサンの作品にでも見るやうな深刻さ[illegible]一種の高貴な[illegible]を發揮してゐる。

月見草

椙本まさを女史著

津田敏子女史装幀

三六版頗美本五百五十頁
定價貳圓五拾錢郵税不要

彗星の如く現はれたる樋口一葉以來の天才的女流作家

田山花袋先生は「女が斯う大膽に赤裸々に自分の生活を描いては男の作家は全く其方面に眼色がない」と歎聲されたほど赤裸々に女を告白してゐる。

徳田秋聲先生評

作者が極力描寫しようとして女主人公と其旦那との關係などはモウパーサンの作品にでも見るやうな深刻さを以て極度の寫實主義を發揮してゐる。

田山花袋先生評

殊に女の生活が非常によく書けてゐる。而も澤田が女を斬りつけるあたりの描寫はいかにもうまい。

佐藤紅綠先生評

或数奇な運命に捉はれた一人の女が、今の日本の社會道德の悪い爲め（日本の道德といふものが個人の自由を認めない爲め）段々切つても切れない深みに陷込んで遂々悲慘な運命に逢ふと云ふ著者一流の涙の籠つた小説である。男が女に未練を殘して、一方が逃げようとすればするほど未練を出して女の跡を追廻る、人としての弱點、人間の情緒の絆しの斷ち難い所此點に就て作者は實に非凡の才をもつてゐる。而も正しい道を踏みたいといふ、卽ち自己の境遇に反抗しながら男の強い力の爲めに悶え苦しむ女主人公の生活が最も巧みに描かれてゐる。

玄文社發行
東京市芝公園九號地
振替東京一四一七七

大杉榮氏新著

惡戲

中判美本 送料六錢
定價壹圓參拾錢

氏が病床より送り来れる悲痛凄壯を極むる最近生活の一記録を見よ。

本書は氏の惡戰苦闘を語るもので自叙傳の一部となすものである。收むる、處發賣禁止の記、夜の自動車、妙なお客樣、化の皮、模範囚人、獄中へ、遺言、拘禁されるまで、アナアキストの惡戲、法廷の社會化、病室より其他興趣津々たる氏が最近生活のエピソード拾數篇總て悲壯の裡に無量の諧謔を藏し、諧謔の裡に潜々たる悲涙を湛ゆるもので氏の全面目が躍如として現はれてゐる稀有の快著である。

大杉榮氏著

クロポトキン研究

急遽第拾版成る

定價壹圓參拾錢 送料八錢

內容

クロポトキン總序（無政府主義と近代科學）クロポトキンの生物學（相互扶助論）クロポトキンの社會學（人類史上の傳說、中世ギルドの話）クロポトキンの經濟學（田園、工場、職場）クロポトキンの教育論（頭腦勞働と筋肉勞働）

ロメン、ローラン原著
大杉榮氏著

民衆藝術論

定價壹圓參拾錢
送料八錢

東京神田中猿樂町十五 アルス 電話九段二、… 振替東京…

◎經子史部　十六冊

四書、五經を始め、老、莊、韓非、荀子、新語、新書等の諸子十餘種、即ち所謂支那哲學に屬するものと、外に左傳、史記全編の二大史篇を收む。

◎文學部　十六冊

楚辭、文選、八家文、唐詩選等詩文の外、西廂記、琵琶記、還魂記、桃花扇、長生殿、紅樓夢等各時代の代表的戲曲小說を網羅す。

編纂評議員

（イロハ順）

[illegible]	芳賀矢一
[illegible]	服部宇之吉
…問官、帝國學士院長、法學博士、男爵	穗積陳重
文學博士	幸田露伴
東京帝大教授、帝國學士院會員、文學博士	上田萬年
宮內省御用掛、貴族院議員、文學博士	小牧昌業
東京帝大教授、帝國學士院會員、文學博士	白鳥庫吉
東京帝室博物館總長、文學博士、醫學博士	森林太郎

執筆譯者

（イロハ順）

東京帝大教授 文學博士	服部宇之吉
文學博士	幸田露伴
東京帝大教授 文學博士	宇野哲人
學習院教授	岡田正之
東京帝國大學助教授	箭內亙
東洋大學教授	山口察常
第一高等學校教授	安井小太郎
	公田連太郎
學習院教授	小柳司氣太
宮內省御用掛 文學博士	小牧昌業
東京高等師範學校教授	兒島獻吉郎
拓殖大學教授	後藤朝太郎
第一高等學校教授	佐久節
	笹川臨風
拓殖大學教授	宮原民平
東京帝大教授 文學博士	鹽谷溫
	釋清潭
東洋大學教授	平岡龍城

◎卅二冊

津田青楓氏意匠、菊判總クロース製、天金、一冊紙數約八百頁

內
經子史部（十六冊）
文學部（十六冊）
兩部又は一部申込隨意

特製和裝は半紙判和紙刷、洋裝一冊分を四冊に分ち布製帙入とす

◎申込〆切は四月卅日限

略規

會費　各部每月金五圓（前金一時拂金七拾五圓）兩部每月金拾圓（前金一時拂金百五拾圓）（但特製和裝は各部每月金七圓一時拂金百五圓。兩部は此倍額）

申込金　各部金五圓、兩部金拾圓（和裝は各部金七圓）但此申込金は最終月の會費に充つ（一時拂には申込金不用）

送本　來る六月より每月各部一冊宛。但要送本料。

◎詳細見本及規定は御申越次第進呈

東京市神田區小川町一番地
電話神田三二六〇番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

維れ聖者の禮讃也

宮崎安右衛門著

アッシジの聖者 聖フランシス

四六判フランス綴四〇〇頁
定價壹圓九拾錢送料拾貳錢

■ジオットウ、チマブエ其他巨匠の名畫色刷コロタイプ五葉

聖フランシスは中世宗教の花にして又永遠に人類の信仰心を照らす法燈也。聖貧の境涯を妻と呼びて乞食の生活を娛しみ、深奥の感化一世を掩ふ。或は天上の小禽に道を說いて人間の慈願を寄せ、或は畑を荒らす巨狼を悅服せしめて愛の秘密を示す。而して之を慕ふ者に容顏花を欺く尼僧クラーあり、信仰焔の如く燃ゆる數個の高弟あり。シャロンの百合よりも清く、野の小鳥よりも單純なる聖者の傳記として邦人の著述初めて成る。

宮崎安右衛門著

野聖 乞食桃水

四六判 フランス綴 三百餘頁
定價壹圓五拾錢 送料金拾錢

=(忽再版)=

■面山禪師傳讃及桃水碑寫眞■
■繪畫挿入■

聖俗を超越せし出家の出家たる彼桃水は、生涯行乞流浪して十字街道に佛の慈悲忍辱を說きし稀有の聖者也。然れども面山禪師の傳讃一卷を除けば、彼の業績を傳ふるもの絕無なるを慨し、著者が十年痩骨の苦心を以て研究したる資料に基き、新たに彼の眞面目を描破す宮崎氏は現在行乞の境涯にある人、その厚き宗教的體驗にて裏付けたる本書が、以て尋常一樣の傳記に非るを見るべし。

レオパルディ著・柳田泉譯

大自然と靈魂との對話

定價壹圓五拾錢
送料金拾錢

=(忽再版)=

南歐の情熱兒レオパルディが厭世の大哲としての名聲は遙かにバイロン、ショッペンハウエルと相如き、該博なる知識と辛辣なる皮肉とを以て十九世紀初頭の思想界に特異の地位を占む。夙に漱石の小說「虞美人草」に引照せられて讀書子の注目を惹きしが、原文難解にして今日に到る迄一卷の譯書なく、今柳田氏が異常の苦心に成りし本書は吾邦に彼の思想を傳ふる最初の物たるの光榮を擔ふ。通篇對話の形式にして興味頗る多く譯文亦流麗を極む。

東京神田
表神保町

杜翁全集刊行會

電話神田二一一三八
振替東京二四八六一

ラッセル論集

松本悟朗氏譯・廣川松五郎氏裝幀・四六判總クロース六百餘頁　價參圓五拾錢（送料廿三錢）

社會主義を始め過去一切の社會思想に對し廣く高く深き立場より嚴正透徹なる批判を試み進んでその大膽且つ切實なる社會改造意見を提唱して全世界を驚倒せるは實に哲人ラッセルである。本書は彼の名著「社會改造の原理」「戰爭と正義」「政治の理想」「自白への道」の四卷を校訂の上一卷の論集となせるもの、通讀以て彼が社會改造意見の全般を知悉する事が出來る。寔に新人必讀の新聖典！

新人の新聖典

ミシガン大學社會學教授　クーレー著・納武津譯

社會と我

四六判總クロース函入・價貳圓參拾錢・送料拾八錢

曩に各大學競つて社會學講座を創設し、本年に入り陸軍大學新に之を開始せるに至りて時代の新展眞に刮目すべし。本書は社會學的知識の精髓たる「社會と自我の關係」に就て根本的、徹底的解答を下せるもの、其見地の獨創的にして包容的なる、歐米社會學者の推賞措かざりしもの、原名を「人間性と社會秩序」と云ふ。社會的諸理論の混沌として決せず、而も社會學研究の曙光を見る今日、敢て本書を紹介推賞する所以なり。

陸軍大學校長　宇垣一成序・陸軍教授　稻葉君山著

最新支那史講話

四六判總クロース函入・價參圓・送料十八錢

支那歷史は從來兎角乾燥無味に流れ讀者に快感を與へる事は出來難いやうに解されてゐる。著者は大に之を憂ひ精彩ある支那近世史の內容――政治文化社會經濟各般の事項につき極めて明快に平易に興味津々たる解釋を試みた本書は即ちそれである。著者は告白して曰く本書は余が大學に於て多年講述した稿本を印刷したもの之を從前世に出した著書の何れに比しても全然新しい氣分がすると、又以て內容を知るに餘りあらん乎、支那問題紛糾の今日本社が斯界の權威たる著者をして本書を成さしめ讀書界の急需に副ふは大に誇りとするものである。

經濟學士 堀經夫譯

新刊

リカアド經濟原論

四六判四五九頁
總布裝函入
定價貳圓五拾錢
送料内地十八錢

本書は正統派經濟學の三大建設者の一人たるリカアドの名著「經濟及び租稅原論」の中に就き經濟原論に關する部分を飜譯せしものである。同書は、經濟學史上殊に分配論の歷史に於て、少くとも三つの重要なる意義を有つて居る。其價値論はかのマルクスの勞働價値論及び剩餘價値論の源泉を成し、其賃金論は『冷酷なる賃金鐵則』の名の下にラッサアルにより利用され、社會運動の上に多大の影響を及ぼし、而して、最後に其地代論は今日尙地代の原理說明の權威として、經濟原論上に重きをなしてゐる。本譯書には此等の有名なる諸論が網羅されてある。

法學博士 河上肇著

近世經濟思想史論

四六判假裝 定價壹圓五拾錢
三五七頁 送料内地十五錢

發兌 東京神田南神保町 岩波書店

振替東京二六二四〇
電話九段 一二八〇 一三八一



——《改造四月號》——

二枚舌、背任事件、皆結構

モウ一息と云ふところだ。

愈々日本の政界も行きつまつた、元老も、閣僚も、議員も雪隱詰めになつて、行ける場所は冥途のみが殘されておる。

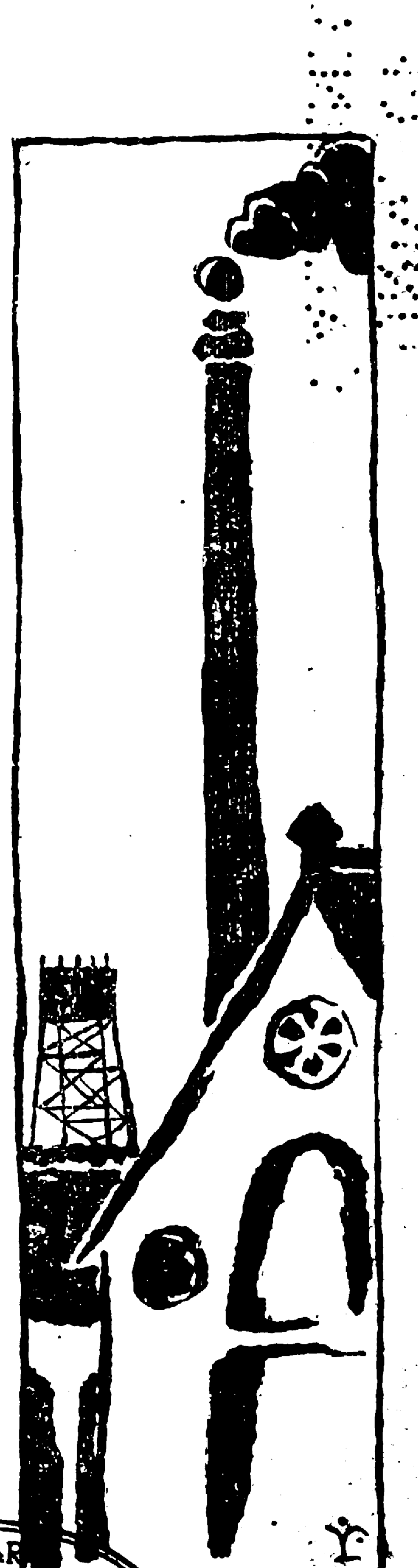
二枚舌を攻めるのも野暮、滿鐵のアラ探しも無粋、良教育家も政黨の邪魔になるなら馘首するがよし、教育も、學校も、內閣の命繫ぎに支障があらば、サツサと片付けるも面白かろう、平相國何のその、クロンウエル何のその、それに不足とあらばまだ〱辷をかけた專横振りも惡くはない。

蹈みつけられ、蹴られ、なぐられても、春が來れば彼の溫藉な若草さへ萠え出る。此上搾取する物があれば榨取したまへ、我等はこのうへ瘦せ細つて諸君にどれほど忍從の美德を示すことが出來るか。諸君は夢ほども、爪の垢ほども人道的自覺があつてはならぬ、鮮人に對しても當然の權利者として橫柄に臨むかよかろう。參政權なぞは與ふる必要もなかろう。冷たい慾望、冷たい桎梏で臨むために高利貸でも總督府役人に雇入るがよい。

モウ一息だ、意氣地のない社會主義は國粹會でやつつけて仕舞へ、新聞記者も雜誌記者も愚圖〱云ふならフン縛つてしまへ。マダ〱いぢめかたが足りないから精々執拗く人惡をやるがよい。

人のいい我々だからもうすこしいじめられないと覺めません、佛の顏は三度だが、我々は十遍でも、二十遍でも平氣である、全く日本人は人がよく出來上つておるから。

だが、息のつまろうとする刹那、どう云ふ御挨拶を政友會や政府諸君に向つてするか、其處は一向御構ゐなしで宜しい。尻尾を嚙まれ、正に胴體まで鵜呑みにされやうとする我々はもう死を覺悟してかからねばならぬ、我々自身のために、我々眷族のために。



斷片

河上肇

Kが死んでから約一月目の或日に、彼れの親友であつたSとBとが落ち合つて、彼れの遺稿を檢べた。もし出版の出來さうなものがあつたら、彼等兩人で協議の上、相當の補訂をして印刷に附しやうと云ふ積りであつたのだ。遺稿の中には、Kが生前學校で講義をしてゐたノートが大分あつた。それは相當に手を入れたら、出版できさうなものが大部分を占めてゐたが、何れも大部なものなので、後に廻はされた。ノートの外には、書棚や机の抽出しに、原稿紙に書いたばら〳〵の草稿が若干あつた。それは一度稿を起して、皆途中でやめたものであつた。何か纏まれば直ぐに發表する癖

同じ主題の下に書き出したらしい原稿が、それ／＼に纏めてあるのは、何んだか死後の今日を彼が豫期してゐたかのやうに、SとBとに思はれた。彼等はKの生前のことなど話し合ひながら、彼が最近に筆を執つたらしい、綠色のインキがまだ生き／＼としてゐる未完の原稿を、第一に檢べに掛かつた。Sがそれを朗讀するのを、Bが側で聽いてゐることにした。Bは喫煙家だから、聽いてゐる方が便利だつたのである。Sは先づ次の如く朗讀した。——

（斷片の一）

「私は露西亞について——其の現狀は勿論其の歷史についても——全く智識を有つてゐません。只、今晚の會合では、話題が露西亞に限られてゐると云ふことなので、私は嘗て讀んだことのあるサックの「露西亞民主々義の誕生」を種本にして若干の事實を述べ、且つ其れについて少しく自分の所感をも述べて見たいと思ひます。總ての材料は、右の一書のみから得てゐるのですから、豫め御諒承を願つておきます。

『サックの書物の卷頭には次の如く書いてあります。——「露西亞に於ける大事件を注視した人は誰れでも、露西亞の革命的群衆はマルセイユを歌ふことに、氣づいたであらう。これは、佛蘭西の大革命が露西亞に於ける革命運動の發達全體の上に有する所の、深大なる影響の象徵である。露西亞革命運動の發端は、十九世紀の初め、ナポレオン戰爭終結の時代に遡る。當時多勢の若き露西亞の士官は、巴里から歸國するに際し、かの佛蘭西革命を鼓舞し激成した所の、偉大なる民主々義の思想を齎し歸つた。是等の士官が、露西亞に於ける最初の革命團體の基礎を置いた。」——私は嘗てマルサスの人口論を記述した折、佛蘭西革命のことに言ひ及んで置いたが、今サックの言ふが如くであれば、露西亞の革命も、話は其處に繫がる譯であります。しかし今晚は、そんな古い時代からのお話をしてゐると、時間が無くなるから、

私は、ロマノフ王朝の最後の君主であつたニコラス二世卽位の時代から、話を始めたいと思ひます。

『ニコラス二世は、一切の新思想に對する暴虐壓制の歷史を擧げて、その位に卽きました。――或る若い娘の子は、社會主義の一小冊子を一人の勞働者に與へたと云ふだけの事で、九年の重懲役を課せられ、次いでシベリアへ無期流刑に處せられたことがあります。又今一人の女は、革命主義者の死刑を妨害するための暴徒を煽動しかけたと云ふ件で、僅か十四歲の小娘であつたに拘らず、シベリアへ終身流罪に處せられて、護送の途中自らイエネセイ河に身を投じて死んだ、と云ふことがあります。』

Kは一寸した演說にも、豫め原稿を作つて置いて、それを朗讀する癖があつた。この草稿も、何かの機會に其れを試みて、途中でやめたものと見える。最後の頁にはまだ餘白があるのに、其の次は紙が改めてある、言葉の調子も變つてゐる、話も直ぐには續かぬやうだ。さう言ひながらSは更に次の如く朗讀した。――

（斷片の二）

『ニコラス二世の治下全體を通じて、警官は學生騷動のため、ずつと多忙であつた。當時大學は社會主義及び革命の溫床だつたからである。學生は大學から放學の處分を受け、或者は牢獄に投ぜられ、或者はシベリアに追放された。しかし彼等の氣力は毫も衰へず、却て益々旺盛になつた。一八九九年、ペテルスブルグの警官が多數の大學生を笞刑に附した際には、之が抗議のために、全國に亘り一萬三千の學生が同盟休學を斷行した。ツァーは嚴命を下して是等の學生をば、總て兵籍に編入した。モスカウ、ペテルスブルグ、其の他の都市の大學教授中、自由思想を有せる者の多數は、當時免

宮になつた。一九〇〇年のニーフの騷動の際には、數千名の大學生がそれに參加したが、その中五百名の者は直ちに捕縛されて仕舞つた。其後引續き約二百名の者は強制的に兵籍に入れられ、其の餘の者も大學から放學に處せられた。他の都市に於ても引續き騷動が起つたが、其の度毎に、勝手に打ちのめせと云ふ命令の下に、コサック兵が大學生に對して差向けられた。ペテルスブルグのカザン寺院の前に於ける示威運動の際は、警官及びコサック兵の襲擊のために、大學生の中で殺されたものが男學生六名、女學生一名であつて、負傷を受けた者は其の外に猶ほ澤山あつた。とう／＼社會革命黨の戰鬪團の一員なるペーテル・カルポギチといふ若い大學生が、彼等大學生に對する暴虐極まる取扱の當の責任者として、文部大臣ボゴレフを暗殺して仕舞つた。しかし當時民衆は酷く政府の處置に憤慨してゐたので、暗殺に對する反感は起らなかつた。學生の親達や、種々の新聞雜誌記者や、大學教授や、其の他智識階級に屬する人々は、互に連署して政府に對し頻りに抗議書を提出した。勞働者等もカザン寺院の前に於ける示威運動に參加してゐたが、今や彼等は「專制政治を打ち倒せ」と呼ばはりながら、諸方の都市で街上を練り步いた。嵐しが催されてゐた。

「一九〇四年の二月十八日には、青年の一テロリストなるグリゴリ・ゲルシュニーによつて指導されてゐた戰鬪團(boevaja orgaisacia)に屬する若干の人々が、ペテルスブルグの軍法會議に引き出された。ゲルシュニーは、その戰鬪團中最も活動せる團員の一人として、內務大臣シピアギン、ウーフ知事ボグダノウチの暗殺を計畫し且つ指揮し、更にカールルコフ知事オボレンスキー公に對する陰謀をも指揮したものとして訊問せられた。訊問は戶を密閉して極めて秘密に行はれた。只選ばれた憲兵及び警官の若干名のみが、纔にゲルシュニーを見且つ彼れの言を聞くことが出來た。しかし戶は密閉されてゐたにも拘らず、ゲルシュニーの名は露西亞に於て、名なものになつた。彼は頑固な裁判官や看守をさへも、彼れの人格の前に頭を下げしめた。裁判官の一人は、訊問を終へた後、「さうだこれは本當の人間だ」と聲高く言つ

た。

『ゲルシュニーは、猶太人を兩親として、シャウリ市に生れた。彼は革命主義者となる以前、長く法律事務に從事してゐた。彼は民衆への奉仕を以て、彼れの生涯の主目的と考へた。彼は民衆を信じてゐた、彼は民衆を愛した、さうして彼は總ての彼れの力を民衆のために集中せんと欲してゐた。彼は平生人に語つて、「私は露西亞人がきつと眞理及び正義の大業を成就すると感じてゐる」と言つてゐた。

『ゲルシュニーは最初民衆を教育することから出發した。彼は通俗の讀物を出したり學校で働いたりしてゐた、――さうして官僚的の諸法律が定めてゐる規定の範圍外に決して出ぬやうに始終注意してゐたのである。しかるに彼は其の仕事に深入りすればするほど、益ゝ民衆と接近して彼等の要求を知るやうになり、段々明白に露西亞人の生活の眞相を見るやうになつた。民衆は早朝から夜遲くまで働き通してゐるに拘らず、彼等は年中飢に襲はれ、病氣で死に、垢と貧乏との裡に重なり合つて生活してゐる。斯かる狀態を眼の前にしながら、政府は民衆を助ける爲め啻に何事をも爲さざるのみならず、却て民衆を助けんとする人達の道を阻害してゐる。學校に於ける教育の最も簡單な初歩以外には、今日何事も許されてゐない。民衆に告ぐるに彼等貧窮の原因を以てすることは、全く禁止されてゐる。それは官僚政治のために不利だからだ。もし民衆が事の眞相を悟るならば、彼等は必ず壓制及び無法から彼等自身を解放せんと要求するに相違ないからだ。ゲルシュニーは此の如く觀察した。

『ゲルシュニーの見た所によれば、露西亞は眞に無法律の狀態に在る。一億五千萬の人民の運命は、少數なる併し巧に組織されたる一個の朋黨の掌中に在る。此等の徒は、只彼等自身の利益をのみ考へ、一切の仕事を秘密裡に運んでゐる。斯かる事態の下に於て、彼れの爲すべき事は只一つだけあつた、さうして其れをば彼は爲した。即ち彼は秘密の裡に人

民の爲め働くといふ決心をした。そこで彼は從前の職業を擲ち、彼れの故郷を打棄て、彼れの姓名を變へ、さうして社會革命黨の一員となつた。彼れの革命的活動は此の時から始まる。

『政府が壓制政治を思ふ存分に實行してゐる限り、平和な手段では何事も出來ぬと云ふことを確信するに至つた彼は、次第に平和なる運動者からテロリストに變つて來た。此等のことは、彼が總て法廷に於て陳述した所である。さうして彼は更に附け加へて次の如く言つた。「余の活動に於て余を導きたるものは只余の良心であり、勞働者の利益のために役立たんとする余の願ひと彼等に對する余の義務とである。」しかしながら――彼は言ふ――裁判官は、人民に應ふるに、苟くも自己の生命を人民のために犧牲となさんと願ふ人々は、今日では牢獄に繋がれ、シベリアに流され、乃至は斷頭臺上に其の生命を失ひつゝあるの事實を以てするであらう。かくて彼は彼れの陳述を結ぶに次の句を以てしたと云ふ。「此處からの道は眞直に斷頭臺に續いてゐるといふことを余は承知してゐる。しかし余は敢て裁判官の宥恕を求めない」と。かくてゲルシュニーは有罪に決し、死刑を宣告された。

『彼は泰然自若として此の宣告を受け、且つ彼れの仲間に與へた最後の手紙に於ては、彼れの生涯は甚だ幸福であつたこと、及び彼は彼れの運命に對して何等の不滿を有たぬことを、書き誌した。

『彼れの心は此の最後の手紙に吐き出されてゐる。彼が死刑の宣告を聞いた後に書いた所には、次の如き文句がある。「死ぬるのが斯んなに容易だとは知らなかつた。さうだ、誰れでもが大目的のために己れ自身の心と魂とを獻げ竭して、光榮の生を生き終へた時、さうして誰れでもが自分の死は、苦みつゝ蹂躙されてゐる總ての民衆のために、救世の日をより近く齎すに至るであらうといふ信念を以て死にゆく時、死ぬるのは全く容易なものだ。總てが終つたのでは無いといふことを知り、從て又戰場には多くの戰士が殘つてゐて、其等の戰士は敵の銃擊の前に決して退くことなく、

既に死を決して立つてゐることを知り、且つ此等の人々の後には人民全體の階級から新たなる隊伍の出で來るべきことを知りつゝ、死に就くは誠に容易なことである。況んや吾々は已に無産者及び農夫と手を携へて活動しつゝあるので、今日では死ぬるのが一層容易である。此の國の人民は、彼等が一切に勝ち終へた時、必ずや正義及び眞理の大業を成就するであらう。」

『ゲルシユニーは一旦死刑の宣告を受けたけれども、刑は執行されずに濟んだ。一九〇四年の三月五日に、刑一等を減じて終身懲役に處せられた。彼は一時シユルツセルブルグの城砦に收監され、次いでモスカウに移されて其處のブテイルスキーの牢獄に入れられ、暫くして更にアカツイスキーの牢獄に送られ、其處では遂に破獄に成就した。どうして逃走したかは、委しく彼れの「思ひ出」の中に物語られてある。

『彼は彼れの仲間——革命主義者——によつて樽の底に入れられた、彼は出來得る限り僅かな空間を占めてゐるやうに、その樽の底に蹲つた。二本の管が空氣の流通のために挿し込まれた。樽の表面には誰の氣にも附かぬやうな穴が拵へてあつて、それに管が續くのだ。彼は一口の鋭い短劍を渡された。彼れの頭には金屬の板が帽子のやうに載せられた。それから彼れの頭の直ぐ上には厚い革の膜が張られて、それは樽の側面にある箍に結び付けられた。彼れの仲間は、其の膜の上へキヤベツを詰め込んで、樽の蓋をし、それを外へ持ち出した。監獄の門を出る時には、看守が銃劍をキヤベツの樽に刺し込んで見て、異狀は無いかを檢べることが時折あるのだが、此の時には、看守は只一瞥しただけであつたので、囚徒等は其のまゝ之を門外に持ち出すことが出來た。

『それを持ち出した囚徒の中には、クリコースキーや、サブノーフや、其他の革命主義者がゐた。ゲルシユニーの言ふ所によれば、當時彼は奇妙に落ち付いてゐて、樽の外でどんな事が行はれてゐるか殆ど無頓着であつた。樽を持ち込むべ

き物置藏に、監獄から大分離れた所に在つた。樽は數分間の後に、物置藏の內に運ばれた。その時ゲルシューニーは、樽の外で仲間の者が「それを右にとれ、」「それを持ち上げ」「それを卸せ」など叫んでゐるのを聞いた。樽は卸されて下に据えられた。それから暫くゴダ〳〵した後に、あたりは急に靜かになつた、運んで來た人達は皆な去つて仕舞つた筈である。ところが今一つの危險が彼を脅した。と云ふのは、番兵の細君と監督の細君とは囚徒のキャベツを使用することを自分等の役德と考へてゐたので、彼等は何時やつて來てゐるか分らぬのである。しかし一刻も猶豫する時でないから、ゲルシューニーは其の短劍を以て、先づ自分の頭の上に在る革の覆ひを切り割いた。通風の管が滑り落ち、キャベツは頭の上に重なり落ち、一時彼は漬物のやうになつた。彼は大に努力してキャベツを振り除け、漸くにして彼れの體の上の方を自由にした後に、極めて注意深く起き上がり始めた。しかるに彼が樽の外へ頭を出すや否や、彼は薄暗き空氣の中に、一人の人間が屈むが如くにして彼に近づき來るを發見した。これは外部から來た革命黨員の一人で、其者は壁に穴を拔いて其處から這ひ込んで來たので、注意深く假裝してゐた。ゲルシューニーは其者の助けを藉りて、樽から拔け出で、服裝を變へ兩人して件の穴を潛つて藏の外に這ひ出ることにした。

『穴の或る部分は非常に狹かつた、ゲルシューニーは通路の途中に挾まれて仕舞つて、もう外へは出られまいと思つた。しかし彼は全身の力を出して、酷く双方の肩を害めながら、辛うじて前へ進み、とう〳〵出口まで來ることが出來た。彼れの前には彼れの助手がゐたが、其者は餘り頑强では無かつた。彼等二人は其處に横つて待つてゐた。丁度穴の中から一人は獄舍の方を見ることが出來た。彼等が動いて善い時には、その獄舍の窓から仲間が合圖をして吳れる筈なのだ。物置藏は四方に開けた道路の上に在つて、さうして其の物置藏と彼等が隱れやうとする場所との間には、若干の距離があつた。その距離の間は獄舍の方から見ることが出來た。ところが其の道は始終色々の人が通る道筋であつた。今も誰かが

二つの水桶を擔棒で運びながらやつて來て、丁度ゲルシュニー等兩人の隱れてゐる穴の直ぐ前で休んだ。しかし二三分經つと、其者は眞直ぐに行つて仕舞つた。

最後に獄舍の窓から合圖があつて、今は誰も居らぬと云ふことが分つた。彼等兩人は穴の中から急ぎ森の方へ走つて其處の藪の中へ隱れた。山の麓には二頭の馬をつけた馬車が、彼等を待つてゐた。高飛の用意は萬事整つてゐた。ゲルシュニーは直ぐに逃亡した。四日の後に彼はウラジヲに出て、そこで彼れの破獄に關する電報を新聞紙で見た。彼れの仲間は、一番の汽船で、彼を日本に送つた。汽船では二十四時間の間、彼は網の覆物の積荷の下に、固より何等食物なしに、身を潛め、甲板に身を顯はしても安全だといふ時を待つた。心配の中に、もう一日經つと、彼は無事に日本に着いて、移住してゐる多數の仲間に迎へられた。

『ゲルシュニーは長崎から東京に行つた、其處では日本の社會主義者が彼れの名譽に於て嚴肅なる歡迎會を催し、又彼が橫濱を立つ前には送別會を開いて呉れた。彼は橫濱から米國に航し、それから歐羅巴へ渡る積りだつたのである。彼は米國でも熱心に歡迎された。彼は米國に六週間滯在したが、その間に、社會革命黨のため三萬弗以上の義金を集め、それをば黨の中央委員に送つた。

『ゲルシュニーが逃げたといふことは、ツアーの政府部內に大恐慌を起した。彼れの捕縛に對し大金が賞として懸けられた。さうして間もなく新聞紙には露西亞の色々の方面に於て彼を捕へたといふ人の噂が載せられた。しかし本當のゲルシュニーは依然として安全であつた。とは言ふものの、困難なる革命的經驗と多年の牢獄生活とは、少からず彼れの健康を害めた。さうして一九〇七年には、彼れの友人に取圍まれながら、彼は遂に佛蘭西で客死した。』

断片の第二は、これで終つてゐた。Sは此處まで讀み終へると、一と休みしたくなつたので、茶を飮みながら、Bと次の如き會話を交へた。——

『これはどうも全部飜譯らしいね。』

『さうだ。多分斷片の第一に引いてあつたサックの本の一部を飜譯したものだらうよ。』

『それにしても何故こんなものを態々譯したのだらうなあ。』

『血氣にはやる青年を煽動して喝采を博す積りででもあつたかな。』

『そんな事を言つては故人に氣の毒だ。彼はいつか佛蘭西革命のことを書いた時、一部の人から暴動を謳歌するものゝ如く誤解されたと言つて、ひどく不平をこぼしてゐた。彼は決して無抵抗主義の信者ではなかつた。從つて場合によつては暴力をも是認してゐた。是認してゐたと云ふよりも、一定の場合は、吾々が其れを是認すると否とに拘らず、現實の事實として、暴力の爆發を見るに至るものだ、と云ふことを考へてゐた。しかし出來得る限り暴力の作用に待たずして歴史を進行させたいと云ふのが、彼れの最も熱心なる希望であつた。彼は歴史の進行を圓滑にすることが——圓滑にするために多少でも貢献することが、自分の使命だと云ふやうに考へてゐた。社會問題が世間の注意を惹くやうになつてから、彼れの書いた多くの物は、殆ど皆、さういふ志願から書かれたものだ。同じ友人でも、僕は君と違つて、彼と學問を同じくしてゐて、思想の交換をする機會も多かつたから、彼れの心情は、君よりも能く理解してゐる積りだ。』

『うつかり冗談を言つたのに、さう眞面目に出られては恐れ入る。』

『忘れてゐたが、原稿の欄外に鉛筆で「此の點最も注意すべし」と書き入れてある所があつた。それは「政府が威嚇政治を思ふ存分に實行してゐる限り、平和な手段では何事も出來ぬと云ふことを確信するに至つた彼は、次第に平和なる

運動者からテロリストに變つて來た」といふ所だ。』

『欄外の註はそれだけか。』

『まだある。それは今の所の直ぐ次ぎにあるゲルシュニーの言葉の「余の活動に於て余を導きたるものは只余の良心であり、勞働者の利益のために役立たんとする余の願ひと彼等に對する余の義務とである」といふ所だ。そこには「良心が人を暗殺に導くことを注意せよ」と書いてある。』

『それだけか。』

『いや、もう一行ある。「暗殺さるゝ者よりも、暗殺する者の方が、より鋭き良心の所有者たること在り得るを注意せよ」といふのが、それだ。』

『どんな演説をする積りだつたか知らぬが、要するに威嚇政治を憤めと云ふことを、演説の骨子にする積りだつたのだらう。』

『原稿が整つてゐないから、無論演説もしなかつたのだらうし、どんな腹案を有つてゐたか、死んで仕舞つては、彼れの思想も永久に葬られた譯だ。』

『ところで其の次の朗讀を願はうではないか。』

Sは更に其の次を朗讀した。それは『露國革命の火』と題し、其の下に括孤して『明治三十八年一月二十九日、平民新聞終刊號所載』としてあつた。

（斷片の三）

『露國革命の火の手は終に炎々として燃え上れり、吾人は諸種の電報を綜合して左の記事を作る。

『二十二日、同盟罷工者は大示威運動を爲し、請願書を露帝に捧呈せんとす、軍隊之を遮つて發砲し、死傷甚だ多し。

『全市突然戰陣の觀。二十二日、一萬五千の同盟罷工者は異常なる群集を爲して婦女小兒をも伴ひ、露帝に請願書を捧呈せんが爲め、各方面より冬宮に向つて群集せり。青年僧侶にしてガポンと稱する長老之を指揮せり。軍隊は要害の地點に於て彼等の進路を扼し、午前十一時頃より爭鬪を開始したり。罷工者は軍隊に向ひ、「同胞を射撃する勿れ」と訴へたるに、歩兵は其の銃を抛ちたるも、其の他の兵は猶攻撃を爲せり。殊にコサツク兵は亂射を始め、男子は固より婦人小兒の殺傷せらるゝもの甚だ多く、ガポン長老は、或は負傷せりと云ひ、或は死したりと云ひ、或は捕へられたりと云ふ。罷工者は電線を破壞し、障碍物を作り、鹿砦を築き、鐵條網を設け、刀劍を以て自ら武裝し、無政府〳〵と絶叫し、全市宛然戰陣の觀を呈し、皇宮前の廣場に於て最も多數の死傷ありたり。

『死傷數。公報に依れば、死者七十六、傷者二百三十三と稱すれども、そは殊更に事態を小にしたるものにして、實際は死者二千、傷者五千に上るべしと信ぜらる。』

なほ其の續きには、『同年一月二十五日萬朝報言論欄の一節』として、簡單な次の一句が載せてあつた。

（斷片の四）

『吾人は今更ながら彼國に就て世界が大なる教訓を得たるを信ず。』

らにもBにも、Kが何故こんな古い新聞の記事を書き拔いて置いたか、よく解らなかつた。しかし其の次ぎの斷片を讀むに至つて、それは後のものと連絡があることが解つた。——其の後の斷片に在る記事は、前の斷片のものを、もつと委しく述べたものであつた。日附が違ふ所を見ると、後のものは露西亞の新らしい暦によつたもので、多分サックの著書の一節を翻譯したものだらうと思はれた。

（斷片の五）

『血の日曜日の話は全世界に語り傳へられてある。一九〇五年一月九日の日曜日は、雪が降つて骨を刺すやうな風の吹いてゐる酷く寒い日であつたが、ペトログラードの勞働者數萬人は、男や女や小兒が一緒になつて、……皇帝に請願書を捧呈せんために冬宮に進んだ。彼等は長老ガポンといふ僧侶に指導されてゐた。この人は露西亞勞働者組合のリーダーだつた。組合は內務大臣の好意の下に成立してゐたもので、大臣は社會主義に對する反對勢力として之を利用せんが爲めに其の發達を助けてゐたのである。

『彼等の捧呈せんとする請願書は、「專制と無責任によつて窒息されつゝある」彼等をば、只人間として認めて貰ひたいと云ふ、謙遜な歎願に過ぎなかつた。彼等は最も根本的なる人權——彼等自身の爲めに考へ、彼等の必要を討究し、彼等自身の困難なる境遇を改善する爲めに若干の方策を講ずるの權利——を歎願したに過ぎない。……彼等は彼等の「父」たる皇帝が、露西亞を幸福にする爲めに、彼等の要求を容るゝの誓を爲さんことを哀訴した。彼等は生きて彼等の祈願の容れられざるよりも、寧ろ王宮前の廣場に於て死なんことを求めた。彼等にとつては「自由及び幸福への道か、然らずば墓場への道」しか開けてゐなかつたのだから、彼等は實際、苦める露西亞の爲めの犧牲として、彼等の生命を献げ

ることを期してゐたのだ。

「之より先きガポンは、其の筋から軍隊に命令があつて、當日軍隊が冬宮を取り卷いて、勞働者の平和的なる行列に向つて發火する豫定になつてゐることを知つたので、其の前の日に、皇帝及び内務大臣に宛てて書面を送つた。内務大臣に宛てた手紙は次の如くであつた。

「閣下。勞働者及びペテルスブルグに於ける各階級の住民は、皇帝に向つて直接に彼等の要求及び全人民の要求を說明せんために、一月九日の午後二時、冬宮の廣場に於て、親しく皇帝に見えんことを希望し、且つ見えなければならぬとしてゐる。皇帝は何も御心配になることはない。露西亞勞働組合の代表者たる私、吾々の同僚及び仲間、及び總ての傾向の所謂革命的團體でさへ、――吾々總てが皇帝の不可侵を保證する。希くは皇帝が眞實のツァーとして開けたる心を以て彼れの人民の前に臨御あらんことを。希くは皇帝が親しく吾々の手から歎願書を受け給はんことを。

總て此の事は、皇帝の幸福のためにも、ペテルスブルグの住民及び祖國の人民の總てのものの幸福のためにも、必要なことである。もし此の事にして行はれずば、今の今まで露西亞の皇帝と露西亞の人民とを繋いでゐる道德上の連鎖は、遂に破られて仕舞ふであらう。

「皇帝に對する將た全露の人民に對する閣下の大なる道德上の義務は、此の手紙並びに書中に言ふ所の歎願書を直接に皇帝に捧呈せらるゝことである。(下略)」

「ガポンが皇帝に上つた書面は次の如くであつた。

「陛下。國務大臣を信じ給はざらんことを。彼等は事件の眞相に就て陛下の聰明を覆はんとしてゐる者であります。人民は陛下を信じて居ります。彼等は明日の午後二時に冬宮の前に集まつて、陛下の前に彼等の希望を述べんと決心

致しました。もし陛下が彼等の前に臨御にならなければ、陛下は、陛下と彼等とを結合する所の其の精神的連鎖を破らるゝことになります。陛下に對する彼等の信仰が消ゆるでありましやう。もし血が流れたならば、其の血は、陛下を彼等から永久に離すものとなります。一切御心配になる事はありませんから、どうぞ明日は人民の前に臨御になつて、吾々の最も謙遜なる歎願書をお受取り下さい。勞働者の代表者たる私、及び私の仲間は、玉體の不可侵を保證する者であります。」

『…其の日が來た。しかるに皇帝の伯父に當るウラヂミール大公は、軍隊に命ずるに、當日集り來る勞働者に向つては發火を以て之を擊退すべく、且つ彼等が全然退散するまでは決して射擊を中止すべからざることを以てした。殆ど千五百名の死傷者が出た、其の中には婦人も子供もゐた、彼等は苦める露西亞のために眞に犧牲とされて了つた。憐れなる、困窮せる、長く苦める民衆の、彼等の「父」に對する哀訴は、此の如くにして終りを告げた。

『ガポンは、彼が指導した所の平和的なる示威運動者に對し斷行されたる此の恐るべき罪惡により、いたく刺戟されつゝ、再び書を皇帝に上り、又露西亞の社會黨各派に對して一篇の公開狀を發した。

『皇帝に對する彼れの書簡は次の如くである。

「私は、人民の父としての陛下に對する無邪氣なる信仰を以て、斯の陛下の赤子を引き連れ、平和の間に陛下の前に進まんとした。陛下は此の事を知られなければならぬ、否な知つて居られる。勞働者と彼等の妻と小供等の無邪氣なる血は、魂の破壞者たる陛下と露西亞の人民との間に、永久に橫はる。陛下と彼等との間に於ける道德的結合は、今や永劫に打ち絕えた。…爆彈とダイナマイト、陛下の一族に對し、及び無權の人民の掠奪者に對し、個人及び集團によつて行はるべき威嚇、——總て此等のことが起らなければならぬし、又必ずや起るべきである。血の海が——未

分有なる血の海が——流さるゝであらう。(下略)」

『又ガポンが露西亞の社會黨平民に宛てたる檄文に[illegible]。

「ペテルスブルグ及び其の他の地方に於ける一月中の流血の日は、血の上戸たるツアーを其の頭首とせる獨裁政治と、抑壓せられ居る勞働者階級と、兩々相對峙するに至らしめた、——露西亞の大革命は已に始まつた。國民の自由を眞に尊しと爲せる一切の人は、獲るか死ぬるかの必然の下に置かれてある。私は、吾々の生活しつゝある現在の時局に於ける歴史的契機の重要を意識するが故に、玆に一個の革命主義者、一個の戰士として、露西亞に於ける一切の社會黨に向ひ、彼等が直ちに一致團結して、ツアーの政府に對する武裝的叛逆の事業を開始せんことを呼ばはる。あらゆる黨派の一切の力が動員さるべきである。……爆彈とダイナマイト、個人及び衆團による威嚇、——國民的蜂起に貢獻し得る一切のものを斷行せよ。……起て、吾等の仲間！戰鬪に向つて邁進せよ！吾等をして一月九日の日に於けるペテルスブルグ勞働者の絶叫「自由か死か！」を繰り返さしめよ。此の際如何なる猶豫も如何なる討議も無用である、それは國民——諸君が其の利益を擁護せんとしつゝある其の國民——に對する犯罪である。私は人民に對する奉仕のために私の全力を獻げつゝ、勞働者階級の抑壓者及び掠奪者に對する爭鬪に對し永久に私の運命を結びつくることに於て、おのづから私は、かの無産者及び苦める民衆全體をば資本家的抑壓及び政治的隷屬より眞に解放せんとするの事業を企てつゝある人々に對し、總ての私の心と、總ての私の魂とを以て、玆に其の同志たらんとする者である。」

『ガポンは、一個の革命的リーダアとして、嘗て彼が突然不意に現はれ來つたと同じやうに、其の後急に姿を消して仕舞つた。[illegible]一九〇五年一月九日に於ける冬宮への行進は、——彼れの名と連結せらるゝ所の此の行進は、其の年鑑

に露西亞に於て起れる革命の序幕となりしものである。』

断片の五は之で終つてゐた。SとBとは之を讀み了へた後、遠い夢の國の出來事を聞いたやうな、又さうでも無いやうな、一種複雜な情緒に充たされた。さうして二人で次のやうな會話を取り換はした。先づ口を切つたのはBである。——

『僕はどうも、……同じ人間が、同じ國民が、互に血を流し合ふ歴史を讀むと、氣持が惡くて仕方がない。Kは何故好んで斯んな慘憺たる出來事を翻譯したのだらう。』

『誰だつて氣持が好くはないが、人間の歴史が事實こんなにして進行してゐるのだとすれば、事實を在りのまゝに見やうとする人間は、之に對して目を塞いでゐる譯にも行くまいではないか。』

『元來何萬といふ勞働者が隊伍を組んで宮城に推し掛けるなどと云ふのが怪しからぬ事だ。日本にだつて、假にそんな事が企てられて見給へ、內務大臣はとても默つて見てゐる譯に行くものでは無い。』

『日本のことは已めにして、少し露西亞の當時のことを考へて見やうではないか。前の断片からでも略ぼ想像せらるゝ如く、暴虐壓制の歴史が年久しく續いてゐて、手も足も出せぬやうになつてゐたのだから、勞働者等が最後の手段として、彼等が慈愛深き父と信仰してゐた皇室に直訴しやうとしたのは、決して無理ではあるまい。一切の官吏を疑ひ盡しても、なほ皇帝の慈愛を信仰してゐたといふのは、寧ろ可愛らしい話ではないか。』

『それにしても、たとひ期待を裏切られたとは云へ、ガポンなどが直ぐ手を翻して、武力的叛亂を煽動するなど云ふことは、誠に不穩當だ。』

『それは生活經驗が人の思想に及ぼす必然の影響だから仕方がない。今の日本には「直接行動反對」「暴力否認」といふ

モットーを掲げてゐる勞働運動のリーダーがあるが、さう云ふ連中でも、一九〇五年一月にペトログラードへ進んで行つたとして見給へ、どう變說したか解つたものでは無い。何等の抵抗力を有たぬが如く見える氣體でも、一室に密閉して壓力を加へて見給へ、或る程度に達すると、どんなに厚い鐵の壁でも、必ず打ち破つて出て來る。人間でも同じことで、暴力以外の一切の出口を塞がれて仕舞ふと、よく／＼の弱虫でない限り、必ず暴力の一路に猪進する。それは必然の天則だから、如何にツアーの權力が強大であつたからとて、此の自然の法則を抑へる譯には行かなかつたのだ。』

『では日本で暴力否認說などが行はれてゐるのは、日本の政治が善良な政治だといふ證據になる譯だな。』

『それはさうだ。しかし一九〇五年革命前に於ける露西亞の政治より善いと云つて、それで安心する譯にも行くまいぜ。それに事態が段々押しせまつて來る。獨り日本ばかりでない、世界總體に亘つて、歷史の進行が今急な坂路に乘り掛つてゐるやうなものだ。新しい思想や運動が、古い精神や勢力の牙營に向つて、日一日と推し寄せて來てゐる。さうなつて來ると、保守の勢力が單なる歷史的重力に止まらずして、何時攻擊的暴力に變化し、無理押しに新興の勢力にぶつかつて來ぬとも限らぬ。さう安心する譯にも行くまい。その當時の萬朝報は「吾人は今更ながら露國に就て世界が大なる敎訓を得たるを信ず」と言つたが、それは「得たるを信ず」と言ふよりも「得べきを望む」と言つた方が可かつたかも知れぬ。恐らくKもそんな事を考へながら、露國の歷史を繙いてゐたのであらう。』

彼等は話をやめて再び斷片の檢査に取り掛かつた。殘りは二つあつた。その中、初めのものは、原稿紙一枚半で終つてゐる極く短いものであつた。

（斷片の六）

『イワン・カリアイエフは最初モスカウの大學で史學、語學、文學を修め、後ペトログラードの大學で法學を修めた青年である。些細なことで牢獄に投ぜられた彼れの經驗は、彼を驅つてテロリストたるに至らしめた。彼は一九〇五年一月四日、セルゲイ・アレキサンドロウヰチ大公の馬車に爆彈を投じ、四月五日死刑の宣告を受けた。彼は死刑執行に先だつ半時間前に、その母に宛てて一書を認めた。彼は當時二十八歳の青年であつた。遺書は次の如き簡單なものである。

「親しき、愛としき母上。

かくて私は正に死なんとしてゐる。しかし私は最後まで私自身を制御し得てゐるほど、私は幸福です。私の親愛なる母上、姉妹及び兄弟、あなた方の悲みをば、私の勝ち誇れる靈魂に透る所の其の光の線の中に浸して下さい。

左樣なら。私を知つてゐる人々、及び私を記憶してゐる人々の總てに、宜しく傳へて下され。

私はあなたが吾等の父の名の純潔を保持されんことを祈つてゐます。

お悲みなく、お泣きにならぬやう。御機嫌よう。私は何時もあなたと偕にゐます。

イワン・カリアイエフ」

『彼れの最後の樣は、實見者の一人によつて委しく傳へられてある。彼は果して最後の最後まで從容として何等死を怖れざりしといふ。』

同じやうな事ばかり續くので、SもBも稍々退屈を感じて來た。それでも彼等は引續き最後の長い斷片を讀んで見た。

（斷片の七）

『一九〇六年八月二十六日の訊問に際し、殺人犯人のコノプリアンニコーワア（當時二十八歳の婦人）が法廷に於ける陳述――

『社會革命黨の一員であり、現時は社會革命黨の北部會に屬する戰鬪團の一員たる余は、ミエンを射殺した。余をして此の行爲に出でざるを得ざらしめたる理由は次の如くである。余は諸君の總てが、去る十二月の月に、將軍ミエン及びリーマンがモスカウ市をば、征服したる敵の領地の如くに、蹂躙したる其の日のことを記憶して居ると考へる。其等の日の事については新聞紙や雜誌が多くの紙面を費した。さうして事件の全體を記述した單行の著書も既に若干世に行はれてゐる。數百の人々がモスカウで殺されたのだ。私は敢て尋ねる、モスカウに於ける是等の人々は何故殺されたのだ？　それは無智であり貧乏である勞働者等が、……彼等の壓制者――其者の桎梏の下に彼等が數世紀に亘つて奴隷化されてゐた所の壓制者に對し、叛旗を飜したが爲めであつたか？　自由のための戰士の殺戮者として、又モスカウの街に其の血を流した罪なき人々の殺戮者として、私は敢てミエンを殺した。

『……訊問の間、私は尋ねられた。「誰が其の方に人を殺す權利を與へたか？」と。社會革命黨の一員として、私は私より以前に私の仲間が此の問に答へたと同じ答を以て、之に酬ゐた。我が黨は、政府によつて行はれた流血の恐怖に應ずるに、赤色の恐怖を以てすることを決議した。我が黨の訴へた恐怖手段は、政府によつて吾々に强制されたものだ。さうして私は、人民の階級から出た一人の人間として、――私は平民の生れだ、私の父は一兵卒であり、私の母は農婦である、――敢て人民の名に於て汝等權力者に尋ねる。「數世紀に亘つて無智と貧困との中に、牢獄の中に、將た流罪地

に、吾々を繋縛するの權利を、誰が汝等に與へたか？　吾々を死刑臺に送り、射撃し、且つ吾々の仲間を何百人となく殺す權利を、誰が汝等に與へたか？　何人が汝等に其の權利を與へたか？」と。汝等は汝等の權力によつて汝等自身で其れを取つた、汝等は此の權利をば汝等自身の製造した法律で之を合法化した、さうして僧侶達が汝等のために此の權利を神聖化した。しかるに今や新たなる一の權利が、そは汝等の無情なる法律よりも遙により人道的なる所の一の權利が、將に確立されんとしつゝある。汝等は、將來正に世を支配すべき此の權利に對して、非道なる戰を宣した。汝等は、汝等の非人道的なる法律の廢止と共に、屍を餌とせる豹の如くに之を喰物としてゐる汝等も亦、同時に廢滅に歸すべきものなることを能く知つてゐる。さうして人民の中から出て來た吾々は、人民の自由のための戰士たる吾々は、かの獨裁的且つ官僚的なる無法の代表者たる汝等と、相戰ふだけの勇氣と權利とを有つてゐる。吾々は、武力を以て吾々の權利のために戰ふだけの肉體的及び道德的の力をば、吾々自身の中に感ずる者だ。

『私は簡單に私の生涯の歴史を語るであらう。私は、師範學校の教課を卒業すると直ぐに、リフランド州の僻境にある學校に教員として送られた。それは政府によつて維持されてゐる學校の一つであつた。當時政府は、今日と同じやうに、バルチック諸州の露西亞化に熱心であつて、さうして此の目的のために學校が建てられ、露人の男女は土人を敎化するために送られてゐたのだ。私が敎へてゐた地方は非常に貧乏であつた。三方は森に圍まれて、一方がパイプス湖に面してゐた。樅と白楊樹とがあるばかりで、陰氣な景色の所であつた。土人は極度に貧窮してゐた。彼等は少しも土地を有つてゐなかつた。私の記憶にして誤らずば、アレキサンダア二世は、彼等に何等の土地を與ふることなしに彼等を自由にしたのである。（譯者註、農奴としての解放を指す）。總ての土地は彼等の舊領主と政府との掌中に殘つた。彼等は湖水の産物で生きてゐた、卽ち彼等の唯一の仕事は漁業であつた。私は、私自身が貧乏に育つたので、彼等の貧乏に對して

敢て驚きはしなかつたけれども、只私には、土地の人々がより善き將來に向つて進むこともなしに平穩に斯かる狀態の下に生活してゐるのが、不思議であつた。暗黒の地平線上に光明又は希望の一條の線をも見ることもなしに、人間が生活し得てゐると云ふのが、不思議であつた。しかし私は土語を知らなかつたので、學校外では何もすることが出來なかつた。學校内では、私は露西亞語を教へなければならぬので、道徳的に苦んだ。露西亞語以外の言葉は使つてならぬと要求した時に、小さな學童が如何にも情けなさうに私を見上げるのを見てゐるのは、私の苦痛であつた。「何故私は私自身の國語を話すことが出來ぬのか」といふ疑問を、彼等の悲しき眼の中に讀むことが出來た。私は又、十七歳から十八歳頃の上級の少年が、色々な事實や事件に充ちてゐる彼等自身の歷史については何も知ることなしに、只オレグヤルーリワクの後裔に屬する人々の間に於ける紛爭の歷史を物語るを聞く時、私はそれを苦痛に思つた。私の言ふ意味は、或る民族が自分と密接な關係を有つてゐる隣人の言語や歷史を學ぶことを必要であり適當であると考へた時、それをするのが惡いと云ふのでは固よりない。しかしバルチック諸州に於ける露西亞化は、是等諸州の民族的及び文化的發達を阻礙するだけのものであつたのだ。リフランドで一ケ年働いた後、私は州會によつて維持されてゐた或る學校に轉じた。それはペテルスブルグ州に於けるペテルホフ區の學校で、そこでは露西亞人の小供を教へた。そこの事情は次のやうであつた。學校の前には一人の憲兵が駐在して居り、學校の裏には一人の警官が駐在して居り、近所の山には一人の長老と一人の牧師とが居り、是等總ての人が私の行動をば絕えず其の筋に報告するのである。もしも私が何か通俗の讀物か議論かを課すると、それは極めて罪のない性質のものであるに拘らず、牧師は直ちに監督に向つて「此處の學校教師は學校の正課

といふ報告をする。すると長老は更に其の筋に向つて、此處の教師は

又私が演藝の催でも企てやうものなら、警官と憲兵とは俄に活動を始める。その結果、監督や教務課長や知事やが、絶えず私を訊問することになる。私は其の村で二箇年半ほど教師を勤めてゐたが、遂に教務課から免職にされて仕舞つた。私は未練なく自分の職業を投げ棄てた。私自身の經驗の結果として、私は次のやうな結論に達したのだ。私は私自身が有つてゐる所の貧弱な智識をすら人々に頒つことが出來ない、私は人々が生活しつゝある狀態に對し彼等の眼を開くことが出來ない、私は彼等の貧窮の眞原因を指摘することが出來ないのだと。しかも斯かる狀態の下に於ては、個人の靈魂及び智識の調和ある發達の如きは、到底之を夢想することさへ出來ぬ。かくて私は、人間性の中に在る最善のもの〻發達が可能であるやうな狀態そのものを作り出すことが、何よりも先づ必要だと云ふことを悟つた。獨裁的且つ専制的なる政府と鬪ふこととの最先の必要事なることを知つた。私は一個の革命主義者となつた。

『私が免職になると間もなく、彼等は私を捕縛した。私は一箇年を未決檻と獄舍との裡に送つた。彼等は一旦私を放免したが、二週間目には復た私を捕縛した。今度は八箇月間留められた。二度目に放釋されて後に、私は外國に去つた。外國にゐた時も、それから露西亞へ歸つた後も、私は社會革命黨の一員として働いた。獄舍の影響と政府の迫害との爲めに、革命的精神は私の心の中に一段と强められた。假ひツアーは暴君でも壓制者でもないにしたところで、彼は儲に民衆を奴隷化する爲めの一つの道具だといふことを、私は明瞭に看取した。支配するといふことは、獨裁政治の見地からすると、掠奪し焚き拂ひ且つ打ち殺すことだ。露西亞人の歴史は實に血の文字で書かれてある。

『私は明瞭に看取した。獨裁的且つ官僚的の上層建築は、政府の武裝力を基礎とするものなることを、さうしてそは、國家といふ吾々の船の舵を操つてゐる人々の側に於て、血を見るの恐怖政治を絶間なく實行することによりてのみ、始めて其れ自身を維持し得るものなることを。さうして生活そのものが私に次の如く敎へた。先づ古きものを破壞し去つ

た後でなければ、汝は新たなる何物をも創造することは出來ない筈だ。汝は銃劍を以て思想を刺し殺すことが出來ないと同樣に、汝は又思想のみを以て銃劍の力に對抗することも出來ないのだと。かくて私は一個のテロリストと爲つた。

『獨裁的且つ官僚的の時代は正に其の終末に近づきつゝある。無意味なる對日戰爭の間に於ける政府の失敗は、已に其の崩壞の遠からざるを示してゐる。……如何なる抑壓も、如何なる捕縛も、如何なる牢獄も、如何なる流刑も、如何なる絞刑も、如何なる苦役も、如何なる征討も、如何なる虐殺も、勃興しつゝある民衆の運動を妨げることは出來ぬ。

『汝等は余に死刑を宣告するであらう。しかし如何なる場所で余は死ぬるにしろ——絞首臺にしろ、流刑地にしろ、其他如何なる場所であつても、——余は只一つの考を以て死にゆく。「許せ、我が人々！　我の汝に與へ得る所のものは——僅に我がいのち——只これしかない。」かくて余は、嘗て詩人の歌ひけるやう、

「□□はよろめき倒れるであらう、
さうして自由の太陽が
露西亞の全平野に上ぼるであらう、」

といふ日の來るべきことの確き信念を以て死にゆくであらう。』

この最後の斷片を讀み了へてから、SとBとは、新らしく入れたお茶を飲みながら、また會話を始めた。今度はBが先づ口を切つた。

『君、今の斷片を讀んでどう思ふ。「生活そのものが私に次の如く敎へた、……汝は銃劍を以て思想を刺し殺すことが出來ないと同樣に、汝は又思想のみを以て銃劍の力に對抗することも出來ない筈だ」といふ一句は、如何にも慘憺たる暴

政の下に苦み拔きながら猶ほ理想を追うてゐた當年の人々の生活そのものが敎へたやうな、獨特の體驗を經なければ本當の意味は到底解らなさうな、一種の妙味を有つてゐるではないか。』

『しかし日本の政治家は、思想に對するには思想を以てするといふことをモットーとしてゐるさうだから、大きに安心ではないか。』

『日本の政治家は賢明だから、我々は誠に安心な譯さ。どうせ君、劍を以て思想を刺す譯には行かないのだから、劍は鞘に納めて置くに限るさ。下手に銃劍を持ち出したら最後、思想のみで銃劍の力に對抗することは出來ないものだと云ふ敎訓を、生活そのものから得さすやうになる。それは人類の幸福のために慨はしい事だ。』

『しかし假ひ相手が銃劍を持ち出したにしろ、暴に報ゆるに暴を以てする事には、僕は飽くまで不賛成だ。』

『それなら若し君が不幸にして、一切の平和的改造運動が抑壓し盡された當年の露西亞に生れたとしたら、一體どうする積りだ。手を拱いてへこたれてゐる積りか。外に意義のある生きやうの無い暗黑時代に生れた青年が、――自分の生命を斷頭臺に棄てる外に、何物をも持たず、棄つべき他の場所をも持たなかつた當年の青年が、――自ら進んでテロリストと爲つたのは、その志甚だ憐むべきものがあるでは無いか。』

『志は憐むべしとしても、其の行をまで是認する譯には行かぬ。』

『しかし其の行が權力者の强制に出てゐるといふことを見てやらなければいかぬ。僕は實際この强制を最も恐れてゐる。それは啻に過ぎ去つた露西亞の話ではなくて、實にあらゆる國家の前途に橫はる一個の恐怖だ。』

『どうしてそう恐れるのだ。』

『考へて見給へ、百萬長者の子として育つた者は、百萬長者としての生活を棄て得るものではない。それは喫煙家が容

易に禁慾し得ないと同じやうに、彼等の生活にとつては、彼等の現在の奢侈や贅澤が必要なのだ。あらゆる奢侈や贅澤も彼等の生活のためには必要品なのだ。だから彼等は世の中の人がどう騷いだとて、その生活を棄て得る氣遣はない。しかし他方には多勢の貧乏人がゐて、毎日汗水流して働きながら、食ふや食はずの境遇にゐる。この境遇を改造することは、彼等にとつて又絕對の必要だ。しかし人間にとつて不幸なことには、金持の得になる方法で貧乏人の境遇を改造し得るやうな妙案の無いことだ。そこで金持の必要と、貧乏人の必要と、この絕對的な二つの必要が、互にぶつかる。さうなると權力に緣の近い者は金持だ、改造運動に對する權力的抑壓が何時の間にか行はれ易い。ところが、何んにも有たぬと云ふことは、貧乏人の弱味で同時に强味だ。無一物の人間ほど、世に强いものは無い。彼等は生命を棄てゝ掛かることが出來る。生命を棄てゝ權力にぶつからうとする。危機が其の間に孕まれる。今この難關を成るべく圓滑に切り拔けやうと思へば、政治家は是非高い所に立つてゐなければならぬ。高くなくては遠くが見えない。窮極の歸趣について見當が立たぬから、甚だ險呑である。獨り政治家ばかりでは無い、資本家階級が覺醒して來なければならない。その覺醒の程度と範圍とに反比例して、暴力の行はるゝ危險の程度と範圍とが縮まる。此の點についても、僕は露西亞の現狀が頗る參考になると思ふ。今日露西亞は共產主義の天下になつてゐるけれども、しかし現在のところは所謂 Zwischen Zeit 又は Uebergangsperiode（過渡期）の第一期に屬するので、資本主義的國家の遺方の殆ど全部がまだ其のまゝに承繼されてゐる。以前は有產者が壓制してゐたのだが、今は無產者の專制時代だ。隨分酷いことも行はれてゐるやうだが、それは舊勢力の反革命運動を鎭壓する爲めには、已むを得ないことだらう。勿論此の過渡期を成るべく圓滑に且つ成るべく迅速に通過せんことは、共產主義者中の心ある者は誰でもが皆熱心に希望してゐる所だらう。けれども、舊勢力が酷い手段で反抗すれば、それに應じて酷い手段の鎭壓が行はるゝだらうし、舊勢力が暴力的反抗を續くる限りは、武力的征服

も亦た引續き行はるゝだらう。過渡期の慘酷さと期間とは、要するに、舊勢力圏の覺醒の程度と範圍とに正比例するであらう。……』

Sは稍ゝ興奮の顏付きして、まだいくらでも話し續けさうに見えたが、晩餐の用意が出來たといふ女中の知らせに、二人とも話をやめて二階から下りた。――其の後彼等は「斷片」を如何なる形式で發表することに相談したか、讀者は既に承知して居らるゝ筈である。

國家主義に內在する軍國的要素

長谷川如是閑

一

種族と種族と、民族と民族と、國家と國家とは、野蠻人のそれたると、文明人のそれたるに拘らず、其の間は、必らず何等かの意味での敵對(アンタゴニスチツク)の狀態が存在する。それは、原始的にはいきなり戰爭を發生せしめ、より進んだ社會では、互の排他的精神又は種々なる意味に於ける、種々なる形の競爭を發生せしめる。最文明の國家及民族間に於ても、必ずその何れかの敵對關係の存在しないといふことはない。

人類の進化を歷史的に觀察すると、必ず種族は種族と、民族は民族と、國家は國家と、互に接觸協同することによつて、所謂文明の世界的生活を產み出してゐる。發生以來、集團生活以外の生活をなし得ない人間は、その本能に於て、全人類の生活を協同に向はしめる本質を備えてゐるものと見なければならない。然るに右に云ふ如く、一つの集團が他の集團に相對する場合には、必ず兩者の間に、先づ『敵對』が成り立つといふのは、確かに自然的矛盾現象の一つである。この矛盾は何ういふ風に理解さるべきものであらうか。

それを理解するには、個體及び個體の接觸について考察する必要がある。孤立的存在が不可能である所の個體は、他の個體との接觸に依て始めて生存することが出來るのであるけれども、その生存を必要とする主體は、確かに個體それ自身である。言ひ換れば、個體は、それ自からを生かす爲めに、他の個體と協同するのである。從つて協同することは、その協同の効果が個體に反映する事を必要條件としてゐる。そこで集團の生活も、畢竟は個體保存の手段である。このことは、『集團』といふ特別の生活體が存在してゐないことを考へれば、直ちに諒解されるのである。然るに、個體が、集團に於てゞなければ生存し得ないといふ『條件』――それはある生活體の條件であつて、生活體そのものでない――を、生活體そのものより引離して、それに或る本體を賦與せしめて、『集團』のことを、一個の生活體であ

るかの如く思惟するに至つたのが、民族とか國家とかを、個體以上の大切の生活體なるが如くに空想するに至つた原因である。さうしてそれが形而上學的に發展して、超國家說を產み、科學的に發展して、國家有機體說などを產むに至つたのである。此等の思想は、集團的生活を、その集團を組成する個體から引離してヨリ優秀な、ヨリ理想的な生活體と見做して、個體は、それに奉仕する爲めの、それ自身は殆んど意味も目的も持たない所の、手段としての存在に過ぎないとするのである。然しながら、これは、手段と目的とを、全く取り違へたのであつて、『集團』は、それが如何樣に發展し、進化したところで、個體の生活法たるに過ぎないことは、『集團』が生活の主體を持つてゐないことを見れば明瞭な話である。目的は個體の方に在つて、集團の方にはないのである。

そこで第一に、個體は集團に對して敵對(アンタゴニスチック)の狀態に在らねばならない譯である。何故ならば、個體の目的とするところは、個體の生存である。然るに集團の生活は、時に個體を集團の犧牲たらしめやうとする。さうしなければ集團が維持出來ないことがある。その時或る一部の個體はムザ〳〵と集團を保存させる爲めに滅びて行く役目を取らせられる。滅びて行かせられるのは、非常の時のことであるが、平常でも、爲し崩しに、個體は集團の爲めに、その不羈自由の發展に制限を加へられる。その爲めに、個體は、集團に於てでなければ生きて行かれない癖に、集團に對して、利害の相反を感ずるのである。集團の生活が個體にとつて、『拘束』と感ずるのは、その相反の知覺に外ならない。そこで、個體は、先づ自己の生存する――自己を生存せしめる――集團と敵對狀態を感ずる譯である。

此の事態を一言でいふならば、自己は、自己の生存條件に對して嫌惡を感ずる、とでもいふべきであらう。これは、前云つた、自然の矛盾現象の第一次的のものである。

自己が、自己の生存條件に對して嫌惡を感ずるのは、生活の約束に對する生活體個人の感覺の必然である。約束がなくては生存されないが、約束そのものは個人にとつて拘束に違ひない。この拘束を出來るだけ、個人が感じまいとする結果、個人と集團との競合が起る。此の競合に於て、個人の生活と集團の生活とが合致するに至るには二つの途がある。一つは、個人の生活を、集團の生活に、全く屈服せしめることで、他の一つは、集團の生活を、個人の生活に引きつけることである。此の前者の方法は、個人の力の弱かつた時代即ち幼稚な社會に於ては、多數人の取つた途であつたが、進步した社會に於ては、多數人も後者の方法を採らうとするに至つた。所謂個人の覺醒とはそれ

をいふのである。後者の方法は幼稚の社會では極めて少數の優者の採つた方法であるが、後の社會では多數人もそれを採る。此の場合には、個人は集團を、出來る限り征服することによつて、自己の生活を集團の生活に一致せしめやうとする。この征服は、腕力的であることもあり智力的であることもあり、經濟的であることもあるが、兎に角も、それは自己の生存の方へと集團を引つけることである。それは正確にいへば、他の個人の生活を自己の生存の拘束たらしめないで、出來るだけそれを自己の生存に役立たしめやうとするのである。で個體と集團との敵對狀態は、畢竟個人對個人の敵對狀態なのである。即ち自然の矛盾現象の第一次のものは、詰るところ、個人と個人との敵對狀態なのである。

冒頭に云つた、種族と種族と、民族と民族と、國家と國家との敵對狀態は、右の第一次的のそれに次ぐところの、同一現象に外ならない。それらのものはそれ〴〵孤立的存在によつて發達し來つたのではなく、全く相接觸することによつてのみ進化し來つたのであるが、その關係には、矢張り個人と個人との接觸に於けると同じ物理が働き、心理が働いてゐるのである。即ち一つの種族は、他の種族との接觸に於て、その個體(一種族)としての生存が進化せしめられるにも拘らず、先づ自己の個體の不羈自由の發展の障害を感ずるのである。種族を異にする野蠻人が、互に接觸した時に感ずる恐怖は、此の集團生活の心理が個人に反映したものに外ならない。さうして、野蠻人に於ては、此の互の恐怖は、直ちに戰を惹き起すのであるが、ヨリ進歩した國家の接觸に於ては此の恐怖はやゝ緩和され、互に警戒した、緊張した接觸の狀態を經驗するのである。然かも、つひ近代まで――或は今日に於てすら――此の場合に双方の國家は互に相手を、自己に役立たしめるべく、云ひ換へると、自己を優勝の地位に置かうとする競合を始める、その結果、力の平均が破れゝば、矢張り戰爭か又は脅迫か壓迫かが、強者から弱者に仕掛けられる。然し五六十年前に、日本と歐米諸國との間に、此種の接觸が有つたのを最後として、國家と國家とが、始めての接觸を經驗するやうな機會は、もう地球の上には無くなつた。それほど、全人類の集團は、集團同士知り合ひになつてしまつたのである。

が此の集團相互の敵對狀態は、苟も集團の對立關係の存する限り、色々の形に於て保存され、發展せしめられて居るのである。さうして、その最も原始的狀態に於てゞはないけれども、原始的性質に於て保存され、發展せしめられたものが、即ち軍國主義なのである。

二

軍國主義は、前述の第一次的の敵對狀態たると、第二次的のそれたるとを問はずあらゆる敵對狀態に於て存在し得る。それは、個人と個人とのそれに於て、武力の支配を發生せしめ、種族間、民族間、國家間のそれに於ては、征服關係を發生せしめる。もし敵對狀態が、集團的生活の外の生活を爲し得ない人類に於て、個體生存の約束に伴ふ必然の現象であるとすれば、その敵對の一つの狀態であるところの軍國主義も、集團的生活から發生する必然の產物でなければならない。今日の發達した哲學的乃至科學的軍國主義は、畢竟、異種族に出會した際に、野蠻人の發する奇異なる雄叫びの進化したものに過ぎないのである。それは、野蠻人に於て已むを得ないことであつたとすれば文明人に於ても已むを得ないことなのである。

軍國主義は、此の意味に於て、壓迫や、脅威や、暴力や、盜奪や、殺戮やが、人間同士の間に根絕せしめ得ないと同じ理由で、恐らく此の地球の表面から拭ひ去ることの出來ない發生物であらう。而かも、壓迫や、脅威や、暴力や、盜奪や、殺戮やが、必ずしも、人間の生活に有害な役目のみを勤めるものでないと同じやうに、軍國主義も、今日までの國家生活、並に今後の國家生活に於て、必ずしも惡い役目のみを有つものではない。

接觸が、敵對感情を惹き起すことについて、一層深く考察すると、それは實は、相互を引離す働きではなく、寧ろ、相互を密接せしめる働きであることを發見するであらう。二つの犬が出會した時に、互に嚙み合ふことは、決して兩者を、沒交涉にすることではなく、その反對にそれは、兩者交涉の一方法なのである。種族乃至國家間の接觸の場合に於ても、相互に惹き起す敵對感情は、その相互を、反撥せしめる形に於て、密接せしめるのである。敵對には必ず競爭の意識が存在する。競爭の意識は、征服被征服の關係を發生せしめる動機である。而して、征服被征服の關係は、征服者と被征服者とを、如何なる關係に於てよりも、ヨリ密接に接合せしめる關接であることは、前に云つた個人對集團の關係から推想することが出來る。集團の狀態が原始的に近ければ近い程、それはさうなのである。進步した國家狀態に於ては、國家の意識が、その人民の間に强烈に發達してゐるので、被征服者は、容易に征服者との融合を肯じないことになるが、國家的自覺卽ち國民各自の國家意識が强くない幼稚の國家は、征服被征服の關係に於て、最も圓滿な接合を遂げる。原始國家の成立及び膨脹は、悉く、さういふ接合から持ち來たされたのである。そこで、敵對感情は、集團と集團との接合を持ち來すに必須の感情であるといふことになる。自然

の矛盾現象は、是に於て、矛盾ではなく、寧ろ所謂造化精妙と稱すべきものとなるのである。

かういふ風に、原始的意義を遡る時には、右の造化精妙の敵對感情の具體化であるところの軍國主義は、確かにその存在理由を持つてゐることを發見するのである。それは、原始社會の協同區域を膨大にする動力に外ならない。それは別々の集團を協同に向つて强制する力である。事實、大なる軍事的征服が、大多數の人類を協同の生活に押し入れた歷史もある。アレキサンダー大王の軍國的事業、羅馬帝國の軍國的事業等は、それの最も大規模なものであつた。ナポレオンの事業は、その成功した最後のものであつた。これらの軍國的事業はその壽命は極めて短かいのを常としてゐる。尤も羅馬帝國のそれの如きは、單に軍國的に終らないで、それに次いで、法律と交通(道路)とによる偉大なる協同を建設したので、大國家の最も長命なるものたることを得た。が然し、かゝる協同の形式は、早晩破壞されるに定つてゐる。それはまだ、人類の小集團の間に敵對感情の存する事情が消滅しないからである。ヨリ廣大なる協同が多數人類に意識されるほど、人類間の生活が共通的になれば、——即ち國際聯盟といふやうな民族間の大な協同が成り立つほど、集團の間の敵對感情が稀薄になれば——それは可能であるが、さもない間は、餘りに大なる協同は成り立たない。まして、軍國的强制による大協同の形式は、到底破壞するの外はないのである。

けれども、軍國的强制による大協同が一旦成立すると、それが破壞しても、何等かの意味で、その協同の效果が、人類の間に殘つて行くのである。で軍國主義の事業は、常に多數人類に呪はれながら、同時に多數人類に讃美されてゐるのである。酷い目に逢つた被征服國人と雖も、アレキサンダーや羅馬帝國の仕遂げた事業を嘆賞しない譯に行かないのは、結局に於て、彼等の事業が、被征服者の社會的進化をも促進する力であつたからである。から考へると、決して軍國主義の文明史上の意義を無視することは出來ない。

がそのことは、決して、社會的進化に於ける軍國主義の地位を確定せしめるものではない。それは、ヨリ野蠻な時代に於て、腕力が集團の協同を維持する力であつた事實によつて、腕力の社會的地位を確定することの出來ないのと同じである。軍國主義は、集團の敵對感情の具體化としては、最も原始的の性質を持つたものである。それは、吠犬と犬との接觸が直ちに嚙み合ひを發生せしめるところの心理に立脚した集團的動作に外ならない。

軍國主義の理論的構成には必らず次ぎの諸點を含んでゐる。第一に、國家と國家との對立は、敵對の狀態に在る。第二に其結果、相互間の平和は、力の平衡によつて保たれる。第三に、此の意味の力とは、人間の力の一切を、物理的の力に集注せしめたものである。智力も氣力も腕力も、皆物理的の力として現はれる時に、その所謂『力』を構成する。第四に、その故に、國家は、常にその力の重要な部分を物理的力(軍事的能力)に集めることによつて、力の平衡を維持しなければならない。――以上は寧ろ消極的軍國主義であるが、更らに、第一の敵對感情の積極的發展として、軍國主義は、相手國に對する征服の慾望と進展する。これは力の平衡を打ち破つて、物理的に動揺を發生せしめて、優勢の力の伸張を計るのである。こゝに軍國主義の特徴がある。今日の國家は、互に互角の形勢に在るものが多く從つて平衡を積極的に打ち破ることは次第に困難になつたが、それでも、一國は、或る誤算から、自からそれを打ち破り得ると信じて、動揺を捲き起すことはある。獨逸が大戰を勃發せしめたのもそれである。

然かも、國家的進化も亦個人的進化と同じ徑路を辿つて、物理的力の發揚を國家的價値の終局の目的とするやうな信仰は薄らいで來た。個人も、原始的の生活に於ては、腕力の發揚に於て生活の意義を見出した時代もあつたが、進化した人類の間には、腕力を自己發展の目的視するものは少くなつた。今では腕力は自己發展の爲めの廢物の武器である。國家的生活に於ては、軍事はまだ〳〵個人の腕力のやうに、用途の少ないものとはならないが、原始國家の征服衝動による武力の發揚は段々程度を減じて來たことは確かである。軍國主義は、その性質に於て、全く原始的の衝動たることを脫しないが、然しそれは、手段化し、それも、已むを得ない場合に限る手段たるに至らんとしてゐる。これは、原始的生活より文明的生活に移るに從つて、生活目的の信仰――覘ひ所――の進化を來した譯である。國家生活も、この進化に於て、軍國主義の原始的性質から――その敵對感情の本質を失はずに――何かもつと文明の生活目的に適はしい主義へと轉化しなければならない。

此の轉化に於て、國家は、決してまだその本質的の敵對感情を棄てることをしない。敵對感情を棄てずに、表向き武力から離れた風をしてゐるのが今日の國家主義である。

三

國家主義は、それが最も近代的の産物である點で、それは思想的にも、實際的にも文明的である。通常、國家主義とは、國家對立の際に發生し、それから發展したもの[illegible]

るが、現代人の所謂國家主義は、決してさういふ古い歴史的產物でないことは史家の一致するところである。

元來國家生活は、日本の歴史に於てもさうであるが、太古の種族國家が、征服國家に變化するに至つて、そこに征服者の意識による軍國的精神から、一種の國家的思想を產み出すに至るのであるが、それが、中世の武力國家の割據によつて、所謂國家的觀念から、對人的觀念に變遷したことは、各國とも、共通の例である。封建時代に於ては一般に國家思想なるものは甚だ稀薄になり、對人的忠義の思想が、封建國家の結帶となつた。それは、軍國時代の生活は、その以前の生活のやうに、土地に定着するといふよりは、對人的結帶を以て、常に不定の土地を占領してゐる生活であつたからである。尤もその時代に於ても軍國的生活に無關係な農民や工商は、軍國々家の興敗と沒交涉な生活をしてゐたのであるが、その生活は、矢張り國家的ではなく經濟的で、さうして鄉土的であつた。歐洲に於ける自治村やギルドの生活などが、その標本的なるものであつた。

近代の國家主義は、この封建的割據生活から、再び民族的結合に返る運動の當然の結果として發生したものであつたことは日本でも變りはなかつた。さうして、此の民族的結合が、屢征服者によつて脅かされるに及んで、國家主義は愈その色彩を鮮明にし、歴史の上に具體化することになつた。それには誰れもいふ通りナポレオンの歐洲國家混交に對する各國民の奮起が與つて力があつたのである。

であるから、近代の國家主義は、その起源に於て、軍國的征服に對する反動なのである。それは軍國主義とは、正反對に、軍國的不自然國家を民族的自然國家に引返さうとする運動なのである。

然るに、此の事は、同時に、その國家主義をして、再び軍國的生活と一致せしめる事情に立ち到らしめたのである。それは、割據的國家又は、混交的國家を比較的民族中心の國家に引直さうといふ運動の動機は、普通の物理的凝集の原則と同じく、求心力と遠心力とによつたのであつて、割據的國家の統一は、前者により、混交國家の整理は、後者に依つたのであるが、その力が何れに働いたについても、最も有力にそれの動機となつたのは、前にいつた敵對感情そのものである。

國家的統一について、外部に對する敵對感情が有力な動機であることについて、米國の心理學者ピルスベリー教授の近書『國民主義及國際主義の心理』に面白い生物學的の例を引いてゐる。それは群生活をしてゐるさうり蟲の例である。此蟲の顯微鏡的試驗によると、この蟲はいくらそれを散亂せしめても直ちにも

との通りの群を作る。これは通常社會本能といふやうな作用で說明され相な現象であるが、能く〳〵研究して見ると此の蟲の集合を作るのは、集合本能といふやうな積極的のものでなく、全く消極的原因によることが明らにされる。それは、此蟲の生活には、アルカリ性が禁物なので、酸性を求める性質を持つてゐる。で彼等は水中の集團生活をしながら、各自の呼吸から二酸化炭素を發生せしめる。で少し外へ游ぎ出して此の酸性の媒介物の中を出かゝると外部のアルカリ性を感じて、再び酸性の溶液中に舞ひ戻るといふのである。

此の事實は、國民的統一は、或る場合に、集團本能といふ積極的の力によるよりも、寧ろ、外部の集團の生活に嫌惡又は危害を感ずるところから發生するといふ事實と、比喩的にではなく、實質的に同一事實なのである。即ち集團生活をしてゐる個人は、他の集團に對する敵對感情によつて統一される。混交國家が結局分裂するのは、即ち此事情によるのである。國家集團の競合の烈しい間に介在する國家の統一の力強いのもその事情によるのである。

かういふ事情から統一される國民的集團が、それ自體を完成せしめる爲めに、敵對狀態に依據するのは當然の話である。これ近代の民族國家――それは事實未だ十分民族的に構成されてゐないとしても、その以前の混交國家や、割據國家に比べてさういはれてゐるのである――は、軍國的國家生活に對する反抗として起つたにも拘らず、自分自からが、結局敵對感情に復歸する發展を遂げるに至つた譯である。さうしてその敵對感情は具體的行動としては軍國主義の外にはないのである。故に近代の國家主義は、次第に軍國主義と發展し、終ひに世界の大戰と發展したのも不思議はない。

此の國家主義は、近代文明の所產であるだけ、國家生活の進化に伴ふ思想上の變化を經てゐることはいふまでもないが、然し、國家生活が、如何に民族的に統一されたといへ、それも實は理想としてであつて、實際に於ては、各國家とも何等かの程度で征服國家の繼承であるから、その國家主義も、征服意識に立脚したものであることはいふまでもない。たゞ權力の征服を、合理化せんとする努力にその特色を見るまでゞあるが、然しそれも結局、同じやうな廻り燈籠に歸したことは次に說明する通りである。

四

元來國家主義の名は、その本質を現はすに適當な用語ではない。何となれば、それは、國家生活を至上とする――誰れでもの國家生活を、その當人にとつて至上とする――といふことを

强調する主義ではなくして、自分だけの國家を、全人類にとつて至上とするといふ見地に立脚してゐる主義だからである。近頃唱へられる『自國本位主義』といふ名が、却つて、國家主義の性質を云ひ現はしてゐる。

國家主義者は、――殊に進步した國家主義者は――決して、國家的對立に於ける敵對感情を强調するとは云つて居ない。彼等の云ふ所によれば、集團の生活は、國家に於て最完全最圓滿の發展を遂げる、從つて個人は國家的完成に於てのみ、人間的に完成せしめられるといふのである。私は今こゝではそれを批判しやうといふのではなく、さういふ風に美しい言葉で云ひ現はされてゐる國家主義なるものに內在する動機について、ありのまゝを見出さうとするのである。

國家を實在觀念とする形而上學はいふまでもなく、更らにそれを文化價値の最高表現とする半科學的見地のやうな、人類の思索能力の進展から發生した概念としての國家は、實驗的に見れば、悉く、個體の集團に對する敵對感情、卽ち人間的敵對狀態の第一次的のものから派生したものに外ならないことは前いつた通りである。個體自身に於て、至上のものを發見しやうとする人類の原始的衝動は、前いつた　個人、集團との間に先づ敵對を感じ、依つて征服によつて、集團を個體に歸屬せしめやうとする。國家が、他の國家との世界的集團生活に於て、同じ心理を持つたことが、前節にいつた如く、國家主義の動機である。而かも、個人が原始的生活に於て、腕力によつて、自己の集團を自己に屬服せしめやうとしたのと、同じ本質を備へてゐるものが、卽ち今の軍國主義であるとすれば、軍國主義は國家主義の仁枝である。今日に於ても、國際關係に於ては、原始社會の個人同士に於ける如く、物理的力の征服が、最も有力に働いてゐるとすれば、國家主義は、軍國主義を離れては存在の可能力を持つことは出來ない。

然かしながら、原始時代の征服も決して單純な腕力のみで遂げられたものではない。人類學者の研究は、古代の征服が、寧ろ魔術によつたことを發見してゐる。日本の神話にも、征服者が不思議の魔術を行つたことが傳へられてゐるが、原始社會の統一と征服とには必ず神意と共通の意志が證據立てられることとを必要とした。神託又は卜筮等によつて、神意を意識したものが、結局の征服者であつたことは、世界を通じての原始國家の實際であつた。それは種族の社會的結帶が、共同神の信仰(totem)であつたことの必然の結果である。國家主義は、自己のトーテムによる國家、の征服に立脚してゐるのである。此のトーテムは近代の國家に於ては、偶像から進化して『文化』の名で

現はれてゐる。獨逸文化を世界に光被せしめる爲めの征服、といふ類にまで進化したのである。

而して、トーテムの擴張が、魔術にのみ依賴することが出來ないで、必らず武力を併用することを必要とした如く、今日の文化の光被も、宗教とか言語とか、學問とか藝術とかいふ所謂文化現象によつて他國を征服することに滿足しないで、必らず軍事的征服を伴はしめるのである。

進歩した國家主義者は、軍事的征服を排斥して、頻りに彼等自身と軍國主義との離婚を吹聽しゐるが、それは決して本心ではなく、たゞ現狀に於て、軍事的行動による征服が見込みのない爲めに、打算的に、軍國主義と一時的の別居生活をしてゐるに止まる。此の別居は、丁度性慾の強い男女のそれの如く、衝動の滿足を、何よりも強く要求するに至りたる時、又は、それが容易く滿足され得ると見込みのついた時には、直ちに實際上の同棲に逆轉するのである。

五

國家主義を軍國主義からも、自國本位主義からも引離さうとしてゐる進歩的國家主義者も、國家が、普遍的なる文化價値(或は『絶對美』といふ如き倫理的價値)の建設に向ふべき最高の人間的使命を有するものである以上は、その使命の實現の爲めに戰爭をすることは、國家の權利でもあり義務でもあるといふ風に說くを常としてゐる。最近にも、此の哲學的國家主義者の一人らしい吉田靜致博士は、ラッセルの愛國心の檢討に對して批評したうちに、博士の所謂『普遍即特殊』の哲學に根據して、特殊主義(利己主義)の見地からの戰爭と特殊即普遍主義の見地からの戰爭の意義とを混同してはならないと說き、或る國家が精神生活の眞義に基き正々堂々たる態度で行動するのを妨げるものがあつたり、『或は特殊即普遍的生活に背く如き行動に墮落せるものがあつたりすれば、此の如きことは憫むべきといふよりは、寧ろ精神的存在物でありながら、精神生活の眞義を發揮し得ざる憐むべきものとこそいふべきである』。かゝる憐むべきものは、丁度水に溺れんとしてゐるやうなものであるから『撫でたりさすつたりしても駄目である。いきなり頸筋を手荒くつかまへてひきずり上げる位の亂暴を加へなければならない……戰爭の意義も、これほどの崇高なる精神生活態度のものでなければならない』云々といつてゐる。これは吉田博士一人の見地ではなく、所謂進歩的國家主義者一般の唱へやうとしてゐるところである。

國家が戰爭をするのを、水に溺れんとするものを救ふのと同一であるといふのが如き、夢のやうな考を何うして眞面目に考

へ出したのであらうか。苟も、實際の戰爭の歷史について考察したものは、そんな戰爭が有り得る話ではないことに直ちに氣付くのである。又それは理想の戰爭であつて、將來の戰爭はさうなくてはならないといふのであるにしても、それは甚だ迷惑千萬の親切である。成る程、歐羅巴人が阿弗利加人の土地を掠奪するやうな時には、そんなことをいつたものであり又獨逸人が、今度の戰爭を續けるについても、そんな申譯をしてゐたのである。**然し阿弗利加人の場合は、如何にも獸のやうな生活をしてゐる人類の占領してゐる土地を奪つて、**そこに文化を植え付けるので、『崇高な精神生活態度』は、聊か可笑しが、先づさういへるにしても、歐羅巴人と黑人との戰爭の如きは、世界の戰爭の中には數へられては居らない。戰爭は、互角の文化を有する國家間の競合に於て起るのが一番多くて、さうしてそれが一番戰爭らしい戰爭である。此の場合に、相互の國家が相手方を、溺死せんとする人間に比較したら、局外者は噴飯するか苦笑するかの外はあるまい。

かういふ論は、畢竟、戰時中の獨逸哲學者の議論と同じく、國家主義そのものと、切つても切れない戰爭といふものを、何うかして國家的立場から肯定しやうとして、衝動によつて遣り出した喧嘩を理性で合理化しやうといふ苦しい辯護士の仕事に過ぎないのである。吉田博士はソロヴイオフを引用して、『眞の愛國者の道德的義務は美に於て國家に奉仕することである。國家にとつての眞の美に奉仕することである。さうして國家にとつての眞の美は人類にとつての美と不可離的に合一して居る。』と云つてゐるが、これは寧ろ素朴的國家主義者の誰れでもが云つてゐることで、**敢て『露西亞の哲人』を待つて而して後に知ることではない。然し『國家にとつての眞の美』**なるものは誰れが**それを意識する**のであらうか。まさか、國家以外に教師か裁判官が居て、それを指摘して與れる譯ではあるまい。それを意識するものは、矢張り國家を組成してゐる個人その人に外ならない。然かも、それは決して、國家を組成してゐるすべての人間の意識ではない。たゞ國家を代表してゐる少數人の意識である。然かも、今日の國家の代表者は、征服者か所有者かである。すると、『國家の爲めの眞の美』なるものを意識するものも、征服者でなければ、所有者で、即ちそれは、征服衝動乃至所有衝動の昂進的心理狀態に於ける意識に於て爲されるのである。さういふ意識狀態の上で意識された『眞の美』なるものが如何なる『美』であるかは、考ふるまでもないことである。

かういふのは決して推理ではない。現に、各の國家が各自の『眞の美』を固執することによつて、慘虐な戰爭に從事してゐる

のである。それは往來を歩るいてゐる人を、水に溺れてゐると稱して、頸筋を摑んで引ずつてゐるやうなものである。各國の『眞の美』ほど、人類にとつて迷惑千萬なものはない。

然るに、素朴的國家主義者は、此の各國の『眞の美』は必然に『人類の眞の美』に合致すべきものであるといふのである。從つて『國家の爲めの眞の美』に奉仕することは『人類の爲めの眞の美』に奉仕することであると考へてゐる。然しそれは少くとも過去と現在の事實に一致してゐない。昔伯夷叔齊は、眞の國家はもう滅びてしまつたから生きてゐることは出來ないと稱して餓死してしまつた。若し多くの人間が、人類の眞美を具象した國家でなければ奉仕もしなければ、生きても居ないと決心したら、大抵な國家はその人民の大部分を餓死させうてしまうであらう。伯夷叔齊の傳説は、支那の自然國家が、征服國家に變遷したことに對する、人類的意識の立場からの不滿の告白である。言ひ換へれば、歴史國家は、人類の眞實とは一致しないことの、詩的表現である。

『哲人』が、歷國家的集團と人間的集團との一致を空想して種々なる理想國家を建設するのも、畢竟は、歴史國家の事實上の不合理に對する意識的反省である。然かも此の反省は決して哲學的國家主義者の考へる如く、歴史國家に對する完全表現で[illegible]としてのり[illegible]。[illegible]意識が[illegible]的傾向に進んで從つて

はないのである。ソロヴイオフの個人は『國家美』と人類美との一致に於てのみ奉仕すべきである、といふ論理を貫徹せしめれば、その不一致の場合には、伯夷叔齊の如く、國家奉仕を辭退しなければならない道徳的立場に陷るのである。それは、戰時中、英米で流行した conscetious objector の立場の肯定である。良心に依つて國家奉仕を拒否する道徳の肯定である。それはまだしもとして、もし人類美との一致に於て、國家美に奉仕する積極的責務を國民に負はせるやうとすると、國民は終ひに國家に對して積極的態度に出づる道徳的義務を有するといふことになる。それは謀叛の肯定である。素朴的國家主義者が較もすれば、政治的犯罪者に陷るのはこの哲理の無意識的發動であるかも知れないが、それは國家にとつて危險千萬である。それは伯夷叔齊の奬勵に一歩を進めて、『匹夫紂を誅する』道徳の奬勵である。國家の學府に在るものが、かういふ論理的歸着に陷るやうな哲學的國家主義を採ることが出來るであらうか。

六

哲學的表現や、詩的表現に依る國家觀は畢竟神話時代に於るトーテムの淨化に外ならない。それは信仰の統一が保たれない社會に於いて――トーテムの崩壊した社會に於ては――國家的

國家に關する一般の思想は觀念的の立場に安住する事を許されない。元來觀念的の國家意識は、現實の意識が其觀念的の國家意識を破壞することに對する防禦的立場にあるものである。それは丁度原始的種族國家が、征服國家に變化したことのために、トーテムが崩壞するに至つて、征服者が人爲的にトーテムの維持を圖る可く、國家歷史を神話に結び付けて造り上げたのと同じ事情である。日本の古代史は、トーテムの意識が國民の間に薄弱となつた時——即ち國家的結帶が弛んだ時に——支配者の手に編み出されたものである。それは當時の新國家の存在を肯定する一般意識の人爲的創造であつた。近代の觀念的國家觀は、矢張り近世の國家的建設の意識に伴つて發生した、新時代の神話である。その形而上學的色彩は、一般形而上的要求以外の即ち眞理の欲求以外の衝動を持つてゐるのである。それは即ち民族國家建設の意識である。それは古事紀が書かれた動機と似寄つた動機を持つたものである。それは或る意味に於て、世界的王政復古である。國家生活が擴つて發生した、征服衝動の進展のために、全くの武力國家を發生せしめ、軍國的生活に依つて民族的生活が荒廢に歸した狀態から復活する働であつたのである。それが結局再び軍國的生活と結び付くに到つた事情は、前に云つた通りであるが、新らしい國家の神話(形而上學的國家觀)は、此事實と結合することに依つて、それ自身を現實國家の哲學たらしめやうとして居るのである。でそれが軍國的生活との絕緣を高潮して居るのは、全く神話的幻想であつて、太古の神話が、蠻力を相手方の特徵に歸して、自己のトーテムは全く合理的力の發現に止り、不合理の蠻力から離れたものであるかの如く想像したのと似通つて居る。異種族のトーテムが、野蠻神であつて、我が種族のトーテムは合理的神であるといふ當時の信仰は、決して其トーテムを持つものが軍國的生活から離れたものであることを說明してゐない如く、國家を最高善の表現と觀る今の國家哲學等も、其國家が軍國的生活に立脚することから離脫したことを證據立ててはゐないのである。

國家哲學は、最高善の意識が、國家といふ抽象體に現示されるといふ觀念に立脚して、國家は至善の具體化として、始めて軍國的生活に入るのであると主張する。之は現實の國家が、戰爭をして居り、そして國家の立場から、それを肯定しなければならないといふ事情に、適應するための思索である。それは何處迄行つても常に或る錯誤を離れることは出來ない。

國家が意識するといふことは、形而上學的國家意識を想定することに依つて、始めて可能なのであるが、戰爭はさういふ形而上學的國家の動作ではなく、現實國家のそれなのである。

つて戰爭を意志する意志は、抽象國家の形而上學的意志ではなく、現實國家の代表者の意志なのである。それは全く人間の意志である。其人間の行動が、其國家の代表者であるといふことのために、絕對善の表現であるといふ道理はない。其正反對に、國家の現實の代表者程、絕對善に遠い行動をして居ることは、各國の政府の態度殊に我が歷代の政府者の態度に依つても明である。戰爭は斯の如き人間の發動である。それは如何なる場合に於ても、絕對善の發動であり得ない。最も好良の場合――例へば米國の歐洲戰參加の如き――に於ても、只の人間並の行動に過ぎない。それすら戰爭の歷史に於ては稀なことである。

　戰爭を『崇高なる精神生活』の發動でなければならないといふのは、何人にも異議のないことであつて、國家がそういふ戰爭をなし得る組織であるならば、それは絕對善の表現であり得るかも知れないが、國家其者の本質がさう云ふ『崇高なる精神生活』ではなく、尨雜なる人間的意識の生活であるから、その歷史は理想や道德の權化ではなく、人間的生活の善惡混交の歷史である。それが絕對善の表現であるならば、吾々一個人も、或は犬も猫も絕對善の表現で有り得る。

　近代に於る人間の哲學及び科學は、觀念的完全人（聖人）の信仰から離れて、現實の人間の心理を認識することから出立するに到つた。此事情は國家の科學及び哲學に就いても同じである。國家の觀念的及び詩的表現は、聖人の憧憬が尙私達に存する如く、私達にとつて浪漫的生活の享樂として今も有力である。然しながら實際の國家の生活は、最早そういふ浪漫的空想に基く行動を許されない。生活が凡て現實味を持つに到つた現代の傾向に於ては、國家生活も其大勢から脫することは出來ない。

　多數人類をして、觀念的生活から現實的生活に移らしめたのは、近代の生活意識が生んだ個人的自覺の結果であることはいふまでもない。個人的自覺は集團の生活に對する個人沒却の意識から、個人を取り戾すことである。國家絕對の意識が其影響を受くるに至つたのは是非もないことである。而して斯る生活意識を發生せしめたものは、個人生活が集團生活への沒却に依つて、何等個人に反映するものを持たないで、只それが全く個人生活の窮迫として現れて來たためである。近代の生活は、集團への沒却に依つて個人を生かすといふ集團生活の本來の性質を失つて、沒却が只個人を殺すことに止るのである。生きなければならない個人は、斯る生活から蘇生するために、生の意識を勃發せしめるに至つたのである。現代的個人は、即ち其意識の結晶に外ならない。生きんとする力程强いものはない。それは何に現れても、一樣に力强い。

此力強い個人的覺醒によつて動搖を感じた國家——個人を窮迫の生活に導いた集團生活——は、それに對して防禦的立場を執らなければならないのである。それが近代の民族的國家主義に次いで道德的國家主義の勃興した所以であるが、民族的國家主義が結局軍國主義に歸着した如く、此國家主義も『崇高なる精神生活』等の名において、軍國主義と結び付いてゐるのである。

此國家主義は、一般哲學上の反動的理想主義と同一立場をとつて、國家を偶像的絕對に結び付けることをやめて、價値的絕對に結びつけて居る。それは Transcendental から Pragmatic に轉じたのである。で今の國家主義は超絕的國家觀をとりながら、同時に、國家的集團生活の觀念をとり入れて、ソロヴイヨフのそれの樣に、他國の國家的存在を認めて居る。然し前云つた如く、それを徹底せしめれば、自國主義の崩壞となり、それを徹底せしめなければ孤立的超國家に逆戾りするのである。

斯る矛盾は、畢竟するに、國家主義が軍國主義と幾度離れても又結び付くことに關聯して居るのである。それは敵對感情に立脚する國家主義その者の必然の運命である。

○社會主義國家と勞働組合

山川均

歴史の上に現はれた最初の社會主義國家に於ては、生産者の組織たる勞働組合は如何なる構造を有し、如何なる機能を行つてゐるか。之は社會問題に注意を拂つて居る人々に、均しく興味ある問題でなければならぬ。勞農露國の勞働組合に就ては、私は二三の雜誌に紹介したことがあるが。本篇は其れ等の記述中に省略した組合の組織と構造とを説明し、併せて其機能の大體を説明した。説明の必要上、それらの記述と多少重復の點があるかも知れぬが、前論を讀まれた讀者諸君の寛恕を待つ。

一、勞農露國の勞働組合

一九一七年十月の第二革命によつて、露國の政權は完全に勞働者及び農民委員會(ソビエット)の手に歸し、こゝにソビエット政府の確立を見たが、政府は極力、勞働組合の組織完成に努めたので、翌一八年一月には組合員は二百五十萬人となり、更に翌一九年二月には三百五十萬人となり、一九二〇年四月の第三回全露勞働組合大會の當時には、四百萬人となつた。全露勞働組合の代表者ロゾウスキーの聲明によると、同年八月には、既に五百二十萬人に達してゐた。是等の組合は、何れも一つの産業に從事する一切の從業者を網羅する、大なる産業別の組合であつて、一九二〇年までは、其數は三十一であつたが、同年四月八日の第三回全露勞働組合大會の決議により、更に其數を減じて二十五となつた。

是等の組合は、工業勞働者の場合には先づ大小の工場を單位とし、同一種類の産業に屬する工場の委員會は、大小の地方を單位とする支部組合を組織し、是等の同一産業に屬する支部組合が合して、全國に亘る全露組合を形成する。斯くて出來上つた二十五個の全露産業組合は、更に全露勞働組合大會によつて全勞働階級的に集中せられてゐる。大會は全露中央委員會を選擧し、大會から大會に至る間は、この中央委員會が、全露勞働組合の最高機關となる。組合の組織と構造とに就ては、尚ほ後節に説明するが、勞農政治の原則とする『民主的集中』の組織は、勞働組合の組織の上にも現はれてゐる。即ち露國の勞働組

合は、一方には組織の集中が行はれてゐると同時に、其集中は上からの官僚主義ではなくて、下からのデモクラシーによつて行はれてゐる。

第一回の全露勞働組合大會は、一九一八年に初めて開かれたが、この大會には約二百五十萬の組合員が代表せられてゐた。**第二回大會は翌一九年六月十六日を以て開かれ、三百四十二萬人を代表する八百四十九名の代議員が参加した。**一九二〇年四月十六日に開かれた第三回大會には、北は遠くムルマンスクの果てより、南はバク地方に至る四百萬の組合員を代表する千六百名の代議員が列席した。波蘭、芬蘭、リスアニアからは一人の代議員も列席しなかつたが、バク地方の如きは、當時英軍の占領に歸して居つたので、彼等は英軍の覘覦を破つて此大會に列席したものである。

二、「勞働宮」と組合運動の代表的人物

莫斯科の元貴族會館は、今は全露勞働組合の本部となつて、『勞働宮』と呼ばれてゐる。ツアーが莫斯科を訪問する度毎に大夜會場となり、平素は莫斯科貴族の夜會と舞踏が行はれて、寶玉の閃きと衣ずれの音とに慣れてゐた此會館の大廣間は、今は勞働者の集合場となつて、優に三四千人を容れることが出來る。全露中央委員會の開かれるのも、全露組合大會の開かれるのも、莫斯科勞働組合評議會の開かれるのも、其他勞働組合に關する一切の集會が開かれるのもこゝである。壁間の舊い装飾は悉く取除はれ、今は社會主義共和國の紋章や、各勞働組合の紋章を表はした石膏細工の額が飾られ、曾てはナポレオン戰役時代の露國の將軍の像のあつた場所には、今はマルクスとレニンの半身像が立つてゐる。

全露中央執行委員會の委員長トムスキーは、頭の髪の黑い三十八歳の青年で、石版工である。彼は一九〇四年に初めて勞働運動に身を投じ、間もなく十年の懲役に處せられて西比利亞に送られた。四年の間は鐵の鎖をつけて働かされ、後二三年は鎖なしで働いてゐたが、其うち赦免に逢つて歸國した。

副委員長ロゾウスキーは、最少し歳をとつてゐる。彼は一九〇四年に初めて入獄し、翌五年には終身懲役に處せられ、イルクツクに送られた。イルクツクに着くと其翌日、逃亡して巴里に往き、初めは運轉手となり、後には新聞記者、消費組合などをして、前後八年間働いてゐたが、一九一七年に露國に歸つて來た。

莫斯科勞働組合評議會の委員長メルニチヤンスキーも今年三十一歳の青年である。初めて逮捕されたのは一九〇四年で、十五歳の時であつた。彼は巧みに逃走して、一九〇五年にはオ

デッサの一揆に加擔し、再び逮捕されたが再び逃走した。其後捕へられて終身懲役の宣告を受け、西比利亞に送られたが、到着後間もなく逃走し、變名してニコライに於ける社會革命黨大會に出席したので逮捕された。十八ヶ月間の監禁後、八年の懲役に處せられ、西比利亞に送られたが、三度び逃走してウラル地方に逃れ、秘密の定期刊行物を發行したために、終身懲役の宣告を受け、又々西比利亞に送られたが、今度も首尾よく逃走して亞米利加に渡り、一時は露語日刊新聞『新世界』の事務に當つてゐたが、其後は機械工として生活して居つた。此間を通じて彼れはメンセヰキの世界主義派（インタナショナリスト）に屬してゐたが、一九一七年に露國に歸ると、間もなくボルセヰキとなつた。

この三人は、現に露國の勞働組合運動に最も重要な地位を占めてゐる人であるが、其人物、才幹、閱歷に於ても、革命的勞働階級の代表的人物である。この外露國の勞働組合の中心に活動してゐる人物は、多かれ少かれ、此種の閱歷をもつた人々である。ヤコブ、フリースは斯う書いてゐる――ロゾウスキーは此人々の傳記に對する私の好奇心を遮つて斯う言つた『中央委員は殘らず、數年間の監獄生活をした人々である。彼等はいづれも其過去に、十數年間の社會黨運動の歷史をもつてゐる』。

三、勞働組合の職分の變化

露國の勞働組合を見ると、他の各國の勞働組合との間に、機能と職分との上に非常な相異のあることを發見する。即ち現在各國の勞働組合は、資本家階級に對する戰鬪を主要の目的とする勞働者の階級的組織であるが、露國の勞働組合は最早や戰鬪の爲の機關では無くて、勞働組合の他の一つの職分、新しき生產組織の基礎たる職分を有してゐる。

革命の進行するにつれて、勞働組合に起つたこの職分の變化は、明白に露國の組合勞働者の意識の上に現はれてゐる。一九一八年一月、莫斯科に於ける全露勞働組合の第一回大會の決議は、特にこの點に就て、次の如く云つてゐる。

『權力を紳士閥（ブルヂョアジー）の手から勞働者と農民とに移した十月革命は全ての勞働團體、就中、產業勞働組合に取つて、全く新しい狀況を造つたものである。この新たなる狀況の下に於いては勞働者の產業的團體は、最早や勞働者が自分自身を傭主に賣る爲に開いた戰ひの、前衞隊と見做すことは出來ぬ。昔日の如き、勞働力を買ふところの傭主は、最早や存在せぬ。從つて罷工基金を集めたり、同盟罷工を組織したりすることは、組合に取つて最早や不必要となつたのである。』

然らばこの新しい狀況の下に於ける、勞働組合の職分は何であるか。右の決議は之に答へて『今や組合は、その全力を經濟

上の改造に轉じなければならぬ』と云つてゐる。資本制度の下に於ける組合と、現在の組合との職分の相異については、右の決議は次の如き說明を下してゐる。

『露國の今日の產業的勞働組合は、一產業に從事する全ての勞働者の、永久的の團體組織であつて、無產階級獨裁組織の第一の基礎をなすものである。…… 即ち今日の產業的勞働組合は、其主力を經濟組織の領分に轉じ、社會を共產主義的基礎の上に建て直すことゝ、社會的階級の廢止とを目的とする勞働者の、有ゆる努力に參加し、協力する。そしてこの協力は次の如き形で行はれるものである。

(一)一般に、共產主義的基礎の上に生產を組織する事業に協力すること。

(二)戰爭と國內の危機との爲に破壞せられた生產力の復興。

(三)全國に亘る勞働の配置と算定。

(四)都市地方間の交換の組織。

(五)義務的勞働の實行。

(六)政府を助けて食物の供給を計ること。

(七)燃料缺乏の危機、その他の諸問題の解決を助けること。

(八)赤軍の編制に一般的の助力を與へること。

(九)勞働者の經濟的利害を擁護すると同時に、個人主義的傾向と戰ひ且つ無知なるが爲に、今尙ほ今日の無產階級的國家を以て、往時の傭主と同一視してゐる一部勞働者の謬見と戰ふこと。』

斯くてこの決議文の指摘してゐる通り、『勞働組合の間に起りつゝある作用は、それらの組合を變じて、社會主義的國家の部門(デパアトメント)とするものである。そしてそれと同時に、勞働組合員たることは、其部門の產業に屬する總ての勞働者の、國家に對する義務となるのである。』

第三インタナショナルの委員長ジノヴィエフは、この全露組合大會の決議を註釋して、斯う云つてゐる。

『全露勞働組合大會の斯ような確信は、事實に基づくものであつて、產業的勞働組合は、漸次に國家の諸部門たる性質と職分とを占めてゐる。是等の組合は、其組合員を動員したり或る一定の都會に勞働者を集中したり、勞働者を一地方から他地方に移轉したり、賃銀問題を票決したり、更に其代表者を通じて、國民經濟最高委員會の行動を左右するものであつて、之れ正しく國家の一部門として働いて居るものである……

……』

一九一九年六月の第二回全露勞働組合大會の決議は、再び右の決議を確めてゐる。

『……資本制度の崩壞した跡に、露西亞の無產階級は、新たなる社會主義的露西亞を建設するの任務を引受けた。彼等は

倘ほ鬪爭し、征服してゐるうちにも、漸次に建設的事業に轉じてゐた。即ち全國に亘つて、經濟的管理の全機關を掌握し、之によつて無產階級獨裁權を鞏固にする、建設的の事業に轉じてゐた。

『勞働組合に組織せられた無產階級は、社會主義的革命の前衛隊を成してゐた。組合は革命の溫床であつた。然るに今やこの組合は、最も紛糾した問題を解決す可き立場に立つてゐる。即ち組合は今や、全ての工場と製造場と鑛山とを引取り一切の經濟事務の管理を引受けた……。

『第一回大會に於いては、吾々は單に、產業の管理と調整とを語り得るに過ぎなかつた。然るにこの第二回の大會に於いては、吾々は既に、勞働階級自身の努力によつて、產業の領域に行つた組織の結果を列記することが出來る……。

『第二回勞働組合大會は、九日の會期中に、露國勞働組合運動の根本的諸問題を解決した。大會は一層精密に、無產階級國家に於ける勞働組合の位置を明かにし、行政上の諸機關、就中勞働人民委員と勞働組合との相互關係を、一層具體的に確定した。

其他勞働時間と賃銀との規定、危險に對する勞働の保護と、社會による勞働の保險、生產の編制、勞働者の工場管理等の如き問題も、過去一ケ年間の經驗を基礎として解決した。

『露國の勞働組合は、無產階級的活動の新時期に突入した。―組合は既に、實際上の問題に向つてゐる。採用せられた決議と原則とを實行し、そして有ゆる方面の事業に於いて、唯一の方向を取つて進んでゐる。即ち無產階級露國の力を樹立する爲に、一層適切なる協力をすることである。』

全露勞働組合中央委員會の一人にして、昨年の秋、露國の組合を代表して獨逸の組合を訪うたロゾウスキーは、當時『赤旗』(ローテファーネ)の記者との會見のうちに、同じことを語つてゐる。

『勞働組合の職分は、十月革命以後、明かに變化した。それは最早やブルジョアとブルジョアの國家とに對する鬪爭の機關ではなくなつた。何故ならば、此二つのものは今や消滅し露國の國家は勞働者の國家となつたからである。そこで勞働組合は、今や全く性質の違つた任務をもつてゐる。即ち勞働者に對する報酬の額や率を定めることも其一つであつて、之に就ては勞働人民委員(勞働大臣)は、唯だ組合の定めたものを登錄するの權能を有するのみである。斯ように勞働組合は、生產の管理と指揮との上に、極めて重要な任務を行つてゐる。今や露國に於ては、公共生活上の如何なる機能と雖も勞働組合の勢力下に屬しないものはないのである……』。

ロゾヴスキーは、伯林勞働者の集會に於ける演說のうちにも斯う云つてゐる。

『勞働組合は資本主義に對する鬪爭の組織から發達して、今や經濟的改造の機關となつた。…… 勞働組合は無產階級獨裁の經濟上の機關である……。』

斯ような勞働組合の職分の變化は、同盟罷工に對する觀念の上に、最もよく現はれてゐる。資本制度の下に於いては、罷工は勞働者の自己防衛の權利として主張せられ、罷工破りは、勞働階級に對する最大の反逆と見做されて居つたが、現在の露國に於ては、同盟罷工は却つて勞働階級に對する反逆と見做されストライキとサボタージュとは、資本家側に與みする學者や專門技術家によつて、勞農政治に對する反抗の武器として用ひられてゐる。尤も之とても現在では、殆んど稀有のことゝなつた少くとも何等かの勞働組合に屬する筋肉勞働者と、頭腦勞働者とに取つては、同盟罷工は勞働階級に對する反逆を意味してゐると同時に、全く無用のものとなつた。何故ならば一切の勞働條件を決定するものは、勞働組合自身であるからである。尤も勞働組合のうちには、右の決議文の言及してゐるように、資本家的傭主に對するのと同じ態度をもつて、賃銀値上げ等の要求の爲に、ソビエット政府に對して罷工をしたものもある。例せばヲルガ河上の船渠勞働組合の如きは其一例である。けれども之は一部の勞働者が、組合の職分に大なる變化の起つてゐることを看過した爲であるか、さもなくば社會革命黨の如き反革命派が、組合を政爭に利用したものに過ぎぬ。露國の組合は、事實の上に於ても、また多數勞働者の意識の上に於ても。今や舊き經濟組識に對する戰鬪の武器たる性質を失つて、新しき經濟組織そのものゝ一部分となつてゐるのである。

四、生產組織と政治組織の基礎としての組合

露國の生產組織のうちに、勞働組合が如何に重大な要素となつてゐるかは、第二回全露組合大會の『產業の編制と組合の參與』に關する決議により、その大體の原則を知ることが出來る

『生產、經營、及び分配の計畫に統一を計る爲め、現今種々の部門(例へば銃砲部、海軍部、軍事部其他の如き)の手に委ねられつゝある一切の生產單位を、一個の中心に集中するの必要あること。(第三項)

『主要なる部門並に主要なる中心の幹部は、之に相當する全露產業協會、若くは全露勞働組合評議會、並びに國民經濟最高委員會の役員との了解の下に、主として勞働組合の代表者を以て組織しなければならぬこと。(第四項)

『勞働組合を代表して、行政上及び管理上の諸機關に進入つてゐる全ての代表者は、各々其組合に對して責任を有し、一定期間ごとに其行動を報告すべきこと。（第五項）

『組合と國有工場の管理部との間に、有機的の聯絡を保つ爲め、組合は少くとも二ケ月に一回以上、其事業の管理部の會議を開き、重要なる實際問題を討議決定すべきこと。（第六項）

『經營及び管理（産業の）の機關を、社會主義的建設事業に要する無産階級的機關に變じ、且つ此事業に、進歩した多數勞働者の協力を得る爲には、全ての管理及び經營の機關を無産階級的分子を以て滿たすことが必要である。そして之が爲には、中央及び地方の勞働組合團體に活動してゐる責任ある勞働者を、是等の諸機關の役員としなければならぬ。（第七項）

『勞働組合は、社會全體の利害に對する、私人の利害の從屬を基礎とする生産計畫に從つて、之に必要な方向に産業生活を指導することを任務とする。そして之が爲には、組合は、生産の根本要素たる勞働に關聯した行動を取る。故に勞働組合中央諸團體の決定事項は、それが賃銀率、勞働の監督、工場の内部取締、生産の標準、及び勞働規律等の問題に關する限りは、全て強制力を有すること。（第八項）

『組合は今や……生産の編制者たる地位に立つてゐる。故に組合は、此危機に當つて、困憊と墮落とに對して、生産階級たる無産者を保護し、且つ社會的分解の作用と、無産階級が他の階級に吸收せられることゝに對して、無産階級の核心を防禦しなければならぬこと……。（第九項）

『工場に、必要な生産物（主として食料品）を供給することは、第一の必要事であつて、此問題が滿足に解決を見ぬ以上は、勞働の生産力を增加し、勞働規律を增進することは不可能である。故に勞働組合をして、出來得る限り適切に食料の生産及び分配の事業に關與せしめることを必要とする。』（第十項）

この決議の示す通り、露國の勞働組合は、一方には組合として行動してゐると同時に、他方には其代表者によつて、政府の諸機關を構成し、是等の諸機關を通ほして行動する。無産階級國家の權力を代表するソビエットの選擧が、勞働組合を基礎としてゐることは暫くおき、全露ソビエット中央執行委員會の專任委員とも云ふ可き人民委員（即ち政府）の諸機關には、いづれも勞働組合の代表者が重要な要素となつてゐる。勞働者と直接の關係のある勞働人民委員（勞働省）の如き、國民經濟最高委員會並びに其地方委員會の如き機關に、勞働組合の代表者が有力な要素となつてゐるばかりでなく、生産組織と最も緣の遠

い赤軍の編制に至るまで、苟も無産階級國家の有ゆる機關のうちに、勞働組合代表者の活動して居らぬ所はない。現在の露國の政治組織は謂ゆる無産階級獨裁の組織であつて、卽ち反對階級に對して、無産階級の意志を強制する爲の組織である。此範圍に於ては、露國の政治組織は人による人の支配であつて、資本主義的國家の政治機關と、本質上異なるところはない。けれども其れと同時に、露國の政治機關は資本制度の下に於ける**政治機關に比して、純粹に人による物の支配と見做すべき職分が大いに擴がつてゐる。そして此職分は漸次に擴大し、漸次に**重要を加へて、終には人による人の支配の職分を吸收し盡すべきものである。斯ように露國の現狀は、尙ほ過渡期にあるもので、この過渡的性質は政治機關の本質の上にも現はれて居る。そして勞働組合は、この二つの方面に於いて、國家の機關の重要な要素となり、基礎となつてゐる。言葉を換へて云へば、現在露國の勞働組合は、無産階級獨裁組織の重要な要素となつてゐると同時に、經濟組織の重要な要素となり、基礎となつてゐる。

一九一九年九月、ペトログラード勞働組合評議員は、勞働統計部に命じて、その加盟組合職員の登錄を行つたが、この調査ちの七割五分は、所屬組合の幹部職員である。七割五分の幹部職員の内で、一年以上繼續して幹部職員の地位にある者は僅かに一割五分四厘であつて、殘餘の八割四分六厘は一年以下である。之を平均して見ると、組合幹部に留まるのは平均六ケ月六分である。斯ように組合幹部が頻繁に代はるのは、組合幹部として相當の經驗を得たものは、勞働組合の代表者として、種々政治上經濟上の機關に這入つて行くからである。**幹部變動の結果は、一面には組合事務に幾分の澁滯を來たす損失はあるが、一般組合員の内から斷えず有爲な新人物が現はれて、組合幹部として、**無産階級國家の種々なる機關の運用に必要な、經驗と訓練とを得るの利益がある。更に其結果は、組合の幹部に絶えず新鮮な血液が送られて、其硬化を防ぎ、謂ゆる組合の官僚主義化を防いでゐる。是等の組合職員が現に行つてゐる活動の種類を見ると、露國の勞働組合の職分の上に起つた大なる變化が、一層明かなるに右の調査は、次の如き分類を示してゐる。

組合の組織編制に當るもの。	三四・七（百分率）
賃銀の決定及び取締。	九・四
勞働爭議の裁定。	八・一
教育事業。	七・六

其他の事務。　　　一四〇

右は組合内の事業であるが、組合役員中、直接に組合内で働いてゐる者は三百四十三人（即ち六割四四）であつて、其他のものは組合を代表して、政府又は公共の諸機關に働いてゐる。そして組合役員の四割七分は、政府の職務に就いて居り、中には同時に、二三の職務を兼ねてゐるものもある。以上は一九一九年九月に於ける、組合役員登錄當時の統計であるが、其後政府の經濟的活動は益々範圍を擴め、組合も亦多くの勞働者を包容するようになつたので、右の傾向は一層著しくなつたに相違ない。

斯ように露國の勞働組合は、國家の諸機關の、重要な構成分子となつてゐるが、勞働人民委員の組織に至つては、勞働者の生活と直接の關係を有するだけに、徹頭徹尾勞働組合を基礎として作られて居ると云つてよい。勞働人民委員會の委員長は、全露ソビエツト中央執行委員會によつて選擧せられるものであるが、實際に於ては、全露組合中央委員會が選擧し、ソビエツト執行委員會は之を批准するに過ぎぬ。現在の勞働人民委員シユミツトも、勞働組合から選擧せられた人である。勞働人民委員會は、委員長外九名の委員から成つてゐるが、九名中の五名は全露組合執行委員會から選出し、他の四名は人民委員評議會内閣會議が選任するが、此人選に對しては、全露組合中央委員會は必要の場合には、異議を唱へることが出來る。

斯ように勞働條件を決定する最高の機關たる勞働人民委員會には、勞働組合の代表者が決定的に多數を占めることになつてゐる。そして勞働條件に關する一切の法律は、先づ全露勞働組合中央委員會によつて決議され、次に勞働人民委員の批准を經て、初めて法律として發布せられるものである。全露組合中央委員會の下には、工場委員會によつて選擧せられる幾多の專任委員會があつて、或るものは賃銀率を定め、或るものは勞働者の配置を決定し、或るものは疾病その他の保險に當り、或るものは勞働者の教育、或るものは職業に關する施設に當つてゐるそして是等の委員會の調査と立案とは、全露中央委員會の決議を經て法律案となり、勞働人民委員の批准によつて法律となるものである。

勞働人民委員は、資本主義的國家に於ける勞働大臣に似たものではあるが、其職分には大なる相異があつて、勞働取引所、工場監督官、勞働保險等の職分と共に、他國に於ては現に議會に屬する職分をも兼ねてゐると同時に、今日勞働組合に屬してゐる職分の或るものをも行つてゐる。

勞働人民委員と勞働組合との關係は、[illegible]

るものであるから、第二回全露組合大會は、シュミツトの起草に係る次の如き決議を通過して、兩者の關係を明かにした。

『…勞働人民委員は、勞農政府の一機關として、今や其うちには、組織せられたる工業勞働階級が、主たる任務を行つてゐる。勞働委員は、勞働階級の經濟政策を實施し、且つ此目的の爲に、法律規則を施行すべき政府の機關と權力とを使用するの手段となるものである。

『故に勞働階級の經濟政策が二途に出でて統一を失はざらんが爲には、勞働人民委員は、組合の最高機關――勞働組合大會――の一切の重要な決定を採用して、之を法律案とすること、並びに勞働と生産との條件に關係ある、强制的性質を有する一切の細則は、先づ全露勞働組合中央委員會を多數で通過しなければならぬと云ふことを承認することが必要である。

『大會は全露勞働組合中央委員會と、勞働人民委員との協力と行動の統一とを十分に承認し、勞働組合評議會が、勞働人民委員の地方的諸部門の事業に關與することを慫慂する。そして此協力は、中央機關(全露勞働組合中央委員と勞働人民委員)の間に行はれてゐる關係を基礎とすべきものである……』。

五、勞働組合と工場管理

工場委員は十月革命以前から存してゐたが、此制度も亦、革命と共に其職分が變化した。第二回全露組合大會の決議は、『勞働者の管理は、無産階級と經濟的主權を爭はんが爲に、僱主等の行つたサボターヂュと、經濟上の壞裂とに對する、勞働團體の最も有力な革命的武器であつたが、今や此制度は、勞働階級をして、生産の組織編制に直接參加せしめるものとなつた』と云つてゐる。

『勞働者管理』についての第二回大會の決議は、工場委員制の根本原則を確立したものであるが、其決議は先づ、工場委員による勞働者管理の目的を說明して斯う云つてゐる。

『…全國の經濟生活に對する勞働階級の支配は、尙ほ完成して居らぬ。隱れたる鬪爭は、經濟生活の新形態のうちに尙ほ泡立つてゐる。そして之は勞働階級が、生産の經營に任ずる諸機關の行動を管理することを、必要缺くべからざるものとする。』(第三項)

斯ように工場委員の職分は、第一には、無産階級獨裁の基礎となることである。けれども其職分の內容と實質とは、漸次に變化を受けてゐる。

『斯ような資本制度から社會主義的制度への過渡狀態の下にあつては、勞働者の管理は、無産階級の經濟的獨裁を目的と

する革命的武器たることから、この獨裁權を生産過程の裡に確立し鞏固にする、實際的の制度に發達しなければならぬ。』（第四項）

然しながら此制度には、尚ほ今一つの重要な職分がある。

『勞働者の管理は亦、産業の編制上經營上の事柄に直接參加するように、勞働階級の大衆に、漸次の準備を與へるといふ問題を解決すべきものである。』（第六項）

然しながら工場委員の職分には、固より一定の限界がある。工場委員による勞働者の管理は、生産力の維持と增進とに一致するものでなければならぬ。」そこで大會の決議は、工場委員の職分を、工場の經營に對する監査に限つてゐる。即ち工場委員は、工場の經營を指揮するのではなくて、工場の經營を監査するのである。

『勞働者管理の問題は、各工場に於ける事業の進行を監督し個々の工場及び全産業部門に於ける經營上の行動を、實際上に監査することに限られなければならぬ。即ち勞働者の管理は、その管理が工場經營の仕事に先行しないで、工場經營の仕事の後から行はれるような、一定の順序に從つて實施されなければならぬ。』（第五項）

大會の決議は、以上の原則を基礎として、管理委員會は（一）其工場の産業に屬する勞働組合の代表者、（二）其工場の從業勞働者の總會から選出せられた委員（但し組合の承認を要す）によつて組織すること、勞働組合の執行委員より選出された代表者の任期は長くし、之に反して、總會に於いて一般從業員の間から、直接に選出せられた委員の任期は成るべく短くし、斯くて『多數勞働者に産業の編制上經營上の訓練を得せしめ、漸次に、全ての勞働者殘らず産業の編制と經營とに參加する、一般的參與の制度に進むの道を確立すること』を命じ、更に斯くして選出せられた工場委員は、其工場に於ける從業勞働者の總會に對しても、又た其産業の勞働組合の管理部に對しても、均しく責任を負ひ、委託せられた權力を濫用し、若くは其義務を怠つた場合には、委員は嚴重なる處罰に附せらるべきことを命じてゐる。

大會は更に、全露組合中央委員會の手に、勞働者管理の諸機關を指揮する權能を與へ、又た此目的の爲に、全露委員會は組合の代表者より成る勞働者管理の、最高機關を組織すべきことを命じてゐる。

其後露國に於ては、工場委員による産業の管理は廢止せられたといふ報道が、屢々資本家新聞によつて流布せられたが、一九二〇年二月十三日、全露組合中央委員長トムスキーの名を以

て、右は全露臨報であることが公表された。

組合大會の決議によつて示された、勞働者管理規則は、國有工場にも私人經營の工場にも、均しく適用せられるものであるが、國有工場に對しては別に施行規則が設けられ、私人經營の工場に對しては、一九一七年十一月十四日の、工場管理の布告を適用することになつてゐる。

六、勞働組合と國民經濟最高委員會

現在露國に於ける大工場の九割は、既に國有となつてゐるが是等の國有工場は、一九一八年三月に制定せられた『國有産業管理規則』によつて經營せられてゐる。この規則によると、國有事業中央管理部は、各工場に技術主任と管理主任とを選任する。純粹に生産技術に關する事柄に就ては、技術主任は全權を有してゐるが、其決定に對しては、工場管理委員は中央管理部に上訴することが出來る。

又生産技術に關する事項を除く一切の管理は、管理主任の下に設けられる、管理經濟委員會によつて行はれる。但し生産技術に關する事柄に就ては、此の委員會は單に助言を與へるに過ない。管理經濟委員會は、(一)從業勞働者の代表者、(二)下の勞働組合の選[redacted]の屬する産業の勞働組合の代表者、(七)國民經濟地方委員會の代表者、(八)利害關係を有する地方の、勞働者消費組合の代表者、(九)其地方の農民委員會を以て組織せられるが、その全委員の半數までは、勞働者と下級事務員との代表者を以て占めることが出來る。

全露に亘る國有工業の管理を統轄する最高の機關は、國民經濟最高委員會の下に組織せられる國有産業中央管理部であるがこの中央管理部のうちには、勞働者は直接にも、又た勞働組合を通じて間接にも、二重に代表せられてゐる。即ち中央管理部は、其三分の一は(一)當該産業の勞働者及び事務員より、其三分の一は(二)無産階級の政治上經濟上の機關並びに團體(即ち公共經濟最高委員會、全露勞働組合委員會、全露勞働者消費組合委員會、全露ソビエット執行委員會)の代表者より、殘りの三分の一は(三)學術上の團體、技術員及び商業上の上級役員、一民主的全露團體(各種の全露大會の執行委員會、給養組合、農民委員會等)の代表者より組織せられてゐる。

次て尙ほ國有化せられぬ工場は、一九一七年十一月の『勞働

關である。

之と同時に重要都市、州、又は工業地域を單位として、各々(一)勞働組合の代表者、(二)各種の工場に於ける工場委員會の代表者、(三)勞働者の消費組合の代表者より成る地方管理委員會が設けられてゐる。そして工場主が工場委員の決定に不服な場合には、三日以内に地方管理委員會に上訴することが出來る地方管理委員會の上には、更に全露勞働者産業管理委員會があつて、産業管理の最高機關となつてゐる。全露委員會は、(一)全露ソビエット執行委員會の代表者五名、(二)全露勞働組合委員會の代表者五名、全露勞働者消費組合執行委員會の代表者二名、(三)全露工場委員會の代表者五名、(四)全露農業組合の代表者二名、(五)各全國的の勞働組合の代表者(組合員十萬以内の場合は一名、十萬以上の場合は二名、ペトログラード勞働組合評議會より三名)から成つてゐる。

露國に於ける經濟上の最高機關は、一九一七年十二月の布告によつて定められた國民經濟最高委員會であつて、其職分は、全ての經濟上の機關と行動とを統一し、調整し、集中することである。此委員會は今日のところでは、人民委員會の下に從屬するものではあるが、其職分の重大な點に於ては、却つて人民委員會と對立するに足るものがある。即ち人民委員が、無産階級國家の最高政治機關であるのに對して、國民經濟最高委員會は、社會主義的新社會の最高の經濟機關であつて、前者が政治上の過渡期を代表してゐるに對して、後者は將來の生産組織を前影してゐる重要な機關である。然るにこの最高經濟機關を組織するものは、矢張り勞働組合であつて、布告の第五條には、『國民經濟最高委員會は、(一)一九一九年十一月十四日の布告によつて定められた全露勞働者管理委員會、(二)各人民委員の代表者、(三)特に才能ある人物より成る』旨を規定してゐるが第三種の委員は、單に發言權を有するだけで決議には加らない更に國民經濟最高委員會の下には、各地方々々で國民經濟地方委員會があつて、地方的性質を帶びた同一の職分を行つてゐるが、其組織は最高委員會の組織に準じたものである。

八、組合の組織と構造

以上により、露國の勞働組合が、資本制度の下に於ける勞働組合と、全く其機能と職分とを異にしてゐることを知ることが出來た。露國の勞働組合は、最早や個々の工場や地方地方に於ける。特定の資本家や傭主を敵とする勞働者の戰鬪の機關ではなくて、社會全體を如何にして給養すべきかといふ、唯だ一つの計畫の下に行動してゐる、新しき生産組織そのものである。從つて組合の構造も、此一般目的に順應したものであることは

言ふまでもない。

斯ように露國の勞働組合は、別々の目的をもつた幾つもの團體ではなくて、一つの目的をもち、一つの計畫を遂行する爲の一つの生産組織である。從つて露國の勞働組合の構造も、之に應じて單一の組織であることを記憶しなければならぬ。

そこで此單一な勞働組合の最高機關は、前にも述べた通り、全露勞働組合大會（正式に大會を組織することの出來ぬ場合は全露勞働組合會議）であつて、大會から大會に至る間は大會によつて選出せられた全露勞働組合中央委員會が最高の機關となる全露大會（並びに全露會議）及び全露中央委員會の決定は、加盟組合に對しても、その組合員に對しても、均しく强制力をもつてゐる。加盟組合が此決定に反した場合には之を「無産階級的の家族」から除名することが出來る。

全露勞働組合を組織する二十五個の全露産業組合には、各々其最高機關たる中央執行委員會がある。この中央執行委員會の決定は、全露勞働組合（大會、會議、全露中央委員會等）の決定に反して居らぬ限りは、各々其産業組合の支部に對しても、又た其組合員に對しても、均しく强制力をもつてゐる。

斯ように全露産業組合は、全勞働階級を産業別に組織し、全露勞働組合同盟は、斯く縱斷的に組織した勞働者を、更に一段高く横斷的に――言葉を換へて云へば、全勞働階級的に――組織したものである。そして此縱斷的組織――産業的組合――は一層小さな縱斷的の組織から成立つてゐる。即ち其單位は各工場である。露國の組合は純粹の産業的組合であつて、同一産業に屬する一切の從業者を包容するものであるから、勢ひ各工場が、其最小の單位、若くは最小の支部といふ形になる。産業的の基礎によらないで、單に地方的又は全國的に團結した組合は全露勞働組合中央委員會に加盟することが出來ぬ。

勞働階級を縱斷的に組織した全露産業組合が、各工場といふ小さな縱斷的組織から成立つてゐるやうに、横斷的階級的の組織たる全露勞働組合同盟の方でも、同じくより小さな横斷的階級的の組織から成立つて居る。即ち各地方に於ける、勞働組合評議會がこれである。都市には、各種の産業組合の代表者から成る、勞働組合地方評議會がある。即ち地方評議會は、全露勞働組合中央委員會の組織に準じて組織せられてゐるものであつて、其地方的の縮圖であり、全露中央委員會の組織に準ずるものである。そこで是等の地方評議會は、英獨の組合に於ける勞働評議會、佛國組合に於けるブールスと同じく、其地方々々に於ける勞働者の全階級的の組織である。

斯ように一方には二十五種の全露産業組合があり、他方には

各地方に勞働組合地方評議會があるが、兩者の決定が相反してゐる場合には、前者の決定は後者の決定によりて無效となることなく、其地方の各組合は、前者の決定に從ふ義務がある。

然しながら勞働組合運動の指導機關となるものは、地方評議會である。何故ならば地方評議會は、一定の地域内に於いて經濟的産業的に組織せられてゐる勞働者を、更に全階級的に組織した、全階級的の代表機關だからである。此點に於ても、地方評議會は佛國組合に於けるブールスと相似てゐる。然しながら共れと同時に地方評議會は、全露大會(及び會議)、全露中央委員會の決定を遵奉すべきことは無論である。且つ地方評議會に加盟してゐる各産業組合の支部は、其産業の全露大會又は中央執行委員會の決定に從ふ義務がある。そして地方評議會の決定が、全露組合同盟の一般政策と相反する場合には、各産業組合の支部は、之に從ふの義務がない。要するに地方評議會の職分は、其地方に於ける組合を適當に組織し、各組合をして、全露組合同盟の一般政策に一致せしめ、會費の拂込を監督し、組合の活動を助けることであつて、地方評議會は職分に於ても、佛國組合のブールスに相當するものである。

各産業組合の全露執行委員會と、各地方支部との間にも、又は全露勞働組合中央委員會と、各地方の評議會との間にも、例へば縣とか州とかを單位とする中間的の組織を認めぬことは、露國の組合組織の特徴の一つである。第二回全露大會の決議は、斯ような地方的中間的組織を以て、組合組織の『中心と周邊との間の、無用な傳達機關であつて、精力と費用との無益な失費を意味する』ものとして、明かに之を斥けてゐる。此種の中間組織を認めぬことの利害得失は暫く措き、此種の中間組織を認めぬ理由は、要するに『組合の行動を集中し、中心の諸機關と地方の團體との間の結束を固くする』爲めである。

會費は各組合が定めるが、第二回全露大會は、賃銀の百分の一を以て標準額と定めてゐる。そして(一)會費の半額は之を徴收した支部組合の基金となり、殘餘の半額は、組合の屬する全露産業組合の執行委員會の基金となる。(二)各支部組合はこの半額中から、更に其百分の十を地方評議會に交附する。(三)支部組合が更に小地方支部に分れてゐる場合には、後者は前者の定める豫算に從つて行動する。(四)全露産業組合を有しない地方組合は、其會費の百分の十を地方評議會に、又た同じく百分の十を、地方評議會の手を經て全露勞働組合中央委員會に納付する。(五)故なくして三ケ月間組合費の納付を怠つた者は、脱退者と認め、復歸には滯納會費と入會金との納付を必要とする。

入會金は(一)一個人が組合に加入する場合は、一日分賃銀の半額、(二)全露產業組合が、全露組合同盟に加入する場合は、其產業組合の徵收した入會金の百分の十、(三)地方支部組合が地方評議會に加入する場合は、第二の場合と同じく、其組合の徵收した入會金の百分の十、(四)全露產業組合を有しない地方組合が、地方評議會に加入する場合は、其組合の徵收した入會金の百の十、但し其半額は全露組合中央委員會に交付せられる。(五)組合員が個人的に、若くは一工場を擧げて體團的に、一組合から他の組合に移る場合には、入會金を要しない。

斯ように露國の勞働組合組織とは、卽ち全露大會と全露中央委員會とによつて代表せられる全露勞働組合同盟であつて、其基礎となる單位は工場委員會、若くは事務勞働者組合(事務使用人協會とも云ふ)である。工場の事務員、技術員などは、一船勞働者の組合に屬すべきものであるが、其他の場合には、頭腦勞働者のみの組合がある。そして『組合』なる名稱は、全露勞働組合同盟に加盟し、中央委員會によつて承認し公布せられた團體のみが之を專用する權利を有し、其他の經濟上の團體は、之を區別して『協會』なる名稱を用ひなければならぬ。

露國の勞働組合の特徵は、其組織の純一であつて、之を構成する基礎團體から、中心の諸機關に至るまで、基底から頂上まで、之を一貫して組織の純一を期してゐる。そして組合の管理機關執行機關等の名稱も一定せられてゐる。卽ち第二回全露組合大會の決議により各機關の稱呼は次の如くに定められて居る

(一)全露組合大會の執行機關は『全露勞働組合中央委員會』。

(二)各產業全露組合大會の最高機關は『勞働組合中央委員會』、更に其執行機關は『勞働組合中央委員會執行委員』。

(三)各產業全露組合の州支部又は省支部の最高機關は『全露勞働組合州(又は省)支部管理部』。

(四)省支部より成る組合地方評議會は『——省勞働組合評議會』。

(五)縣又は小都市の組合地方評議會は『——縣勞働組合事務局』『——町勞働組合事務局』。(但し大都會では評議會と呼ぶ。例へば莫斯科勞働組合評議會の類)。

八、全露組合大會と中央委員會

そこで露國の勞働組合の最高執行機關たる、全露勞働組合中央委員の組織はどうかと云ふと、次の如き方法で選ばれる。

(一)全露勞働組合大會より選擧され九名の委員。

(二)各產業全露組合から、次の割合で選出せられる代表者。組合員三萬人以上五萬人まで每に一名。三萬人以下の組合は、一名の代表者を送るが、討議には加はるが票決には加はらぬ。但し組合員三萬人以下の組合は、幾つか聯合して代表者を送ることが出來る。此場合には、代表者は票決權をもつ。

斯くて選出せられた中央委員のうち、大會から選出せられた九名が、中央委員會の執行委員となる。執行委員は各大會(又は會議)毎に改選せられるが、任期中と雖も、組合は其一部又は全員を解任することが出來る。但し此場合には、解任を要求する組合の所屬組合員が、全露勞働組合同盟に加入して居る組合員全體の半數以上を占めねばならぬ。執行委員の解任、又は辭任の場合には、臨時大會(又は會議)によつて改選すべきものであるが、臨時大會の開催が不可能の場合には、中央委員會に於いて、委員全數三分の二以上の同意によつて後任者を定めることが出來る。中央委員會も全員の三分の二以上の同意により執行委員を解任することが出來るが、組合が解任する場合も、中央委員會が解任する場合も、臨時大會の開催し得られぬ場合に限られてゐる。全露中央委員會は、少くとも一ケ月一回開催する。

全露中央委員は、少くとも一年間に一回、大會を召集する。第二回全露組合大會の決議は、大會に代表せられる組合の資格を定めて次の如く云つてゐる。

『勞働組合大會に代表者を出だす權利は、無產階級の國際的階級鬪爭の主義に從つて行動する組合にして、勞働組合地方

大會に出席する代表者は、次の比例によつて選出される。

(一)組合員(何づれも會費を納付せる組合員)三千名以下の地方的組合は、代議員一名。五千名以上の地方的組合は、五千名毎に一名。五千名未滿は切棄て。

(二)全露的組合は各一名。但し組合人一萬人以上の場合は二名。

(三)ペトログラード及び莫斯科より各三名。

(四)組合員三千名以下の地方組合は、聯合して代議員を送ることが出來る。

以上は正式の代議員であつて大會の表決に加はるが、

次の代表者は、討議には加はるが票決權を有しない。

(一)各社會黨の中央機關の代表者。勞農ソビエット全露中央委員會の代表者。全露中央委員會又は大會自身の招待した個人、又は團體の代表者。

(二)全露中央ソビエットの全員。

正式大會を開催し得ぬ場合には、協議會を開くことは前述の通りであるが、全露勞働組合會議は組合地方評議會の全員と組合省評議會の代表者(組合員二萬五千名に對し一人割合)によつて組織する。そして大會の場合には討議權のみしか有しない全露組合の代表者も、會議では票決權をも有することになつて居る。

た。第二回全露勞働組合大會（正式大會ではなく一會議である）に提出せられた全露組合中央委員長トムスキーの報告を基礎とした二種の決議、同じく大會を通過した、全露組合中央委員會の細則、是等の決議に基づいて一九一九年十一月七日に制定された、全露組合委員會加盟規則等により、露國の組合組織の大體を說明したものであるが、大會は尙ほ、組合組織の根本原則をも明白に示して居る。

此決議によると、勞働組合とは、次の如き性質を有するものである。卽ち組合は（一）或る生產部門に從事する勞働者と、其他の使用人とを、其職分の如何に拘らず、一つの團體に結束すること（二）財政の集中、（三）組合の事務は民主的集中の原則を基礎とすること、（四）勞働條件及び賃銀率は、全ての種類の勞働に對し、一中心機關にて決定せられること、（五）基底より頂上まで、一樣の原則の上に組織せられて居ること、（六）各部は專門的補助的機關たる任務を行ふこと、（七）組合外に對しては、產業的に組織せられた勞働者と、其他の使用人とを代表することとである。

大會はまた、組合に加入せしむ可き勞働者を『或る產業の勞働者と其他の使用人にして、生產過程に直接從事して居るか、又は之を助けて居る常職の勞働者』に限つて居る。但し直接生產には從事せぬが、生產者を助けて居る全ての補助部門に働いてゐる者、並びに全ての一時的の手傳も、其產業の組合員たることが出來る。此定義によると、組合に包容すべき勞働者の範圍は極めて廣く、筋肉勞働者も、其他の技術者又は事務員の如きものも、一樣に均しく勞働者と認めて居ることは云ふ迄もない。此原則は第三回勞働組合協議會に初めて採用され、最初の全露勞働組合大會によつて確認はせられたが、一般勞働者と技術者其他の使用人とが、政治上經濟上の偏見によつて睽離せられて居る間は、固より實現することが出來なかつた。然るに第二回大會の當時は、形勢は大に變化した。そこで第二回大會の決議は『……一ケ年間の無產階級獨裁により、種々なる勞働者と其他の使用人との間の對立が大に抹殺され、そして組合は、勞働者間の有ゆる對立の除去を助けたので、今や一工場、一產業、又は一機關のうちに働いてゐる、賃銀勞働者たる一切の人々を、同一組合に團結することは、必要でもあり、亦た望しいことと認めなければならぬ』と云つて居る。但し勞働者の雇傭や、賃銀增減の權限を、一個人が握つて居るような工場や機關にあつては、此當局者は固より組合に加入せしめることは出來ぬ。智識階級その他の純無產階級者を、組合に包容する必要については大會の決議は、特に次の如く云つて居る。

時に、獨立の手工者や小店主などは、組合に加入を禁じて居る。勞働者の小規模な協同生産組合たるアルテルや、勞働コムミュンの組合員、獨立の専門自由職業者なども同樣である。其理由は、『過去に屬する手工と、小資本家的産業との代表者たる是等の分子は、個人的生産と小規模生産との、保守的經濟思想を浸入させ、經濟的に組織された一般無産階級を崩解するの恐れがある』。そこで組合組織の尚ほ完全に發達して居らぬ今日、是等の分子を組合に包容することは、多少の危險を意味するからである。

一樣にすることである。そこで一産業組合の一員たるものは同時に亦た、當然全露勞働組合の一員であつて、一組合から他組合に移る場合にも、何等の入會金を要しないで、舊組合員同一の權利を得る規定の如きも、此原則の一端の現はれたものである。又た大會の決議が、各組合は全ての工場又は機關における勞働者總會の決議により、從業勞働者は悉く組合加入の義務あるものとするように奬勵して居るのも、之が爲である。

後に觀過することの出來ないことは。無産階級獨裁による社會主義の實現と、之を目的とする革命的階級鬪爭とを承認する

とが、各組合が全國團體若くは地方團體に加盟を許される條件となつてゐることである。

露國に於ける勞働組合の組織と構造とは、大體以上の如くであるが、要するにそれは尚ほ形成の途上にあるもので、其後に於いても、多少の變化があつたに相違ない。けれども若し多少の變化があつたとすれば、吾々は以上の記述によつて、略ぼ其變化の方向を豫想することが出來ると思ふ。

九、勞働組合と共産黨

露國の勞働組合を研究する場合に看過し難いことは、組合と社[redacted]（[redacted]民主黨の左翼で、ボルセヰキとして知られてゐたが、今は共産黨と改稱した）との關係である。一九一九年九月のペトログラード勞働組合評議會勞働統計部の調査によると、當時ペトログラード勞働組合評議會所屬組合の役員五百六十四名のうち、現に政黨に加入して居るものは五割七分であつたが、其中の三割六分は、十一月の第二革命後に政黨に加入したものである。從つて其多數は共産黨員であつて、五割七九のうちの五割五九は共産黨に屬してゐる。そしてこの五割五九のうちの三割六分は十一月革命後に加入したもので、革命前からの共産黨員は、僅かに一割九九に過ぎぬ。

實に第二回全露組合大會に列席した、正式に票決權のある代議員は七百四十八名であつて、單に發言權のみを有する代議員は百三十一名であつた。今この代議員の黨派別を見ると、共産黨三七四人、同情者七五人、社會革命黨左翼一五人、無政府主義者五人、インタナシヨナリスト一八人、ブンドの代表者四人、合同社會民主黨二九人、無所屬二三人、黨派別を明かにせぬもの二三六人であつた。即ち共産黨員は全員の半數に止まつてゐる。

斯ように組合の中心分子と雖も、必ずしも悉く共産黨員ではない。現に第二回全露組合大會の決議は、『政治上宗教上の信條に拘らず、勞働者をも結束する』と云つて居る。けれども其れと同時に、此大會の決議は、『露國の勞働組合の全運動は、國際的階級鬪爭の立場を取り、斷じて中立の思想を排斥するものである。故に組合が無産階級獨裁により社會主義の實現を目的とする、革命的階級鬪爭を承認することは、全露團體及び地方團體に加入を許す、必要條件と認める』と云つて居る。『無産階級獨裁による社會主義の實現』は、共産黨の根本思想であつて此の根本思想の承認がやがて全露組合加入の條件であるとしたならば、組合員の多數が共産黨に加盟して居ると否とに拘らず露國の勞働組合運動は、共産主義の精神によつて指導せれて居るものと謂はねばならぬ。

第三インタナショナルの委員長ジノヴィエフは、勞働組合と共產黨との關係を論じて、從來各國の社會民主黨が主張し來つてゐる組合と社會黨との『平等の權利』說を排斥し、共產黨は無產階級の前衞隊として、其精神は、常に組合運動を指導しなければならぬと主張して居る。

『今日の產業的勞働組合は、必ずしも共產黨の下に從屬するものではない。全ての勞働者は男女を問はず、其政黨と信條とに拘らず、組合に加入することが出來る。共產黨に屬しない勞働者も、產業的組合に加盟する完全な權利をもつてゐる。けれども之が爲に、產業的組合の內部に働いてゐる共產主義者は、共產黨に屬せぬ組合員は保守的傾向をもつて居ると云事實を看過してはならぬ。產業的組合の內部にある共產主義者と共團體とは、公然共產主義を宣傳しなければならぬ……。』

『近代の產業的組合は、偉大な働きをして居る。彼等は大に共產黨とソビエットとの、社會主義の戰ひを容易にした。けれども共れと同時に、この過渡期に於ける產業的組合の行動には、暗黑面がある……』。

シノヴィエフは此の『暗黑面』の一例として、ウオルガ船渠勞働組合支部が、職業上の利害にのみ固執して、ソビエット政府に對して罷工をした事實を擧げ、彼等の『職業組合的狹隘』を斥ぞけ、更に謂ゆる產業組合萬能主義が、勞働階級貴族制度に墮することを非難し、斯ような弊害を除く爲には、共產主義の精神は常に組合運動を指導せざる可らずとして、次の如く論じてゐる。

『各產業組合には、各々鞏固な組織と規律とを有する共產主義者の一團があつて、全露勞働組合中央委員會に於ける共產主義者の一團と、同一の經濟政策を宣傳しなければならぬ……。各產業的組合內の共產主義者の一團は、其地方の共產黨支部の核心たるものに外ならぬ。斯くて一方には共產黨の地方委員會は、其市邑に於ける產業組合の支部を完全に支配し、他方には共產黨の中央委員會は、其優勢によつて、全露組合委員會を支配する……。』

『共產黨の委員會は、產業組合內の共產主義者の團體と提携する。斯くて共產黨は、勞働組合運動の建設的方面を指導する……』。

この一節は、共產主義者の間にも、多少の異論のあるところであつて、ジノヴィエフは組合運動が職業組合的の狹隘を棄て地方主義的の偏執から離れて、常に共產主義の精神によつて指導せられることの必要を強調する餘り、組合は單に共產黨の從屬機關として、全く自由的行動に[illegible]

を招くからである。現に昨年十月の英國共產黨協議會では右の如き立場から、ジノヴィエフの小冊子の發行中止を請求すべしと主張した者がある。

然しながらジノヴィエフの論文を精密に調べて見ると、彼の主張は、必ずしも生產者の組織としての組合に、獨立の意義を認めて居らぬものではない。彼れの論じて居るのは、新社會に於ける組合の職分ではなくて、資本主義的心理が、尙ほ著しく勞働階級の間に浸潤して居る過渡期に於ける組合運動を、何づれの方向に推し進めるかと云ふことである。そして彼れが共產主義の精神によつて指導しなければならぬと主張するのは、特に此過渡期に於ける、組合運動の『建設的方向』――新社會を如何に建設すべきかといふ方面――であることを忘れてはならぬ。

ジノヴィエフは同じ論文のうちに眞率に『吾黨は、勞働組合の缺く可らざる事を信ずるものである』と云つて居る。唯だジノヴィエフが社會主義的社會の建設に缺く可らざるものと信ずる組合は、資本主義的心理に捉はれ、職業主義と地方主義との浸潤した、有るが儘なる組合運動ではなくて、階級的自覺の上に立つ勞働組合である。そこでジノヴィエフに從へば、『無產階級革命の間に、其の社會民主黨が分裂したように、勞働組合も亦た分裂すべきものである』。斯くて舊るい組合運動のうちから分裂し出した、眞に階級的に自覺した部分こそ、ジノヴィエフによれば全勞働階級の前衞隊となり、全勞働組合運動を指導すべきものである。ジノヴィエフが、『この指導は、決して指揮命令の性質を帶びてはならぬ』と云つて居るのは、其謂ゆる『指導』の性質の如何なるものであるかを語つて居る。

レェンも亦た、一九二〇年四月の第四回、全露組合大會の演說の一節に斯う云つて居る。

『この數年間に、ソビエット露國ほど、多くの大會を開いた國は何處にも無い。如何なる國家も、斯くの如くデモクラチックの精神のしみ渡つた國家はない。從つてソビエットの決定は、何者も企及し得ない權威をもつてゐる……。

『今日必要なことは、有機的の結合である。其處には最早や一人によつて命ぜられる規律はあつてはならぬ。そこには唯一人の責任があつてはならぬ。そこには最早や、獨裁があつてはならぬ。勞働組合の總勢は三百萬人に上るが、其中の六十萬人は共產主義者である。彼等は其他の組合員の先導者でなければならぬ。吾々は最後の勝利の爲には、團體や職業上の利害を斥けねばならぬ……』

然しながら吾々の研究の題目は、ジノヴィエフの組合論、レ

エンの組合論ではなくて、露國の勞働組合の實際上の事實である。

露國の組合は、共產黨とソビエットの權力の下に、全く其自主的行動と性質とを失つては居らぬか。そして莫斯科インタナショナルに加盟することは、やがて莫斯科の共產黨によつて、佛國の組合を指揮せられることを意味しないかといふ、佛蘭西のサンヂカリストの危惧に答へて、親しく露國の組合運動を視察して歸つた社會黨のマルセル・カシアンは、『社會黨と組合』と題する小論文のうちに斯う云つて居る。

『……佛蘭西では人々は盛んに、莫斯科は第三インタナショナルを手段として、全世界の勞働組合を指揮命令せんとするものだとして反對する……。

『然らば吾々は、露國で何を見て來たか。佛蘭西では、官憲は官吏の組合を窮迫し、組合を迫害し、彼等を日每にブルジョアの法庭に引出し、解散を以て勞働總同盟を脅やかして居る。一言にすれば、資本の僞善的獨裁は、有ゆる組合團體の上に押し掛つてゐる。然るに露國では、組合は眞實の主人である

『各工場の管理部は、組合の守護の下に行動する。各職業の勞働條件は、彼等によつて定められる。彼等は賃銀と賞與との額[illegible]彼等の代表者は、全國の生產と分配とを管理する國民經濟委員會に多數を占めて居る。工業に於ても、運輸機關に於ても、一切の生產物の分配に於ても、社會的構造の基底から頂上まで、一切の機關のうちに、勞働組合は其經驗と勞働者の實際的觀念とを求められてゐる。

『露國の勞働組合は、ソビエット共和國を運轉する一切の機能のうちに、直接に有効に代表され、重要な地位を占める。彼等は事實上、露國の新しき組織を指揮してゐる。勞働組合の屈從とか從屬とかいふのは、飛でもない讒言であつて、彼等は眞實の主人である。

『たゞ然しながら、彼等が此有力な地位を占めるに至つたのは、社會的革命の結果であることは事實である。今日迄で殘酷に彼等を搾取してゐたブルジョアが、決定的に敗北したのは社會黨の行動に負ふものであることを彼等は知つてゐる。唯だ佛國に於ては、勞働團體の歷史が露國とは異なつて居り、鬪爭狀況が同一でないことは無論である。……けれども事實は之を證明する……露國の社會主義者は、彼等の新社會に於いて、勞働組合に從屬的な卑しい地位を當がはないで、第一の位地、最高の位地を與へたのである。』

露國の勞働組合を研究すれば、勢ひ、露國の組合運動を中堅とする、國際勞働組合委員會に言及しなければならぬ。

金屬工、鑛夫、纎維工、運輸勞働者、ペンキ師、製帽工、木工、建築工、裁縫工、靴工の間には、歐洲戰爭前に、既に國際的組合が組織せられてゐたが、是等は何づれも職業上の狹隘な目的を主とするものであつて、且つ其組織も、單に通報機關たるに過ぎなかつた。是等の國際的組合を他かにしても、各國の勞働組合運動の多數は、國際社會黨事務局（第二インタナショナル）に加盟して居つたが、一九〇二年に至つて初めて國際勞働組合書記局が組織され、第二インタナショナルと併立することになつた。

國際勞働組合書記局はレギーンを委員長として、本部を獨逸に置き、數回の大會を開いたが、大會は單に、各國組合の代表者の意見交換の機關に止どまり、殆んど何等の有力な國際的行動をも見なかつた。歐洲戰爭の勃發は、第二インタナショナルと同じく、この國際勞働組合運動の無力を證明し、開戰と同時に事實上解體し去つた形であつて、幾度か大會の決議に繰返された國際主義は全く忘れられて、レギーン、ジュオー、アプルトン、ゴムパアス等に率ゐられた獨、佛、英、米の勞働組合は、何づれも皆な、資本主義的戰爭の最も有力な機械となつた。

戰爭の終了と共に、列國の戰爭社會主義者は、ベルンに國際協議會を開いて、第二インタナショナルの殘骸を復活させたが之と同時に、舊國際書記局の殘骸に集まる各國の組合領袖も、同じくベルンに協議會を開き、國際勞働組合聯合を組織した。國際勞働組合聯合は第二回大會をアムステルダムに開催し、現に同市に本部を置いて居る。國際社會黨協議會が、破產した第二インタナショナルの繼承であるのに對して、アムステルダムの國際組合聯合は、破產した舊國際書記局の繼承と見做すことが出來る。國際勞働組合聯合は、一方には第二インタナショナルと策應し、他方には、國際聯盟の勞働事務局と提携して居るもので、レギーン、ユーペルト、ジュオー、アプルトン、ゴムパアス等によつて率ゐられる、各國組合運動の右翼及び中央を代表するものであつて、革命的組合主義者は、第二インタナショナルと共に此の國際聯合をも、黃色インタナショナルと呼んで居る。

この黃色インタナショナルに對して、露國共產黨は各國社會黨の革命的分子を糾合して、莫斯科に第三インタナショナルを組織した。國際勞働組合聯合に對しては、之を內部から赤化するか、それとも外部から破壞するかといふ、二つの議論があつたが、第三インタナショナルの第一回大會は、この第二說を取る

可き決議をしたので、第三インタナショナル執行委員會の主唱により、各國勞働組合の代表者は、一九二〇年六月十六日を以て莫斯科の勞働宮に協議會を開くこととなつた。此の協議會は第三インタナショナルの委員長ジノヴィエフを議長として、英國からは彼のロバアト・ヰリアムス（運輸勞働者聯合會）とアルフレッド・パアセル（勞働組合大會議會委員）とが出席し、伊太利からは伊太利勞働總同盟を代表して、ダラゴーナ及びギセッペ・ビアンチ、伊太利農業勞働者全國聯合會を代表してエンリコ・デユゴーユ、伊太利金屬工組合からはエミリーオ・コロンビーノが列席し、露國側からは、全露組合中央委員會のロゾウスキー、トムスキー、ジバロキッチ、シユミット、莫斯科勞働組合委員會のメルニチヤンスキーの四人が出席した。協議會は前後一ケ月の討議の末、次の如き宣言を決議し、茲に赤色勞働組合インタナシヨナルの成立を見たのである。

『第三インタナショナル執行委員會の召集によつて會合し、この所に署名した露西亞、伊太利、西班牙、佛蘭西、ブルガリア、ユーゴ・スラヴ及びヂョルヂアの勞働組合の代表者は、次の如く思料する。

『萬國勞働階級の地位は、帝國主義的戰爭の結果として、今や勞働の搾取を完全に廢止し、共産制度を確立する爲に、一層明白にして且つ一層有力なる階級鬪爭を焦眉の必要とすること。

『そして此鬪爭は、有ゆる勞働者の——職業的の團體ではなくて、産業的團結による——一層緊密なる組織によつて、國際的規模の上に行はれなければならぬこと。

『勞働日の短縮、賃銀の增加、勞働條件の取締等の如き、謂ゆる社會的改良は、或る情況の下に於ては、階級の鬪爭を緩和するものではあるが、社會問題そのものを解決するの力はない。

『然るに大多數の交戰國に於ては、勞働組合——中立的若くは非政治的組合——の大部分は、恐る可き數年の戰爭中、帝國主義的資本主義の奴隷となり、勞働者の究極の解放を阻害した。

『勞働階級は全ての勞働組合を、一個の有力なる階級的團體に結束しなければならぬ。そして此の階級的團體は、共產主義を奉ずる無産階級の、國際的政治團體と密接に提携して行動しなければならぬ。斯くて勞働階級の階級的團體は、社會的革命の終局の勝利と、全世界に亘るソビエット共和國の樹立との爲に、充分に其力を伸ばすことが出來る。

『所有階級は、被搾取者の解放運動を粉碎せんが爲には、如

何なる勞力をも惜まない。

『故にブルジョアの獨裁に對しては、無產階級の獨裁を以て對抗しなければならぬ。此方法は過渡的方法にして、而かも動かす可からざる確乎たる方法であつて、搾取者の抵抗を粉碎し、無產階級支配の効果を確立すべき、唯一の方法であること。

『單にアムステルダム國際勞働組合聯合の綱領と戰術とを以てしては、上記の如き原則の勝利を齎らし、萬國の無產者に勝利を確保することは出來ぬ。

『故に吾々は次の如く決議する。

『(一)進步した革命的分子が、現存の組合から脱退するといふ戰術は排斥すること。之に反して是等の革命的分子は、有ゆる手段に訴へて、帝國主義的戰爭を助けてブルジョアと協力し、且つ僞國際聯盟の行動に參與して、今尚ほ資本主義的帝國主義に事へつゝある日和見主義者を、組合外に驅逐しなければならぬ。

『(二)各國の勞働組合內に、共產主義的宣傳を行ひ、有ゆる團體の內部に共產主義的、革命的の一團を組織して、吾々の綱領を受容る可き宣傳を行ふこと。

(三)勞働組合運動の組織改造の爲めに、戰鬪的なる國際委員會を組織すること。この委員會は「國際勞働組合委員會」として、第三インタナショナル執行委員會と一致して行動すること。委員會に加盟した全ての勞働組合は、悉く此委員會に代表者を出すこと。國際勞働組合委員會より、一名の代表者を第三インタナショナルの執行委員會に出だし、後者よりも代表者一名を、前者に出だすこと。

ロソウスキー(全露勞働組合中央委員會)
ダラコーナ(伊太利勞働總同盟)
ペスダナ(西班牙、全國勞働同盟)
シヤプリン(ブルガリヤ、一般サンジカリス勞働組合)
ロスメル(佛蘭西勞働總同盟の革命的サンヂカリスト少數派)
ミカド(ジヨルヂア、勞働組合共產主義少數派)
ミルキッチ(ユーゴスラヴ、セルビヤ其他、勞働總同盟)

此協議會は一九二一年一月一日を期し、莫斯科に第一回國際會議を開くことを決定した。即ち此會議によつて、正式に勞働組合インタナシヨナルが成立する譯であるが、この國際組合團體は、既に七ケ國に亘つて九百萬の勞働者を代表して居る。即ち

全露勞働組合中央委員會	五、二〇〇、〇〇〇
伊太利勞働總同盟	二、〇〇〇、〇〇〇
西班牙全國勞動聯合會	八〇〇、〇〇〇

佛蘭西勞働總同盟中の、革命的サンヂカリスト少數派	七〇〇、〇〇〇
ユーゴ・スラヴ勞働總同盟	一五〇、〇〇〇
ブルガリヤ一般勞働組合	九〇、〇〇〇
ヂョンヂャ共產主義少數派	一五、〇〇〇
計	八、九六五、〇〇〇

であつて、英國の代表者は、露國及び伊太利の代表者に全權を委ねて歸國したので、英國三十萬の運輸勞働者は、當然インタナショナルの勢力に算入せらる可きものである。其他エストニア、納威、芬蘭の勞働組合、獨逸、墺太利、波蘭、加奈陀、米國、愛蘭等の革命的組合運動をも算入したならば、インタナショナルの實力は、優に一千萬人の組合勞働者を代表して居ると云つてよい。

この新たな勞働組合の國際的組織が、從來のそれと異るところは、單に通報機關たり、聯絡機關たるに止らず、更にまた單純な意見交換の機關として、雜多な異分子の均しく合意し得る、乘合馬車的決議を通過する機關たるに止らないで、國際的階級鬪爭の實際の焦點となり、實際の中心として、具體的な一定の行動方法によつて結束して居るところにある。

『露國の全勞働組合運動は、國際的階級鬪爭の立場に立つ……』とは、組合組織の一般原則を示したと、第二回全露會議の決議の明言して居るところであつて、露國組合の組織と構造とは、此の一般原則の上に築かれて居るとしたならば、斯ような赤色勞働組合インタナショナルの組織を見ることは、その當然の結論と謂はなければならぬ。

○戰爭の哲學

——價値競爭としての戰爭——

賀川豐彦

人間の不完全性と戰爭

人類の相戰ふこと程お可笑なとは無い。一方にはキリストのような、また釋迦や、トルストイのような完成した個性があるにかゝわらず、他方には幾千萬の兵士が鎗を削つて相戰ふて居ると云ふ有様である。

それに就て私はつく〲と思ふことであるが人間には不完全に創られて居る。同じ注意に關することでも人間の注意はたゞ一つにしか無い。それで怒つて居るとか悲しんで居るとかすると注意は少しも與へられ無い。つまり主觀的感情の變化で理智の方面は全く無視せられるようなことが少なくない。それで人間の理性と云ふものが如何に不完全なものであるかゞわかる。

もし敵に對して心より同情し、敵の生活狀態を推定し、敵の心になつて考へてあげることが出來るならば、少しも戰爭と云ふものは必要では無いが、我等の肉體が占めて居る部分はあまりに狹い所であり、我々の五官はあまりに局部的に制限せられて居る。爲めに我々は妙なところで完全な智覺に失敗するのである。

人間が戰はねばならぬと云ふ多くの理由は全くこの邊の人間性の不完全にあることも知つて置かねばならぬ。普通に感情の衝突と云はれて居る部分はこの理智の不完全を意味して居るのであつて、理智の不完全な所にはたゞ盲目に近い感情と意志のみが支配するもので過去に於ける人類の戰爭の歴史は殆ど凡てがこの盲目的感情と意志の衝突史だと考へて少しも差支へは無いのである。

元始的獸的衝動の起原

然らば人類は戰ふことを何處から學んだか？『石器時代の人

類』の著の中にヘンリー・フェヤフヲルド・オスボルンは人の系譜を並べて pithec anthropus から Heidelburg, Piltdown, Neanderthal, Prehuman, Cro Magnon Homs, Sapiens（今日の人類）と進化して來たことを詳しく書いて居るが、彼の說によると、第四紀層の第二の氷河時代は今日の地面より四千二百六十五尺下になつて居るが、その氷河時代に續く第二の暖温期に初めて人類が現れたのであつた。そしてハイデルベルグ種の現れたのは今日の地層より七十三尺下になつて居る。この次の時代即ちピルトダウン人種の時代には人間の齒はまだ猿のように攻擊や防禦に利用せられて居たらうと考へられる。それでピストダウン種の如きは武器を用ゐて戰ふと云ふよりかまだ肉體的の武器で戰ふたものと考へられる。勿論オスボルンの如きはこのピルトダウン種は現今の人間とは違ふと云ふて居る。(H. F. Osborn: Men of stone ages, p 144)

その次の時代のニアンデルタール種は食人種であつたと主張せられる程野蠻なものであつた。勿論之に對してブレユル Breuil の如きが反對して食人種のやり方と少しの違つたやり方をして居て、食人種ならば人間の骨を縱に割る可きだのに横に折つてあるのは食人種でない證據だなど云ふて居るが、然し Mousterian 時代のニアンデルタール系のものには明かに食人的の跡があることをオスボルンなどが信じて居る（ibid, P. 215）此人種は老人や死人を獸に與へて食はせたのでは無からうと云はれて居る。(ibid, p., 214)

オスボルンは人種戰爭の最初の大衝突はこのニアンデルタールと新しく這入つて來た或高等人種の戰ひであつたとして居る。

そしてこの時代にはピルトダウンなどと違つて既に武器を持つて居たらしいのである。即ち木製の武器で戰つたらうと考へられる。然しニアンデルタールには弓が無かつた。その反對に新しく出現して來たクロ・マグナン種には弓が有つた。クロマグナン種は今日ドルドグネ Dordogne に居ると云はれて居る。その後人類が餘程黎明期に近づいても或人種の中には食人的傾向が有つたが、その時代に發掘せられる骨が凡て女と子供の骨ばかりであるのを見て不思議に思ふ學者が少なくは無い。

そしてこの野蠻な風習は黎明期のエヂプト神話特にピラミッド・テキストに出てくる天空に迷ふ食人の靈などと思ひ較べて何かそこに連絡があるかの如く考へられる。

あの『死人書』Book of the Dead の基礎となつた金字塔の內壁に彫りつけた表象文字は讀んで見るとゾツとするような人間の魂を食ふ空中の精のことを書いて居るのであるが、それを形

究したブレッドステッドの如きが、之は矢張り昔の食人種のことを思ふて書いたものであると云ふて居るのを見ると、夢のように幾萬年か前の人類の記憶が微かに殘つて居たものかも知れ無い。

然し食人的行爲は必しも昔のことでは無い。今日まで多くの野蠻人の間にこの遺風が行はれて居るのであつて、中央アフリカのコンゴー低地には食人的黒人種が多く住んで居る。勿論之等のカニバリズムの野蠻人が何故に人肉を食するかと云へば色色な理由にもよるが多くは宗教的か、迷信的であつて、それが更に墮落して趣味の爲めに人肉を食ふと云ふようなものが多い。それで食物が足らなくて人肉を食すると云ふようなことは殆ど無いと云はれて居る。

然し何故に人間が宗教的にも食人間的になつたかと云ふことに就てはそこに深い理由があらねばならぬ。そこまで人間としての迷が深くなるには我等の理性では解き得無い部分があるのである。下層階級には時によると人肉を食ふと『通力』が出來ると云ふような迷信を持つたことがある。野蠻人の食人的になるのもよくそれに似た所があるので、コンゴー低地などに行はれて居る食人的習慣の多くはその『通力』の問題であるらしい。通力の問題はたゞ實在的の問題では無くして價値の問題である。そこに我等の凡ての問題が暗示されて居る。

生存競爭か價値競爭か

私は人類の生存競爭の意志が深く太古に根ざして居ることを知る爲めに石器時代からの記録を遡つて見た。人類はその醜い形を地上に現すや否や相爭つて居るかの如く見える。そして最初の木の武器が出來最初の弓が出來た後に、人間は互に相爭ふことが益々激しくなつた。そして殆ど共存しても差支への無いような場合でも相爭ふようなことが多い。そこはたゞ生活の爲めの競爭では無くして、所謂感情の競爭即ち價値競爭が生活競爭として投影された場合に戰ひが多いことになつて來た。

それで人間の戰爭は生存競爭から起つたか價値競爭から起つたかと云ふことを充分研究する必要がある。

人間は最初は木の上に住んで居た。木の上に住むことによつて獅子も、狼も、虎をも充分避け得たことは今日の猿が木の上に住んで居る爲めに今猶安全であることを見てもわかる。凡て地面の上に生活の安定は無いが生活が立體的になれば生活競爭は幾方面に於て減じるのである。それで今日鳥類の如きは最も生存競爭の程度の少ないものであると考へて差支へ無い。鶴の如きは僅か二つの卵しか無いが高空に巣を作る爲めに安全にそれを孵化せしめることが出來る。それで鶴には武器がいらぬ。

い。猿が木の上で生活する爲めに狐の類より進化したとしても狐のように默ふ必要は無くなつたのである。それで猿は頗る無抵抗的な動物として作られたのであつた。そして手が發達した爲めに腦髓が發達した。猿は獅子や狼を退治する能力を持つては居ら無かつたらう。たゞそれは逃げることをのみ知つて居たのであつた。最初の人類がどうして木の上から降りて來たかは頗る疑問であるが、マシウス博士や、カロル博士に云はせるとそれは林が枯れて降りて來ねばならなくなつたのだと云ふがそうかも知れ無い。兎に角、最初の人間は猿のような抗爭には不適當な身體を持つて地面に降りて來たのであつた。

ピルト・ダウンが充分抗爭に必要なだけの牙齒を持つて居たとしてもそれは熊や獅子と戰ふだけの力は持つて居ら無かつたらう。人類の生存は全くその心理的能力に待つより外は無かつたであらう。

そこで人類は獅子や狼が獵をして生きて居るのを眞似て、唯獵をして食ふ生活が全く安定的なもので無いことを知つて獸類を飼育することを覺え、デユ・コンドイユなどが研究して居るように、百九十五種類の植物を耕作することを覺えたのである。そし獸類を飼育することを覺えたことゝ植物を耕作すること物は多くなつた。そして食物の多くなると共に人間も亦に生存競爭をして嚙み合ふ必要もなく恰度善い加減に增加して行つたのであつた。

凡ての動物が進化する時にいつでも各方面に分岐して生存競爭の程度を出來るだけ少なくしようとするように、人種の或者は漁夫になり、或者は牧畜夫となり、或者は農夫となつた。そして暮しの立てられる所に急いだのであつた。

そして哺乳動物をみても わかる通り或者は逃げ或者は武器で防衛し、或者は進んで掠奪して生きんとするように、人類の中にも各種の生活樣式を持つものが現れるようになつたのである。

凡て生物には食物が得られさへすれば、最も抵抗の弱い方に流れて行かんとする傾向のあるものであつて、人類の生活樣式も同じくこの法則に從つた。

人類最初の戰爭がどんな形で行はれたか私は知ら無い。然し獅子の群が獅子の群を襲ふたり、虎の群が虎の群を襲ふことが無いにかゝわらず最初は猿のように菜食近い柔和な人類が大群をなして他の大群と相爭ふことになつたのは實に不思議な現象であり、昆虫社會に於ては蟻などの社會の外には見ることが出

値競爭から來たかそれは頗る疑問である。

生存競爭より價値競爭へ

多くの場合に同族間に於て殺人は恐る可き罪であると云ふことは早くより發達した道德であり、法律であつた。それで同族間の暴力競爭を防止する爲めに早くより一つの警察制度が出來た。それが多くは酋長であり、王であつた。然し異種、異族間に經濟的にも、社會的にも何等交渉の無い場合に於ては、人類の不完全性は異人種を自己より遙かに下等な人種だと輕蔑する癖があつた。言語は通ぜず風俗は異り、生活様式は異る爲めにそれ等の人種から掠奪することも、或はそれ等の人種を大群をなして攻撃することも、別に罪惡であるとは考へて居ら無かつたのである。之は今日でも日本人が朝鮮人に對する一種の感情を持つて居ることを見てもよくわかることである。今日ですらそうであるから太古に於てはどんなにこの種類の感情が强いものであつたかは略々想像することが出來る。つまり社會性が全く違ふ異人種に向つては人類が牛や馬に對する愛憎の感よりか更に激しい愛憎の念が强くあつたに違ひないのである。之は生存競爭の關係よりか寧ろ價値競爭の上からそうであつたに違ゐないのである。たゞそれで牛や馬であつたならば人類と交渉を保つにしても混血する恐れは無いが、人類であれば混血する恐れもあるし、社會性を亂される懼れもあつた。それで自分の方が高等である人種が――たとへば白人種が――黑人種や黄色人種と混血しなくてはならぬと考へた場合に、彼等がたゞ人類と云ふ大きな部面から哲學的に考へることが出來ないで、價値の上進の方面から、同じ人類であり乍ら人種競爭をしようと考へるのはあり得ることである。つまり人類の最初の戰爭が食に飢えての生存競爭であつたにしても、それは僅か束の間であつて結局は價値の加味せられた戰爭となるのである。

私が支那に渡る汽船の中で支那人の妻になつて居る日本の女を見て、日本人の多くは『日本人であり乍ら支那人の妻君などにならなくても善かりそうなものだにな!』と云ふ呟きを聞いたが、日本人と支那人との間に於てすらこれだけの人種的社會性の區別があるのである。私はその時にその女の顔と支那人の顔を見較べて見たが、日本の女はどうしても多少黑人種の血が混つて居るのでは無いかと思ふ位色の黑い醜い女であつた。それでも文明が進んで居ると云ふ意味で支那人を輕蔑するのである。マルクスが『萬國の勞働者よ團結せよ』と叫んでパンの問題のみで萬國の勞働者が團結出來ると思ふならばそれは餘りに價値競爭を無視したことであつて、戀愛問題になればパンの問題は早や違つた意味のものとなつて了ふ。卽ち血と戀の問題から

云へば萬國の勞働者には團結し得ない或る分子があるのであつて、マルクスでも黑人と白人とが必ず雜婚し得るまでに融和出來るものであるとは考へなかつたであらう。もし價値競爭から見た血族關係とその血族的社會性を根本的に解決するのでなければ人種競爭なり、人種爭鬪と云ふものは終熄するものでは無い。

價値競爭の生存競爭化

人類が成長すると共に多くの價値を保存して行く爲めに資本がゐる。それで價値競爭はまた或文化を保持する種族を維持する生存競爭となる。獨逸に云はせば、獨逸の今の文化を保持せねば、退化した獨逸を見ねばならぬ、それは望ましくないから英國と競爭するのだと云ふのである。この場合、それは明かに價値競爭であるけれども、價値を體現して居る生物の競爭であるが爲めにそれは生存競爭となるのである。それは戀の爲めに血鬪するものは生活に困つて血鬪するのでは無いけれども、血鬪そのものは生存の競爭であるから價値競爭即ち生存競爭と云つた形になるのである。

種族間又は社會團體の間に於ては多くの場合價値競爭が直に生存競爭になる場合が多いのであつて、國族を侮辱せられとか云ふことが直に大戰爭の起因となり得る原因は、價値競爭が生存競爭化して居るに起因して居るのである。

殊に征服的戰爭はそれが生活に困つて戰爭するもので無いことは明かである。征服的戰爭は一種の下等な價値競爭である。自己の自由の儘に世界を支配して見たいと云ふ自己愛の價値競爭である。

之に類するものはゲルフ・ギベリンの黨爭の如き、源氏平家の爭の如き、宗教戰爭の如き、凡てがパンの競爭では無くして、價値競爭が生存競爭化したものである。

そして人類の殆ど凡ての戰爭が實際の生存競爭と云ふべきものでは無くして殆ど凡てが價値競爭の生存競爭化したものであることは實に注目すべきことである。然らば何故に價値競爭が生存競爭化するかと云へばそれは人類が成長せんと努力して居るからである。人類が成長しないものであつて價値の上の爭ひを生命を賭して爭は無いものであれば今日のような戰爭は無い筈である。

日耳曼民族が羅馬帝國に侵入して羅馬帝國を顚覆したことを見てもそれはよくわかることである。羅馬には數世紀の掠奪で富が積み重ねられて居る。然るに日耳曼民族は漂泊の民族であ

それより大なる富を掠奪せんと、羅馬帝國に侵入して來たのである。この際日耳曼民族は生存競爭をしたもので無いことはよく注意して置く必要がある。それはより大なる富と云ふ價値の爲めに戰爭を持ちかけて行つたのである。

たゞ生きて居るだけであれば生活は無内容である。それで生活の内容をつけんとする。そしてその内容とは價値そのものである。そこで價値の無い生活は送りたく無いことになり價値競爭は同時に生存競爭となるのである。このために人類の戰爭はたゞ普通の生存競爭とは全く形の變つたものとなつたのである。そして或時には戰爭そのものが價値生活の内容となることもあるのである。

個人價値と社會價値の衝突

個人の爭鬪には法律があり道德があつて之を防止してゐるが種族、民族の爭鬪には個人を律するような法律は無いのである。個人は永續性を持たず民族又は社會は永久性を持つて居るから、個人の場合には寛容であつても民族又は社會の場合に於ては決して寛容でない。それで個人の場合には無抵抗主義を說いても社會價値の場合には無抵抗主義の說け無い場合が多い。個人の場合には人が自分を斬り殺すことがあつても犧牲として甘ずることも出來るが、民族の場合にはそれさへ無い。全民族の種が絕滅することは絕對的價値の永遠性を破壞するものとして必ず排斥せられる。それで個人に向つては犧牲死を說くことは易いが民族種族社會に向つて犧牲死を說くことは全く絕望的である。この爲めに昔から色々な道德上の價値批判に矛盾が發生して居るのである。

そして民族として又社會としては永久に生きんとする努力が個人意志の生きんとする努力より常に强いものである爲めに個人的の理性批判は常に敗れて、たゞ生きんとして社會意志が個性の凡ての部分の服從を要求するのである。

それが個人としては無抵抗主義を說いて居ても社會としては爭鬪說に敗れるものが實に多い。ユダヤの有名な歷史家ヨシフアスの記錄によれば、イエス・キリストのメシア救主運動の行つた前にアスロンゲスと云ふ者が矢張り一種のメシア運動をしたのであつたが、彼は崇高なる倫理思想の上に立ち絕對無抵抗主義から出發して社會運動を起したが、羅馬軍と抗爭して居る中に暴力主義者となつて、遂に戰爭に敗れて斃れたと云ふことが書かれて居るが、社會主義の最高道德には死刑全廢は勿論のこと、軍國主義の破壞、凡ての軍事行動の廢止と云ふことがあるが、さて實行に移つて見れば死刑廢止は愚かなことレニンやトロツキーがやつて居るように社會主義の最高道德は何處にか飛んで

行つて了つて恐怖政治が出現して居ると云ふ有樣である。之は何を意味するかと云ふに社會は要するに殘酷なものであると云ふことを教へるに外なら無いのである。然らば何故殘酷かと云へば社會制は絶對であり、永遠性のあるもので、個人は社會に服從すべきものであると考へることからこんなに殘酷性が現れてくれるのである。

クロパトキンの相互扶助的爭鬪

そこで考へ無くてはならないが、クロパトキンの相互扶助論である。クロパトキンはその著作にも述べて居る通り彼は生存競爭を決して否定し去るものでは無い。然し生存競爭の內部に相互扶助的本能も動いて居ることを忘れてはならぬと云ふことを注意したのである。即ちクロパトキンの說によれば――又彼の實行によれば、相互扶助とは要するに生存競爭の手段であつて、相互扶助が究意の目的で無いのである。即ち彼は相互扶助によつて人類社會に本能的組合組織が出來、自由社會が出來るのであるがそれも要するに抗爭の爲めの相互扶助だと云ふ風に見られるのである。それで彼は互助による愛の思想の裏面には『收用說』と『暴力說』とを常に隱して持つて居た。

之が個人價値と社會價値の衝突を露骨に敎へた學說である。クロパトキンの互助思想を徹底したものが何故に暴力革命を說く必要が有つたかと云へば、それは今日の人類の發達の程度に於ては互助思想は階級互助或は民族互助までにしか達して居ら無いから、それから先の互助思想の發達を要求することは困難であるとしたからである。それでクロパトキンの如きは互助思想から出發した爭鬪論者として終つたのである。つまり個人價値としては愛の至高性を說き社會價値としては爭鬪性の免る可らざることを說いたのである。つまり社會價値から見れば戰爭は免る可らざる運命として、クロパトキンは之を肯定したのである。

トルストイの社會價値の否定

そこでトルストイは徹底的に爭鬪を否定せんが爲めに凡ての社會價値を否定して了つた。即ち彼によれば民族は永續する必要なく、個性の完成を以つて滿足し、性慾の消滅も喜ぶ可き現象であるとし、社會は絶對に個人を束縛する權利を持た無いものであつた、社會は決して有機體にもあらず永遠性のあるものにもあらず神聖なるものにもあらずそれは要するに個人の集合にしか過ぎ無いものであるから必しも機能的政府の必要あるものでは無く社會を支配すべきものはたゞ最高なる個性道德のみで足りると考へたものである。その爲めに彼は徹底的に道德的無社會論者又無政府主義論者となつたのであつた。即ち彼は暴

力を否定するためには社會價値そのものを否定することを許せ無かつたのである。此點に於て彼は頗る徹底して居ると云ふことが出來る。

然しトルストイのように云へば今日の生產の形式は勿論のこと、社會生活の形式を全部否定してかゝらねばならぬ。なぜならば今日の生產及生活の凡ての形式は社會的體制を帶びた生產の形式であつて、分業と綜合と規律と命令の下に行はれて居るのである。それで政治的に社會を否定し去つても產業的には一種の政府が殘つて居るのである。また生殖慾の問題でも同樣である。生殖慾は個人の理性よりは遙かに强い。トルストイの云ふようになるには人間が凡て理性に於て透徹的にならねばならぬ。然し生きんとし、產まんとする意志また戀せんとする意志は理性より遙かに根强いものである。社會性はトルストイが云ふように個人的に否定し去れるものでは無い。我等が生きて居ることは生殖より來る血族による本能的社會性の結果である。それで社會的價値を否定することは個人價値の內容をも否定する結果となる。今日に於ては個人價値の內容は社會價値を內容として居るものが多く個人價値のみを以つて凡てを律することが出來ないのである。即ち自己が空中に昇りたいと思つてもそれは一個人で天空に驅け上れるわけでは無いので、他の社會に於ける多くの人々の手を借らなければならぬ。即ち機械の進化は或種の社會性をその背後に認めて居るのである。つまり社會の進化なくして個人の進化なく、個人の進化なくして社會の進化が無いのであるから、個人を解放するに急にして社會價値全部を否定し去ることは正當なる理論とは云へ無い。

然らば、個人に於ての無抵抗主義は、何時社會に於ける無抵抗主義として現すことが出來るであらうか？

社會主義と戰爭

カウツキーの「社會主義倫理學」の如きは全く自己本位の生存競爭說から出發して階級爭鬪說の結論に對して居るのであつて、價値競爭は即ち生存競爭であると見て居る。從つて、植物と動物の間には價値競爭は無くたゞ生存競爭のみしか無いので進化とは要するに暴力競爭であると見ればならぬ危險な立場を取つて居る。生存競爭をする爲めに或者は牙を持ち、或者は蹄を持つ變りに人間は個々腦髓を持つたのだとして人間の進化をたゞ內容の無い生命の保續のみが目的であるかの如く考へんとする傾向を持つて居る。それでアミーバと人間との間に何故階級が出來たかの說明はつか無いのである。人間の價値生活は要するに一種の附錄であつて、それは敵を破り敵と爭はんが爲めであつて、敵と云ふものを離れて內容の無いものと見られる危

險な立場をカウツキーは取つて居る。

此說明によれば爭鬪は社會的には必然なものであつて、それが階級的にせよ、または國際的にせよ、爭鬪は運命であつて、社會主義が國際戰爭を否認するのはその戰爭が資本主義の破壞にならぬからであつて、戰爭そのものが惡いと云ふのでは無いのである。

それで一方に戰爭を肯定し他方には戰爭を否定するは生存競爭を基礎とするカウツキーの哲學に於ては全く矛盾ではあるが、此處に彼は戰爭に價値をつけるのである。然し戰爭に價値を附するのは、自己本源の成長に價値を附したのでは無くして、自己はたゞ生存欲のみしか無いと考へる所から出發して居るのである。そこでダアヴヰン的生存競爭說から出發して自己中心の社會學說によつて階級爭鬪說を立てんとするものは結局は哲學としては失敗である。

戰爭に價値の大小のあるのは、價値に戰爭する種の內容があるからである。然し階級爭鬪說が價値競爭だと考へることは何だか妙に考へられるので階級爭鬪は生存の競爭であり、經濟競爭はパンの競爭であると考へるのがわかりが早いのである。然し實の競爭は價値の競爭であり、たゞパンの競爭だけでは無い。今日の狀態では賃銀難と失業難と解雇難とがある爲めにパンの問題であり生存のみの問題の如くに響くけれども實際は賃銀難と失業難と解雇が無くなつても階級爭鬪は起るのである。奴隷の間には賃銀難と失業難は無かつたが、自由に對する憧憬の爲めに問題が常にあつた。生活難と賃銀制度が無くなつても生產に對する勞働報酬が不均等に分配されるならば階級爭鬪はいつまでも續く、つまり階級爭鬪は價値爭鬪を本質としたものである。

國際戰爭と階級戰爭の差

然らば國際戰爭が何故惡くて、階級爭鬪が何故善いか？　社會主義から云へば國際戰爭は征服戰爭であつて、階級爭鬪は正義の戰爭であると云ふが實際そうであるか？

國際戰爭は資本閥の戰爭であつて、階級戰爭は無產者階級對資本閥の戰爭であると云ふのは今日の過激派の云ひ分である。國際戰爭が馬鹿らしいものであることを指示する爲めに資本閥の戰爭であると云ふのは如何にも尤もらしい云ひ分である。然し凡ての國際戰爭が資本閥の戰爭であると云ふことの出來ないことは過去の歷史が證明する。一九一四年の歐洲の大戰にしても、勞働組合が凡てその渦中に投じたのは何故であつたか？　それはたゞ資本閥の貪慾ばかりからでは無くその他に民族發展の上にかける憎惡心が伴つて居るのである。「民族自決主義」と

云ふようなことが說かれるのは何故であるか？ 階級意識の方が民族意識より強くなり得るならば國際戰爭は無くなつて、階級爭鬪のみになるであらうけれども、今日のように民族意識の方が階級意識より強い間は國際戰爭を凡て資本閥の戰爭など斷定は出來ないのである。勿論資本閥が愛國心に訴へて國家を利用して私腹を肥やさんとしないものでは無いが、國際戰爭の凡てが資本家に上つて拵かれて居るものだとは考へられ無い。

然らば何故國家競爭に對する社會主義のような批評が出たかそれはかうである。個人的生存競爭（又は惡り競爭）を社會的に取締るものが最初必要とせられた時に一種の警察制度のようなもので社會的に必要とせられたものが最初の軍人的政府である。そしてこの機關はまたその社會の外敵を防ぐこともした。即ち生存競爭の爲めに出來たのが今日の國家の形を取つた特殊な社會組織である。

凡て生存競爭の形を取つたものは必ずやそれがどんな內容のものでも凡て國家組織のような形式を取るものである。たとへばレェンの無產者專制の社會に於ても、特別に今迄の「國家」と[illegible]全く同一性を帶びるものである。

その最も露骨なものは古代羅馬のエンペラトル（皇帝）が社會戰爭から起つた獨裁官に早變りしたものであると云ふことである。それで社會戰爭丈からその戰鬪的體制は半野蠻なものであつて、民族主義から來た戰鬪的體制は下等なものであると云ふのは實に愚かな辯護であつて、舊式國家に變へるにその角に變へて牙を生やしただけの新式國家を造つたまでのことである。凡て價値戰爭の爲めに生存を賭してまで戰はんとする社會體系はどうしても鬪爭的國家組織を取るより外に道が無いのである。

それで階級爭鬪を主張するものが國際戰爭を批評して野蠻であるとするのは、自己が結局は矢張り或種の野蠻な型に這入らねばならぬことに氣がつかぬのである。つまり民族主義から來る爭鬪的社會體制を否定するならば階級爭鬪から來る爭鬪的社會體制をも否定するのが當然の結論であつて、自由社會を思ふものは爭鬪的社會體制を進化の道程に置くことはどうしても出來ないのである。

然らば、何故今日に於ては民族爭鬪が評判が惡くて階級爭鬪が評判が好いか？ この價値の批判は價値意識の進化より來る[illegible]

今日のように商業組織が發達し無い時代に於ては萬國的に經濟組織が色々と連絡が取れて居れなかつたから、『萬國の勞働者よ團結せよ』と云つても階級意識などの發達する餘地も無かつたものである。それで戰爭と云へば民族戰爭か國際戰爭又は宗教戰爭であつた、それが文化の進化と共に宗教に關して戰爭することが如何にもつまらぬものだと云ふとがよくわかるようになり、人々は宗教價値に對して相爭ふことに興味を失つた。そして今度は『富』と稱する現實的な價値に非常な興味を持つようになつた。それで全人類は十二世紀より十七世紀まで宗教價値に就て大戰爭をした如くに今日は富と稱する價値に就て戰爭をして居るのである。而もその富の戰爭には人種意識が加味せられて居て帝國主義的領土慾と、商業的資本主義とが相並行して發達して來たものである。或民族が戰爭せねばその民族が滅びるかと云ふに必しもそうでは無い。それは十七世紀に『神』に就て戰爭したと同様に今日は『神』の變りに『富』に就て爭ふて居るので、決して『富』がなければその民族が亡びると云ふようなことは無いので、英國がトランスバアルを侵略するにしても、印度を征服するにしても、みな『富』の内容を殖さんが爲めであつて、これで民族が亡びるとは無いのである。日本の人々が増加するから[illegible]ない。支那も南洋も否世界各國はみな同じことを云ふ。人々が増加するのは人類が子を産むからである。それで増加と云ふことを基礎にして戰爭することは實に意味の無いことである。ところが今日までの戰爭熱はこの未來の増加を現在の問題として外に取る可き道が無いかの如く煽られて居るのである。現在は現に角やつて行けて居るものを未來のことを現在の如く考へて戰爭するところに價値判斷の誤差があるのである。

殊に人口論から來た侵略主義の如きは科學的に批判して何等價値の無いものであつて、今日の機械文明、應用化學の文明を持つてして少し位い増加する人口を戰爭し無ければ養ふことが出來ないなど考へることは全くの妄想である。獨逸は一八八〇年代までは而か考へて南北兩米に移民を輸送したが、本國の文化がその爲めに衰へることを考へて移民を中止した位である。科學文明から見ればマルサス的人口論は必しも眞實では無い。否寧ろ、生産された富が或者に掠奪せられるところに人口論が起つてくるのである。

それで謂れるマルサス的思想を持つて居る帝國主義と、富を掠奪したいと考へて居る資本家とはその掠奪の點に於て偶然一致する。それで、帝國主義者は外國の富を奪ふことが直に外國[illegible]

である。然し移民運動は宗教的動機か或は他の高等な思想に導かれるので無ければ下等な文化地方と不健康な荒涼たる地方に向つて決して成功するものでは無い。

それで高等な文化のある地方の征服を思ひ立つ。然し高等な文化のある地方は征服は出來ても彼等を奴隷にすることもまたそこに移民を移住せしめることも今日の文明のように進んで來ると全く出來なくなる。結局は虻蜂とらずになつて、征服戰爭は何にもならぬことになるのである。

そこで戰爭の内容が進化するようになつて來た。初めはたゞ敵を亡ぼして富と財と奴隷を奪へば善かつたものがそれが奴隷にすると更に不經濟になるので償金だけを取ることになり、今日ではその償金も取れ無いと云ふ有様になつたのである。それでたとひ戰爭をして敵國を征服をしても今日の征服は戰爭することによつて兩者に少しも利益なくしてたゞ損害計り與へるものであると云ふことがよく理解されるようになつたのである。たとへば英の劇作家ベリーが「Der Tag」に書いたように、『獨乙を破壞すべからず』と云ふようなことをその敵國民が劇作にするように文明國の意識が進んで來たと云ふことは、文明が[illegible]のように各國民族が獨立の生活をし劇作はまた直にその敵國の英國に傳播して來て利益を受ける、それで獨乙の破壞は自國の文明の破壞と相等しいものであると云ふことが意識されるのである。

こんな風であるから今日の文明國の程度に於ては戰爭は文明の破壞に了らぬ程度の懲戒的意味に止らねばならなくなつた。つまり自らが富を獲得する望を捨てるばかりでは無い、損害を受けてまでも敵を懲戒する意味で戰はねばならぬことになつた。一層強く云へば、それは絶滅運動では無くして(絶滅せしめるたらば自己實在の價値生活に直に影響してくるから)絶滅し無い程度又た現に持ちつゝある文明を崩壞せしめ無い程度で懲戒すると云ふ位に止め無くてはならぬことになつた。即ちそれは生存競爭を離れて價値競爭の方に突き進んで來たのである。かうなつてくると、戰爭は國民の生存を脅かされるから戰爭すると云ふのでは無くして國民の發展(價値上進)を阻害するから戰爭をすると云ふことになるのである。

そこで國家内に二つの輿論が起る。一つは戰爭をして敗北しても少しも損害を受け無い、また勝つても少しも利益を受け無い、文明の中心となつて生産に從事して居る勞働階級の輿論である。この階級の輿論は戰爭をしても少しの利益のあるもので

か國力の進展だとか云ふけれども結局は資本家と軍事專門家がそんなことを云ふて居るので勞働階級と國内の總人口の九割以上はそれに就いて頗る無頓着であるから、そんな戰爭は出來ぬと云ふ。

蓋し警察の爲めて設けてある軍事專門家は番犬が吠えねば義務を盡して居らぬかの如く考へると同じようにいつでも戰爭したがる。資本家は自らよう生産し無い階級であるから他人から掠めねば富が增加せぬように考へて軍人と妥協する。然し軍人と商人が海外で何をして居るかは破壞されることの許され無い文明の支持者である生産階級は全く預り知らざることであつて遂に今日の程度の高級文明に於ては國際戰爭は要するに價値競爭であり、その價値の標準は國家組織と云ふ警察制度から見たものと非破壞性を帶びて居る文明の創造階級(即ち生産階級)から見たものと全く方角違いの處について居て、要するに戰爭は文明を迷路に導きつゝあるものであると云ふことが明白に自覺されるのである。

そこで、今日の國際戰爭を脱却するたゞ一つの道は、世界的に連絡の取れて來た文明の樣子である。生産階級のみが世界的自由社會を組織して國民の愛國心に訴へて所有慾から戰爭を誘惑する資本閥の帝國主義を倒し階級爭鬪によつて、國際戰爭を無くするように努力するにありと自覺されて來るのである。

即ち國際戰爭は一種の價値戰爭であつて、必しも大砲と銃劍でその是非曲直を決すべきもので無いと云ふことが漸く感ぜられて來たのである。

然し更に新しい大砲と銃劍の福音が說かれ初めた。それは國際戰爭を破壞する爲めの階級戰爭である。この戰爭は生産階級がその上に乘かつて居る資本家階級を絶滅せしめんとする[illegible]運動である。その爲めに大砲と劍とが必要だとせられて居る。然しこの階級的生存競爭の唱道も結局はそれが生存競爭とはならない價値競爭であると云ふことが發見せられる時に力と大砲の福音を說くことを中止せねばならぬのである。

價値競爭としての階級鬪爭

なぜ階級爭鬪が生存競爭にならないかと云ふに、資本家と云ふものは生産者無くして生きて居られるものでは無い。つまり資本家としては勞働運動は出來ないわけで、勞働者を飢えさゝぬ範圍内で奴隷にして置くより外に道は無い。それで資本家と勞働者の爭ひは自由の多少と富の掠奪の問題となる自由の多少と富の掠奪はその本質に於て價値競爭である。然し價値競爭に命懸けでするることは人類生活に於ては誠に意義のあることで價値競爭が生存競爭化することの事實は既に述べた通りである、

然し富の分配の多少自由の多少に就て殺戮競爭を起すことはたとひ已むを得ないことがあるにしても價値競爭から見た時に何だかそこに無理があるように考へられる。

それは一方に於ては國際戰爭が民族間の富の多少、自由の多少に就て爭ふことは文明の本質に觸れて居らぬと云ふ理由によつてそれを否定して居るにかゝわらず、他方に於ては同じ理由によつて殺戮が必要であると云ふことは誠に意味の無いことである。

階級爭鬪は資本家だけをやつゝけるのであれば問題にはならぬが資本家階級を庇護する國家組織が軍隊を使用するから問題が大きくなる。そして軍隊は先にも述べた通りに民族競爭の爲めに出來た爭鬪的體制である。それで民族間に多少なりとも生存競爭なりと考へられるものが殘留する間はこの種類の體制がいつまでも殘つて行く。そして一方には産業界に生存競爭を是認する思想が少しでも殘つて居て、各個人が放逸とも見らる可き自由を極端に利用して民衆の困つて居るのに乘じて餘剩價値を發生させても善いものだそれは仕方が無いと考へる間は、資本家が國内で帝のような生活を送つて居るのと、國民が對外的に帝のような位置に居るのと相類して居るだけに資本主義を認めるものはまた帝國主義を認め、軍隊は直に資本主義の道具となる。そこに思想上の一致があるのである。

然し産業の進化の結果、國民經濟を云ふて居た時代は漸次に過ぎて今日では國際經濟の時代となり、一國民の私利的行動は世界經濟を攪亂することがよく知れて來ると、不完全ながらにも——多くの非難はあるけれども國際聯盟のようなものを作らねばならぬことになる。

それと同時に自由市場の美名の下に掠奪することが恥づべきことだと云ふことが理解されることゝなり、資本主義それ自身が非常に不人望になつて來たことは拒むことは出來ない。即ち價値意識の內容が漸次に變化して來た爲めに、國際戰爭に對する爭鬪氣分が鈍れて來たことも事實であるし、國際戰爭が刀と銃で解決しなくても善い位いのものならば階級爭鬪も刀と銃で解決するまでのものでは無からうと云ふ思想が一般に高まりつつあるのである。

階級が武裝するならば、それは既に生存競爭的體制を取り、その武裝的機關の爲めに、それ自身が要求して居る自由の代りに服從を要求せねばならぬことになる。資本主義の壓制と奴隷生活から解放せられんとして、新しい無産者專制と稱する新しい壓制を受けねばならぬことになる。軍隊の代りに軍隊を持ち壓制の代りに壓制を持ち、階級爭鬪による武裝も結局は何者を

も解放し無いことになりはし無いか？

武力によれる解放の程度

武力によれる解放が必要とせられる間はまだ眞の解放が來て居るのでは無い。或程度まで進んだ文明は武力で破壞してはならぬと、敵ながら惜しまれるようになるのは武力によつてそうなつたのでは無い。國際間に武力が不信用になつたのは價値の上進が武力によつて干渉を受ける度毎に阻止されるからである。

一民族内の生産階級が自己を解放せんがために武裝した場合に武力によつて打勝て得る程度の解放がまた外部からの征服によつて奴隷にせられ得るものであることを自覺して居らねばならぬ。『劍によつて立つものは劍にて亡ぶ！』

我等無産者階級が全人類を解放せんとして居るのは劍によつて解放してまた劍によつて奴隷にせられるような安價なものであつてはなら無い。それは内側から昂進して來る生産階級の文藝の熱度によつて、何者も再び破壞の出來ない種類のもので無くてはならぬ。レニンはロシアの消費組合を解散しなかつたが、消費組合は資本主義の餘剩價値を充分奪ひたるものである。暴力を以つて餘剩價値を取り戻さ無くとも、消費組合の世界的運動は世界的資本主義の餘剩價値を無にすることが出來るのである。ロシアの貿易は今日既に消費組合の貿易では無いか！

一方には消費組合の如き餘剩價値の發生を防止する運動を行は無いで、たゞ資本家の暴力を貪ることを怒つてもそれは罵る方に足らぬ所があるからである。然し一方には消費組合他方には生産組合を作り、そこに猶、資本主義が暴利を貪り得る餘地があるならばその時に社會戰爭をするのも決して遲いものでは無い。然し愈々最後の幕になつても暴力は何者をも解決し無いであらう。電氣とデーズル・エンヂンと、飛行機とX光線——否凡て今日まで人間を幸福ならしめて居る凡ての凡てが暴力では發明せられ無かつた如くに——完全なる社會制度の發明も決して暴力によつては來無いであらう。

それは相互扶助と社會的發明によつて來るであらう。そしてまだ戰爭が必要とせられ社會戰爭が必要とせられて居る間は人間に眞個の價値の標準のつかぬ時であつて、その時代には人間がまだ武力によつて保證した價値が耐久的なものであると考へて居る病的の時代である。

何時平和が來るか？

人類に何時平和が來るか？　戰爭は益々大きくなり、武器は益々完成してくるものだから或人は地球には永遠に平和が來ないと考へる人がある。然しそれは人類の進化を全然信ぜざる人

の云ふことであつて、今日に於ては種族と種族との戰爭は終熄し大名と大名との間の戰爭も終熄し、昔のように小さい戰爭を多くしなくなつた。之は人類の社會性が高く進化して來て、社會連帶の觀念が進んで來たからである。文明が更に進んで或種の文化は國際的武力を超越したものであると云ふことが認識されてくると、國際間に用ゆる武力は益々不必要なものとなる。

然し或人は云ふであらう、八百萬の人間を殺し二千二百萬の人間を傷けた世界戰爭の後に列國は益々武力を充實しつゝあるでは無いかと。私は之を認める。然しその武力を以つてしても高度に進んだ文明の保持者は破壞してはならぬと云ふことを充分意識して來たでは無いか。また階級爭鬪を以つて國際戰爭を無意義にしようと云ふ運動が熾烈を極めて居るでは無いか！

殊に人類の戰爭に對する思想の變化は著しく變化して來た。昔は武士は殺すことを職業にして、之を別に惡いとも考へ無かつた。今日では何人も戰爭の爲めの戰爭を中世の騎士が考へた如くに考へるものは無からう。

私は文明國から今直に戰爭が無くなるとは思はぬ。然し文明が進むと共に世界的產業組織が協同的となり、交通の發達と共に人情が相融和し、價値判斷が統一的となり、科學の進步と共に文明が渾一的となり、多少の感情の衝突があつてもそれを武力に訴へると云ふことが必要でなくなるであらう。

今日既にカナダと北米合衆國に於ては永久平和の保證が與へられて居るがそれは條文の上だけでは何の役にもたゝぬが、產業的に相結ばれてくるとそれが現實的となり、藝術的に科學的に相結ばれると精神的となる。かうして私達は文明の進展と共に內質的に必ず平和を餘儀なくせられることゝ思ふ。

價値標準の變化と平和

之を要するに今日世界に於ける文明國の戰爭なるものは價値戰爭を生存戰爭化したものであるから價値內容の變化と共に戰爭の內容も推移して行く。

昔は無內容な『神』に關する思想で三十年間も戰爭をなし、十字軍の如きは二百年間も打續いて戰爭をした。然し價値標準の變つた今日から考へて見れば實に馬鹿臭いものであつて、人類の歷史が何故あんなもので戰つたらうと思ふ程である。之は科學の進化の爲めに生命價値の內容が變動したからである。

然るに今日では國際的にも社會的にも富の多少と自由の多少の爲めに戰爭せねばならぬことを必要として居る。そして自由の多少が富の多少であると考へられて居る爲めに、『神』と『富』とが置き換へられただけであつて、矢張り昔十字軍が二百年も戰つたように現代の文明國は『富』と云ふ非人間的なことの爲め

に百年も二百年も戰ふのかも知れ無い。

然し『神』の爲めに戰ふことも『市』の爲めに戰ふことも愚かなことであつて、それは『人間』そのもの丶價値內容から離れた幻想であると云ふことが明白に理解されて來た時に人間は自ら悔ゆる時が來るであらう。

價値の上進は人類の排他的感情によつて完成せられるものでは無くして、綜合的互助によつて完成するものであると云ふことが意識される時に戰爭は無くなるであらう。つまり價値の最大なるものが生命價値そのものであつて『人もし世界を得るとも、その生命を失はゞ何の益あらんや』と云ふことが文明の進步と共によく意識されてくる時に戰爭は當然絕滅すべき筈である。子供の時には石合戰が面白いものである。然し大人になつてはそんなものに興味が無い、人類社會に於ても幼年期に於ては戰爭に捷つことが一つの價値である。價値競爭の本能がそれをそゝるのである。

然し至當の價値が生存競爭慾を完全に征服する價値の部分的競爭の爲めに、全價値の湧いてくる生命を破壞することが結局は價値そのものの破壞になることを知つて戰爭は中止されるのである。

然し今の後も文明が局部的に發達し綜合的互助の必要が無いと考へられ、一民族或は一階級の價値獨占が正當でありと考へられることが打續くならば戰爭は中止され無いであらう。敵が自己を殺しに來た場合に二つに一つの運命を決する偶然をあてゝ戰爭をするのが正當防禦だとされて人類の運命と價値を偶然性に供託せねばならぬ間は勿論價値の永續性も無ければ價値の勝利も無い。然し眞正の價値は偶然性によつて決すべきものでは無いと自覺されてくる時に、イエスが十字架に死ぬことは敗北にならなくなる。民族の戰爭に於けるも同樣である、文明が高度に達すると暴力に敗れても價値に於て敵を征服する。奴隸の宗教がローマ帝國を征服したように、至高の價値は暴力的征服を超越する。然し至高の價値が暴力を超越することを信じ得るまでには、人類は更に進化せねばならぬ。少なくも今日の價値の轉倒をせねばなゝぬ。そして至高の價値が暴力に超越すると云ふことを信じ得る世界は宗教の世界である。たゞ神と云ふぼんやりしたもので無くそれで我等が眞の生命價値の宗教的雰圍氣に包まれるまで絕對平和は絕望的であるとも云ひ得る。

然し私は人類の成長を信ずる。人類が一步一步至上價値に目醒めて行くことを信ずる。否たとひ目醒めることが遲いにしても私達は至高價値に目醒ます可く奮鬪せねばならぬ。

（一九二一年二月）

○排日と日本コロニー

桑港にて
本社特派員　室伏高信

一、はしがき

十五日間の航海の後に、一月十二日の夜遅く私はシャトルへ上陸しました。次の日から私は直に私の仕事にとりかゝりました。私は先づこの米國の西海岸の最北に近いところに、日本人の活動、排日煽動家の謂ふところの日本人の『殖民地』を見ました。それから米國における排日問題の實相に觸るゝために、太平洋岸に沿ふて、道を南へと急ぎました。近代における直接的民主政治の産地としてのオレゴンの高原は夜のうちに過ぎました。シャスタの谿谷は米國の太平洋岸においての山水の美をもつて知られてゐるところであるが、それもたゞ車窓に眺めたに過ぎませんでした。そして直に排日運動の中心地としての、サクラメントを訪ひ、桑港を訪ひ、居ること數日にしてまた南へと向ひました。葡萄の實るところとして著名なフレスノにも足をとゞめました。南加州における黄金地としてのロス・アンゼルスにも行きました。この太平洋岸一帯の地は、丁度今ま雨季に入つてゐるとのことであるが、加州に入つてからは、折り折りの雨は、その一雨ごとに暖かさを加へてゆくように見えます。桑港においても、フレスノにおいても、ロス・アンゼルスにおいても、まだ一月の中ばだといふのに、到るところの店頭には既に流行の春着が人々の目を惹いてゐます。野に出でて見る、農園に、牧場に、春は既にカリフォルニアに訪れてゐます。サン・ヨオクインの谿間は、果てしもなく、農園と牧場とそして果樹の沃野とを連ねて、東洋の一孤島からの旅客をして坐ろに天然のこの地に豐かなることを羨望させずにはおきません。廣漠なる平野の間に、私たちは、ところどころに畫のような住宅の點在してゐるのを見ます。ところどころに牛、馬、羊の群がつてゐるのを見ます。そしてリビングストンのあたりからガム樹の緑が車窓に添ふて走るのを見ます。この地、農耕に適する沃野は、加州全人口に割り當てゝ、一人當り十英町の多きに達してゐるといつただけでも、日本の農民たちが如何に太平洋の彼岸に垂

誕の思ひを致すことであらう。排日記者の一人が、嘗つて日本人はカリフォルニアを彼等の『パラダイス』だと想像してこの地にきたりつゝあるといつたことを私は思ひ出さずにはゐられなかつた。若しも金門灣にして日本人のために自由の門戸であつたとしたならば、之は慥に日本人のために『パラダイス』であつたに相違ないであらう。また若しも人間の心のうちから人種的偏見と國家的偏見とを除き去ることができたとしたならば、そしてまた米國人も日本人も、より高き文化へと導かれてゐたならば、そは慥に白人のための『パラダイス』であるとともに、日本人のための『パラダイス』であつたに相違ないであらう。日本人と米國人との間に、『紳士協約』なる非人間的協約が結ばれてから既に十四年になつた。その十四年の間は金門灣が日本人のために堅く鎖された十四年であつたが、その十四年間にあつてさへ、あらゆる困難と危險とを冒しつゝこの『パラダイス』へと流れこんだ私たちの同胞は何萬人の多きに達してゐるのであつた。あるものは、その人の良夫とたるべき人の如何なる容貌、如何なる心、如何なる生活の人であるかも知ることなくして、この地を慕つてきた。米國人はこれを『ピクチユア・プライド』と名づけた。あるものは『死の谷』『地獄の門』と謂はるゝ、耳にするさへ戰慄せずにはゐられないほどの恐ろしき、そして長い〳〵危險の道を通つてこの國へと入つてきた。米國人はこれを『密入國者』と名づけた。しかしこの『パラダイス』において、私達たちの同胞は果してこの『パラダイズ』のうちに彼等の生活を樂しみつゝあるか。彼等の生涯をこゝに適せしめつゝあるか。或はまた排日煽動家のいふごとくに、日本人は白人の脅威となりつゝあるか。白人の生活と文化とを冒瀆しつゝあるか。シヤトルを出てから南行すること一千何百哩、日子を費すこと十數日、私は再び桑港の旅舍に歸つてきて、不幸にして思ふ、米國の太平洋岸一帶の地が、白人と黄人、米國と日本、然り、世界における二大種族と、世界における二大國家の間に起されつゝある、悲しむべき争闘場となつてゐるといふことを。そは最早や決して單なるカリフォルニア州の問題でもなく、米國における日本在留民の問題でなく、もつと廣大な立場と、もつと複雜した考へ方とを、私たちに要求しなくては止まないであらう。

二、日本の「コロニー」を見る

私は米國の土を踏んで、そしてこの地における日本人の生活を見て、排日運動の決して偶然でないといふことを深く私の心に印象しないではゐられなかつた。北はシヤトルから南はメキシコ境に至るまで、日本人の住むところ、彼等には必ず彼等特

者の集團的生活の法則と習慣とがあつた。彼等は何處においても、彼等自身がその地方のパイオニアである場合においてさへ、必ず彼等自身のそして彼等自身に限られた一廓の町をもつてゐる。彼等は殆んで白人とは何等の關係のない生活をなしつゝある。彼等は勿論白人とともに電車にも乘るであらう。白人とともにオルフユームにも行くであらう。彼等は白人とともに活動寫眞の見物人となることがあらう。日本人のあるものは、ロス・アンゼルスにおいて、最大人氣を集めつゝある活動俳優の一人となつてゐる。またこの地方の寂寞な學界において名聲を白人の間に博しつゝある一、二の日本人の學者もないことはない。しかしこうした當然なことを、こうした珍らしくもないことを、私たちが屢々珍らしいことゝして聞かされなくてはならないほどに、一般の日本人はたゞ日本人としての生活に執着しつゝある。或はまた執着を餘儀なくされつゝある。一、二の珍らしい物語りを除いては、この地の日本人は、この地において、アメリカの生活ではなくして、日本人の生活をなしつゝある。彼等は一廓の街區のうちに自らを閉鎖し、または閉鎖することを餘儀なくされて、日本の習慣、日本の制度、日本の道德、そして日本的憧憬と崇拜と排他的精神とのうちに生活しつゝある。彼等の間には日本人によつてのホテルもある。理髮師もある。寫眞師もある料理店もある。蕎麥屋、うどん屋、しるこ屋もある。内外科婦人科齒科の醫者もある。彼等のための賣女屋もある。彼等は日本人のホテル――それは痛ましいほどに小規模なものに限られてゐる――に起臥し、將棋をさし、碁を圍み、日本語の新聞を讀み、夜は日本料理店に味噌汁と澤庵漬とを味ひ、日本酒を飲み――今日においても酒は日本酒も洋酒も支那酒も事實上賣られてゐる――酌婦の三味線を聽き、都々逸、磯節、木曾節、法界節を歌つてゐる。極めて小數の場合を除いては、日本町は日本人のための、日本人によつての町であるとともに、またこれ等の日本人は殆んど白人街には足を踏み入れることもなくして生活する、日本街の、日本街によつての、日本街のための日本人である。桑港だけでも日本人の數は五千人を超えてゐるから、この町の全人口の約百分の一を占めてゐる。フレスノまたはサクラメントにおいては白人に對する日本人の割合は一層濃密である。それにもかゝわらず、私たちが白人街を通過してゐる時に、私たちは殆んど日本人の影を見ることはできないであらう。白人のホテルに行き、レストウランに行き公園に行き、圖書館に行き、帽子屋に行き、洋服店に行き、書店、文房店に行き、私たちは殆んど全然日本人の影を見ることはできない。彼等は彼等の一角に立て籠つてゐる。彼等は彼等

の一角を彼等に限られたる領土だと考へてゐる。彼等はそこに必ず日本語の新聞紙を發行してゐる。彼等はそこに必ず日本語の學校をもつてゐる。日本語の學校では必ず日本の敎科書に基いて、米國の憲法に從つて米國の市民たるべき米國生れの子弟に日本のための忠君愛國の思想を鼓吹しつゝある。彼等は彼等自身のための宗敎をもち、寺院をもちそしてまた彼等のために幾重かの政府をもつてゐる。領事館によつて代表される政府がある。日本人會と稱する他の政府、或は領事館と提携する政府がある。――これは明らかに一種の政府である。領事館に代つて旅劵の査證をなしてゐるばかりではなしに、日本人のために辯護し、日本人のために統計を集め、日本人のために統一と規律とを要求しつゝある。そして各地に必ず組織されてゐるこの日本人會は、毎年の役員改選期には、代議士の選擧にも等しいような競爭、論難、陰謀、嫉妬反目を、彼等の徒黨と徒黨との間に交へつゝある。甚だしいのになると。山口縣人會、廣島縣人會といつたような、各地方々々の日本人會さへも組織されて、殆んど一切の制度と習慣と宣傳とが鄕土的執着への道を進めつつある。排日家はこれを名けて『植民地（コロニイ）』だといふた。然り、何人の目にもそは明らかに『コロニイ』である。親日家の目にある。そは米國の領土內に存在する。そは白人街と四方に接觸してゐる。それにもかゝわらずそは米國そのものではなくして日本そのものである。日本の延長である。政治的にも宗敎的にも敎育上にも商業上にも日常生活の一切の習慣のうへにも、明らかなる日本の延長である。日本國家の延長であり、日本社會の延長であり、日本思想の延長であり、また日本歷史の延長である。卽ちそは米國中の日本である。太平洋の西岸に於ける小日本である。米國にとつては、國家の中の國家、imperium in imperio である。私たちは日本人であつても、また排日家であるとないとにかゝわらず、この嚴然たる事實を匿すことはできない。然り、私は米國に排日問題を見るとして、シヤトルに、桑港に、サクラメントに、フレスノに、ロス・アンゼルスに、日本人の集まるところ、必ずそこに日本の『コロニイ』の存在するのを見た。この『コロニイ』のうちに、私は一切の禍根が醞釀してゐることを思ふ。またそこに一切の禍根が具體化されてゐることを思ふ。そして排日問題の研究はこの『コロニイ』の研究でなければならないことを思ふ。

三、『コロニー』

この米國における日本人の『コロニイ』は何時の頃から建設

かつた。一八六六年になつて六人となつた。一八六八年には十四人となつた。一八七〇年には五十五人となつた。一八八〇年には百四十八人、一八九〇年になつても在米日本人數は二千〇三十九人に過ぎなかつた。それが一八九〇年代になつてから、日本人の入國數が急速に增加してきた。

一八九三年	一、三八〇人
一八九四年	一、九三一人
一八九五年	一、一五〇人
一八九六年	一、一一〇人
一八九七年	一、五二六人
一八九八年	二、二三〇人
一八九九年	三、三九〇人
一九〇〇年	一二、六二六人
一九〇一年	四、九〇八人
一九〇二年	五、三二五人
一九〇三年	六、九九〇人
一九〇四年	七、七七一人
一九〇五年	四、三一九人
一九〇六年	五、一七八人
一九〇七年	九、九四八人（ハワイ經由のものを除く）

以上は合衆國大陸の日本人入國の數である。その大多數は無論移民であつて、またその大多數は加州に集まつたものである。一九〇七年の『紳士協約』の結果日本人の入國者は稍や減少したが合衆國國勢調査によると一九一〇年における在加州日本人總數は四萬一千三百五十六人であつた。この時から十六年の間に日本人の數はどれだけ增加したか、その精確の數字をうることとは不可能である。合衆國一九二〇年の國勢調査に從へばそは七萬〇百九十六人と計算されてゐるが、加州育蒙 (Boad of Control) の調査に從へばその數は一九一九年の終りにおいて八萬七千二百九十七人である。また排日家の擧げてゐるところによれば例へばマクラッチに從へば一九二〇年において在加州日本人は十萬九千人であり、ロッスの計算に從へば九萬六千である。それに對し日本人側の調査によると在桑港の日本人會が一九二〇年一月その宣傳用の小冊子 (Statistics Relative to Japanese Immigration and the Japanese in California) において述べてゐるところによれば加州日本人數は僅に六萬八千九百八十二人である。しかしまた在桑港日本人會が一九二一年に作製した人口表によると北部及び中部加州の日本人口は四萬三千六百二十二人であり、またロス・アンゼルスなる南部加州日本人會が一九一九年に調査したところによると南加州在住日本人總數は三萬〇五百二十八人であるから、この二つを合せると七萬四千百五十人となつてゐる。また日本人によつて組織されてゐる桑港の中央農會の發表 (Facts in the Case) してゐると

ころによれば、在加州日本人口は七萬八千六百二十八人となつてゐる。かくのごとくに日本人の調査したものにも米人側の調査したところにも、何れにもそれ〴〵大なる隔りがあるから、何れの統計を信ずべきかに迷はざるを得ないのであるが、こゝにいひえられることは排日派の米人が事實をあるがまゝよりも誇張せんとしつゝあること、日本人側が事實をあるがまゝよりも隱蔽せんとしつゝあるといふことである。合衆國のセンサスは一見して最も權威あるものと考へられないことはないのであるが、それには少くとも密入國者が計算されてゐないし、そして密入國者の數は一萬内外或は一萬五千と推定されてゐるようであるから、公平な立場にゐる日本人は、在加州日本人の數は大體において八萬若しくは八萬五千内外であらうと考へてゐるようである。試みにそれを八萬と假定すれば過去十年間に日本人の數は加州において約二倍となり、約四萬を増加したこととなるのである。そして加州における日本人の『コロニイ』の住民は過去十年の間に四萬餘から八萬人に増加したのである。この人口の急激な増加といふことが加州における日本人排斥の一理由となつてゐるのであつて、イムマンもフキーランも、マクリッチイの七ケ條のうちにも、加州知事ステブンスの陳述のうちにも、みなこの人口問題が含まれてゐる。或はこの人口問題が彼等の排日の主要な理由となつてゐる。マクラッチイのいつてゐるところによれば、米國における日本人の數は、來るべき四十年間に二百萬人となり、八十年間に一千萬人となり、百四十年間に一億人となるに至るであらうと。彼れの計算はもとより誇張に失してゐる。彼れの計算の基礎にはもとより大なる誤謬がある。が在留日本人の人口が『紳士協約』のもとにおいて如何にして白人の恐怖を導くまでに増加するに至つたか。この人口増加の理由を研究することは米國における日本の『コロニイ』の歴史及文化を研究する所以でもあり、また同時に排日の原因が那邊に存在するかを知るうへについての大なる暗示でもある。

四、『コロニイ』膨脹の原因――『密入國者』の群

私は、この米國における日本の『コロニイ』の膨脹を研究するうへにおいて、日本人にとつて都合悪しき、そしてそれが排日の重要な原因になりつゝある、二、三の不愉快なる事實を擧げなくてはならぬ。その一つは『密入國者（スマツグラア）』の問題である。私はシヤトルにおいても、ポオトランドにおいても、この加州に入つてからも、否、私がまだ太平洋を航海しつゝあつた時の、多くの友からも、日本人の密入國者の噂さについて樣々の事實

を聞かされた。彼等はもとよりこの國への旅券をもつてはゐない。彼等はもとより『紳士協約』によつてこの國への入國を禁んぜられてゐる人々である。その人たちがどうしてこの國へ入つてくるか。それは主としてメキシコ境から國境破りの方法によつてである。メキシコ境は東西百八十哩の長さに亘る。この間國境の防備は警官により、更に兵士によつて維持されてゐるにしても、全長百八十哩の間に、密入の道が自ら殘されてゐることは少しも不思議なことではない。この間にあつて、密入國者の採むところの道は四つに分れてゐる。第一がイムペリアル・バレイである。第二の道はサン・デイゴである。第三の道はテキサスである。第四の道はコロウドルである。主としてこれ等の四方面から日本人が米國への密入國をするわけであるが、そのうちイムペリアル・ヴアレイとサン・ジイゴとは最も多く密入國者の利用するところとなつてゐる。メキシコ境からイムペリアル・ヴアレイへの道は、茫々たる砂漠の地であつて、人々はこゝを『死の谷』（デス・ヴアレイ）とも『地獄の門』（ゲート・オブ・ヘル）とも名づけてゐる。この『死の谷』『地獄の門』を越ゆるためには、一週間の長さに亘つての熱砂上の旅行を續けなければならないが、その間に、國境警備の騎兵隊が東西に馬を走らせ、晝夜間斷なく嚴重な警戒をなしつゝある。そして苟くも密入國者の影さへ見れば直に銃殺してしまふのである。不幸なる日本人、この國を憧れてくる不幸なる日本人の如何に多くが『密入國者』（スマツグラア）といふの汚名を負ひつゝこの無慈悲なる銃彈に倒れたことであらう！ 晝は砂に伏し、夜は警備を偸んで、幸ひにして騎兵隊の銃殺から免れたものも、食物は盡き、水に渇し、この邊一帶に出現する蜃氣樓に欺かれつつ、饑渇と疲勞とのために熱砂のうちに行き仆れとなるものも少くないといふではないか！ またサン・ディゴからの密入國は主として支那人または伊太利人の漁夫の手によつて行はれるのであるが、これ等の漁夫は魚を漁るべくして海に出で、そして密にメキシコ海岸に赴いてそこに米國の土地を『パラダイス』として憧憬しつゝある、そして法律上入國することの許されてゐない日本人の多くを、魚として舟に積み込んでサン・ディゴへと歸つてくるのである。それが幸にして官憲の目を偸むで米國の土を踏むことができた時に、これ等の支那人と伊太利とは『別の大きな魚』(another big fish) がとれたといつて成効の祝杯を擧げる。密入國者祭り、『他の大きな魚』――それは私たちの同胞である―― それに二百弗の成功報酬を與へるのである。こうした危険、こうした耻辱を忍びつゝ、私たちの同胞が、この國、カリフオルアの『パラダイス』に憧れて、年々に流れ入つてきた人の數が、既に一萬内外または一萬五千人の

多きに達してゐるといはれてゐるのである。加州官憲はいふ南加州における日本男子の大部分は密入國者であると。米國における日本コロニイの人口の可成りに多くの部分はかくして『紳士協約』の破壊者であることを知るのである。私は敢ていふ、在米日本人の十パアセント若しくは二十パアセント近くがこの『紳士協約』の破壊者であるといふことを。そして私のいふことは排日論者のいひつゝあることゝである。またそして同時に親日論者または日本人側の厳重に匿そうとしつゝ事實である。しかし私はいふであらう、私たちの爭ひは公明正大であらなくてはならぬ。誇張と隱匿とこそ實に一切の眞實なる諒解と親善との妨害者であるといふことを。そしてまた私は附け加へていふであらう、こうした密入國者、――こうした汚名を担ひ、こうした危険を冒し、或は生命を賭してまで、遠く親しき故國と故國の友とを殘して、この國に憧れ、この國に來り、恐怖と自責とを感じつゝ、田園に鍬をとつて耕し、山に斧をもつて働きつゝある、不幸なる幾多の同胞と、そして『死の谷』『地獄の門』に生命を失つた幾多の不幸なる同胞の亡靈に向つて、私はその罪を問ひ、その人を責めるほどの、冷酷な心の持主ではないといふことを。私のいはんとすることはたゞ事實である。米國にける日本人の『コロニイ』が如何にして膨脹したかについての事實そのものについての説明であるに過ぎないのである。

五、『コロニイ』膨脹の原因――『寫眞花嫁』

『不思議なる東洋の發明、寫眞女嫁(ピクチュア・ブライド)の制度をとほして、日本人は彼れの人種をこの國に植え、そして紳士協約を破壊しつゝある』と。こうした書き出しのもとに、桑港におけるハースト系の新聞として、また排日新聞として知られてゐる『エキサミナア』は『寫眞花嫁(ピクチュア・ブライド)』について次のように書きたてた。『日本人の男はこゝに單獨でくる、そして商人としてまたは農夫としての足場をつくる。彼れは彼れの妻をつれてくるだけの勢と危險とを求めない。彼は助けが必要となるや、直ちに日本から『花嫁』を呼ぶ。彼れは彼れの花嫁を寫眞によつて承諾する。そして小額の金で彼女を彼女の親から買ひとり、かくして彼女、花嫁は彼女の取引については何の發言權もなくして船に乘せられるのである。カリフォルニヤにおいては、彼女は曙からして夜半に至るまで何の報いらるゝことなき彼女の良夫の奴隷となつてゐる。そしてその良夫のために殆んど毎年のように兒をもうける。日本の法律と習慣とに從つて、彼女は何の權利をもつてはゐない。……彼女の青春味が衰へた時に、彼女の良夫は簡單に彼女を離別し、そしてカリフォルニアの野において艱難な仕事のた

の婦人等圓都を求めつゝある憐の日本人に贈りつけるのである。……節約なこの良夫は櫻花の國から新らしい寫眞花嫁を迎えることができる。そして彼女の援助のもとにカリフオルニアを殖民化することの勞働を續けてゆくのである』と。エキザミナアはまたこの日本人の寫眞花嫁について次のように書いた。

『寫眞花嫁の制度は十年以前から知られてゐる。十萬以上の寫眞花嫁がこの國に入つてきた。……日本移民が彼れの花嫁を求める方法はよく日本文明の特質を明らかにしてゐる。彼れの米國における事業が店舗を守り、料理をなし、彼れの必要に使役するために、援助者を必要とするまでに發展した時に、彼れは日本における彼れの親戚または友人に宛てゝ、若い美しい、そして仕事の出來る妻が入用だといつて手紙を書く、また彼れは職業的な結婚媒介者、所謂ナコウドに宛てゝ手紙を書く。ナコウドはカリフオルニアに宛てゝ相當な娘の數葉の寫眞を送つてくる。これ等の寫眞のうちから日本移民は彼れの花嫁を撰み、そして日本に向つて彼れの撰擇した娘を告げてやる。日本からの次の手紙で彼れは立派に結婚のできたことを告げられる。……ナコウドは娘の家を訪ふ、娘はナコウドの家に連れてこられる、そして床の上に坐わることを許される。そこで彼女の兩親が別れて歸ると戸が閉められる。それで彼女は結婚したのである！それ以上の儀式とては殆んどない、……若い花嫁は横濱へ送られる。そしてそこから船の下等室に、他の多くの寫眞花嫁とともに載せられる。彼女は太平洋を越えて、たゞ一枚の彼女の良夫の寫眞を頼りとして、嫁入り道具を携へて未知の國へと航海してゆくのである。彼女等の多くは桑港に、やがて未知の良夫のために奴隷となるべき殘酷なる運命を知ることもなくして、幸福な微笑をたゝえつゝ、到着する。ミスタア・チヤツプはこの寫眞花嫁の群を見廻わしつゝ、寫眞によつて、彼れの花嫁を探し當てる。そして東洋流な承諾の意思を表示して、一揃ものアメリカ着物を與へる。謙抑な花嫁はこうした不思議な着物を着るために大骨折りをして後に、彼女の主人に從つてちよこ〳〵と歩いてゆく。……この花嫁をうるための費用は大體二百弗である。そのうちナコウドが百弗を懷中にし、旅行に六十五弗を費して、花嫁に與へられるものは僅に十五弗に過ぎない。……良夫となるべき人が特別に老年でありまたは醜い場合には、寫眞を修飾するから、若い花嫁は喜々としてアメリカに向つてくる。……彼等の離婚は結婚の場合と同樣に至つて簡單である。良夫が花嫁のために拂つた金を失ふまひとする時には、彼れは彼女をこの國における日本人の他の農民に賣りつける。その價は三十弗乃至五十弗である。この農民は、かくして逃亡するこ

とのできない召使ひをうるのである。何となればこの召使ひは着物もなく、金もなく、友もないからである。……日本の家庭生活の凡てはアメリカのそれと好對照のように見える。……日本に行はれてゐる宗教、シントウ主義に從へば、男子に對する婦人の從屬は基礎的の規律である。この大原則に從へば、女は結婚前は父に從はねばならぬ。結婚したならば良夫に從ひ、寡婦となればその子に從はねばならぬと』。以上は排日新聞『桑港エキザミナア』が一頁に亙つての記述のうちからの拔萃である。この記事を讀まれたもの――日本人は、もとより『エキザミナア』の記事のうちに誇張と誤謬とを見出すのに相違ないであらう。しかしまた私たちは、日本の習慣について、日本婦人の地位について理解しつゝある私たちは、排日新聞のこの不愉快なる記事が、決して私たちの實際の生活と大なる隔りのないものであるといふことを承認しないではゐられないであらう。日本の婦人は、日本において奴隷であるごとくに、この國においても奴隷である。否なこの國においては一層甚だしい程度においての奴隷である。友もなく、金もなく、言葉も通ぜず、西も東もたゞ未知の土地と未地の人とによつてのみ圍繞されてゐる在留婦人の多くは、彼女の良夫に對して從順にして無報酬の勞働者であり、下女であり、絶對服從を强へらるゝ子孫を製造する奴隷である。日本人會の統計に從へば、南加州における二十歳以上の婦人の數は六千五百〇七人であるが、このうち宗教家が三人、敎師が九人、活動役者が二人、學生が十四人、産婆が二十三人、保母が九人であつて、その他の五千九百餘人といふものは人妻であり、またその大多數は謂ふところの『ピクチュア・ブライト』であつて、一葉の信賴しがたき寫眞を命の綱としてこの國に渡つてきた、不幸な女たちである。その不幸な女たちは、加州官憲の調査によると桑港に到着したものだけで次のような數字を示してゐる。

一九一一年七月――一九一二年六月	八七九人
一九一二年七月――一九一三年六月	六二五
一九一三年七月――一九一四年六月	七六八
一九一四年七月――一九一五年六月	八二三
一九一五年七月――一九一六年六月	四八六
一九一六年七月――一九一七年六月	五〇四
一九一七年七月――一九一八年六月	五二二
一九一八年七月――一九一九年六月	六六八
一九一九年七月――一九一九年十二月	三七九
一九二〇年一月――一九二〇年二月末日	九五
合計	五、七四九

即ち一九一一年六月一九二〇年二月までの間に、桑港上陸だけの『ピクチュア・ブライド』の數は實に五千七百四十九人の多き

に達してゐる。恐らく加州全體に在住する『ピタチユア・ブライト』の總數はこれよりも遙に多數に上るに相違ないのである。

六、「コロニイ」膨脹の原因——日本人の生産率

ピクチユア・ブライドの增加とともに米國生れの日本人兒童が增加してきたことは勿論である。加州官憲の調査（State Boad of California, California and the Oriental. 1920）によれば加州における白人並に日本人の出產數は次のごとくである。

	白人	日本人
一八一〇年	三〇、八九三人	七一九人
一八一一年	三三、二四五	九九五
一八一二年	三七、一九四	一、四六五
一八一三年	四〇、八六四	二、二一五
一八一四年	四二、二八一	二、八七四
一八一五年	四三、八七四	三、三四二
一八一六年	四六、二七二	三、七二一
一八一七年	四七、三一三	四、一〇八
一八一八年	五〇、九八六	四、二一八
一八一九年	五〇、八九八	四、三七八
合計	四二三、八二〇	二八、〇三七

これを加州における全出產數（白人、日本人、支那人、黑人、インデイアン）に對する百分比例によつて見るに、次のやうな統計を示してゐるのである。

	白人	日本人
一九一〇年	九六、一三	二、二四
一九一一年	九五、四五	二、八六
一九一二年	九四、五七	三、七三
一九一三年	九三、一九	五、〇五
一九一四年	九一、八九	六、二五
一九一五年	九一、二六	六、九五
一九一六年	九一、三八	七、三五
一九一七年	九〇、五九	七、八七
一九一八年	九一、一七	七、五四
一九一九年	九〇、八六	七、八二

即ち白人の出產數加州における全出產數に對して、一九一〇年に九十六パーセント以上を占めてゐたものが漸次遞下して一九一九年には九十パーセント餘となつてゐるのであるが、日本人の出產率はそれと反對に一九一〇年の二、二四から一九一九年の七、八二に增加してゐるのを見る。これを餘人に對する割合からいふと白人は加州における一九一九年出產率は人口約七十人に對し一人であり、日本人は人口約二十人について一人の出產者があるわけである。また一九一九年における結婚せる日本婦人の數は加州において一萬五千二百十一人であるから、結婚

せる日本婦人三人半弱について一人の生產者があるわけであつて白人の出產率に對して約倍數に達してゐるのである（加州官憲の調査に從へば日本人の出產率は白人のそれに對して約三倍となつてゐるが、それには計算の基礎に大なる欺僞がある。何となれば日本人の場合は二十歲以上の婦人についても、白人の場合は十五歲以上二十歲までの、事實上出產することの稀れなる年齡の婦人を含めてゐるからである。）このまゝにして進むならば加州における日本人が近き將來において異常なる數に達するであらうといふことは何人にも易やすく想像しえられるところである。排日紙『ロス・アンゼルス・エキザミナア』が誇張して計算してゐるところによれば『この形勢が次の十年間維持せらるればこれ等の日本『コロニイ』の出產數は一九二九年には十五萬人となるであらうし、これに對して白人は僅に四萬人の兒童を出產するに過ぎないであらう、從つて一九四九年においては日本人の數は白人を凌ぎ、日本人はこの國、カリフオルアを統治するに至るであらうと。こうした計算は、勿論計算ではなくして煽動である。排日的感情をそゝるための何等の、根據なき報道であることは勿論である。しかし兎も角も以上に擧げてきた三つの理由——密入國、ピクチュア・ブライド、そしてこの出產率の增加といふことは相助けて加州における『日本コロニイ』膨脹の重大要素をなしてきたものであることは明らかであつて主としてこれ等の原因のために過去十年においてこの『日本コロニイ』は二倍の膨脹を遂げた。この勢をもつてすれば次の十年間には『日本コロニイ』の人口は十六萬となり、その次の十年間には三十二萬となり、一九五〇年には六十四萬となり、一九六〇年には百二十八萬となり、一九七〇年には二百五十六萬となり、一九七〇年には六百十二萬、一九八〇年には千二百二十四萬、一九九〇年には二千四百四十八萬紀元二〇〇〇年には四千八百九十六萬人となるべきであつて、排日論者が排日煽動に利用するには好個の材料となりうるかも知れない。

七、日本「コロニイ」の經濟力

この人口の增加に伴つて加州における日本人の經濟力が著しく膨脹したこともまた事實である。一九一九年末においては、日本人は七萬四千七百六十九英町の土地を所有し且つ借地並に收穫部合分けの契約によつて三十八萬三千二百八十七英町の土地を支配してゐるのであつて、この二つを合せると日本人によつて事實上支配されてゐる土地の總面積は四十五萬八千〇五十六英町となるわけである。これを十年前に比べると、加州官憲の調査に從へば十年前における日本人の耕作面積は八萬三千二百五十三英町であつたから四百十二パアセントの膨脹であり、日

本農會の計算によると一九〇九年に日本人は既に十九萬五千九百四十八英加を耕作してゐたから増加率は一百十七パアセントである。また農産物の點からいふと、一九一九年度において、日本人の耕作權のもとに收穫された農産物總額は六千七百十四萬五千弗で過去十年間において異常な膨脹を遂げたといふことは明らかである。そして日本人が全加州の農業において如何なる地位を占めてゐるかといふのに、全加州の總面積九千九百六十一萬七千二百八十英加のうち耕作に適するもの二千八百萬英加であるから、日本人は農耕に適する加州田園の一、六パアセントに耕作權をもつてゐるし、また農産物からいふと一九一九年度における加州農産額は五億〇七百萬弗であるから日本人の耕作權のもとに產出されるものはそれの十三パアセントを占めてゐるわけである。そして特に注意を要することは、また同時に排日運動家の神經を刺激しつゝあることは、それ等日本人によつて支配されてゐる土地がある方面に集中され、また特種の農業が日本人によつて支配されてゐるといふ點である。先づ日本人が如何なる地方に集中しつゝあるかといふに、日本人の所有しまたは耕作してゐる土地は加州内の三十六郡に亘つてゐるが、就中加州における肥沃の地として知られてゐるサクラメント平原、サン・ヨオクイン谿間、フレスノ、ロス・アンゼルス、オレンヂ、コルサ、イムペリアル・ヴアレイ等に集中されてゐるのであつて、これ等の地方においては白人に對する日本人の土地所有及耕作の割合は次のごとき數字を示してゐる。

	白人及東洋人による耕作總面積 英加	日本人の耕作權に屬する面積 英加
サクラメント	八〇、〇〇〇	四七、六四六
サン・ヨオクイン	一三〇、〇〇〇	六九、六八〇
コルサ	七〇、〇〇〇	二二、四三五
フレスノ	五七、五〇〇	一九、九一〇
ロス・アンゼルス	二四七、〇〇〇	四四、五二七
イムペリアル	四二五、〇〇〇	三四、二七三
オレンヂ	六五、〇〇〇	一六、一七一

即ちこれ等加州における農業の中心地においては日本人はその農耕地の半ば以上に耕作權をもつて事實上日本人の支配に屬し著しく利用するところとなつてゐる地方が少くないのを知るであらう。また農産物の種類別からいふと一九一九年度においては次のごとき數字を示してゐる。

種類	產額（弗）
ベリー	三、六二九、四〇〇
セリー	一、一〇五、四〇〇
アスパラガス	一、八〇四、八六〇
種子、苗	三、三六九、四〇〇
トマト	一、〇六八、六六〇

砂糖大根	四、八〇〇、三六〇
甜瓜	二、八二二、一五〇
靑物	一〇、九九七、〇〇〇
ポテト	五、二九八、九〇〇
ホップ	七四三、四〇〇
葡萄	八、一三六、九〇〇
豆	二、五二五、〇〇〇
果實	八、四五七、四〇〇
枯草穀類	二、六一一、一〇〇
米	三、六〇〇、〇〇〇
棉花	一、九五〇、〇〇〇
雜	七六六、七五〇
合計	六七、一四五、七三〇

これ等のうちトマトだけについていふとサクラメント地方において日本人は全産額の八十パアセンを、トルロック地方では七十九パアセントを、サンタ・クララ地方では六十パアセントを、またアスパラガスからいふとその產地としてのサクラメントにおいて日本人は全產額の六十一パアセントを、菠薐（スピナーチ）はサクラメントにおいて七十八パアセント、キングスカウンテイで九十パアセント、サンタ・クララで八十二パアセント、モデスト地方で百パアセントを、其他の野菜はサクラメントで九十パアセント、サンタ・クラで百パアセントを占めてゐる。私がロスアンゼルス地方で調査したところによるとこの地方における豐かなる野菜產額の大部分は人の手によつて造りあげられてゐるし、またフレスノ地方における葡萄の採培において日本人は既に重要な地位を占めてゐる。更に漁業について見るに、加州における漁業勞働者總數（一九一九年十二月）八千二百四十二人のうち日本人は一千七百五十一人であるから全數の二割以上を占めてゐるわけである。そしてそはサン・ピードルだけで七百二十四人、サン・ヂイゴで九十六人に達する。（一九一九年南加日本人會調査）かういふわけで加州における日本人——『日本コロニイ』はその人口の急激な增加とともに經濟的にも著るしい進步を遂げて今日では加州において經濟上的に重要な地位を占めてゐることは明らかである。最近における加州排日運動の直接の刺激となつたものが、これ等の二點、人口問題と經濟的關係であることは容易に觀取することのできるところであつて私たちはこの儼然たる事實を拒むことはできないのである。また拒むことを必要としないのである。たゞ私たちにとつて問題であることはかくのごとき事實が何故に排日の理由となるかといふの點である。然り、日本人の增加、そして日本人の經濟的發展が何故に加州における排日運動の理由となるかといふの點である。

八、排日原因の研究の一

先づ人口問題の方面から見るに日本人の人口が最近において著しく增加したことは事實であるし、またこの勢力をもつて增加してゆくとすれば加州に於ける日本人が異常の數に達し、やがて布哇におけると同じく日本人が白人に對して數的優越を示すことがないともいへないのであるが、しかし日本人人口增加の理由は前にも述べたとほり、第一に密入國者、第二にピクチユア・ブライド、第三に出產を主たるものとするのであつて、このうちピクチュア・ブライドの渡米は既に一九二〇年二月日本政府自らこれを禁止した。密入國者は、加州官憲がその報告書(California and the Orientals)のうちで述べてゐるとほり、これを警察または軍隊の力によつて完全に防止することは勿論困難であるが、日本政府並に在加州日本人會の力と協力したならばこれを防止することも不可能とはいへないし、また密入國者のあるといふの理由をもつて旅券による正當の入國者としての日本人に對して排斥を行ふの理由はない筈である。また日本人の出產率が白人に倍してゐるにしても、これも最近十年間ピクチュア・ブライドその他の方法によつてこの國に入國した日本人は出產率の最も高かかるべき年齡の婦人であるから、今後五年たち、十年たつうちに日本人の出產率が急激に減少すべきであることは自明の數である。だからこの出產率からいつても將來加州における日本人の人口問題は何等白人の脅威となるべき理由はない。却つてピクチュア・ブライドの禁止のために日本コロニイの人口問題は加州白人のためにでなくして加州日本人のために恐怖すべき結果を導くに至るであらうと思はれる。といふのは北部及中部加州だけについて見るに日本人總數四萬三千六百二十二人のうち男子二萬八千七百三十三人に對し女子は一萬四千七百八十九人卽ち半數であり、而かもそれ等婦人のうち大多數は既婚者であつて未婚の成年女子は僅に五百八十二人に過ぎない。それに對し成年男子にして未婚者は六千三百三十八人の多きに達してゐるから近き將來において日本人の結婚數は著しく減少するであらうと思はれる(勿論それ等男子は歸國のうへ結婚して再び渡米することができるがそれには可成りの費用を要するし、且つ密入國者は再渡米ができないから、ピクチュア・ブライドの禁止は事實上在加州日本人の結婚數を著しく減少するに相違ない)以上のようなわけで冷靜に考へて見れば在加州日本人の人口問題は白人にとつて何等恐怖すべき根據があるのではないのである。況んやその總數といつても加州總人口三百四十二萬六千五百三十六人のうち日本人は僅々八萬內外であり、合衆國全體からいつても一億二千萬の人口中日本人は布哇をも合せて二十五、六萬人にしか過ぎないのである。

これを猶逸人の一千五百萬。アイルランド人の五百萬、ボヘミア人の七十萬波蘭人の三百五十萬、マヂアールの五十萬、猶太人の二百五十萬、伊太利人の一千二百萬に比べたならば、日本人の人口は人口問題としては毫も問題とするに足るものはないではないか。また日本人はアメリカ大陸においては主として加州に集中してゐるのであるが、この人口集中の點からいつても伊太利人は紐育市に六十萬以上も集中してゐるし、マヂアールは主として、紐育ペンシルベニア、オハイオ、ニュー・ヂヤーシイに、波蘭人はシカゴに十萬、デトロイ、バフアロウ、ミルウオーキーに各五萬、ボヘミア人はシカゴに十六萬居るし、また一八九〇年にはボヘミア人はウキスコンシのある一地において人口の七分の三を占めたことがある。また猶太人は紐育州において百萬の人口をもつてゐるのである(A Mc Clure, Leadership of the New America Race and Religions.) だから日本人が加州に集中してゐるにしてもそれだけをもつて日本排斥の運動を起すに足るべき理由となることはできない筈である。また日本人の經濟力からいつても、日本人が加州における農業上における日本人の發展とは、加州における未墾の地において、日本人の勞働がよくこれを開拓し、耕作し、そして加州それ自身にとつてもこれを排斥すべき理由はないのである。それにもかゝわらず加州にむける日本人排斥が殆んど毎年のごとく問題とされ、そして益々激烈となりつゝあるは如何なる理由によるであらうか、またこれ等人口問題及び經濟問題が何故に排日の理由として加州人に訴へることができるであらうか。

九、排日原因研究の二——排日煽動及び煽動家

そこで、加州における排日運動は主としてためにするところある排日政治家または新聞紙またはその他の勢力の煽動の結果であると觀測してゐるものが少くない。私は加州へきてからもこうした考の持主が、特に日本人のうちに少くないのを知つた。果して然るか、先づ如何なる人々または如何なる種類の團體が排日の指導的勢力であるかを見よう。嘗つて排日運動家としては三十年前に醫師オードンネルなるものがあつた。その後には勞働聯盟のトヴエトモオア、桑港市長シユミッチがあつた。またその後にドルフユーがあつたサンフオドなるものもあつた。そして今日においては政治家としてはフキーラン、イムマン、チエムバア、スデヴンスダンカン、グリーン等の一派がある。學者としてはバロウスがある、新聞記者としてはマクラツ

□所同盟並にアメリカン・レジョンの二つがある。そのうちステプンスは加州現任知事であり、今日では加州における代表的排日運動者の筆頭に擧げらるべき人であつて、彼れが國務卿コルビイに與へた排日の書簡（一九二〇年六月）は恐らく排日文獻として最も價値あるものの一つであらう。しかし彼れは決して最初からの排日論者ではなかつた。彼れは寧ろ大勢に追隨したものと見るべきであつた。彼れは嘗つて（一九二〇年一月）フキーランの排日運動を罵つて曰く、そはたゞ煽動政治家の野心のためであると。今日の排日の大勢を指導したものとしてはフキーラン、マクラッチ、バロウス、イムマン、チエムバアの諸君を擧ぐべきである。フキーランは民主黨に屬する合衆國現在の上院議員であり、また桑港の市長となつたこともあり、チーコー、サラトウガア附近に廣大な地所を所有する大地主であり、桑港においてもフキーラン・ドルディングと稱する巨然たる大建築の持主であつて彼れの資産は一千萬弗と稱せられてゐるのである。また彼れはハアバアト大學の卒業者でもあるが、政治家としては格別の手腕もなければ無論學問、見識の見るべきものはない、一個の百姓であるに過ぎないのである。たゞこの百姓議員は六十歳の今日に至るまで、既に二十年間の政治的生活を通じ終始一貫排日運動を續けてきたものであつて排日問題と彼れの名とは今や分離することのできないほどの關係となつた。彼れの選擧の標語に曰く、『カリフォルニアを白人のものとして存せしめよ』（Keep California white）と。イマンは辯護士が職業であり、現に加州上院議員であり、フキーランとは密接な關係があり、またその顧問辯護士であるが、政治家としての地位學望識見はフキーランよりも一層以下であつて、一介の田舍辯護士であり、そしてたゞ低調なる聽衆を煽動することの一種の技能があるといふ以外には何のとりえもない演說屋の一人である。チエムバアは現に加州監督長官であつて來るべき一九二二年の選擧には加州知事の候補者として立つであらうと噂されてゐる人であるがこれとてもフキーラン、イムマンの亞流であつて、彼等が排日意見として發表してゐるものを一瞥するに煽動と誇張と誤謬以外には殆んど何ものをも見出だすことはできないのである。この間にあつて注意を要するものはバロース及びマクラッチの二人である。マクラッチは『サクラメント・ビー』の主筆であり、ハロースは加州大學の總長である。バロウスは西伯利に大佐として出征したことがあり、その緣故から今日では加州におけるアメリカン・レジョン（在郷軍人會）の會長となつてゐる。彼れの排日運動は西伯利から歸つて後に始められた。マクラッチもまた嘗つて日本に遊び、支那に行つたことがあり、

そして歸來排日運動を始めたのであるが彼れが『サクラメント・ビー』によつて排日論を草し、また移民調査官の前に彼れの意見を吐露し、また彼れの排日宣傳の小冊子として汎く頒布したもののうちには讀むに足るもの——私たち日本人にとつても讀むに足るべきものが少くないのであつて恐らく排日運動とその理論的指導とは最も多く彼れに負ふてゐるといはなくてはならないであらう。就中彼れの手になつたものとしては『カルフオルニアの人種問題』(V. S. Mc Clatchy, California's Race Problem, 及び『亞細亞の獨逸』(Germany of Asia)の二書が最も代表的なものとして排日文獻のうへに重要な地位を占めてゐる。しかしバロウ、マクロッチをもつてしても、彼等の個人的勢力と信用と能力とがよく加州全體を風靡する力のないのも勿論のことである。それ等北部加州の人々のほかにフレスノには『レパブリカン』の持主としてのチエスタア・ロウエルがある。彼れはヂョンソン等とともにルウズベルト門下の進歩黨であつたが國際聯盟の問題についてヂョンソンと意見を異にし今はウヰルソン内閣に加はつてゐるし、嘗つてウヰルソンが國際聯盟の遊說のために加州に入つた時には彼れはその代表的歡迎者の一人であつた。またロス・アンゼルスにおいてはトレー[illegible]

てもと加州大審院の首席書記であり、宣教師であり、この地方における排亞細人同盟の會長である。排日團體としては加州東洋人排斥同盟(California Oriental Exclusion League)アメリカン・レヂョン(American Legion)の二つがある。前者はつて會長にはイムマン、實行委員長にはチエムバア、文書係として一九一九年九月六日サクラメントにおいて組織されたものであしてマクラッチがあり、その他加州勞働聯盟幹事シヤーレンバーク、加州十四郡保護協會々長バナアドなぞがその支持者である。アメリカン・レヂョンとは全米國に亙つての在鄕軍人會であつて非政治團體ではあるがその加州支部としてのアメリカン・レヂョンは排日運動の最も熱心なる一方の中心となつてゐるのである。次に排日煽動者として見るべきものは新聞紙であるが、先づ桑港について見るに『エキザミナア』を筆頭とし『クロニクル』『コオル』『ブレチン』『デーリー・ニュース』『ヂョオナル・オブ・コムマアス』『デーリー・コムマアシヤル・ニュース』などがあるが、このうち『エザミナア』はハースト系であり、『クロニクル』は共和黨の機關紙でなり、ヤングなるものを主筆としてゐる『コオル』はオイハミルトンなるものを主筆とし『グロニクル』は共和黨の機關ランなるものの所有するところ、『ブレチン』はフキーランから

の機關新聞である。このうち『デーリー・ニュース』は必ずしも排日新聞とは見られない。『デーリー・ニュース』が今日こうした態度をとつてゐるのは勞働聯盟の排日に對する態度を語つてゐるものである。『コオル』は寧ろ親日的の新聞紙であるがこの新聞がこうした態度を示してゐるのは財的に日本人と關係あるがためであると一般に推測されてゐるようである。また商業新聞は必ずしも排日新聞とは見られないが、桑港における最も有力なる新聞紙として且つ最も汎く讀まれてゐる『エキザミナア』『クロニクル』、『ブレチン』等みな排日新聞である。サクラメントにおいてはマクラッチ兄弟を主幹者とする『サクラメント・ビー』なる有力新聞があり、フレスノにおいては『レパブリカン』『フレスノ・ヘラルド』ともに排日新聞かであり、ロス・アンゼルスにおいては『エキザミナア』、『イブニング』、『ヘラルド』、『イヴニング・エキスプレス』みなともに排日新聞であり、勞働新聞としての『ロスアンゼルス・エコウ』はほゞ中立の立場をとり、資本家連の機關紙としての『ロスアンゼルス・タイムス』も比較的公平な態度をとつてゐる。こういふわけで加州における新聞紙の大部分は排日新聞であつて常に人心を煽動しつゝあるのであるが、それ等の新聞紙は、資本家新聞も、勞働新聞も若しくは有力新聞と稱せられるものまで何れも黄色新聞であつて、その掲ぐるところの論説といひ、雑報といひ日本の何れの田舍に行つて見ても容易に見ることのできないほどの粗惡低調なものをもつて滿たされてゐる。排日の煽動者と稱せられてゐるものは大體以上のようなものであつてこれ等の政治家、學者、新聞、團體等が堪えず排日を鼓吹してゐるのであるから、それが人心に影響を與へることは勿論であつて、加州排日の一理由としてこれ等の煽動の存在することは決して閑却さるることはできないのである。しかしかくのごとき煽動は果して眞に排日の根本的原因なるか否か。

十、排日原因の研究の三——何故の煽動

政治家は何故に排日運動に熱中するか。新聞紙は何故こ排日論に狂熱するか。加州の排日運動をもつて煽動の結果だと考へてゐた人たちは十一月二日の一般投票の終了とともに排日運動も下火となるのであらうと觀測してゐたようである。私は加州へきてからもこんな考の持主の少くなかつたことを知つた。彼等のあるものは曰く、加州の一般人民は排日運動には今や倦怠しきつたと。また非公式ながら日本政府との關係においてこの地に使つた或る日本人は十一月二日の選擧に排日議員フキーヲンの落選したのを見て、それは排日運動の不人氣の結果であると

まで公言したとのことである。しかし十一月二日──一九二〇年十一月二日は過ぎた。過ぎてから既に三ケ月に垂んとしてゐる。その間に排日運動は果して終熄したか。果して下火となるに至つたか。また加州人は排日運動に倦怠を感んじつゝあるであらうか。私は加州の北から南へ訪ふて見た。事態は正にその逆であつた。幸か不幸か、事態は正に日本人のために都合悪しく展開してゆきつゝある。日々の新聞紙はオレンヂ大の活字を用ゐて排日宣傳を續けつゝあるではないか。たゞの一日と雖も、少くとも私が加州の地を踏んでから、排日論が加州諸新聞のうへに現はれてゐない日とてはなかつたではないか。政治家とても同じことである。フキーランは十一月二日の一般投票に滿足することができないで、華盛頓において日米戰爭を說きつゝあるではないか。加州における群小政治家の徒は或は漁業問題を提げて、或は教科書問題に名を藉りて、先きを爭つて排日運動家としての名聲を高めようとしつゝあるのではないか。またチエムバアの提唱のもとに、全米に亘つての排日の一大キヤムペーンを起すために二十萬弗の支出が加州協會に要求されつゝあるではないか。私は繰返していふ、政治家は何故に煽動するか新聞紙は何故に誇張するか。桑港『エキザミナア』の主筆ハミルトン君一のスロウガンとなしつゝあるを見て、共和黨に告げて曰く、共和黨は愚かにもフキーランをしてこの最大の人氣掛を獨占せしめるに至つたと。然り、ハミルトンの一言は排日家の一切の心理を道破してあまりあるではないか。あるものはハーストがメキシコ境に廣大な地所を所有するために排日を煽動するのだとまでいふた。しかしハーストの利害關係が果してよくかくのごとき全加州に亘つての大運動を起すことができるであらうか。否、新聞紙は、排日記事を掲ぐることが、彼れの販賣政策上における最良の手段であるがために書きつゝあるのである。政治家はそれが一般人民の人氣に投ずるがために排日問題を揭げて立ちつゝあるのである。今や加州においては排日問題は政治家の最高の選擧スロウガンである。區々フキーランといふこと勿れ、イムマンといふこと勿れ、今や全加州の政治家、然り群小政治家の諸君は先きを爭つて排日運動の立役とならうとしつゝある。知事ステプンスは嘗つては排日家でなかつたと私はいふた。そのステプンスすらも、排日黨となるにあらざれば、彼れの地位を保つことができないほどに排日問題は一般の人氣に投じてゐるのである。政治家と新聞紙とはたゞこの一般の、抑ゆべからざる民心の傾向に乘じ、若しくは指導し、若しくは

とよの排日問題とは何の關係もない。彼れの商手もまた排日論であつたからである。加州政界の消息に通ずるものはいふ。フキーランは排日家であつたがために兎も角もあれだけの投票が集まつたのであると。然り、この一個凡庸の田舍政治家をして名を成さしめたるものは實に排日問題それ自身であり、また排日問題の加州における人氣それ自身でなくてはならぬ。

十一、排日原因の研究の三——社會的から政治的へ

加州においても、排日反對者がないではない。例へば昨年の一般投票の際組織された米國正義委員(The American Committee of Justice)の一派の人たちはそれであつて、アイリッシ大佐、ジヨルダン博士、アレキサンザ等の、學者宗教家實業家の五十餘名の諸君はこれに屬してゐる。またスタンフオード大學では名譽總長ジヨルダン博士のほかにも現在總長ライマンを始めとしウヰルバー博士等十六名の教授の諸君は特に日本人のために土地法反對の宣傳に署名してゐるのであつて、加州において現に然るべき地位を占めてゐるもののうち日本人側に好意を寄せられるものも少くはないのである。しかしそは一部の階級に屬するものであつて、加州の心ではない。加州の心は一九二〇年十一月二日の投票に表はれてゐたとほり、日本人排斥に向つて働いてきたのである。また動きつゝあるのである。私は加州排日が決して一部政治家や新聞紙の煽動の結果でないといふことを述べたが、私はもつと進んでいはなくてはならない。政治家はたゞに排日の指導力でなかつたのみではなしに、そは寧ろ一般民心に指導されたものであるといふことを、私はこの論文の最初において、私が加州にきて第一に印象されたことは、加州において日本人が到るところに『コロニイ』をつくりつゝあるといふことである、といふた。この點はまた排日論者が等しく指摘しつゝあるところの事實であつて、かくのごとくに、日本人が到るところに、日本の『コロニイ』をつくりつゝあることは、そして米國內において、國家のうちの國家を建設しつゝあるといふことは、明らかに排日論者に大なる根據を與へてゐるものであるといふことを、私は匿くすことはできないのである。獨り排日論者ばかりではない、米國前大統領タフトは曰く、日本人は一定限の地域に彼等を集中せした。その結果は日本人の社會的家庭的及び宗敎的習慣を維持する共同團體を建設するに至つた。これ實にやがて偏見と差別との源泉であると(Current Opinion. Jan, 1921)しかしこゝに私たちが、そして排日論者の考へなくてはならないことは、この日本の『コロニイ』の建設が、獨り日本人の責任ばかりではないといふことである。私

は北はシャトルにおいても、また加州の到るところにおいても、日本人は必ず日本町を建設しつゝあることの事實を匿さないであらう。しかしそはたゞ日本人自らがこれを撰むだものであるか否か。例へばフレスノにおいては、日本人町は鐵道線路の東側に集中されており、白人の町は凡て鐵路線路の西方に集中されており、この一本の鐵道線路は、嚴肅なる白人と黄人との鐵柵をなしてゐるのであるが、そは凡ての日本人が自ら求めたところであるといふことができようか、また何れにおいても例へば、フレスノ、ロス・アンゼルス、シャトルにおいても、日本人町は必ず支那人町と相接し、または相混じてゐるのであるが、そは果して日本人または支那人が自らこれを好むだのであるか。勿論日本人の多くはこれを求めた。そは主として日本人の責任として見るべきであつた。しかし日本人が加州に入つてきてから既に數十年、果して幾人の白人が、彼れの住宅の隣りに、日本人の來り住むことを喜んだが。果して幾人の米國人が、彼れの事務所の隣りに日本人のきたり投ずることを喜び迎えたか。既に久しい間、フレスノにおいては、日本人は白人街においては一の事務所をもつことを許されてはゐなかつた。近頃の不景氣とともに、白人街には、貸家、貸室の張札は、往來の皆………

も、その一室と雖も、日本人に貸せようとするものはない。彼れは斷乎として彼れの空室が日本人によつて滿たされることを拒絶する。縦令個人的には日本人に好意をもつてゐるものであつても、少くともフレスノにおいては、日本人にその一室だも貸與へることを拒絶するのである。何故に然るか。そはたゞ日本人なるがためである、日本人は白人の門に入るべからずとは彼等の相情的の習慣性をなしてゐるのである。勿論日本人と白人との間に商賣上の取引はあるであらう。日本人と白人との間に勞働上の契約は成立するであらう。しかし社交的關係においては、白人と日本人との間に、常に嚴重なる『鐵道線路』が横はつてゐるのである。言葉を換えていへば社會的に日本人は既に久しく白人から排斥されてきた。如何にも加州知事ステプレス君が國務卿への書簡のうちで述べてゐるとほり加州における白人が、私たち日本人に對して何等暴行にもいでたことのなかつたといふことは、大體において、然り、大體においてそれを事實として承認することができよう。日本人は、一般の加州人から、その日常の生活において、その日常の人間としての交際のうへにおいて、攻撃的排斥はこれをうけたことがなかつたかも知れない。少くともそは重大な程度においてではなかつた

排日運動のあると否とに拘かわらず、常に消極的に排斥をうけてきたのであつた。彼れとそれとの交りは、財と財との交りであり、利害と利害との交錯ではあつたにしても、心と心、人間と人間との交りではなかつたのであつた。この事實、この沈默にして、そして最も雄辯に事實を閑却しては私たちは排日運動の一端をも理解することができないであらう。政治的排日運動とはたゞこの沈默にして雄辯なる事實のうへに建設されたのであつた。然り、政府的排日は、社會的排日の、單なる反影であつたに過ぎないのであつた。だから私はいふ加州における排日運動をもつて、單なる政治家の煽動であると考へることは大なる誤謬である。そは政治運動であるよりも、新聞記者の利害よりも、より深い根柢のうへに築かれたる力であつた。そは單なる日本人の人口問題でもない、また單なる經濟問題でもない。排日記者マクラッチ君は彼れの排日論の眞實なる精神を赤裸々に告げて曰く、『若しもわれ等の生産を支持しまたは增加するために、それ以上東洋勞働者が實際に必要だとするならば、われ等は寧ろ生産の減退を撰むべきである』と（Mc Catchy, California's Race Problem, p. 24）

十二、排日原因としての勞働問題

そこで排日問題は勞働問題であるといふ見解が行はれたことを、私は思ひ出さゞるをえないものである。カリフオルニア勞働聯盟のセクレタリイとしてのシャーレンベルグは『日本人に對する組織的勞働者の態度』と題する一論文のうちに述べて曰く、七十年間、カリフオルニアの勞働者は東洋勞働者の禁止の立法のために努力してきた。ある種の國際主義者または各種方面の有識者は排日政策の賢明を疑つたのであるが、支那人または日本人と、その職業が直接の交渉をもつてゐた男女は、みな何れも同一の意見を抱いてゐた。一八五〇年代の鑛山勞働場においても、産業の發展してからの工場と仕事場においても、または土壤の耕作者としても、私たちは屢々激烈なる苦情を見出した。』と。一八九二年といへば、日本人のこの國における入國者の數は恐らくは三千人内外に過ぎなかつたであらうが、この年においてさへ、加州における米國勞働聯盟の諸君は既に排日の決議をなしてゐるのである。即ち彼等は一八八八年の支那人排斥に滿足することなくして、更に支那人排斥の法律を日本人にも及ぼそうと企てたのである。そして一八〇七年の謂ふところの『紳士協約』において日本移民の入國が禁止せられるに至るまでは、組織的勞働者は實に加州における排日運動の指導的地位を占めてゐたのである。獨り加州においてだけではない、ワシントン州において、勞働新聞『ユニオン・レコオド』を主幹と

しつゝあるアウルトもまた日本人排斥運動の歴史を回顧して曰く、何年か以前米國の普通の人々は、日本人は半開劣等の國民であるからわれ／＼は彼等と雜居することを欲しない、といふ簡單な理由によつて日本人の入國に反對しておつた。當時製材業者または鐵道會社等によつて代表されてゐた米國西北實業家の一派はそれとは反對の意見をもつてゐた。卽ち彼等は日本人は何れの國民よりも低廉な賃銀で長時間の勞働に服し且つ勤勉な從順な勞働者であるがゆゑに——勞働組合を制することゝなるが故に——最も好ましい人民であるといつてゐたのである。勞働組合は資本家側のこの態度を見て日本人をもつて自分たちの地位の改善を妨げる一大危險物と見た。そして亞細亞移民禁止の一大運動を開始したのであつた」と。かういふわけで米國における排日運動は、少くとも一九〇七年の『紳士協約』の以前においては、實業家の反對において、そして勞働者、特に組織的勞働者の指導のもとに行はれたものであつた。この米國の勞働者、米國勞働聯盟の一分子としての加州または太平洋岸一帶の勞働團體は、勞働者の生活標準の維持といふことの理由から、日本人、——日本移民排斥の一大運動を起してゐたのであつた。だから一九〇七年以前における米國の排日運動は、少くつた。意識的勞働階級の、階級的勢力の一つであつた。一九〇七年の紳士協約の後においても、勞働問題としての性質は、尙ほ充分にその存在を示してゐた。勞働階級は依然として排日運動の指導的勢力の一つであつた。しかし變化は次第に現はれてきた。それが一九〇七年の紳士協約となり、從つて日本移民の入國が、數において、白人勞働者の脅威となることが止むでから、またそして一九一三年の土地法が成立するに至る頃から、組織的勞働者の態度のうちに自然的に變化が現はれてきた。この間に日本人、特に日本人勞働者の生活標準は著るしく向上した。勿論彼等は、特にロス・アンゼルス附近においては、依然として長時間勞働を續けつゝある。彼等の勞働時間は、農園において、白人勞働に對して十時間を勞働し、また白人婦人勞働者の影を加州農園において見ることは殆んど絕無といつてもいゝ位ひであるのに、日本移民は、依然としてその妻女を田園において絞取しつゝある。そは白人勞働者にとつては、陰險卑劣なる競爭者であるとして考へられてゐるのであつて、日本人がかくのごとき、階級意識に缺けたる態度を改めざる間は、彼等は決して米國における勞働階級の同情をうけることはできないであらう。しかしそは少くとも十年または十年以前の日本移民と

長時間勞働による（unfair Competition）を止めてゐないにしても、そは最早や決して日本勞働者の全部ではない。私たちは、今日においては、白人と同樣の勞働時間を働きつゝある、多くの日本勞働者を見ることができるようになつた。また彼等の賃銀は——普通農園勞働者は一時間三十五仙、日本金の約七十錢）——既に白人と拮抗し、ある地方においては白人のうへに出てゐるところさへある。特に、ストライキの殆んど成功したことのないといはれてゐるロス・アンゼルス地方——サン・ピードル——において、一九一九年、日本の漁夫が同盟罷業を起したことは、この地における日本勞働者が漸次に階級的自覺にと入りつゝあることを示すものでなければならなかつた。ワシントン州について見るも、シャトル及びタコマにおいては日本人の理髪師組合は鞏固なる一團體を組織し、白人の勞働組合——フェデレーション——に加入し、そして勞働時間においても、理髪料においても、今日では白人のそれと同一の標準を維持してゐるのである。從つてこれ等白人と日本人の同業者との間には、大小となく、密接な關係が保たれてゐるのである。こういふわけで、白人勞働階級と在留の日本勞働者との間に、階級的ソリダリテの道は、次第に好望となりつゝあることを知るのである。一九二〇年の排日運動において、白人勞働團體は何ほ排日運動から手を引いたとはいふことができない。加州勞働聯盟はその一九二〇年九月のフレスノの決議において彼等が依然排日運動を支持することを表示した。シャーレンベルグは依然として亞細亞人排斥協會の支持者の一人である、しかし白人勞働者が、排日運動の燃ゆる心であつた時代は去つた。排日運動が主として勞働運動としての意義をもつてゐた時代は既に去つた。今日においても米國における排日運動が、主として勞働問題であると考へ、若しくは主として勞働問題としての意義をもつてゐると考へることは、十年前の夢から醒めることのできない人たちの考方である。勞働運動の一指導者アウルト君は曰く、私は在留日本人に對しては人種宗教などの異同を口にすることなく、他の外國人と全然同樣の待遇を與へなくてはならないことを信ずる。平等の待遇を與へることによつてのみ凡ての人に正義を分ちうる。正義に反するの行爲こそ米國人の理想を侮蔑するものであると。米國勞働聯盟の一有力者にして且つシャトルにおける他の勞働運動の一指導者としてのダンカン君も曰く、現在の排日運動は明らかに在留日本人から、彼等が往々辛苦して贏ちえたる果實を強奪せんとするの運動であると。一九二〇年の一般投票に當つて、加州勞働聯盟の支部としての、スタクトン及びサクラメントの勞働團體は、既に團體として、彼等が今日の

排日運動の反對であることを明らかにした。彼等の決議に曰く、日本人の土地所有と借地とを禁んずることは、日本の農園勞働者を、農園から工場へと轉んぜしめることとである。

十三、ケイ・ケイ・ケイ

排日問題の根柢には人種的偏見が横はつてゐるといふ考へは恐らくは最も多く受取られてゐる議論であらう。それは獨り日本人側が、また親日論者がいふてゐるばかりではなしに排日論者がそれ自身と雖もこれを匿くすことはできないのである。彼等『カリフオルニアを白人のものとして維持せよ』といふ時にまた彼等が『百パアセントのアメリカ人』といふ時に、そしてまたこれ等の無邪氣なる標語によつて排日運動が指導されつゝある時に、今日の排日運動が、人種的差別のうへにその根據をもつてゐるものであることは、太陽の光のそれのごとくに明々白々の事實であるに相違ない。否な、それは獨り今日においてのみではなしに、既に一八八八年の支那人排斥の時からして、また醫師オードンネルなるものの日本人排斥の大道演説の時からして、一九〇七年においても、一九一三年においても、また一九二〇年においても、排日問題は常に人種問題を伴つてゐるものであり、または人種問題と無關係には存在しなかつたものであると、『少さくして黄色な人種』との間には、ロツキー山脈の東方において、既に三十餘年に亘つての人種的爭鬪の歴史をもつてゐるのである。この人種的爭鬪の體現として、私たちは排日運動を少くともその重要な一面を觀察することができるのである。從つてそは少くとも外面においては黄色人種に對するケイ・ケイ・ケイ（Ku Klux Klan）の運動の一種として見ることができるのである。加州における有力なる官憲の一人としてこのマアシヤル・デ・モツト君の言葉を藉りていへば、『カリフオルニアは白人の國として作られたものであつた。何となれば加州憲法（一八四九年）はその第二條において既に白人男子の市民といふ言葉を使用してゐるからである。特に一八七九年の憲法においてモンゴリア人種の歸化權を拒絶するに至つてこの意味は繰返され且つ一層強められるに至つたからである』と。（Motte California White or Yellow（フキーラン君は曰く、『われ等はこの土地をコウカ・サス人のために（維持しなくてはならない』と（Phelan, Why California objects to JapaneseInvasion)

十四、人種の質の問題と差別の問題

加州排日問題——米國の排日問題は一種の人種問題である。

ちに進んで考へなくてはならないことは、それが一種の人種問題としたら、それは如何なる意味においての人種問題であるか、またそれはたゞ人種問題であるといふの一點によつて盡きるのであるか、といふの點である。先づ前者から考察して見るに、排日問題は明らかにその外面においてケイ・ケイ・ケイの運動としての形をとつてゐるのであるが、少くとも今日においては、排日問題はケイ・ケイ・ケイの運動とこれを同一視することはできない。重要な差別をもつてゐる。ウオータア・マツカアサアなる一桑港人はこの問題の意義を解して曰く、全問題は人種問題である。人種間の質(クオリテイ)の問題ではなくして、たゞ人種間における差別(デイフアレンス)の問題である。そして自然的且つ永久的な分裂をつくりあげるほどに、廣くして深い差別の問題である、と。即ちマツカアサア君に從へば、排日問題は人種問題であるが、その意味は日本人が人種として白人よりも劣等だといふの意味ではなくして、たゞ人種の相違といふこととの問題であるといふのである。ハアバアト大學教授アルバアト・ブツシネル・ハルト君もまたその『われ等の日本人問題』と題する一論文において述べて曰く、『鳶色(ブラウン)は淡紅色(ピンク)とともに尊敬すべき人種である。普通の日本人は個人として立派である、ビジネスにおいては鋭敏である。諸君は日本人が友人として、英國人または伊太利人と同樣に信頼のできる人種であることを知るであらう。コウカサス人の小供と日本人の小供とは同一の學校に行き、成長しては同一投票場にゆくことができよう。しかし結局するに、人種的相違の見解るところにおいては、人種的自覺が現はれるに至るであらう』と（The New York Times. Jan. 16, 1921）こうした見解は殆んど凡ての排日論者によつて支持せられてゐるといふことができよう。デ・モツト君は曰く、日本問題は決して優等人種と劣等人種との問題ではない。何となれば、われ等は支那人の事業上における信用と正直と鋭敏とを疑ふものではないし、また日本人の節約、勤勉にして、且つ敏腕なことを疑ふものではないからである。われ等は二つのモンゴリア人種を尊敬する。』と。マクラッチ君は曰く、現在の問題は決して人種的劣等の問題ではないと。こういふわけで、カリフオルニアにおける排日問題は、少くとも今日においては、人種的優劣の問題としては取扱はれてはゐない。中には勿論日本人の人種的劣等を信んじてゐるものが少くないであらう。また白人が白人の優越を信んずることは既に彼等の習慣性をなしてゐる。しかし最早や今日においては、日本人の人種的劣等を口にすることのできないまでに、日本人の發達したことを認めざるをえないこととなつた。實際において、日本人の方が、米國人よりは文字を解するものゝ割

合が多いし、また米國內の小學校において、米國生れの日本人け、その學問上の成績において決して白人兒童のもとにあるのではない。フレスノ小學校の一學級においては、優等生八人のうちに、日本兒が六人までこれを占めてゐるといふことであつた。概していへば、米國の太平洋岸の諸地方は、ワイルド・ウエストとして知られてゐるほどに、米國においては、決して文化の進歩した地方だといふことはできない。桑港は、この沿岸一帶における最大都會として、太平洋の門戶として、その都市の外面は如何にも宏壯であり、如何にも華麗である。しかしその文化的方面はどうであらうか。一寸書物店に行つて見てもこの邊一帶、低級な赤本類以外には、殆んどこれを求めることができないではないか。否、一本の然るべき萬年筆を求めることさへも、この町においては困難である。新聞紙はオレンヂ大の活字をもつて、この地方における生活の原理を說いて曰く、『戀（ラブ）、享樂（ライフ）、そして笑（エンド・ラフア）』と。然り、カリフォルニア人——アルゴオートの子孫は、『戀、享樂、そして笑』のうちに彼等の生活の原理を發見しつゝあるのであつた。彼等にとつては、少くとも彼等の多くにとつては人生とは實にかくのごときものであつた。かくのごとき人々の間にあつて、私たち日本人は、私たちの人種中この地方において人口の重要な部分を占めてゐるアルメニア人のごとき、またメキシコ人のごときに比べては、日本移民は、所謂廣島移民として知られてゐるものであつても、何等の遜色をも見ることはないであらう。然らば何故に排日問題は人種問題であるか。マツカアサ君が、人種の質の問題ではなくして、差別の問題であるといつてゐることは、こゝにおいてか重要な意味をもつてくるのである。繰返していへば、今日の排日問題は人種の質の問題ではなくして、人種の差別の問題である。

十五、不同化と不同化性

人種の差別の問題は、これを二つに分けて考へることができる。その一つは皮膚の色の問題である。その二つは異種類の文明の問題である。このうち皮膚の色の問題は、恐らくは白人の間において、白人の優越性を習慣的に信仰しつゝある白人の間において、彼等の人種的偏見の根柢に橫はつてゐるところの、從つて排日的感情の最も一般的な源泉をなしてきたものであるに相違ないのである。しかし皮膚の色の相違といふことだけによつて異人種相爭ふことが如何に低くい標準であるかといふことは、今日においては白人の間において一般に承認せられてゐるところの事實となつた。然り、最早皮膚の色の相違といふこ

は、少くとも中等の白人にとつては、最早や許へることのできないまでに、彼等の人種的道徳觀が發達するに至つてゐる。だから今日においては、最早や單なる皮膚の色の差別によつて、日本人排斥または東洋人排斥を口にするものは、低調な大道演説家にあつてさへ、それを見ることができないのである。彼等が今日人種の質の問題ではなくして人種の差別の問題であるといつてゐることは、排日問題が、既に單なる皮膚の色の問題ではなくして、その異人種間における文化的特質の問題となつて**きたことを示してゐるものである。少くともこの點に彼等は彼等の排日論の根據を見出さなければならないことゝなるに至**つた。こゝに排日運動の一つの重大な進化が横はつてゐるのである。私たちは先づこの事實を割引なく受取つて置かなくてはならない。この事實を正直に受取つてのみ今日の排日論の特質を理解することができるからである。そこで今日の排日論者には、フホーランにも、マクラツチにも、チエムバアスにも、ロウエルにも、ステブンスにもモツトにも、若しくはバロウスにも、共通してゐるところの、一つの根據が與へられてゐるのを見る日本人は同化することのできない人種である。といふことの論點がこれである。そして今や排日論は實にこの一點にその合理的基礎を發見しようしつゝあるのである。マクラツチ君は日く日本人の非同化性と從つてかくのごとき人種から忠實なる米國市民をつくりあげることは不可能であるといふことが、かれ等の排日論の第一の要素であると（Mc Clatchy, Japanese in the Melting-Pot: Can They Assimilate and Make Good Citizens?）知るステブンス君はその國務卿コルビイへの陳述書のうちで述べて曰く、カリフオルニア人民は日本人の稱讃すべき性質をよく知つてゐる。われ等は決してわれ等の人種的または文**化的優越を信んじない。彼等の藝術、彼等の文學、彼等の哲學、そして近年においては彼等の科學的到達を充分に尊敬するものである。ここそは決して偏狭な人種的偏見のうへに立つてゐるも**のではない。しかしこの問題（排日問題）はわれ等の全西方文明に影響するところの嚴粛な問題である。それは決して人種的優劣の問題ではない。しかしそれは人種的差別と不同化性とに致命的に交渉するところの問題であると。そして彼等に從へば、日本文明と西洋文明との相違は、また從つて日本人の米國における不同化性は、人種的差別の基礎のうへに立つものであつてこの不同化性は米國内における日本人の發展と相俟つて、白人とその文明とを脅威するものである。從つて彼等は白人の國において白人の文明を擁護しなくてはならないと。知事ステブンスの陳述書の最後の一節に曰く、『カリフオルニアは東洋移民のこの

國への關門として立つてゐる。彼れの人民は第一に影響をうけた。若しも人種的理想と標準とがこの他國民的關門において保存されるに非ざれば、それは必ず全國に影響を與へなくては止まないのである』と。今日の排日論の根據は、かくして、たゞ一點、日本人の不同化と並にその不同化性といふことに要約されつゝあるのである。

十六、人種的偏見と軍國主義

日本人は不同化の人種である、と彼等がいふ場合に、彼等は今日の日本人の不同化の事實を指摘するとともに、また日本人の人種的特質は米國人への同化を許さないものであるといふことを指摘する。在米日本人と米國人とが同化してゐないことの事實は、私のこの論文の最初において述べたとほりである。しかし今日の日本人が同化してゐないといふことは、明日の日本人も同化しないといふこと――日本人の本質的の不同化性の理由となることはできない。そこで排日論者は今日の日本人の不同化の事實を指摘するに止まらずして、日本人が本來不同化の國民であるといふことに彼等の排日の根據を見出すこととなるのである。繰返していへば、彼等はその排日論の根據として日本人は本來米國人と同化することのできない國民であると論じに日本人と白人とは同化することが本來不可能であるか。マクラッチ君はこの點について次の三ケ條を擧げてゐる。第一は日本人の人種的特質その遺傳と宗教である。第二は日本政府が同化を妨げてゐることである。第三は米國生れの日本人の經驗によつて證明されたといふことである。彼れの見解に從へば、日本人は遺傳的に神道主義（シントウイズム）の信仰者であつて、日本人は基督教を信んぜず、天皇神權說の信者であり、米國においても尚ほこの信仰を變じないものであると。彼れはこの事實を證據立てるために、大隈侯の國民讀本を引用し、久米邦武氏の國體論を引用し、伊藤公の憲法義解を引用してゐるのである。そして彼れが最近において最も多く力を盡しつゝある點は、日本の軍國主義に對する批評である。この點はカルフォルニア大學總長バロウス君も全くその立場を同じくしてゐるのであり、否、それは今日においてはあらゆる排日論者の演壇から流れ出るところの、日本人攻擊の、最上の人氣言葉となつてゐるのである。バロウスに從へば日本には二つの政府がある。參謀本部は明らかに內閣と相拮抗する勢力であり西伯利において、朝鮮において支那において日本の對外政策は軍閥の一派によつて指導せられる侵略主義の實現であると。マクラッチ君はこの點に彼れの論據を置い

平和的侵略政策の遂行であるにほかならないと。こうした考は、獨りマクラウチだけではない。獨りバロウスだけではない。また日本に十六年間も滞在したことのある老宣教師トレーガアなるものの宣傳してゐるだけではない。日本人は好戰國民でなる。日本は軍國主義の國家である。『日本は東洋の獨逸』である。といふ考が、今日では一般加州人の間に深く刻まれつゝあるのである。今ま加州の一般人心が日本人に對して示した態度を歷史上に見るのに、最初に日本移民排斥が、勞働問題として取扱はれた時には、そは未だ一般加州人の興奮の問題とはなつてゐなかつた。日露戰爭の當時においては、加州人は寧ろ日本人に多大の同情を寄せてゐた。世界大戰が開けてからも、日本人に對する加州人の態度は、一般米人のそとれ同じく、充分の同情と信賴とを示してゐた。日本人に對する加州一般人心の變化は、世界大戰の終りにおいて、日本が人種平等案を提げて立つた時に始まつた。即ち加州人はこの人種平等案の提出を見て、日本が加州に野心あるものと考へた。人種平等問題とは米國その他への移民問題であると考へたからである。彼等の日本に對する今日の疑惑は主としてこの點から始まつた。やがて彼等は日本の西伯利出兵が、チェック・スロヴァックの援助のためだけには不必要に大規模であることに疑を抱いた。そして日本が容易に兵を撤しないことについて、また日本がロシアのある地點を占領したことについて、その疑惑を深くした。また同時に山東半島の還付の問題について、日本が屢々その還付を聲明しながら、今日に至つて尚ほその聲明を實行してゐないとの事實を見た。またやがて彼等は朝鮮における日本の武斷政治についての各種の、日本にとつて不利益なそして日本の新聞紙によつて報道されない幾多の事實を報道された。日本から、東洋から、歸りきたりつゝある多くの人々は、相次で日本の軍國主義を說いた。就中西伯利出征の兵士は異口同音に日本の西伯利に對する滿々たる野心を說いた。そしてその西伯利出征の兵士のうちにカリフォルニアからの人たちが甚だ多かつた。ハロウス博士のごときは實にその代表的人物の一人であつた。そして彼等が日本を軍國主義の國家、第二の獨逸であると考へた時に、彼等の心に襲ふてきたものは、一種の不安と、そして警戒と、またそして憎惡とであつた。一九二〇年における排日運動の、燃ゆる心となつたものは、實に加州人の心のうちに刻まれたる、日本に對する疑惑、日本に對する一種の恐怖と不安と憎惡との、一般的傾向そのものであつたのである。そして彼等は彼等の理解してゐるこの日本人の印象をもつて日本人種に固有するものであると考へた。こう考へて見ると排

日問題は彼等にとつては人種問題であるに相違なかつたにしてもそはまた同時に國民性の問題に歸するのであらう。特に今回の排日運動のうへにおいて私たちが深い注意を要することは、日本人の排斥の指導者として學ぶべきものが、アイルランド人を筆頭とし、そして支那人と朝鮮人とが、この運動の熱烈なる表面裏面の支持者であつたといふことである。排日政治家フキーランも、マクラッチも、彼等はともにアイルランド人であつた。また支那人の排日宣傳は、彼等のこの地における社交的及經濟的中心としての『シック・コムパニイ』の指導と劃策のもとに、大々的に行はれてゐたのである。朝鮮人はワシントンに本部を設けて、彼等一流の狂熱的態度をもつて排日宣傳を績けたのであつた。アイルランド人は何故に日本人を排斥するか。それは日本が英國の帝國主義と同盟しつゝあるがための反感でなくして何んであらう。朝鮮人と支那人とは何故に日本人排斥の燃ゆる心となるに至つたか。それは日本の侵略主義に對する反抗と憎惡のほか何ものであらう、こゝに至つて排日問題は人種の相違の問題に立脚しつゝ尙ほ單なる人種問題として考へてゐることはできないものとなつた。然り、日本の政治的文明、そして日本の對外的政策——對外的軍國主義の問題となつたのである。私はこの地にきて、私の印象を率直にいふであらう、今日の排日問題は、そこに幾多の複雜した理由が存在するにしても、それが今日において一般人心を燃やすに至つた一大刺激が、この日本に對する——日本の軍國主義に對する恐怖と疑惑と憎惡とであるといふことを。主としてかくのごとき精神と刺激とそして亢奮とのもとに一八二〇年の排日立法は加州人大多數の支持のもとに加州の法律となるに至つた。

十七、日本の對米移民政策と在留民の態度

次の私たちが考へなくてはならないことはマクラッチ君の擧げた日本人不同化の第二の理由である。卽ち日本政府が在米日本人の對米同化を妨げつゝあるといふの點である。日本政府は果して在留日本人の對米同化を妨げつゝあるか。または汎く日本は在留日本人の對米同化を妨げつゝあるか。私はこの點においてマクラッチ君の見解の正當であることを信んずるものである。その第一の理由は、例の二重國籍問題である。この問題はあまりに多く論んぜられてゐるところであるから私はこゝに評論することを避けるであらうが、要するに日本の法律によつて、フランス人の場合と同じく、米國生れの日本人は、米國の憲法によつて當然米國の市民であるにもかゝわらず、また日本の法律によつて當然日本の市民である。從つてことは日本國民とし

の責任を免れることはできないのである。その第二の理由は、排日問題は、日本人が米國において特種待遇をうけつゝあるとの法律上の根據は、日本人が『歸化しえられざる人種』であるとされてゐることであるのに、日本政府は未だこの歸化權の獲得のために努力したことがないのみならず、却つてこの歸化權獲得に對して反對の態度を示してゐるといふことである。以上の二點は主として日本政府の軍事政策のうへから出發してゐるものであるとは、在留日本人の間においては排日論者の間においても信んぜられてゐるところであつて、日本は軍國主義の國家であるといふことの、そして同時に日本政府は、日本人の對米同化を欲しないものであつて、『政府の中に政府』をつくり、そして加州において日本のための『植民地』を建設しつゝあるといふの、有力なる理論基礎の一つとなつてゐるのである。第三に私の擧げたいことは在來日本人の宗教及教育の問題である。先づ宗教の方からいふと、在留日本人は主として佛教を信んじ、基督教を信んずるものは極めて少い。佛教のための傳導は桑港を本部として加州だけでも既に七十六ケ所の寺院を建設してゐるし、就中ペンリン、フレスノロス・アンゼルス等の佛敎々會堂は壯麗を極めたものであるが、彼等の說くところは日本內地におけると同じく、最早や決して單なる宗教ではなく、名を四恩主義にかりて、日本の軍國主義的精神を鼓吹するところの、政府のスポークスマンとなるに至つてゐるのである。また教育の方からいふと、米國における日本人兒童のために加州だけで四十七ケ所の日本語の學校が設けられてゐる。これ等兒童は白人兒童と同樣の過程を修業した後に、更に日本語によつて教育を與へられてゐるのであるが、その教育は主として佛教家の手によつて行はれ、そして主として日本內地の教科に基きて、日本的な、ステブンスの謂はる『太古から傳はつた、一種不可思議なる思想』を注入しつゝあるのである。これ等の兒童は、晝は白人とともにリンコーン崇拜論を學び、夜は乃木大將崇拜論を注入される。彼等は白人教師のもとに米國への忠誠を說かれ、日本人教師のもとに日本國への忠君愛國を宣傳される。然り、米國人から見れば、米國の市民たる兒童——米國生れの日本兒童に向つて、米國へでなくして日本への忠誠を說かれつつあることが、如何に不快な事件であらう。こういふわけで米國における日本人は、政府の力により、教育により、宗教により、彼れが米國への同化を妨げつゝあるとも、こゝには日本的精神と、習慣と、信仰とそして政治的自律とを要求しつゝあるのであるから、米國における『日本コロニイ』が米國人の心にとつて、『米國のうちの日本』『政府のうちの政府』であり、從

つて加州における日本人の發展は、米國に對する日本國家の平和的侵略政策の遂行であると考へられてゐるといふことも、必ずしも排日のために排日論としてのみ斥けることはできないのである。勿論既に長き歴史ある國民は、容易に他の國民に同化し、または他の國民と同化することはできないであらう。例へば米國内においても、一九一〇年のセンサスに從へば、波蘭語を使用しつゝある波蘭人は百七十萬七千六百四十人に達してゐたといふではないか。そしてこれ等の波蘭國民同盟を組織してゐたといふではないか。またチエック・スロヴアック國のシカゴにおける領事としてのスメタンカ君自身が記るしてゐるところによればボヘミア人とスロヴアック人とはアメリカ化の運動に對して疑惑の心を抱きつゝあるといふではないか。またアイルランドはこの國において彼等自身の大統領をもつてをり朝鮮人もまた彼等自身の大統領をもつてゐるのである。けれどもこゝに考へなければならないことは、アイルランド人にせよ、朝鮮人にせよ、また獨立以前の波蘭人またはチエツコスロヴアツク人にせよ、彼等の國民的運動は、たゞ彼等の國民的復興の運動であつて、それは決して米國における國家的建設——國家の中の國家を建設しようとする運動ではないといふことである。從つてそれは決して米國人にとつての脅威を意味するものでないといふことである。操返していふ、日本人は、米國において彼等の米國人との同化を彼等の自らの手によつて妨げつゝあるものであるといふことを。そして米國の主權のもとにおいて、日本の殖民地——imperium in imperio を建設しつゝあるといふことを。そしてまたそれは米國における排日運動の一大刺戟となつてゐるものであるといふことを。

十八、一般投票の後

かくのごとくにして米國における、特に加州における排日運動は指導されてきた。それは人種的偏見のうへに立脚しつゝ、更に日本の對外的政策も、そして米國における日本人の態度とに刺激されつゝ、遂に今日の大勢をつくりあげた。それは一九二〇年十一月二日に投票のために緩和されるに至らなかつたのみではなしに、その運動は全太平洋沿岸の問題となり、そしてまた全米國の問題となつてきた。在留の邦人、特に八萬の加州の邦人は、今や不安の心に襲はれつゝ、彼等の去就に迷ひつゝある。彼等のあるものは既にその土地を賣つて故國へ歸つた。またあるものは沙漠を超えてメキシコへ移らうとしつゝある。そして在留日本人との障壁は益々高くならうとしつゝある。加州における日本「コロニイ」衰亡の形勢は既に明瞭となつてきた。——そしてそれは日本の全國家的政策に對する世界的反動の一つの雄辯なる事實ではないであらうか。そしてそれはまた米國の資本主義と日本の資本的軍國主義との間における將來の忌はしき關係を暗示してゐるものではないであらうか。

附記、私は排日問題についての對策についての考がないはなとい。併しそれは今の日本にとつては、あまりに根本的な考方であるからこゝには說かない。（一月廿八日桑港セント・フランシス・ホテルにて）

勞農露國の文化的施設

山川菊榮

「二」　藝術擁護宣言

『同志よ！　諸君はこの國の若き主人公である、今諸君には爲さねばならぬこと、考へねばならぬことが山積しては居らうが、諸君は、諸君の藝術的及び科學的寶物を、いかに擁護すべきかを知らねばならぬ。……

「この激烈な闘爭、破壞的な戰爭の渦中に在て、教育委員の任にあることは特に恐ろしいことである。新しい、より優秀な文化の淵源である社會主義の勝利の希望のほか、予を慰籍する者はない。人民の藝術上の富を保護する責任は予の双肩に掛つて居る。……予は予の主張の行はれぬところに留まることは出來ないので　教育委員の職を辭した。然るに他の委員たる同志諸氏は、予の辭職を聽許されなかつた。故に予は現地位に留まることゝする……なほ又、予はクレムリン宮に加へられた損害は、噂ほどに酷いものではなかつたことをも知つたのである……

『同志諸君、願くば予を援助せられよ……諸君自身並びに諸君の子孫らのために、我國の美を保存せよ、人民の財産の擁護者たれ……

『速かに、極めて速かに、久しく無智の中に留められて居つた最も無智な人々でさへ覺醒して、藝術がいか程の歡喜と、力と、叡智との源泉であるかを解するに至るであらう……』

一九一七年十一月、勞農政府確立當時、クレムリンを占領したボルシエウイキの一派が、宮殿とその寶物とを破壞して火を放つたといふ報道に接した時、教育人民委員（即ち文部大臣）ルナチヤルスキーはその暴擧を悲しんで辭職を申出でた。然るに數日の後、その虚報なることを確かめたので辭意を翻したが、これは、その際發表した宣言の一節である。

新文明の建設と同時に、舊制度、舊文化の根本的破壞を意味して居る革命が、一時多少の不秩序を伴ふことは已むを得ない、殊に舊時代の專制君主と支配階級とに對する憎惡に燃え立つて

ゐる民衆が――彼等のために無智と卑屈との中に育て上げられ美や藝術の何たるかをも知らされなかつた民衆が、その憎惡を惹いて專制君主と支配階級との一切の所有物にまで及ぼすのは已むを得ぬ勢である。また何千年來、私有財産の習慣と觀念との中に棲息してゐた人類が、一朝その制度の崩壞した後もなほ舊時の思想習慣に支配せられて、既に民衆の共有物となつた舊支配階級の遺産を、ともすれば私しようとする誘惑を感じがちなのも、免れ得ぬ勢である。

　露國の場合にもケレンスキー政府倒れて、勞農政府が完全に政權を掌握するまでの數日間、この混亂狀態が繼續した。けれども勞農政府は、この狀態を一掃すべく、最も嚴正なる秩序の維持を勵行し、皇室及び貴族富豪階級より沒收した一切の財産は、直ちに全人民の共有として、苟もこれを犯すものは、人民の財産を犯す犯罪者として、革命裁判所の審理に委ねることゝした。自身藝術家であり、同時に藝術の擁護者を以て任じてゐるルナチャルスキーは、斯樣にして上の宣言に現れたような理想の下に、鋭意藝術の擁護に盡瘁したのであつた。

　冬宮占領當時の事情は、還般の事情を明かにする一適例である。

財産として公開し、公衆の自由な觀覽に供した。然るに自治的習慣の十分ついて居らぬ民衆は、頻々として宮殿內の貴重品を盗み去つた。そこで政府は、美術家及び古物學者より成る美術保護委員會を組織し、これをして冬宮の財産目錄を調製せしめるため、十一月十六日より一時公衆の出入を禁止し、同月下旬、『民衆博物館』と名を改めて再び公開した。そしてペトログラードの他の博物館同樣、その監理權を美術保護委員會の手に委ね、爾後その內部に於ける一切の政治的活動を禁じたのであつた。引つゞいて露帝の他の宮殿や離宮も、美術的價値あるものはすべて國有博物館とせられた。また富豪地主などの所有にかゝる、優れた美術品や美術館の如きも國有とせられ、個人の私宅に空しく藏されてゐる美術品は、公共の美術館に移して、適當たる保護の下に、公衆の展覽に供せらるゝことゝなつた。

　ケレンスキー政府倒壞の當時、富豪の邸宅、殊に諸王宮には高價な美酒を何千壜と蓄へた酒庫があり、これが兵士を亂醉と破壞とへ導く恐るべき誘引物となつたのを見て、政府は即刻其等の酒類を殘らず棄て去り、同時に禁酒令を發して、酒類の釀造販賣を禁じた。此命令に反して酒類を隱匿してある酒庫が發見された時は、無警告で爆發させるといふ布告さへ發せられた

『勞農政治に對する多くの誣告の中で、吾々を以て、歴史的に重要な記念物や、最高の藝術的價値を有する美術館、宮殿、地主の邸宅等の破壞者とする米國新聞の報道ほど、予を激怒させるものはない。吾々はさういふ記念物を保護する上に、殆ど奇蹟的な成功を收めたが故に、矜りと確信とを以てこの非難に答へることが出來る。勿論予は、露國革命の進行中、どんな藝術品も破壞されたことがないと主張する者ではない。……けれども露國革命の如き大動亂の最中に、多少の不秩序が行はれるのは已むを得ぬことである。**此點については『最も文明的な』ブルジョア諸國の軍隊に依て行はれた大戰の當時、その占領地帯に於ける財產の破壞は、革命中の露國と比較にならぬものであつたことを、帝國主義者に思出して貰はねばならぬ。**

『……米國新聞は、舊王宮の掠奪や不秩序といふ誣言をさへ敢てした。予は、現在共等の宮殿がどうなつて居るかを、外國人に見せることが出來たら、どんなにか嬉しからうと思ふ……宮殿は全然美術館に變へられた。特にツァールスコエ・セロの宏大なカテリン殿や、附近にあるアレキサンダー宮は立派なものとなつた。ペトログラードからゾロ／＼押掛けて來る勞働者や青年に對して專制時代の歴史がすべて茲に展開されて居る。彼等は、一世紀以上を經た庭園を通つて、林檎パイのように排列されてゐるこの宮殿に入るのである。吾々はそれほど多勢の觀覽人が來ても、壁や家具や美術品のみならず、面白いモザイクの床をも損はぬよう出來るだけ注意して居る。……革命渦中にある國に於て、民衆がツアーと支配階級とに對する憎惡に燃え立ち、その憎惡を彼等の住居や持物にまで及ぼさうとしてゐる國に於て吾等の事業を遂行することは容易でない。何故なら吾々は、單に破壞の激流を堰き止めて、藝術品を保護するに留まらず、博物館の單なる見本の中から生きた美を創造し、依て**無意識の裡に、美に飢渇して居る勞働者を覺醒しなければならぬのである……何事にも飽き果て、何物にも無頓着になつて**しまつた舊い名家の末孫の住居であつた近づき難い城廓や宮殿**を、悉ろに保護せられ、多くの來觀者を樂しませる公有物とす**るのが吾々の仕事であつた。』

帝國主義的、資本主義的文化を呪咀し破壞して、勞働者が新たに建設しようとする無產者の文化とはいかなるものか、露國の現狀はこれに答へようとして居る。

「二」　藝術部とその活動

勞農露國の文教の中樞である教育人民委員會には、科學と文藝方面の教育、並びに保和奬勵に當るために藝術局、文藝出版局、科學局等の部門が設けられて居る。また地方ソヴィエット

れも各々專屬の敎育局あり、その敎育局の中に、更に藝術部が設置せられて居る。藝術部の主要任務は、

第一に、藝術の社會化乃至民衆化である。資本家的社會に於ける藝術は、專ら有產階級の玩弄物であり贅澤品であつて、民衆はこれと沒交涉であつた。けれども社會主義の社會は、人類の有する總ての富と共に、美をも社會の共有としなければならぬ。藝術の社會化の一つの方法は、都市の美化である。卽ち單に都會を。田園都市、公園都市、花園の都市とするのみならず、進んでこれを莊麗な建物や美しい記念碑で飾られた、美術館的都市とし、かのモリスの夢みた『ニウス・フロム・ノーホエヤー』の中の倫敦市のようにしなければならぬ。モスコーに於ける、世界革命の先驅者を記念する五十基の記念碑の建設や、ペンサ・ソヴィエットの建てたマルクス記念碑は、この計畫を發現したものである。また今一つの方法は、音樂や裝飾や演劇を主要の素とする革命の祝祭を催し、民衆をして一流の音樂家、美術家の藝術に親しませることである。

藝術部の第二の仕事は、純粹の民衆藝術の勃興を促すことである。卽ち紳士閥社會の思想道德を代表する人物や、紳士閥に對する無產階級の悲壯なる戰ひを描出し、舊文明の空虛頹廢を示すと共に、新興社會主義文化の理想を鼓吹する藝術の生長を助けることである。このためには、民衆會館や、勞働者の倶樂部や劇場で、屢々音樂、演劇、朗讀などが催される。

第三に、民衆の藝術敎育である。資本主義の下に於ける勞働者は、たゞパンのために齷齪として、全然美や藝術の世界と沒交涉に暮して來た。社會主義のロシアはこの弊を救ふために、頻繁に講演會を催し、活動寫眞を利用し、新古名畫及び彫刻の時代や流派の特徵を說明し、社會的環境が藝術品の上に及ぼす影響を示す。時には勞働者の團體を美術館に導き、陳列品について美的敎育を施すこともある。更にまた、ロシア及び歐洲諸國の名家の繪畫彫刻、殊に勞働者や農民の勞働生活を描出した作品の復寫を、瀟洒な裝幀の、廉い袖珍本として多く出版して居る。また地方ソヴィエット藝術部には、專屬の美術館と、美術書の圖書館とを設置することも計畫されて居る。

第四には、民衆をして單に藝術の鑑賞者批評家たらしむるのみならず、進んでその創作欲を刺戟し、創作的才能を發揮せしめる準備をとゝのへる仕事が算へられてある。このためには繪畫彫刻、朗讀及び演劇の學校が設けれて、新藝術の創造者が養成せられて居る。

かような諸方面の任務のために、ソヴィエット藝術部には都市美觀委員、全國的祝祭及び演技委員、音樂會及び演劇委員、

並びに出版、講演、圖書館等の組織を司る委員會が組織されて居り、それに參加する委員は、勞働團體の代表者、美術家、俳優、及び美術史の專門家等である。

「三」　美術館、美術品の保護及び民衆化

勞農露國に於ける畫家、彫刻家、建築家、音樂家、俳優　文學者には、それ〲社會に有用なる仕事に貢獻する勞働者と認められ、各々職業單位の勞働組合を組織して、共通利害の擁護に當り、またソヴィエツト藝術部を協力して、藝術の民衆化、及び民衆生活の藝術化に努めて居る。

モスコー及びペトログラードには、是等の諸組合より選出された代表者より成る藝術委員會があつて、市民の藝術生活の指導に當つて居る。モスコー藝術委員會の目的は左記の如くである。

一、全國に亘る藝術教育の組織
（イ）新ロシアの要求に應ずべきアトリヱの設立
（ロ）民衆に對する藝術の宣傳
二、世界の藝術的中心との接觸を圖ること、
三、藝術の進步を圖ること
（イ）競爭試驗の國家的組織
（ロ）勞働組合の相互扶助的團體の組織
（ハ）裝飾美術家の委員會、及び舞臺藝術勞働者の團體組織
四、過去及び現在の藝術品の保存、及び未來の藝術品の保護

この藝術委員會は繪具の品不足を補ふために、特殊の實驗所を有する繪具工場を設立した。

勞農政府は、帝制時代のアカデミツクな官立美術院を解散し、附屬美術學校を獨立のものとし、其美術館は國有として教育委員の監理に委ね、他の總ての財產は藝術教育のために使用することゝした。

一九一八年五月、教育人民委員會の一部に、博物館監理及び美術骨董品保存局が設置せられた。この局は博物館の發達と美術骨董品の保存とを主要目的としてゐる。

この局の緊急の仕事は、舊式な博物館を一掃して、全部新しい樣式の下に組織し直すこと、新博物館の增設、個々の博物館の目的を統一し、各々をして獨得の意義と特徴とを備へしめること、新しい一定の方針の下に、全國に亘る博物館の事業を統轄すること、等である。また年々一般的な計畫を樹立し、全國の博物館からの報告や申請に基き、國家的利益の見地から、それに多少の改正を加へて編製した豫算案を提出する。個々の美術館はその財政の許す範圍に於て、單獨に美術品を購入する權利をもつが、作品を纏めて大仕掛に購入し、諸種の美術館の必要を滿

PAGE NOT AVAILABLE

並びに出版、圖書館等の組織を司る委員會が組織されて居り、それに參加する委員は、勞働團體の代表者、美術家、俳優、及び美術史の專門家等である。

「三」　美術館、美術品の保護及び民衆化

勞農露國に於ける畫家、彫刻家、建築家、音樂家、俳優　文學者には、それぞれ社會に有用なる仕事に貢獻する勞働者と認められ、各々職業單位の勞働組合を組織して、共通利害の擁護に當り、またソヴィエット藝術部を協力して、藝術の民衆化、及び民衆生活の藝術化に努めて居る。

モスコー及びペトログラードには、是等の諸組合より選出された代表者より成る藝術委員會があつて、市民の藝術生活の指導に當つて居る。モスコー藝術委員會の目的は左記の如くである。

一、全國に亘る藝術教育の組織
(イ)新ロシアの要求に應ずべきアトリエの設立
(ロ)民衆に對する藝術の宣傳
二、世界の藝術的中心との接觸を圖ること、
三、藝術の進歩を圖ること
(イ)競爭試驗の國家的組織
(ロ)勞働組合の相互扶助的團體の組織
(ハ)裝飾美術家の委員會、及び舞臺藝術家[illegible]
四、過去及び現在の藝術品の保存、及び未來[illegible]

この藝術委員會は繪具の品不足を補ふために[illegible]を有する繪具工場を設立した。

勞農政府は、帝制時代のアカデミツクな官立美術院[illegible]附屬美術學校を獨立のものとし、其美術館は國有として教育[illegible]員の監理に委ね、他の總ての財産は藝術教育のために使用する[illegible]こととした。

一九一八年五月、教育人民委員會の一部に、博物館監理及び美術骨董品保存局が設置せられた。この局は博物館の發達と美術骨董品の保存とを主要目的としてゐる。

この局の緊急の仕事は、舊式な博物館を一掃して、全部新しい樣式の下に組織し直すこと、新博物館の增設、個々の博物館の目的を統一し、各々をして獨得の意義と特徴とを備へしめること、新しい一定の方針の下に、全國に亘る博物館の事業を統轄すること、等である。また年々一般的な計畫を樹立し、全國の博物館からの報告や申請に基き、國家的利益の見地から、それに多少の改正を加へて編製した豫算案を提出する。個々の美術館はその財政の許す範圍に於て、單獨に美術品を購入する權利をもつが、作品を纏めて大仕掛に購入し、諸種の美術館の必要を滿

たすと同時に、美術館同士の競爭を防ぐためには、『全國美術館基金』の制度があり、この基金に依て購入した作品を、公衆の展覽に供し、その批判を俟つために、特殊の展覽場も設置せられて居る。またこの局には、美術品の購入に便すべく、市場の樣子や、鑑賞せらるべき作品などの價値及び價格、その他美術品蒐集に必要な一切のことを通信する通報係りや、買入係りがある。この局は在來の美術館の不統一と單調とを破り、各美術館に出來得る限り、明白な顯著な個性と特徴とを與へようとしてゐる。東洋美術の粹を集めた東洋美術館、彫刻のみを集めた彫刻美術館近代畫のみを集めた近代美術館の設置も計畫せられ、特に地方美術館の增設に意が注がれて居る。各々の美術館には、參考書を藏する圖書館、寫眞、復製、製本、枠縁などを賣る商店が附屬してゐる。勞農政府は優れた美術品の輸出を禁止した。革命の動亂に乘じてブルジョア階級は、自己の所有物は勿論、美術館の所藏品の如き公有物を盜み出して、外國人に高價に賣らうとした。此際露國の名畫珍寶が永久に行方を失ふことを防ぐには、轉賣や密輸出に對する嚴正な干涉が必要であつた。そこで政府は、或は美術館所藏の作品に關する科學的な、明細な目錄を調製せしめ、或は公私有の別なく、美術館をソヴイエットの監理に歸せしめ、或は稅關吏に命じて美術品の國外搬出を防ぐ等、あらゆる方法を講じたのである。某夫人の所藏するボッティチエリの名畫が外國へ輸出されると聞こえた時、政府は直ちに該名畫を沒收して、ある美術館の陳列品の中に加へたが、さういふ例は少くない。また古寺院、殿堂等、優秀なる建築物及び壁畫等に對しても、最も入念な修復と保存法とを講じて居る。

面白いのは、クレムリン宮の美術陳列室整理の件である。在來人民の窺窬を許さなかつたクレムリンの陳列室には、新古の繪畫が所狹く集められてあつたが、其排列法は全然無茶で、たゞ手當り次第、枠と枠とが密接したまゝ列べられてあり、到底繪畫の情趣を味ふことを許さぬのみか、多くの繪は、室内の氣壓の關係で顏料が剝落し、變色したりして損はれて居つた。目錄も極めて杜撰で、和蘭陀派の畫家を伊太利の巨匠と誤つたり、一流の作品を類別せずにあるかと思へば、第二流のものを一流の中に加へたりしてあつた。藝術委員會は、その中で特に藝術的價値ある作品のみを選んで修復を加へた後、民衆の展覽に供すべく、ルミアントゼフ美術館に陳列することゝした。

舊露國の富裕な紡績業者で、大戰爭前現代の名畫を蒐集したイワン・モロゾフ氏の談の中に、かういふ一節がある。

『私の集めたものはソックリ其儘になつてゐます。四百三十點の露西亞畫も、二百三十點の佛蘭西畫も、一枚として損はれた

ものはありません。私の繪は、私がそれを保存して置いた美術館から一點も持出されません。たゞそれは私の工場と同じく國有となり、「第二西歐美術館」となつたゞけです。……政府は有名な彫刻家のボリス・テルノヴェズを監理者に任じ、私も協同監理者に任ぜられました。美術館の中三室だけは私に與へられ、あとは公開されました。これは丁度私の計畫を擴張したようなものです。……この無產階級の獨裁時代に於ても、美術家は有用な**仕事に從事するものと、政府に依て認められて居ります。勿論その結果は、**大に彼等の進歩を促して居ります。一九一八年より一九一九年にかけての冬には、最左翼に屬する藝術委員會が、各種の傾向を示す十以上の展覽會を開きました。……トロツキー夫人はその委員長をして居ります。……目錄は半世紀以上も古くなつて居り、あれほど美術品が山積してゐながら、公衆を指導し啓發する設備の全然ないルーヴルに、ボルシエウイキを連れて來たいものですね。」

　勞農政府は、美術館の民衆化を圖るために、平易な美術書や寫眞版や複製を普及すると同時に、美術館巡覽隊を組織して諸方の美術家を專門家の指導の下に巡覽させる。

　一九二〇年一月、ペトログラード・ソヴイエットの發起に依て革命博物館が設置せられた。これは露國の革命運動に關する、あらゆる記錄や記念品を集めたもので、廣間を飾る十二月黨員の肖像を始め、革命の歷史と革命運動に殉じた人々のに關する材料を網羅し、無產者解放の雄々しく悼ましき戰を千古に記念して居る。ルナチヤルスキーの報告によれば、勞農政府は、帝政時代に、全國を通じて三十一を出なかつた美術館を百十一に增加し、その組織を一變すると同時に、內容を遙かに擴充した。歐洲屈指の大博物館であるペトログラードのエルミテージ館の**如きも、約一倍半に擴張せられた。**

「四」　演劇及び音樂

　演劇及び音樂の民衆化もまた、勞農政府の最も苦心する所である。敎育人民委員會には演劇部が特設せられ、その監督の下に全國に演劇學校が設立せられた。國立及び私立の演劇學校は普通、高等の二種に別れ、前者に於ては演劇の初步の技術を、後者に於ては、個々の敎師の研究所で高級な訓練を受ける。其等の學校では、講演や實驗に依て、一般的な科學上の智識をも授ける。また別に理論上から演劇學を研究すべき高等演劇學校の設立も、計畫されて居る。演劇部は、舞臺監督、舞臺美術、道具方、電氣及び器械取扱人等の專門家を養成すべく、舞臺藝術の研究所をも特設した。その研究はソヴィエットの演劇部や、コムミユン所屬、もしくは國有の劇場內で行はれ、期間は約二

たすと同時に、美術館同士の競爭を防ぐためには、『全國美術館基金』の制度があり、この基金に依て購入した作品を、公衆の展覽に供し、その批判を俟つために、特殊の展覽場も設置せられて居る。またこの局には、美術品の購入に便すべく、市場の樣子や、競賞せらるべき作品などの價値及び價格、その他美術品蒐集に必要な一切のことを通信する通報係りや、買入係りがある。この局は在來の美術館の不統一と單調とを破り、各美術館に出來得る限り、明白な顯著な個性と特徴とを與へようとしてゐる。東洋美術の粹を集めた東洋美術館、彫刻のみを集めた彫刻美術館近代畫のみを集めた近代美術館の設置も計畫せられ、特に地方美術館の增設に意が注がれて居る。各々の美術館には、參考書を藏する圖書館、寫眞、復製、製本、枠縁などを賣る商店が附屬してゐる。勞農政府は優れた美術品の輸出を禁止した。革命の動亂に乘じてブルジョア階級は、自己の所有物は勿論、美術館の所藏品の如き公有物を盜み出して、外國人に高價に賣らうとした。此際露國の名畫珍寶が永久に行方を失ふことを防ぐには、轉賣や密輸出に對する嚴正な干涉が必要であつた。そこで政府は、或は美術館所藏の作品に關する科學的な、明細な目錄を調製せしめ、或は公私有の別なく、美術館をソヴイエットの監理に歸せしめ、或は稅關吏に命じて美術品の國外搬出を防ぐ等、あらゆる方法を講じたのである。某夫人の所藏するボッティチエリの名畫が外國へ輸出されると聞こえた時、政府は直ちに該名畫を沒收して、ある美術館の陳列品の中に加へたが、さういふ例は少くない。また古寺院、殿堂等、優秀なる建築物及び壁畫等に對しても、最も入念な修復と保存法とを講じて居る。

面白いのは、クレムリン宮の美術陳列室整理の件である。在來人民の觀覽を許さなかつたクレムリンの陳列室には、新古の繪畫が所狹く集められてあつたが、其排列法は全然無茶で、たゞ手當り次第、枠と枠とが密接したまゝ列べられてあり、到底繪畫の情趣を味ふことを許さぬのみか、多くの繪は、室內の氣壓の關係で飲料が剝落し、變色したりして損はれて居つた。目錄も極めて杜撰で、和蘭陀派の畫家を伊太利の巨匠と誤つたり、一流の作品を類別せずにあるかと思へば、第二流のものを一流の中に加へたりしてあつた。藝術委員會は、その中で特に藝術的價値ある作品のみを選んで修復を加へた後、民衆の展覽に供すべく、ルミアントゼフ美術館に陳列することゝした。

舊露國の富裕な紡績業者で、大戰爭前現代の名畫を蒐集したイワン・モロゾフ氏の談の中に、かういふ一節がある。

『私の集めたものはソックリ其儘になつてゐます。四百三十點の露西亞畫も、二百三十點の佛蘭西畫も、一枚として損はれた

ものはありません。私の繪は、私がそれを保存して置いた美術館から一點も持出されません。たゞそれは私の工場と同じく國有となり、「第二西歐美術館」となつたゞけです。……政府は有名な彫刻家のボリス・テルノヴエズを監理者に任じ、私も協同監理者に任ぜられました。美術館の中三室だけは私に與へられ、あとは公開されました。これは丁度私の計畫を擴張したようなものです。……この無産階級の獨裁時代に於ても、美術家は有用な仕事に從事するものと、政府に依て認められて居ります。勿論その結果は、大に彼等の進歩を促して居ります。一九一八年より一九一九年にかけての冬には、最左翼に屬する藝術委員會が、各種の傾向を示す十以上の展覽會を開きました。……トロツキー夫人はその委員長をして居ります。……目錄は半世紀以上も古くなつて居り、あれほど美術品が山積してゐながら、公衆を指導し啓發する設備の全然ないルーヴルに、ボルシエウイキを連れて來たいものですね。」

勞農政府は、美術館の民衆化を圖るためには、平易な美術書や寫眞版や復製を普及すると同時に、美術館巡覽隊を組織して諸方の美術家を專門家の指導の下に巡覽させる。

一九二〇年一月、ペトログラード・ソヴイエットの發起に依て革命博物館が設置せられた。これは露國の革命運動に關する、あらゆる記錄や記念品を集めたもので、廣間を飾る十二月黨員の肖像を始め、革命の歷史と革命運動に殉じた人々のに關する材料を網羅し、無産者解放の雄々しく悼ましき戰を千古に記念して居る。ルナチヤルスキーの報告によれば、勞農政府は、帝政時代に、全國を通じて三十一を出なかつた美術館を百十一に增加し、その組織を一變すると同時に、內容を遙かに擴充した。歐洲屈指の大博物館であるペトログラードのエルミテージ館の如きも、約一倍半に擴張せられた。

「四」　演劇及び音樂

演劇及び音樂の民衆化もまた、勞農政府の最も苦心する所である。敎育人民委員會には演劇部が特設せられ、その監督の下に全國に演劇學校が設立せられた。國立及び私立の演劇學校は普通、高等の二種に別れ、前者に於ては演劇の初步の技術を、後者に於ては、個々の敎師の研究所で高級な訓練を受ける。其等の學校では、講演や實驗に依て、一般的な科學上の智識をも授ける、また別に理論上から演劇學を研究すべき高等演劇學校の設立も、計畫されて居る。演劇部は、舞臺監督、舞臺美術、道具方、電氣及び器械取扱人等の專門家を養成すべく、舞臺藝術の研究所をも特設した。その研究はソヴィエットの演劇部や、コムミユン所屬、もしくは國有の劇場內で行はれ、期間は約二

夕月、「教師は何れも專門家で、聴講無料である。

劇場的建築物は政府、ソヴイエツト、またはコムミユンの監理に歸し、其等の許可を得て後、使用することが出來る。觀劇券は勞働者に配付せられ、舊時と反對に、劇を見る者は、殆ど無產者に限られて居る。

モスコー・ソヴイエツトの藝術部は、モスコー附近は元より、全國より、無產者のために上演すべき戲曲、又は音樂の種類、番付等に就ての問合せに忙殺されるので、特に上演目錄委員會を常設した。この委員會の任務は、地方劇場及び諸工場附屬劇場のために目錄を作製するにあるが、其戲曲選定の標準は、第一に一流の藝術的價値ありと認められたるもの、第二に、民衆の革命的精神を鼓舞し振興すべき性質のもの、第三に、樂天的精神のものたること、である。今日までに選定せられた戲曲の中には、ゴーゴル、ドストエフスキー、トルストイ、ツルゲネフ、チエホフ、クープリン、ゴルキー、セルヴアンテス、シヨウ、ロマンローラン、モリエール、シルレル、イプセン、ヴエルハーレンハウプトマン等の作品がある。

委員會は、委員の執筆に係る戲曲の筋書、その中心思想、登場人物の役割、舞臺面の寫生畫、衣裳に關する說明などを出版し、これは後にビラとして撒布せられる。また舞臺藝術、舞臺裝飾衣裳、演劇と戲曲、其他劇に關する問題を取扱かつた書籍をも出版して居る。

大抵の工場や農村には、農民及び勞働者の劇場が設けられ、政府は三十二縣のさういふ劇場のために、一九二〇年春、二千五百萬ルーブルを支出することに決した。また一九一九年十一月には、農民及び勞働者の演劇に關する問題を討議すべく、モスコーに於て各地方代表者數百名の大會が開かれ、『藝術的活動に對する全國民の組織』、『無產者劇場の目的』、『劇場に於ける共產的なる創造的活動』等が議題となつた。また地方人に優秀な藝術を示すためには、演劇列車の試みがある。この列車は舞臺を備へつけ、他に俳優の一行と、衣裳及び道具類を乘せた車室二臺を有し、全露國を巡回して、赤軍及び沿道の民衆の觀覽に供せられる。赤軍の内部に於ても、專門の俳優隊を有する所もあり、演劇や音樂會や活動寫眞は頻々として催される。於農時代に入つてより劇場は頓に增加した。フランスの農民劇場は、全國で百十九といふが、ロシアでは、一縣でも四百を越えるのがあり、全國では三千に及んでゐる。

演劇と同時に、音樂もまた着々として民衆化せられた。モスコー・ソヴイエツトの藝術部は、モスコー市とその附近で、臨時日の間に音樂會を二百回開いた。組織立つた運動の下に、音樂の發

建を期するためには、モスコーに音樂評議會が組織せられた。その會合には音樂界の重要人物が悉く出席し、その結果として、音樂上の問題の解決や計畫を助成するために、著名な音樂家の一團體が成立した。該ソヴイエツトは、定員を三十名とし、内十五人は音樂家から、他の十五人は無産者の團體から選出されることゝなつた、但しこの中の二名は音樂學生の代表者である。音樂學校の數は增さないが、組織は全然一新せられ、生徒は激增して、最近に於て十六歳以上の音樂學生が九千人ある。」

瑞典の社會主義者アラン・ワレニウス氏が、一九一九年一月滯露中の通信の一節に、新ロシアの藝術的活動についてかう述べてゐる。

『藝術は極力奬勵せられて居る。劇場はいつも滿員で、年中開かれて居る。露國の俳優は、一流の名優と競ふことが出來る。世界一の劇場は、モスコーの藝術座である。彫刻家は仕事に忙しい。展覽會と共に、諸所に建立される彫像は、この事實を證明するものである。畫家も目ざましく活動してゐる。どの藝術に於ても、音樂に於てさへ、革命が感ぜられる。古い、慣例的、奴隷的な道は捨てられて、人々は最も大膽な實驗を試みてゐる。それには常に收穫が伴ひ、その收穫は素晴しいものである。一切のことが進んで行く。藝術はそれ自ら解放へ向つて居る。三角派や未來派は、それ〲熱心に眞理を探求する預言者を有してゐる。けれども多くの人々は既に成功して、單に探り求める狀態を脱し、その理想を實現するか、または現在の露國の創造的藝術の特徴である、同く一致した一般の革命的精神に融合し、それを體現して居るのである。』

「五」　文學及び出版

勞農政府は、上の如き美術及び演劇的方面に活動すると共に、創意文學の民衆化にも、寄與して居る。一九一七年十二月十三日、教育人民委員會の文藝出版局の會議に於て、十一月革命以後國有となつた、總ての印刷工場の監理に當る委員會が、創立せられることゝなつた。此委員會は、出版局の代表者と、內國印刷工組合及び國有印刷工場の代表委員會とに依て成立した。

一九一八年二月には、出版局と印刷業代表者との熱心な努力に依て、大仕掛の出版が可能となつた。教育委員會は、ソロヴイエフ、バクニン、ベリンスキー、ガルシン、ヘルツェン、ゴーゴル、ドストエフスキー、レルモントフ、ネクラソフ、プーシユキン、トルストイ、ツルゲネフ、チエホフ其他五十人以上に亘る名家の著作の出版を、向ふ五年間國家の獨占事業とし、半年間に三百萬乃至六百萬部を刊行して廉價に提供した、國民一般の文學書類の消化力は恐るべきもので、需要は殆ど無限であ

るといはれて居る。

また通俗な科學書類を出版すべき委員會も作られた。此委員會には、政治經濟などの社會科學の方面と、自然科學の方面との二部があり、孰れも露國一流の學者を委員として居る。一九一八年前半期に於て、出版局のために支出を許された金額は、一千二百萬ルーブル、後半期には二千萬ルーブルであつた。勞農治下に於ける教育普及の結果、民衆の讀書力は著しく發達し、特に最も喜ばれるのは詩集で、文藝上の不朽の傑作、通俗科學書が是につぎ、たゞ低級な通俗小説のみは殆ど賣行がなく、市場から影をかくさうとさへしてゐる位である。

しかし封鎖の結果としての原料の不足や、財政困難のために政府の出版能力は甚しく制限せられ、良書を無量に刊行することが出來ない。そこで已むを得ず、書店から買ひ集めたり舊地主の書庫から沒收した書物で、學校の圖書館や一般圖書館の內容を充實させた。しかし圖書館は素晴しい勢で增加し、トヴエル縣などは、三千以上の圖書館を有してゐる。また縣に依ては一千位のもある。三十縣の圖書館總數は、一九一九年に於て一萬三千五百であつたが、一九二〇年十月には、三萬七千を越えてゐる。勿論小規模の讀書室は別である。圖書館の入場者も、文盲者の激減、教育の普及と相俟つて、夥しい勢で增加して居る

ワレニウス氏の上の通信の續きは、勞農ロシアの民衆文化がいかにして生長しつゝあるかを明かにしてゐる。

『あるモスコー・ソヴイエツトの幹部は、文化事業のための俱樂部を開いた。政府はこれに一つの宮殿と、二萬ルーブルの基金とを與へた。直ちに目ざましい活動が始つた。室も廊下も、俱樂部員やモスコーの無產者や勞働者で一杯になつた。私は數回この俱樂部を訪ふたが、それだけで新ロシアが、その教育事業から莫大の收穫を得べきことを確信するに十分であつた。

『私のはいつた最初の部屋は、他の俱樂部と何も異ることがなく、たゞの會話や集會にあてられて居つた。けれども向側の室に入ると、長髪黒眼の音樂家が、若い勞働者の群に圍まれながら、バラライカを主として、音樂の講義をして居つた。講義がすむと演奏方の傳授があつた。また他の晩には、ヴイオリンの教授が行はれた。今一つの部屋では唱歌の稽古がある。更に次の室では朗讀があり、又別室では、讀み書きや、算術の稽古が行はれて居る。また英語、フランス語、獨逸語を教授する室もある至る所に熱心が溢れて居り、至る所に悦んで教へる者と、はら教ろとする者とがある。……

『一番面白かつたのは、勞働者が作品を發表する室であつた。……一勞働者が演説をし、それに對して仲間の勞働者が批評を

加へた。丈には其科の受持教師が意見を發表したが、その演說は私が聞いたうちで、最も明晰に自己を表現したものゝ一つであつた。…… 丈に老婦人勞働者が一九〇五年、卽ち第一革命の後に作つた自分の詩を朗讀した。その詩は、形式の素朴と完成とに於て、非常に印象の深いものであつた。そして朗讀はいかにも自然で、全く朗讀とは思へなかつた。幾世紀の間、沈默を守らされてゐた無產階級の民衆が、こゝにその思想、その感情を發露し始めた。全露國に亘つて、無數の道を通じて、自由に對する抑へられた熱望が、今や發現の緖を得たのである。階上の講演室で、自作の詩を、自作の曲で歌つた兵士があつたが、その出來榮えは實に立派なものであつた。」

科學者、藝術家、文學者が、勞働露國に於て迫害されて居るといふことは、全然無根の風說である。勞農政府が、彼等の職業に對する勵精と文化事業に對する協力とを衷心より希望し、能ふ限りの便宜を與へてゐることは事實である。ゴルキーを始め、共產黨員たると否とを問はず、科學及び藝術の眞の使徒たる人人が、政治上の意見は別として、勞農政府の文化事業を熱心に贊賞し、助成しつゝある事實は、ボルシエウイキの非文明てふ誣告に對する好個の反證である。單に科學者や藝術家のみならず宗敎家さへも自由である。勿論國家的制度としての宗敎は廢せられ、寺院の地所は沒收せられ、僧侶もまた、他の民衆同樣、何等かの勞役に就くことに依てのみ生活を保障されることゝなつたが、敎會の存在も、禮拜も、行列も、無干涉で許されて居り、敎會及び僧侶は、なほ保守的な民衆の中に、多少の惰勢的勢力を維持してゐるのである。たゞ學者にせよ、藝術家にせよ、宗敎者にせよ、ブルジョアと結合して、反革命的內亂を企圖し援助する時、無產者政府の忌諱に觸るべきことは論を俟たない、これ以外の點に於ては、すべての職業を通じて、國民は平等の自由を樂しんでゐる。

露國の現狀はなほ多艱多難である、特に資本主義列國の對鎖や侵冦に由來する生產力の不足は、全露國の人民に、物質的窮乏に對する極度の忍從を餘儀なくさせてゐる。然もこの間にあつて、露國の無產者は、精神的、文化的建設の事情に對しては叙上のごとき努力を吝まないのである。

ブルジョアの文化は、全人類の幸福や實生活と遊離した贅澤品であり、有產階級の獨裁を粉飾し、謳歌するための僞善的、階級的文化である。プロ－レタリアの文化は、勞働と藝術との渾然たる融和を意味し、生活の藝術化、藝術の生活化をもつてその生命とする。プロ－レタリアの國に於ては、もはや生活と藝術との悼ましき分裂や葛藤は見られない。何故なら萬人が勞

働者にして同時に藝術家である國に於ては、藝術は即ち生活を意味し、生活は即ち藝術を意味するのであるから。

吾々は、ロシアといふ偉大なるブルジョア文化の破壞者、そしてプロレタリア文化の先驅者の功業を大成せしむるや否やは、吾々萬國無産者の態度一つにかゝつて居ることを知らなければならない。然り、露國革命の成功は、そして萬國無産者の解放は、一に吾々自身の決意如何によるのである。

性の解放・性的道徳の建設

共産治下に於ける性の解放と婚姻の自由

デー・ダブリユー・ブラック

婦人が其解放を努むるにあたつて先づ當面しなければならない最も緊要なる問題は婚姻問題であるといふことは疑ふべからざることである。この問題は二種の方面から觀察することができる。その一は經濟的方面であり、他は感情的方面である。けれども、感情的問題は經濟的問題と密接にして明瞭なる關係を有するものであつて、その一部分は經濟的問題から派生したものである。然し乍ら、縱令聰明にして進歩的なる生活をしてゐる婦人に對してすらもその然る所以を說明しやうとすることは非常に困難なことであるといふことは言ふまでもない。何故なれば、吾々に最も深刻なる情緒と本能とに關する問題は、先づ共感情的方面において現はるゝものであつて吾々が改造に向て誤れる道を進み、更に甚しきに到てはすべての改造を爲す必要なしとまで信ずるにいたるのは全く感情の作用に依るものであることは言ふまでもない。そして感情が吾々の判斷を昏迷ならしむる限り、吾々は決して吾々の位置を明瞭にして確固たるものとすることはできないであらう。そこで、私は先づ第一に結婚問題の感情的方面を取扱ひ、これ等の感情問題が經濟上の問題と密接なる關係を有することを明かならしめ、最後に此兩者の關係について論ずる方法を執ることにする。

近世において、教養ある婦人がその過去に於て最も鋭く感じ猶且現に感じつゝある悲しむべき創痍――それは特に日本並びに支那兩國の婦人にとつては最も恐ろしい痛苦の原因であると私は信じてゐる――は、思ふに婦人を『物』として『財物』としてあるひは又動產として見るも、その高貴にあると、不賤にあるとを問はず、何れにしても心意と想像、憧憬と願望とを有する人類としては看做してゐないところの法律や傳習に依て、彼

等の正しき自信と尊厳とに加へられた創痍であると言はねばならぬ。(婦人が下賤なる願望を有するといふことは、彼等の感情的見解がこれを許さないことは勿論である。)

世界を通じて、露西亜以外の各國の有する婚姻法は今にいたるも、猶婦人は其夫の財産であつて、それは恰かも、その夫が世帶を設くるときに購ふ家具や絨氈の如きものであるといふ原始的な所説をその基礎としてゐる。

此原則は、ある國々――不幸にして支那並びに日本はその一であるが――においては男は恰かも美しき絹や、美味な葡萄酒を買ふのと同じやうに、それぞれ好むがまゝに多くの妻を買ふことができるのである。これ等の國々においては往時に在て離婚は極めて容易なるものであつたが、權利及び財産についての感情的態度は依然として異るところがない。

けれども、その一方において、夫がその妻を財産視すると同じやうに、夫をその妻の財産と見やうとする世にも恐ろしい改造が行はれつゝあることもまた事實である。結婚婦人はこれまで、財産として看做さるゝ慘酷なる束縛狀態から逃れることはできなかつた。彼等結婚婦人は、その兩親の所有品であつた。彼等の兩親は、彼等をその意志の赴くがまゝに處理し、教育し決して彼等の必要やまた好尚に從ふごときことをしない。ただ彼等を最も價値多き財産たらしむるために、只管富裕にして尊傲なる夫を惹きつけることができるやうに貞節にして、技能のある女にしやうとする。

昔、西ヨーロッパにおいては、兩親の財産として取扱はれてゐたものは僅に娘ばかりではなくて、男女を問はず、すべての子供が、財産以上のものとしては考へられてゐなかつた。そして、彼等の兩親の意志に追從し、如何に其兩親が邪惡な殘忍な人間であつても、常に子としての恭順と服從とを示さなければならなかつた。かくして西ヨーロッパにおいては婦人解放の運動と竝んで兒童解放の運動が進展するやうになつたのである。吾々が考へてゐる若き人々、即ち現在に生きつゝある新らしき人々――それ等は時として過激でありすぎる――は、古くして過去に生きる權威者よりも一層價値多く、且重要に遇せられなければならぬ。

言葉を新たにすれば、私が子供を商品として考へざるは、財産としてよりも寧ろ一個の人間としての子供を考へることに基くものである。そして私は婦人解放の問題に對しても同じ主張を適用するものである。

私は婦人問題が共産主義のある形式の手引無くして、之を根柢的に取扱ひ且決定することの出來るものであるか否かといふ

ことを非常に異ふ。奴隷制度の下における婦人は、私有財産制度の問題においての形狀の急激なる變化が、婦人待遇問題の上に永久的な變化を產み出したほど、私有財産制度と密接にして離るべからざる關係を保てゐる。そして過去の長い期間において男が怠惰の中に其富と生存とを獲得して來たと同じく、恐らくは、男が彼等の事業の對照物として、其怠惰と贅澤とを維持するがために多くの妾や、多くの情婦を獲得することを得るといふ事實が長い間續くに相違ない。而して唯性慾的魅惑の技巧をのみ養成し來つた婦人が、過去の長い間を淫賣として並びに妻として彼女自身を男に賣ることによつて、其安易にして懶惰なる生活を得ることができたと同じやうに彼女達は恐らくは將來もまた同じやうなことをするであらう。かくて彼等の智力も其獨立性も其勇氣も發達することは無いであらう。何故なればこれ等の特性は彼女等にとつては男を喜ばしむることに役立つよりも寧ろその妨害となるものなるが故である。これ等の諸問題を其感情的な見解より論議せんとする婦人は、自らを本來高尙にして熱烈なる現實性を有するものなるに關らず、たゞ男の邪惡性によつてその顯現を妨害せられてゐると考へてゐる。或はまたたゞ其手に金を握ることによつてのみ自己の優越を實現し得ると信じてゐる彼等は其唯一の處世法として、結婚か然らずんば賣淫をしなければならないものと考へてゐる。けれどもこれは僅かに一面の眞理であるに過ぎない。

婦人は決して一般的に考へられてゐるやうに、男よりも以上道德的でもなくまた正直でもない。彼女等は常に怠けることを心懸けてゐる。若し彼女等にして能ふべくんば、恐らくは一層愚鈍となり、貪慾となるであらう。

けれども、彼等が常にそうであるのでは無い。何故なれば、婦人の惡事に加へらるゝ刑罰は男に適用さるゝものよりも遙かに苛酷であるからである。然し私は是等の指摘した事實の中から狹義の意味において貞淑と呼ばれてゐる婦人のみを除外して考へやうなどとする者ではない。

貞淑と呼ばるゝこれ等の人々を不貞淑と呼ばるゝ人々と對照するとき、其處には何等の差別が無い。――たゞ總てが彼等自身の便益のために存在してゐるに過ぎない。

淫賣は富裕な男を喜ばすために公然と競爭をする。尊敬すべき婦人は結婚に際しての彼等を複雜纏綿ならしむるために祕密に私通する。けれども一度び結婚するや前の事實を考へなくなくなるよりも寧ろそれがために殆んど堪ふることのできないほどの苦痛を嘗めさせられる。然るに一方高き理想を持て社會のために有益なる事業を爲しつゝあつた婦人でさへも、男に依て

金を補充せられたる低劣なる結婚生活のために、平然として其事業を捨て、其理想を捨てる。

婦人は高尚なる道德的特性について語てはならぬ。——これは男が婦人を手なづけるために發明した獨創的な考案である。また彼等は其眞の衝動及び希望を奪ひ去らなければならない。

私は正式の結婚をして怠惰な生活を續けてゐる婦人と、賣淫生活をしてゐる婦人との間に何等の區別を認めない者である。若しその間に多少の區別があるとすれば、それは唯僅かに、前者はある一定の仕事に從事し、其仕事の中に興味を感じてゐるのに反して、後者は徒らに怠惰である上に不生產的な生活をしてゐるといふだけのことである。

以上婦人はあまりに愚戻極る言葉を以て評價せられて來た。思ふに婦人が感情的の存在なること——これその第一の理由である。私有財產制度の下に於ては男女は女子に義務を負ひ、女子は男子に恩義を負ふてゐること——これその第二の理由である。吾々は現在の婦人を人間として考へず、單なる生殖機關として考へてゐること——これその第三の理由である。

而して未だ婦人は此點において男子と同じき誤謬に陷てゐる。——彼等は婚姻法を好愛する。その理由は彼等に權利を與へるからである。即ち、若し彼等の夫が彼等に對して愛を失つた時に夫が彼女のものであることを主張し、其生活の保護を要求することを得るが故である。

これ等の婦人は屢々、彼等が舊法に從て結婚した時に、可成り遲くなつてから、自由にして且個人的事業たる自營生活を實現する。

それは其以前に在ては非常に困難のやうに見えるけれども、事實は、反て彼等が舊式結婚の賜物たる奴隷狀態よりも遙かに幸福な宜いものである。容易、安全、及び怠惰等の生活は距離を隔てゝ見てゐる時は非常に羨望に堪えないものであるが決して然かく愉快なるものではない。

私は今迄婦人に對する非難の中に幾度びかこの事を說いてきた。——それは私が此議論の出發點において說いたやうに、私は此問題に對する感情的見解を放逐することを望んできた。この感情的見解は財產としての婦人の單純なる概念、及び彼等の道德的特性についての誤まれる思索から生起したものである。所謂婦人の美點についての此考に基かない改革は縱令その最初に於て成功するやうに見えても結局失敗に終てゐる。

社會改造は、既に多くの男に依て爲されたるが如くに今や婦人によつてなされなければならぬ。

それは畢竟するに政治的、及び社會的自由を完成する事業で

ある。そして其問題の經濟的方面が先づ吾々の前に現出する。私は、このこと及び急進的變革の問題について嘗て語つたことがある。それは、社會主義が結婚制度の中に持ち運ばれなければならないといふ考を基礎とするものである。──そして私は直ちに離婚自由の問題に侵入する事とする。

多くの人々は言ふ──『多くの既婚者を改善すべき必要ある唯一の事柄は離婚を容易に爲さしめるといふことである。』と**『惡いのは決して結婚そのものではない。結婚そのものではな**くして、一度び其中に沒入するや再び逃るゝことの出來ない事實が惡いのである』と彼等は言ふ。彼等は此嚴肅なる事實を自覺してゐないやうに見える。

例へば世界全土を通じて最も價値ある婚姻法を有する英國においては、男子はその妻が不貞にして且不信實なることが證明せられた場合のほかはその妻を離婚することが出來ないことになつてゐる。そして同時に他面において婦人もまた夫が彼女に對して惨酷であつたこと、並びに夫が彼女を見捨てて去つたこと等の事實が證明せられないかぎり、前と同じ理由の下に離婚することは出來ないことになつてゐる。また、吾々の了知する如く支那においては、男子は不信實なる妻を追放することができるにもかかはらず、其夫が妻に對して不信實である時には婦人は全く無力である。事實において、法律は夫がその財産の許すかぎりにおいて妻に對して不信實であるといふ事實を許してゐる。

相互の合意による離婚は英國においては許されてゐない。──若し法律が離婚を要求しつゝある夫妻が各自合意の上で明白に離婚に對する協定を爲しつゝあることを發見した場合には彼等を自由にすることは直ちに許されなくなる。かくのごとく**して、離婚は合法的に束縛から解放されるものとしてではなく**罪業に對する刑罰として考へらてゐる。此狀態は、夫並びに妻が共に神に依て結合せしめられたところの基督教的信仰から發生したものである。之れによれば婦人がそのお互同志から離れ去つたならば、彼等はその夫に對して罪業を働いたものとして考へられてゐる。

現代にいたるまでローマ・カトリック教會の宗教的儀式に依て取極められる結婚は法王のある特殊の法令に依るもののほかは一度び決定した後は再び取消すことのできないものとされてゐる。此理由に基いて佛蘭西及び伊太利人は結婚者が熱烈なる宗教心を持てゐるのでなければ、出來るだけ教會的儀式を避けてその國内法に準據することになつてゐる。──國內法は結婚者にとつて完全といふほど寛大ではないが前者と比較すればよ

り以上に寛大であるからである。

アメリカにおいては各自の不信實に基いて離婚することは非常に容易である。その他多くの州または國（尤も東洋と西洋とではその婚姻法に非常な相違があるが）において離婚の許されてゐる場合が可成りに多いことは注意すべきことである。

猶且、男子は若し不信實を理由として其妻を彼が離婚するにあらざれば、すべて彼等の離婚に際してその妻の經濟上の責任を持たなければならなくされる。それは彼の自らに對する犯罪として考へらるべきものである。（此アメリカ法律の經濟的扶助の問題に關して規定せられてあることについては私は今確實に明述することの出來ないのを遺憾に思ふ。けれども、實際法廷上の問題としては私の指摘した如くに行はるゝのである。）

アメリカに於いては何處へ行ても離婚を背德な屈辱的な事實だとして考へてゐる者はない。――此近年における輿論の傾向が多少前よりもこれ等の事實に對して寛大でなくなつたといふだけのことである。

今、若し一夫一婦制の下に自由に離婚し、其妻に經濟的な保證を與へてゐるといふことが結婚問題の解决を為すものであると信じてゐる人々の言ふところが正しいとすれば、吾々は世界の何處に於てよりもアメリカに於て最も完全に近い男女關係を發見するに苦しまざる者である。けれども私にとつては此問題はそのやうに考へることは出來ない。私をして言はしむれば、男女の關係が最善に保持されてゐるのは第一にボルセヴイキの影響が最も濃厚であるロシアである。そして續いては、英國、スカンヂナビア、並びにおそらくは現在の獨逸――私は戰爭以來行つた事がないから具體的の事實は知らないけれども――であると思てゐる。

このやうに、結婚法の實際的形式は最初に考へられた如く改造の根本的問題としては然かく重要でないことが了解されるであらう。不良なる婚姻法を有する英國においては、歐洲大戰爭以來、その男女關係は吾々が前に知てゐたよりも一層改良されてきた。

その主なる理由は英國婦人が其生存を維持せんがために、彼等の意の儘に舊婚姻法を無視しなければならない位置に置かれその必然の結果として、彼等が其夫によつて不正に且殘忍に扱はれてゐるが如きことあらば直ちに自らによる生活を開始するために結婚を破棄しなければならなくされたからである。かくて獨立の生計を營み得るに足る彼等の智識と能力とは婦人をして、恰も道德上の說教をするがごとき態度をもつて母性保護の問題について、男子をして彼等の前に膝間づかしめやうとす

る。

然し乍ら、アメリカにおいては現在に在て猶、若しこれを善け能ふならば、婦人の獨立自營に反對して巧妙にして不合理なる偏見を振り廻すところの所謂『上流階級』として知られてゐる多くの男女がある。若し彼等にして長く此主張を失はざるかぎり、おそらくは世界全土を通じ最も自由なる共婚姻法も決してアメリカ婦人の位地を進歩せしめ改善せしむることは出來ないであらう。彼等は今日猶、從屬者としての、あるひは寄生蟲としての生活を保ちつゝある。そして、その生計を保護するために、彼等自らの性的魅惑に依賴すべく餘儀なくされてゐる。

以上の事實は自らにして吾々の前に『社會主義』或は『共產主義』が、その經濟的並びに感情的の二方面において、結婚問題に關して婦人のために何事を爲すものであるかといふ思索を迫出してくる。

共產主義の下においては總ての婦人は總ての男子と同じやうに法律に依て夫々の仕事をしなければならない。そして、彼等は結婚に依り、または賣淫に依て生活を維持することから逃れることができるであらう。かくして彼等は直接に社會の一員としての權務を擔ふものであつて、彼等の夫に隷屬してゐるのではない。共の處に於ける彼等はその意志の命ずるがまゝに、自由に結婚し、自由に離婚し、心の嗜好に從ひ、從前の如く、桎梏から免がれ、其の生活を維持する唯一の方法として選んだ愛無き結婚生活の中に驅使さるゝ必要はなくなる。そして何人も婦人が男子に對する愛を中止し、その夫から離れ去ることを非倫であるといつて非難する者はない。また婦人自らも昔のやうに彼等が從屬しやうとする男子を見出す前に、不愉快にして不結果な戀愛事件を造り出す必要がなくなる。若し彼等にしてそれを望むならば子供を扶養しなければならなくされることすらも無い。そして彼等は同時にある放任的な夫と結婚することによつて、家庭的な仕事と子供の扶養をすることから免れることができるであらう。輿論と法律とは唯日々の仕事を正直にしない人々に對してのみ役立つものである。要するに彼等が怠惰でさえなければ何をしても自由である。

私はこの組織の必然の結果が、北反對論者の主張するが如く新らしい男女關係の上に忌むべき無法律と無道德とを導き出すものであるとは考へない。否寧ろ私はその反對にかくのごとき組織は反て婦人をして北性的誘惑に對する興味を失はしむるにいたるであらうと考へる。——と言ふのは、これ等の性的誘惑は新社會の下においては最早婦人の生存競爭に對して効力ある武器としての權威を失ふに相違ないから。——。

英國に於ては既に教養ある婦人は、彼等の仕事に對して男子と同じやうに何等の興味を感じてゐないといふことが發見された。この事實は男子と婦人との興味が本質的に異るものではなくて、唯婦人が從來迄男子と同じ事業に携るためにはあまりに不適當に訓らされてきたといふことを證據立てるものである。けれども其眞の因由は、婦人が一度び結婚すれば、彼等は最早前の如くに其事業に携ることが出來なくなると共に更に進んでは其事業を捨てなければならなくなるといふ事實に基くものである。然るに、男子は其結婚するとせざるとに關らず彼等の生活のために其職業に從事しなければならぬ。

法律及び經濟組織が此間の關係を更に明瞭にするならば、かくのごとき組織の下においては婦人も亦其結婚者たると獨身者たるとに論無く其職業的な仕事に從事しなければならぬ。恐らくは彼等は其事業に對し、より徹底的な、より智識的な興味を持つことが彼等の將來にとつて有利であることを知るにいたるであらう。そして今日のやうに母權同盟について喋々たる論議に時間を費すが如きことは全く消え去るであらう。

若し輿論及び經濟的事情が、女に依てその生活を保持せらるる男の數を增大するやうになつてくれば、男子は婦人よりも非人格的な事業に先天的な興味を持てゐるといふ議論の誤謬であることは直ちに了解されるであらう。

而して私が性の問題に對して常に訓練するやうに心懸けてゐるごとく思はるゝのは實に是等の事業についての興味並びに是等の事業を爲すべき義務を生ぜしめんがために外ならぬ。

既に吾々が事實について之を觀察するも、常に其事業に對して興味を持ち、其生活の大部分を事業のために費しつゝある人人は決して一般に謂ふところの不道德な生活をしてゐる人々ではない。——私はこれが眞理であると主張したい。そして事業に携てゐる婦人の場合において此眞理は一層明白となるであらう。事實、子供も無く、生活上に於ける責任も無く、富裕な結婚生活を送てゐる婦人こそ、娛樂としての性的事業に耽てゐる人々と言ふべきである。

故に共產主義を婦人の生活の中に實現しやうとする最初の大改革事業は、必然に彼等をして、社會に對する奉仕、並びに社會の共同生活の利益——それは個人的野心及び感情の前に置かるゝものである——を自覺せしむるに到るものである。

而して、是等の權利と義務とを透して、彼等が今迄行ひ來つたものよりも一層完全な獨立生活が開始さるゝといふことを知らねばならぬ。然らば、社會主義實現後の社會制度の下にあつては、衣食住保護の問題、並びに育兒保護の問題が如何に救は

るべきものであるか？　是等の諸問題についてはあまりに長くなるから此處では述べないことゝする。凡そ女性を救護し、社會を改善しやうとすることに熱心である婦人は須らくこれ等の實際問題に對して深甚なる注目を拂はなければならぬ。

共產的組織の下に在て衣食住の社會化とともに重大なる事業は育兒事業である。而して、是等の家庭生活並びに子供の管理は當然婦女子の任務に歸すべきである。此の仕事は科學的に、また協同的に行はるべきものであつて、それは現在の組織の下に爲されてゐるものよりも一層興味深いものであると共に又現在よりも勞苦の少いものである。——即ち是等の仕事に携はりながら他の興味を追求する閑暇が存分に與へられる。

けれども、結婚制度を考究するに當て吾々が論ぜんとする主要點は兒童の經濟的養育に關してである。共產的制度の下に於ては兒童の養育は社會全體によつて支持せらるべきものであつて、決して兩親に依て個人的に支持せらるべきではない。それ故に子供を持つことの好きな男女は、この制度の下にすべてを托してしまつても何等の不安も痛痒も感じないやうにさせられる。——即ち子供の母は『社會の家庭』に子供を托すことができるがゆゑに彼等は自由に彼等自身の仕事を續けてゆくことが出來るのである。

此の仕事は勿論是等の養育所の一つを經營することに補助を與ふるものたることは言ふまでもない。けれども若し母親が彼女の個人的な家庭生活と其子供の養育とに非常に執着するならば彼は強制的に子供から離れる必要は些少も無い。國家は是等の婦人のために其母權を許容し、彼女が生きてゐるかぎり、財政上の苦勞無しに子供の養育に意を注ぐことの出來るやうに配慮する。

唯此處に重要なる問題は、母が現在組織の下におけるごとく其夫の收入と寛大とに便らんとすることを望んでゐるにもかゝわらず、夫の收入が一家を糊するに充分で無いために常に絕間無き不安に襲はれてゐるといふ狀態に對する處理である。

これが現在組織の下においては眞に憂ふべきことであつて、これがために多くの子無き結婚が現はれてゐるのである。

凡そ男女共に其仕事の價値に應じて市場に於て支拂を受ける。そして若し婦人が男子と同一の仕事を成遂げるやうなことがあるとすれば彼女等は公然と同等の賃銀を要求するのである。然し乍ら、各自に殆んど同じ賃銀を得てきた男子と婦人とが結婚をしたとすれば、そしてその時若し二人の間に子供が生れたとすれば、婦人は勢ひ其世話をするために今迄續けてきた仕事を捨てなければならなくなる。その結果として彼女の收入

は抹殺される。そして、今二人若しくは三人の子供を持てゐる夫と妻とがかくの如き狀態の下において如何しても夫の收入に依て生活しなければならなくされることは自明の理である。——そして、その夫の收入は婦人の收入の場合におけると同じく辛ふじて一人を養ふに過ぎないほどの額であるとすれば生活上の困難は必然に現はれてくる。

此處に於て乎、正式な結婚よりも寧ろ秘密に行はるゝ戀愛事件の方が遙かに有利なものとして迎へられる。

一人の婦人が結婚するといふことが決定された時縱令子供を持てゐなくても彼女はその携てゐた仕事を離れてその生活を夫に支へられる。また同じ事務所なり、または商店なりに傭はれて仕事をしてゐる他の獨身婦人も、彼女が彼等と爭ひでもするかのやうに言ひ張て職業を捨てるやうに煽動する。

これは全く驚くべき害惡であると言はねばならぬ。(獨身婦人は猶屢々其兩親と共に生活をし、又兩親に依て其生活を援けられてゐる)かくのごとき事實は彼等の仕事を好愛し、並びにこれを成し遂げることを欲する婦人をして獨身生活に止まらしめ自由に愛人と秘密な性的關係の下に生活せしめやうとする——思ふに、社會の成員たる男女が、仕事をすることによつて各自の生活を確保し、更に子供に對する經濟的保護は全體としての社會の義務であつて一個人としての兩親の關るところでないといふ事實が承認せられないかぎり、此面倒にして困難なる問題を解決することは出來ないであらう。

最後に吾々は結婚問題の感情的方面に於て如何に共產主義が寄與してゐるかといふことについて述べなければならぬ。これ等の問題についての一般的感情は、既に明瞭になつてゐるがごとく、常に經濟組織並びに社會組織が要求するところの國家的事柄から生れるものである。

私有財產制度の確立してゐる社會に於ては妻は夫の私有財產である。(尤も此場合において各自の隱れたる私有的態度は男女に共通するものではあるが)即ち、夫は妻に對してすべての威權を振り廻すことができるとともに、妻は夫が希望するよりほかの仕事を爲すこともできない。——彼女の全性格は夫の望むがまゝに造り上げられるのである。

故に家庭內の軋轢を避け、幸福に生活せんがためには婦人は自分の性格から一切の特色をもぎ取て唯愚かなる補助者としての位置に立たなければならなくなる。——そしてその行動は自ら不正直になり詐欺的になる。

かくのごとき事實の中から愚鈍にして且巧妙なる魔術師としての婦人の感情的觀察が生れてくる。交際社會においての婦

人は一事一物に對して甚だ寛くされてゐる。若し然らされば總てを擧げて男子の要求の下に隷屬しなければならない。——かういふ解釋は今にいたるも猶世界全土の多くの男女の思想を支配しつゝある。それは科學的觀察を忘れたる社會的習慣に基いてゐるものと言はねばならぬ。素よりある種の婦人の中には先天的に愚鈍な者もあればまた生れ乍らにして魅惑に巧みなる者もある。けれども同じ事實は男子についても言ふことが出來る。即ち是等の事象は性質の特徴についての問題であつて斷じて性夫自身の問題ではない。

要するに婦人の生活は其經濟的地位の良否を俟て決定する。故に若し婦人をして眞に自由ならしむれば其隷屬的生活は忽ちにして雲散霧消する。戰爭以來英國婦人の間に現はれたる事實が雄辯に之を物語るであらう。

私は前に詳かに述べてきたやうに結婚問題の眞の解決は共產的社會制度に依てのみその目的を達成し得るものであると信じて疑はない。そして是以外の他の如何なる方策もおそらくは失敗に終るであらう。

然し、此處に特に注意しなければならないことは社會は一日にして共產制度たることの出來ないといふことである。何となれば、共產制度の達成には國家が經濟上の發達と組織の進歩とを必要とするからである。これは特に婦人の自由といふ問題について當嵌まる事實である。即ち、婦人の自由は人間生活の中の物質方面の科學的組織に關ること深きものであるからである。この一事は如何に強調するも決して誇張であることは出來ない。

思ふに、料理とか、子供の世話とか、或は家の掃除とかいふやうな日常事は猶舊式な個人的方法によつて行はれなければならないであらう。そして、產業社會に於ける勞働を簡易ならしむる近世的發明なくしては『婦人の自由』は現實の事物となることは出來ないであらう。又社會は瞬刻の間に、舊來のやうな習慣的な結婚の變革を全く避くる能はざるものと信ぜしむるに足るだけ多くの人々に、報酬のある仕事を提供することは出來ないであらう。

婦人の多數が自己の生計の獨立を維持することが不可能なるかぎり、彼等は猶舊時代の結婚上の習慣と法律とによつて保護さるゝことを必要とする。何となれば、夫による保護や世話が無くなるとすれば此處に於て彼等は全く寄邊なきものとならねばならないであらうから。改造は須く社會の經濟的發達と提携して進まなければならぬ。蓋し社會の發達は一面に於て婦人自身の智識と實力を發達せしめ、そして獨立婦人の爲に益々多く

の仕事を與へるであらう。そして、經濟上に確固たる地歩を占め、他方に立派な智識と強固な品性とを持つ婦人は自ら實例を示すことをもつて他の婦人の進むべき道を指示することができる。而して更に彼等の注意を大規模な家内勞働――例へば料理や家政の組織整頓に向けることによつて多くの婦人が眞に自由となり、眞に獨立し得べき時機を促進することが出來る。要するに吾々は愛することよりも寧ろ事業を完成することが、男子に於ける如く婦人にとつても生活上の重要なる事實であることを認識し、そして此事實を宣傳し、更に進んでは斯の如き基礎の上に組織せられた一社會の理想を吾々の念願とすることに努力しなければならぬ。蓋しかくの如き社會に於ては正しき仕事に依て婦人も亦男と同じく自分の生計を確保して、其本能と快樂とに追從して自己一身の生活を處理することができるやうになるであらう。

現代戀愛生活の批判

ドクトル・オブ・フイロソフイー　帆足理一郎

一

一體、戀愛とは何であるか。之を問ふのも現代戀愛生活批判の一問題であらう。戀愛生活と云へば、昔も今も變りなきものであるとは勿論考へられない。近代人の戀愛生活は文藝の努力によつて、非常に深められてゐる。古典時代に於ける戀愛生活は社會の傳統や因習の下に壓迫されて、自由なる發展を見ることが出來なかつた。人は社會と手を連ねて歩く爲めに、自からを作らねばならなかつた。自分の感情に從うて、直感によつて世界の權威に服從せねばならなかつた。彼等が無遠慮に自分の情調を育て肥さんとする場合、社會は直に杓子定規を以て、其枝を折り、葉をむしり、根を掘つて、之を枯らしたのである。されば、悲劇に終らない戀愛は戀愛でなかつたかの如き觀あるほどである。

近代、自由解放の思潮が何處からともなく世界の民心に浸潤し、社會生活のあらゆる方面に於て、外的權威の制縛を離れ、個人生命の自由活動が[illegible]され、發見され、個性の自由、生活の自

由、戀愛の自由を稱へ、己が情調の向ふ所、何等の障害あることを認めず、只だ夫れ刹那の自分に忠實でさへあればよい、何で自分を撒いて、過去の人々が作つた社會的規律、夫れは平凡な生活に滿足を求むる人々の妥協的態度から生み出されたものに過ぎない所の因習傳統の別名なる社會的規律に屈服してゐるものかと考へるやうなつた。單に考へる許りでなく、之を實行するやうになつた。

斯る自由解放が打破し去らんとするものは、啻に政治上の專制制度、權力制度、經濟上の資本制度、賃金制度、社會上の階級制度、家族制度許りでなく、個人生活に最も適切の關係を持つてゐる結婚生活の規律をも擲たんとする傾向を齎らしたのである。なるほど、西洋の諺にある如く『結婚が戀愛の墳墓である』ならば、限りなき戀愛の追求は、遂に結婚の破滅を意味し情的生活の自由は結婚制度の破壞を徹底せしめなくてはならぬかも知れない。然し、他面から考へれば、『結婚は天國の育兒園である』と云はれてゐるやうに、夫れは戀愛生活の一完成を意味し、結婚生活によつて、更に新しき戀愛生活、夫れは一層充實した、一層深められ高められた戀愛生活に這入るのではないか、と思はれる。

然らば結婚前の戀愛と、結婚後の夫れとは性質を異にするものであるか。若し異にするとせば、二者を區別する言葉はないのである乎。前者を戀と云ひ、後者は之を愛と云ふのが適當であるか。我等は如何にして戀愛と云ふ熟語を作つたのであるか。戀愛と戀とは同じものであるか、將た又戀愛と愛とは同じものである乎。何故に愛と戀なる二樣の言葉が存在するか。斯る言葉の違ひがある以上、其表現する概念も各異つてゐるのではあるまい乎。**然らば戀愛とは、戀と愛とを一致せした情態を意味するのである乎。**或は又始終一致しないものであつても、或時は戀であり、或時は愛である所の現象を表言する爲めに戀愛なる熟語を使用するのである乎。私は玆に、聊か戀と愛との内容を解剖して、識者の批判を乞ひたいのである。

二

英語やドイツ語やフランス語にては言葉の上から戀と愛の區別はないやうであるが、觀念としては大にあると思ふ。グリシヤ語では明かに言葉の上からも區別が認められてゐる、戀はエロオスと云ひ、愛はアガペエと云ふ。日本語、支那語では勿論明確な文學の區別があつて、之を混同することは出來ない。然し其觀念に於ては、屢々混同されて使はれてゐることもある。例へば、戀人を愛人と云つたり、子が母を戀ひ慕つて、など云ふ如き場合がある。然し、戀人を愛人と云ふ場合の心持と戀人を

戀人と云ふ場合の心持とは全然同一ではない。子が母を戀ひ慕ふと云つても、男が女を戀ひ慕ふと云ふ意味とは大に內容を異にしてゐる。されば、二者混同して、同意語の如く使用される場合に於ては、全然同樣の槪念を云ひ表はしたものではない。

處で、私は戀と愛とを區別する第一の要點として性的特質を擧げる。戀は主として異性に對する性的欲求から起るものであるが、愛は必ずしも性的關係でなく、寧ろ性の觀念を離れて一人格が他の人格又は事物に對する一種の情的滿足又は憧憬を感ずることであると思ふ。然し、只是れだけの槪括的な云ひ草では、餘りに平凡であり、常套であつて、誰れも知つてゐる所であるが、扨て、同性の間にも愛ではなく、戀の關係が成立し得ることは婦人同士の抱合心中などによつて、性的でない戀のあることを證明するではないかと詰問され得る。然し、婦人同士で抱合心中などする場合は、主に戀態心理に屬するものであつて、彼等が同性なるにも拘らず、異性に相接するが如き性的滿足を得てゐたものが、社會の壓迫や色々な事情から同性なる二人の友情が妨げられ、而も其友情は單なる友情ではなく、まれによつて異性に對すると同樣な性的滿足を感じてゐたものが故に、俄かに其自由なる發動を阻害されて、急轉直下、自殺を企つるが如き道行となるアブノオマルな現象に屬する。斯く同性の間に戀が成立する場合があるからとて、戀は必しも性的でないと云へない。夫れは却て同性の間に於ても、夫れが性欲的のものである場合には戀であると云はねばならぬことを立證するものでない乎。

然らば、戀と愛との區別は只だ夫れだけで盡くせるやうな簡單なものである乎。若し夫れが性的欲求の滿足に關するものであれば、何んでも戀であると云ふ意味であるならば、戀と性欲とは同一物であると見るべきではあるまい乎。と云ふ疑問も一理あるので、一體、戀とは何を意味するものである乎、先づ其內容を限界せねばなるまい。

三

惟ふに、性欲と戀と愛とは三つの異つた槪念であり、三つの異つた進化的楷梯を踏んで發達し來つたものではあるまい乎。若し是等三つの者にさうした進化的連環があるとするならば、是等各の內容を生物生活發展の上から考察して見れば、明確なる槪念を得能ふのであると思はれる。

生物進化の過程に於て、何時頃から性欲が發生したか不明であるが、論理上、性の區別が出來ない時から性欲があつたとは思へない。勿論パラミシウム(草履虫)の如き單細胞動物は一虫の身體が二個に分裂して生殖するのであるが、凹てま、与なす

裂生殖を爲し能はないほど老衰したる虫は、會に他の虫と抱合ひし、一體となつた後相離れ、若か還つて而して分裂作用を始める。性的關係の起原は實に玆にあるのであつて、ヴォルヴォックスの如き群棲單細胞動物に至りては、ガミイトなる二種類の生殖作用が既に備つてゐて、小ガミイトと大ガミイトとが必ず結合して、夫れから分裂生殖が始まる。大小のガミイトは是れ女男性別の起原である。然し、復細胞的生物が發達して細胞の分業が起り種細胞と體細胞の區別生じ、種細胞の内に卵細胞と精細胞との區別が出來、此異つた種細胞を異つた個體から分泌するやうになつて、性の區別は明かになる。斯く性の區別が明確になるまでは、兩性相牽く性欲の現象は殆んど皆無に近いものであるに相異ない。けれど、精細胞を分泌する男性が卵細胞を分泌する女性たることが出來ないほど性的分業が固定的になつた時に、生まんとする欲求の發現なる食欲と共に、性欲も特殊の形を採つて發現したものと思はれる。

植物が花咲き實を結ぶ處に性欲の發現があるかも知れないが、意識作用の鋭敏に表はれない植物の性欲は人間の素人觀察には一寸不可解のものとして置くとするも、昆虫や魚類などに性欲の明かなる表現があることは誰れも知る處である。蝶の性的動作は殊更に目立つた現象であつて、異性相引の本能が能く働いてゐることを看取するに苦しまない。

然し、蝶や蜻蛉の性的交渉を戀と云ふことが出來るか、疑問である。四五月の暖かき春の日、池中の鯉は盛んに躍動する。彼等の性的交渉はさも愉快なる享樂と見える。然し、鯉の夫れさへ戀とは云はない。然らば、戀とは單なる性的關係でないことは明かである。

我等は「猫の戀」とか、「妻戀鳥」など云ふ發句の季を持つてゐるけど、是等高等動物の性的關係は詩的な言葉で云ひ表はされてゐる。鳩や雉や鴛鴦や、其他一般の鳥類には極めて感情の美はしい表現があつて、彼等の性的關係には戀の名を附することとがある。戀は多分鳥類以上の動物に於ける性的交渉の或るものを意味する言葉であつて、夫れ以下の動物には通常此名を附する現象がないやうである。さらば性欲と戀との區別は何處にあるのである乎。

四

或る性欲學者は戀を以て肉欲の別名に過ぎないと見る。少くとも、性欲の稍變形したもの位にしか見ないのである。私も戀の起原は性欲にありと思ふ。而して性欲は身體の發育に連れて無意識的に本能的に發動するものであると信ずる。然し、性欲と戀とは同一物ではない。戀は性欲の人間化(ヒユウマナイズ)されたものであ

る。夫れは性欲の一段進化した樣式であつて、恰も花が葉の進化變形したものであるのと同樣であらうと思はれる。然り、戀は性は性欲の根幹から咲き出でたる花である、美花である。戀は性欲なる散文の間に散見する詩歌である、音樂である。

動物に性欲はある。然し、戀はあるか、どうか、俄かに判斷することは出來ない。犬猫の性的關係を屢々戀の名を以て叙述するは、人間の經驗から出た人間的の言葉を以て、類似の現象を形容して云つてゐるのかも知れない。猫の戀と人間の戀とは蓋し同一の論ではないからである。猫が其配偶を慕つて、鳴き叫ぶことあるも、二三日逢はずに居れば、殆んど相手を忘れて了ふ。人間は然らず。戀の破滅の爲めに、擁護の爲めに、或は殺し、或は殺される。心中なる現象は人間のみの特殊現象である。是れ眞に戀することの出來る動物は人間より外にないからではあるまい乎。

戀は單なる性欲ではない。夫れは性欲の理想化されたものである。下町の若い男等が娼婦に戯れて、性の滿足を見出す。夫れは戀ではない性欲の發現に過ぎない。彼等は性欲を理想化することが出來ない。只だ在りの儘の物欲として物的に其欲望を遂げれば、それで滿足する。そんなものは戀とは云へない。

な哲學的な術語を使つて見ることほど、無粹なことはない、否な、無意味なことはない。戀は哲學ではないからである。世に戀の哲學なるものがある筈はない。戀を解するには、戀の話よりより好い說明はない。處で、私は玆に、アーヴヒングの「アルハムブラ」から『戀の順禮、アーメッドアルカメル』のお話を引證する。夫れは戀が何んであるかを解釋せんとした童話なるが故である。

王子アーメッドが生れた時、グラナダの朝廷では大歡びであつた。預言者達は王子の將來をトして王子の繁昌と榮光を祝した。然し、只だ一つ、王子の身に懸る暗雲があつた。然も、夫れは花色の暗雲であつた。王子は卽ち女難の相があると云ふことであつた。此危險を避ける爲めに、父王は一切女人を王子の側に近けず、「戀」なる言葉さへも敎へないことに苦心した。是れが爲めに王はアルハムブラの山腹に隔離した御殿を建て、周らすに庭園を以てし、王子を其中で育て、只だエベンボナベンなるアラビヤの聖者を其師傅として置いたのである。王は聖者に嚴命して『エベンボナベンよ、若し王子が彼の禁制事に就いて知識を得ることもあつたならば、お前の首は安全でないぞ!』と警戒した。『御安心なさいませ、さうした馬鹿らしい事に就い

白髪首が達者でゐる間は」と、語合つた。そして御殿に參上する召使ひは唖ばかりであつて、「戀」の「こ」の字も口にすることの出來ない愚奴ばかりであつた。

王子アーメッドは誠に賢こいお子様で、生れて二十年の間、此乾燥無味な聖者から一切の哲學や科學の知識を授つた。けれど、不思議にも、全く「戀」なる文字も概念も知らなかつた。處が、此頃、王子の行狀が何んとなく變り初めた。さしも熱心で聖者の授ける課業に餘念なかつた王子も、此頃は、勉强を投げ棄てゝ庭園の逍遙に耽り、噴水の邊りで默想することが度び度びであつた。彼れは嘗て教つた音樂に耽り、詩歌に傾倒する風が見えた。聖者は驚いて、俄かに難解な代數の問題を與へて王子の懶惰を戒めた。けれど、『私は代數は嫌いだ。もつと心情に觸れたものを欲しい』と王子は云つた。『是れは大變だ。最早哲學の最後だ。王子は自分でハアトを持つてることを見出したのだ！』と聖者は歎いた。彼は王子を細やかに看視した。王子の生れ付いた柔しい心が今や其發現の對象を求めてゐるのだと彼は見て取つた。王子は云ひ知らぬ情緒の醉心地に驅られて、宮殿の庭園を、あちらこちらと逍遙した。王子は時に池邊の石に踞して、甘き幻想に耽つてゐるかと思へば、忽ちにして琴取り出で、戀ひ付くやうな聲を張り上げて歌ふ。歌つてゐるかと思へば、直に琴を投げ棄てゝ、深い溜め息をつく。何かぶつぶつと私語く。

斯くて段々に此云ひ知らぬ憧れが無心の月、無言の花に擴がつて往く。庭には王子が熱心こめて寵愛してゐる多くの花があつた、多くの木があつた。中にも或るなよやかな枝を垂れた優婉なる姿の珍木は、彼れが其樹皮に自分の名を彫り付けたり、其枝に花輪をぶら下げたり、其枝ぶりを讃美する爲めに短歌を詠んだり、琴を掻き鳴らしたりするほど、熱情を以て溺愛したほどの珍木であつた。

エベン　ボナベンは彼れの弟子なる王子が斯樣な不穩の情態にあることを悟つて、大に驚いた。もう彼は禁制された知識の入口まで來てゐるのだ。只だ僅かの暗示でもあらうものなら、直ぐに其命にかゝはる秘密が啓示されて了ふのだ。それは飛んでも無いことに立ち至つたと、聖者は直に王子を庭園の誘惑から奪ひ去つて、宮殿の高塔内に閉ち込めて了つた。塔は華麗なる多くの部室を有し、四周、際邊なき眺望に風景を稱美することが出來た。然し、それは感じ易いアーメッド王子の情緒に危險である所の匂やかな美しい花や木蔭の風韻から遠く高く、隔離された高塔の絶頂であつた。

然し此永い日を高塔の中で、どうして淋しがらせずに送らす

ことが出來るか、夫れが問題であつた。聖者エベンは既に一切の知識を傾倒して王子を教へ上げてゐたのであつた。王子の氣をまぎらすものは何もない。只だ高飛びの鳥たちが窓側に來て王子と相親しむことであつた。該博なる聖者は鳥の言葉を理解することが出來たので、夫れを王子に傳授して、せめてもの慰めとした。王子の眼は俄かに輝き、直に喜んで教を受け、忽ちに上達した。宮殿の高塔は王子に取つて最早寂寞ではなかつた鷹が來り、梟が來り、蝙蝠が來り、燕が飛んで來た。王子は一一彼等と會話した。然し、彼等高飛びの鳥は餘り頭腦のある話も出來ず、さりとて心情に訴へるほどの話は少しも出來なかつた。王子は再び寂寞を感じた。

五

兎角する内に冬過ぎて、春が來た。花咲き、緑は萠え、芳香芬々として王子の鼻を襲ひ、囀鳥は異性を呼び、巣を造る、喜びの時季が來た。俄かに天地を動揺めかすやうな旋律や音樂が宮城の森から、庭から、鳴り響き、高塔の寂寞を破つて王子の耳に達した。そして其處からも、此處からも、同じ普遍的な題目である「戀――戀――戀」なる歌が聞え、又夫れに應答する音律が有ゆる種類の美はしき調子を以て鳴り響いた。王子は沈

だらう？　世界は此時愛に充ち滿ちてゐるのに、私は何んにも知らない。』

王子は先づ之を鷹に聞いた。鷹は侮蔑の色を作して『そんな卑俗なこと！　地上の平和な鳥達に聞くがよい。大空の王者なる俺等の餌食になる彼等凡俗の鳥達に聞くがよい。俺の仕事は戰爭だ。闘ひが唯一の樂みだ。俺は戰士だから。戀なんて云ふものは知らねえや。』

王子は厭な氣持ちで振り返へり、梟の隱家を求めた。『それこそ平和の鳥だ。屹度私の疑問に答へて呉れるだらう』と、梟に問ふた。問はれて梟は已が威厳を傷けられたかの如く、ぶつきら棒に、『夜毎、俺は研究探索に耽り、晝は終日、俺の學んだ處を此隱家で反復してゐる者じや。貴公の云ふやうな鳥達が何を歌つてゐるか、そんなならと聞く耳は持たない。俺は彼等を憎む彼等のお題目を憎む。ちう神樣こそ有難い！　俺は歌へないのだ俺は哲學者だ。戀なんてえものは知らねえや。』

王子は今、天井裏に登つて來て、薄暗の中に倒まにぶら下つてゐる蝙蝠に聞いた。蝙蝠は輕薄な表情を以て、其上向いた低い鼻皺よせて答へた。『何んでそんな馬鹿らしい疑問を懸けて、俺の平和な朝寐の夢を破るんだ？』と彼は、物憂げに云ひ去つ

の心配事が何んであらうと、俺は知らない。俺は鳥でもなければ、獸でもない。俺は却て夫れを喜ぶ。鳥も獸も皆憎らしい。皆野卑だ。俺はまあ、云つて見れば、厭世家じやゞ戀なんてえものは知らねえや』。

最後に王子は燕の處にやつて來た。燕は高塔の頂上を飛び舞つてゐた。燕は何時も大急ぎで翔けるので、返事する暇さへなさゝうだ。『どう致しまして。私はもう澤山な公用を持つてゐますので、さう云つた問題に就いて考へる暇なんか御座りません私は毎日千軒も訪問しなくてはならず、千萬の要事をたさなくてはなりませんので、はいそんな些細な、くだらない事柄を考へる暇なんか有りません。私は世界市民です。戀なんてものは存じません』。と云ふが否や、谷底深く飛び下つて、忽ち姿を隱した。

王子は失望し、困却した。然し解答を得ることの困難が一層彼れの好奇心をそゝつた。此時聖者エペンが折好くも伺候したので、熱心に彼を迎へて、疑問を懸けた。『おゝエペン聖者よ。貴方は私に地上のあらゆる智識を授けて與れた。然し、只一事私はまだ知らないことがある。どうぞ夫れを教へて下さい。』『王子樣、僕の智慧の在る限り、どうぞ、御遠慮なく。』『では、聖者よ、此『戀』なる事柄の本質は何でありますか?』

聖者エペンは雷霆に打たれたかの如く、色眞青になつてぶるぶると震えた。そして自分の首が肩先から離れかけたやうな氣がした『何が一體、此疑問を王子樣に暗示したのだらう?――何處で王子樣はそんな馬鹿らしい言葉を御聞きなすつたのだらう?』

王子は彼を高塔の窓側に連れて來た。『お聞きなさい、あれを』。聖者は傾聽した。鶯は塔の下手に在る林の中から、此戀人なる薔薇の花に唄つてゐる。何れの花咲く小枝からも、何れの萌え出る梢からも、旋律の樂音が聞えた。戀――戀――戀――夫れが普遍的の題目である。

『偉なる哉神よ!』と聖者は叫んだ『空の鳥さへも之を裏切らんとするのに、誰れか人間の情から此秘密を隱し了すことが出來よう』。彼は顧つて王子に向ひ、

『おゝ王子樣、どうぞ此誘惑的な樂音から耳を塞ぎなさいませ此危險な知識に心をお向けなさいますな。憐れな人類の苦難の半分は、此戀なるものから起るので御座ります。是れこそ兇惡朋友の間に憎惡爭鬪を起す元であり、それこそ卑劣な謀殺や殺虐な戰爭に至る原因であります。煩悶や悲哀や、物憂き日や、眠られぬ夜や、皆これ戀の附き物で御座ります。夫れは青年の花を凋ませ、彼れの歡喜を枯らし、時ならぬ老衰の苦痛を齎ら

す。王子様、神の御惠みで、どうか此戀なるものを知らずにお過ごし遊ばすよう！」

六

聖者は急ぎ去つた。王子は深き困惑の思に沈んだ。彼はどうしても此問題を彼れの思念から掻き消すことは出來なかつた。彼は自身に囁いた、諸鳥の囀る聲々を聞いて見るに、何等悲哀の情調はない。凡ては柔和と歡喜のみだ。若し戀がそんなに苦難と爭鬪の原因であるならば、何故に是等の鳥達は靜寂の場所に悄氣込んでゐないのだらう。何故に彼等は摑み合ひもせず、愉快に梢を飛びかい、花間に戯れてゐるのだらう！」

王子は或る朝、此不可解な問題に就いて默想しつゝ、獨り寢床に横つてゐた。寢室の窓は廣く開かれてゐたので、朝の微風はそよ〳〵と音つれ來つて、ダロオの谷から蜜柑の花の芳しい匂ひを枕邊に漂はせたのである。鳥の聲はかすかに聞えてゐる。そして矢張り何時も變らぬ同じ題目を歌つてゐる。王子が夫れに聞きほれてゐる時、俄かに物音が中空に響いた。夫れは鷹に追はれて逃げ込んだ美しき鳩であつた。鳩は息も切れ〳〵に床上に落ちた。鷙鳥は氣を腐らして獲物を追求せず、山中に高く飛び去つた。

王子は息せく鳩を捉へて、其羽を撫り、自分の懐に抱いて暖めた。鳩の氣分が恢復した時に、王子は夫れを金製の籠に入れ彼れ自身の手を以て最も白い、最も美はしい小麥を與へ、最も清い眞清水を呑ませた。然し、鳩は餌を啄ます、日に〳〵憔悴して、遂には悲しい呻めき聲を出すやうになつた。

『どうしたんです？』と王子は問ふた。『お前の望ものは何でも玆にあるじやない乎？』

『嗚呼いや、さうじやありません』と鳩は答へた。『私は情の友から別れて玆に、而も此嬉れしい春の日に、戀の季節に！』

『戀の季節？』王子は無意識に反響した。『おうさうだ、美しい鳥よ、戀つてどんなもの？、どうぞ私に聞かせてお吳れ！』

『お安い御用で、王子様。夫れは獨りの煩悶、二人の幸福、三人の爭鬪と敵討で御座います。夫れは二つの實在をはたと惹き付け、嬉れしき同情を以て二人を結合する魔力であつて、共に居る時の歡喜であり、離れてゐる時の悲痛であります。王子様には、此柔しい情愛の絆にからまる御方は、お在りなさらなくつて？』

『私は聖者エペンを誰れよりも好きで。然し、彼は屢々面倒臭くつてな、時には側に居ない方がよいと思ふこともある。』

『私の云ふのは、そんな同情ではありません。私は戀のことを云ふのです。生命の偉大なる神秘であり原理である、あの戀の

ことです。夫れは青春の酔心地なる歡興であり、又た老年のしめやかな嬉れし味であります。御覽なさい、王子樣、此祝福された季節に、萬物悉く、まあ、どんなに戀に滿たされてゐるかを、一切の衆生は其配偶を持つてます。どんなつまらぬ鳥でさへも其戀人に歌ふ。此の甲虫でさへも泥の中で雌の甲虫を憧れ求める。**かの胡蝶も高く飄々と舞ひ上つてゐますが、夫れも互ひの戀に幸福なのです。でも、王子樣は、此永い年月、戀も何も知らずにお過ごし遊ばしたの？誰れか異性の柔しい方はお作**りなさらなくて？――王子樣の情を擒にして、嬉れしい苦痛や悲しい歡喜で、胸騷ぎをさすやうな美しい王女樣か、奇麗なお孃樣が、いらつしやらなくつて？』

『成る程、少しは併つたやうだ』と王女は歎息しつつ云つた。『そんな胸騷ぎなら。私とて、理由は知らないが、一度となく經驗したことがある。だが、どうして此物凄い寂寞の地で、お前の云ふやうな事物を見出すことが出來よう？』

かうした問答で、戀の最初の手習ひは濟んだ。そして王子は云つた『あゝあ、戀がさうした歡喜である、戀の妨害がさうした悲哀であるならば、戀の行者が誰れであらうと、其歡樂を妨げてはならない』と。彼は籠を開け放つて鳩を取り出し、柔しく夫れをキツスして、窓から飛ばしてやつた。『往け、仕合せな鳥よ。お前の若い日に、盛春の時に、お前の情の片破れと樂しみなさい。何で此淋しい、戀のない塔中に、お前を私の獄屋仲間にして、よいものか？』

鳩は有頂天になつて歡びの翼を擴げ、眞熱らに中天に翔け上り、そして低くダロオの花咲き亂れた谷間に、颯然として飛び下つた。

王子は後見送つて、尚激しき苦悶に陷つた。嘗て彼を悦ばした鳥の歌は、今や却て彼れの苦痛を加へた。戀？戀？戀？嗚呼憐れなる若者よ？彼は今其呼吸を呑込んだのである。

七

私は讀者と共に玆までやつて來た。王子が其後、現實に戀の對象を求めて、何處まで甘い苦液を吸ふ爲めの冒險的な順禮に出懸けたか、長い物語を玆で繰返す必要はない。

戀は憧れである。性欲に起原を發して、必しも性欲を要素としない、只だ何にか知らん異性に對する憧れの心である。夫れは性欲の枝に花咲く美の崇拜渴仰であると云へよう。夫れは二個の靈體が急轉直下、火に燃えて熔け合ひ結び合ひ、融合一致せんとする生命の原理である。人間は戀に燃えて、兩體一心、一心兩體の神秘を悟る。人は戀に在つて自分ならぬ自分が一層能く自分を支配してゐることを悟る。人は戀に在つて自分の歡

びが全宇宙を抱擁し、森羅萬象に擴充して、恰も白雪の皚々たるが如く、月明の皎々たるが如く、一切の實在を掩ひ盡して、尙餘りある悅びを感ずる。夫れは個性の發展であり、人格の擴張なるが故である。然り、人間は戀に在りて新生の歡びを感じ更生の經驗を味ふ。夫れは物的個我より、靈的社會我に發展する革命的の一大時期を畫するものなるが故である。

戀は甘い。戀は苦がい。其甘きも、苦がきも、單なる物的個我の甘き感じ、苦がき感じではない。其甘し苦がしは宇宙的の意味を持つてゐる。夫れは生命の奧底から湧き返へる甘さ苦がさであつて、其れが爲めに、生命を活かし、生命を枯らす。已が心の燃え立つ戀に自からを燒きて、生命の根を絕つこともあり、或は枯れなんとする生命に活力を注ぎ、老ひたるも若返りて、生の潑剌たる躍動を感ぜしむることもある。戀は誠に不可思議の力である。

八

然らば、更に本篇の主題に歸つて、戀と愛との差別は何處にありやを問はねばならない。

思ふに、戀が性欲から脫化した生命融合の原理であるやうに、愛は戀より脫化した、一層高尙なる深遠なる生命の原理ではないか。

戀は二者一體、兩體一心の神秘を啓示するけれど、夫れは餘りに主我的であり、排他的である。曩に述べたる鳩の戀愛觀に於けるが如く、「二人の幸福であり、三人の爭鬪である」。何故に戀は二人を限り、三人を容れないほど狹い、排他的のものである乎。是れ、戀が未だ全く性欲なる物的基礎を脫却することが出來ないであるである。物的の事物は一人の占有によつて、他人の占有を妨げる。一個の林檎を折半して二人に與ふる時に第三者は其配分に與かることは出來ない。是れ其物的分配なるが故である。

愛は然らず。そは性欲なる物的條件を全然脫却したものなるが故に、即ちそは性欲を精神化理想化した戀以上、遙かに精神化され理想化されたものなるが故に、物的條件によつて妨げられることなく、二人三人四人五人と限りなく、朋友、郷黨、國民、民族、全人類、全宇宙と云つたやうに、無際限に抱擁力を發躍し往くものである。愛は二人よりも三人、三人よりも四人に分ち與へるほど、一層其強さ深さを増すものであるけれど、戀は反對に二人を極致として、夫れから一歩踏み出で、三人、四人と其關係を擴げるに從つて稀薄になり、冷淡になる。見よ多くの異性に關係せる男又は女の如何に輕薄なるかを。彼等は眞に戀の神秘を解することは出來ないのである。彼等の解し能

ふ實は單に肉欲滿足のみ。戀は只だ一人の異性、只一人のみに與へられたる生命の神秘を冒瀆して二人以外の異性と關係するに從つて、戀の幻滅は來る其甘さも辛さも、平々凡々、最早宇宙的のものではなくなるのである。

戀は宇宙的の大歡喜であり、大苦痛であると云つた。愛は然らば宇宙的でないのである乎。否な、愛も勿論宇宙的の原理である。然し、宇宙的だと云ふことの內容は二者同樣ではない。戀は主我的、主觀的に宇宙的であり、愛は客觀的に宇宙的である、戀は自我を忘れて實は最も強く自我の欲求を緊張したものであり、愛は自我を展開して全宇宙と融合一致し、宇宙我れに在りて生くると云ふ神秘を其極致とするものである。

論者或は云はん、人は全身全靈を打込んで一異性を追求する處に徹底的な戀の深味がある。愛には左樣な深味がないではない乎と。あらず。愛は全宇宙の實在を抱擁せんとする其極致に於ては戀以上の徹底的な深味を持つたものである。愛の極致は宗教的渴仰である。戀の強さも宗教的渴仰の切實なるものには及ばない。

成る程、戀は感情的な意味に於て切實である。眞劍である。然し、其切實さ眞劍さには飽滿がある、極度がある。それは地上の花の如く、咲き滿ちて後、凋落せざるを得ない。凋落して實を結ばないことがある。實を結ばなくても、夫れは戀たるを妨げない。寧ろ或る場合には其花を追求することのみを戀ひと言ひて、一旦之を手にするや。直ちに飽滿の極度に達して、之をむしり去ることとなきにあらず、斯くても尙夫れは戀たるを妨げないのである。然るに、愛は如何なる場合にも飽滿を知らない、凋落を許さない。それは花と共に實を結ぶ宇宙の原理である。愛は永へに生命の榮えを現はす進化發展の原理である。

愛は物的、肉體的ならざるが故に、官能に映發する處では、極めて地味な、極めて平和な情熱のやうであるけれど、戀の情熱が盲目的であるに反して、愛の熱情は光に輝いてゐる。夫れは親子の愛、兄弟の愛、朋友の愛、國家の愛、人道の愛、理想の愛、神の愛となつて發現する處、精神生活の極致なる豐富と高尙と、純潔とを示すものである。

九

要するに愛は戀の性的なる物的基礎を脫却して一層純化淸淨化したものである。若し戀と愛との本質を數量的に表現し得るならば、蓋し左の如くであらう。

性欲＝物的要素10

戀＝物的要素5＋靈的要素5

愛＝靈的要素10

宇宙は物的より靈的に進化しつゝある。戀は性欲と愛との中間にあつて、前者より後者に進化する過渡的過程である。戀の淨化された愛は全然靈的のものなるが故に、物的條件から來る飽滿の悲哀や、缺乏の憂愁がないのである。(愛は戀の進化した形であると云つても、愛が發展すれば戀が無くなると云ふ意味ではない。人間に肉體がある以上、戀は人類と共に永續する。)

戀は美の渴仰である。故にそは詩歌の根原である。そは詩歌其者である。然し、愛は清き美、善なる美の渴仰である。故にそは宗教の根原である。そは宗教其者である。惡なる美、汚れたる美を求めても戀は成立つ。他人の戀人を盜み、或は我が戀人を得る爲めに他を殺し財を盜み、詐り、爭ひ、闘ひ、嫉み、憎み、嘲けるとも、戀は戀であり得る。然し、愛は嫉ます、憎ます、爭はず。そは善ならざる美の渴仰を許さない。是れ戀の排他的なるに反して、愛の全抱擁的なる所以である。愛は益々廣く多くの衆生を愛することによつて、益々其意味を高め深める。然るに戀は一人以外の對象に之を捧げることによつて、益々其意味を失ふが故に、之を失はさらんが爲めに、惡事を働いても尙其排他的要素を徹底せしめんとする。それ戀に悲劇の起り易い所以である。

一人の美人を二人の男が懸想する。互に相競ひ、相爭ひ、遂ひに『永遠なる三つ巴の一を除外しなければ戀の目的を達し得ない』ことになる。此場合、甲なる男は乙なる男に讓る。夫れは卑劣であるか。將た眞劍に戀してゐない證據である乎。甲は自からを欺いて乙に讓つたのである乎。あらず、甲は乙の戀心に同情して、乙をして其目的を遂げしめ、自からは退いて只愛に生きんことを願へるだけである。乙と其女との戀を成立しめて、自から愛の歡びを感ず。甲は戀に於ける敗者であるかも知れないが、そは戰つて破れたのではなく、自から讓步して他人の目的を遂げしむる所に、彼れは乙と其戀人なる二人を自分の、愛の中に抱擁せるものである。乙は戀を得て淋しさを感じ、甲は戀を失つて、愛の輝きに一層大なる歡喜を見出す。それは甲者が戀を擲つて愛を取り、物的欲求を抑へて靈的欲求を滿足さす爲めに至大の努力を要し、同時に更生の經驗を嘗めたからである。甲は戀を棄つることによつて戀と愛との二重なる更生の經驗を味ふた筈である。若し此二重なる更生の經驗を味はないと云ふならば、夫れは甲が事實上眞劍に彼女を戀してゐなかつたことを示すものに外ならぬ。若し夫れ甲が乙に讓らんとせし如く、乙も甲に讓らんとする程、共に愛心に充てる人々であつたならば、問題はない。其婦人をして公平に何れかを擇ばしむれば、夫れでよいのである。

論者或は云はん、戀を棄てゝ愛を取る。言葉は即ち立派だが實際にあり得るか知らんと。私は之に答へて、テニスンの「エノックアーデン」を讀んで貰いたいと云ふより外はない。夫れは事實か、事實の理想化されたものか、何れにしてもテニスンはエノックに於て愛の深味を啓示してゐる　漁師エノックは漂流して、故郷に妻子を殘し、十數年のあらゆる苦楚を嘗め盡して漸く郷里に辿り付いた。彼れの喜びは、どんなだつたらう。愛する妻、愛する兒等、今頃はどうしてゐるだらう、どんなに大きくなつてゐるだらう。又彼れの偶然なる歸郷が死者の蘇つたものとして、如何に悦ばしく迎へられるだらう。彼は家に近づいて窓から一家團欒の光景を眺めたのである。豈に圖らんや、エノックが海底の藻屑と消え失せたと云ふ報道が傳つて以來、妻は其幼馴染のフヒリツプなる人の仁俠的な世話によりて救はれ、子供も立派に育て上げることが出來、今では其妻となつて平和な家庭を營み、エノックは旣に死んだものと思つて、只管其形見に殘した子供等を愛養してゐる。幽靈ならぬエノックは今我が家に歸つて此情況を眺め、遂ひ名乘りを上げずに立ち去つたと云ふことである。彼は何處までも我が妻子を愛する。然し、彼等がエノックの死を信じ茲に平和の家庭を營んでゐるものを、今更驚かして平和を破るは妻子を愛する所以ではない。又我が不在の間我が家を助けて呉れたフヒリツプに對する義理でもないと考へたからである。エノックは戀した。されど彼は愛を以て戀に打ち勝つたのである。

私の知れる或るクリスト教の牧師が洋行の留守中其妻は不義の胤を宿した。牧師は彼女の罪を憎んだ。戀の嫉みとして、又「姦淫の故」なればとて、彼女を棄て去ることが出來たのである。然も彼れは七度を七十倍する宥恕の精神を以て、彼女の罪を恕した。其恕しは如何なる苦痛であつたであらう。許されぬ罪を彼れは許した。許された女は其後賢德の聞え高き婦人に生れ變つた。彼は戀に破れ、愛に生きて、彼女の生命を復活させたのである。

一〇

戀は其目的を遂げんが爲めに他を憎み、或は其目的を遂げずして其目的物を憎むに至ることがある。愛は憎みの反對であつて、一を愛して他を愛せず、又は一を愛することによつて、他を憎むの結果を齎らすが如きものであつたならば、夫れは愛とは云へない。

戀はモノマニヤである。一事狂である。戀は、故に、強きが如くして、實は脆ろい。濃厚にして又たあえかなものである。愛は必しも狂熱的でない代りに耐久的である、之は弱く平凡な

るが如くにして、實は強く壯嚴なるものである。戀は盲目的なるが故に、躓き易い。躓いて而して之を收拾するに出なきの歎あらしむことが多い。結局、屢々、努力の濫費となる。愛は理智の光に輝かされた情熱なるが故に、歩一歩自我を展開して、其追求する目標を誤らない。

戀は強烈なる歡樂の酒として、人を醉はしめ、其結果、生命を短縮し、又は即座に死を呼ぶことがある。然し、愛は死の反對である生命の根本原理として、一切の罪と憎みと汚れと惡とを避けて、靈と靈との限りなき融合一致を求むるものである。

戀の目的は所得の享樂である。よし其目的に達する階梯に於ては幾多の曲折ある創造的努力を伴ふものであり、且つ此點に於て、戀は詩歌其者であるとは云へ、究極の目的は醉心地である、耽溺である。戀にデカダンの氣分を取去ることの出來ないのは、之れが爲めである。之に反して愛の目的は絕間なき創造である、建設である、生命の發展向上である。そは何等所得の樂しみを知らない。愛は享くることを喜ぶよりも與へることを悅ぶものである。戀は享けんが爲めに與へる。愛は只だ與へんが爲めに與へる。愛は自分を捧げ與へ、奉仕することの外何物をも求めない。愛夫れ自身が其報償である。戀は享樂を求める之を藝術的に云へは、享樂の藝術である。獨占的、貴族的の藝術である。愛は人生の爲めの藝術であつて、人道的、民衆的の藝術である。

戀は要するに動物的なる性欲の人間化である。愛は人間的な戀の精神化靈化されて、即ち神的となつたものである。されば既に述べたる如く、戀は美の渴仰である點に於て、惡なる美も罪なる美も、汚れたる美も渴仰することがあるけれど、愛は只だ清き善なる美をのみ渴仰する。さりとて、愛は罪と汚れと惡と醜とを棄て去つて顧みないものではない。一專狂なる戀は屢々之を爲す。戀は善美や清美さへも蹴飛して顧みないことがある。然るに、愛は一切の善美、一切の清美を渴仰し、補育し、培養せんとするものなるが故に、よし夫れが罪であつても、惡であつても、醜であつても、之を渴仰することはないけれど、棄てはしない。之を改造し、更生させて、凡てを已が愛の姿に、善美と清淨の實在たらしめんと努力するのである。愛は實に人間の持ち能ふ神的努力の尤なるものである。人は愛に在つて神に至る。神は即ち愛である。

世の戀に惱み又惱まされてゐる者よ。諸子は戀に打ち勝つて他の戀を以てすることは出來ない。戀は獨占的、偏狂的のものなるが故に、二個の戀を爲すものは戀の本質を稀薄にするの矛盾に陷らざるを得ないからである。又戀する者は理性を以て戀

に打勝つことも出來ない。戀は「理外の理」「思案の外」なるが故である。

戀に悩んで戀を制し得る者は、只夫れ愛の熱情あるのみ。愛は戀を醇化、淨化、靈化して宗教的の渇仰たらしめ、此宗教的渇仰の欣求によつて、一人の異性に對する戀は人道の愛、理想の愛、神の愛となる。戀が屢々其渇仰者を宗教に導いて來るのは、卽ち愛に戀を制御する偉大なる力があるからである。

偉大なるかな愛よ。讃むべきかな愛よ。宇宙は物的より靈的に進む絶間なき進化の過程として、物欲を靈欲化し、戀を愛化して進み往かん。世の戀に悩めるものよ、愛に來れ、宗教に來れ。先づ己れを愛し、己れの如く家族を愛し、朋友を愛し、民族を愛し、全人類を愛し、全宇宙を愛し、夫等一切衆生の靈的生命が日夜間斷なく向上發展する進化の大活劇に渾身の努力を注いで奉仕する。其處に吾等の人生はあり、其處に吾等が生命の意義はある。人生の意義を織り爲す緯(よこいと)は實に淸き愛の絶間なき向上發展である。愛は生命靈化の根本原理なるが故である。

性の解放、性的道德の建設の爲めに、眞の愛眞の戀を知るとは、其根本であらねばならない（編者）

「或る」妻から良人へ

―囚はれた夫婦關係よりの解放―

伊藤野枝

今日もまた、終日例のやうに、椽側の椅子の上で日向ぼつこをしながら、ぼんやりと暮してしまひました。

毎日々々斯うして、つまらなく暮してしまふ氣ではないのですけれど、もう可なり斯うした怠惰な日を送り迎へました。病氣のあなたが、あの室のベッドの上に休んでゐる間も仕事に逐ひたてられるやうなおもひをしてお出になる事を考へますと、本當に濟まないとは思ふのですけれど。

でもそんな事を考へながらでも、やはり、それ以上の贅澤だつて考へますの、あの暖かすぎる程の硝子越しの日光を浴びながらぢつと自分の足の爪先きや、日光に晒されてゐる手を見つめたりしてゐますときには、それはいろんな事を、次ぎから次ぎへ考へますの。そして、少しその考へから離れかけた時には

るが如くにして、實は強く壯嚴なるものである。戀は盲目的なるが故に、躓き易い。躓いて而して之を收拾するに由なきの歎あらしむことが多い。結局、屢々、努力の濫費となる。愛は理智の光に輝かされた情熱なるが故に、歩一歩自我を展開して、其追求する目標を誤らない。

戀は強烈なる歡樂の酒として、人を醉はしめ、其結果、生命を短縮し、又は即座に死を呼ぶことがある。然し、愛は死の反對である生命の根本原理として、一切の罪と憎みと汚れと惡とを避けて、靈と靈との限りなき融合一致を求むるものである。

戀の目的は所得の享樂である。よし其目的に達する階梯に於ては幾多の曲折ある創造的努力を伴ふものであり、且つ此點に於て、戀は詩歌其者であるとは云へ、究極の目的は醉心地である、耽溺である。戀にデカダンの氣分を取去ることの出來ないのは、之れが爲めである。之に反して愛の目的は絶間なき創造である、建設である、生命の發展向上である。そは何等所得の樂しみを知らない。愛は享くることを喜ぶよりも與へることを悅ぶものである。戀は享けんが爲めに與へる。愛は只だ與へんが爲めに與へる。愛は自分を捧げ與へ、奉仕することの外何物をも求めない。愛夫れ自身が其報償である。戀は享樂を求める之を藝術的に云へは、享樂の藝術である。獨占的、貴族的の藝術である。愛は人生の爲めの藝術であつて、人道的、民衆的の藝術である。

戀は要するに動物的なる性欲の人間化である。愛は人間的な戀の精神化靈化されて、即ち神的となつたものである。されば既に述べたる如く、戀は美の渴仰である點に於て、惡なる美も罪なる美も、汚れたる美も渴仰することがあるけれど、愛は只だ清き善なる美をのみ渴仰する。さりとて、愛は罪と汚れと惡と醜とを棄て去つて顧みないものではない。一事狂なる戀は屢々之を爲す。戀は善美や清美さへも蹴飛して顧みないことがある。然るに、愛は一切の善美、一切の清美を渴仰し、補育し、培養せんとするものなるが故に、よし夫れが罪であつても、惡であつても、醜であつても、之を渴仰することはないけれど、棄てはしない。之を改造し、更生させて、凡てを己が愛の姿に、善美と清淨の實在たらしめんと努力するのである。愛は實に人間の持ち能ふ神的努力の尤なるものである。人は愛に在つて神に至る。神は即ち愛である。

世の戀に惱み又惱まされてゐる者よ。諸子は戀に打ち勝つて他の戀を以てすることは出來ない。戀は獨占的、偏狂的のものなるが故に、二個の戀を爲すものは戀の本質を稀薄にするの矛盾に陷らざるを得ないからである。又戀する者は理性を以て戀

に打勝つことも出來ない。戀は「理外の理」「思案の外」なるが故である。

戀に惱んで戀を制し得る者は、只夫れ愛の熱情あるのみ。愛は戀を醇化、淨化、靈化して宗教的の渴仰たらしめ、此宗教的渴仰の欣求によつて、一人の異性に對する戀は人道の愛、理想の愛、神の愛となる。戀が屢々其渴仰者を宗教に導いて來るのは、即ち愛に戀を制御する偉大なる力があるからである。

偉大なるかな愛よ。讃むべきかな愛よ。宇宙は物的より靈的に進む絶間なき進化の過程として、物欲を靈欲化し、戀を愛化して進み往かん。世の戀に惱めるものよ、愛に來れ、宗教に來れ。先づ己れを愛し、己れの如く家族を愛し、朋友を愛し、民族を愛し、全人類を愛し、全宇宙を愛し、夫等一切衆生の靈的生命が日夜間斷なく向上發展する進化の大活劇に渾身の努力を注いで奉仕する。其處に吾等の人生はあり、其處に吾等が生命の意義はある。人生の意義を織り爲す緯(よこいと)は實に淸き愛の絶間なき向上發展である。愛は生命靈化の根本原理なるが故である。

性の解放、性的道德の建設の爲めに、眞の愛戀の戀を知るとは、其根本であらねばならない（編者）

「或る」妻から良人へ

——囚はれた夫婦關係よりの解放——

伊藤野枝

今日もまた、終日例のように、椽側の椅子の上で日向ぼつこをしながら、ぼんやりと暮してしまひました。

毎日々々斯うして、つまらなく暮してしまふ氣ではないのですけれど、もう可なり斯うした怠惰な日を送り迎へました。病氣のあなたが、あの室のベッドの上に休んでゐる間も仕事に逐ひたてられるようなおもひをしてお出になる事を考へますと、本當に濟まないとは思ふのですけれど。

でもそんな事を考へながらでも、やはり、それ以上の贅澤だつて考へますの、あの暖かすぎる程の硝子越しの日光を浴びながらぢつと自分の足の爪先きや、日光に晒されてゐる手を見つめたりしてゐますときには、それはいろんな事を、次ぎから次ぎへ考へますの、そして、少しその考へから離れかけた時には

さうして向ひ合つて腰をおろしながら、話し合ふいいお友達のない事が、それはつまらなくなりますの。

もう隨分ながく、私は自分の友達を持ちません。そして友達を欲しいと思つた事もありません。それは、いつも私が話ますように、Kちやんや、Yさんとの暖い友情のおもひでは、時々ほんとになつかしく思ひ出します。けれど、私はそれと同時にあんなにした交りでも、ほんの僅かな理解の隔りが、一寸の間に、知らない全くの他人よりも冷たくする事を考へますと、いつでもいやになります。そして、やはり自分の生活には、他人からの何物も期待してはならないと云ふ考へが強くなります。

それでも、此の頃、ひとりで日向ぼつこをしながら考へ事をしてゐますと、七八年も前に染井の片隅で、こんな日光を浴びながら、よくYさんと僅かな隙を見ては、カラタチの生垣ごしに、たすきがけで、その頃Yさんが一生懸命に譯してゐた『ソニア、コヴァレフスキイの自傳』の中から得る感銘や、お互ひに讀んでゐる書物の批評、お互ひの周圍の人々の噂さや、もつと／＼切實な自分達の生活に對する反省や計畫や、いろんな事を眞面目になつて話し合つた事をおもひ出します。そして、本當にひつそりした身のまはりをそつと見まはすような心持になります。

けれど、又、私はそんな時に、一番深くあなたとの交渉について考へます。私はあなたと一緒に住んでゐる大抵の時に、友達の事なんか考へた事は、まあないと云つてもいゝ位です。私は私の生活のすべてを、あなたに話し、示してゐます。私の生活はあます處なくあなたに知つて貰ふ事が出來るのです。そして、私はあなた以外の友達の必要を全く感じなかつたのです。又、あなたが私にとつてどんなにいゝお友達であるかと云ふ事にすら、全く氣がつかなかつたのでした。

去年、あなたが入獄して留守になつた時、私の上に、一番に激しく襲つて來た寂しさは話相手を失つたさびしさでした。勿論あの時、家には一緒に仕事をしてゐる同志も大勢ゐましたしその人達が、世間並みの交際の人々と違つて、どれ程の信用をおいても決して間違ひのない人々だと云ふ事は充分解りきつてもゐますし、隨分たち入つた事の相談にも與つて貰へました。

けれども、私は『信じ合ふ』と云ふ普通に使はれてゐる言葉以上に信じる事の出來る人々にもなを許すことの出來ない、或る、ほんとうに深い Confidence を投げかける事の出來る話相手が、私には必要だつたのだと云ふ事がはじめてその時にしみじみ分つたのでした。そして、それが、たつた一人のあなただと云ふ事がわかつたのでした。それはあの時に、獄中へさし上

けた手紙にも、たしか書いたと思ひます。

何んと云ふ迂愚な私だつたのでせう。私はあなたと、足掛五年の年月を、一緒に暮して來たのです。そしてやつと其の時に私達の接觸の本當の意味、本當の深さが、解つたのです。五年の間、私はぼんやりして暮してゐたんです。

もつとも、一方から云へば、そんな事を考へるひまもなかつたのですし、必要もなかつたのだと云へば云へるかもしれません。私達はお互ひの生活については、あます處なく知り合つてゐました。また大事な仕事の爲めには、お互ひに出來るだけいゝ同志でありたいとも願ひ、さうすることに努めもしました。私達は世間の所謂夫婦と云ふ關係以外に、一番いゝ友達同志の役目を事實につとめてゐたのです。そして、私共の本當の結合の意味は夫婦であると云ふよりも、寧ろ、一つ道を歩く、一つ仕事をする、最も信じ合ふ事の出來る同志になると云ふ事の方に本當の目的があつた事は、お互ひに一番最初からよく知つてゐた事です。私だつて、知りすぎる程よく知つてゐたのです。

けれど、私達の『家庭』と云ふ形式を具へた共同の生活が、何時の間にか、私をありきたりの『妻』と云ふものゝ持つ、型にはまつた枠への中に入れてゐたのです。ですから、私は、少くとも、あなたと何か仕事の上の話をしたり何か仕事を手傳つたり、或は同志の人達と話しをしたりする時にはさうではありませんでしたけれども、あなたと二人きりの『家庭』の雰圍氣の中の生活では、『妻』と云ふ自負の下に、すべてを取り捌いてゐました。そして、今の感情はいつの間にか、その大事な仕事の上に臨む場合にすらも、『良人の仕事に理解を持つ事の出來る聰明な妻』と云ふ因習的な自負に打ちまかされるようになつてゐたのです。そして、私はそんな事には、ちつとも氣がつかなかつたのです。

あなたと、絶えず一緒にゐた間、それが私にはまるで反省する事が出來なかつたのです。そんな機會が與へられなかつたのです。その自分の間違つた自負の爲めに苦しめられてゐる事は可なりあつたのです。けれども、それが何の爲めかは少しも考へませんでした。私は、あなたに對して時々持つ不滿が、その結果であらうとは思はなかつたのです。

本當なら一緒になつて、ムキにならねばならぬ仕事なのに、あなたがあんまり夢中になるといやでした。一日中外を歩きまはつて歸り、歸ると御飯を食べる間もオチ／＼話をせずに机に向つて坐つたり、お茶を出しても、お菓子を出しても半ば夢中で雜誌の編輯になぞ熱中されると不滿でたまりませんでした。出先きが分らなかつたり、折角骨折つた夕飯の御馳走がムダに

なつたりすると無暗に腹がたちました。

すべてそんな事が、そんな些細な事が、私達の少しもすたたかまりのない生活を折々暗くかげらせました。そして、私はそれに對して全く無反省だつたのです。時には、自分の我儘だとおもつて自分を責めました。けれども又、あなたに對して不滿であつた事はいつでもおんなし事なのです。

つまり、私はいつでも、そんな場合にはたゞ在來の『妻』と云ふ型においてのみしか自分を觀なかつたのです。そして、あなたをも、やはり、此の『妻』に對する『良人』としてばかり考へてゐたのです。私は、自分を出來るだけ、いゝ妻として振舞ふ事に心がけるかはりに、あなたにもいゝ良人であつて欲しいとのみしか考へなかつたのです。そしてそんな小さな心の據り處が、いつの間にか私の內に根をおろして、私を馬鹿にしてゐたのです。

しかし、あなたが留守になると同時に、私は『妻』としての義務を失ひました。私は家の中に、私自身と子供とより他に自分の手を待つてゐるものを見出しませんでした。

あなたの留守に馴れるに從つて、私の生活は漸く、私ひとりのものに歸つて來ました。殊に、私はあの三ケ月の大部分は絕對安靜と云ふ事で全く無爲に過してゐましたので、頭の中ではけなりいろいろな事を考へました。そしてその思索から、私はどの位話相手が必要なものかと云ふ事に考へつきましたのですその時には、本當にどれ程深く、あなたの理解のとゞいた友情が考へられた事でせう。そして、私の其の時に感じた寂寥はまた私を深く考へ込ませませんあなたとの結合の最初の理知と感激を私に取り返してくれたのです。

長い間、私には特別な愛の對象として最も深い執着を感じてゐるとのみ思つたあなたの姿が、もつと違つた點で、もつと力強い、得がたい對象として見出し得られた事は、私にとつてはどれ程の歡びだつたのでせうそれは又私自身とあなたとのみの關係以外に、一般の男女關係の上にも、今迄は氣のつかなかつた點をはつきりと指してくれました。

そして、私が漸くにはつきりと知り得た事が、あなたの口から筆から、どの位云はれた事であつたかわからない事なのですのに、本當には、やはり其の時までわからなかつたのです。

此の思索の結果は、もう一つ他の事を私に教へてくれました。それは、私達が常に一緒に住んでゐる事が、どれ程私自身を陷れてゐるかと云ふ事です。

『妻』と云ふものゝ持つきまりきつた考へ方が、私自身の自由な成長を妨げてゐた事に、私はその時まで全く氣がつかなかつた

つてさあなたとの『家庭』生活を樂しむ爲めに、私は始終ひつきりなしに、その爲めにばかり自分の考へを費してゐました。そして私は『家庭』の事と一緒に、あなたの表面的な生活の一から十までをさへも知つてゐなければならぬのでした。さうなるとあなたの一擧一動のどんな些細な事でもが一々私の氣になるのです。その心配に、私の自制心を失くした時には、私は自身がどれ程苦しむかをよく知つてゐます。それがどれ程馬鹿氣た事であつても。やはり私はその馬鹿氣た心配の中から、自分を救ひ出すことが出來ないのです。しかも其の時には私は全 自分を失つてゐます。

しかし、私がどれ程その自分を苦に病んでゐるかと云ふ事も自分ではよくわかつてゐるのです。私は始終それに打ち克ちたいとおもひながら、ともすれば其處に墮ちてゆくのです、しかし、今迄の經驗から云へば、別れて住んでさへゐれば、私は非常に自分の氣持が樂になるのを知つてゐます。私は私自身きりの生活に打ち込んでゐられるのです。一緒に住んでゐる時、僅かの時間を私の知らない處であなたがお過しになると、その間氣をもんでゐます。けれど、離れてゐれば、そんな事は大概氣にする事を忘れてゐます。あなたがどんな事を爲てお出にならうと、何を考へてお出にならうと、すべて、そんな事は一切氣にせずにすむのです。從て私自身の生活をその爲めに亂されるなどと云ふ事はまるでないのです。それは不思議な程です。

それは何んの爲めなのでせう？ 私の考では。やはり一緒にゐれば『妻』根性を出すからなのですね。しかし離れて冷靜に自分の生活を營んでゐる時には、その根性から解放されてゐるせいなのですねきつと。

今日もまたいゝお天氣。今日は朝の間すこし必要な仕事をしました。それからミシンもすこし動かしました。

機械と云ふものは面白いものですね 私は機械がする仕事はきまりきつてゐて、本當に面白くないつまらないと思ひますがしかし、その機械を動かせる仕組みは實におもしろいと思ひます。私は、機械についての知識と云ふものはまるで持ちません、興味を起した事もそんなにありません。ミシンを買ふ事もたゞあの重寶さが必要だつたのですけれど、私は此の頃、あれでものを縫ふことよりは、機械の組み立てに對する面白さが、樂しみになつて來ました。

私は、あの機械に對しては全く無知なのです。あのミシンを買つた當座、少しばかり通つて來た教師に、私はあの機械に對する知識を授けて貰ふ事を第一に希望したのです。けれど、私はあの若い教師が隨分な低腦で、私の何にも知らぬ頭よりももつと信

用の出來ない事を知つて斷つてしまひました。それから後は、私は機械について來た小さな書物にたよる事にしました。處がこれも本當に必要な事でも滿足には書いてないのです。それから、私はもう何にもたよる事を止めました。そして、私の持つてゐる機械と自分の頭をつき合はせる他はないと思ひました。

それから私はひま〳〵に、機械のあらゆる部分をいろ〳〵に動かすことを初めました。どんな小さな部分にでも、充分注意して、その部分が何の爲めにつくられて居り、何處にその働きが及ぶのかと云ふような事を一つ〳〵ほぐしては觀究めてゆきました。或る時は、あの下糸をまく爲めの附屬機械が全部バラバラに彈いて離れてしまつてどうにもならなくなりました。けれど、そのお蔭で、すつかりもとのやうに組み立てゝしまつた時には、その部分には、もう何んにも私に隱されてゐる秘密はなくなりました。その代りに、私はその時は二時間近くも辛抱づよく一つ一つ處をいぢつてゐたのです。

私が機械に對して一番氣持よく思ふことは、理屈に合はない事は、どんな僅かな事でも、ほんの一厘の違ひでも、決して許されないと云ふ事です。そしてムダなものが一つもない事です。どんな微細なものでも驚く程重大な微妙な働をする事です。或る部分のバネの一寸したゆるみでもが全體の働きにさし支へて來ます。

複雜な微妙な機械をいぢつてゐますと、私は、複雜である微妙を要する事程、特に『中心』と云ふものが必要だと云ふ理屈は通らないのが本當のように思はれます。みんな、それ〳〵の部分が一つ〳〵の個性をもち、使命をもつて働いてゐます。そしてお互ひに部分々々で働きかけ合つてはゐますが、必要な聯絡の範圍を超してまで他の部分に働きかける事は決して許されてありません。そして、お互ひの正直な働きの聯絡が、或る完全な働きになつて現はれて來るのです。

人間の集團に對する理想も、私はやはり、其處にゆかねばならぬものだと思ひます。けれども、現在では此の理想は許されないのですね。

しかし、機械の部分々々のお互ひの接觸には、私達は學ぶべきことがあると思ひます。

私達は日常の生活に、もつと自分々々をよりよく守つて、他人の上にもつとインディファレントであるようにならねばならぬと思ひます。實際、私自身の生活に省みても充分にさう云ふ事が云へると思へますが、自分に近ければ近い程、親しければ親しい程お互ひにその近い他人の生活に無關心であり得ないのですもの。

無關心であり得ない事は大變いゝのですけれど、そして或程度までお互ひに理解をし合ふ事は必要であり協力することも必要ですけれど、人間が各自に持つてゐる、それぞれの其の人のみに限られた生活範圍を犯すと云ふ事は、どうしても許されない事でなくてはならぬ筈だと思ひます。けれど現在私達の周圍のどちらを向いても、お互ひに此の限度を踏み超える事をお互ひに親しい仲の特權のように心得てゐるのです。

新思想を抱いてゐると稱する人達にしてもどうしても、それを自ら制し得ないでゐます、親が子に對する越權、良人が妻に對するなどゝ云ふのは、表向きには攻撃も非難もされてはゐますけれど、實際にそれ等の思想を非難してゐる人達でも、やはり『理解』と云ふ都合のいゝ楯をもつて、此の越權を敢へてしてゐるではありませんか、あなたはさうはお思ひになりませんか。

自分に對する親の越權を憤慨し、反抗した人達が、自分の子供達に一體どんな態度でのぞんでゐるでせう。小さな自分の子供に對して持つ希望も愛撫も、やはり自分が親たちから受けたのと何んのかはりがありませう。大抵の人達は、まだこれからどう育つてゆくかわからない子供の將來に、いろいろ自分勝手な空想を描いたり、希望をもつたりして、其の自分勝手な理想を基礎に教育を授けて、其の理想を幾分かでも實現させようと樂しんでゐはしないでせうか。そしてさう云ふ事か、たゞ子供が小さいからと云ふだけの理由で子に對する親の越權でないとどうして云へるでせう。

それから、夫婦關係です。これも、從來とはすつかり變つて來たとは云ふものゝ、お互ひの生活を『理解』すると云ふ口實の下に、お互ひに、どれ程その生活に自分の意志を注ぎ込まうとしてゐることでせう。そして或る人々は『理解』では滿足せずに『同化』を強ひます。Better half と云ふ言葉が、どれ程ありがたがられてゐることでせう。

愛し合つて夢中になつてゐる時には、お互ひに出來るだけ相手の越權を許してよろこんでゐます。けれども、次第にそれが許せなくなつて來て、結婚生活が暗くなつて來ます。若しも大して暗くならないならば大抵の場合に、その一方のどつちかゞ自分の生活を失つてしまつてゐるのですね。そして、その歩の悪い役まはりをつとめるのは女なんです。そしてその自分の生活を失くした事を『同化』したと云つてお互ひによろこんでゐます。そんなのは本當にいゝ Better half なのでせうけれど、飛んだまちがひなのですね。

けれど實際には、どんな新思想をもつてゐる男達でも『同化』

されるのは嬉しいと見えて、よく小說なんかで、女に對する男の愚痴は實に我まゝなものばかりですね。どんなに『理解』しあつて、愛し合つて一緒になつた夫婦でも、夫婦になれば、妻は良人の生活を一から十まで理解し、同情して、かゆい處に手が屆くようにして暮さねばならぬらしいやうですね。もつともそんな小說では、大抵その妻君は、良人のやうに理解されたり同情されたり良人からされるような仕事も持つてはゐないようですけれど。

私の機械から受けた敎訓によると、そんな場合に、良人は妻の上によけいな侵略的態度に出るので、自分ひとりが輕々と普通に動かないし、妻は能力を奪はれて動くことが出來ないのです。

要するに、他人との生活の交涉には、もつとお互ひに自分本位になる事。他人の生活に必要以外に立ち入らぬようにすることが何よりも大切な事ですね。

しかし、それがまたなか〳〵出來ない事ですね。私だつて、斯うして利口さうな事を云つてゐますけれど、云つてゐるとほりに行かない事はあなたが一番よく御存じなのですからね。

けれど、斯うして、別にゐて、のんきに日向ぼつこでもしながら、ひとりきりの生活をしてゐますと、書いてゐる通りな『お利口さん』になつてゐるのですよ。別居と云ふものは、本當にいゝものですね。

一緒にゐれば、自分を誰れよりもいゝ、あなたの Better half にしようなんて餘計な努力をして、つい知らず〳〵あなたに厄介がられたりしますけれど、斯うしてゐれば、そんな野心なんてちつとも起りません。

私は一體自分自身の生活と云ふ事を始終氣にして、相應にそれを把持してゆかうと考へてゐるくせに、一方にはそんな事には一切無頓着に、たゞ家庭生活の中に溺れ切つてそれを享樂しようとする氣持も可なり澤山持つてゐます。ですから、一方には、私達の生活に對して充分理知的な考へ方をしてゐながら一方には、世間並みの平凡な妻君が、家庭の完全を祈り、良人の無事をねがふのとちつとも違はない氣持で、實際には少しも普通の家庭のやうに安定を持つ事を許されない家庭の安全をいのり、あなたの無事を祈りたくなるのです。

其處で、私はやはり一方では非常によく理解もし信ずる事も出來るあなたのいつもの所謂無茶を、無理解な人達と一緒に恐がるのです。そしてそのあなたの無茶のみでなく、私達の生活のすべてが、理知的には、ちやんとした、何時どんな重大事件が私達の周圍に降らうが湧かうが動じないと云ふ『覺悟』になつ

てゐますけれど、一方ではそれが覺悟までは進み得ずに、或る『不安』になつてしよつ中よはい『妻君』の私をいぢめます。けれど斯して別にゐますと、その『不安』にいぢめられる事からは確かにまぬかれます。ひとりでゐれば、何時でも私は眞面目ですし冷靜です。そしてさう時が、眞にあなたにとつてのいいBetter halfなのですね。ちがひますか。

どうしてこんなに毎日いゝお天氣がつゞくのでせう。かう云ふ風に晴れ切つて風も何もなくて暖かい日には、あんな瓦斯ストオヴなんかで暖めた室になんかゐないで、此方にゐらつしやればいゝのですのにね。

今日のやうな日には、海岸もいゝし、田甫もいゝ氣持ですよ。あの輕い乘心地のよささうな馬車で、こんな日に逗子から長者ケ崎の方、もつと先きの秋谷邊までも散歩に行つたら、どんなにいゝでせう。金澤だつてよござんすね。

去年の今頃は、丁度あなたの留守中でした。あの駒込の家で、會つて來たばかりの、あなたの既決囚姿を思ひ浮べながら、あんまりよくもない體で、こたつを抱へては、おそくなつた雜誌の編輯によく徹夜をしたものでした。あの時一緒だつた人達は此の頃は去年よりももつと忙しい週刊で、相變らず徹夜もしたり、ずゐぶん働いてゐるのでせうね。

けれど、私は今年は何んと云ふのんきさでせう。少々體が自由にならないので、時々は癇癪も起りますけれど、毎日勝手放題に、寢たい時に寢、起きたい時におき、我まゝのありつたけをして、その上に寒い風にもあたらず日向ぼつこをして、話相手がないなんて贅澤を云つてゐるのですもの。バチがあたりますね。

強ひられたる奴隷道德よりの解放

―職業婦人に呈す―

江口渙

一「職業婦人」と云ふ言葉

近頃、いろいろの新聞や雜誌で所謂「職業婦人」に就いての

議論が段々盛んになつて來た。又、一方、婦人に職業教育を與へるための教育機關が益々殖えて來たり、或は婦人に對する職業紹介所と云ふものなどさへ出來て來た。

然し、私の見るところに依れば所謂「職業婦人」と云ふ言葉は、現在のところ可なり意味があいまいである。

世間的の意味で云ふと、所謂婦人高等官とも目す可き女子高等師範や女子大學の先生も亦、女學校、小學校の先生、幼稚園の保母なども入つてゐる。又、婦人記者、婦人タイピスト、女事務員、電話交換手、産婆、看護婦、さては活動寫眞の女案内人、女車掌、女運轉手、家庭婦なども、矢張、この中に入つてゐるやうだ。それに反して、所謂工場勞働婦人と見る可き女工やカッフエの女給、家婢、料理屋、宿屋の女中や、或は鼻緒縫ひ、麻つなぎ、燐寸の箱張、裁縫師、のやうな婦人手工業者や乃至は織染の先生、茶の湯、生花、諸遊藝の先生、女流畫家、女流小說家のやうな自由職業者はこの中へ入つてゐない。又地突き女、女船頭、女の土工手傳、女百姓のやうな屋外勞働婦人は、無論、この中へ入れられてゐない。

然るに、一方世間では職業婦人と云ふ言葉を、「自分の力で自分の生活を支へるために、何かの仕事に從事してゐる婦人」と云ふやうな意味にも解してゐる。然し、かうなると自分の力で自分の生活を支へてゐる産婆や遊藝の師匠などは、當然職業婦人の中へ入る可きだ。だが、世間ではこれ等の人を職業婦人とは云つてゐない。これに反して、所謂職業婦人の中の大部分を占めてゐる女事務員や、女店員の中には、悪くすると自分の生活を支へるに足るだけの給料を與へられてゐない人さへある。從つて、「自活してゐる婦人」と云ふ意味では、必ずしも職業婦人と云ふ言葉の解釋にはならない。そして、かうなると、職業婦人と云ふ言葉の限界がますます不明になつて行く。

私は元來經濟學者ではない。だからかう云ふ問題について、正しい類別をしたり、委しい說明をしたりする資格はないかも知れない。もつと適當な人が出て來て、或はもつと適當な解釋を下してくれるかも知れない。だが、今のところそんな人の出現を待つてはゐられないから、私は私自身の考察に從つて、所謂職業婦人と云ふ言葉を、大體に於いて「婦人の俸給生活者」と云ふ意味に解して置きたい。そして、婦人の屋内手工業者や、自由職業者や、乃至は勞働婦人はこの中へ入れない事にする。こんな區別は今更事新しく云ふ必要もない程、解り切つた事ではないかと云ふ人があるかも知れない。然し、この解り切つた事を、世間では往々好い加減のままで捨ててゐる。だから、私は敢てこの事を一言ここで斷りたいのだ。全く、「婦人の俸給生活

者」……これが今の場合、一番職業婦人と云ふ言葉の内容に當てはまつてゐると云ふ、

二　職業婦人の社會的地位

世間では近頃かくの如く職業婦人が殖えた事に對して、やゝ婦人の實力が認められて來たのだとか、やれかうして婦人の社會的地位も、次第に向上しつゝあるとか云つて、多くの婦人達を喜ばせもし、又、煽てもする。然し、これは果してほんとうの言葉だらうか。そして、こんな事を云はれる事に對して、多くの婦人達は直ちに自分自身を喜んで好いものだらうか。私は決してさうは思はない。否、私はむしろこの點に於いて、全然世間の人と異つた見方をしてゐる。そして、この異つた見方に立つて、所謂職業婦人達に十分の決心を促したいのが、この一文の主旨である。

成程、近年になつて婦人の實力が次第に世間に認められて來たと云ふのは事實である。然し、現在に於ける「世間」と云ふ意味は何であるか。要するに男子の世間ではないか。そして、婦人の實力が世間に認められたと云ふ事は、結局、男子の側から認められたと云ふ事にすぎない。

然かも、婦人達はその實力を、單に男子に認められる事だけに滿足す可きではない。否、進んで認めさす事にまで努力しなければいけない。つまり婦人は婦人自身の實力を發揮するために常に消極的であつてはいけない。飽くまでも積極的である可きである。そして、最後に於いて、所謂「世間」、所謂「社會」を今までの如く單に男子だけの所有ではなく、飽くまでも男子と女子との所有にしなければいけない、こんな事は、無論、今更説くまでもなからう。

然し、今までのところでは、日本の婦人達は、果してどれだけ社會的地位を獲得してゐるのだ。一度、この事を靜かに考へると、全く思ひ半にすぎるものがあらう。つまり、今まで男子が婦人に對して與へたところの所謂社會的位置と云ふものは、結局、男子が持つてゐるよりも、婦人に與へた方が、男子自身にとつて都合の好い部分だけにすぎない。つまり與へるも與へざるも凡て男子本位であつて、決して婦人自身のためではない。さうだ、全くのところ、徹頭徹尾男子本位だ。そして、一方に多少の地位を與へながらも、尙他方に於いて依然として所謂「服従の美徳」を強いやうとしてゐる。つまり男子の自己主義に服従する範圍に於いて、その極僅かな位置を與へてゐるにすぎないのだ。

然し、元來人間の社會的地位とか、權利とかは、決して他人に依つて與へられる可きものではない。自ら立つて取る可きも

のだ。そして、今後に於ける婦人の地位も、矢張同じである。決して男子に依つて與へられる可きものではない。必ず婦人自身の手に依つて取らる可きものだ。男子の好むと好まざるとに關らず、婦人の當然取る可きものは、飽くまで積極的に取る可きである。

然かも現在の社會を支配してゐる制度、並びにその制度に伴つて存在してゐる道德とは何であるか。結局、男子本位の制度であり道德である。否、男子全體と云ふよりも、男子の中の小數者である資本家階級と權力階級とのための制度であり、道德である。そして、男子の中の被支配階級、無產者階級と同じやうに、婦人の大部分も亦、資本家階級と權力階級とに都合が好いか惡いかに依つて、常にその位地を左右されてゐるではないか。殊に職業婦人の現在の位置がこれを立證して餘りある。

成程、資本家階級、權力階級の男子達が、婦人の職業を與へるやうになつたのは、婦人にも男子と同樣、仕事の上の能力がある事を知つたためである。然かも、彼等が一度それを知るとともに、更に進んで職業婦人を求め始めたのは、果して何の理由によるか。それは決して、婦人の能力、實力に對する信賴のためではないのだ。男子と同じ能力をもつてゐる婦人の方が、男子よりも安い報酬で使へるからだ。その上、婦人の方が男子よりも遙かに服從させるに手易いからだ。つまり、安い金でその能力を買へる上に、遙かにひどくこき扱ふ事が出來るからだ。かくして職業婦人は、同じ階級の男子以上に、資本家階級、權力階級の暴虐を受けてゐるのだ。これでも尙かつ現在に於ける社會的地位は、婦人自身にとつて喜ぶ可きものだらうか。否、この一事を思ふ時、多數の虐げられたる婦人自身は、よろしくその髮の毛をむしつて怒る可きだ。

現にこれを事實に見る。女教員の俸給は、平均に於いて男教員よりは必ず安い。女事務員の給料は、男の事務員よりは必ず安い。女タイピストの月給は、平均に於いて男のタイピストよりは必ず安い。

更にこれを勞働者に見よ。河田博士の調査によると、過去十年の間に於いて、日本の女工に拂はれたる賃銀は男工の賃銀よりも、平均五割少いさうだ。然も、仕事の上に於いて、女工と男工との能率の差が五割もある可きものではない。否、事實、或る種の工業に於いては女工と男工との能率は相等しい。殊に紡織工業に於いて女工の方が男工よりも遙かに多くの能率を上げてゐるではないか。然かも女工の賃銀が何故五割も安いか。唯「女」と云ふ性をもつて生れたからだ。そして、「女性」と云ふ一事に依つて、男子よりも遙かに多くその奴隸的境涯に甘んじる事を強

いられてゐるからだ。

然かも、この事は決して卑なる工場勞働婦人の上の問題ではない。同時に職業婦人の上の問題である。「安い俸給でもつて、より多くの服從に甘じる」……この一事こそは、資本家階級、權力階級がその仕事に職業婦人を從事させる何よりの理由なのだ。そして、尙その上に、彼等は「日本婦人の特性」とか「服從の美德」とか云ふ彼等自身にのみ都合の好い常套語をもつて來ていやが上にも、婦人を賃銀奴隷の境涯に追ひ込まうとする。かくても、尙婦人は盲從すべきだらうか。

嘉悅孝子と云ふ婦人は女子教育界の大立物ださうだ。そして、花の日會とか云ふ、婦人團體の首腦者ださうだ。然かもこの婦人が川崎にあるマツダ・ランプ製造所の求めに應じて同所の女工に對して如何なる演説をしたと思ふ。その時、この女流教育家は數百の女工に向つて

「あなた方は會社のお蔭で御飯をたべて行けるのですから、つまり會社はあなた方の恩人ですから、その恩に酬いるために飽くまで會社のために働かなければいけません」

と云ふ風な事を喋つたさうだ。

一體、ほんとうに良心のある人間なら自分と「性」を同じくしてゐる多數の女工達が、資本家の暴虐に會つて賃銀奴隷の境涯に苦しんでゐるのを見たら、必ず心からの淚を澄し、心からの淚をこぼす可き筈である。然るに「會社の恩に酬いろ」とは何事だ。一體全體女工の方から資本家に酬いる可き恩が何處にある。實際、こんな事が好く恥かし氣もなく云へたものだ。然かも、これが女子教育界では新進氣鋭と云はれてゐる人の言葉なのだ。もつて日本の女子教育界の前途も亦知る可きのみだ。然かもこんな事ばかり喋るので、この婦人は多數の女工を持つてゐる會社から頻りに資本家擁護演説をたのまれては、多額の講演料を貰ふさうだ。「女子商業」の校長だけに、成程好い商賣を見附けたものだ。

近年日本の女子教育家達は時代の大勢に押されて「良妻賢母主義」の看板を、次第に「人格完成主義」に塗り變へた。然し、如何に看板を塗りかへたところで、それが依然として資本家階級の男子、權力階級の男子のための教育「服從のための教育」「奴隷のための教育」である以上、結局、婦人のために何のたしになるのだ。かくして婦人自身のための教育は、少しも手がつけられずに殘されてゐる。現代の日本婦人は禍なるかなだ。

私はここで「女の世界」三月號に載つてゐる竹森一則君の文章「暴力壓下の職業婦人」の中の一節をぬいて、更に私の論旨を堅めたい。

竹森君は云ふ。

「キングスレーは漁師の歌で『男は働かねばならぬ。女は泣かねばならぬ』と謳つたが現代にあつては『女は泣かねばならぬ。働かねばならぬ』である。然り。人として働き、女として泣かねばならぬ。女の生存はそのやうに二重の重壓に苦められてゐる。資本主義は人買ひの如く女子を家庭より奪つて仕事場に賣る。母の膝下を離れていたいけ盛りが賃銀取りに賣られる。子供から乳房を奪つて母は工場へ追ひやられる。しかも、その酬ひられるものは男子の半額にすぎない。」

竹森君は更に女子の賃銀が男子の賃銀に比して四割五分乃至七割以上も安い事實を統計に依つて指摘した後、

「女子の賃銀はこんなに安いのである。女子の勞働はこんなに安く買ふ事が出來るのである。利慾の權化に外ならない資本家の、何すれば女子を貧乏人階級の家庭から引つ張り出さずに置くものか。女はその如くにして家庭を破壞される。女はその如くにして賃銀に自活する事が出來ずして、貞操を路傍の泥溝に投げすてるに至る」

とまで喝破してゐる。

これは決して過激な文字でも何でもない、唯虐げられたる婦人のために、心からの血の叫びを發したものだ。

そして、又、竹森君は云ふ。

「女は、女なるが故にその賃銀を値引かる可き何等の理由も有たせられてはならない。即ち同一の仕事に對しては、男女同一に仕拂はれなければならない。而して、これは男子に依つても要求されなければならぬ事である。異性によつて安い勞働を供給されることは男子の賃銀を引下げ、男子の側で仕事を失ふことであるからだ。安い賃銀の相手と勞働市場に於いて競爭する事は、高い賃銀の者にとつてどの道不利益でなければならない。資本主義制度の企業、營利本位の仕事においては、高い勞働は安い勞働に依つて驅逐されるのである」と。

然かも、これは單に勞働婦人の問題ではない。同時に又職業婦人の問題である。そして、この最後にぬいた文章の後半を、更に婦人の側から云へば、婦人が唯婦人であるが故に安い報酬で働く事は、同時に同じ階級に屬する男子の仕事を奪ふ事になるのだ。そして、中に入つて漁夫の利を占める者は唯々資本家あるばかりだ。然かも、かくて男女の間の職業爭奪戰が烈しくなればなるほど、いよいよ報酬は値切り倒され、いよいよ資本家の腹は肥へ、そして、結局職業婦人、職業男子の共倒に終るだけだ。

實際、勞働婦人にとつてもさうである如く職業婦人にとつて

も、その生存の眞實の敵は同じ階級に屬する男子ではない。資本家だ。そして、かかる資本家をのみ擁護する權力階級がさうだ。資本家階級と權力階級。……この二つのものは、彼等によつて虐げられ蹂躙されてゐる階級の男子にとつても女子にとつても、等しく共通の敵であるのだ。この一事を職業婦人は必ず胸に刻んで寸時も忘れてはいけない。

三　職業婦人と階級意識

現今の社會制度に於いて、階級意識、階級觀念は男子の間にも無論強い。資本家階級の男子は無産階級の男子を輕蔑し蹂躙して憚らない。これに對して無産階級の男子、殊に勞働階級の男子は、飽くまで資本家階級を憎んでゐる。又、權力階級の男子は無權力階級の男子を全然無視し度外視してゐる。これに對して矢張無權力階級の男子は頻りに反抗精神を燃やしてゐる。

ところが婦人と婦人の間に於いて、この階級意識の存在が特に好くない意味に於いて盛んである。好くない意味とは何であるかこれについて私は一言したい。

資本家階級の婦人達は、同じ階級に屬する男子達と同じやうに、無産者階級の婦人を輕蔑し切つてゐる。又、權力階級に屬する婦人達も。矢張、無權力階級に屬する婦人達を無視し輕蔑し切つてゐる。ところが無産者階級に屬する婦人無權力階級に屬する婦人達へこの場合は即ち職業婦人は、同じ階級に屬する男子に比して、上の階級の人々に對する態度を可なり異にしないだらうか。

無論、職業婦人達は自分達を支配し、壓迫してゐる階級に屬する婦人達に對して、幾分の憎惡。幾分の反抗的精神は持つてゐるだらう。然し、大體に於いて、これ等の憎惡、これ等の反抗的精神を壓倒するに足りるだけの他の根強い感情を持つてゐないだらうか。私がここに云ふ根強い感情とは何だ。つまり一種のヒケ目である。「自分達職業婦人は彼等上の階級の婦人達に比して、階級的に劣つてゐるが故に、人間的にも亦劣つてゐる」と云ふやうな心持だ。そして、「彼等上の階級の婦人達が職業なしに生活して行けるのに比して自分達職業婦人が職業なしには生活出來ない事を心ひそかに恥ぢてゐると云ふやうな心持だ。かう云ふ心持が、職業婦人達の心の中に、果して流れてゐないと云へるだらうか。

私が惡いと云ふのは、即ちこの心持だ。一言にして盡せば、職業婦人達の心の中に流てゐる、階級意識を基礎とした事大思想だ。無論、無自覺な男子の中にも尙依然としてこの事　思想は流れてゐる。然し、婦人の間に於いて殊にひどい。それは彼の人間的に、人格的に何等の値打もない、貴婦人と云ふ種族

依然として婦人界の間に特殊の勢力を振つてゐると云ふ事實に見ても明かではないか。

所謂貴婦人とは何者だ。彼等の中に自分の力で自分の地位を贖ひ得た者が、果して何人あるか少くとも自分の持つてゐる知識の力、人格の力でその地位を得た人が何人あるか。彼等が現在の社會的地位を獲得したのは、殆ど全部、良人のお蔭である父親のお蔭である。乃至は叔父や叔母のお蔭である。それ以外、何にもない。實際、彼等は良人や父親が金持であるが故に、又は權力を握つてゐるが故に、社會に向つて尊敬を強いやうとしてゐる。然し、そんな人達を尊敬する必要が何處にある。無論、中には人格的に又は知識的に立派な人もゐないでもなからう。然してその大部分は何者だ。唯、良人や父親が氣の毒な勞働者達から殘酷に搾り取つた金で贅澤をして、のらくらしてゐるだけではないか。否。彼等貴婦人にして眞に人間的な心持があるなら、良人や父親が勞働者達から搾り取つたり、權力なき階級を壓迫する事を見て、心から恥ぢる可きだ。然るに彼等はそれを恥ぢやうとしないばかりか、却つてそれを誇りにしてゐる。

然かも、驚くまい事か無産者階級、無權力階級の婦人達……職業婦人達も、矢張、彼等の強いるがままに、彼等に對して敬意を拂つてゐる事だ。否、その上に、彼等に比して自分達自身の境遇を、階級を心私かに恥ぢてゐる事だ。

私が最も悪いと云ふのはこの一事だ。職業婦人達は自分の力で自分の生活を支へてゐる點に於いて、否、中には家族の生活をさへ支へてゐる點に於いて、彼等貴婦人に比して人間として遙かに優れてゐると云ふ事を考へないか。少くとも良人や父親が勞働者から搾り取つた金のお蔭で生きてゐるのではない事だけでも誇る可きだ。又、權力を持つて他人の人格を蹂躙してゐるやうな良人や父親を持つてゐないと云ふ事だけでも誇る可きだ。そして、社會に向つて、もつともつと職業婦人に對する敬意を要求して好い。

唯、ここに職業婦人にとつても、他の無産者階級の男女、無權力階級の男女と同樣、眞に恥づ可き一事がある。その眞に恥づ可き一事とは何であるか。つまり職業婦人達を驅つて嫌でも應でも職業に赴かなければ置かない現在の資本主義的社會組織だ。權力主義的社會組織だ。こんな不合理な社會制度を持つてゐると云ふ事こそ、ほんとうに心から恥づ可き事だ。そして、この根本的な一事に思ひ至つたならば、職業婦人達も、無産者階級、無權力階級の自覺したる男子と同樣に、かかる不合理な社會組織資本主義的社會組織……をもつと正しい社會組織に置き換へる可く、渾身の力を振ふ可きだ。否、時によつては生

命を投げ出しても戰ふ可きだ。既に、ロシアに於いて過去五十年の間に、何百人、何千人の正しい婦人達、立派な人格の婦人達が、唯この一事のためにその尊い生命を捨て、その美しい血を流した事か。殊に、マリア・スピリドノーワや、チナイダ・カノプリヤンニコワなどの悲壯な最期は、男子をして尙かつ愧死せしめるに足るものがある。

實際、日本に於いては世の中がかうまで變りもして來たにも關らず、何故何時まで所謂貴婦人と稱する者をあれほど跋扈させて置くのだらうか。大概の婦人團體、婦人の團體的運動には必ず貴婦人なる者が飛び出す。そして、必ず横暴を恣にする。又、みんながそれを是認して、彼等貴婦人の許す可からざる我儘と利己心に十分な滿足を與へる。然かもその結果は、その團體運動を、最初は多少とも好い內容を持つてゐた團體運動を、必ず無茶苦茶なものにして終る。現に例の生活改善同盟などと稱するものも、貴婦人を迎へ入れた事に依つて、如何に愚劣なものになつたかを見るが好い。然かも、婦人の團體運動の十中八九は必ず貴婦人を頭上に戴く事を光榮としてゐる。然かも、その結果その團體運動の根本精神は必ず蹂躙されて終るのだ。そして、唯、少數貴婦人の野心の犧牲にされて終るのだ。かくても尙無產者階級、無權力階級の婦人達……職業婦人達はその事大思想を捨てやうとはしないのだらうか。有ゆる婦人運動から所謂貴婦人を一掃せよ。權力階級の婦人、資本家階級の婦人を驅逐せよ。若しも、これが出來ないならば、如何に努力したところで、有ゆる婦人運動は結局、彼等の我儘、彼等の利己主義、彼等の虛榮、彼等の野心の犧牲になるばかりだ。

有ゆる婦人解放の運動に於いて、先づ何よりも最初になされなければならない事は、虐げられたる婦人達が、その階級意識を基礎としたる事大思想を心から一掃する事だ。資本家階級、權力階級の婦人並びに男子に對して、ややもすれば敬意を拂ひ又、屈從しやうとする、その間違つた心懸を一掃す可きだ。そして、同じ階級に屬する男子、無產者階級、無權力階級の男子と同じやうに、資本家階級、權力階級に對する憎惡と反抗的精神とを、もつと盛んに燃やす事だ。そして、同じ階級の男子達と相携へて、敢然として彼等の暴虐に當る可きだ。「弱き者よ。汝の名は女なり」と云はれたのは、もはや既に過去の事だ。今後の婦人達、少くとも虐げられたる階級の婦人達は、飽くまで强くならなければいけない。少くとも、人間らしい、生活を送らんがための運動、自己を權力と金力との桎梏から解放してその人格を、完全に樹立させんがための運動に於いては、同じ運動に携る男子と同樣、飽くまでも强くなければいけない。

現代に於ける人類解放の根本精神とは何か。

「自分が他人の奴隸になる事ではない。又、他人を自分の奴隸にする事でもない。唯、自分が自分自身の主人になる事だ」

要するにこの一語に盡きる。そして、婦人解放の根本の精神

とは何であるか。これも矢張同じく

「婦人が男子の奴隷になる事ではない。又、男子を婦人の奴隷にする事でもない。唯、婦人が婦人自身になる事だ。」

さうだ。その通りだ。虐げられたる階級の婦人達は、必ずこの一語を忘れるな。然かも虐げられたる階級の婦人達は、常に二つの重壓に苦しんでゐる。一つは男子の壓迫だ。もう一つは資本主義、權力主義の壓迫だ。その結果、婦人解放の運動は男子解放の運動に比して、二倍の力を必要とする。この點に於いても、虐げられたる階級に屬する今後の婦人は、同じ階級の男子に比して、二倍の强さを持たなければいけない。

私はここに到つて又、竹森君の文章を引用したい。そして、それをもつて私の結論に變へたい。

「女子をして奴隷たらしむるものは、社會組織、經濟組織である。女子の戰はそれ等の修正のために戰ふ可きだ。それは人類の半數を占める全體の女性に依つて戰ふ可き戰である。八億の女性が、八億の男性に對して女性の解放を實現す可く戰ふ戰である。けれども女性の眞實の敵は、必しも一切の男性ではなくて、現在の社會組織經濟組織を維持しつゝある資本家階級、及其代辯者が眞の敵だ。即女性はそれに對して戰を挑む可きだ」

私は實際滿天下の職業婦人に云ひたい。今までのやうに、「服從の美德」と云ふやうな僞りの言葉、資本家階級、權力階級にのみ都合の好い言葉に依つて、努々欺かれてはいけない。又、「日本婦人の女性はその女らしさ」にある。などと云ふ好い加減な言葉に依つて、奴隷道德を强ひられるな。

これ等の言葉は、結局、今までの男子達、殊に、資本主義的精神、權力主義的精神をのみ發揮する事に依つて、その利己心と野心とを極度に滿足させてゐた男子達が、婦人を殊に虐げられたる階級の婦人達を飽くまで自分達の奴隷にし犧牲にせんがために、勝手に造り出した言葉である。こんな言葉を、今後の婦人達は斷じて受け入れる必要はない。それは結局、婦人の存在を無視し男子が勝手に造つた言葉だから。從つて婦人自身には何等の關係もなく又、何等の意味もない言葉であるから。

私は、最後に「法律の保護以外に置かれたる職業婦人の節操」と云ふ點について論じたかつた。然し、あまりに長くなるから又他日の機會に讓る。唯、今日の社會に於いては、資本家階級、權力階級の男子が、虐げられたる階級の婦人達の節操を、蹂躙しやうとするのに對して、國家の法律は何等の保護を與へないと云ふ事を忘れてはいけない。

成程、法律上の條文はあるかも知れない。然し、事實に於いてその法律は何の活用をも見せてゐない。唯、彼等の暴虐を空しく坐視してゐるだけである。この點に於いて虐げられたる階級の婦人、乃至は職業婦人の節操は恰も革命主義者の生命と同樣、全く「法律の保護以外」だ。所謂 "Outlaw" だ。

これについて私は可なり材料を集めてゐるから、他日詳しく論じる事にす。

社會組織の良否の分岐點

バートランド・ラッセル

一

誰れでも、私と同じやうに、社會組織の根本的改造を希望して居るものは、いつかは、自分自身に向つて斯う問うて見ない譯にゆかなくなる。『或る種類の社會組織が自分に善く思はれる或る他の種類のそれが惡るく思はれるのは、一體どうした譯であるか？』と。――これは疑ひもなく個人的性癖に基くことが、甚だ多いのである。たとへば、歴史を讀むに當つて、或る人々は或る時代に沒頭するのに、或る他の人々は或る他の時代に心を牽かれる。或る人々は文物燦然たる開明時代を謳歌するのに、或る他の人々はもつと殺伐な時代の荒削り的な美質を歎稱する。誰れにしても、自分の政治的意見が斯ういふ風に唯氣紛ぐれな一片の好惡感情から發生したものだと考へることを好まないに決まつて居るが、それにも拘らず、私の信じて居ることを有りの儘に言へば、各人の政治上の意見の大部分は、畢竟するに、各人が實在または想像上の社會の或る型に對して懷いて居る好感――それも別にその當否を精細に吟味したといふのではなく、唯漠然と、殆んど無意識的に懷いて居る好感――から來たものなのである。私は、斯うした嗜好とか趣味とかいつたやうな主觀的なものでなく、もつと客觀的な見地に到達することが可能だとも考へるし、また、根本的改造の主張者達は、他の如何なる人達よりも一層明白に、單なる個人的嗜好から割り出した好惡感情以外に別に、社會組織の良否を批判する手段方法を發見する必要があるのだとも考へるのである。

各人の政治上の意見は、直接にはまづ、この處置若しくはあの處置の結果は斯うなるべき筈だといつた調子の議論に依つて、辯護せられる。すなはち、この處置は戰爭の勝因となるであらうとか、あの處置は經濟的奴隷の境遇を促進す

るであらうとか、更にあの變遷は世間には飢饉を流布させるであらうとかといつた調子の議論に依つて辯護せられるのである。しかしながら、我々が一番に避けたいと思ふ危險や一番に獲たいと思ふ利益やを擇り分ける段になると、我々は、誰れ彼れの區別なく殆んど一様に、我々が斯うであつて欲しいと願ふやうな種類の社會の光景を多少漠然と我々の胸裡に描いて、それに依つて我々自身の考への方向を決めるのである。で、たとへば、或る一人は、ホーマーの詩史に現はれて來る英雄たちの、今日から追想するだに痛快極まる戰闘振りの光景を胸に描く所から、決して戰爭を怖れない。また他の一人は、いかに産業的奴隷の境遇が促進されようとも、自分自身なり自分の親近なりは自ら奴隷になるのでなくて、奴隷の驅使者となるであらうと考へるところから、決してそれを怖れない。更にまた或る他の一人は、いかに世間に飢饉が流布しようとも、自分自身は秘密の貯蓄を持つて居るところから、缺乏に處してこそ始めて人々の心の裡に隱れて居る勇氣が外に現はれるのであらうと信じて、矢張り決してそれを怖れない。かういふ譯で、彼等が最良の處置だと考へてゐるものはそれぞれ相異して居て、そして、その相異の根據が、彼等自身にも判然しなければ、他の人々にも判然しないまゝで續くのである。しかもその相異の根據が判然しないものだから、それはおのづから果てしなき論爭の種ともなるのである。人々の政治上の判斷を一層意識的なものに、そして一層明確なものに、從つて一層科學的なものにするための唯一の方法は、各人の意見の根柢に潜んで居るところの理想の社會に關する概念を拔き出すことであり、そしてまた、若し我々の力で出來ることなら、かうした理想の一つ一つに含まれて居る主張に於ける普遍性の有無を検討するために是等の理想を比較對照する方法を發見することである。

私はまづ第一に、世間一般に流布してゐるに拘らず明かに間違つて居るものだと私が信じてゐる二三の社會組織批判方法を吟味し、次に、かうした批判を行ふための正當な方法だと私が考へてゐるものを示唆しようと思ふ。

大抵の時代の大抵の人々の間に於て最も普通に行はれる批判方法は、唯單に祖先傳來の偏見に依つて批判を行ふことである。如何なる社會といへども、苟くも刻々激變の狀態に置かれてあるものでない限りは、前々の時代から承け繼いで來た習慣や信仰やを持つて居るものであつて、しかしも、かうした習慣や信仰やは、何等の疑問なしに受容れられ、

そして少しでもそれに背くなどといつたやうなことは、許すべからざる大罪惡だと考へられてゐるのである。宗教なり、家族制度なり、財産制度なりに重きを置つてゐる各種の習慣のやうなものは、かうしたものゝ中に算ふべきものである。古代ギリシア人が特殊の長所を持つてゐたのは、彼等が商業的國民であり航海的國民であつたところから、相互間に非常に特徴を異にしてゐた無數の諸民族の習慣及び信仰を實見してそして、そのために次第に斯うした總べての習慣――自國の習慣を含めての――根據に對して懐疑の眼を向けつゝ、その是非の檢討を試みるやうになつたからである。若し私の記憶に間違ひがなければ、ヘロドトスの史傳の中に、或るギリシヤ人たちと異邦人である或る部落民との會話が錄されてゐる。それに據ると、ギリシア人たちは、異邦人たちが行つて居るところの、その仲間の屍體を食ふ習慣を見て驚愕したことを述べた。ところが、異邦人たちはそれに答へて、彼等もまた、ギリシア人たちの死者を埋葬する習慣を見て、全く同樣に驚愕したことを語つた。一方の習慣がギリシア人に戰慄を與へたと同じやうに、他方の習慣が異邦人たちに戰慄を與へたのである。斯ういふ風に他の諸民族と交通往來を重ねて居れば、單なる祖先傳來の信仰が固定せる環境の下に生活する人の上に與へる執拗なる影響も、おのづから稀薄になつて行くものである。現代に於ては、かういふ結果は、單に旅行や商業やに依つて促進せられるばかりではなく、同時にまた、工業主義の發達のために社會的習慣の上に必然的に生じて來る變化に依つても促進せられるのである。工業がよく發達して居て且つその由來が淺からざる處に在つては、單に傳統的なものだといふに過ぎない、各國の社會組織を支へるための要柱ともいふべき宗教と家族制度とが、最早人心を繋ぐ力を失つて居るのが見受けられるのである。從つて、傳統の力は、現代に於ては、過去の如何なる時代に於てよりも弱くなつて居ることは事實である。それにも拘らず、現今に於てすら、この傳統の力の程には、恐らく他のあらゆる力を束ばにしたもの程の强さがまだ殘つて居よう。たとへば、私有財産神聖の信仰といつたやうなものを見るがいゝ。この私有財産神聖の觀念は、もと／＼家長專制の家族制度に附帶して居た信仰であつたのでそれは、各人が自己の勞働の產物に對して持つものと想像されて居た權利なり、また、各人が自己の個に依つて獲得したものに對して强行することが出來た權利なりの上にその基礎を持つてゐたものであつた。かういふ私有財產に對する

信仰の根據は其起源が極めて舊いばかりでなく、其存在の理由も段々薄弱になりつゝあるものであり、しかもまだその上に私有財産の肯定のための新しき根據が毫も示唆せられて居ないのであるが、それにもかゝはらず、まだ〳〵最大多數の人間は、主としてモーゼの十戒中の『汝盗む勿れ』といふ掟の禁制的効果によつて、心底から私有財産神聖の信仰に歸依して居るのである。私有財産制度なるものが、工業のまだ起らなかつた時代――すなはち、各個人なり各家族なりが個別的に生産の成果を收得することが出來た時代――から傳來したものであることは、明かである。工業組織の下に於ては、各個人が或る物品の全體を單獨で造るといふことは決してないのであつて、むしろ幾百萬の物品の何千分の一かを造るやうになつて居るのである。かういふ事情のもとに於て、一個人が自分の勞働の成果に對する權利を持て居るといふやうなことは、全然辻褄の合はないことである。今假りに、貨物列車の轉轍に從事して居る鐵道従業員の仕事を例に取つて考へると、この列車中の積載貨物の何分の一が、彼の勞働の成果に該當するものであらうか？　この問題は全然解決が出來ないものである。かういふわけであるから、各人に彼自身が生産したものを得させようといふやうなことを唱道することによつて社會的正義を實現しようとするのは、全然不可能な企てである。マルクス以前の時代に於ける初期の社會主義者等は、動やもすれば、さうしたことを資本主義の不公正を匡正するための方策として薦めたものであつたが、彼等のかうした提案は、大規模工業とは兩立しないものであつたのだから、結局、空想的でもあり、退歩的でもあつたのである。それ故に、私有財産の神聖が認められて居る限りは、資本主義の不公正が匡正され得るものでないことは明瞭である。ロシアの過激派はこの點を理解したから、從つて一切の私有資本を沒收して、これを國家の用途に供したのである。爾來過激派に對する攻撃の聲が益々激烈になつたのは、彼等が私有財産の神聖に關する萬人の信仰に向つて挑戰を試みたからである。公然社會主義者だと名乘つて居る人々の間に於てすら、陋巷に溢れてゐる無産者の群に居場處を供給するために富豪とその宏壯なる邸宅から逐ひ出したといふことを考へるだけで、直ちに戰慄を感じないで居られないものもある。かうした本能的感情は、これを單なる理性で壓伏することが困難である。さうすることが出來るものは唯極少數者に限られてゐるのであつて、しかも彼等がさうする時には、彼等は恰度過激派の首領達のやうに

全世界を敵としない譯にはゆかなくなるのである。しかしながら、一般、單なる象徵的意見を尊重しない社會的秩序を實際に創建すれば、それは、一世紀間にも亙る理論の宣傳に依つて成し遂げ得られる功績以上の功績を擧げたことになるのである。私は信じる、若し現在の動搖が鎭まつた後に人々が物事を正當に評價することが出來るやうになつた曉には、私有財產神聖の信仰に痛撃を與へた一事が過激派の主要なる貢獻であつたのだといふことが判明するやうになつて來るであらう、と。實際上、私有財產神聖の信仰は、決して富者の特權だけに限つて行はれて居る譯でなく、それは實今に於ては實に根本的進步に對する一大障害をなして居るものであつて、そして唯それを破壞するのみ、始めて一の更り善き世界の建設が可能になるのであらう。

實在若しくは想像上の社會組織に對する人々の本能的判斷の上に影響を及ぼす第二の準繩は、さうした社會組織は果して、人々がそれぞれ自分の人格は斯うだと思うて居る通りの種類の人格のために、その發現の道を開かうとする工夫を講じて居るか否か、といふことである。ナポレオンのやうな人格の人が、その少年時代に於てすら、曾て世界平和を夢みて胸を躍らせたやうなことがあらうとは、誰れにだつて想像が出來ないことである。或はまた、企業上の經營者等がすべての機械の所有が不法だとせられて居る境地を描寫したサミユール・バトラーの『エアーウルビン』に心を牽き附けられようとは、誰れが考へても、ありさうに思はれないことである。同樣に、藝術家は、自分の繪が町會議員たちの氣に入るのでなければ彩筆を取ることを許されないといつたやうな社會があるといふことを考へて見るとすら好まないであらう。かういふ根據の上から社會主義に反對する藝術家たちも、數多くあるのである。また科學者たちは、曾てキリスト教の教理に背反した一切の學理を講ずることを禁止してゐたところの、かの第十七世紀に存在してゐた制度に對して奮鬪したものであつた。同樣に、今日に於ては、ロシヤの知識階級者たちは、彼等の受持の學課をマルクス流の見地から教へる義務を持たされてゐることに反對を唱へて居る。また、何かにつけて他人に對して干渉がましく振舞ふことを好む人々(この中には世間に於ける大抵の精力的の人々が含まれる)は無政府主義を喜ばないであらう。といふのは無政府主義の行はれるところでは、各人が自分勝手に行動することが出來るといふことが彼等の氣に入らないのであ

る。如何にも彼等は、彼等自身が現存の權威の一部を占めるのでなければ、それに對して反抗するであらうが、しかしながら彼等はそれを排除して彼等自身の權威をその代はりに打建てることを希望するに止まつて、決してそれを絶滅して無政府主義をその跡に實現しようと企てることはしない。何故なれば、各人が自分勝手に行動することが出來る世の中では、事務的の人々のためにその技倆を揮ふ道が開かれて居るといふやうなことがないからである。之れに反して、氣樂好みの人々は、煩雜なる制度を嫌ふであらう。彼等は、訓練規律及び嚴格なる教育方法を設けることに反對するであらう。大戰中に在つては、彼等は斯うしたもの丶すべてを『プロシア主義』の名で呼んで居た。が、彼等がロシアの現狀にヨリ善く通曉するならば、彼等は今日それ等を『過激主義(ボルシエヴイズム)』の名で呼ぶであらう。私は私の氣分から、かうした見地に同情を寄せることを告白する。そして、私が現今世界に殘つて居る最も氣樂な國であるところの支那の事物を實見して居る間に、かうした見地に對する私の同情が、日々に益々鞏固になりつ丶あるのを覺えるのである。しかしながら、現代は氣樂な時代でもなければ氣分本位の選擇に執着することが許されるべき時代でもない。現代は、我々が現在のことより將來のことをヨリ多く氣に掛けなければならない時代であり、我々の時代の生活よりも次に來るべき時代の人々の生活をヨリ眞劍に念頭に置かなければならない時代である。

新に揭案せられたる社會組織に關して人々が批判を行ふ場合に當つて、多少無意識的に彼等の考へ方に影響を及ぼすところの第三の事柄は、さういふ社會組織を創設するために必要なる努力が人々に取つて不愉快なものではなからうか？といふ問題である。惟ふに革命家達にしても、常に全然この動機に左右せられることがないとはいへまい。世にはたしかに所有階級に對する憎惡を被掠奪階級に對する愛よりもヨリ強く感じて居る人々もある。また、仁慈の感情を忌むべき虛僞と見做して、そしてその革命的情熱を、主として彼等が資本階級に懲罰を加へるのだと考へる時に痛感する欣びから得來る人々もある。かういふ種類の人々は、無論、暴力中心の運動方法の主張者等の中に、常に見受けられたのである。何故なら、暴力なしで彼等の衝動を滿足させる道がないからである。多くの人々が愛國心や軍國主義やを絕叫して居るのもまた、同じ原因から出て居るのであらう。[illegible]

人を嗾しかけて戰爭をさせようと考へることが、彼等に取つては欣びを喚るものであつて、そして愛國心は、戰爭を最も挑發しやすき教義として、彼等に喜ばれるのである。斯ういふのは決して、人々が彼等の信仰の衝動の根源を意識して居るのだ、といふ意味ではなくて、寧ろ、かうした衝動は心理解剖學上の研究の對象となつて居る通りの隱微な過程によつて作用するのだ、といふことを意味するのである。そして私は信じる、是等の衝動の作用を悉く暴ばき出し、我我自身の內に於ける其作用を知悉し、且つ他人にも同樣にそれを知悉せしめるために極力盡瘁するとは、非常に大切なことである、と。何故なれば、隱微の裡に潜伏する無意識の力は、理性に反して作用するものであり、從つて議論に依つてこれを抑制することが出來ないものでもあり、そして、その所在が突きとめられないで居る間は、有るものとも無いものとも全然見定めがつかないものであるから。

第四は、一般に社會學上の著述家や政治的理論家の間に在つては、社會組織を批判する爲に用ひられて居る最も普通なる方法は、當該社會組織が氣持よく觀測することが出來る型を具備して居るか否かを檢らべることである。多くの社會理論家達は社會といふものが其內に於て生活するすべての個人によつて組織せられて居るものであるといふことを忘れ、從つてまた、其中に含まれて居るすべての善きものなり惡しきものなりは、皆これらの個人の上に體現せられなければならないものであるといふことをも忘れて居る。彼等の見解に從へば、國家はその個々の市民等の幸福を懸け離れて別に國家自身に特有の幸福を持つて居るものである。しかも彼等が國家の幸福と呼んで居る所のものは、普通彼等に向つて一種の審美的若しくは道德的滿足を與へるところのものを指して居るに外ならないのである（もつとも、彼等自身はそれを意識しないのであるが）。神が世界を創造した時に、神はそれを見て善しとしたと言ひ傳へられて居るが、それは恐らく、神がその創造せられたる世界に住まはせられるべき不幸なる人間どもの立場からそれを善しと見たのではなくて、寧ろ或るヨリ高き立場から——多分審美的觀測の立場からそれを善しと見たのであらう。それと同樣に、社會理論家達も亦、彼等の想像の裡に或る世界を創造して、それを善しとして悅に入つて居るが、焉んぞ知らん、さういふ世界は、實際に於ては到底住むに堪へられないものであらうとは！　さうした世界は、その體系が如何にもキチンと

整つて居て、其中に住む各人は、中央の主腦部の計畫に從つて割り當てられた仕事に刻々從事して居るのであつて、そして恰度宇宙が神の意志に從つて居る通りに、各人は行政官の意志に從つてゐるのである。無論かうした社會組織を案出した理論家その人が、自分の想像の裡に於て常に行政官の地位を占めて居るものである。この種類の社會理論は、ヘーゲルによつて諸大學の教授達の間に廣められた。またそれは、彼によつてプロシアの國家を謳歌するために用ひられ、そして彼の學問上の隨從者たちによつて、それ〴〵各自の國々の保守政策を擁護するために利用せられた。大戰以來ヘーゲル派の理論は、或る神秘的な働きによつてドイツ軍のベルギー侵入を鼓舞したものと想像されたところから、それは大いにその威嚴を失墜した。しかしさういふものゝ、ヘーゲル式見方は別の樣々の形式に於て依然として廣く流布して居るのである。工業主義に對する信仰の大部分は、殊にそれが未開諸國に適用せられる場合に於て、矢張り同じ種類の物の見方の範疇に屬するものである。工業的意識の進んだ人々の眼から見れば、南國の怠惰なる土人等が芭蕉樹の蔭に蹲踞して、その落果を拾つて食ひながら、悠然として不生產的の暢氣さを樂んで居る光景を見るのは、堪へられない程の焦らだたしさである。社會主義の若干の分派もまた、かういふ缺點を伴つて居る。すなはち、社會主義のそれ等の分派は、寧ろ理論的觀測の上から見て間然する所なき國家の雛形を案出することに沒頭して、その爲めに、その個々の市民の氣分に於て快適に感ぜられるやうな國家を計畫することを忘れて居るのである。帝國主義の大部分もまた此範疇を出でないものである。地圖の上に於て廣大なる面積が自國の色に塗られて居るのを見るのは愉快なことであるが、他國の領土が突出して居るために自國の版圖の境界線が甚だしく凹凸して居たり、それが所在に散在する飛び地になつて居たりしてゐるのを見るのは不愉快なとである。と、斯ういふ風に國家が住みよきか否かの點を標準としてではなく、國家の輪廓が觀測するのに宜ろしきか否かを標準として、その價値を批判しようとするが如き習慣は、實際その國家の政治の下に生活する人々の實感から來たところの權積的の經驗に重きを置かずして、むしろ觀測者としての微温的な刹那的な感情に重きを置いた結果として發生したものである（觀測者と批判を行ふ人とが偶然一致した場合に於て）。になるのである。かういふことは、たしかに、一般社會理論の發生のところの有りふれた現象である。[illegible]

くも社會理論家にならうと望んで居る人々は、次に掲ぐるところの不明なる、しかし大切なる箴言を刻々銘記することを忘れてはならないのである。それは斯ういふことである。——國家といふものは、人々が實際その中に生活して居るものであつて、決して單に書物で讀んで始めて理解するやうなものでもなければ、また高い山から風景を觀測するやうな心持で觀測すべきものでもないのである。——

二

これまでのところでは、我々は、我々が間違つてゐると信じてゐるところの社會批判の諸方法に關して論述して居たが、今は我々が贊成することが出來るやうな社會批判の諸方法に向ふべき時である。

よき社會には二つの要素がある。それは、第一には、その社會を構成して居る人々の現在の幸福であつて、第二には、將來更にヨリ良き社會に發達して行かうといふ能力である。これらの二つの要素は、決して常に相駢立するに限つたものではない。時としては、現在に於て餘り幸福だとはいへない社會が、既往に於ける如何なる制度よりもヨリ良きものとなるべき見込のある種子を持つてゐることがある。時としては之に反して、現在の幸福が廣く行き渡つてゐる社會も、非進歩的で、しばらく靜止狀態を維持した後、最後に於て頽廢に歸してしまふことがある。それ故に、これらの二つの要素をば、我等が出現せよかしと願つて居る樣な種類の社會の別々の構成分子として說明することが必要である。若し社會動學がもつと發達して居て、そして社會の將來に關する豫測の技術が今の樣に不確實でなかつたならば、進歩的要素の方が現在の幸福よりも、社會に於ける大切な性質と見做されたであらう。しかしながら、政治は決して科學的に行はれて居るのではなく、そして社會の將來がどうなるかといふことは甚だ不確實な問題であるから、從つて、疑つて見ようもない現在の幸福が、どうなるかも測られない將來の幸福と、同等に重く見られなければならない譯合になつて居るのである。素より、若しこの將來の幸福といふものが實現せられたら、それは、單に永い期間存續したといふだけの理由で存在して居る現在の如何なるものよりも大切なるものになるといふやうなことは、あり得ることだが、しか

し、それは要するに、さうなつて見なければ判らない將來の問題なのである。諺にも『掌の中にある一羽の雀は、草叢の中に居る二羽の雀と同價値である』と言つて居るが、まして草叢の中に一羽の雀でも居るか居ないかゞ確實に判らない場合には、掌の裡の雀が一層貴重なものとなる譯である。それ故に、我々はまづ、社會の現在の幸福を構成するものは何かといふ問題から研究し始めよう。

社會の現在の幸福を批判するに當つては、我々は二つの相反する謬想を避けなければならない。是等の二つの謬想といふのは、第一、貴族主義者（アリストクラット）流の謬想、及び、第二、傍觀的觀測者流の謬想を指すものである。我々は今しがた既に傍觀的觀測者流の謬想を考察しておいたから、故にそれを再說する必要はない。だが貴族主義者流の謬想とはどんなものかといへば、それは、或る社會を批判するに際して、該社會が少數の特權的集團に與へて居る生活を標準として批判する傾向を指していつたものである。古代のエジプト帝國やバビロニア帝國は、帝王や僧侶や貴族やには極めて快適なる生活を與へたが、彼等以外の人民は、奴隸か若しくは農奴かであつたのであつて、そして、不斷の勞役と窮乏とから成立つた生活を忍ばなければならなかつた。近代の資本主義は、企業上の管理者らには氣持のいゝ生活を與へる。なぜなら、彼等は、冒險を試みたり、自由なる創意を働かせたりすることも出來れば、贅澤を享樂したり、時人の感歎を博したりなどすることも出來る。しかしながら、他方に於て大多數の勞働者の群はどうかといへば、彼等は唯、大なる機械の一部に於て、決まり切つた仕事を宛てがはれて居るのにすぎないのである。彼等は、生きんがための必要上から、その決まり切つた仕事に縛り附けられて居て、そして、同盟罷業なり革命なりといつたやうな集合的行動に依つて機械全部の運轉を停止すること以外には、一切有效なる任意の行動を取ることが出來ないのである。しかも、同盟罷業なり革命なりを企てるには、彼等は直ちに飢餓に脅かされる危險を覺悟して掛からなければならないから、さう容易には手が出されないのである。資本主義の擁護者は、動やもすれば、資本主義が企業心の旺盛なる人々に自由を與へることを誇りがに說き立てる。けれどもかういふことは、貴族主義者流の謬想の一例である。成るほど昔日のアメリカ合衆國がさうであつた通りに、それからまた、南アメリカが現在に於いてでもさうである通りに、新開の國々に於ては、資本主義

が企業心の旺盛なる人々に自由を與へるといふ言葉の裡にも、幾分かの眞理が宿つて居るかも知れないし、從つてまたかういふ國々に於ては資本主義がその最良の姿で現はれて居りもするが、しかしながら、古くから開けて居た國々——そこでは富源が開發し盡くされて居て、人口が現在の工業上の方法で殆ど養はれ得る限りの點にまで膨脹して居るといつたやうな古くから開けて居た國々——に於ては、企業心の旺盛なる人々に與へられて居ると想像されて居る自由は、實は唯少數のみのために存して居るのにすぎないのである。合衆國に於ける鐵道の初期の歴史は、大膽なる傳奇的冒險の物語に富んで居る。當時の所謂鐵道王等の經歴は、人をして坐ろにエリザベス王朝時代のイギリスの海賊どもの古事を偲ばしめるものがある。之に反して、近代のイギリスに於ける鐵道事業は、全く平坦極まるものであつて、その資本は財産管理人に財産の保管を委托して居るやうな未婚の婦人たちや孤兒たちやの出資から成立つて居るのだし、その重役連は半ば眠つてゐるやうな貴族であるし、その經營振りは因襲的であるし、そしてそれは、大膽なる計畫を持つて居る新人たちの奬勵になるやうなことを、何一つしないのである。斯ういふことは、皮相的の觀測者らが考へて居るやうにイギリス人とアメリカ人との間の氣質の相異から來て居るのではなくて、むしろ、これらの兩國に於けるそれ〴〵の地理的狀況及び工業の年代の舊るさの相異から來てゐるのである。しかし、資本家側の言ひ分の中の最も有利な點を參酌するにしたところで、そしてまた、四十年前までのアメリカの狀況を考慮するにしたところで、そこでも嶄然頭角を顯はしたものはといへば、矢張り唯、拔群の企業心と突進力と鐵面皮とを持合はして居た人々だけであつたのである。かうした人々は、たしかに全社會中の少數者にすぎないのであるから、たゞ彼等だけに適合した社會が滿足な社會だとは、貴族主義者流の謬想に陷つて居るものでなければ、言ひ得られないことである。私は怕れる、それと同じ謬想に陷つて居る社會主義者らも多くある、と。すなはち彼等は、工業が國家管理の下に榮える狀況を想像して見たり、また彼等自身がさういふ將來の理想境に於て、普通の勞働者としてゞなく、國家管理の當事者として活躍してゐる光景を眼前に描いて見たりなどする。中央集權的官僚的國家社會主義の制度の下に於ては、その全機構を指導する人々は、現在に於て企業上の管理者らが享有して居る總べての利益を自分達の手に收めるであらう。但し現在に於て企業上の管理者らに歸屬す

るものとなつて居る鉅萬の富は、その唯一の例外として、彼等の手に落ちることはあるまいが、しかし、其所謂鉅萬の富なるものは、畢竟するにそれを以て酬ゐられる人々の材幹力量の有形上の表彰物として、及び、衆人の尊敬を贏ち得る所以の手段として評價せられるに過ぎないものであるから、精力的な、事務的な、そして奮鬪的な人に取つては、それは事業上の成功から生じる利益中の最小部分の一つとしか見られないものであることを、我々は記憶しなければならないのである。しかしながら、國家社會主義の下に在つて特別の優遇を受けるものは、唯企業上の管理者らばかりに止まるのではなくて、その上にまだ、國家官吏の總員もまた同様の特典に均霑するのである。素より、官廳の一室内に坐して他人の事に干渉しながら日々を送る方が、鑛山の坑夫や汽船の火夫やになつて働くよりも、ヨリ愉快な生活であることは、いふまでもないことである。しかるに、毫もこの種の不公平を除去しようとはしない社會主義の分派も、中々多くあるのである、資本主義の下で發達して來た工業組織に於ては、富の不公平以外の不公平も無數に存在して居るのである。そして、富の不公平以外の各種の不公平も共々に除去されるのでなければ、一個の社會主義的社會組織も、普通の筋肉勞働者に取つては現存の社會組織以上に快適なものに決してなれないであらう。勞働派政治運動者たちや官僚意識の人たちやは、このことを考へては居ないやうである。といふのは、彼等は新社會に於ける彼等自身の姿を、普通の勞働者としてゞはなく、指導者若しくは官吏として心に描いて居るからである。實際に於て、彼等が創造しようと目論んで居る社會に關する彼等自身の判斷は、斯ういふ風に、貴族主義者流の謬想のために溷濁されて居るのである。或は現代世界の樣々の弊事は一つづつ除去すべきものであるかも知れないし、そして我々はまづ第一着手に富の不公平を鎗玉に擧げるべきものであつて、權力の不公平の匡正に至つては、姑らく之を後の時代に讓り、更に勞働の快不快に於ける不公平の匡正に至つては、恐らく之をそのもう一つ後の時代に讓らなければならないものであるのかも知れない。或はまた、官僚的中央集權的國家社會主義は、我々が否でも應でも一度は潛り拔けねばならない第一の關門であるのかも知れない。私は決して、この事を否定しようといふのではない。私が否定しようとして居るのは、さういふ社會が本質的に良き社會であるといふことなのであつて、そして、苟くも社會の全員の生活上の禍福を痛感し得る人々が、創意と權

力と理知の行使とを少數者だけに獨用しようといふやうな理想を以て滿足してゆけるといふことは、決してあり得ないであらう。

唯一つの階級若しくは唯一つの定型の性格の上に偏してゞなく、出來得る限り總べての人々の上に幸福を光被せしめようといふ社會は、餘りに系統立ちすぎたり、餘りに規律づくめでありすぎたりしてはならない。それは、行政官的氣分の人たちが頭で組み立て〻銃劍と刑法とで維持する樣な社會であつてはならない。一人々々の個人はそれ〴〵異がつた慾求を持つて居るものであるから、從つて、他人に損害を與へる虞なしに叶へることが出來る總べての要求を叶へる樣にすることが肝要である。いふまでもなく、掠奪衝動を抑制することは必要である。掠奪衝動に對する抑制が全然缺け**て居るといふのが、現在あるがまゝの社會の最大の病弊の一つである。しかしながら、創造衝動を解放するいふことも**少くともそれと同等に必要である。規帳面すぎる制度の危險は、この點に存する。軍隊組織なり工業組織なりは、それが指導の任に當る少數の特權者たち以外の總べての人々を一律に取扱つて居る。すなはちさういふ組織には、例外を認める餘地もなければ、上からの命令に依らずに出來るやうな種類の仕事を存置しようといふ意向もないし、更にまた、大きな機械の一つの輪齒にすぎないやうな地位には我慢がし切れないといつたやうな種類の人々を寛容する傾向もないのである。

一つの社會組織が持つことが出來るあらゆる性質の中で多分一番大切なものと見るべきものは、それが人々の『信』を繼ぐことが出來るものであるといふ一事である。ヨーロッパは最近五百年間に於て、我々が『文明』と呼ぶところのものを構成する一切の事物に關して、全く異常の進歩を遂げたが、しかしながら、この進歩と共に、信仰が次第々々に崩壞して行つた。私は單に宗教上の教義に對する信仰だけを意味して居るのではない。――もつとも、それもまたそれ相當の働きを見せたが。私は、社會組織の因つて以て立つてゐるところの基礎である所の一切の憶說を意味して居るのである。今日に於ては、すべての權威の源は猜疑の標的となり、そしてすべての祖先傳來の制度は人々から承認せられる根據を失つた。で、まだその跡に纔かに殘つて居た微かな信仰も、大戰及びロシア革命のために最後の一擊を加へられた

大戰の初期に於ては、デモクラシーは尙ほ、戰爭を賭しても擁護すべき敎義だと思はれてゐて、人々はそのために進んで身命を捐てようと希うたものであつた。ところが、大戰の終末期に於ては、憐れなるウィルソン大統領だけが、たつた一人のデモクラシーの信者として取殘されて、そして悲壯なる孤立の姿でその福音を內外に宣したが、それを聞いた世界はたゞ肩を一と揺り動かしたゞけで何喰はぬ顏して自分勝手の仕事をしつゞけて行つた。もつとも、幾らかの不公正の要素は必然的に一つの社會組織の存立に附帶して存在するものであるのかも知れない。少くとも今後尙ほ永い間は、さうなのかも知れない。けれども、信仰の時代に於ては、人々が社會組織の下で苦しんで居た場合ですらも、または、彼等が後世の人々の眼には不當の災禍のやうに見えるやうな犧牲を拂つて居た場合ですらも、彼等はその社會組織を信じたのである。ところが、今日では最早そんなことがなくなつた。今日では不公正なまゝの社會組織を信じて居るものは唯それに依つて利益を壟斷して居る手合ひだけとなつた。かういふ手合ひでさへも、自分達の信仰が純眞なものではなく、寧ろそれは唯利已心の變形にすぎないものであることを、衷心感知しゐるのである。が、私はこの論難からアメリカの大資本家連を除外して居るのである。彼等は、おそらく僅かばかりの中央アフリカの黑人種を除外しては、他の如何なる種類の人々よりも、ヨリ單純であつて、ヨリ多くの程度に於て近代思想に觸れて居ないのである。かういふわけで、アメリカの實業家連は今でもなほ資本主義的經濟組織を信じて居るのである。が、しかし、爾餘の國々の實業家連は、唯單に彼等自身の心底で現在の組織に優つて居るものだと思つてゐる新組織を主張する人々を射殺したり餓死させたりするための機關銃や軍艦やを用意して置きさへすれば、せめては彼等自身の存命中はなほ存續するであらう、といふ位な所を希望して居るに過ぎないのである。かういふ中途半端な信仰は、決して幸福を齎らさないのである。資本家連は、彼等のロシア征伐の戰爭が神聖なる十字軍的遠征だ、と信じようと努力して居るが、しかしながら彼等のこの努力は、ヨーロッパ全土を通じて甚だしき不成功に終つて居る。そして、資本家連以外の各人は、舊き組織に對して微塵程の信仰を起こすことも出來なくなつて居る。舊き組織、――すなはち、アイルランドを荒廢せしめたり、ドイツ及びオーストリアを餓死に頻せしめたり、社會[illegible]

また我々の舊文明の滅び行く廢墟の上に於て、馬鹿げた舊式外交による領土の遣り取りの掛引を行つたり、名義上の友邦を密かに假想敵と見做して武裝したりなどのことをして居る舊き組織、――かうした舊き組織に對する最後の微かな信仰さへ、段々と失はれつゝあるのである。かうした舊き組織は最早幸福を齎らし來るものでないのである。そして、その下に於て苦惱して居るものは、單にその名義上の犧牲者どもばかりではない。すなはち、生きるといふことに何等の意義を認めなくなつたものは、單に戰敗諸國民ばかりでもなければ、また無産階級ばかりでもない。西ヨーロッパ諸國に於ける富裕階級の人々すら、今は最早何の爲に生きて居るのだか判らなくなつて居るのである。彼等は何一つ生の目的を持つて居ない所から、放縱なる逸樂に耽溺する。しかしかうした逸樂が加はるだけづつ、不安が增進する。すなはち官能が滿足せられる間に、たましひが益々荒さんでゆき、從つて內心の滿足の感情が得られなくなつて、たゞ味氣なさと絕望とが跡に殘るばかりである。

この絕望感を癒やすものはたゞ一つある。それは、各人が信じることが出來る信仰そのものである。如何なる人も、彼の生が何かのために貴きものである、といふことを自覺するのでなければ、幸福であり得ないのである。彼の生が何の目的にも導かないところの、たゞ快樂と苦痛との連鎖に過ぎないものであつて、そして自己が價値あるものであることを信じ得る根據であるところの目的を自覺しないものであるかぎりは、彼は絕望感を脫却することが出來ないのである。現代に於ける大抵の人々の胸裡に於ては、この絕望感が暗默無意識の裡に培はれて居るものであつて、そしてそれが無意識の裡に培はれて居るものであるところから、人々がそれを避けることが出來ないのでもある。それは恰度人の肩越しに覗き込みながらその耳許に鋭き言葉を囁やく幽靈のようなものであつて、人は其姿を見ることも出來なければまた、それと相對して顏を合はせることも出來ないのである。たゞ我々がこの絕望感の由つて來る所を突き止めてその性質を認識する時に、我々はそれと戰ふことが出來るが、しかし、我々はたゞ新たなる信仰に依つてのみ、若しくは快樂の追及に取つて代はるべきものに依つてのみ、それと戰ふことが出來るのである。私が言はうとして居ることが陳腐に聞えるかも知れないが、或る意味に於ける義務の感じなしには、個人なり社會なりが生き甲斐のある生を持つことが出

來ようとは、私には信じられない。

近代人が迷信に依らないで肯定し得る種類の義務はたゞ一つある。それは、社會に對する義務である。曾ては、神とか、國家とか、家族とかゞ人々を感激させた時代があつた。さうした時代は今は過去のものとなつた。大戰中に於てはさうした理想のすべてが各國に於ける長老株の支配者たちに利用せられて、無益な修羅場で人と人とを相殺戮せしめるための掛聲とせられた。當時に在つては、大抵の壯丁等は、戰爭は何か大切なことに關して戰はれて居たのだと思つて居たが、それが名義上終熄した今日、彼等は彼等の考へが間違つて居たことに氣が附いた。何の善きものもその中から出て來なかつたが、若し出て來たものがあつたとすれば、それはその戰爭を惹起した制度に對する反抗であつた。戰敗國の惡事は、そのまゝ戰勝國に乘り移つた。唯一の希望が、大戰に參加した國々の中で一番無慘に負けたロシアから來た。私は信じる、共產主義こそ、世界のために幸福を取戾す信仰でもあり、世界を大戰の置土產である病弊から恢復させる信仰でもあり、人々に向つて彼等の生が歡樂に優る善きものを成し遂げ得るものであることを教へる信仰でもあり、人々を驅つて輕薄なる修行を敢てせしめる絕望感を絕滅することが出來る信仰でもある。ロシアの共產黨員たちは彼等が創造しようと努力してゐるところの新しき事物に對して深き信仰を持つてゐて、そして、彼等のさうした信仰は寧ろ素撲でもあり、寧ろ峻酷でもあり、また恐らくは餘りに早熟でもあるが、しかしそれは、西洋のどの生活が幸福であるといふ程度以上に、彼等共產黨員たちの生活を幸福にするのである。それは、彼等に窮乏と危難とに堪へ得る力を與へ、生に疲れた西洋では見られないやうな、たましひの欣びやその活き〳〵しさやを常に保存する。縱し共產主義を擁護するために、他に特に取り立てて話がいゝと言へる點がないにしても、唯それは現代人が信じることが出來る一つの創造的信仰であるといふ事實だけから考へても『それは世界の希望である』といひ得る根據が十分にあるのである。

斯ういふことの裡に、善き社會が當然持たなければならない二つの特徵のうちの第二のものが、自から示唆されてゐるのである。すなはち、善き社會は進步的でなければならぬ。それは、更らに一層善きものへ導くものでなければならぬ由來、徹底的進步といふものが、何の屈託もなく極めて氣樂に現存の制度に迎合してゆけるやうな人々から出て來るこ

とは、滅多にないのである。たとへば我々は、トラストの大立物などが新時代の先驅となるであらうといふやうなことを期待することが出來ない。と同樣に、今假りに我々が技に共產制度が打建てられたものと想像するとき、この共產制度の上に更に新たなる進步が加へられるのは、その下に於て行政事務を執つて居る人々から來るのでなければ、何の苦もなくこの新制度に迎合してゆくことが出來るやうな種類の人々から來るのでもない。新たなる進步は、創造的の人々から、科學者たちから、藝術家たちから、思想家たちから來るであらう。これらの人たちの多くは、新制度の讚歎者であるよりは、寧ろ多分その批評者であるであらうが、新たなる進步は却て斯うい ふ側の人々からこそ期待が出來るのである。商業主義の影響の下に於て、多くの人々は、大切なる進步とは生產の技術的方法に於ける進步とか、より善き機械とか、より善き交通機關とかなどといつたものであると考へるやうになつて來てゐる。いかにも、斯うい ふとは、曾ては本當であつた。何故なら、過去の時代に於ては、勞働が總べての人々に善き生活を與へるほど十分に生產的でなかつたから。しかしながら、それは今日に於ては最早、本當でなくなつた。現在既知の工業上の技術的知識を應用すれば若し我々が科學的な共產的組織を持つてさへ居るならば、各人は長時間勞働する必要もなしに十分の生活資料を持つことが出來るであらう。人々が一旦十分有形的財貨を持つことが出來るやうになつた曉には、彼等にそれを過剩に供給することが必要でなくなるであらう。人々が財貨の量をのみ維れ重しとするやうになつたのは、一に商業主義のためであり、市場獲得運動の競爭のためであり、及びそれに伴つた富豪の奢侈贅澤のためである。今や我々は、すべての人々に於ては、贅澤品や軍備やの生產から解放せられた精力が、知識の進步だの、生の美化だのといつた方面へ轉換せられ、物質と時間との餘裕が與へ得られるやうに我々の資源を組織するとが出來る點にまで達してゐるのである。それ故に、現在に於ける大切なる進步とは、工業的生產に於ける進步ではなくて、思想に於ける進步なのである。共產制度の下に從つて、工業勃興以前の時代に於て少數者のために存して居たやうな藝術美を、多數者のために取戾すことになるであらう、——と我々が期待しても、大した間違ひでもあるまい。しかしながら、若しかういふ結果が生じなければならないのだとすると、創造的の人々のために、すなはち科學者たちや藝術家たちやのために、自由が存して居なければな

らない。これらの人達が事毎に國家官吏に依つて監督されるやうなことがあつてはならないのだし、各瞬間に現存の偏見に迎合するために勞作するやうに强制せられるやうなことがあつてはならない。自由なしには、時代の先驅者たちは無力にされる。まづ第一に、すべての新機軸は一時に多數者の氣に入るものでないが、しかし、新機軸なしには、如何なる社會も進步することが出來るものではない。特殊の人々――その仕事が創造的のものであつて、掠奪的のものでないところの特殊の人々――のために自由があるといふことは、如何なる社會に於ても、進步のために最も重要なる條件である。一體行政官には、自分自身を全能の神として考へる傾向があり、從つて、各新思想中の善き點若しくは惡しき點を自分自身で判斷することが出來るものだと想像する傾向がある。かうした傾向は何時でも危險なものであるが、殊に共產制度創設の初期の段階に於ては、特別に危險である。といふのは、そこでは、行政官がその以前のどの時代に持つてゐた權力より遙に大なる權力を持つて居ると期待されるからである。かういふ危險は唯、創造的の仕事は大切なものだといふ事實と、それから、最も善き創造的の仕事も屢ば時人に喜ばれないことがあるものだといふ事實とを承認することに依つてのみ、それを避けることが出來るのである。藝術家たちや科學者たちやには、その仕事に對して報償を與へなければならないといつたやうなとは、決して必要ではない。なぜなら、彼等の中での最も傑出した人々は、報償などには無頓着に、唯彼等が彼等自身の仕事を愛するが故にそれに從事するのである。しかしながら、彼等がその仕事に從事する自由と、その仕事の成果を發表する自由とを持つといふことが必要である。すなはち、たとへば一科學者の場合に就いて言はうなら、彼がその業績を發表するに當つては、まづそれを官吏達に見せた上でその認可を得るといふやうな手續を蹈まないで、直ちに之れを印刷に附する自由を彼が持つといふことが必要である。すべてかういふ結果は、―共產制度が、少數者への懲罰としてゞなく、多數者のための解放として來る時には、そして我々を鼓舞するものが、我我自身で創造しつゝあるところの善きものに對する愛であつて、我々自身で破壞しつゝあるところの惡しきものに對する憎みでない時には、――さういふ時には、すべて右に擧げたやうな結果は、招かずして自づから至るであらう。素より、たとへ過渡期に於ても憎みが全然活動の力の發動機として働くことあらされと註文するやうなことは、出來ない相

誤だといへもしようが、しかしながら、憎みがその根本的動機であらざれと願ふのは、大切なことである。もし憎みが根本的動機だつたとすると、その下に創造された制度は、單に壓迫や抑制やが必要な場合に於て壓迫的に抑制的に働くばかりでなく、更にまた、進歩が停滯するやうなことがないためには決して壓迫や抑制やが行はれてはならない場合に於てさへ、矢張り同じ樣に働くであらう。我々が創造しようと努めなければならないものは、希望と歡びとに充ちた世界なのであつて、主として人々の惡しき諸衝動を抑壓しようがために案出されたやうな世界なのではない。もとより惡しき諸衝動は抑壓せられなければならない。殊に、過渡期に際してそれがまだ強く働く間に於ては、大に抑壓せられなければならない。だが、それは我々の仕事の附隨的部分なのであつて、その主なる目的でも發動力でもないのである。苟くも一つのより善き世界を作るための改造である以上は、その主なる目的または發動力は、創造衝動の解放といふことであらねばならぬ。かういふ意味の改造があつてこそ、人々は始めて、眞に幸福なる生は創造衝動から產まれ來るべきものであつて、それは決して、他人が望むものを自分で攫取したり保持したりしようといふことを主眼とするところの現在の狂氣じみた爭ひから產まれ出るべきものでないことを、よく理解しようといふものである。共產制度が一旦確立されたら、恐らくそれは人生の物質的方面を圓滑に切り盛りして行くであらうから、從つて、人々はそれを本來當然な制度だと認めて安心するであらうし、さうなつて來ると、彼等はそれから生じた時間の餘裕を「人間」の眞の光榮を構成するやうな事物の方へ轉換するであらう。

自然科學に於ける理想主義

北京にて　ジョン・デユウイ

前月號の論旨に於て、私は、外觀上物質的である西洋文明の裡にも若干の理想的要素があると言つて置いた。本論文の目的は、之を今少し詳論せんとするにある。私は玆に自然科學に依つて演ぜられた役割に關聯した二つの要素を考察しようと思ふ。その一つは、自然科學の研究に缺くべからざる知的並に道德的精神を表現して居り、他の一つは科學の社會的應用、卽ち不幸や苦痛を救濟し、人類の幸福を促進せしめんが爲めに、それを利用することである。

第一の點を說明するには、自然科學が取扱ふ題材と、科學者を刺激して研究に從事させ、又諸科學を建設させる動機との間に横はる相違を指摘することにしよう。前者は物理的、又は物質的である。近代科學から觀た、自然は、物質と力とに依て構成せられて居る。それは機械的法則を示して居る。自然は思想に依て構成せられて居る譯でもなく、精神的な目的に依て支配されて居る譯でもない。それは希望や、愛情や、理想に對する熱誠や、義務の承認などが、少しでも働くような舞臺ではない。人間の心は近來の現象で、進化の力の產物である。人間及び人間の問題は、科學に依て展示された物理界に取つては、取るに足らぬ事柄のように見える。人間は嘗て、吾々の住んで居る地球は宇宙の中心であり、人間は萬物の靈長で、森羅萬象は精神的な力によつて支配せられ、且つ人間の道德的精神的生活と關聯して造られたものであると夢想して居つた。自然科學の諸發見は、この夢想を中絕した。自然は曲げることの出來ぬ、一見無慈悲な法則の働く舞臺である。吾々の地球は、太陽系の一小部分に過ぎず、又太陽系そのものが宇宙全體の一點に過ぎないのである。最近にある科學者が巧妙な仕掛で、遠い一つ星の直徑を測定した。ところがその星の大きさは非常なもので若しそれがわが太陽系の中の丁度太陽のある位置に在つたならば、殆ど火星の軌道に屆く位であらうといふことが發見

された。而もこの星は、幾億萬の太陽の中の只一つに過ぎず、その太陽は各々、(吾々の眼には見えないが)その周圍を廻轉してゐるそれ自身の遊星の系統を有つて居るのである。かやうな事實は、自然科學に依つて明かにされた宇宙の立場から見れば、吾々の藝術上の功績や道徳的向上心諸共、一切の人事の取るに足らざることを感銘させるのである。

自然科學は物質主義であるとか、自然科學に對する熱心は藝術、道徳及び宗教の方面に於ける人間の理想生活と相容れぬものだとか云ふ世論に勢を添へるのは、かやうな事實である。けれども吾々は、自然科學の題材に依て、科學を發生せしめ且つ之を進ませてゐる心性までも論ずることは出來ぬ。**科學は二つの全然異る事柄を意味してゐる。それは發見せられ分類せられる一團の事實と法則とを意味するものである。**この見地からすれば、科學は物質主義である。しかし科學は又人間の心の態度と方法とを意味するものである。科學は創造もせず自身を啓示するものでもない。それは人間の欲望と努力との産物である。發見せられた物質と力との作用の法則ばかりではなく、科學は思索、觀察、實驗、推理、吟味等の法則をも生命として居る。一面に於て科學は發見せられ分類せられる事實を意味すると同時に、他の一面に於ては、知的過程に依つて到達された人間の信念の累積をも意味して居る。科學のこの一面は理想的又は精神的性質と呼び得べきものである。そして以下に述べるやうに、それは道徳的特性に基いて居るものである。眞理に對する愛により、勇氣により、眞摯により、眞理の一般的又は公共的性質に對する信念によつて動かされた人でない限り、何人も科學を現今の狀態に導き得るものではない。

前述の西洋人の心裡の理想主義的要素とは是等を指すのである。外面生活に對する科學の影響は、容易に看取されるこの外面的效果は主として、機械的發明の進歩と、商工業の繁榮とを促した點にある。それは人間に、富や、物質上の勢力や、富から生れる悦樂や贅澤を獲得させた。しかしながら、科學は又人間の精神にも影響を及ぼした。が、この方面の影響はさう容易く看取することが出來ぬ。この精神上の影響等は、純粹に知的なものではない。今述べた通り、それも亦道徳的である。この道徳的といふ意味は、卽ち、科學は最も望ましい或特性、これなくしては人類が苦惱し、之を得れば人類が淨化され向上されるところの特性を發達させたのである。故に吾々の第一の任務は、これらの特性を列擧

するにある。しかし自然科學の發達の道德的方面は、科學と發生させた最初の狀態と頗る密接に關聯してゐるので、順序として、先づその起原に就いて少しく述べなければならぬ。

西洋文明が歷史的に三つの源泉——希臘人の知的功績と、猶太人の宗教的信念と、羅馬人の法律的政治的才能とに起原を發してゐるといふことは、常套語となつて居る。確かに希臘人は比べる者のないほど知識的に早熟な國民であつた。彼等は驚嘆すべき觀察力と、論理的組織と、潑溂たる心と好奇心と、思索的想像力と、思想の自由無碍な所とを俱有して居つた。彼等は初めて一切の自然現象と力とを網羅する（と彼等は考へた）系統的の自然觀を發展させ、考査と分類の方法とを形成した。しかし科學上の實際の結果が、全ての早熟的な產物に共通の短所を有つて居つたのは餘儀ないことであつる。希臘人の有したやうな知的天稟を以てしても、希臘人の如く僅か二百年內外の短日月の間に、實質的な眞理又は、正確な科學的方法に到達することは不可能であつた。彼等の方法は不條理であり、彼等の科學的體系は事實上、原始的傳說の殘物をも包含した一般的謬見を、系統的に大發見のつもりで組織立てたものにすぎなかつた。けれども若し希臘文化が尙ほ續いて榮えてゐたならば、希臘人自身も進步を續けて、その方法を完成し、その未熟な科學を成熟させることが出來たであらう。

然るに希臘の文明はその獨立を失ふことになつた。それは知的にも藝術的にも希臘人自身より遙かに後れて居る異邦人に征服せられた。第一世紀に於て、希臘人の科學と猶太から來た宗教とが混淆した。後者は、自己の路を開拓し、攻擊を防禦する爲に、知的體系の必要を感じた。最初この新宗教は、人物を中心とする道德的並びに精神的理想から成り、殆ど學說的背景とか哲學的基礎とかいふものを持たなかつた。ところが自分よりか開けた羅馬帝國の人達と接觸するに至つて、基督教の教師達は、希臘の科學から哲學的思想を藉らざるを得なくなつた。かくて宗教は神學即ち出來得る限り希臘人の發明した思想に基づいた一定の知的信條となつたのであつた。

この哲學化が希臘の改宗者に依つて行はれて居つた間は、神學は、希臘心理の特徵たる知的自由を幾分維持して居つた。しかし基督教の中心は羅馬に移つた。羅馬人は知的國民ではなかつた。彼等は大なる軍事的政治的天稟を有する國

民であつた。正規の法律的行爲に基く軍隊的訓練と、政治的支配とに慣れて居つた彼等に取つては、宗教上の信仰や行爲が强權に依つて、確立し規定せられてゐないことは、以ての外だと考へられた。そこで羅馬帝國の行政方法に倣つて、教會は大きな政治的制度となつた。丁度羅馬人が帝國人民の問題を取締る上に一定の法律の必要を主張したやうに、彼等は教會員を取締るべき固定した教條を望んだのであつた。恰かも國家に於ては服從と强權とが必要であるやうに、教會に於てもそれが必要であると、彼等は主張した。知的教條はやがて獨斷說(ドグマ)となり、その獨斷說(ドグマ)は、教會の役員が課した儘に受入れられなければならぬことゝなつた。

その結果として希臘人の徹底的思索の精神は破壞された。希臘科學の進歩は阻止せられた。停止どころか、その早熟未熟な科學は、全く一定の形式に氷結し、化石せられたのであつた。その形式には、宗教的の感情と熱望とが混合して居つた。それは、第五世紀頃までに政治上法律上の一大勢力となり、羅馬帝國の滅亡後、その眞の後繼者となつた教會によつて强制せられた。かやうな單純な歷史的事實に就いて本誌の讀者の眼を煩はすのは、恐縮の至りであるが、併し十六七世紀の歐羅巴に於ける科學的精神の復興に鬪かつた眞の精神的勢力と其後の科學の發達とを理解するには、此等の歷史的事實を想起する必要があるのである。若し自然科學の精神が自然に易々と發達したのであつたならば、その道德的方面は强く現出されなかつたに相違ない。しかし科學は有力なる敵と鬪ふことに依つてのみ、能く發達することが出來たのである從來は全然自家撞着の自然觀が、一般に受入れられて居つた。此等の矛盾した見解は、人々の宗教的の感情や、恐怖や、希望や、尊敬や崇拜となひ合はされて居た組織的權力によつて後援されて居つた。この組織はこの起原と精神とに於いて帝國主義的であつた。それは近世の政治的帝國主義や國家主義に依て示されたあらゆる傍若無人な性質を有して居つた。新しき科學の代表者は、誹謗と世人の憎惡の的となつた。彼等は實際迫害せられた。新思想の代表者のうちには、信念の爲に、生命を擲つた者もあつた。科學は殉教者を有した。國家や教會の權力と等しく大學の權力も、社會の最も貴尊な、有力な人々の威信も、新しき科學の中に含まれた『危險思想』の自由な發達に敵對した。天文觀測所や實驗室で靜かに研究に耽ることのみを顧つてゐる人々さへも、今日社會科學の上に新しき方法と、新しき觀念とを樹立しようと努め

てゐる人に對して、向けられて居ると同じ疑惑や憎惡や迫害を以て報ゐられた。所謂科學と宗教との爭ひ――實際は近く十九世紀にダアヰン說が勝利を博するまで續いて居つた――なるものは、事實上自然探究の精神と、過去數世紀間權を振つて來た制度頑迷不靈な精神との爭ひであつた。

若しも自由な探求が自然に發達する機會を有してゐたならば、その精神と目的とは大部分世に識られずに終つたかも知れない。さすればそれは何等直接の道德的力をも有しなかつたに相違ない。しかしそれは、その生命のために鬪はねばならなかつた。そこで眞理そのもの〻爲に眞理を愛する心と、他のあらゆる節義にも增して、眞理に對する節義を貫しとする信念が起つたのである。即ちこ〻に知的謙遜、知的正直、及び眞率といふ新しい美德が生れたのである。社會的理想としての直言といふことは、昔から何處の國民にもあつた。假令忠實に實行されないまでも、理論上大に尊重されて居つた。人はその道德律に於ては、故意に他人を欺くこと、他人を惑はすことは不道德だと敎へた。しかしかやうな率直は、眞理を語る場合にのみ限られて居つた。人は眞理を旣に知つてゐる者で、道德的に必要なのは、唯これを發表する意志のみだといふことになつてゐた。新しき率直の意味はもつと深刻であつた。多くの重大な事件に當つて人が眞理を語ることが出來ないのは、彼等がそれを摑んでゐないからだといふことが認められた。新しい美德は觀察し、考査し、實驗せんとする意志から成立つてゐる。傳統的に受けつぎ、且同胞の多數によつて受入れられてゐる信仰の代りに、それは科學的探求の結果を受入れんと欲するものである。これらは何れも容易く行ひ得ることではない。人間は社會の流行物や、他人の賞讚を受ける特色のある物に默從し勝ちなものである。從つて前に述べた科學の理想的又は道德的效果は、流行の意見と傳說とに反抗し、新しき眞理を求めんが爲に、すべての心力を盡さうとする意志にその根據を有するものである。

そこで今度は、智的要素としての科學的精神の、特殊の組成分子を檢しなければならぬ。これには三つある。第一には公平なる判斷、第二には智的個人主義、第三には公開の精神である。人間は生來黨派的である。吾々は理論的動物でもなく、周圍の事情に無頓着な傍觀者でもない。吾々には欲望や、要求や、感情がある。吾々は、たゞ今にどうなるだら

うとボンヤリ見てゐる代りに、自ら事件の進行に關與する。既にその仲間に入るからには、何方かに味方する。吾々はどちらか一方が勝たんことを要求する。吾々は常に或人、又はある主義に同情して、それと對立するところの何物にも反對するものである。この吾々の偏頗、一方に對してのみ注がれる同情は、吾々の行爲の上にも影響する。たとへ外面に表れた行爲に影響しないまでも、それは吾々の希望や信念を動かす。人は二匹の犬の戰つてゐるのを見れば、たとへ二匹とも自分のものでない場合でさへ、どちらか一方を勝たせたいと思ふ。又もし二つの木片が流れの上に浮いてゐるのを見れば、どちらが早く流れるだらうと思ひ、一方に味方して内心それに加勢することになる。殆ど本能的に、吾々は相爭つてゐる二つのうち、一方のもの、一方の力、又は一方の人に勝手に同情するのである。吾々は鬪爭的動物である。たとへ戰爭や競爭的事業の上で公然戰はぬとしても、吾々は、吾々の同情や希望を以て戰ふのである。

小さな事柄の上に現はれるこの偏執的傾向は、重大な問題の際には、社會狀態に依て甚しく强められる。吾々はある家族及びある國家の成員である。吾々はある黨派又はある宗派に屬してゐる。さうすることに依て吾々は彼等を助け、又吾々自身の進歩のために、彼等の助けをも藉ることゝなる。自己の團體、種族、又は民族の利害に關する問題に對して中立を守ることは輕蔑せられる。さういふ中立は、常に反對側に對する內々の好意の徴候とさへ思はれ勝ちである。のみならず、その人は、お蔭で周圍の同情までも失ふことになる。周圍の人々の好意を失へば、結局その助力をも失ふこととなる。斯樣にしてどちらかに偏し易い自然的傾向は、吾々自身の利益、及び成功と人望とを博さうとする欲望に依て强められるのである。處で、ある主義なり、黨派なりに偏倚することの素質は、斷じて惡いものではない。それ所か却てそれは人間の最高の行爲の源泉なのである。ある人が獻身的に盡す所の團體なり、種族なり、黨派なり、民族なりは、少くともその人一個人よりは大きく且つ永久的なものである。個人的利害が、自己と關係ある人々に對して同情を披かしめ、その主張を正當と感ぜしめると同時に、獻身的な壯擧にも出でしめるのである。それは人の狹少な自我以外の何物かに

對する彼等の觀察力は盲目にされて居る。彼等の判斷力及び推理的能力は薄弱にされて居る。西洋諸國の政治家は、「我國、願はくば正しかれ。されど好かれ惡かれ、第一に我國」といふ格言を奉じてゐる。斯様な心持でゐる人々は、常に自分の國が現に正しくあるものと信じてゐる。彼等は總ての事實を見ることが出來ず、またたとへ見たとしても、その事實から正しい批判を下すことが出來ない。ある國民が自國に對する偏執から生ずる斯様な結果は、自己の屬する家族、宗派、又は社會的階級に對する偏執の場合にも適するのである。

所で科學的精神は、一方に偏執することから生ずる結果を緩和する上に無くてならぬ助けとなる。科學は可能なる限りの最大の公平を意味し、偏執に反對する。といふよりも寧ろそれはある一方の味方をしはするが、その味方するのは有のまゝの事實の發見といふ立場である。それは研究、冷靜なる思考、及び吾等に信仰すべく提供せられる思想を吟味することの味方である。科學の精神は、吾々に事物の內面にまで立入らせる。希臘の哲學者プラトーは、總ての德の中で最大なるものは、さう見えることゝ、現にさう在ることゝの區別、換言すれば現實と外觀との相異を識別する能力であると云つた。これは容易な事ではなく、又吾々は天性さういふ風に生れついても居らぬ。事物を皮相的な觀察に依て是非するのは容易であり、又皮相的な觀察は、大部分吾々の好惡や偏執に依て左右されるものである。吾々に事物の內面にまで突込んで、その眞實を摑む武器を與へるものは、獨り科學的精神あるのみである。事物の表面より深く立入らうとする欲望だけでも、主として科學的精神の產物である。外觀に對する執着は、非常な力を持てゐる。その力の大部分は、それ自身としては望ましきもの、例へば禮儀作法といふようなものから來て居る。人に對して異る意見を吐き、又はその悅ばぬことを語るのは、無作法に思はれる。他人の感情に對する懸念と眞理とは、屢々相容れざる敵同志たることが多い。禮儀を第一に置く文明は、多くの上品な特性を發達させることはあらうが、外觀を斥けて眞理や眞實を求める高尙な心持は、その特性の中に入つてないらしい。

知的個人主義は、科學的方法の第二の重要な貢獻である。個人主義といふ言葉は、あらゆる事柄を意味し、其中には善いことも惡いこともある。時にはそれは、他人を犧牲にして獨り自ら利することを辭せぬ利己的な精神を意味する。こ

の種の個人主義は、富や政治的勢力の爲めの競爭の中に現れて居る。西洋も東洋もこの種の個人主義にはたんのうしてゐる。然しまた個人主義といふ言葉は、階級、地位、出生、富の差別を問はず、總ての人々の個性の十分な發達をも意味してゐる。この意味に於て、それは人生に於ける最も貴重なものゝ一つである。それは第一種の個人主義が非社會的なると同じ程度に於て、社會的である。何故なら、それは單に個人的自由を求むるに留まらず、總ての人々が其の靈魂を成長させ得るように教育の機會と、十分な閑暇と、藝術的事業と、經濟的保證と獨立とを持つ自由社會を目的とするのであるから。けれども私の説いてゐる知的個人主義とは、これとも異る第三種のものである。

近來の社會心理學者は、彼等の所謂『群本能』と呼ぶものを重要視した。これは、互に群を成し合つて、その群の中に自分自身を失つてしまふ本能を云ふので、牛や羊の群を想像することから生じた呼稱である。個々の動物は、獨りでおかれる時は不安で不愉快に感じ、他の動物と緊接に接近したがつて居る。動物は自分が大きな群の中の只一つであることから生ずる温かさ、安全、並び快い安心を要求する。人間は群居的動物である。たとへ多少猜疑深い人でも、原則として非常な孤獨は欲しない。彼等は他人を輕蔑したり、嫌つたりする場合にすら、傍近く他人のゐることを欲するものである。大抵の人にとつては、孤獨裡に幽閉されることが最も殘酷な刑罰である。群居的本能は本來生理的なもので密接な接觸と、それから生ずる安全の保障とを喜ぶ傾向である。人が暗黒を恐れる一つの理由は、暗黒は彼に孤獨の感情を與へ、隨つて保護せられて居らぬといふ感じを起させる點である。暗黒の戸外に居る人が他の人を呼んだ時、それに應ずる聲を聞けば安心する。詰り彼の群本能が滿足させられるのである。けれども群本能はやがて智識上の問題、信念の問題にまで及ぼされる。周圍の人々に依て受容れられない思想を抱くことは、智的に寂しいことである。そのために、人は他人と眞に打解け合つた交際をすることが出來ない。またそのために、人は多少の猜疑と嫌惡とを以て看られるようになる。この世界に於ては、人は眞實自分一個で考へたことは少い。彼等は一般に周圍に行はれてゐる信念をとり入れて、然かも其等の思想を、自分自身の批判の表現であると考へる。吾々は眞實考へる譯ではなく、周圍の人が多分さう考へてゐるだらうと思ふような思想を取容れるだけである。最も利己的な個人主義的な人でさへも、敢て彼の

所属する群の信念に對して、公然疑義を挾むことは稀である。若しさうしたならば、成功をし損ずることになる。さういふ利己的な人々は、實際上非社會的なのではあるが、智的には社會的迎合者である。この群本能が眞理の大敵であるといふことは特に指摘するにも及ぶまい。たとへその信念が眞理であるとしても、それは眞理なるが故に受容れられる譯ではなく、たゞ一般に行はれてゐるが故に受容れられるにすぎない。その信念に對して疑義を挿むことは、結局自己の屬する群から離れて、孤獨の動物になることを意味する。人間は生來個人主義的であるといふことは、智的には眞實でない。彼等は生來迎合者であり、反復者であり、受容者である、彼等の社會的精神、自分自身の觀察や批判を曲げようとする欲望は强いのである。智的個人主義を發達させる主たる力は、科學的精神である。それは人をして、智的に群と異る態度を抱かしめ、平然として不人氣に堪へしめる。科學的精神に依て鼓舞されて居る人々は、たとへ眞理以外に友は無くとも、尙ほ彼等は、彼等を安全ならしめる仲間を持てゐるといふことを感ずる。この精神のために、勇氣といふものは、次第に智識の問題となつて來る。勇氣は本來は、ある主張のために戰ふ外的な行爲に現れるものである。けれどもまた、自己の信念が社會的不人氣、群衆の反對論の壓迫及び自己の屬する社會的階級、又は國民の憎惡を買はうとも、猶ほ固くそれを執て動かぬといふ、智識上の勇氣もある。恐らく西洋史に現れた中で最も氣高い事柄は、ソクラテス以來、自己の信念のために苦しみ、自己が眞理と信じたところ、又は自分自身の信念を、社會的群の要求に從つて曲げるよりは、寧ろ死を選んだ人々の事績であらう。迎合を拒否することは、他人の進歩の摸倣からは得ることのできぬ一切の進步の源泉である。智的個人主義とは創發、即ち新しきものゝ發見を意味する。社會的に確立せられたる信念や目的を受容れることは、遲鈍、極度の保守主義、古きものゝ摸倣を意味する。

然しながら智的個人主義にも社會的方面がある。科學の精神の第三の道德的要素は、公開に對するその要求、即ち發見したことを他人に知らせて、他人の觀察と實驗との吟味に供さうとする要求である。智的個人主義は自負や强情とは別物である。それは事實を觀察し、新說を樹立する際の獨立を意味する。のみならず科學的方法は調査を行ひ、且つその結果を科學的な公衆に通達することをも要求する。觀察と推理との結果は、他の人々の心に依て鞏固にせられなければ

ならぬ。最後の決定を下すのは、社會的過程である。斯様に智的個人主義は、一般の叡智に對する信頼に依て平衡を得てゐる。獨斷家は、彼又は他の重要人物が他の人々に對して、自己の信念を正當だと斷言する以上、他人はそれに從はなければならぬと考へる。然るに眞に科學的な人は、自己の研究とその結果とが、他人に知られる機會を求めるにすぎない。彼は他人の批評や他人の思考を受容れることに依て眞理が擴大されることを知つて居るので、其等を歡迎する。

私は西洋精神の中の最善のものであり、且つ東洋文明にとつて最も價値あり、最も學ぶべき意味ある要素を明かにするために、西洋文明のこの三つの理想主義的傾向を選んだのである。何故なら是等は東洋的でもなければ西洋的でもなく、世界的、人間的なものだからである。たゞ西洋は偶然に、自然の眞の智識へ導く道に最初に行き當つた迄である。この科學的精神が、西洋にはもはや十分行き亘つてゐるとは、私は決して云はない。それ所か、科學的精神は世界にとつて猶は新しいもので、まだ／＼これから普及するものなのである。今日まで、科學の精神は、技術的科學の問題にのみ多少專門的な問題にのみ餘り局限されて居つた。科學者でさへも、自己の階級に關する經濟上の問題、又は自己の國に關する政治上の問題については、獨斷的に、且つ自己の群と同じように考へることが多かつた。彼等は專門の方向では、新發見や新方法を歡迎しながら、社會的行動に關しては恐ろしく保守的で、新しい方法で社會的及び政治的實驗を唯試ようとする人々に對しては、激しく反對する。偏見、黨派心、及び群本能は人性に深く刻み込まれて居つて、科學の精神は徐々にそれに打克つのみである。社會的な問題については、それは屢々敗北したり、影を潛めてしまつたように見えることがある。

けれどもなほ科學の進歩は、社會一般の人生に對する態度に多少の影響を與へた。それは必ずしも專門的な科學の問題以外に出でなかつた譯ではない。例へば、政治的及び社會的事件の報道は、なほ大部分黨派的なプロパガンダに依つて支配されてはゐるものゝ、同時に社會は、社會的不正を正し、進歩を促す方法としての公志の價値を認めるように次第に教育されて居る。戰爭に依て大に勢を得た國民主義的プロパカンダでさへも、社會的事件の探究と、それを一般社會に傳播することとを、全然防止することは出來なかつた。やがて國民主義と經濟的階級主義を極端に發揮した現在の

黨派的プロパガンダが、社會問題を混亂せしめ、その解決を困難にするものと思はれる時節が來るであらう共時には、事實の正直な探究とをそれを廣く公布することが、事態改善の聰明なる努力に必要なことが知られるであらう。その時、科學的精神は、より迅速に社會生活に適用せられるであらう。

以上に述べ來つた諸點は、東洋對西洋の關係に多少關聯してゐるように思はれる。私は東洋に來て見て、東洋では科學の方法や精神を採る代りに、その結果のみを借用しようとする傾向のあるとことに氣づいた。既に出來上つてゐる科學の技術的應用をそのまゝ借りることは可能である。戰爭や商業の道具と等しく、醫學及び工學は、さうした倣の會を多く提供してゐる。然も東洋人は、西洋はさういふものを借用することは出來ず、忍耐、勵精、勇氣、創發力眞理とその力とに對する信念のこもつた熱心な努力に依て、それを創造しなければならなかつたことは忘れて居る。この創造の努力は、應用科學の結果である過度の物質主義に對する偉大な防禦物であつた。ところが出來合の科學的技術の應用を借りる東洋の能力は、非常な誘惑をなしてゐる。それは科學の最も根本的な源泉である智的道德的訓練を等閑にして、徒らに富と權力との追求を容易ならしめる。この誘惑に打克つ最良の方法は、研究のための研究、調査のための調査を愛する心を養成するにあると私は考へる。産業上及び商業上の應用に關する場合でさへも、科學的探究及び方法を、それ自身のためにする習慣を養成する方がよいのである。科學的方法は模倣の代りに獨立の發明を皷吹するけれども最も大切なことは、事實を有の儘に觀察し、群衆の壓迫に抵抗する獨立の判斷、受容れられたる信念を合理的に批評する能力、及びそれを他人に知らせた場合に、他人の心を動かさうとするまでに、眞理の力を深く信ずる習慣を養成することである。是等の科學的方法の果實こそ、物質的な科學の應用よりも、西洋が東洋に與ふべきものだと私は考へるのである。科學の應用は自然に、自ら發達するであらうし、またそれを第一目的とするよりも健全な空氣の中におかれたなら、一層の發達を見るであらう。

科學には、技術的産業的方面に應用せらるるに留まらず、人間的、社會的方面に於ける應用がある。即ち人類の境遇を改善し社會問題の解決を助ける方面がある。これが、前述の西洋精神の第二の理想主義的方面である。予は次の論文で、それを論ずることゝする。これは複雜な困難な問題である。産業上に於ける科學の社會的應用は、自然力を人類の利益のために支配する一方、勞資關係の一切の紛糾を引くるめた近代の社會問題を發生させた。そこで次の論文には近代工業及び商業の影響の現はれて居る限り、世界中に共通となつてゐる問題を論ずることゝする。（一九二一年二月）

早稻田大學文科科長　文學博士　金子筑水著

歐洲思想大觀

忽八版

一、希臘思想
二、キリスト教
三、ルネサンス
四、唯理思想
五、ロマンチシズム
六、最近代思潮

の六章に分けて歐洲思想の變遷推移を説いたもので、著者の所謂『文藝史も哲學史も一般文化史も兼ね備へた最も綜合的な研究』である。卽ち、專門家以外に於て、歐洲思想の大體の變遷推移の跡を手取早く概括的に知りたいといふ要求を充たす可く作られた書である。叙述極めて平明で、よく要領を得て居る。近來、最も意義ある著述として推稱するに足るであらう。『廣い思想感情を多少綜合的に取扱つた點に於ていさゝか從來の慣例を破つた』と著者自ら云ふ如く、此種の著述は、實に、出づ可くして未だ出でなかつたものである。（新潮評）

四六判四百頁　クロース裝　函入全一冊　定價二圓八十錢　郵送料十二錢

生田長江　本間久雄　共著

拾版

社會改造の八大思想家

定價二圓八十錢　送料十二錢

本書はマルクス、クロポトキン、ラッセル、トルストイ、モリス、カアペンタア、イプセン、エレンケイの人格と其思想とを適確明快に講述せるもの生命ある現代思想の鳥瞰圖として眞に萬人の必讀書である

發行所　東京神田區表神保町三　振替口座東京二七〇　株式會社　東京堂書店

今般住友合資會社ヲ組織シ從來住友吉左衞門ノ經營セル諸事業一切ヲ承繼シ且各店ノ名稱左ノ通改定致候此段謹告仕候

大正十年二月二十六日

住友合資會社

社長 代表社員 業務執行社員 住友吉左衞門

代表社員 業務執行社員 鈴木馬左也

業務執行社員 住友忠輝

同 中田錦吉

同 湯川寛吉

店名	所在地
住友合資會社	大阪市東區北濱五丁目二十二番地
住友合資會社倉庫	大阪市北區中之島五丁目十五番地
住友合資會社別子鑛業所	愛媛縣新居郡新居濱町惣開
住友合資會社若松炭業所	福岡縣若松市本町五丁目六百六十五番地
住友合資會社札幌鑛業所	北海道札幌區北一條西三丁目三番地
住友合資會社大萱生鑛業所	巖手縣柴波郡乙部村
住友合資會社大良鑛業所	鹿兒島縣始良郡蒲生村
住友合資會社高根鑛業所	靜岡縣賀茂郡下田町
住友合資會社伸銅所	大阪市北區安治川上通一丁目二十二番地

店名	所在地
住友合資會社肥料製造所	愛媛縣新居郡新居濱町惣開
住友合資會社製銅販賣店	大阪市東區北濱五丁目三十二番地ノ乙
住友合資會社東京販賣店	東京市日本橋區平松町七番地
住友合資會社呉販賣店	呉市本通四丁目二十五番地
住友合資會社横須賀販賣店	横須賀市若松町九番地
住友合資會社博多販賣店	福岡市下店屋町五番地
住友合資會社上海洋行	支那上海九江路五號
住友合資會社漢口洋行	支那漢口英租界鄱陽街一號
住友合資會社天津洋行	支那天津佛租界二號路二十四號

藤田鑛業株式會社

大阪市北區堂島北町

合名會社 藤田組

大阪市北區堂島北町

株式會社 藤田銀行

大阪市東區今橋四丁目

――（大正十年度）――

現代思想・評論家總覽

編輯局編纂

（イロハ順）

編纂に就て

□本欄の編纂は、學位氏名及雅號、生地、生年月、學歴、閲歴及外國留學地、專攻科目及主張、著書及最近發表論文、關係團體及其地位、現在職業、現住所等、九項に別って御本人よりの御回答を頂き、それを基礎として適宜編輯局に於て案配加除したものである。併し御回答の原文は一字一句をも忽せにせぬやう、其儘に保存して、各個性の特長が失はれぬやうに注意した。

□思想家、評論家と云ふ範圍を多數の學者、思想家、文藝家、及操觚者の中から定めるとは、頗る難事なので、本年度の總覽は大體に於て最近發表の著作及評論を標準とし、更に社會評論に比較的緣由の多い御方だけを揭出することにした。來年度編纂の際は、更に其範圍を廣くして、有ゆる方面に亘り、科學、哲學、文學、思想の全般に迄及ぼしたいと思ふ。隨つて本年度不備の點は更に其機會に於て補遺したいと思ふ。

（記者）

石川三四郎

旭山、不盡生等の號を用ふ、明治九年五月埼玉縣兒玉郡旭村山王堂に生る、哲學館(東洋大學)に在學したることあり、中央大學法律科を卒業(明治三十五年頃)爾來猛烈なる社會主義運動を試み大正二年三月亡命の體にて渡歐、白耳義、英吉利、佛蘭西、モロッコ、西班牙等を漂浪し、大正九年十一月歸朝す、白國ブルスセル市在住中は同地新大學の總理ド・グレフ博士を始め諸講師と友交し、又諸講座へ出席。白國並びに佛國在住中は碩學ルクリユ一家と同居すること七年間、大いに啓發せられたり。英國にてはエドワアド・カアペンター翁と來往し愛情父子の如し、文明史の研究に趣味を有す。野菜物の耕作及び果樹の栽培には可なりの智識と經驗と材料とを有すと自信すと云ふ、自由、平等、友愛を主張す從て社會主義を鼓吹す、「哲人カアペンター」「西洋社會運動史」「砲聲を聞きつゝ」の著の外「古事紀神話の新研究」近刊の筈、社會主義同盟會員、文筆並に講演に衣食す、近く甲州に於て梅園經營の計劃ありと。(東京、神田鍛冶町五番地五十嵐方)

生田弘治 長江

明治十五年三月二十一日鳥取縣日野郡根雨町に生る、大阪桃山中學校、東京青山學院中學部、第一高等學校を經て、三十九年東京帝國大學文學部を卒業。所謂人道主義に對しては徹底人道主義を奉じ、常識的平民主義に對してはブランデスの所謂貴族的急進主義を奉じ、所謂理想主義、もしくは所謂現實主義に對しては、理想的現實主義を奉ずる等、一言にして盡しがたきものあり。著書としては、「鬪光以後」「環境」「最近の小說家」「最近の文藝及び思潮」「徹底人道主義」の外「ニイチエ全集」「マルクス資本論」の飜譯あり、近時多くの社會評論を公にす、著作家組合員(麴町區上六番町三十二番地)

井箆節三

明治十八年九月十日岐阜縣土岐郡稻津村に生る、明治三十七年麻布中學校、仝四十年早稻田大學(經濟學科)、仝四十二年普及福音神學校卒業、經濟學を專攻、私有財產主義を主張す「ユウトピア物語」「私有財產主義」の著の外多くの評論あり(名古屋市外千種町高見三七)

石坂養平

明治十八年十一月二十六日埼玉縣大里郡奈良村に生る、埼玉縣立熊谷中學校、仙臺第二高等學校を經て大正二年東京帝國大學文科大學哲學科卒業、美學を專攻し「最高原理の發現たる國家主義」を高唱す、「藝術と哲學との間」の外幾多の評論を公にす、文藝評論以外地方問題に就て氏の所見を期待する者多し、埼玉共濟會評議員兼理事、埼玉縣農會議員、埼玉縣會議員、株式會社熊谷銀行副頭取(埼玉縣大里郡奈良村大字中奈良貳〇五五)

稻毛金七 詛風

明治二十年六月五日山形縣東置賜郡漆山村に生る、三回小學校教員檢定試驗二回中學教員檢定試驗(修身科、教育科)合格、明治四十五年早稻田大學文學科哲學科卒業の後、小學校教員、雜誌記者、雜誌經營を爲したる事あり、步兵三十二聯隊に入營す、教育哲學を專攻し創造本位主義を主張す、「若き教育者の自覺と告白」「生の創造と道德」「愛し得ざる悲哀」、「批評論」、「民本主義の眞髓」「思想の力」「教育者のための哲學」其他

多くの著述と評論あり、雜誌「創造」主幹(小石川小日向臺町三の七七)

伊藤野枝

明治廿七年福岡縣に生る、大杉榮氏の夫人なり、女子大學出身、曾て『青鞜』社の起るに際し之れに關係したることあり、夙に社會問題婦人問題に興味を持ち研究し評論す、(相洲鎌倉小町)

馬場勝彌 孤蝶

明治二年十一月九日高知縣高知市に生る二十四年六月私立明治學院卒業二十八年ヨリ三十年迄中學校敎諭たり三十年より三十九年迄日本銀行書記となる「やどり木」「泰西名著集」「モウパッサン傑作集」「戰爭と平和」等の飜譯の外「のもり草」「迎魏」「近代文藝の解剖」「最近社會的文藝」等の著書の外小說及評論多し殊に社會文藝の造詣深し、故馬場辰猪氏の令兄なり著作家組合員、明治三十九年以降慶應義塾大學部敎授(牛込區本村町十五)

長谷川萬次郎 如是閑

明治八年十一月東京市深川區に生る明治廿一年東京法學院(中央大學)を卒業、日本新聞、日本及日本人記者たりし後大阪朝日新聞に入り幹部たり、大正七年退社後大山郁夫、櫛田民藏氏等と『我等』を創刊し、新思想の爲めに氣を吐く、「額の男」、「倫敦」、「搦手から」等の著の外多くの評論を公にし、幾多の創作は我が文壇に一地歩を占む、雜誌『我等』社同人(東京府下中野町九三七)

長谷川誠也 天溪

明治九年十二月三日新潟縣刈羽郡高濱町字椎谷に生る、東京專門學校文學科(早大文科の前身)を卒業す、出版業取調のため明治四十三年英米へ留學、大正元年十月歸朝心理學哲學を專攻す、「アリストートル」「文藝觀」「自然主義」「成年期」等の著の外多くの評論あり、文化事業研究會に屬す、博文館編輯部長、(芝區神谷町二十五番地)

波多野精一 文學博士

一八七七年七月長野縣松本市に生る、一八九三年第一高等學校に入學。一八九九年。東京帝國大學文科大學哲學科卒業の後一九〇四年より六年迄獨逸國に留學す、一九〇〇年より一七年迄早稻田大學講師及敎授たりしが、一九一七以來。京都帝國大學敎授となり現任に至る、哲學を專攻し「西洋哲學史要」「基督敎の起源」「スピノザ研究」「宗敎哲學の本質及根本問題」等の著あり、京都帝國大學敎授,京都市上京區田中西浦町八十番地)

坂西由藏

明治十年十二月兵庫縣城崎に生る、明治三十七年東京高等商業學校專攻部卒業、獨、英、佛、米に留學經濟學及經濟史を專攻、公益論」「經濟的文化發達の過程に於ける二傾向」の著あり、神戸高商敎授、神戸市坂口通七の六八)

西田幾多郎 文學博士

明治三年八月十日石川縣河北郡宇ノ氣村に生る、石川縣專門學校附屬初等中學に入る第四高等中學校に移る中途退學明治廿七年東京文科大學哲學選科卒業の上、能登七尾中學、山口高等學校、第四高等學校、學習院等に敎授たりしことあり、我が哲學界の耆宿たると共に、世界哲學界の權威たり、「善の研究」「思索と體驗」「自覺に於ける直觀と反省」「意識の問題」「現代に於ける理想主義の哲學」等の名著あり、京大文學部敎授

（京都市上京區田中上柳町二九）

新居格（ニイ イタル）

明治廿一年三月九日徳島縣板野郡大幸村に生る、時折水上浩亂と云ふ匿名を用ゆることあり、第七高等學校を經て東大政治科に入る大正四年卒業、曾つて讀賣新聞の論說記者大阪毎日社說專任記者をなしたることあり。政治學を專攻し、近時サンヂカリズムに共鳴する所あり、「シンフエン概說」「共產か分產か」等多くの社會評論あり、東京朝日新聞社員（牛込區南榎町五拾七番地）

堀江歸一　法學博士

明治九年四月東京府荏原郡白金村現今の芝區白金三光町に生る、明治二十九年十二月慶應義塾大學理財科卒業。明治三十五年七月以後同大學教授たり、英米獨三國に留學、明治三十六年九月より同三十五年七月までパーヴアード大學倫敦大學等に在籍、同四十二年四月より四十三年三月まで、再度外遊、經濟學と財政學を專攻し主張は今日よりも公正な社會を造ることに在りと「貨幣論」「銀行論」「財政學」以上は明治三十六年より四十二年までに第一版を發行し其後隨時改版したり。「勞働問題の現在及將來」（大正九年）「勞働組合論」（同）「社會經濟研究」（同十年）の著の外多くの評論を公表す、社會政策學會員、慶應義塾大學教授（東京市芝區白金三光町二六一。電話四六六二番）

帆足理一郎（ドクタアオブフ ヒロソフヒイ）

明治十四年十一月五日福岡縣筑紫郡二日市町大字武藏に生る、小學卒業後間もなく東京法學院に學び、一年半にして法律を擲ち渡米、研學十數年、ハイスクウルより南加州大學に進み、英文學、古典、哲學を修めて、A、B、を得、教育學を修めてA、M、を得、更にシカゴ大學に轉じて神學、哲學、宗教哲學を修めてPh、D、を得、一九一八年歸國、早稲田大學に教鞭を採りしも、昨年不幸にして朝憲紊亂の判決を受け、禁錮の刑に處せられ、執行猶豫の恩典に預り、職を失つて目下謹愼中、宗教哲學を專攻し社會奉仕即人格の向上を主張す、「Problem of Omnipotence in Current Theology.」「宗教と人生」「哲學と人生」「人生詩人ブラウニング」「教育哲學概論」（デユウイー原著全譯）「國民生活の改造」「文化生活と人間改造」「哲學概論」（印刷中）の著あり、早稲田大學クリスト教青年會寄宿舍信愛學舍舍監（東京市外下戸塚五二〇）

穗積重遠　法學博士

明治十六年四月東京市に生る、東京高等師範學校附屬中學校及び第一高等學校を經て明治四十一年七月東京帝國大學法科大學獨法科卒業、大正元年十月より五年二月迄獨（ボン及び「ベルリン」）佛（パリ）英（ロンドン）米（ケムブリッチ）留學、民法殊に親族法相續法及び法理學を專修す、『人の人たる所以は人と人との結合に在り』と云ふドイツの法學者ギールケの言をモットーとす。「戰爭と契約」「法理學大綱」「親族法大意」の著の外、專門的見地よりせる多くの社會評論あり、「裁判の簡易化」「ロシア革命と婚姻法」「ロシア革命と親族法」等最近の主なるもの也、法學協會（雜誌主任）法理研究會（委員）國際聯盟協會（理事）啓明協會（幹事）東京帝國大學教授（明治四十三年三月助教授に任ぜられ、大正五年九月教授となる外に、中央大學講師、第一高等學校講師（牛込區南町二番地。電話番町四三三番）

本間久雄

明治十九年十月十一日山形縣米澤市越後番匠町に生る、四十二年早稲田大學英文科卒業、文學を研究すると共に婦人問題を研究す、「最近の思潮及文學」「生活の藝術化」「社會改造の八大思想家」(生田長江氏と合著)「エレンケイ思想の眞髓」「近代文學の研究」「新文學概論」「尾崎紅葉」「現代婦人問題」等の著書の外ヒルン「藝術の起源」エレンケイ「戀愛と道德」「來るべき時代のために」ワイルド「獄中記」「社會主義と人間の靈魂」「柘榴の家」等の飜譯あり、「早稲田文學」編輯主任、早稲田大學講師(小石川高田老松町十七番地)

朝永三十郎 文學博士

明治四年二月長崎縣東彼杵郡川棚村に生る長崎縣玖島學館中學校、東京英語學校、第一高等中學校を經て、帝國大學文科大學に入學明治三十一年七月卒業、明治四十二年十一月獨、英、佛三國、主としてベルリンヘイデルベルリライプツイシヒに留學、西洋哲學史を專攻、斯學に關する多くの著書と論文あり、我が哲學界の權威として何人も知る所なり、京都帝國大學教授(京都上京區聖護院御殿内)

千葉龜雄 江東

明治十一年九月廿四日山形縣酒田町に生る仙臺市立第一中學、早稲田大學歷史科をいづれも半途で退學、國民英學會を卒業、曩に時事新報社會部長たりしが、大正八年重用せられて讀賣新聞に入る、常に現代日本が容易に擺脫し切れない思想的迷蒙と因習を破する爲の「人間主義」と「文化主義」を提唱す、「日本仇討物語」「五年前」の著の外、外國文學に關するもの及多くの評論あり四五年後までに世界近代小說研究を爲すべしと云ふ、讀賣新聞社會部長(府下荏原郡大井町字庚塚四千八百六十六)

大庭景秋 柯公

明治五年七月山口縣長府町に生る、學歷無し、二十五歲から三十五歲まで歐露及西伯利に遊學放浪。三十五歲から五十歲の今日まで新聞記者生活、「大阪每日」「東京朝日」を經て、現「讀賣」に居る。其間支那、比律賓、濠洲、南阿、アルゼンチン、ブラヂル、英米及び全歐、中央亞細亞、波斯等歷遊、絕對洋服主義。五度の近眼。身長五尺。酒烟を好まず。大食無病との事也。所謂八宗兼學にして、社會主義を支持す、「南北四萬哩」「世界を家として」「露西亞に遊びて」「世を拗ねて」「ペンの跡」等の著と多くの評論あり、著作家組合(評議員)、社會主義同盟會員、讀賣新聞記者(東京市四谷區愛住町四九八。電話番町四一〇七番)

大島正德

明治十三年十一月十一日神奈川縣高座郡海老名村中新田に生る、明治三十四年第一高等學校文科卒業、明治三十七年東京帝國大學哲學科卒業哲學倫理を專攻、社會思想に就ては人格の本質から考へる主義、「世界心國家心個人心」「新思想の批判と主張」の著の外「人格の本質として自由の根本義」「議會是非」「新實在論の論旨」等多くの評論あり、丁酉倫理會員、黎名會々員、東京帝國大學助教授兼一高教授(本鄕區駒込千駄木五二 電話小石川四六七番)

大山郁夫

兵庫縣飾磨に生る、明治廿八年早稲田大學政治經濟科卒業の上、引續き同校に教師となり、留學生として英獨に四ケ年滯在、歸朝後同校に教授たりしが大正六年辭職後

大阪朝日新聞に入社言論記者たり、大正七年之を辭し長谷川如是閑櫛田民藏氏等と雜誌「我等」を創刊新思想の研究評論を爲し新文化を鼓吹す、「民衆文化」「社會教育」の著の外社會評論時事評論等頗る多し、雜誌『我等』社同人（府下戸塚町上の原六九一番地）

小川健作 未明

明治十五年四月越後高田に生る、明治三十八年早稻田大學英文科出身「赤き地平線」の著書の外多くの創作あり、其他短篇集、童話集あり。近時社會問題に興味を有し遂に自ら社會主義同盟に入會して氣を吐かんとす（牛込、天神町二十三、）

大杉榮

明治十八年五月十七日香川縣丸龜市に生る、東京外國語學校佛語科卒業、其の後社會主義運動の爲め睨まれ東京監獄巣鴨監獄千葉監獄中野監獄等にて開所獨學す。社會學を專攻し、主義は嚴密に云へばなし。便宜上無政府共產主義と稱すとの事也。『生の鬪爭』『社會的個人主義』『勞働運動の哲學』『クロポトキン研究』等の外多くの飜譯と評論あり大正九年週刊「勞働運動」を創刊し萬丈の氣を吐き、自ら赤衛軍と稱す、日本社會主義同盟の飛將たり、『勞働運動』社員、社會主義同盟會員（神奈川縣鎌倉小町瀬戸小路）

大西猪之介

一八八八年十二月廿八日京都市に生る、東京高等商業學校專攻部（一九一一年卒業）一九一三年一月出發歐洲留學一九一七年八月歸朝、經濟學を專攻「伊太利亞の旅」「囚はれたる經濟學」の著の外評論多し、小樽高等商業學校教授（小樽區綠町二ノ廿五）

大內兵衛

淡路江波村の人、東京帝國大學卒業、同校經濟學部に助手たり、社會問題に關する多くの論文を發表す、偶々大正九年一月氏の編輯せる經濟學部機關雜誌『經濟學研究』に森戶氏のクロポトキンの研究發表せられ、其結果名義人として禍を蒙りて帝大を辭す、大正十年二月末日森戶氏と共に歐洲に遊學の途に上る、目下滯在中、本年三十三才（府下大久保百人町三一七番地）

若宮卯之助

明治五年九月二十三日富山縣西礪波郡埴生村に生る、年壯にして渡米し苦學力行す、Catholic University of America (1900—1904) London School of Economic and Political Science (1904—1905) を卒業、社會現象の研究を主とし、社會學に於てはウオード氏の高弟たり、多くの著書と評論あり、中央新聞記者（東京市外下目黑六〇五。電話高輪一三六八番）

鷲尾正五郎 Ph. D.

明治十六年兵庫縣淡路洲本町に生る、ハーバート大學にて哲學專攻一九一一年Ph.D.を受く、一九一一年より一九一二年迄ハーバード大學の留學生として獨、佛に遊ぶ、大正八年後藤男に隨行し特に英國の社會狀態及勞働運動を觀察す、專攻は哲學たれど哲學上の持論を未だ發表したる事なし、一昨年「最近の勞働運動」を出版せる外評論多し、外務省情報部囑託（麻布區櫻田町四九）

和辻哲郎

明治二十二年三月一日兵庫縣神崎郡仁豐野村に生る、姬路中學第一高等學校を經て、四十五年東大文科哲學科卒業、哲學及び哲學史を修め、更に人類文化史を研究す

「日本古代文化」「古寺巡禮」「偶像再興」「ゼエレンキエルゲゴオル」「ニイチエ研究」の著あり、東洋大學教授(八年五月)(芝區三田綱町一)

渡邊鐵藏　法學博士

東京市帝國大學法科卒業引續きて同校に教授たり、近時社會問題としての都市問題に關して研究を發表し、都市改善の爲め都市研究會を起して宣傳と研究に力む、其他思想問題に關する評論多し、都市研究會理事、帝國大學教授、東京市顧問(赤坂青山南町一ノ二七。電話芝三八三〇番)

片山潜　マスター・オブ・アーツ・バチエロル・オブ・ジヴイニチー。

岡山縣津山に生る、年六十歳くらゐ、アメリカの大學を卒へたる後、日本に於て、キングスレーホールを設立したる事あり、其間熱烈なる勞働運動、社會主義運動を試みたるが、政府の壓迫酷烈の爲め遂に米國に逃る、東洋經濟新報記者たりしことあり、夙に社會主義に共鳴し、日本に於ける主義者の最古參の一人たり、近時ボリシエズムに共鳴し、ソビエトロシヤに於ては其名嘖々たるものありと云ふ、Labour Movement in Japan (シカゴ發行)の著あり、現在多分コックを職として主義の宣傳に努め居るならんと云ふ、(アメリカ、ニユーヨーク在住)

金子馬治　文學博士

筑水と號す、明治三年一月十日長野縣小縣郡殿城村に生る、明治廿六年元東京專門學校文科卒業引續き早稻田大學教師たり、ドイツ國ライプチヒ、ベルリン、ハイデルベルヒ等に遊學す、「近代思想研究」「歐洲思想大觀」「生活と文化」等の著の外幾多の文藝哲學評論あり、早大文學部長(牛込下宮比町九)

神戸正雄　法學博士

明治十年四月愛知縣一宮町に生る、明治三十三年、東京帝國大學法科卒業、直ちに同大學院に入り、三十五年、京都帝國大學法科大學助教授となり、三十七年八月、文部省留學生として歐米に渡り、特に獨逸ヴユルツブルグ大學シヤンツ教授に師事して財政學を專修す、四十年九月、京都帝國大學法科大學教授となり、大正二年九月カーン財團より歐米に派遣せられ三年十二月歸朝して今日に至る、一般財政經濟及社會問題、特に租税論を專攻し、社會改良主義を唱ふ獨逸文著書二種邦文著書二十種に上る外幾多の社會評論あり、世界經濟學會(獨逸)、京都帝大經濟學會、社會政策學會、國家學會國際法學會、社會學院等に屬し、大阪織工組合、作給者組合等に盡力し居れり、京都帝國大學教授、(京都、上京、淨土寺西田町、七〇。電話上三三七〇番)

河上肇　法學博士

明治十二年十月山口縣岩國町に生る、明治三十五年東京帝國大學法科大學卒業、曾て讀賣新聞記者たりしことあり、夙く已に社會問題の研究に從事し、現下斯界の權威として聞ゆ、大正八年自ら月刊『社會問題研究』を創刊して、新思潮の研究と鼓吹に盡瘁し、我が新文化に貢獻する所頗る大なり、社會問題に關する評論頗る多く、「貧乏物語」「經濟思想史」「社會問題管見」「祖國を顧みて」等多くの著作あり、京都帝國大學教授(京都市吉田二本松町。電話上五九二番)

河津暹　法學博士

明治八年一月東京に生る、東京帝國大學法科卒業後同校に教授たり、卅三年英獨に、

四十五年米國に留學。夙に經濟的見地より社會問題の解決に力め多くの著書と評論あり、大正八年東京にS・M・Cの創立せらるゝや之に盡力する所多し、社會政策學會員、帝國大學法學部教授（東京市外中野町桃園）

河田嗣郎　法學博士

氷谷と號す、明治十六年四月山口縣玖珂郡伊陸村に生る、明治四十年京都帝國大學法科大學卒業、四十年より四十一年迄國民新聞社に奉職、四十一年京都帝國大學講師囑託、四十二年仝助教授に任ぜられ、大正元年より五年まで獨英佛米に留學、大正七年京都帝國大學教授に任ぜらる、經濟學を專攻し「家族制度の發達」「資本主義的精神」「價値論（共譯）」「土地經濟論」「日本の經濟と佛英」「社會主義論」（經濟全書中の一卷）「婦人問題」「殖民地としての巴西」「穀價の研究」「農業倉庫論」「家族制度研究」「社會問題及社會運動」「經濟學要義」等の著あり、大原社會問題研究所、社會政策學會等に屬す、京都帝國大學教授（京都市上京區北白川追分町。電話上一三一四番）

片上伸

明治十七年二月二十日伊豫國越智郡波止濱村に生る、明治三十三年松山中學修了、仝三十九年七月早稻田大學文學科修了、仝四十年早稻田大學豫科の英語教師となる。大正五年秋モスクワへ赴き、大正八年春歸る、モスクワ大學、自由大學などに時々行けり、早稻田にて英文學を主として學び、敎へ、後專らロシヤ文學を修め、敎ゆ、「生の要求と文學」「無限の力」「草の芽」「思想の勝利」「ロシヤの現實」「近代英詩評釋」「テニスンの詩」「エマスンの自然論」「ドン・キホーテ」「死人の家」等あり、早稻田大學文學部內文化事業研究會常任幹事、自由教育協會編輯委員、早稻田大學文學部教授（東京市外西大久保三百十二）

加藤一夫

明治二十年二月二十八日和歌山縣西牟婁郡大都河村字防己に生る、中學卒業後、明治學院高等學部を經て、明治四十三年神學部本科を卒業。芝敎會及びゆにてりあん敎會にて傳道に從事し、後六合雜誌に詩を書いたのを初めとして、文壇の生活に入り、小說、詩、評論を書き今日に至る、その間雜誌「科學と文藝」「勞働文學」等發刊す、大正九年五月「自由人聯盟」創始。人生問題の根本的解決を志向し、その研究の結果、生命の衝動に生活の根柢を見出し「自由人」的生活態度を決定す。虛無的、無政府主義的傾向最も强し、「本然生活」「土の叫び」「地の騷ぎ」「民衆藝術論」「救のない人生」「無明」（小說）の著あり自由人聯盟 社會主義同盟、著作家組合會員（東京府下中野町一〇三〇）

河合榮治郎

明治廿四年二月東京府下千住町に生る、東京府立第三中學校第一高等學校を經て、東京帝國大學を大正四年卒業、大正七年より大正八年に亘り米國に滯在勞働問題を研究す、農商務省參事官たりしも職合はずして辭職す、勞働問題を研究し「勞働問題研究」の著の外社會評論多し、東京帝國大學助教授（東京府下大井町四九四八）

賀川豐彦　バチエラー・オブ・デヴュニチー

明治二十一年七月十日神戶市島上町百〇八番地に生る、德島中學卒業（明治三十八年）明治學院高等科二年修業（明治四十年）

神戸神學校卒業（明治四十四年）後米國プリンストン大學及神學校（一九一六年）に學び學位を受く、目下神戸貧民窟に雜居して、獻身的に貧民傳道に從事す、心理學、哲學、神學、生物學を修め、主觀經濟の上に立ちたるギルド・ソシアリズムを主張す『貧民心理の研究』『精神運動と社會運動』『人間苦と人間建築』『主觀經濟の原理』『基督傳論爭史』『涙の二等分』（詩集）『死線を越えて』（小說）『地殼を破つて』（散文詩）『預言者エレミヤ』『ゞ情』『イエス傳の教へ方』等の著あり、友愛會神戸支部長、關西印刷工同盟會長、大阪印刷工組合會長、大阪伸銅工組合會長、大阪消費組合共益社理事、神戸購買組合理事、イエス團々長、基督教々師、（明治四十三年以來）學校教師（大正元年以來）勞働者新聞、印刷工新聞記者（神戸市北本町六丁目）

加田哲二

曾て忠臣と呼ぶ、明治廿八年十一月十六日東京本鄕區湯島三組町に生る、東京京華商業學校卒業後慶應義塾理財科に入り大正八年三月卒業す、經濟學並に社會學を修め、「アーサー・ペンティの歷史觀」「經濟價値論」の著の外雜誌「批評」に甲野哲二の別名を以て社會評論を發表せり、慶應義塾經濟學部教師（相州片瀨山本橋際小池方）

與謝野晶子

明治十一年十二月七日堺市に生る、堺市高等女學校を卒業し、獨學にて史學と文學を修む、明治三十三年以來新詩社同人として歌壇に新機運を畫す、大正元年歐洲諸國に漫遊、「新譯源氏物語」「新譯榮華物語」「火の鳥」「激動の中を行く」「晶子歌話」「人間禮拜」等四十七種の著作あり、近時社會問題の評論多し、黎明會、朱葉會、著作家組合會員（麴町富士見町五ノ九。電話九段二一一〇番）

吉江喬松　號孤雁

明治十三年九月長野縣東筑摩郡鹽尻村に生る、三十八年早大文科を出て、大正五年同大學留學生として佛蘭西に赴き、具に佛蘭西文學を研究し九年八月歸朝、論文集「純一生活」「愛と藝術」の外“L E. Bit”“Drabiba”の佛譯、ツルゲーネフ、モウパッサン、メエテルリンクの邦譯、「高原」「旅より旅へ」「青空」「砂丘」「雲の原」等の文學著作多し、最近「新國民主義」の一文を草して其思想的傾向の一斑を語る、早稻田大學教授（府下日暮里渡邊町一〇四〇）

吉野作造　法學博士

宮城縣仙臺に生る、東京帝國大學卒業後歐洲に留學し帝大教授たると共に、早大中大等の講師たり。卒先して民主主義を唱へ、頗る多くの社會評論と政治論とを公にす、曾て支那袁世凱の家庭教師たることあり、新思想を主義とする多くの團體の先達として盡力する所多し、東京帝國大學教授（本鄕駒込神明町三二七番地。電話小石川二〇四八番）

高野岩三郎　法學博士

明治四年九月長崎市に生る、第一高等學校を經て東京法科大學政治科を明治二十八年卒業、獨逸其他歐洲に留學して統計學及勞働者問題を專攻し斯學の唯一人者と稱せらる、主に勞働統計の發達に努力し勞働組合主義を支持して社會問題の解決を期し居れり、「本邦人口の現在及將來」「統計學研究」の著あり、社會政策學會員、大原社會問題研究所長、東京帝國大學講師（東京市本鄕區動坂町一〇〇）

田邊　元　文學博士

明治十八年二月東京に生る、東京府第四中學校、第一高等學校を經て、明治四十一年東京帝國大學文科大學卒業、東北大學敎授たりしが、大正八年八月京大に轉ず、大正七年博士となる、哲學を專攻し「最近の自然科學」「科學概論」等の著あり、京都帝國大學助敎授、東京商科大學講師（京都市田中玄京町七）

高橋誠一郎

横濱市に生る、慶應義塾大學卒業後同校に敎鞭を執り歐洲に留學して經濟史を專攻す、歸朝後同校敎授として今日に至る。「經濟學史研究」「歐洲經濟學史」の大著作の外多くの評論と研究とを公にす、慶應義塾大學敎授（相州八幡町半双山ヘ　編輯局調）

高畠素之

明治十九年正月上州前橋に生る。中學卒業後京都同志社神學部に入り、キリストの福音にて飯命を繋ぐこと約二年、後脱走して堺利彥氏の賣文社に入り茲にて數年間の露命を繋ぎ、國家社會黨を企てゝ成らず、目下マルクス全集擔任中、終始一貫獨學の人也、革命的集產主義（又は國家社會主義）を主張す、「資本論解說」「社會主義と進化論」「マルクス學研究」「社會問題總說」「社會主義社會學」「社會主義的諸研究」「資本論」（第一卷）等の大著の外幾多の評論あり、大衆社主人、社會主義文獻蒐集（本郷千駄木町五五）

田邊忠男

明治廿四年八月十一日長崎縣長崎市に生る、私立曉星中學校、第一高等學校を經て、大正五年東京帝大經濟科卒業、經濟學を專攻し「自由、平等、博愛」を主義とす、「コール」著「勞働の世界」譯者の外「內務農商務勞働組合法批評」「コール」の「社會學說の根本思想」「波瀾重疊の經濟界」等の評論あり、財政經濟時報記者、專修大學講師（本郷區湯島天神町一の八六）

田中喜一　王堂

東京に生る、文藝及哲學上の評論を以て聞ゆ、「哲人主義」「書齋より街頭へ」「徹底的個人主義」等の著作の外評論頗る多し、早稻田大學講師、（小石川區原町一〇六）

恒藤　恭

明治二十一年十二月島根縣松江市に生る、明治三十九年島根縣松江中學校卒業、大正二年第一高等學校卒業、大正五年京都帝國大學法科大學卒業の上、大正八年九月より同志社敎授たり、法律哲學を研究し特殊の學術として重きをなす、專門的見地より見たる社會評論等多し、同志社大學法學部敎授（京都市上京區下鴨森本町六）

土田　茂（ツトム）　杏村

明治二十四年一月新潟縣佐渡郡新穗村に生る、東京高等師範學校博物學部を卒へ、京都帝國大學文科哲學科卒業、京都帝國大學大學院在學中、哲學、生物學を專攻し、新理想主義を主張す、併し現在は經濟學、社會學等の哲學化を研究中、「文明思想と新哲學」「文壇への公開狀」「生物哲學」「文化學的研究」第一卷「象徵の哲學」「靈魂の彼岸」「文化主義原論」の著あり、日本文化學院を創設し、雜誌「文化」を創刊す、大學院學生（京都市上京區新町頭日本文化學院）、

永井　潛　醫學博士

靜山又は獨樂齋樓主人と號す、明治九年十一月十四日廣島縣賀茂郡竹原町に生る、明

治二十七年尋常中學福山誠之館卒業、明治三十一年第一高等學校卒業、明治三十五年東京帝國大學醫科大學卒業。明治三十六年官命により獨英佛三ケ國に留學、專ら獨乙「ゲッチンゲン」大學生理學教室に於て「フェルウオルン」教授に師事す、明治三十九年歸朝東大助教授となり、生理學第二講座擔任、明治四十四年學位受領、大正四年教授となる、生理學を專攻し自然科學的生物學的考察により、健全なる人生觀、社會觀に到達せんことを期すと云ふ、「醫學と哲學」「生命論」「人生論」「生物學と哲學との境」の著の外評論多し、學術研究會議會員、保健衛生調査會委員、學校衛生調査會、醫師試驗齒科醫試驗委員、理科教育研究會顧問、大日本學校衛生協會理事、帝國學校衛生會理事、東京帝國大學教授(東京本郷區動阪町百〇四番地・電話小石川一二五三番)

中野正剛

福岡縣の人、明治四十二年早稻田大學政治科卒業、東京朝日新聞記者となる、辭職後「東方時論」を創刊して政論を試む、大正九年福岡縣より選出されて代議士となり、巴里に國際聯盟會議開催の頃歐洲に漫遊したることあり、「世界政策」「講和會議を目擊して」「現實に直觀して」等の著あり、代議士、「東方時論」主筆(府下千駄谷原宿二〇〇ノ一。電話芝六三六〇番)

武者小路實篤　無車

明治十八年五月十二日東京麹町區元園町一ノ三八に生る、學習院卒業後帝國大學文科に、一年在學したる事あり、爾來幾多の創作と評論を公にしたるが、大正七年其主義を實現せんが爲め、同志と共に日向に地をトし、「新しき村」を經營し、具に苦艱と戰つて農牧を業とし傍ら文筆を呵して主義と藝術の爲に精進す、「新らしき村の生活」「その妹」「ある青年の夢」「Aと運命」等幾多の文藝著作と評論あり。(日向國兒湯郡木城村新しき村)

室伏高信

明治廿二年神奈川縣足柄下郡土肥村宮上に生る、順天中學卒業後明治大學に入り中途退學、直に記者生活に入り、時事新報(大正三年)東京朝日(大正五年)に政治記者たり、日獨戰爭に際し從軍記者たりしことあり、民主々義を主張し更にギルドソシアリズムに興味を持つて研究す、大正八年新思潮の魁として雜誌「批評」を創刊す、大正九年改造社特派員として歐米に漫遊目下露西亞に在り「民本主義について」「社會主義批判」「民衆政治」「ギルド社會主義」「政友會罪惡史」「エドワード・グレーの外交」「社會主義民主主義」等の著作の外頗る多くの評論を公にす、雜誌「改造」社同人(府下大森町不入斗四七一)

内田貢　魯庵

不知庵と號したることあり、明治元年九月東京下谷車坂に生る、格別學歴なく卒業證書は小學校のすら持たずと云ふ、露西亞文學の造詣深く之に關する多くの著作と評論あり、近時社會問題に關して氏一流の透徹せる評論を多く公にす、小説「片うづら」「ゝきまくら」「暮の廿八日」の外「罪と罰」「復活」「二人畫工」の譯著あり、「獄の舌」「バクダン」(近刊)は最近著なり、一身を束縛せらるる定職なし強て云はゞ明治卅五年以來丸善株式會社顧問なりと云ふ、(府下淀橋町柏木三七一)

上杉愼吉　法學博士

明治十一年八月石川縣に生る、明治三十六年東京帝國大學卒業、直に同校に敎師たり、明治三十九年より三年間英佛獨に留學す、帝國憲法を專攻し、之に關する著作多し、東京帝國大學敎授(小石川大塚坂下町五四。電話小石川二四〇五番)

上田貞次郎　法學博士

貞城と號す、明治十二年五月東京麻布德川侯爵邸に生る、芝正則中學校を經て東京高等商業學校に入り、三十五年同校專攻部を卒業して商學士となる、爾來今日に至るまで同校敎職にありて經濟學を研究す、其間明治三十八年より四十二年に亙り文部留學生として英獨兩國に留學す、大正二年舊藩主嗣子に從ひ再び英國に赴きケンブリヂに學ぶ、大正八年第一回國際勞働會議に際し政府代表の顧問として米國に赴く、初め經濟學の一分科として商業學を構成せんと企て十年間考へたるも要領を得ず、今は一般經濟學を研究しつゝあるも企業及其社會化に就いて特に興味を有す。「外國貿易原論」「日本商業史敎科書」を著はす、明治四十五年の頃經濟大辭書中に企業及經營に關する諸問題を執筆す、後「株式會社經濟論」「戰時經濟講話」を著はす、南葵育英會幹事、一橋商科大學敎授、(東京府北豐島郡高田町上屋敷千百二十二番地。電話番町一八八一番)

昇直隆　曙夢

明治十一年七月十二日鹿兒島縣大島郡實久村芝に生る、正敎神學校を卅六年に卒業、同時に同校講師を囑託せられ、旁獨逸語專修學校に通學、三十八年大阪朝日新聞社客員、大正元年八月陸軍中央幼年學校敎授、大正四年早稻田大學講師となる、大正五年十二月陸軍士官學校敎授に任ぜられ、大正七年大阪每日新聞社客員に囑託、同八年內務省外事課顧問に囑託せらる、ロシヤ文學の造詣深く、思想の基調を文化主活におき、社會改造を主張す「露國現代の思潮及文學」「露國近代文藝思想史」、「露國及露國民」、「露國革命と社會運動」「決鬪」「どん底」、「虐げられし人々」「六人集」「毒の園」大正八年より九年にかけて「ろしあ民衆文學全書」五卷發行、大正九年より十年にかけて「露國文豪傑作選」六卷發行其內四卷既刊、陸軍敎授(東京市牛込區若松町百〇二番地)

野村善兵衛　隱畔

明治十七年八月五日福島縣伊達郡半田村に生る、小學校を卒へたる後農業に從事し全くの獨學にて勉學力行す、明治四十一年哲學研究の目的にて上京以來多くの評論を公にし、絕對自由主義を唱ふ、「ベルグソンと現代思潮」「自我の研究」自我を超えて」「現代文化の哲學」「自我批判の哲學」「新文化への道」「未知の國へ」其他文化及文化主義に關する論文及宗敎論文數多有り、著作業、(東京市小石川區宮下町貳拾壹番地)

野村兼太郎

明治廿九年三月廿日、東京市に生る、東京府立第三中學校を經て慶應義塾理財科を大正七年三月卒業、直に同校に敎鞭を執る、文藝作品を發表したるとあり、經濟學を專攻す、「經濟的文化と哲學」の著作「社會改造と個人の意義」の評論の外多くの評論あり、社會政策學會員、慶應義塾敎諭(東京市芝區二本榎町一の卅九)

久津見息忠　蕨村

嘉村陵士、蘇鉄學人等の號あり、德川幕府滅亡の末年（慶應元年）江戸（東京がまだそう云つた頃）に生る、「學歷は中學以上で好いとの事ですが誠にはや恥しい次第で私は夫れが皆無であります、一切が一切獨學であります、若し學校へ出入せぬものは無敎育者だとするならば私ほどの無敎育者はありますまい、」との事也、主としては哲學、を學び、目下は基督敎の科學的研究を爲す『無政府主義』『人生の妙味』（以上發賣禁止を蒙る）『現代八面鋒』『眞人僞人』『ニイチエ』『自由思想』『基督敎罪惡史』（以上著書）、英國ロンドンの Rationalist press association の會員（東京市小石川區宮下町二十二）

桑木嚴翼　文學博士

明治七年六月東京に生る、明治二十九年七月東京帝國大學文科大學哲學科卒業、大學院入學、三十五年二十八才にして文學博士となる、三十二年東京帝國大學文科大學講師（後、助敎授）第一高等學校敎授、三十九年京都帝國大學文科大學敎授、大正三年東京帝國大學文科大學敎授たり、明治四十年獨佛英米留學二年間、哲學を研究す、「哲學概論」「哲學綱要」「現代思潮十講」「カントと現代の哲學」「五大哲學者」、「デカルト」「時代と哲學」「現代の價値」「哲學と文藝」「哲學五旅辨其他」、「倫理學講義」等の著あり、哲學會、丁酉倫理會、黎明會等に屬す、東京帝國大學敎授（東京市牛込區北町三十四番地。電話番町五五〇九番）

厨川辰夫　文學博士

白村と號す、明治十三年十一月十九日京都に生る、京都府立第一中學、第三高等學校を經て明治三十七年東京帝國大學英文學科卒業、大正四年文部省海外留學生となり、六年歸朝大正八年博士となる、英文學を專攻す、「近代文學十講」「文藝思潮論」「印象記」「小泉先生そのほか」、「象牙の塔を出て」等の著作の外評論甚多し、京都市帝國大學敎授、（京都市岡崎南御所町四〇。電話上三五七三番）

櫛田民藏

東京帝國大學法科選科卒業、同校助手となる、大阪朝日新聞菅論部記者たりしが、辭職後『我等』社同人として社會問題の研究評論を公にす、大正九年大原社會問題研究所より、英獨に出張社會問題を研究、大正十年夏頃歸朝の豫定なり、大原社會問題研究所囑託、（東京市外東中野九四九）

山田わか

明治十二年十二月一日神奈川縣三浦郡久里濱村久村に生る、學校は尋常四年迄、川稼人として亞米利加に滿六ケ年滯在して苦酸の間に勉學す、社會學に興味を持ち歸朝以來多くの社會評論を公表し、家庭婦人の眞意義を高唱す、「社會に額づく女」「女、（マグダレン●マルクス原著）」「若き愛と智の眼覺」「婦人の解放と性的敎育」「戀愛の社會的意義」「女●人●母」「八時間勞働の理論と實際」「愛と生活と」「賣笑婦の研究」の著作の外評論多し、雜誌『婦人と新社會』主筆、東京四谷區南伊賀町四十一番地）

山川均

明治十三年十二月二十日岡山縣都窪郡倉敷に生る、明治二十八年小學校卒業、同三十三年『靑年の福音』に執筆不敬罪重禁錮三年六ケ月罰金百貳拾圓監視一年、三十八年藥種醫療機械商の店員となる、四十四年日刊平民新聞に入社、同年十二月治安警察法

違反罰金一月半、四十一年『勞働者』を發行新聞紙條令違反輕禁錮二ケ月、同年六月赤旗事件官吏職務執行妨害懲役二年、四十三年出獄賣藥商人となり屋製藥會社の特約販賣人となり、田舍廻りの寫眞師を兼業す。大正五年賣文社に入社、大正七年荒畑寒村と『青服』を出だし、組合權及び罷工權を主張して禁錮四ケ月、等殆んど官權の壓迫下に其半生を投じ、而も屈せずして英獨佛語を獨習し、思想問題を研究し、一貫して社會主義を立張す、大正八年病軀を押して月刊『社會主義研究』を創刊し斯學研究に貢獻する所大也、近時又健康勝れず、大正九年末以來轉地療養中、「動物界の道德」「社會主義の立場から」「社會主義者の社會觀」「マルクス資本論大綱」「マルクス傳」「勞働組合運動史」「マルクス經濟學」「勞働運動と社會主義」「マルクス學說體係」「勞農露國の研究」等の著作と多數の評論を公にす、日本社會主義同盟、著作家組合、等に屬す、『社會主義研究』主宰として菊榮夫人共に、執筆經營一切の任に當りつゝあり、（東京府大森新井宿）

柳　宗　悅

明治二十二年三月二十一日、東京市麻布區市兵衞町二ノ十三に生る、學習院初等科中等科高等科を卒へて東京帝國大學文科大學哲學科を大正二年卒業、大學にては、心理學を專攻し今は宗教哲學を研究す、「科學と人生」「キリアム・ブレーク」「宗教とその眞理」「宗教的奇蹟」の著の外最近朝鮮問題に關する諸論文を公表し更に大正十年「朝鮮民族美術館」を設立朝鮮同胞の爲めに盡すと大也、雜誌「白樺」同人、東洋大學哲學科教授（千葉縣我孫子町[illegible]作）

山　川　菊　榮

明治二十三年十一月東京に生る、山川均氏夫人也、東京麴町番町小學校、東京府立第二高等女學校を經て、女子英學塾を卒業す、夙に社會主義の研究を爲し、之を基調としたる社會問題、婦人問題の評論を公にし、我が婦人評論家中最も特色ある活躍を爲す、均氏と共に『社會主義研究』の執筆經營に任じ、病軀を押して主義の爲に戰ひつゝあり、「戀愛の理想境」「婦の勝利」「現代生活と婦人」「大戰の審判反譯」「女の立場から」等の著あり、社會主義同盟會員（東京市外入新井町新井宿）

牧　野　英　一　法學博士

明治十一年三月二十日飛驒高山町に生る、郷里に於て中學を卒業し、第一高等學校に入り明治三十六年東京法科大學卒業後同校の教職に就き、大正二年教授となる、明治四十三年より大正二年迄獨、伊、佛、英に留學、法律學殊に刑法、社會學的見地よりする法律學の研究を爲す、法律學の教科書として「日本刑法」「刑事訴訟法」の外論文集として刑事學叢書第一編乃至第八編、其他多くの評論あり、和歌を能くし、竹柏會々員にして佐々木信綱氏門下なり、東京帝國大學（法學部）教授（小石川區大塚阪下町百十番地。電話小石川八七〇番）

藤　井　健　治　郎　文學博士

館山又は恩佛の號あり、明治五年八月八日山形縣東田川郡狩川村に生る、山形中學校第二高等學校を卒へて、明治三十一年東京帝國大學文科大學卒業、三十八年より四十年迄獨逸國ミュンヘン大學伯林大學へ入學、倫理學を專攻す、夙にマルクス學等を

讀破し社會問題に關しては蘊蓄深し、「主觀道德學要旨」「國民道德論」等の著の外評論多し、曾て早大教授たりき、京都帝國大學文學部教授（京都市上京區室町通今出川下ル）

福田德三 法學博士

明治七年十二月二日東京神田區元柳原町二十四に生る、明治二十七年東京高等商業學校本科、同二十九年同校研究科卒業、明治三十年三月獨逸佛國伊國及米瑞西へ留學、同三十四年九月歸朝、慶應義塾に教鞭を執りしとあり、評論家としての名聲天下獨歩の觀あり、氏の門下人材多し、「經濟學研究」「國民經濟講話」「黎明錄」「暗雲録」「經濟學考證」「經濟學論攷」「日本經濟史論」「現代の商業及商人」「經濟學講義」「經濟學教科書」「勞働經濟論」「國民經濟原論」「流通經濟評論」「續經濟學研究」等の大著あり、社會政策學會員、東京商科大學教授（東京中野本鄉百一。電話番町一一一九番）

五來欣造 素川

明治八年六月茨城縣久慈郡久慈町に生る、明治三十三年東京帝國大學佛法科卒業、辯護士たりしことあり、明治卅七年佛國留學（巴里大學及政治學校 明治四十二年獨逸留學、大正三年歸朝讀賣新聞主筆、大正七年雜誌大觀主幹大正八年早稻田大學教授となる專攻は政治哲學にして「デモクラシー及社會連帶主義を主張す、小說「未だ見ぬ親」「佛蘭西及佛蘭西人」「政治哲學」「社會革命の將來」の著あり、讀賣新聞客員、雜誌『大觀』客員、早稻田大學教授（東京市牛込區市ケ谷谷町九十二番地。電話番町三四二〇番）

小泉鐵

明治十九年十二月十日德島縣德島市に生る第一高等學校を經て東京帝國大學文科大學に入學し大正三年半途退學す、「白樺」の編輯を擔當し、最近迄慶大教授農商務省囑託たり、美學を專攻し、多くの創作と評論あり、（東京市外下澁谷二一七二）

小泉信三

明治廿一年五月東京市芝區三田に生る、明治四十三年慶應義塾政治科卒業、直に同校に教鞭を執る、仝四十五年渡歐英獨佛に留學して、大正五年歸朝、經濟學理論並に學說史を研究し、更に近時の社會問題に關して研究を進め、多くの評論を公にす、昨年「社會問題研究」「經濟學說と社會思想」なる二書を公にす、日本社會政策學會員、慶大教授（鎌倉小町三三一）

權田保之助

明治廿年五月十七日神田區今川小路一丁目川岸に生る東京市內工中學校卒業、東京外國語學校獨逸語學科卒業、東京帝國大學文科大學哲學科選科修了、第二高等學校にて高等學校卒業檢定試驗合格、東京帝國大學文科大學哲學科卒業（大正三年七月）美學を專攻「活動寫眞の原理及應用」「和獨辭典及獨和辭典」「經濟的文明史論」「美術工藝論」の著の外多くの社會評論あり、大原社會問題研究所囑託、東京帝國大學經濟學部助手（小石川區大塚窪町廿四番地ノ五號）

江口渙（キヨシ）

明治二十年七月麴町區富士見町に生る、三重縣山田中學卒業熊本第五高等各校を經て東京帝國大學文科大學英文科に在學半途退學、小說「性格破產者」「赤い矢帆」「勞働者誘拐」「惡靈」評論集「新藝術と新人」等多くの創作と評論を公にす日本社會主義同盟及自由人聯盟に關し、近時社會主義及社會問

題に關する所懐を披表す（東京市下谷區上野櫻木町一七）

安部磯雄

慶應元年二月四日福岡市に生る、明治十二年九月京都同志社入學同十七年六月卒業、明治二十四年九月米國カンネクチカット洲ハーフォード市 Theol gical Seminary 入學同廿七年六月卒業、社會思想家の先覺にして社會問題都市問題に於ては、日本の開祖の一人として文化事業に貢獻するところ頗る多し、「社會問題解釋法」「都市獨占事業論」「應用市政論」「社會問題概論（新刊）」等の著作の外、幾多の社會評論あり、鄭滿會副會長、早稻田大學敎授（東京府下高田三四四）

姉崎（アネサキ）正治（マサハル）

文學博士
Doctor of Laws
Docteur honoraire

明治六年六月廿五日京都に生る、明治廿九年七月東京帝國大學文科大學卒業卅一年同講師となる、卅三年外遊しキール大學、卅五年ロンドン大英博物館及卅六年印度ベナレス Qu ens College に學ぶ、卅七年東京帝國大學敎授となる、卅九年四十年 Kahn Scholarship に旅行し、大正二—四年 Professor of Japanese Literature and Life, Harvard Univer ity. 大正四年 Haskell Lecturer, University of Chicago. 大正八年 Conférencier Michionis, College de France. 等外遊すると數回、宗敎學を專攻し人本主義を主張す、「現身佛と法身佛」「根本佛敎」「法華經行者日蓮」「社會の動搖と精神的覺醒」The Four Buddhist Agamas. Tokyo. Buddhist Art in its Relation to Buddhist Ideals. Boston. Nichiren, the Buddhist Prophet. Cambridge, Mass. Quelques pages de l'histoire religieuse du Japon. Paris. 等多くの內外語の著あり、歸一協會及び巴里の Societe Autour du Monde 等に屬す、東京帝國大學敎授（小石川內山御殿町一一七。電話小石川二〇二六番）

淺田彥一　江村

明治八年十一月山口縣阿武郡萩町江向村に生る、神戶關西學院高等學部中途退學（明治廿八年頃）京都新聞創刊當時の記者及編輯主任、熊野實業新聞創刊當時の主筆記者、報知新聞記者及編輯主任等を經て明治卅九年博文館編輯部に入る、國際的には聯盟平和主義、國內的には小日本主義（文化充實主義）を主張す、時事評論等多し、春秋會員、國際聯盟協會員、「太陽」主幹（大正三年頃）（牛込區矢來町十一番地）

阿部秀助

明治九年七月十二日福岡縣福岡市須崎土手町十八番地に生る、山口中學校、山口高等學校を經て明治三十六東京帝國大學文學史學科卒業、明治四十三年獨逸留學伯林大學にて經濟史を專攻し理想主義を主張す、多くの著及評論あり、黎明會及社會政策學會員、慶應義塾大學敎授（東京市本郷區向ケ岡彌生町三番地）

有島武郎

M. A.（Haverford College）

明治十一年三月四日東京小石川區水道町に生る、明治二十九年學習院中等學科卒業、三十四年札幌農學校卒業の農學士也同年一年志願兵（步兵）三十六年米國に遊學、三十九年歐洲に漫遊、四十年歸朝、四十一年札幌農科大學大學豫科敎授となる、大正二年辭職、後著作に從事し多くの創作と評論を公にす、特別な『主義を排せんとす』と云ふ

「有島武郎著作集」十二冊の著及「自己の要求」の最近論文あり、著作家組合評議員、同志社大學（科外講師）（東京市麹町區下六番町一〇。電話九段二六二番）

阿部次郎

明治十六年八月山形縣飽海郡上郷村大字山寺に生る、第一高等學校を經て、東京帝國大學文科大學哲學科卒業（明治四十年七月）大學では哲學及哲學史を專攻し斯學の評論の外、文藝評論、社會評論等多し「倫理學の根本問題」「美學」「合本三太郎日記」「ニイチエのツアラツストラ解釋並に批評」の著あり、哲學會、美學研究會、日本社會學院、黎明會、芭蕉研究會、等に屬す、慶應義塾大學文學部講師（大正二年來）日本女子大學校講師（大正六年來）（東京府豐多摩郡中野町千〇十八番地）

安倍能成

明治十六年十二月愛媛縣松山市小唐人町に生る、第一高等學校を經、東京文科大學哲學科を明治四十二年に卒業、西洋哲學を專修し、「西洋古代中世哲學史」「西洋近世哲學史」「オイケン」人思想家の人生觀」「カント道德哲學原論」の著の外評論多し、日蓮宗大學、慶應義塾大學、法政大學講師（小石川區小日向水道町九二）

荒畑勝三　寒村

明治二十年八月横濱市永樂町一丁目八番地に生る、高等小學校卒業以外履歴を持たず外國商館のボーイ、横須賀海軍造船工廠の職工、社會主義書類の傳道行商、本屋の小僧、新聞記者、雜誌『近代思想』、月刊『平民新聞』『勞働組合』『小貮』等の發行編輯等具に苦難を嘗め、幾度か官權の壓迫を蒙り主義の爲めに活動し、囹圄の人たること三回今や關西勞働運動の爲めに氣を吐きつゝあり「谷中村滅亡史」「シヨウ警句集」「短篇小說集「逃避者」ウエッブ氏著「勞働組合運動史」ロイド氏著「勞働組合論」の著あり、エル・エル會（大阪に在り、勞働運動社會問題等の研究團體）、會員日本勞働新聞主幹（大阪市南區難波芦原町一一七七）近刊、ポール、ラファルグ氏著『財產進化論の反響』出版の筈、

麻生久

明治二十四年五月大分縣玖珠郡東飯田村に生る大分中學校京都第三高等學校を經て東京帝國大學法科卒業東京日日新聞記者（大正六年より八年六月迄）たりしとあり八年七月より友愛會本部員となりて實際運動に干與し、九年六月より雜誌解放記者を兼ね、九年十月より全日本鑛夫總聯合會理事として活躍す、其の間多くの社會評論を公にす社會主義同盟會員、全日本鑛夫聯合會理事、雜誌解放記者（麻布宮村町七十一番地）

堺利彥

別名貝塚澁六と云ふ、枯川といふ號は十數年前から使はぬ事にしてゐるとの事、明治三年十一月豐前國豐津に生る、小學校、中學校、第一高等中學校等を修めて小學教員、新聞記者、賣文社、入獄、社會主義運動等波瀾重疊の半生を過し、主義の爲めに惡戰苦闘す、我が社會主義の巨頭にして、「社會主義倫理學」「マルクス傳」「人と超人」「女性中心說」「社會主義研究」「唯物史觀解說」「猫のあくび」「猫の百日咳」等多くの著譯書及評論あり、併し自らは『著譯書いろいろあれども餘なものなし。最近には社會講談「一休和尙」いさゝか得意なり』と自稱す、目下「日本平民史」の大著に從事しつゝあり、

社會主義同盟(平會員)賣文業（麹町八ノ二四電話九段千百五番）

佐藤丑治郎　法學博士

明治十年五月二十八日山形縣西田川郡鶴岡町天神町に生る、第二高等學校を經て明治三十六年京都帝國大學法科大學政治學科卒業直に京都大學法科講師囑托せらる明治三十八年帝大法科助教授に任ぜらる明治四十一年外國留學（獨國、佛國、英國及米國、伯林大學）明治四十五年六月歸朝し大正元年八月京都帝國大學法科教授に任ぜらる大正二年十二月法學博士の學位を授けらる大正九年十一月以來東北大學に開設せらるべき法文學部の創立事務を擔任す。政治學及憲法學を專攻立憲主義を唱ふ「衆議院議員選擧法正解」共著「租税法と豫算との關係を論す」「政治學上卷」「代議士と選擧」等の著あり、京都市會議員、都市計劃京都地方委員、京都帝國大學教授（京都市上京區吉田中阿達町三十八番地）

佐野學

明治廿五年二月二十二日大分縣速見郡杵築町に生る、麻布中學校第七高等學校を經て大正六年に東京帝國大學政治科卒業、それより大學院に入り矢作博士につきて農政學研究、社會學、經濟史、農政學等を專修し社會評論多し、主張は生産者本位の社會主義、譯書「マルクスかカントか」兩三月中に「露西亞經濟史研究」第一卷（約六百頁）の著あり「解放」社同人、新人會同人、全日本鑛夫總聯合會相談役の外滿鐵東亞經濟調査局囑託たりしが最近辭す（東京市外東中野九四九）

木村久一

明治十六年七月山形縣南村山郡宮生村下生居に生る、仙臺東北學院、東京文科大學、大正二年卒業、爾來教育に從事、昨年五月早稻田大學在職中、過激派宣傳の嫌疑を受け、不敬罪に問はれて目下上告中、心理學を專攻す、最近共産主義に興味を持ちて研究し居れりと云ふ「早教育と天才」の著の外多數の評論あり、（麻布區笄町八十）

北澤新次郎　ドクトル・オブ・フキロソフキ

明治廿年二月二十一日東京市本所區菊川町一ノ十一に生る東京府第三中學校早稻田大學を卒へて北米ノースカロライナ大學（在學一年半）仝上ヂョンス、ホップキンス大學（在學四年）仝上サウス大學講師たりしこと一年留學期間七ケ年に及ぶ、社會問題及經濟學專攻し、社會評論頗る多し、「最近勞働運動」「勞働者問題（上卷）」「勞働問題」の著あり大原社會問題研究所、建設者同盟等に關す、早稻田大學教授（東京市外池袋九三〇）

菊池寛

明治二十二年十二月高松市に生る、草田杜太郎の別名を用ひたることあり、高松中學校、第一高等學校を經て、京都大學英文科卒業、文藝家たると共に最近社會問題に共鳴する所あり、多くの社會評論及び思想問題に關する評論を公にす、「恩を返す話」「無名作家の日記」「我鬼」「心の王國」「冷眼」「極樂」「藤十郎の戀」「眞珠夫人」等の著あり大阪毎日新聞社員、（小石川區仲富坂町七）

三宅雄二郎　文學博士

雪嶺と號す、萬延元年五月、石川縣金澤に生る、帝大文科哲學科卒業、曾て日本新聞記者たり、後「日本及日本人」主筆として今日に及ぶ「宇宙」「世の中」等の大著の外多くの評論あり、論壇の最古参者の一人也（東京市外代々木初臺五五四。電話番町五

〇〇四番）

美濃部達吉　法學博士

明治六年二月七日兵庫縣に生る卅年東大法科卒業卅二年比較法制史研究の爲め獨佛英に留學、歸朝後東大教授たり。憲法論の上より見たる多くの政治論社會評論あり、帝國憲法、行政法等の著述多し、東京帝國大學法學部教授　小石川區竹早町一二四。電話小石川八八〇番）

三井甲之助　甲之

明治十六年十月十六日山梨縣中巨摩郡松島村に生る明治四十年東京帝國大學文學科卒業私立中學の教師を滿四ケ年勤めたり「日本及日本人」へ寄稿すること十五年、最近山梨日々新聞寄稿家となる、日本文獻。文化史を研究、地上に日本國家は唯一つであることを主張す詩集「消なば消ぬがに」の著作の外多くの思想問題評論あり、人生と表現社同人、農業及著述業（山梨縣中巨摩郡松島村。電話松島局六番）

宮島資夫

明治十八年八月一日東京四谷區傳馬町一丁目三十六番地に生る、學歴なし、十三歳の時小僧となり（砂糖問屋）爾後二十九歳の秋まで、三十二三種の職業に從事し、主として勞働者として轉々流浪す、その後都新聞通信員飲料商報記者となりたることあり、無政府共產主義に興味を持ちて研究す、「坑夫」「發賣禁止」「恨みなき殺人」「社會運動の現狀」等の著あり自由人聯盟社會主義同盟會員著述業（東京市外目黑三田村一七八）

白柳武司　秀湖

明治十七年一月七日靜岡縣遠州引佐郡氣賀町氣賀に生る郁文館中學校を經て明治四十年早稻田大學文學部哲學科卒業明治卅八年頃より社會主義の學說に興味を感じ、特に其歷史の見方が氣に入り、多くの研究を世に發表したり、「離愁」「鐵火石火」「黃昏」「新秋」「秀湖小品」「町人の天下」「親分子分」英雄篇」「全上俠客篇」「大日本國民史」「親分子分浪人篇」「强者弱者」「二千六百年史」の著の外多數の評論あり、雜誌「實生活」主筆實費診療所理事（東京府下荏原郡大井町四五〇三番地。電話銀座一五四〇大森二〇三番）

平塚明子

らいてうと號す、明治十九年二月東京麴町に生る　お茶水高等女學校を卒へて日本女子大學家政科卒業「所謂新らしき女」を糾合して雜誌「青鞜」を起し、我が婦人問題に新紀元を劃す、最近新婦人協會を起し實際運動を試む、多くの創作と評論あり、「圓窓より」「現代婦人の生活」「現代の男女へ」「婦人と子供の權利」等の著あり（東京市外田端四四五）

森本厚吉　法學博士ドクトル、オブフイロソフー

明治十年三月京都府舞鶴町に生る米國ボルチイモーア市ジョンスホプキンス大學院にて經濟、政治、歷史を專攻し、更にボストン及シカゴ市大學普及講演協會の講師として經濟問題の講演に從事せり「生活問題」「生活經濟の新能率」「消費經濟論」「中流階級の生活研究」「生活標準の研究（英文）の著作の外多數の評論あり、東京文化生活研究會主幹、北海道帝國大學教授（札幌區十二條西三丁目一番地）

森戸辰男

廣島縣に生る、東京帝國大學法科を卒業同校に教鞭を執り助教授となる。大正九年一

月帝大經濟學部機關雜誌『經濟學研究』にクロポトキンの社會思想に關する研究を發表し、神經過敏なる其筋の睨む所となり、遂に罪に問はる、大正十年二月末大原社會問題研究所より派遣されて英佛獨に赴き社會問題の研究を囑ぜらる、多くの社會評論を公にし「社會主義思想史」の譯著あり、大原社會問題研究所囑託（東京東大久保天神前二三六番地）

末廣重雄 法學博士

明治七年七月愛媛縣宇和島に生る、明治三十二年東大法科卒業明治三十四年十一月より三十八年二月まで外國に留學、外交史を修め外交上に關する多くの著作と多くの評論を公にす、京都大學教授（京都相國寺門前町）

杉森孝次郎

南山と號す、明治十四年四月靜岡縣小笠郡南山村に生る、明治三十九年早稻田大學文科卒業、同校に教鞭を執り、大正二年十月より同八年三月迄文部省留學生として獨英に滯在修學す、The Principles of the Moral Empire「人類の再生」「新社會の原則」早稻田大學教授（東京府下代々木新町十一番地）

鈴木文治

明治十八年九月四日宮城縣栗原郡金成村に生る、明治四十二年東京帝國大學政治科を卒業し、曾て東京朝日新聞記者たりしことあり、夙に友愛會を組織し『勞働と產業』を發行して全國の勞働者聯合に力む、大正三、四年に二回米國の勞動運動視察に赴き、大正七年巴里の國際勞働聯盟會議に臨み、更に英國に赴きて勞働運動を觀察、新勞働組合主義を唱ふ「勞働問題早わかり」「工場法釋義」「日本の勞働問題」「國際勞働問題」の著作及評論多し、日本勞働總同盟友愛會々長（府下戶塚町諏訪一三四。電話番村二〇七四番）

〆切後到着の分（順序不同）

米田庄太郎 文學博士

明治六年二月奈良縣添上郡辰市村に生る、奈良英和學校を卒業したる後、米國ニューヨーク市ゼネラル、セオロジカル、セミナリー、米國紐育市コロムビア大學、佛國巴里市コレッヂュ、ヅ、フランス其他二三の歐洲大學を卒業して社會學を修む、「輓近社會思想の研究」「新理想主義の歷史哲學」「現代人心理と現代文明」「經濟心理の研究」等大著を出し多數の社會評論と研究の結果とを公にす、萬國社會學院會員、日本社會學院會員、京都帝國大學文學部教授（京都市岡崎入江町）

文學博士 **野上俊夫**

明治十五年五月新潟縣佐渡郡相川町に生る新潟中學、第一高等學校を經て明治三十九年七月東京帝大文科心理學科卒業、大正二年八月より大正五年八月まで歐米に留學し露都を經て獨逸ライプチッヒ大學に學び戰禍に遭ひて英、佛、瑞、伊各國を經て米國クラーク大學總長スタンレー、ホール博士の教室に學ぶライプチッヒにては教授ヴントー博士に師事せる最後の日本人なり「歐米教育の印象」「青年心理講話」其他多くの著作と評論あり、京都帝國大學文學科教授（京都市下鴨西林町）

佐々木惣一 法學博士

明治十一年三月二十八日鳥取縣鳥取市西町

七番地に生る、明治三十六年七月京都帝國大學法科大學法律科卒業、同三十九年十月京都帝國大學助教授に任ぜられ、同四十二年九月出發、獨、佛、英三ケ國の大學に學び大正元年十二月歸朝、翌二年一月教授に任ぜられ、同十二月法學博士の學位を授けらる行政法を專攻し、「行政學」「立憲非立憲」「此一票の捨てどころ」の著作の外多くの著述と政治評論あり、京都帝國大學法學部教授（京都市上京區田中上柳町）

高田保馬

熊本縣の人、京都帝國大學文科大學出身、社會學を專攻す、近時社會問題に關して多くの評論を公にし、「社會學原理」「現代社會の諸研究」の著あり、目下郷里熊本に病躯療養中、廣島高等師範學校教授（廣島市新川場町）

深田康算　文學博士

明治十一年金澤市に生る明治三十五年東京帝國大學哲學科卒業後、京都大學に教鞭を執り、英、獨、佛に留學、ライプニッチ、伯林、巴里大學等に學ぶ、哲學を專攻し、之に關する多くの研究と著あり、目下カントの判斷力批判」の翻譯に從事し居れり、京都帝國大學文學部教授（京都市下鴨五〇番地）

永井柳太郎

金澤の人、明治卅八年七月早稻田大學政治經濟科を卒業し、直に同校に教鞭を執り、植民政策及社會政策の講座を擔當す、後英國に留學しオクスフォード大學に學ぶ、偶々倫敦滯在中病魔の侵す所となつて隻脚を失ふ、歸朝後早稻田大學に教授たる傍ら、大隈伯主宰の下に雜誌「大觀」を創刊し、論壇に活躍す、大阪國產株式會社々長、代議士、（東京府下戶塚飛地一〇六五番地。電話番町五一二二番）

左右田喜一郎　法學博士

明治十四年二月廿八日愛媛縣に生る、東京高等商業學校卒業後、獨逸ライプチヒ大學に留學し、經濟學殊に經濟哲學を修む、横濱實業界の重鎭として業務を營び、而も孜孜研究の結果を著作及評論に公にしたるもの多數に上る、左右田銀行頭取、東京商科大學講師（横濱市月岡町）

高島大圓　米峯

東京に同名異人あり、混線を防ぐ爲め通稱を圓と云ふ、明治八年一月十五日新潟縣中頸城郡吉川村に生る、哲學館（東洋大學の前身）卒業後、新聞記者、學校教師たりしが、新しき宗教運動を起して國民精神的基礎の確立を期せんが爲め、同志と胥謀り「新佛教同志會」を起し、「新佛教」を發行して筆に口に盡瘁すること二十年に及びたるが遂に内外の事情により之を廢刊す、爾來多くの著作と評論に於て理想實現に力む、「惡戰」「廣長舌」「噴火口」「一休和尙傳」「佛心鬼語」「四十二章經講話」「遺教經講話」外數種の著の外現代世相批判「癡の虫」近刊の筈、丙午出版社、雞鳴堂書店主人、（小石川區原町六番地。電話小石川一一二八番）

田中萃一郎　法學博士

明治六年三月靜岡縣田方郡に生る、慶應義塾大學部文學科卒業、明治三十二年以來同大學に教授たり、三十八年英國留學、次で獨逸ライプチヒに轉學、四十年十二月歸國す、史學殊に政治史を專攻し、「東邦近世史」「世界大戰中心人物」「普選運動と病的思想」等の著の外評論多し、慶應義塾大學、文學部教授兼法學部教授、同史科主任（麻布區我善坊町二七番地。電話芝七七六〇番）

出版を通して見たる支那思想

□中華民國前の支那歷代數千年に亘つての讀書人は、社會上に一階級を形成し、四億の人口に對しては眞に九牛の一毛であつた。而してその殘餘の民は悉く眼に一丁字なく、軍人の如きは將軍にして尙斯學文盲の徒が多かつた、こんなことは寧ろ通常事として誰もこれを怪しまなかつた程である。かるが故に經學古典に就ては普通支那の讀書人より、日本の漢文學者の方が遙に深遠であつた位である。

□乍然、我國同樣、一度西洋文明の東漸と共に飜譯書は盛んに賣れて行く、これがために支那語、支那文體を一變せしめた、更に最近口語風言文一致の雜誌、新聞を見るに至つた、その結果として「讀書人」たる特殊階級は永へに消滅し、當今支那總人口の四分の一たる一億萬人が悉く文字ある人間となつた。

□この文藝復活の一大動力は取も直さず、梁啓超その人である。彼の名文、彼の論旨は中國第一等である、彼の名著「中國魂」の論旨堂々として全篇二十章を通じての氣魄は日本文家に見られぬ雄大な點があり、それがために數十版を瞬く間に賣盡したのであつた。

□この著のために、革命の氣分は火に油を注ぐの勢を示し、一擧にして三百年の泰平を謳はれし清朝を覆へしてしまつた。

□共和政體を布かれてからの支那は言論に於て全くの自由國となつた、米國のデュウイが迎へられ、ラッセルが迎へられ、十三省の言論はこれが爲めに百花一時に咲くの盛觀を呈したのである。

□そして從來政治上の意味或は皇室に對する遠慮乃至風紀上の關係より出版を禁ぜられし書物が、飜刻改板の上、石版印刷に附して無數に出版された、讀書界の歡騰は蓋し意料の外である。

□それから女子に對する高等教育も燎火の如く傳播した、その勢としてデカダン文學の萌芽流布を脫るることが出來なかつた、曰く、風流小說美中趣、曰く怪奇小說洞房刀?曰く、青情小說和尙思嶽、曰く、艷情小說情中夢、曰く、哀情小說×寶鑑という銘を打つて世間に現れた、その他に或は社會小說が生れ、或は科學小說、或は滑稽小說、或は探偵小說を標榜して社會を毒するものが頻發せられた。

□それから、我國の講談物に類するものが流行し始め、札記小說と號して折獄奇聞又は冷案叢談と題して大岡政談風のもの、或は清朝名人軼事、或は共和民國野史、奧東筆記、留東外史と號して日本現今の社會を素破拔ひたものも賣れる。

□少年讀者を相手に武俠小說みたいものが流行し、劍俠奇聞、風塵奇俠傳、俠士魂なぞの著や、馬賊傳、江湖大盜賊傳見たやうなものさへ續々出版された。そこで梁啓超の如き政論の大家が「十五小豪傑」なぞを譯して、原稿稼ぎしたことさへある。

□現在では性慾を取扱つたものが市場に現れ出した、曰く、男女風流行樂錄、嫖賭六秘術、柔郷韻史、三十六宮艷秘史、掃愁錄の如きこれである、

□その他、閨房妙術全書とか、婦女貞淫指南、官奶々風流史、杏花天眺花菴、痴婆子肉薄圖の如きが盛んに積まれる。

□そして近頃は徐樹錚の脫走と共に直に「徐樹錚秘史」と「徐樹錚愛妾小鳳艶史」とが出版されて紙價を高からしめてゐる、性慾書なぞの際物は賞めたことではないが、政界情僞史の流行は一寸我等をして耳を傾けしめる(上田恭輔)



『ユゲ』イズム

—遊戯三昧哲學の提唱—

楚　人　冠

一、人生とは

人生とは人に疲れて死ぬ事である。

群衆の中に立ち交はつてゐれば、何をしないでも、人疲れとて一種の疲勞を感ずるものであるが、斯く空間的に感ずると同じ疲勞を、たとひ群衆の中でなくとも、永く人と立ち交はつてゐれば、必ず時間的に感ずる。生れ落ちて後まだ物心のつかぬ間は姑く言はず。そも〳〵幼い友達が近處に出來る頃から始まつて、人は年を取るに連れ、位地の高まるに伴ひ、次第に人間に接觸することの繁きを加へて、その繁きを加ふるに比例して、人に接することの疲勞を感ずる度が強くなる。その末多くは遂に人に疲れて死んで了ふ。

年若うしては先輩に疲れ、やゝ長じては同輩に疲れ、年老いては部下に疲る。明くるより暮るゝまで、人の爲す所は唯人に接して人に疲るゝ迄である。必ずしも氣兼氣苦勞の爲とのみは言はぬ。氣兼氣苦勞の爲に人の疲るゝ事はいふまでもないが、これがなくても、只人に接するだけで、人は人に疲れる。氣の張りとも、不斷の戒心ともいふか、如何なる

人に接しても、只一人で居る時のやうな安氣はない。氣兼氣苦勞には苦勞の自覺が伴ふが、何等斯ういふ自覺なくして、唯知らず〳〵の間に自ら感じ來るものは人の疲れである。急いで走り行く者の疲勞は自覺的であるが、ぶら〳〵と足の赴く所に任せて歩いてゐる中に感ずる疲勞は無意識の間に起る。人の疲れはまさしくこれである。

人が一家の内に居る時、氣も心も知り合つた親子兄弟の間に居て、何等の氣苦勞もなさゝうなものだが、それでゐて絶えず氣が張つてゐる。子供が泣く、女中がこぼす、母がどうとかする、妻が何やら曰ふ。出入の商人が交渉に來る。家主や地主からいろ〳〵の請求が送りつけられる。隣の地境へ隣の子供が始終小便をしに來て困る。お向ふの家には夜晩く醉つ拂つて歸つて無暗に戸を叩く人がある。雨が降ると道路の汚水が宅の中へ流れこんで來る。これを流れ込ませまいとすると、隣から苦情が出て來る。電燈が昨晩からつかなくなつたのに、一向會社から繕ひに來て呉れぬ。日でりつゞきで井戸の水が涸れて、當分風呂が立てられぬ。便所が閊へてゐるが、掃除屋がとんと顔を見せぬ。――いやもう紛々たる閑葛藤。これを解決するに格別の智慧才覺もいらぬとはいふものゝ、斯う小うるさくそれからそれへと重なる問題がつゞいて出て來れば、これだけで既に相應に頭が疲れる。

外に在つては何以てうるさい。日々何がしの勤に出るとする。人に雇はれてゐる者は、目上の者から底氣味惡く睨めらるゝ心地がする。同僚が意地惡くからかふやうな氣がする。こちらから挨拶しても知らぬ振して横を向いて了つたのは、自分に對して何か小言があるのでないか。いつも氣さくに話しかける男が今朝からぶつりとも物を言はないのは、何か自分に腹を立てゝゐるのでなからうか。揉まなくてもよい氣が揉ませられる。又勤先によつては、これと關係のある彼の家此の家の人々と際限なく交渉がある。その交渉が首尾よくすめば、それは當然であつて、不首尾に終れば、落度となる。これが人に雇はるゝ間だけの氣苦勞かと思へば、追々に人を使ふ身の上になつても、一向かはらぬ。使はるゝ

人が多ければ多いほど氣が張りつめる。然るべき部署に然るべき人をつけ、甲の部署と乙の部署と互に調和を保たせ、而してそれらが孰れも自分に對しては不平もなく、同僚吏に氣まづい思もせず、嬉々として樂んで皆その職務に務むるやうに仕向けるには疲れざらんとするも能はず。その上商賣ならばこれで儲かるやう、研究ならばこれで行き屆くやう、宣傳ならばこれで擴まるやう、その仕事〳〵に應じて、それ〳〵に實績を擧げやうとするには、わが使用する人の氣を計るに兼ねて、世間の氣を計らなければならぬ。殆ど人間一日の動は一に人に接するに在りと言つても、過言でない。

自分に取つて最も手近い一例を擧げて見る。新聞社の社會部長を勤むる者は、如何に強健な人と雖も、大抵三五年にして皆神經衰弱に罹る。社會部の任務が人事の複雜多岐に渉つて四方八方へ氣を配らなければならぬにも由る事勿論であるが、その四方八方といふも、窮極する所は人に向つて氣を配るに在る。社會部といへば何處の社でも大勢の部員があつて、その部署を定むるだけでも一通りの世話ではない。取扱ふ事件が社會百般の事項に立ち入るが故に、政治部や經濟部のやうに問題が單純に行かない。これが人數相應に然るべく割り當てゝ、適處に適材を用ひ、各その任務に就て更に怨嗟の聲が放たれない迄には、理窟で行かず、壓服で行かず、さりとて放任では尙々いけぬ。兎もすれば最も目をかけて最も心服して居さうな方面から思ひがけぬ苦情が出て來る。この苦情の出た時、これを言ふ者にも、言はれる者にも片手落なく裁いて行くには、手腕も要れば德望も要る。斯くして部下は一應治め得たとして、今度は政治部や經濟部や外報部との交渉事件が續々出て來る。これを上手に捌かねば、部と部との間に確執といはぬ迄も不理解が始まる。今度は上に立つ編輯長や主筆から善惡につけて干渉が來る。對等の同僚に對する交渉と違つて、その間にいくらか權柄を交ふるだけに、解決がうるさい。服從の美德を極度に發揮して、一に只屈するのみでも、その任に忠なる所以でないが、一

…も一も反抗に反抗を重ねて自ら快とするだけでは治まりおつかぬ。さうかうする中に、

る。廣告部から新聞紙の品位を蔑視した提灯を頼みに來る。これが編輯部内でないから遠慮なく一二一言の下に郤退しやうとする

ものと思つたら、大變な勘違ひで、廣告でも販賣でも社の經濟に直接具體的に關係あるものだけけに、社長とか社主とか、社の經營者をバックに背負つてやつて來る。隨つてその言分は弱さうで強く、不理窟のやうで理・理窟がある。これを手際よく切り拔けるのは容易でない。これでお仕舞かと見てあれば、今度は社外からの交渉事件が續々部長の案頭に集つて來る。正誤取消の請求、書け書いて吳れるなの依頼、脅迫がましい小言、身勝手な慾にもつかかぬ注意、人が要らぬか原稿を買はぬか、それが手紙でも分ゝ事を、態々押しかけて來て、くど〳〵と談がべらぼうに長い。斯くまで人に惱まされどほしの社會部長が、若し三五年にして人に疲るゝ事なくんば、正しくそれは奇蹟である。同時に又社會部長が人を遠ざけて沈思默考、理論に訴へ大勢に鑑みて、社會部の新舞臺を何處に拓くべきか、社會部の材料處置に如何なる新機軸を出すべきか、などいふやゝゆつたりした研究に入るべき餘裕が全くないのも無理はない。彼はその日〳〵の煩瑣なる俗務に追はれて、一日〳〵づつの生を送るに過ぎない。總じて新聞記者はすべて皆さうであるが、社會部長に至つて、殊に甚しいのである。

これは自分に取つて最も手近な一例を取つたのであるが、これが若し一國の政治を司どる者の身ともなれば、尙の事である。內閣の壽命の長くて四五年に盡きるのは、つまり疲れて投げ出すからで、內閣の更迭など聞けば函根の寄木細工を置き替へる位の、極めて人間味に乏しい事のやうに一寸考へらるゝが、詮ずる所、人に疲れて倒るゝ事を意味する。世界大戰の如き大事件に應して、人に疲るゝの著しかるべきは今改めて說くを須ひぬ。平和會議の當時さしも一世の羽振をきかせた列國の政治家が殆ど悉く倒れたのを見ても分る。日本の西園寺公の初から倒れてゐたのを辛く擔架に

載せて、パリーに擔ぎこんだやうなのは、姑らく措き、米のウィルスンは文字通りに倒れたでないか。伊のオルランドーは會議の途中からぶら／＼して出て行つて了つたでないか。佛のクレマンソーは會議の後間もなく失脚して大統領の選にも入らなかつたでないか。希臘のヴェネゼロスは自分でこそまだ倒れぬつもりでゐるらしいが、國民の方では既に倒したつもりでゐる。五大國の使節の中當年の意氣を存してゐるのは僅に英のロイド・ヂョーヂあるきりで、彼がアスクイスと合ひては離れ、ノースクリッフと離れては合ひ、アイルランド問題、失業問題、聯立内閣の内訌問題、米伊佛露ギリシア、トルコ等に對する外交問題の難關に處して、兎にも角にも切り拔けて行く手際は流石にえらい。だからヂョーヂはえらいといふ事にある。人のえらいえらくないといふは、つまり人と相對して疲れ易いか疲れにくいかで定まる。然らばどうすれば全く疲れぬ迄も、疲るゝ事の少きを得るだらうか。問題は是から出て行く。

二、いはゆる「必要」

思ふに、世に日本の制度習慣ほど人を疲らすやうに出來てゐるのはなく、日本人ほど人に疲れ易い境涯に居る者はない。狹い小さい嶋國の上で押すな／＼で育つて來た人間だけに、人と觸れ合ふ事の多いのは無理のない所かも知れぬが、それにしても觸れ合ふ事の多ければ多いだけに、觸れてもお互にショックを感じないやうに觸れ合ひ得る緩衝的の制度や習慣が今少し發達してゐさうなものだが、それがない。嶋人は何處までも嶋人で、こせ／＼と細かい所にこせついて、何事をも理詰めに詰め、現金に勘定し利害に埒を明けんとあせる。近代の日本に纎細な自然科學が割合に發達して、哲學のやうな大まかなゆとりのあるものゝ出ないのは全く是が爲かと、自分は豫てより疑つてゐる。

一日或るカフェに出かけた。一人で茶を飲んでゐると、丁度隣の卓子に少し酒に醉つた若い男が女を捉へて、何やらくど／＼と言ひ合つてゐる。聞くともなしに聞いて居れば、二人の問答が大略斯うある。

『方客に手を握らうとしたら逃げたわ』

『逃げたわ』

『何故(なぜ)逃げた』

『逃げなかつたら何(ど)うするの』

『手を握る迄さ』

『手なんか握る必要はないことよ』

『握らせたつて宜いぢやないか、損の行く話ぢやなし』

『握らせたら何かになつて？』

『功徳になるさ』

『功徳なんか積む必要はないわ』

この問答はまだ續いたが、これでやめる。自分はこれを聞いてゐて、これこそ實に最も能く現代の日本を象徴し得たものだと思つた。カフエに來て酒に醉つて女の手でも握らうといふのは、畢竟その時の心のすさみであつて、理窟もなければ計算もない。ない所に悠々たる遊戯氣分が樂まれるのである。それがこんな處へ出て迄、日本では理窟と勘定がついてまはる。『何故逃げた』と詰めて行く。『逃げなかつたら何する』と詰めて來る男が、『損の行く話ぢやなし』と勘定してかゝれば、女も『何かになつて』と勘定で來る。はては『手なんか握る必要』もなければ『功徳を積む必要もない』と來た。馬鹿！　世の中に必要に迫られてカフエの女の手を握る奴があるか。損得の勘定をした上で客に手を握らせる奴があるか。一體日本人は無暗に必要といふ事を口にしたがる。何の必要があつてそんな事をするといふ。そんな事を

する必要がないぢやないかといふ。人間若し必要にのみ由つて、進退動止を決してゐたら、世は如何に乾燥無味なものとなるだらうか。必要はないが親孝行もしたく、不必要かも知れぬが戀もしたい。人間の人間らしい所は寧ろその必要ならざる點に浮かれ行く浮かれ心に在る。飢餓を防ぐの必要の爲にのみ飲食し、生殖の必要の爲にのみ男女相交るが如きは、下等動物も之を能くする。飢餓を防ぐの外に料理を樂み、生殖の目的の外に戀を求むる邊に人間らしい所がある。モーリス・パームリー博士の說く所に隨へば、人間男女の交は二個の相異なる機能から來るもので、一つは生殖、一つは遊戲である。生殖機能といふものは、如何なる下等動物にもあるが、遊戲機能に至つては、高等動物、殊に溫血動物にのみ存し、その重要なる事は、生殖機能に勝るとも劣るとは言へない。人類の事業は大概この男女間の遊戲機能から來るものであつて、軍事上政治上及經濟上の大事業は多く婦人の爲にする男性の俠氣か、若くは男性間に於ける性的競爭の結果である事を視ても分る。尙今少し事業の間接原因となつてゐる所のものをと言へば、美術、文藝及宗敎の如きも畢竟性的情操の象徵的解釋であつて、この性的情操の淨化の結果が表現されて居るものである。この遊戲機能の廣く人生の各方面に涉つて、重要なる役割を勤めてゐる樣は、近來心理分析學の研究の結果、次第に著しく分つて來たと言つて居る。

實にもこの遊戲機能といふものがあつて、人間初めて完し。一も必要、二も必要と、たゞ必要事にのみ人間が動いて行くならば、何處に人生の興味があらう。斯くては我等が次第に『必要』に疲れ行くの外はないことになる。

われらは先づ『必要』の繫縛から脫しなければならぬ。

三、「愚弄の興味」

狹苦しい嶋國に育つた日本人は、地處とさへ見れば田畑に作るか、家を建てるかして、寸地も剩さゞらんと努める。

「空想の畫帖」といふものを見て[illegible]たい。[illegible]描いてゐる、景色といふは山があつて、水があつて、きちんと一幅の畫に收まるやうな道具立の整へ[illegible]る。果ても知らぬやうな茫洋たる所は誰にも認められない。文を綴つても、畫を描いても、順序が整つて、纏まりがついて、理論井然としてゐなければ氣に入らぬ。何處かに間の拔けた、氣ののび〳〵するやうな所のあるを欲しない。何から何まで理詰めである。我等は實にこの理詰に疲れる。

嘗て老製糸家の談といふのを聞いたが、女工が花やかな聲で歌ひながら繰つた糸と、默りこくつて只時間の經つのを待ち兼ねながら繰つた糸とは、全く糸の光澤が違ふさうだ。又或るセルーロイドの玩具を商ふ人に聞けば、職工が賑やかに面白可笑しく笑ひ交しながら作つた人形は、何處か陽氣な顏つきをしてゐるものだが、苦情たら〳〵でせうことなしに作つたのは、如何にも不平面に出來上るといふ。是あるかなと自分は思つた。面白がつてし、道樂半分にする所に、暖かな人間の血が通つて、人間の仕事らしい成果を擧げる。義務に縛られ、必要に迫はれ、乃至は論理に壓せられて、器械的にした仕事は、文字通り器械的に出來上つて、生きた所が失はれる。理詰めでいかぬといふは此處だ。

人間は年が年中理窟に合はぬ事ばかりしてゐる動物である。する事なす事に、さう一々理窟を考へてからやり出す者でない。たしかグラーム、ウラスの著にあつたと記憶するが、若し人の一日の行動を洩なく活動寫眞に取つて、翌日これをその本人に見せたら、恐らくそれが自分のした事だと思ふ者はあるまいとある。それほどに人間は我ながら理窟の分らぬ事を日がな一日してゐるのである。それを一々理詰めに行かうといふのは、丁度道を歩くに自然に任せて交互に左右の足を働かせて居ればこそ、格別の疲も覺えぬ、これが一歩一歩に、今右の足を出したが故に、その理由の下に此の次は左の足を出さずんばあるべからずと考へ〳〵歩くやうなものだ。疲れざるを得ない事になる。

國家を愛するのは人の至情で洵に有り難い心掛であるが、さてその國家とは一體どんなものであつて、それを何故に愛するのであるかと問いたら、恐らく十人が十人、答へ得るものはあるまい。國家とは何であるか。我々が『國家』の語を聞いた時、先づ頭に何が浮ぶ。國家學の上で國家が具備すべき國土人民言語歴史などいふ諸要件を具へた國家の觀念が直ぐ認められるかといふに、決してさうでない。そんなものが認められて後初めて國家を愛するの念が起るものなら、國家學の智識の全く缺けた田夫野人に愛國心がどう起らうぞ。飛んでもない談である。然らば、我々は對象なしに只國家を愛すと稱してゐるのかといふと、さうでもない。我々に何か其處に意識する所のものがある。最も著しいのは「國家」と書いた文字である。國家と聞いて直ぐ頭にぴんと來るのはこの二個の文字である。その外に二重橋も出る、國會議事堂も出る、官報も出る。巡査の佩劍も出る。遠く日本を離れて外國に居る者の頭には、日本と聞けば、先づ東京の中央停車場が眼に入り、横濱の岸壁が胸に浮ぶ。戰場に臨んだ軍人の談に依ると、『國の爲』と言はれて、はつと言下に思ひ浮ぶのは、故郷を出しなに見送りに來て與れた人々の顏だといふ。國家といふは必ずしもそんなものであるまいが、我々の頭に即時に出て來る國家の概念は先づこんな形態を假想して髣髴せられるのである。國家を愛するといふには、それで澤山であつて、國家學も何もあつたものでない。男が女に惚れる時、容貌體格門地教育血性を一々研究調査して、是ならば惚れるも大丈夫と見極めてから惚れる奴があるものでない。眼元が一寸可愛いとか、言葉使ひが如何にもやさしいとか、襟足が何となくあだつぽいとか、何だかだ言つてゐる中に惚れて了ふ。さういふ男女が夫婦になつて、夫婦喧嘩ばかりしてゐるでもなければ、私立探偵社やら、興信所やらで、ある限りの力を盡して互の身の上を研究調査した上で出來た夫婦が必ずしも生涯圓滿に治つて行くものとも限らない。これと同じ道理で二重橋や官報で出來た國家觀念が、決して愛國心の基礎となるに不足はない。國家の國會議事堂は女の眼元ほどに働き、官報は女の襟足と其の力

スターンの『トリストラム・シャンデー』を讀んだ者は、必ずその開卷第一頁の第一項をよんで妙な氣がしたに相違ない。下手に翻譯しては危ないから、うかと此に引用する譯に行かぬが、兎に角『兩親が其の時もつと考へて吳れたなら』といふのである。併し兩親はそんな事をそんな時に考へるものでない。考へては兩親の興味は索然たるものになる。人間の爲る事が一々或る目的を定めて、ひたもの之に向つて進むものゝやうに思ふのは、理智論（インテレクチュアリズム）の說く所で、人間は大抵衝動に依つて動く、理智に動くのでない。若し理智にのみ動いて、『あの女の色は白く、目は美し、此を以ての故にあの女に惚れずんばあるべからず』と言ふ者があつたら、それこそ人間を數理化し去つて、人の心を電氣發動機と取り違へてゐるのである。

總じて世の中は、間の拔けた所があるに由つて趣が出る。目的にかたまり、道理につめられ、勘定に追ひこくられては、忽ち頭がしやちこばる。興味の硬化とでもいふか。現に我々は日常下手糞を極めた文を讀む時一種の興味を感ずる。氣違ひや馬鹿が取りとめもない事を喋つてゐるのを聞くと興味を感ずる。自分には見當もつかぬやうな馬鹿々々しい事をしてゐる人の話を聞くと興味を感ずる。自分は假に之を名づけて『愚弄の興味』といふ。一頃（ひところ）耽溺小說とやらいふ種類のものが流行したのは、作の文藝上の價値にも由つたらうが、それは極めて少部分の人に見認められたまでゞ、大多數の讀者は愚弄の興味を以て之を迎へたのである。醉つぱらひが大道で何やら大聲で獨言を言つて通ると、近處の子供が面白がつてわい〳〵と尾いて來るのも、矢張り愚弄の興味だ。『世に馬鹿々々しき事ほど人の心を爽快ならしむるものなし』とタリーランも言つてゐる。『賢者も二六時中常に賢なる者に非ず、道理より語ること一たびすれば、好みと機嫌に任せて語ること五たびす』と、わが尊信する所のエマスンは言つてゐる。

この間抜の福音を解せずして、兎角理詰に〱と進めやうとするから、人は早く理窟に疲れて了ふ。われらはこの理窟の繋縛を脱しなければならぬ。

四、勘定に疲る

西洋骨牌を取つて一人でペーシェンスをやつてゐると、旨く出來るにつけ出來ぬにつけ相應の興味がある。子供臭い馬鹿〱しいことゝは思ひながらも、つい止められなくなつて、これが爲に屢思はぬ時間をつぶす。自分は嘗てこれだけ時間をつぶすものなら、一つその統計を取つて見たら何かの爲にもならうと思つてやりかけた。所が統計を取るとなると、さつぱり興が乘らなくなつた。何の氣なしにやつて何等求むる所がないので面白いが、一たび勘定を始め出してはもう窮屈になつて、興がなくなる。近頃雜誌の原稿料が原稿紙の枚數に依つて勘定されるので、一枚でも長く書かうとあせつてゐる様が、堂々たる大家の筆の上にも見える。長くさへなれば宜いといふので、打てば火の出るやうな洗錬された語句などは、求めても得られなくなつた。いづれも勘定が人を殺してゐる生きた實例である。

勘定高きは恐らく日本人の常弊でもあらうか。何事につけても利害を算し、出入を計つてかゝる。隨つて世の中次第に現金になつて行く。金を呉れなければ動かず、呉れたら呉れた金高だけ動く。趣味の爲に働かうでもなければ、義務の爲に利害の打算を餘所にして盡すべきを盡すでもない。斯ういふ傾向の處へ、一たび勞働問題が持ち上ると、大多數の人が忽ち得たり賢しと附和したのは正に當然の結果である。西洋の勞働運動には、勞働者の文化が主眼となつてゐるが、日本のは只少し働いて多く金を取らうの算段ばかり。それで閑が出來たら、趣味の向上を圖るでもなければ、品性の陶冶を心がけるでもない。只働く所を働かずにすませ得るのを樂むだけである。だから勞働問題の聲一たび傳はつて、日本の各工場に於ける能率の減退した事は驚くばかりであるといふ。

金で人を縛はうとする資本家も間違ひなら、金で人を使はうとする勞働者も間違つてゐる。金で仕事が出來るものでない。クーレー教授が『いくら給金を拂つたとて、働く者がその仕事を自分の仕事であると感じて心から之に己を打ち込むに非ざれば、仕事も能くは出來ないし、人も滿足は出來ぬ』と言つてゐる。今の現金な日本に比較的最も勘定を知らぬ者は、新聞記者であつて、新聞記者の多くは、給料の少きを憂へず、待遇の薄きを氣にとめず、新聞記者の仕事が面白さに、若くは新聞記者が一番自分の能に適つてゐるとの自覺に促されて、好きで記者になつたものが多い。さればこそ、食事も時間通りには出來ず、夜も碌々寢れずに働いて、一向苦としない。それのみか、斯く飯も食へず、夜も寢れずに働かなければならぬ時が、新聞記者の生活の最も興味ある時と認められてゐる。クーレーの所謂わが仕事として之に己を打ちこんだものである。**いはゞ道樂事業であつた。すべての事業が遊戯機能の發露であつて、道樂半分でなければならぬ**と信ずる自分に取つて、新聞記者の爲す所は實に理想的のものと考へられた。所が之も一昨々年の勞働問題**の勃發と共に世間並の變化を受けかけてゐる。偶今日までの様を説いて、記者の天職を云々する者があれば、これは頭**が古いからと一言に斥けられる。頭が古いか否かは知らず、若し勘定に目さめた昨今の様を新しいといふならば、勘定を超絶した更に新しい時代が引き續いて來るべきことを自分は豫言しておきたい。

世に品行方正と稱せらるゝ者は大抵食はせ者であつて、親孝行の評判の高い者は、多く僞善者である。酒を飲まず煙草を吸はず、遊里に出入せず、女を弄ばずに居さへすれば、それが即ち品行方正であつて、これほど手間のいらぬ容易な事はない。親孝行にしても、手間の入らぬ點に於ては矢張りこれと同じで、年を取つた親といふものは、何でもない事にも喜び易い。その子が一寸やさしくすれば、無性に嬉しがつて、直ぐ孝行者のやうに吹聴してまはる。この手間のいらぬ品行方正と親孝行とを敢てして、その結果はどうかといふと、あれは品行方正だから信用がおける、これは親

孝行だから立派な人物だといふ事になつて、これより受くる所の報酬は、其の手數に比べて格外に多い。それはかりか、品行とは全く沒交渉な所にまで品行がもち出されて、これが考慮の中に加へられる事も往々ある。無政府共産主義を唱ふる者の中に親孝行なものがあると、親孝行な人格を敬仰するの餘り、無政府共産主義までが敬仰すべきものになつて了ふ。或る新學説を唱へ出した者が、品行の極めて方正であつた爲、學説の當否よりも、その品行によつて學説の歸依者を得ることがある。主義とか學説とかいふものは、それだけでその價値を判定すべきものであつて、所謂裸相撲で行くべきものである。これを唱ふる人の個人の品行を、考慮の一條件に加へんとするが如きは。景物をつけて、値のない物を賣らんとするに斉しい。この故に品行方正は往々卑怯者の利用する所となる。この卑怯者が世間に頗る多い。手數のかゝらぬものであつて、何人にも出來ることであつて、又何人も當然しなければならぬ事であつて、それがその『當然』通りあまり何人にもせられぬ時、自分だけが、その手數のかゝらぬ容易の事を行うて、これが格外の利得を作ふとなると、勘定高い人間は皆品行方正面に構へ親孝行の評判を立てたがる。畢竟勘定の餘弊である。若し嘘だと思ふ人があるならば、試に所謂品行方正なる人と附き合つて見て、果して附き合ひ心地が善い悪いかを調べて貰ひたい。附き合ひ心地の善いものが、總じて品行の方正ならぬ人の中に多いか否かを調べて貰ひたい。恐らくは直ちに思ひ當る所があらうと思ふ。

『品行方正』の具象されたものを貯金といふ。貯金といふは誠に大事な事であつて、老後の爲又は病氣や災難に遭つた時の爲とて、平生から貯金をしておくのは立派な心掛である。所が貯金でもしやうといふ人に、兎角面白味のある人がない。必ずしも卑吝といふ譯ではない。切り詰めた勘定の中に齷齪して、我から縛られてゐる様が、事毎に目につく。

がつて、昔こそ〱と恐い事でもしに行くやうに行つたりするのは、畢竟貯金といふものに、一種いやな心持が伴ふ不自覺の自覺である。金をいくら〱使つたとは、誰しも手柄話にするが、いくら金を溜めたとは、誰も人の前で言はない。譯は分らぬが、恥づる所があるのである。昔の武士は金を卑しんだ。武士は食はねど高楊枝と痩我慢を張つた。『腹が空つてもひもじうない』とパラドクシカル千萬な事を言つて母親を泣かせた。其處らに武士の魂がある。この魂を今の世に復活させたい。金が何だ、飯を食ふのが何だ、飯時に飯を食ふのは動物園の猿のする事である。人間は喰はんでゐても、喰つたやう顔をなし得る上等動物たることを知らなければならぬ。

金が何だ。エマスンは旨い事を教へた。曰く、

『甲は負債の返濟を何よりも大事の事と心得てゐる。而して乙が兎もすれば負債の返濟を怠つて、債主に待ちぼうけを喰はする事を無性々々にいやがる。併し乙の身になつて見ると、心得方が丸で違ふ。「おれはどの負債から先づ片づけて行かうか、金持に對する負債か、貧乏人に對する負債か、金錢の負債か、それとも人類に對する思想の負債又は自然に對する天才の負債を先にしやうか。嗚呼町人共よ、お前等には算盤の外に主義も何もあるまい。おれには商賣なんど屁とも思つてゐない。おれには愛や信や義や望の方が尊とい。それに又おれはお前のやうに、いろ〱の義務の中から一つだけ引き離して、負債返濟の義務といふやうなもの丶上に器械的にわが全精力を集中するやうな事が出來ない。おれはおれで進ませて呉れ。お前にも追々分つて來るだらうが、おれの品性が進歩して行けば、(お前にこそ不義理かも知れぬが)お前よりももつと高級な債權者に對するおれの負債は自ら不義理にならずに清算されて行く。のだ。」——實にも金さへ拂へば、乙の不義理はなくなるか、彼は金の外に負債はないか、彼が家主や銀行に對する負債の支拂の爲に、その他の一切の負債を延ばしておいて宜からうか』

とある。如何さま能く言うた。この間の消息を解せぬが故に、人は兎角勘定に疲れるのである。

われらは勘定の緊縛を脱しなければならぬ。

五、遊戯主義

『必要』を言ふな。『理づめ』に來るな。勘定づくで埒を明けやうとするな。必要と『理づめ』と勘定とを去つてゆつたりとこの須臾の生を樂まうでないか。菩薩は人を教ふること、左ながら遊び戯むるゝが如しとある。われらも亦心に罣礙なく任運無作にして、出入無碍、遊ぶが如く戯むるゝが如く、この世に處したい。この心即ちわが遊戯主義である。

遊戯主義と聞いて、直ちに浮世を三分五厘に見る事と解する勿れ、のらりくらりと遊んでばかり居て世を送る事と解する勿れ。必要に迫られずして爲すべきは爲し、理づめにつめられずして、わが本分は盡し、勘定づくを離れて、一切の任務を道樂ごころに果さんとするものである。昔印度の或る王子は、森の中で鹿の群が如何にも面白さうに遊び戯れてゐるのを見て、鹿どもの斯くまで樂しげなるを見るにつけても、お寺にゐる坊主共が何等衣食の累を知らずして、何でもつと樂しくは暮せないのだらうかと思つた。還つてこの事を父なる王に話すと、王は何と思つてか、その翌日から急に王子を王位に立たせて、七日間は思のまゝにこの國の政治を取れ、七日過ぎたらば汝を死刑に處すべしと申し渡した。七日目になつて王子はげつそりと痩せて王の前に出た時、お前は何でそんなに痩せたと問はれて、七日目に死ぬ事ばかり考へてこんなに痩せましたと答へたら、王は『そうれ見ろ、今の坊主共は死ぬ事ばかり考へてゐるから、何で樂しく遊ばれやうぞ』と言はれた。死の考に囚はれて人生に優遊することの出來ない者は印度の坊主に限らぬ。又死ぬ考ばかりの問題でない。何事によらず考へてばかり居ては世の中樂しく送れるものでない。樂しく送れぬ世の中に、眞も美も善もない。不承不承にする仕事は能率の上がらぬものと昔から定まつてある。

併し王位の七日間はちと短か過ぎた。若しこれがせめて一月となり、半年一年となつてゐたらば、王子は必ずしも四六時中間斷なく死ぬ事ばかり考へてゐなかつたらう。樂しいものを見ては心嬉しくも感じ、可笑しいものに接しては笑ひ

……事実その中に在る

ことを悟る。是を不遊戯裡に遊戯すといふ。宗教の極致は此處に在る。佛光國師がまだ支那にゐた頃、元の軍兵の爲に取り圍まれて、あはや白刄一下身首處を異にせんとした時、彼はせかず騒てず、彼の『電光影裡斬春風』の一偈を誦したが如きは、不遊戯裡の遊戯として學ぶに堪へた態度である。達人は斯く不遊戯裡にも遊戯し得るが、不達人は遊戯裡にだに遊戯し得ない。遊戯氣分に充ちたカフエに來て、遊戯氣分の女を相手にし、遊戯氣分をそゝるべき酒をのみながら、女と握手の『必要』を論じ合ふ先刻の若い男などが、即ちそれだ。

話頭(はなし)が少し傍(わき)にそれるが、醉ふ事を樂しむのは、矢張り遊戯を味ふのである。醉うて論理を超絶し、計算を度外視する所に、酒に醉ふの樂がある。一時ではあるが、兎に角身は飄々乎として無何有の郷に入る。この境地を求めて斯くまで容易に得られるのは醉の外にない。この境地を求めんとする慾望は下戸にもあるが、下戸にはさう容易に得られぬ。此に於て何がなその代りをと求めて、無駄口を利くか、ふざけた眞似をする。下戸に無駄口を利く者が多く、上戸に平生だんまりの多いのは是が爲だ。酒に對して衛生がどうの、經濟がどうと下戸の論ずるのは、正に豆腐の善惡を視る眼を以て、蒟蒻の善惡を覗んとするものである。畢竟酒に醉ひ得ざる者の燒餅に外ならぬ。醉を思ふ者は衛生の經濟のといふ小天地の外に悠遊戯し得ることを樂むのであつて、醉を知らぬ者は、一生涯この小天地に齷齪して自ら得たりとしてゐるのである。ちと氣の毒のやうにもある。自體酒に醉ふの何たるかを知らざる者に、酒に醉ふ事を論ずるの資格があるものではない。

禮節といふも遊戯である。衣食の勘定に追はれてゐる者は禮節なんど顧みるの暇はない。衣食足つて禮節を知るとは此邊の所を謂ふ。藝術といふも遊戯である。カルチュアも遊戯である。眞個愛國の政治家に取つて、政治は遊戯である。互に相愛し合ふ男女の間に、結婚生活は遊戯である。秀才には學校に通ふのが遊戯であつて、職に忠なる勞働者に

は工場通勤が遊戯である。宗教も、道徳も、飲食も、起臥も、其の境に達すれば皆遊戯だ。是を遊戯と視得ないのは、未だその境に達せずして、眼が見えぬからである。喩へば芝居に連れて行かれた盲人に眼前の面白い芝居が視えずして、只さわ〳〵と人の混雜する音だけが耳に入るのと同じい。是が爲に芝居が面白くないと、誰に言へる。

人には能く調子に乘るといふことがある。勢に乘じて全く自制の力を失ふをいふ。これは下の部である。やゝ進んだ者は自ら制して我から努めて調子に乘ることを戒める。これは中の部である。最も進んだ者は何等の自制を須ひずして、本來の面目そのまゝに自ら調子に諧ふ。これが上の部である。遊戯氣分は此の邊から生ずる。例へば、下手糞な聲樂家には聲のコントロールが出來ない。我知らず出る所の聲に我知らず釣られて行つて、わが意に反した高さにも低さにもなる。所がやや上手な聲樂家は、歌ふ一句々々に調子の節制を保つて、決して調子を外させぬ。それが更に一層上手な天才的聲樂家になると、態とらしい節制を加へずして、自然に樂々と出るに任せた聲が、ちやんと節度に叶つてゐる。所謂心の欲する所に隨うて則を踰えざもの。綽々としてわが聲の中に遊戯してゐるのである。

文字に乏しい者は、知つてゐるだけの文字で文を綴らうとするから、窮屈を極める。滔々奔放とは行かない。語る事の巧ならぬ者は聽手の受け方如何に依つて、言はでもの事まで言ふが、言はなければならぬ事まで言はずに仕舞ふ。傍若無人とは行かない。草稿を力に演說する者は草稿に囚はれ、振假名を手よりに經を讀む小僧は讀經の節にゆとりがない。一々字引を引かねば文字の平か仄かゞ分らぬ者に詩の旨く作れやう筈がなく、一々秤にかけて調味の料を鹽梅する男に眞の料理は出來ぬ。節制を離れて節度あり、技巧を超絕して妙技が出る。其處に遊戯があり、藝術があり、韻節があり、文があり、詩があり、而して眞個の人間がある。

改めて今一度いふ。人生とは人に疲れて死ぬ事である。唯遊戯主義のみが此の疲れを癒やす。乃ち敢て此に遊戯三昧打擧(!)を薦める。



北郊雜記

阿部次郎

1

此の間畏友H君に逢つたとき、H君は僕の顔を見て微笑しながら云つた――「君の中央公論の論文を讀んだ。君は人格主義にとつて必要なのは制度ではなくて、財産を公共的のものと思惟する觀念だと云つたが、果して觀念だけで澤山なものでせうか」。僕は答へた――「其處でチョン切つてくれちや困るよ。直そのあとに、この觀念が各人の實行を支配することである、と書いてゐるぢやないか」。H君は云ふ――「そんなことが書いてあつたかなあ。併し僕の云ふのは、その觀念が個人の實行を支配するだけでは駄目だと云ふのだ」。かう云つて二人は顔を見合せて笑ひ出した。

僕から云へば、制度の問題は各人をしてこの觀念を實行させるための手段として中間的の意味を持つてゐるのだ、この觀念が直接に人心を支配すること完全になれば最早制度の必要がない、この一致した立場の上に立つ相談の必要が殘るだけだ、併し此の如き理想的の狀態に到達するまでの段階としては、勿論制度の問題が多大な意義を持つてゐる。僕は一度もこの意味に於て制度の必要を否定したことがなかつた。僕は結局H君が僕の論文を讀んでくれた讀み方につい

て不滿を感じた。さうして彼が多大な使命を帶びて西洋に行く前に、もう一度彼と逢つたとき、僕はもう一度この不服を彼の前に繰返した。

又未見の友M君は、僕が一般に人格主義の使命を直接に新世界の下ならしに參加するところにあるのではないと云つたと考へて、それに對する疑ひを述べられた。併し僕はその前に明瞭に一つの條件を附けて置いたのだつた。新世界の下ならしが、憎惡の氾濫と復讐心とによつて始めて遂げられるものならば――それならば人格主義の使命は直接に新世界の下ならしに參加するところにあるのではない。併し凡ての時代に於いて、惡と戰かつて善の光を輝かさうと努力する點に於いては、人格主義は不斷に永久に「新世界の下ならし」に從事しつゝある。例へば僕などが忙しい時間を割いて、世間に向つて何かを言はうとしてゐるのも、その根本の動機に於いてはこの戰ひに參加してゐるのである。僕はM君の眞面目な善良な人であることを信じてゐるから、この疑問に對しては少しも敵意を持たなかつた。併し心の底には矢張りチョン切つて讀まれた不滿を感じない譯に行かなかつた。

その後又北陸にゐる未見のM君から手紙が來た。この人は前のM君がきりすてた假定を問題として、この假定の眞僞を考へることから出發してゐた。現今の勞働運動は果して憎惡の氾濫と復讐心から出てゐるかどうか、若し假にさうだとこれに答へるならばその時吾々は勞働運動に對して戰はなければならない、若しさうでないと答へるならば吾々は勞働運動の戰ひに參加しなければならない、孰れにしても「赤十字」といふやうな曖昧な態度は許さるべきではないと考へる。といふのが質疑といふ謙遜な形をとつたその人の主張だつた。僕は自分のまるで豫想もしないところに、眞面目に僕の書いたものを讀んで、而も彼自身の頭で僕の提出した問題を考へてくれる人がゐることを知つてこれを喜んだ。併し今度は、自分がある際斷定を避けたところの問題に對する不完全な推斷から出發して、自分の斷定の意味を解釋されること

に對する不滿を感じた時、彼は既に自ら、現今の勞働運動が憎惡の氾濫と復讐心とのみから出てゐると考へるものではない、自分は一度もそんな亂暴な斷定をしたことがなかつた。自分が現在の經濟生活に於て改善を要する四つの點[illegible]存權の保證と財貨の公共性と勞働の人格化と生活の單純化と——は皆勞働運動の目標と一致するものであると信ずる。さうして人格主義がこの公正な目的のための戰ひに、彼自身の仕方に於いて參加する義務を持つてゐることは云ふまでもない。併し人格主義は、同時に、勞働運動の中に混入せる憎惡の氾濫と復讐心とにも亦挑戰して、これをその内部から淨めることを欲する。憎惡の氾濫と復讐心とが運動の主動機とならないやうに、それが主動機となる限りそのあるまじき戰ひに參加するものによつて自己を汚さないやうに、努力することを欲する。この戰ひが行はれてゐる限り、さうしてそれが行はれてゐる方面に於いて、人格主義の使命はこの戰ひを緩和して遂に終熄させることにならなければならない。彼の「赤十字」的使命は其處に成立する。赤十字の使命をその最も純粹な意味に於いて解釋すれば、それはあるまじき戰爭を防止する運動の戰時に於ける組織である。それは一つの戰ひに於ける敵味方の孰れにも與せさることによつて、あるまじき戰そのものに對して挑戰するものである。赤十字の態度を曖昧であるといふのは、世界平和の理想の森嚴にして徹底したものであることを考へないのである——自分は北陵M君に對してから答へたい。前に擧げた自分の假定の中にはM君の推測するよりももつと廣い可能性が含まれてゐる。

或人は又から云ふ疑問を提出する——具體的勞働運動に於いて正當な動機と不當な動機と混合してゐるとき、人格主義はどんな態度をとるのかと。この問題に對する吾々の答は簡單である、その勞働運動の目標とするところが正當である限り、人格主義は彼自身の仕方に於いてその目標を實現するための戰ひを戰ふ。不純な動機を混入してゐる勞働運動と等しき目標のために戰ふのは、自らその不純な動機に感染することを意味してゐるのではない。同時に人格主義は又

目標を等しくする勞働運動の不純な動機にも亦挑戰する。彼等の不純な動機に挑戰するのは彼等の正當な目標の實現を妨げるためではない。寧ろその目標が虛僞の幻影ではなくて眞實の成果として熟する時期を早めるためである。若し實際運動に從事してゐる人が、假令我黨の動機が不純を交へてゐるにもせよ、今これを是非するのは目的達成の途ではないといふならば、その人は既に現在の立憲政治を甚しく混濁させてゐる黨略の奴隷となつたものであつて、人格主義は此の如き方針そのものに贊成することが出來ないのである。人格主義と現在の如き黨人の生活とを兩立させることは實際極めて困難である。人格主義は現在の如き黨人の懸引によらずして猶現實の問題を處理する途を求めむとする。（人格主義と勞働運動との關係については別に小論を書くつもりである）。

2

蚯蚓を二つにきつて其尾の方を皿につけるとする。これを見てこの蚓には頭がないといふのは可笑しい。蚯蚓を二つにきつて此蚯蚓は二方しかないといふ。その實他の三方は見る人が自分できつてすてゝゐるのでる。

他人の文章を讀むものは、その意味をチヨン切らずに、これを全體として把握しなければならない。併し明敏H君の如きも時としてこの道に陷るとすれば、他人の思想を公平に理解することは決して容易なことではないであらう。この事を思ふと自分は所謂「評論の評論」を試みる勇氣を喪失せざるを得ない。

同時に自分は又自分の思想を他人に吞込ませる手腕についても亦自ら悲觀する。多くの人が多くの點に於いて自分の主旨を掴み損ふとすれば、自分の說明の仕方も亦甚だまづいに違ひない。此點に於ても亦自分は聊か勇氣の喪失を感ずる

3

友人S君は云ふ――お前は制度だけでは足りないと云つてゐる人である、然るにお前は又法律が人間の利己主義を抑

僕はS君に反問して云はう――人はパンのみにて生きる者にあらずといふ人が、パンを食ふのは矛盾なのか。人は足にて握ること能はずといふ人が、足で歩くのは矛盾なのか。

提出された問題を本當に掴む力がある人はこんな空な矛盾呼はりを滅多にするものではない。事實の論理がかう云ふ誤謬に陥ることを許さないからである。現實を重視する人はもつと問題の現實をはつきり掴まなければならない。現實重視の空論は空論の中でも最も危險な部類に屬する。

4

大隈内閣が解散後の議會で大多數の與黨を得たとき、其黨派に屬するS君はこれは言論の勝利であると某新聞記者に話した。其時以來僕はS氏を信ずることをやめた。この人は骨子を以て世から許され、自分も亦子供の時分から君子として尊敬して來た人であつた。

寺内内閣が議會を解散したとき、反對黨の某氏が、人いたらざるところなし唯大僞を容れずと控室で誰かに書いてやつたといふ話が新聞に出てゐた。この時以來僕はこの人を信ずることが出來なくなつた。自分は彼がこれまで自黨におけるこれ位の僞僞を見逃してゐない譯はないと思つたからである。彼は前内閣の司法大臣だつたのである。

他のS氏が寺内内閣の終期に米穀收用令を攻撃した。その同じ人が翌年原内閣最初の議會に何故に現内閣は收用令を寶刀としてしまひ込んだかと云つて又これを攻撃した。收用令を必要とする事情が前年になくて翌年にあつたのならば格別であるが、事情は前年と同様であるか若くは前年より收用令を要することより少いやうになつてゐたのである。自分は前から信じてゐなかつたその人が、一層信じられなくならざるを得なかつた。彼は現在の政界の所謂花形若くは闘

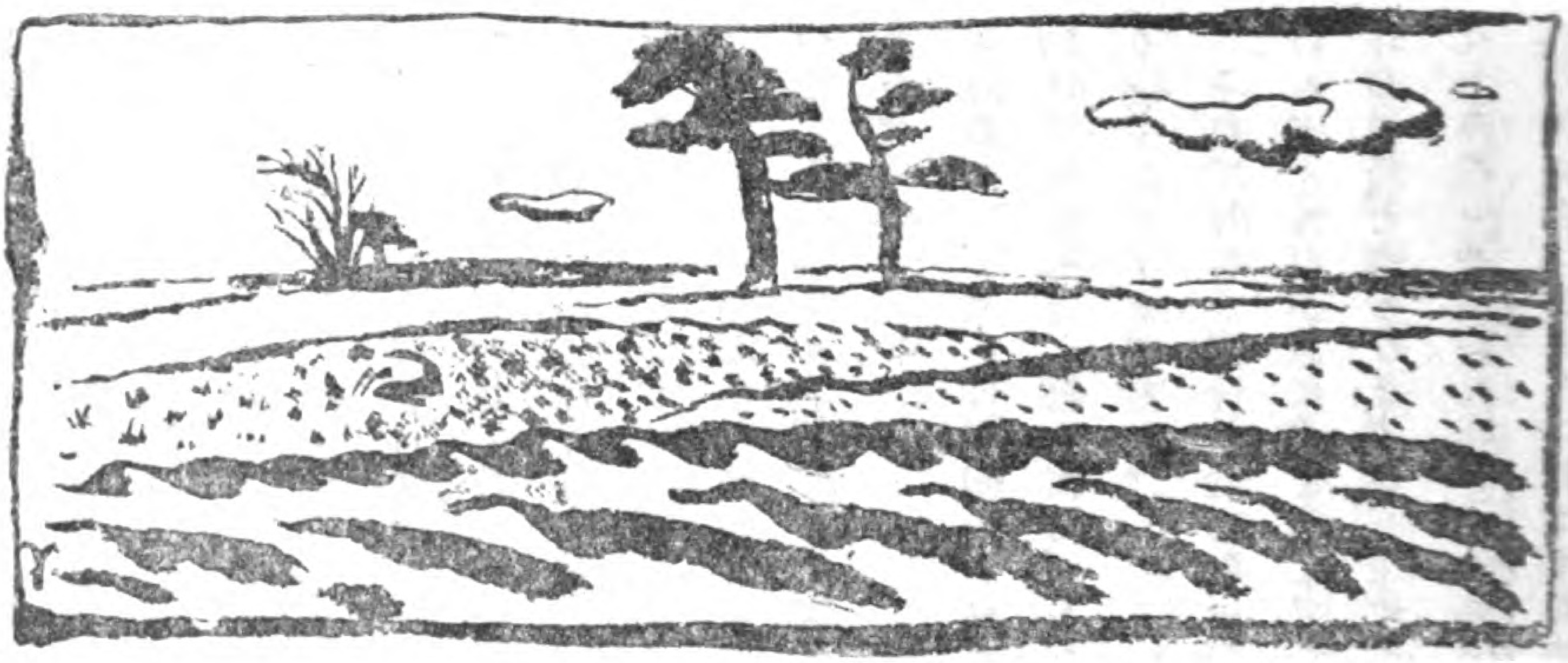
士と呼ばれてゐるものである。

こんなにして、議會政治家に對する人格的信用は自分の頭には一年一年と崩されて行く。彼等が惡い事をするのが惡いのは云ふまでもないが、更にたまらないのは、自分で同じやうな惡い事をしてゐながら、他人のみが惡い事をしてゐるやうに騷ぎ立てる破廉恥である。現今の政治家として立行くにはどうしても此程度には犯さずにはゐられないやうな惡事があると考へて、それを自分でも實行してゐるならば、他人の場合にも男らしく大目に見てやるがいゝ。今日議會に席を得るためには、直接間接の買收がどうしても必要なのかも知れないし、今日內閣を維持するためには、官權を利用する反對黨の威壓が或程度までは避け難いものかも知れない。それは藝者が藝者として立ち行くためには、或程度まで身賣りをすることが必要なのと同樣であるかも知れない。併し誇のある藝者はせめて他人の旦那をあばくやうな卑劣を愼むがいゝ。最も見るに堪へないのは不見轉が他の不見轉を彈劾する恥知らずである。

自分は近頃の議會の論戰を見ると、ダンテの地獄にある詐僞漢シノネと贋金造りアダモとの喧嘩を想起する。兩方の云ふところは共に本當である、彼等は相手の急所を衝くために機智多き言葉を亂發する、併し彼等の云ふところが本當であればあるほど、益々彼等の無恥が暴露される。シノネもアダモも共に地獄の者に相違ないのに、彼等は自分には罪なき者であるかのやうに對手を貶して得意になつてゐるからである。

5

今日の議會政治をどうにか救ひ出す道は恐らく唯一つあるのみである。それは各黨の若い人が（年が若いのみではなくて精神の純粹な人が）敵味方の區別なく聯合して一つの勢力を形ることである。さうして時期が來たら獨立する準備



小說

ホワイト・フアング（白牙）

Jack London 著
堺利彦 譯

第一篇

三　餓の叫び

其の日は幸先よく明けた。二人は前夜、一匹の犬をも失はなかつた。それで彼等は大ぶん輕い氣持になつて、寂寞と闇黑と寒氣の中に橇道を進みだした。ビルは前夜の忌はしい豫覺を忘れたらしく、晝頃になつて道の險はしい處で橇を引つくり返した時など、犬共を相手にふざけちらしたりした。

然しそれは如何にも厄介な事件であつた。橇は上下を顚倒して木の幹と大きな岩との間に挾まつてゐた。そして彼等は挽綱の縺れを直す爲に犬共の革具を外す事を餘儀なくされた。二人が橇の上に俯向いて、それを直してゐる時、ヘンリイはふと『片耳』がどこかにそれて行くのに氣がついた。

『オイ、コラ、片耳！』と、彼は立上つて其の犬の方に振り返りながら呼んだ。

けれども片耳は雪の中をまつしぐらに、革紐をうしろに引きずりながら駈けだした。見ると、今ま通つて來た橇道の雪の中に、かの雌す狼が彼を待ち受けてゐた。片

耳は雌す狼に近づくと、急に用心をしだした。暫く警戒ぶりの刻み足をやつてゐたが、次には立止まつてしまつた、彼は注意ぶかく、そして疑はしそうに、それでも矢張り懐かしそうに狼を見つめてゐた。狼は彼に向つてほゝゑんでゐるように見えてゐた。其の齒を現はしてゐるのが、威嚇する時とは違つて、機嫌を取るように見えてゐた。狼は戯むれた素振りで二三歩彼れの方に進み寄つて、そして踏み止まつた。片耳も狼の方に進み出たが、まだ注意ぶかく警戒して、尻尾も兩耳も空に突立ち、頭も高く持ちあげてゐた。

彼は狼と鼻を嗅ぎ合はせようとしたが、狼は戯むれるような、はにかむような素振りであとしさつた。彼が進めば進むだけ、それに應じて狼はあとしさつた。狼は卽ち一歩づつ、彼を其の仲間の人間のゐる安全地帶からおびきだすのであつた彼は何んとなく其の智力の働きに依つて、あぶないといふ警告を受けたかのように、一度は頭をうしろに振り向けて顚覆した橇と、仲間の組犬と、自分を呼んでゐる二人の人間とを見返つた。

けれども、何しろ其の心の中に起りかけてゐた考へは、皆な雌す狼の爲に消されてしまつた。狼は彼れの方に進み寄つて、ほんのチヨツトばかり鼻を嗅ぎあはせて、そして彼が更に進み寄らうとする時には、又元のあとしさりを始めてゐた。

其の間に、ビルは鐵砲の事を思ひだしてゐた。けれども鐵砲は顚覆した橇の下になつてゐた。そしてヘンリイが彼を助けて積荷を直し終つた時、もう發砲の危險を冒すには、片耳と雌す狼とが餘りクツつきあつてゐたし、其の距離も餘り遠くなりすぎてゐた。

それで片耳が自分の過ちを悟つた時には、それはモウ遲かつた。ビルとヘンリイとは、まだ其の原因は知らなかつたけれど、片耳が急に身を返してこちらに走り戻つて來ようとするのを見た。すると間もなく、橇道に直角を爲して、片耳の退路を遮らうとする、痩せた灰色の一ダスばかりの狼が、雪の中を驅けて來るのが見えた。其の瞬間、雌す狼のはにかみ振りや戯むれ振りは忽ち消えて、唸りを發して片耳に飛びかゝつた。片耳は肩でそれを刎ねのけた。そして、退

の數は增して其の獨立に加はつた。瞳す狼は片耳の直ぐ跡にクツついて走つてゐた。

『オイ、どこに行くんだい？』ヘンリイは急に其の相棒の腕を抑へて問ひたゞした。

ビルは其の手を振り放した。『俺アもう堪らない。此うへ犬を取られるのをジツト見てゐられるかい。』

彼は鐵砲を提げて、橇道のふちにある小藪の中に飛びこんで行つた。彼れの目論見はよく分つてゐた。片耳は橇を中心として圓周を畫いてゐるのだから、ビルは追跡に先だつて、或點に於いて其の圓周を遮斷しようと計畫したのである白晝に鐵砲を持つてゐる以上、狼共を恐怖させて、犬を救ふ事が出來るかも知れないと彼は考へた。

『オイ、ビルや。』ヘンリイはうしろから呼びかけた。『氣をつけろ！滅多な事をするなよ！』

ヘンリイは橇に腰かけて見張りをしてゐた。彼としては外にどう仕樣もなかつた。ビルの姿はもう見えなかつたが、片耳の姿は折々、小藪の間や、あちこちの蝦夷松の木立の間に、見えたり隱れたりしてゐた。此の勝負は迚も駄目だとヘンリイは判斷してゐた。犬は十分に危險を覺つてゐたのだが、何しろ彼は外圓を走つてゐるのに、狼の群は狹い內圓を走つてゐるのであつた。だから片耳が遙かに追跡者を走り拔いて、其の內圓を橫切つて橇の處に戾りつからとは、どうしても考へられなかつた。

三種の進路は今や速かに一點に近づきつゝあつた。木立や森に遮られてヘンリイには見えないが、どこか其の邊の雪の中で、狼の群と、片耳とビルと、三つが一緒くたになりかけてゐるのだとヘンリイは感づいてゐた。所が、思つたよりも早く、ズツトズツト早く其の事が起つた。彼は忽ちにして一發の銃聲を聞いた。そして又續けざまに二發の銃聲を聞いた。それでもうビルの彈藥の盡きた事は分つてゐた。それから直ぐに大變な唸り聲や叫び聲が一齊に聞えた。片耳が苦痛と恐怖を訴へる其の啼き聲も聞きわけられた。正に死に瀕してゐる狼の叫びも聞えた。事はそれきりで終つた。唸り聲もやんだ。啼き聲も消えうせた。沈默が再び此の寂寞の地を占めた。

ヘンリイは永いあひだ橇の上に腰かけてゐた。出かけて行つて其の事件の跡を見る必要も無かつた。それは目の前で起つた程によく分つてゐた。それでも一度は不意に立ちあがつて、大急ぎで革紐の下から斧を取り出した。然し又しば

らく腰かけたまゝで考へこんでゐた。殘つた二疋の犬は其の足元にしがみついて震へてゐた。

彼は遂に、有らゆる元氣が其の體内から脫け去つたように、しよう事なさげに立ちあがつて、犬共を橇にいわえつけた。彼は自身の肩にも人間用の挽綱をかけて、犬共と一緒に挽いた。けれども彼は幾許も進まなかつた。ほんの少し暗くなりかゝると、彼は直ぐにキャンプを作つた。そして薪の供給の十分な場所を選ぶ事に注意した。先づ犬共に食事をさせ、次に自分の夕飯を拵へて食つてから、彼は火の直ぐ側に寢床を作つた。

然し彼は其の寢床を享樂する運命を持つてゐなかつた。彼れの目が閉ぢる前に、彼れの安全を許すには餘りに近く狼等がやつて來てゐた、其の狼等を見るには、最早や視力を勞する必要が無かつた。彼等はヘンリイと火との直ぐそばに狹い圓周を畫いてゐた。ヘンリイは火の光に依つて、彼等が或は橫になり、或はしやがみ、或は腹を地につけて前に這ひだし、或はそこらを前後にうろついたりするのを、明かに見る事が出來た。彼等は眠りさへもしてゐた。或る奴等はそこゝで、ちようど犬のように雪の中に丸くなつて、ヘンリイはモウ迚も許されない其の眠りを取つてゐるのが見えた。

ヘンリイは盛んに火を燃やしつゞけた。彼れの身體の肉と狼等の餓えた牙との間を遮ぎるものは只だ其の火ばかりである事を彼はよく知つてゐた。二疋の犬は一疋づつ彼れの兩側に擦り寄り、體をもたせかけて彼れの保護を求め、或は啼き、或は叫び、時には又、或る狼が少しでも今までより近く進み寄ると、死物狂ひの唸り聲を發するのであつた。そしてそういふ風に犬共が唸り聲を發する時、狼の全團は急に殺氣だち、皆が起きあがつて試驗的に前進の態度を示し、唸りと叫びとの凄まじいコーラスをヘンリイの周圍に起すのであつた。そして、又圓周は再び元のように坐りこみ、或奴等はそこゝで妨げられた居眠りの遣り直しをするのであつた。

然るに此の圓周は絕えずヘンリイの方に近寄つて來る傾向を示してゐた。ほんの少しづつ、一度に一インチばかりそこにも一匹がハミだし、こゝには一匹がハミだして、次第に其の圓周が狹くなり、遂には畜生共がもう殆んど一度に飛びかゝつて來られる程の距離に迫つてゐた。そこでヘンリイは焚火の中から薪の燃えさしを引つつかんでは奴等の群

の中に放りつける。すると、いつでも其の結果として大騒ぎの退却が起り、殊に狙ひすました燃え木が見事に當つて餘りにのさばり出た奴を燒け焦した時には、憤怒の叫びと恐怖の唸りとが其の退却と同時に起るのであつた。

朝になると、ヘンリイはヘトヘトになつてしまつて、目は眠りの不足の爲にトロンとしてゐた。彼は暗い中に朝飯を濟まし、九時に夜が漸く明けて、狼の群が退却した時、前夜の永いあいだに計畫しておいた仕事に取りかゝつた。即ち彼は幾つかの若木を切り仆して、それを組み合せて敷臺を拵へ、更にそれを立木の幹と幹との間に空高く縛りつけた。そして橇の縛り革を引綱にして、犬共にも手傳はせて、例の棺を敷臺の上に釣りあげた。

『奴等ビルを取りやがつた。今に俺も取られるか知れない。だけどねえ、斯うして置きやアお前さんだけは大丈夫取られやしませんや。』彼は木の上の墓の中に在る屍體に向つて斯う云つた。

それから彼は又橇道を進みだした。輕くなつた橇は嬉しそうな犬共のあとに飛んでゐた。マツガリイの市に着きさへすれば。安全だといふ事を、犬共もよく知つてゐたのである。然るに狼等は、今では一層おほぴらに追跡して來た。後ろの方にも、そして兩側にもズツト並んで、落ちつきはらつて小刻みに駈けてゐた。其の赤い舌はベロリと吐き出されて居り、其の痩せた脇腹には足の運動に伴つてピクピクする肋骨が見えてゐた。彼等は實に痩せきつて、肉のない筋ばかりの骨組を引つ包んだ皮袋であつた。彼等がそれでも猶ほ立つて歩き、直ぐに雪の中に仆れてしまはないのが不思議だと、ヘンリイは心の中に訝つた程であつた。

ヘンリイは暗くなるまで旅程を續ける勇氣がなかつた。眞晝には、太陽が南の地平線を暖ためたばかりでなく、其の薄い金色をした輪周の上部を、空の際に突きだしてゐた。彼はそれを見て覺つた。日は廻りつゝあるのだ。太陽は囘歸しつゝあるのだ。然し彼は、其の光の朗らかさが消えるか消えぬかに、早くもキヤンプに就いた。灰色の晝間と、薄暗い夕暮とがまだ數時間もあつたのだが、彼はそれを利用して恐ろしく澤山の薪木を切り採つた。

夜と共に恐怖が來た。餓ゑた狼共が一層大膽になりつゝあつたばかりでなく、睡眠の不足がヘンリイの身にこたへて來た。彼は火のそばにしやがみながら、肩には毛布を掛け、膝の間には斧を置き、兩側には擦り寄つて來る犬共を一疋ず

つ控へて、我にもあらず居眠りした。一度目のさめた時、彼は自分の直ぐ前に、十フイート以上とは離れてゐない處に一疋の大きな灰色の狼（全群中の最大な奴の一つ）を見た。そして彼がそやつを見つめても、そやつは丁度なまけ犬のように悠々と身を延ばして、彼に向つて大あくびを爲し如何にも彼が程なく食はれる筈の、延引した食事の品に過ぎないかのように、我物顔に彼を眺めてゐた。

此の確信の心持は全群の上に現はれてゐた。或者はひだるそうに彼を見つめ、或者は雪の中に靜かに眠り、其の總數は優に二十疋に上つてゐた。其の有樣は恰かも、食物を並べたテーブルのまわりに、もう食べてもよいといふ許可を待つてゐる子供等のように、ヘンリイには思はれた。そして彼が即ち其の食はれる食物であつた。一體いつ如何にして其の食事は始められるのであらうか。

彼は薪を火の上に積みあげた時、自分のからだに對して、これまでに曾て感じた事のない値打を發見した。彼は自分の筋肉の動くのを見守り、又その指の巧妙な仕掛に感心した。火の光にすかして、彼は自分の指を或は一本づつ、或は皆んな一緒に、幾度も幾度も緩かに折り曲げて見た。或は又、五本の指を十分に開かせて見たり、急に物を摑むような眞似をして見たりした。彼は又爪の構造を研究した。そして其の指先を鋭どく突ツついて見たり、柔かに押して見たりして、それから生ずる神經の感覺をおもむろに味はつてゐた。彼れの心はそれに魅せられた。彼は頓に此の微妙な自分の肉、これほど美しく、これほど品やかにこれほど巧みに働く自分の肉に惚々した。所が、それから直ぐ、待ちどほしそうに迫つて來る狼の圓周に向つて恐怖の目を投げると、今度は又不意に撲りつけられたように、此の驚くべき自分の體、この生きた肉が、最早や食物に過ぎないものであり、貪食動物の探求物であり、やがて彼等の餓えた牙に嚙み裂かるべきものであり、又大鹿や兎が屢々彼れの爲の營養物であつたと同じく、彼自身が今は狼等の爲の營養物となるべき事を痛感した。

彼がうなされつゞけの居眠りから覺めた時、かの赤茶けた雌す狼が彼れの前に立つてゐた。奴は五六フイートの距離に在つて、雪の中に尻を据ゑて、あこがれた目元で彼を見つめてゐた。二疋の犬は彼れの足元に嘻きつ唸りつしてゐた

が、奴はそれに目も呉れなかつた。奴は只だ人間を打眺めてゐた。ヘンリイも暫く奴を眺め返した。奴の目には少しも感謝する様子が無かつた。奴は只だ大なるあこがれを以て彼を眺めてゐたのだが、然し其あこがれは同じく大なる飢餓から生じたあこがれであつた。彼は食物であつた。彼れの姿は奴の味覺を刺激した。奴の口が開いた。涎が流れ出た。そして奴は旨さの豫想を以て唇を嘗めずつた。

恐怖の痙攣が彼れの全身に起つた。彼は奴に投げつけるべく、急いで燃え木を取らうとした。然るに其の手が僅かに燃え木に屆いた時、そして其の指がまだ其の飛道具を握まない中に、奴はもう安全地帶に飛び返つてゐた。奴が物を投げつけられる事に慣れてゐるのが、それで分つた。奴は飛んで逃げる時に、白い牙を根元まで現はして唸りを擧げた。奴のあこがれた態度は全く消えて、それに代つて肉食獸の獰猛性がヘンリイを身震ひさせた。彼は燃え木を持つた自分の手を見やつて、其の指の握み方の器用さに氣がついた。枝込の荒木の表面にある有らゆる凸凹に順應して、上下左右にからみついて握りしめた所、殊に火の燃えてゐる部分に餘り近い一つの小指が、敏感に、自働的に、其の燒けつく熱さを避けて、他の熱くない握み場所に出り戻つてゐる所など、如何にも巧妙な働きだと思つた。そして同時に彼は又、其の同じ敏感な、巧妙な指が、あの離す狼の白い齒で噛み砕かれる幻じを見てゐるような氣がした。彼は自分の體を今ほどに、(其の保存が危殆に瀕してゐる今ほどに)大切に思つた事は曾て無かつた。

終夜、彼は燃えてゐる薪を持つて餓えた狼の群と戰つた。彼が我を忘れて居眠りをすると、犬共の啼き聲と唸り聲とが其の目を覺させるのであつた。朝は來たが、然し今日は初めて、晝間の光が狼等を退散させる事に失敗した。ヘンリイは徒らに彼等の去るのを待つてゐた。彼等は依然としてヘンリイと火との廻りに圓周を作つて、傲然なる占領の態度を示してゐた。朝の光から生じたヘンリイの勇氣も挫けてしまつた。

彼は死物狂ひで橇道に進み出ようと試みた。然るに彼れが火の保護を離れた其の瞬間に、最も大膽な狼が彼に飛びついた。但しそれは仕損じであつた。彼は急に飛びしさつて纔かに免れた。狼の兩顎は彼の腿から六インチ足らずの處で噛み

合はされたそして他の狼等が立ちあがつて彼に向つて押寄せて來た。それでヘンリイは、彼等を相當な表敬的距離に追ひ拂ふ爲に、絶えず燃え木を其の左右に投げちらす事が必要であつた。

晝間でも、彼は新たな薪を切り採る爲に、火の側を離れる事を敢てしなかつた。廿フイートのかなたには巨大な蝦夷松の枯格が突立つてゐた。彼は半日を費して、其の木の處までキャンプの焚火を延長させた。其の間にも、絶えず五六本の燃えさかる薪粗朶を、手元に用意して、何時でも敵に投げつける事の出來る工夫をしてゐた。そして木の處に達すると直ぐ、今度は周圍の森を檢分して、最も多く薪の取れそうな方向に其の木を仆す事を考へた。

「其の夜は前夜の繰返しであつた。只、睡眠の必要が逆らやりない程になつて來た。犬共の唸り聲もモウ其の効果を生じないのであつた。それに犬共はのべつに唸つてゐるので、彼れの痲痺した鈍い感覺には、もう其の聲の高低や強弱を感ずる力がないのであつた。彼はビックリして目が覺めた。見ると、雌す狼が一ヤード以内の處に來てゐた。それが餘りに近いので彼は寧ろ機械的に、燃え木を手に持つたまゝ、奴の唸つてゐる其のあいた口に突きこんだ。奴は痛みの叫びを發して飛びのいた。肉や毛の焼けた臭ひのするのを愉快に感じて見てゐると、奴は廿フイートばかりもあちらの方で頭を振り散らしながら腹立たしそうに唸つてゐた。

然し今度は、再びまどろむ前に、彼は燃えてゐる松の瘤枝を右の手にいわえつけた。けれども彼れの目が閉ぢたのは僅かに數分間で、其の焔が手の肉を燒いたので直ぐに目が覺めてしまつた。或時間も彼は此のプログラムに執着してゐた。そして右のようにして目が覺める度毎に、燃え木を投げては狼等を追ひ拂ひ、火をも焚き添へ、手の瘤枝をもいわえ直したりした。此の遣方は至極うまく運んでゐたが、其うち一度、瘤枝のいわえ方がゆるかつたので、彼れの目が閉ぢた時、それが手から落ちてしまつた。

彼は夢を見た。自分はマツガリイの屯所にゐるような氣がしてゐた。暖かで、好い氣持で、店番の男と加留多遊びをやつてゐた。所が又屯所は今ま狼に包圍されてゐるようであつた。狼等は直ぐ其の門の外で吠へたてゝゐた。そして折折彼と店番とが加留多をやめて其の聲に耳を傾け、狼等の這入りこまうとする其の努力の無益な事を笑つてゐた。する

と、随分不思議な夢で、并時ガチャガチャ、ガリガリといふ音がした。門が押し破られたのであつた、間もなく狼等が広間の大きな部屋に暴入するのが見えた、奴等はまつしぐらに彼と店番とに飛びかゝつてゐた。門の破れた時から、奴等の叫び聲は恐ろしく増大してゐた。彼は今まで其の聲に悩まされてゐた。夢は次第に何物かに變つて行きつゝあつた。それが何物であるかは分らなかつたが、兎にかく其の間に、叫び聲が益々彼れの身に迫つて來た。

目が覺めて見ると、其の叫び聲が現實であつた。彼れの周圍に大叫喚が起つてゐた。狼等は彼に向つて突進しつゝあつた。奴等は一齊に彼に迫り、彼に近づいてゐた。一疋の奴の歯は正に彼れの腕を嚙んでゐた。本能的に彼は焚火の中に飛びこんだ。そして其の飛んでゐる中に、片足の肉が鋭い牙に嚙み裂かれた事を感じた。それから火の戰ひが始まつた。彼れの丈夫な指無し手袋が暫くは彼れの手を擁護した。彼は燃えあがる炭火を掬つては八方に投げ散らした。キャンプの焚火が丸で噴火山の狀を呈してゐた。

けれども、それは永く續かなかつた。彼れの顔は火熱の爲にたゞれてゐた。眉毛も睫毛も燒け焦げてしまつた。兩足の熱さも堪へられなくなつて來た。そこで彼は、兩手に一本づつ燃え木を持つて焚火のはしの方に飛びだした。狼等は追拂はれてゐた。炭火の落ちてゐる處では、そこにもこゝにも、雪がジュウジュウと解けて居た。そして時々刻々、狼が急に飛びあがつては唸りながら退却するのは、即ち其の落ちた炭火を踏みつけたのであつた。

敵の最も近づいてゐる奴等に燃え木を投げつけて、ヘンリイは其のくすぶつてゐる手袋を雪の中に突きこみ、又その足を冷すべく雪の上をジタジタと踏みつけた。二疋の犬は見えなくなつてゐた。彼等は、數日前にファッチイで始まりそれから引續いてゐる永い食事の一品として役立つた事はよく分つてゐた。そして其の食事の最終の一品は即ち、近日の中にヘンリイ自身となるのだらうと思はれた。

『まだ貴樣等に取られやしないぞ！』と、彼は餓ゑた畜生共に向つて拳を凄まじく振り散らした其の聲の響きで全周圍が又激昂した。唸り聲が一齊に起つた。そしてかの雌す狼が雪を踏んで彼れの側に進み寄り、餓のあこがれを以てジッ

彼はフト思ひついた新工夫の實行に取りかかつた。即ち彼は焚火を押し擴げて大きな圓周を作つた。そして其の圓周の眞中で解けた雪の上に寢道具の敷物を敷いてシャがんでゐた。斯樣にして彼が焰の影に消え失せた時、狼の全群は彼れの行衞を探し求めて、不思議そうに火の外輪に寄つて來た。奴等はこれまで火に近づく事を拒まれてゐたのだが、今は火に密接した圓陣を作つて、丸で犬と同じように、其の珍らしい暖かさに對して瞬きをしたり、欠伸をしたり痩せた體を踏み延ばしたりしてゐた。すると、かの雌す狼が尻を据えて、鼻の先を星に向けて長吠えをやりだした。他の狼等も一疋づつそれに倣つた。とうとう全群が皆な腰をおろして、鼻先を空に向けて饑の長吠をやりだした。

空が白みかゝつた。次いで夜が明けた。火は消えかゝつてゐた。薪がもう盡きたので、更にそれを取つて來ねばならないのであつた。ヘンリイは焰の圓周から歩み出さうと企てたが、そうすると狼等は直ぐに押し寄せて來るのであつた。燃え木を投げつけると飛びのきはするが、モウそれが爲に退却する事は無かつた。彼等を追拂はうとするヘンリイの努力は無効であつた。彼が斷念して再び火の圓周の中によろめきこんだ時、一疋の狼が忽ち彼に飛びつかうとしてそれを仕損じて炭火の眞上に四つ足を落した。奴は恐怖の叫びを發した。同時に叉唸りを發したそして飛びしさつて雪の中に其の足の裏を冷やした。

ヘンリイは毛布の上にシャがみこんでしまつた。腰を曲げて前方に俯向き、力なさげに兩眉をダラリとさせそして兩膝の上に頭をもたせた有樣は、もう全く戰鬪を斷念した姿勢であつた。折々彼は頭をあげて火の消えて行くのを見た。焰と炭火との圓周が所々に缺損を生じて。幾つかの弓形を殘してゐた。其の缺損は次第に大きくなり、其の弓形は次第に縮小した。

「サアもう、何時でもやつて來て俺を食つちまへ。何んしろ俺アもう寢るわい」と、ヘンリイはぐずぐず獨りごとを云つた。

一度彼れの目が覺めた。すると、圓周の缺損した彼れの眞ん前に、かの雌す狼がジット彼を見つめて立つてゐた。

二度び彼れの目が覺めて。それはホンの暫くの後であつたが、彼に取つては數時間も立つたかと思はれてゐた。所が

そこに不思議な變化が起つてゐた。餘りに不思議な變化であるので、彼はビックリして其の目を見開いた。何事が起つたのか。最初は彼に分らなかつた。然し漸く分つて來た。狼等が居ないのであつた。只だ雪の踏みにじられた跡が、如何に奴等が彼に近く迫つてゐたかを示してゐるばかりであつた。眠む氣がこみあげて再び彼を捕へてしまつた。彼れの頭は更に兩膝の間に沈みかけてゐたが、其時彼は忽然として飛び起きた。

人の叫び聲が聞えて來た。橇の引きずられる音革具の軋る音、勢ひこんだ犬共の元氣な啼き聲などが聞えて來た。四臺の橇が川床から樹木の間の此キャンプに進んで來た。五六人の人達が、消えかゝつた焚火の中央にシャがんでゐるヘンリイの廻りに集まつた。彼等はヘンリイを揺り起し突き起した。ヘンリイは醉つぱらひのような目付で彼等を見た。そして變な寢ぼけながらでつぶやいた。

『赤い雌す狼……食事時に犬共の中に交つて……初は犬の餌を食つた……次にや犬を食つた……それからビルを食つた……』

『アルフレッドさんはどうしなさつた?』一人の男が烈しくヘンリイを揺すぶりながら、其の耳元で斯う怒鳴つた。ヘンリイはおもむろに頭を振つた。『旦那は食はれやしなかつた。此の前のキャンプで木の上に釣されてる。』

『死んだのか。』其の男は叫んだ。ヘンリイはあゝ箱の中にゐるよ。』そう答へた。そして不機嫌らしく肩を揺すつて其の男の手を振りはなした。『オイ、よしてくれ……俺アもう駄目だ、迚もやりきれない……左樣なら皆さん。』

彼れの目はハタハタとして、其まゝ閉ざされた。彼れの顎は胸の上に落ちこんでしまつた。そして人々が毛布の上に彼を寢かせる間にすら大きな、鼾が霜空に冴えてゐた。

然し今一つ外の物音があつた。遙かの彼方に、遠い幽かな、餓えた狼の群の叫びがあつた。彼等は先つき人間を取りにがして、更に他の肉の跡を追つてゐるのであつた。



大鹽騷動（社會講談）

堺利彦

『社會講談』の看板を擧げてから、私は第一に『鋳掛松』を書き、第二に『一休和尙』を書いた。幸ひに二つとも存外の好評を博した。そこで『改造』の編輯者は猶ほ頻りに私をおだてる。私も好い氣になつて、まだ幾つか書いて見る積りでゐる。『一休』は『松』よりも一段上出來だといふ評判だが、今度の『大鹽』は『一休』よりも又一段の上出來らしい。どうぞ其の積りで讀んで下さい。

一、人間といふ奴は馬鹿なもの

讀者諸君の中には天保錢といふ物を知らない人もあるだらう。私は此あいだ四谷の夜店で久しぶりあれに對面した。何しろアノ小判形の眞ん中に四角な穴のあいたアノ大きなズウ體をしてゐながら、明治の世の中では八厘にしか通用しなかつたのだから、『少し足らん』とふ符牒に使はれたも無理はない。五錢の穴あき白銅を大正時代のシンボルとするなら、天保錢は卽ち天保時代のシンボルだ。

然し『天保人間』といふ言葉は必ずしも『少し足らん』人間といふ意味ではなかつた。舊弊な人間、頑固な人間時勢に後れた人間が卽ち『天保人間』だつた。今日生き殘つてゐる『天保人間』は、山縣有朋、大隈重信、松方正義あたりより外には先づあるまい。所がアノ、人達は夜店にも出されず、今だに何んのかのと頑張つて

居るから驚く。

　餘談はさておき、其の天保の八年に大鹽騒動が起つた。丁度今から八十四年前だ。八十四年前と云ふと、隨分古い昔し、ようにも聞えるが、其の中から大正の十年と、明治の四十四年と、合せて五十四年を引き去ると、あとは只つた三十年だ。徳川幕府の仆れた時から只つた三十年前の事だ。何しろ當時は、二百幾十年の太平が打續いた後であつて、そこに忽然として、ソレ火矢だ鐵砲だ、ソレ謀叛だ戰爭だと來たのだから、謂ゆる晴天の霹靂なるもので、全く途方もない大騒動であつた。然るに其の大騒動が只つた一日で鎭まり、其の跡片付も一と月二た月の中に濟んでしまふと、人間といふ者は馬鹿なもので、徳川の御代は又萬々歳だと思ひこんでゐた。所が、それから只つた三十年で明治の新社會が生れた。世の中の變遷といふ事を考へると、面白くもあれば恐ろしくもある。

　實はモ少しこゝで何か小理屈を云つて見たいと思ふのだが、マア云はずに置く。私が云ふよりか、諸君に考へて貰ふ方がいゝだらう。

二、天より下され候書付

　扨、天保八年二月十九日早朝の事。河内國尊延寺村の百姓男が二人、鍬を杖について麥畑のはしで立話をしてゐた。

『彌助どん、お前に一つ見て貰ひたい物がある。これは何んぢやろな。』

『ハテね。お觸れでもない樣ぢや　、お守りでもない樣ぢやが、久作どんお前こんな物どうして持つてなさる。』

『サアそれがよ。けさ俺がうちの窓の中に投げこんであつた。何んぢややら薄氣味がわるいので、嚊アにも云はずにジツト懐ろに入れて來た。』

『ハテね』と、彌助は鍬を放り出して、一尺ばかりもある黄色い薄絹の袋の中から一つの書付を拔きだして其のうわ書を打眺めた。彌助は少し字が讀めるらしい。

『天より下され候書付……』

『ナニ、天より下され候書付！　それぢや彌助どん、天狗が投げこんで行つたのか。どうも俺、只事でないと思うた。』

彌助は小首を傾けてゐたが、『久作どん如何にもこりや只事でないわい。「天より下され候書付」‥‥そして「村々小前のもの共に至る迄」と添書がしてある。』

『フン、それぢや彌助どん、マア中をあけて、どんな事が書いてあるか讀んで見て下され。』

彌助は恐る恐る其の書付を擴げた。西の内五枚續の版行摺で、『四海困窮せば天祿長くたゝん、小人に國家を治めしめば災害至る』と、草書平假名交りで書きだしてある。

『イヤア、これは俺なんぞの讀めるものぢやないわい。ぢやがの彌助どん、俺はすこうし思ひ當る事がある。ヒヨットすると、これは大鹽平八郎樣かも知れんぞ。』

『大鹽平八郎樣！　オウ、此あひだ俺達に一朱づつ施行をして下された‥‥‥』

『ウム。それよ、あのお方よ。これは一つ深尾の才次郎さんにお尋ね申して見よう。才次郎さんは大鹽樣のお弟子ぢや。百姓の息子でも學問はエライ出來るそうぢやし、年はまだ若いが中々の器量人ぢや。』

『そう云へば彌助どん、才次郎さんは此ごろ鳥打の鐵砲をいぢりまわしたり、竹槍を拵へて見たりしてゐなさるが‥‥』

『ウム、さうか。それにも何ぞ譯がありそうぢや。オ、あそこに忠エムが來た。忠エムはソフも才次郎さんの處に出はいりをしてゐるのぢやから、先づあれに尋ねて見よう。』

忠右衛門は百姓ながら一癖ありそうな面構へをした男で、ドテラの着流しでノツリノツリと二人のそばにやつて來た。

『忠エムどん、えゝ所ぢや。一つお前に尋ねたい事がある』と、彌助が書付を片手に握つたまゝで話しかけた。

忠右衛門は其の書付に目をつけて、更に二人の顔をジツと見やつてから斯う云ひだした。

『お前達、その書付を見たか。大鹽平八郎樣の檄文ぢやぞ。大鹽樣は俺達を救うてやらうといふ思召しで、今度一大事を御思ひ立ちなされる。ソラ、此あひだ俺達に一朱づつ施行をして下されたのも大鹽樣ぢや。そしてあの時、若しや此の先き天滿の方角に火事があつたら、皆々馳けつけて呉れといふお頼みであつた事はお前達も覺えて居よう。』

『それを忘れてなるものかい。天滿が火事と聞いたが最後俺は忠エムどん何ん時でも馳けつける氣でゐるのぢや。』と彌

助は云つた。

『彌助どんの云ふ通り、俺も大事のお手傳ひなら何ん時でも大塩様に駈けつける』と、久作も云つた。

『よし〱。それならよい。實はな、大塩様の一大事と云ふのは、……イヤ、それはマア俺からは云ふまい。今に才次郎さんが話して下さる。何にせ此あたりは大塩様に御因縁が深い。マア腰かけてユックリ話さう。』

忠右衛門はありあはせた石ころの上に腰かけた。彌助と久作とも、狹い道を挾んで忠右衛門の向ひ側に腰をおろした。二人はもう何んにも云はないで、唯だ忠右衛門の顔ばかり覗いてゐた。それで忠右衛門は話しつゞけた。

『深尾の一家が大塩様と御懇意な事はお前達も知つての通りぢや。次兵衛さんはあの通りの人好しぢやが、弟の才次郎さんは大塩様の立派なお弟子ぢや。それから深尾の親類で（お前達も知つてる筈ぢや）守口町に白井孝右衛門さんといふ質屋がある。其の孝右衛門さんは隨分前から大塩様のお弟子で、身代は大きいし、大塩様のお勝手元は半分ぐらゐあそこでお世話をしてゐるといふ事ぢや。倅の彦右衛門さんも暫く大塩様に入塾してゐた事がある。それから般若寺村の庄屋で橋本忠兵衛さん、これは大塩様のお妾おゆうさんの假親にまでなつてゐる。まだ忠兵衛さんの娘のおみねさんは、大塩様の御養子格之助様のお妾になつてゐる。それから同じく般若寺村の年寄に柏岡傳七さんと云ふのがある。これもお弟子ぢや。それから森小路にも柏岡源右衛門といふ年寄がある。まだ森小路には横山文哉といふお醫者もある。この文哉さんの母御は大塩様にお針奉公をしてゐる。マアこんなわけで、攝津河内をまたいだ此の界隈は大塩様の御因縁で堅まつてると云ふてもえゝ位ぢや。それぢやに依つてイザ何事と云ふ時には、皆が一度に大塩様に駈けつける段取がチヤンとついてゐる。お前達も其の積りで御加勢をして呉れよ。えゝか、分つたか。それに何んぢや、此の界隈ばかりぢやない。攝州、河州、泉州から播州にかけて、大塩様のお名前を知らん者は一人もない。お名前を知らん者はないばかりぢやない、大塩様の日頃からのなされ方を有難がつて居らん者一人もない。取りわけ渡邊の穢多村などぢやア、丸で大塩様を神様のように思うて居るといふ事ぢや。こゝらあたりの穢多村でも、大塩様のお爲なら火の中にでも飛び込むと云ふのが何んぼでもある。そこで大阪の御城代様よりも、兩町奉行様よりも、與力の御隠居の大塩様の方が、よつぽど御威

勢が强いと云ふものぢや。』

『成程々々、そりや忠エムどんの云ふ通りぢや、所で忠エムどん此の書付は?』

『書付も書付ぢやが、忠エムどんの云ひなさつた其の大鹽様の一大事の思ひ立ちと云ふのは何んぢやい?』

『其の書付を讀めば何も斯もチャント分る。それは檄文と云うての、一大事の御趣意を大鹽様が俺達に知らせて下さるのぢや。ソラ此う出書きに「天より下され候書付」とある。大鹽様は天道様の代りになつて、悪い奴等を御誅伐なさらうと云ふのぢや、それで此の書付は天道様から下されたも同じわけぢや。』

『成程々々。所で忠エムどん、「天より下され候書付」だけは俺にも讀めたが、肝腎の本文はサッパリ讀めん。お前一ツそこで讀みあげて下され。』

『そうぢや忠エムどん、大きな聲で讀みあげて俺達に聞かせて下され。』

『イヤ、そいつは俺にもチイット六かしい。これから一緒に才次郎さんの處に行かう。サア二人とも來いやい。』

三人は立ちあがつた。ドテラの着流しの忠右衛門のあとから、彌助と久作は鍬をかたげてついて行つた。氏神の社の前まで來ると、其の社内に五六人の百姓が集まつて、何やらワイワイ騒いでゐた。『大鹽様』『大鹽様』といふ聲だけはハッキリ聞えてゐた。三人も社の中にはいつて行つた。社の拜殿には『天より下され』た例の『書付』が張りつけてあつた。やがて誰かゞ『才次郎さんを呼んで來い』『才次郎さんに來て貰へ』と云ひだした。兎かくする中、社内にはモウ二十人ばかりの百姓が集まつてゐた。

暫くすると月代を奇麗に剃つた、年はまだ廿五六の、凛々しい顔をした深尾才次郎が走つて來た。才次郎は行きなり拜殿に飛びあがつて、そこに張りつけた檄文を讀みあげに掛つた。

『皆よく聞け、大鹽平八郎様の一大事の檄文ぢや。』

百姓共は片唾を呑んで拜殿の前に立ち並び、才次郎の顔ばかり見あげてゐた。

「四海こんきういたし候はゞ天祿ながくたたん。小人に國家をおさめしめば災害並び至ると、昔しの聖人深く天下後世

人の君、人の臣たる者を御誡しめ置かれ候ゆゑ、東照神君にも鰥寡孤獨に於いて最も哀みを加ふべくば、是れ仁政の基と仰せ置かれ候。』

百姓共は其の文句が飲り分つた樣子でもなかつたが、それでも一心に聞いてゐた。

『然るに玆二百四五十年太平の間に、追々上たる人、驕者とておごりを極め、大切の政事に携はり候諸役人ども、賄賂を公けに投受して贈り貰ひ致し、奥向女中の因縁を以て、道德仁義もなき拙き身分にて身を立て、重き役に經のぼり、一人一家を肥し候工夫のみに智術を運らし、其の領分知行所の民百姓共へ過分の用金申付、是まで年貢諸役の甚だしきを苦しむ上へ、右の通り無體の儀を申し渡し、追々入用かさみ候ゆゑ、四海の困窮と相成候に付、人々上を怨みざるものなき樣に成行候へども、江戸表より諸國一同右の風儀に落入り、……(どうぢや皆な分るか。善く聞けよ。)

『天子は足利家已來、別して御隱居御同樣、賞罰の柄を失ひ候に付、下民の怨み何方へ告愬とて告げ訴ふる方なきやう亂れ候に付、人々の怨氣天に通じ、年々地震火災、山も崩れ水も溢るゝより外、色々樣々の天災流行、終に五穀飢饉に相成候……(どうぢや、此の通りであらうがな。善く聞けよ。)

『是れ皆な天より深く御誡しめの有がたき御告候へども、一向上たる人々心もつかず、猶ほ小人奸者の輩、大切の政を執り行ひ、只だ下を惱まし金米を取り立てる手段ばかりに打懸り、實以て小前百姓共の難儀を、吾等如きもの草の蔭より常に察し悲しみ候へども、湯王武王の勢位なく、孔子孟子の道德もなければ、徒らに蟄居いたし候處、此節米價彌々高直に相成、大阪の奉行並びに諸役人ども、萬物一體の仁を忘れ、得手勝手の政道を致し、江戸へ廻米を致し、天子御在所の京都へは廻米の世話も致さざるのみならず、五升一斗の米を買ひに下り候もの共を召捕など致し、……(此事はお前達もよく知つてゐる筈ぢや。江戸へは內々で廻米をする癖に、大阪の米を安くせねばならぬと云うて、京都其外へは米を廻はさず、近在の人達が困りぬいた揚句、僅か五升一斗の米を買ひに大阪に下れば、それを召捕つてひどい目に會はせる。それが今の役人の仕打ちや。それから……)

『實に昔し葛伯といふ大名、其の農人の辨當を持運び候小兒を殺し候も同樣、言語道斷、何れの土地にても人民は德川

家御支配のものに相違なき處、此くの如く隔てをつけ候は全く奉行等の不仁にて、其上勝手我儘の觸書等を急に差出し大阪市中の遊民ばかりを大切に心得候は、前にも申す通り道德仁義を存ぜざる拙き身故にて、甚だ以て厚かましく不屆の至、…（大阪の町人ばかり可愛がつて、米を作る百姓をいぢめる、それで俺達の浮かむ瀬があるか。それから此次が大切な文句ぢやぞ。）

『且つ三都の内、大阪の金持共、年來諸大名へ貸しつけ候利德の金銀並びに扶持米等を莫大に掠め取り、未曾有の有福に暮し、町人の身を以て大名の家老用人格等に取用ゐられ、又は自己の田畑新田等を夥だしく所持、何不足なく暮し、此節の天災天罰を見ながら畏れも致さず、餓死の貧人乞食をも敢て救はず、其身は膏粱の味とて結構の物を食ひ、妾宅等へ入り込み、或は揚屋茶屋へ大名の家來を誘ひ參り、高價の酒を湯水を飲むも同樣に致し、此の難澁の時節に絹服をまとひ候河原者を妓女と共に迎へ、平生同樣に遊樂に耽り候は何等の事か、紂王長夜の酒宴も同じ事、然るにその奉行諸役人、手に握り居り候政を以て右の者共を取り締め、下民を救ひ候儀も出來難く、日々堂嶋相場ばかりをいぢり事いたし、實に祿盜にて、決して天道聖人の御心に叶ひ難く、御赦しなき事に候…（どうぢや皆の者、役人と金持は全く此の通りであらうがな。）

群集はもう三四十人にもなつてゐたが、皆な目を光からして聲の好い才次郎の辯舌に聞きふけつてゐた。

（サア、これからいよ〳〵大鹽樣の一大事のお話しぢや。）『蟄居の我等、最早や堪忍成り難く、湯武の勢、孔孟の德はなけれども、據んどころなく天下の爲と存じ、血族の禍をおかし、此度有志の者と申合せ、下民を惱まし苦しめ候諸役人を先づ誅伐いたし、引續き驕に長じ居り候大阪市中の金持の町人共を誅戮に及び申すべく候間、右の者共穴藏に貯へ置き候金銀錢等、諸藏屋敷に隱し置き候俵米、それぞれ分散配當いたし遣はし候間、攝河泉播の内、田畑所持致さゞる者、たとへ所持致し候とも、父母妻子家内の養ひ方出來難き程の難澁者へは、右金米等取らせ遣はし候間、いつにても大阪市中に騷動起り候と聞傳へ候はば、里數を厭はず一刻も早く大阪へ向け馳參るべく候、面々へ右米金を分け遣はし申すべく候…（どうぢや皆の者、其の米金が欲しうはないか。欲しかつたら大鹽樣の仰しやる通り、イザと云ふ時は里

數を厭はず一刻も早く驅けつける事ぢや。

群集の目の色は愈々益々光つて來た。才次郎の目からも火の子が飛びだしてゐるように見えてゐた。

(それからまた大事な事があるぞ。)『鉅橋鹿産の金粟を下民に與へられ候遺意にて、當時の饑饉難儀を相救ひ遣はし、若し又其内、器量才力等之ある者には、夫々取り立て、無道の者共を征伐いたし候軍役にも遣ひ申すべく候必ず一揆蜂起の企てとは違ひ、追々年貢諸役に至るまで輕く致し、總て中興神武帝御政道の通り寛仁大度の取扱に致し遣はし、年來驕奢淫逸の風俗を一洗相改め、質素に立戻り、四海萬民いづれも天恩を有難く存じ、父母妻子を養はれ、生前の地獄を救ひ、死後の極樂成佛を眼前見せ遣はし、堯舜天照皇太神の時代に復しがたくとも、中興の氣象恢復とて立戻り申すべく候……(皆の者こゝを善く聞いたか。お前達は今ま現在、生地獄に落ちてゐるのぢや。それを大鹽様が救ひあげて極樂成佛を此世で目の前に見せて遣はすと仰しやる。お前達は地獄が好か極樂が好か。極樂が好なら大鹽様の仰せ通りにする事ぢや。)

(それから)『此の書付、村々へ一々知らせたく候へども、數多の事に付、最寄の人家多く候大村の神殿へ張りつけ置き候間、大阪より廻し之ある番人共に知られざる様に心懸け、早々村々へ相觸れ申すべく候、萬一當人とも見付け、大阪四ケ所の奸人共へ注進いたし候様子に候はゞ、遠慮なく面々に申合せ、番人を殘らず打殺し申すべく候、若し大騷動起り候を承りながら疑惑いたし、馳け參じ申さず、又は遲參に及び候はゞ、命持の米金は皆な火中の灰に相成り、天下の寶を取失ひ申すべく候間、跡にて必ず我等を恨み、寶を捨てる無道者と陰言を致さゞる樣いたすべく候、其爲一同觸れ知らせ候、……(よいか、皆な分つたか。)

(それからまだある。)『尤も、是まで地頭村方にある年貢等にかゝわり候諸記錄帳面類は總て引破り燒棄て申すべく候、是れ往々深き慮りある事にて、人民を困窮いたさせ申さゞる積りに候、去ながら此度の一擧、本朝平將門、明智光秀、漢土の劉裕、朱全忠の謀叛に類し候と申す者も、是非之ある道理に候へども、我等一同心中に天下國家を簒奪いたし候存念より起りし事には更に之なく、日月星辰の神鑑にある事にて、詰る處は、湯武、漢の高祖、明の太祖、民を吊ひ、

君を誅し、天討を執り行ひ候誠心のみにて、若し疑はしく覺え候はゞ、我等の所業終り候處を爾等眼を開いて看よ・・・

（檄文の文言は之でお仕舞ぢや。サア皆の者、お前達はどうする氣か。大鹽樣のお味方になるか。それとも今迄どほり大阪の役人と金持とにいぢめぬかれて、馬鹿にされて、それで泣寢入をするか。どちらなりと銘々の勝手にせよ。）

　才次郎は斯う云ひはなして、まだ拜殿に突立つたまゝ群集の顏を睨めまはしてゐた。群集も矢張り緊張した沈默を守つて才次郎の顏ばかり見つめてゐた。

『オ、あの空を見い。火事ぢや！　火事ぢや！』と叫ぶ者があつた。群集の顏も才次郎の顏も一齊に西の空に向いた。西の空はパアット一面に赤くなつてゐた。

『大阪ぢや、大阪ぢや』『天滿の火事ぢや、天滿の火事ぢや』といふ聲々が群集の間に起つた。

『鎭まれ、鎭まれ』と才次郎は拜殿の上から叫んだ。其の日は大阪の火事が燃え移つたように赤くなつて光つてゐた。

『あの火は確かに天滿ぢや、大鹽樣が俺達に早速駈けつけて來いといふ合圖のノロシぢや、サアこれから尊延寺に行つて早鐘をつくのぢや。皆の者は銘々に用意をして、一人でも餘計に味方を誘うて來い。鐵砲があるなら鐵砲を持つて來い。刀があるなら刀を持つて來い。ナタでも鎌でも庖刀でもよい。刄物が無ければ竹槍を持つて來い。同勢が揃つたら般若寺村の方に押しかけて、あそこの味方と一緒になつて、それから守口、森小路と順々に進んで行かう。あれ、あれ火の手は段々強くなる。グズグズしてゐて折角の金と米とを取り損ふな。サア皆の者、早く！　早く！』

　それから程よく尊延寺の早鐘が近隣に鳴り響いた。晝過になると、竹槍を持ち、鎌を持ち、鐵砲を持つた何百人かの百姓が、白鉢卷をした深尾才次郎に引率されて、播州般若寺村の方角へ繰り出した。忠右衛門も彌助も久作も、皆な共中に交つてゐた。大阪の空には火の手が益々盛んに起つてゐた。百姓達の目の中にはモウ大阪市中の町々の道ばたに散らばつてゐる筈の仰山な金や米がアリアリと映つてゐた。

三、町人公方と小竹先生

　同じ日の朝、大阪北船場今橋筋、鴻池善右衛門方の奥の間に、當時儒者として有名な篠崎小竹先生と、これも有名な

書林河内屋の亭主喜兵衞とが對坐してゐた。

此船場は大阪の金穴と云はれた位で、今橋筋には鴻池善右衞門、鴻池庄兵衞、鴻池善五郎などといふ鴻池屋の一黨、それに次いでは天王寺屋五兵衞、平野屋五兵衞などあり、又高麗橋筋には三井呉服店、岩城、升屋などがあり、富商豪家軒を並べ甍を連ね、其の繁昌を競つてゐた處である。中にも鴻池の總本家善右衞門の邸と云へば大したもので、昔し淀屋辰五郎が自分で云つたといふ言葉の通り、『正に町人公方の御所』であつた。

篠崎小竹は本名を長左衞門と云ひ、博學能文、浪華第一の儒者であつたが、此人、儒者に似合はず蓄財が上手で、『儒中の鴻池』といふ綽名さへ付けられてゐた。家作なども大ぶん持つてゐて、其の方の資格では家主長左衞門と呼ばれてゐる。そういふ人物だから、只だ物識りで器用に文章を書き字も上手だと云ふだけのもので、學者らしい見識もなければ誠意もなかつた。それで鴻池家に對しては先づ御出入りの格で、今日は主人善右衞門殿に論語の御講釋を申上げる筈で早朝から此の一室に詰めて、主人の出座を待つてゐるのであつた。

喜兵衞は河内屋一黨の本家で、これも書林として鴻池の御出入りであり、今日も何やらの御買上を願ふ筈で參上してゐたが、丁度篠崎先生がお見えになつてゐると云ふので、待ち合せの間、暫く先生の御機嫌を伺つてゐるのであつた。二人は名香の香りのする殿樣火鉢を隔てて浮世話に耽つてゐたが、いつしか話は大鹽平八郎が先達て藏書一切を賣拂つて施行をした事に及んで來た。

『あれは手前共の一黨でお引受を致したので御坐いまするが、多年お買ひ集めの事で御坐いまするで、それはそれは隨分な本數で御坐いました。何んでも一萬二千三百四十五冊で金高が六百五十四兩ばかりで御座いました。』

『ホホウ、隨分珍書もあつたかの。』

『ヘイ、それはもう誠に結構な物ばかりで、一切經まで揃うて居ました。』

『ホウ一切經まで、いづれ門人共を絞つて買ひ集めた物であらうな。』

『左樣で御坐います。兵庫西出町の柴屋長太夫と申す方なぞは、天保三年に入門なされてから五年の間に書籍代を三百

兩も差出したと聞いて居ります。』

『多分それは、貴樣の書籍を買ひ調へてやる。但し其の書籍は當塾に預つておくと云ふ筆法であらうな。』

『先づ左樣な事ででも御座いませうか。エツヘヘヘ。』

『それで施行は高言どほりに致したかの。』

『ヘイ、それはもう、矢張り私共一黨で御世話を致しましたが、安堂寺町を五丁目の本屋會所で、此月の初から七日の間、一萬人に金一朱づつキツチリと渡し濟みになりました。其の金高が六百廿兩餘になりまするが、大鹽樣のお物では其後もまだ引續いてお恵みになつて居る　申す事で御座います。そして豫め施行札をお配りになつた時、これを其方共に遣はす代り、若し大滿方角に火事でもあつたら必ず馳けつけてくれよと、一々御申渡しになつたとか聞いて居ります』

『ソーレ、あの男はそういふ事を申す。總てが名聞の爲ぢやの。施行は誠に慈善に相違ないが、名聞の爲に施行をするとは怪しからん。それに儒者が藏書を手放すとは、武士が兩刀を棄てるよりなものぢや。料見の程が分らんの。』

『左樣で御座います。どういふお思召しであゝいふ事をなされましたか。尤も、あの通り癇の強い御氣性で居られますから……』

『サア其の癇の强い氣性と申す事ぢやがの。つまりあの男は慢心の狂人ぢやな。』

『折々左樣なお噂も承たまはりますが、然しそれに致しましても……』

『イヤ全く狂人に相違ないよ。あの目の釣りあがつた人相を一目見ても分るぢやないか。』

『でも中々立派な骨柄をしてお居でになります。色はお白いし、脊はお高いし、瘦せぎすでは御座いますが、あの面長の凛としたお顔で、唇をシツカリ結んで睨めつけられますと、手前共はもうピリピリ致します。』

『それはお前達があの男の慢心に威かされてゐるからぢや。心ある者は皆あれを狂人扱ひに致して居る。前東奉行の高井山城守殿があれに膳部を賜はつた時、あれが金がしらと申す魚を頭から尻尾まで骨も殘さず食ひ終つたといふのは有名な話ぢや。』

『それも承たまはつては居りますが、氣象の強い男ぢや、生れ付き違うたものぢやなどと、下々では感心して居る者も御座いまする。』

『馬鹿な事を云ふものでない。一體あれの學問が食はせ物ぢや。陽明學を賣り物にして、良知の一本槍で通して居るが一體あの男は、何んでもかでも自分の心に思ひついた事を皆な良知ぢやと自惚れてゐる。良知どころか一己の我意ぢや。然しそこが即ちあの男の慢心ぢや。慢心がこうじると亂心になるわい。どこやらの金持が茶道に耽つて、段々高價な茶器を買ひ求めて、とう〳〵名物の茶碗一つを抱いて其家を亡ぼしたといふ話があるが、大鹽も先づ其の格ぢやの。』

『成アる程、そういふ處も御座いますかな。手前共には學問の事は勿論分り様も御座いませぬが、大鹽様の行先は何んぢややら危ぶないような氣が致しまする。』

『今に何かで身を亡ぼすまでの事よ。あんな者を學者々々と云はれては我々が迷惑する。なア喜兵衛、そうぢやないか。それに大鹽は先達て當家にも大枚な無心を申込んだと云ふ事ではないか。』

『左様に承たまはつて居ります。何んでも此ごろの米價高直につき、下々の難儀を救ふのぢやと仰せられて、鴻の池一黨、米屋一黨、天王寺屋、加島屋、其外大身代の諸家へ大金の御無心があつたそうで御座います。それで當家あたりでも何んとなく無上不穏な時節柄でもあり、又外ならぬ大鹽様の御相談でもあり、大抵の所までは御承知になるお積りで、然し大金の事で御坐いまするので、一應奉行所に其旨を伺ひました所、誰々何程の金を貸さうと、それは銘々の勝手であるが、然し與力の隱居にそれ程の義理立をする位なら、此後江戸から御用金の御沙汰のあつた節、一言半句も言はせぬぞよと、奉行様からトヾメを刺されたので、いづれも驚いて大鹽様にお斷りを申したとやら承たまはつて居ります。』

『ウム成程、山城守の云はれる所に道理があるわい。假令如何様に米價が高値であらうとも、又下々が如何様に難澁しようとも、與力の隱居が差出がましい事を申すべき筋合でない。當家あたりでも、大鹽などに對して私に大金を貸さうより、快よく公儀の御用金を差出した方が何ほど立派であるか知れぬ。大鹽も一つ慢心の鼻を挫かれたと云ふものぢや

な。』

『それにまだ斯ういふ事も承たまはつて居ります。大鹽様は當家あたりへ右の御相談の以前、大身代の家々から身代百貫目につき一貫目づつの割合で出金いたさせそれで以て下々の難澁を救はうと申す仕様書方を作りになりました、それを當主の格之助様から東奉行所へ御差出しになりました所、山城守様は御採用の景色も見えず、其後再三格之助様から强いての御申立が御坐いましたのに對して、山城守様はとう／＼「平八郎亂心いたしたか」とお叱りが御坐いましたので、格之助様は返す言葉もなく、其まゝ退出して御養父様に其由を語られました所、平八郎様は落涙に及ばれまして、此上は致方ありと仰せられたと申す事で御坐います。』

『喜兵衛、其方はよく色々と委しい事を存じてゐるな。ハハハ。何んぼ大鹽が「此上は致方あり」と申した所で、高が與力の隱居でどういふ致方があるものか。一體大鹽には門人が多い、一味が多いと申すが、東組の與力同心の中で大鹽についてゐる者がどの位あるかの。』

『サア、それは如何様か存じませぬが、東組と西組との間は御存じの通りモウ永いことスレスレで御坐いまして、これに今度、東奉行の跡部山城守が却つて西組方をお近づけになり、殊に西組の内山彥三郎様をきつく御信任の御様子で、遠からず、兩組の組替もあらうかと申す事で御坐います。所が、大鹽様は内山様と大のお仲惡で、そこで東組の與力同心の方々が大抵皆な大鹽様をお賴りにして、西組を憎むといふ有様かと存じて居ります。』

『ウム、さういふ事を自分も聞かんではない。然し喜兵衛、大鹽がどれほど東組に人望があるにした所で、又どれほど名聞の施行などをやつたにした所で、又昔しからの評判がどれほど高いにした所で、又よしんばあれの學問がどれほど深いにした所で、又よしんばあれの氣象がどれほど强いにした所で、高が二百石ばかりの與力の隱居で、「此上は致方あり」などと高言をほざいて見ても、どう致方があるものぢやあるまいテなア。』

『イヤ、全くそれは御尤もで御坐います。ぢやに依つて手前共は、及ばずながら、心から大鹽様のお身の上を御案じ申して居るので御坐いますが：：』

斯ういふ話がはずんでゐる所に、當家の主人善右衞門がいよいよ出坐に成るといふ知らせがあつて、やがて次の廣坐敷との隔ての襖がスウッと兩方に開かれた。

正面には三枚重ねの紫緞子の蒲團の上に、丸で殿様か公方様かのような善右衞門が、脇息に打ちもたれて鷹揚に坐つてゐた。河内屋喜兵衞は忽ち頭を疊の上に擦りつけて平伏した。篠崎小竹先生はまさか喜兵衞ほど頭を擦りつけはしなかつたが、それでも恭々しく一禮に及んで、殆んど膝行するといふ形で御前に罷り出で、さすがに威儀を糺つて備への見臺の前に坐つた。

『小竹先生、今日は御苦勞に存じまする』といふ御鄭重なお聲掛りがあつた。小竹先生は更に又恭々しく一禮に及んだ。町人公方は先程から顏一つ動かしもなされなかつた。

其とき忽ち、『大變で御座ります。大變で御座ります。』と、注進の者がパタパタ駈けこんで來た。

『何事ぢや、騷々しい。』善右衞門殿は鷹揚に問ひかけられた。

『何事どころでは御座りませぬ。先程から天滿方角に火の手が見えまして、何やら筒音らしいものも聞えて居りましたが、早速取調べ聞合せました所、大鹽平八郎様の一味が謀叛を起され、程なくこれに押寄せて參ると申す事で御座りまする。』

サアもう論語の御講釋どころではない。『それは大變』『それは怪しからん』と云ふので、小竹先生も河内屋喜兵衞もあわてふためき這々の體で逃げだしてしまつた。善右衞門殿も同じくあはてふためくお附の人々に促がされて、さすがは矢張り悠々と奥の間深く引き下がられた。

四、大砲火矢砲錄玉の一日

東町奉行跡部山城守は二月十七日の夜、町目付平山助次郎から、大鹽平八郎が謀叛を企てゝゐるといふ密訴を受けた。平山は東組の同心で、矢張り大鹽の門人であり、一事の連判にも加はつてゐたが、段々恐ろしくなつて反り忠を試みたわけである。

平山の密訴に依れば、來る十九日、新任の西町奉行堀伊賀守が同役山城守と共に天滿を巡見し、申の刻（午後四時）頃與力朝岡助之丞の邸へ立寄り、そこで休息する豫定になつてゐたのだが、其の朝岡の邸は丁度大鹽の邸の直ぐ向側にあるので、大鹽は其の機を外さず朝岡邸に押し寄せ、兩町奉行を大砲で討ち止め、續いて市中に火を放ち、富豪等の倉庫を開いて窮民に施す計畫だと云ふのであつた。

然るに山城守はまだ半信半疑でもあり、容易に手を下して却つてそれが爲に爆發の口實を與へてもならぬと云ふので兎にかく一方には平山を急に江戸に遣はして此の由を幕府に訴へしめ、一方には十九日の巡見を延引した。

所が、十九日の早朝、吉見九郎右衛門の悴英太郎と、河合郷左衛門の悴八十次郎とが、九郎右衛門自筆の訴狀と、叛行摺の檄文とを携へて、堀伊賀守の役宅に駈け込んで來た。吉見も河合も東組の同心で、山城守に對しては不平があり兼て大鹽に與して悴共を入門させてゐたのだが、愈いよ／＼擧兵となつて見ると、これも平山同樣、恐ろしくなつて來たので、窃かに悴共をして裏切をさせたのであつた。但し東奉行所には大鹽一味の與力、瀬田濟之助、小泉淵次郎などが當番をして居る筈なので、それで支配違ひの西奉行所に訴へ出たのであつた。

伊賀守は此の訴へに接して、平八郎の謀叛、最早や疑ふ餘地がないと云ふので、早速その旨を山城守に通知し、西組の與力同心を招集して討取の準備に掛つた。

山城守は其の報告に接して、直ちに宿番宿直の瀬田、小泉兩名を御用談の間へ呼寄せた。所が小泉はそれと感づいて逃げ出さうとする所を一刀に斬り伏せられ、瀬田は其の隙を見て奉行所の塀を乘り越え、はだしのまゝ天滿橋を一目散に大鹽邸へと逃げ歸つた。

それから東奉行所では、跡は山城守が一策を案出し、平八郎の叔父に當る東組與力大西與五郎に對し、其方平八郎へ參り彼に切腹を申付け、不承知とあらば刺違へて死ねと申渡したが、大西はいつまで立つても戻つて來なかつた。それは其筈、大西はグズ／＼する中、既に大鹽邸に火が起つたので、親子で西の宮まで逃亡したが、更に後悔して大阪に引返す中、見咎められては大變だと、刀を海の中に投げこんだといふ始末であつた。

扨、東奉行所においては、西奉行堀伊賀守もやつて來る、兩奉行共外、甲冑着用の姿は嚴めしかつたが、天滿には既に火の手が盛んに擧つて、大鹽の邸も朝岡の邸も燒けたらしく、大砲の響や炮碌玉の音が頻りと聞えて來るのに、こちらは何れも大狼狽の有樣で、大鹽討取の手順など少しも立たなかつた。何しろ兩奉行配下の與力同心では手不足だと云ふので、鐵砲奉行の同心四十名の助力を求め、更に定番遠藤但馬守へ加勢を申入れ、但馬守の命に依つて、玉造、京橋の兩番から數十名宛の援兵がやつて來た。大將山城守は具足を着用して、冑を高紐に掛け、床几に依つて控へてゐた所はよかつたが、玉造の與力坂本鐵之助等が山筒を持つてやつて來た時、是非々々大筒御持參を願ひたいと云ひだし、此の市街戰に大筒は無用だと專門家が抗議をしても、何が何んでも大筒が無くては心細いと見え、是非々々大筒をと催促するので、坂本等はよんどころなく態々無用の百目筒を取りにやつたと云ふウロタへ方であつた。

然らば大阪城中は如何にと云ふに、城代土井大炊頭が兩町奉行等に暴徒の鎭定を命じ、自ら兩大番頭を嚮導として本丸の巡視をしたと云へば、相當嚴重らしくも聞えるが、大番組の面々が揃いで來た鎧櫃の中から、鍋釜類が出て來たといふ滑稽な次第であつた。

其の間に只一つ山城守の取つた戰略は天神橋の南の端の橋板を取りはづした事であつた。其の戰略の巧拙は別問題だが、兎にかく賊はそれが爲に、天滿から天神橋を渡つて直ちに東町奉行所へ攻め寄せる事が出來なかつた。從つて賊は止むなく大川傳ひに西に下り、浪花橋を渡りに掛つた。山城守は同じく此橋をも切り落す作戰で、既に人足共は橋板の取崩しに掛つてゐたが、大鹽勢の爲に只だ一喝で追拂はれてしまつた。

扨、大鹽勢の出で立ちを見てあれば、大將平八郎及び副將格之助は着込野袴にて白木綿の鉢卷を締め、瀬田濟之助、大井辰一郎、渡邊良左衛門、近藤梶五郎、庄司義左衛門、若黨曾我岩藏、守口町孝右衛門、般若寺村忠兵衛、源左衛門傳七、其他の者共は何れも着込を差し、刀を帶び、一同、槍、長刀、鐵砲の類を携へ、五七の桐の紋所、下に二ツ引の印ある旗一旒、天照皇太神宮湯武兩聖王、並びに東照大權現と認めたる旗二旒、救民と大書したり四半一本を押し立て、大筒四挺を車臺に載せ、後陣に在つては數多の人夫に長持葛籠の類を荷はせ、往く往く市民の屈强なる者を味方に附け

總勢數百人、殺氣天を貫くといふ勢であつた。

それから彼等は浪花橋を渡り、左に折れて二手に分れ、今橋筋と高麗橋筋とを東に向ひ、兼て目ざした此の富豪町に片端から炮碌玉を投げ込み、或は火具鐵砲を打ち込み、散々に燒き立てた。家財も道具も米も金も千兩箱も皆な一緒くたになつてそこら一パイにころがつてゐた。附き從うた何百人の群集は寶の山に入つた思ひで、我先きにと掠奪を恣いまゝにした。鴻池庄右衛門方では四萬兩も取られたといふ話が殘つてゐる。千兩箱は一個で四貫目の重さがあると云ふから、それを擔いで逃げた仕合せ者も、隨分骨が折れた事だらう。時刻は其時もう晝過であつた。

然るに東奉行所では、賊にあの通りの狼藉を働かせて、ジツト見てゐるのでは餘り腑甲斐ないと云ふので、皆々山城守に出馬を迫つたが、山城守は臆し切つて、中々出馬しようとは云はない。そこで或者が機轉をきかせて、『最早や川崎の東照宮が危く見えます。若しあの御社の燒失を御見物になつては、憚りながら御家にも係はりませう』と言上したので、山城守もギヨツトした樣子で漸く氣を取直し、然らば出馬致さうと云ふ事になつた。

所が、御奉行の御出馬には、御馬印を眞先に押立てねばならぬと云ふ事になつたが、誰も眞先に御馬印を持たうと云ふ者がない。仕方がないので、折ふし詰め合せてゐた穢多共に大小を帶びさせ、それに纏ひを持たせる事にした。穢多共は何しろ大小を差させられた嬉しさに、怖い事も打忘れて眞先に進んで行つた。

之より先、堀伊賀守も城代大炊頭殿から出馬の命令があつたと云ふので、京橋口の與力同心數十人を從へて出馬したが、島町筋を西に御祓筋の邊まで來ると、丁度大鹽勢が高麗橋を渡りかけてゐた所で、白い旗がチラリホラリと見えてゐた。御祓筋から高麗橋までは四町ばかりもあるので、小筒の玉などは迚も屆く筈はないのだが、伊賀守は何と思つたか、『ソレ打てツ！』と命令した。一同は滅茶々々に發砲した。命令した者もした者だが、打つた者だと、今に笑ひ草に殘つてゐる。後の調べに依ると、大鹽勢では其時丸で打たれた事を知らなかつたらしい。いよいよ以て阿呆らしくなる。然しそれは先づ好いとして、其のケタたましい筒音で伊賀守の馬があばれだし、折角の大將が見事に落馬した。それもまだ好かつたが、一同の者共は、ソレ大將が打たれたと云ふので、皆バラバラ逃げ散つてしまつた。取殘された伊賀守

は致し方なく、獨りで起きあがつて鹽を捨て、御祓町の御所にたどりついて休息したりといふ話。

山城守は其あとへ繰出し、内平野町で大鹽勢と少しばかり砲火を交へ、堺筋に至つて稍や烈しい砲戰を爲し、そこで坂東鐵之助が敵の大砲方浪人櫻田源左衛門を打ち止め、其の首を切取つて槍の先に貫き、大ぶん景氣よく進んで行つたが、四つ辻まで行つて見ると、其時にはモウ大鹽勢は潰亂して、名も知れぬ者の屍體が一つ轉がつて居り、外は大筒、小筒、槍、太鼓、旗の類が打棄てゝあつた。

先づこんな事で大鹽騷動は鎭靜した。然し兵火は八方に廣がり、翌日の夜まで燒けつづけた。先づ大阪市中の四分の一は燒けてしまつた。そして大手前の野原に燒け出されの男女老若が群集して、盥い中で子を產んでゐる產婦もあり、莚の上に轉がつて泣いてゐる疱瘡患者もあり、其の苦悶呻吟の聲が丸で鬨の聲のように遠方まで聞えてゐた。

サアそれから罹災者の收容町が出來る、お救ひ米が出る、廉賣米が出る、出しおくれの富豪の義捐がある、米價が更に上る、疫病が流行する、隨分の混雜であつた。然し其中、暴徒の多くもそれ〴〵逮捕となり、或は自殺し、久しく行方が知れずに不安の種となつてゐた大鹽父子も、三月廿七日、油掛町手拭地仕入職美吉屋吉五郎方に潜伏してゐるのを發見され、そこで自ら焚死して落着した。そして大鹽父子其他十五名の者は、鹽詰の死骸三鄕引廻しの上ハリツケとなり、其他關係者もそれ〴〵獄門、死罪、遠島、追放等に處せられた。

之に對しお役人側に於いては、先づ城代土井大炊頭が『萬端の差圖宜しきを得たり』といふので美濃兼定の御刀を賜はり、定番遠藤但馬守が『平生の心掛宜敷儀なり』とあつて御鞍鐙を賜はり、其外、坂本鐵之助が『拔群の功』に依つて御目見に昇進し、別に銀百枚を賜はりたるを初とし、それ〴〵の御賞與があつた。跡部山城守と堀伊賀守とは、さすがに何等の御褒美にも預らなかつた。ついでに平山、吉見兩人は反り忠の功 依つて御譜代席小普請入となり英太郎八十次郎は各銀五十枚を頂戴した。

音に名高い大鹽騷動は斯くの通り、只つた一日間の騷ぎに過ぎなかつた。そして天下は再び太平に歸した。

五、易者にも分らん事

平八郎父子其他の鹽詰屍體が飛田でハリツケになつた九月十八日の夜が更けてから新町橋の西詰にある、通稱『白髯』といふ江戸兒の易者の家で、近處の若い者が二三人寄つてヒソ〳〵聲で話してゐた。

『大鹽樣もとう〳〵ハリツケになつたと云ふやないか。』

『ハリツケになつたオシヲキ人を大鹽樣なんと云ふ奴があるかい。』

『そやかて誰でも大鹽樣、大鹽樣と云うてのやないか。』

『コレお前達ヤ、此あいだから御觸れのあつたのを知らねえか。『世上の取沙汰、善惡に依らず申間敷候』と云ふんだぜ』

白髯は皮肉な笑ひ顏をして若い者等を制した。

『そんなこと云うたら何も話は出きやせんがな。』

『出けんもんなら、せんと措いたらえゝがな。』

『そやかて、人間が顏を見合せて默つてばかり居られへんがな。』

『馬鹿だのう、お前達や。あのお觸は善惡に依らず大鹽樣の噂をするなと云ふ事だよ。まさかそうも云はれねえから、世上の取沙汰と、斯う來たんだ。』

『白髯はん、わたいソウ云はれると猶のこと大鹽樣の事が話しとなる。』

『全くそう云ふもんだ。話したかつたら話すさ。まさかハリツケにするとも云やしめい。』

『それぢや先生、大鹽樣は何んであんな事しやはつたんやろなア。』

『ナゼと云つて、人間には癎癪といふ者があるわな。』

『それぢや、大鹽樣は癎癪を起しやはつたんやな。』

『そいぢや、あの砲碌玉さうなア、癎癪玉の事やな。』

『マアそんなものよ。だけど何んだぜ、癎癪にも大きいのと小いさいのとがあるからの。』

『大鹽樣やよつて大癎癪や。』

『そうよ。人間疳癪を起す程なら何んで大きな疳癪を起す事だ。』

『白髯はん、そやかて大鹽様はあんな事をしやはつて、ハリツケになつたりして、自分の損やないか。』

『短氣は損氣と云ふからのう。だけど何んだぜ、あれが貧乏人共の爲にや行々得になるかも知れねえ。』

『わたいなア先生、斯ういふこと聞きました。大鹽様は江戸の徳川様をつぶして天下を取る積りやつたんやと。』

『ウム、世間の人はそんな事を云ふがの、俺はそうは思はねえ。そりやア、お奉行様に對して腹いせをする氣もあつたらうさ。あわよくば大阪城を乘取る位の胸算もあつたらうさ。だけど、若しか大鹽様が徳川様をつぶさうと云ふんなら薩州なり長州なり西國の大名達と示し合せて、何とか外に遣り方があつた筈だアね。現にお役人衆の方ぢや、大鹽様の蔭に薩州が隱れてるだらうなんて、大ぶん氣にしてゐたと云ふ事だ。だけど大鹽様にや、そんなケもなかつた。あれで大鹽様は只、貧乏人の溜飲にしたんや貧乏人の疳癪を自分の疳癪にしたんさ。大阪の市中は金持様の御支配だからの。』

『それぢや大坂は徳川様の御支配ぢやないのんか。』

『徳川様の御支配にや相違ねえが、金持様の御支配の方が力が强いや。よしんば徳川様の天下が潰れたつて、鴻池様の天下でも新らしく出來ヽ來りやア、貧乏人のウダツのあがる時はありやしねえ。』

『先生、易の本にそないな事が書いおまんのか。』

『易の本にや書いてないがの、俺の目の玉の中にチヤアント書いてある。大鹽様の目の玉の中にも矢張りそれが書いてあつたんよ。』

『それぢや白髯さんも、いつか又謀叛を起しやはるのんか。』

『馬鹿を云ふな、俺がような者に謀叛のムの字も起せるかい。だけど、越後の柏崎にや先達て一揆があつた。攝州の能勢にもあつた。皆んな大鹽様の跡繼だ。』

『それぢや先生、これからまだ疳癪玉を投げる人が仰山に出て來るのやろか。』

『サア、それは俺にも分らねえ。』

『それちや德川樣の天下はいつまで續くのやろ。』

『それも俺にも分らねえ。』

『それちや鴻池樣の天下はいつ出來るのやろ。』

『それも分らねえ。』

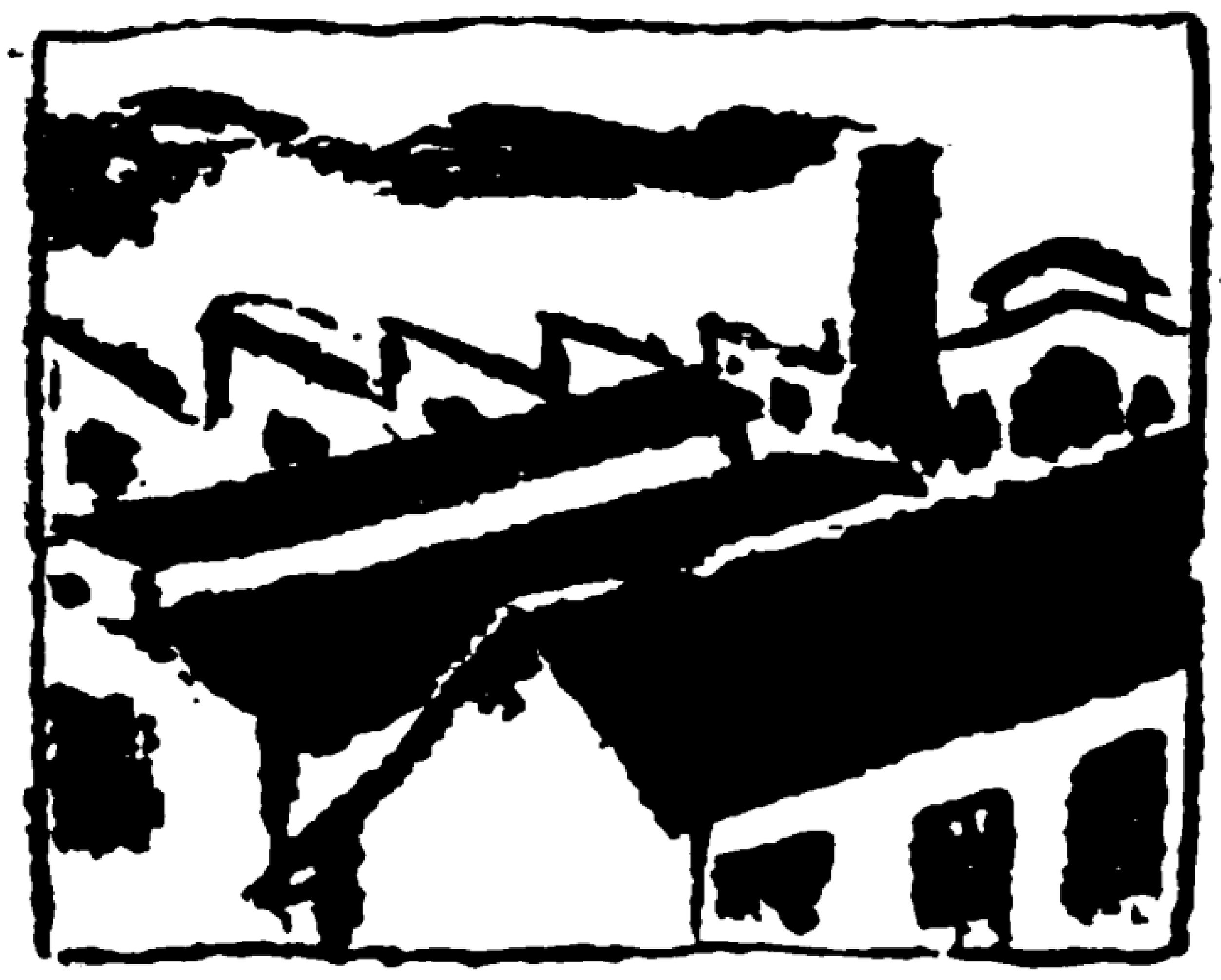
『それちや大鹽樣の跡繼の天下はいつ出來るのやろ。』

『それも分らねえ。』

『易者にも分らん事があるのかなア。』

『コラ、お前達ャ忘れたか、世上の取沙汰善惡に依らず申す間敷事。』

白髯の先生は又皮肉な笑ひ顏で若い者等を睨みつけた。若い者等は一度にドット吹きだして笑つた。（完）



獄を出でゝ（序）

森戸辰男

上海から送つて下すつた『獄中記』（長篇）が、遂々〆切に間に合はなかつたので、氏の出獄から故國を去るに至る迄の消息を抄載して、『獄中記』の『序』としました。（記者）

あいさつ

（上略）變つた處で有意義な新年を迎へて、今日出て參りました。（中略）おまけに昨日よりの降雪で、ものみなは純白の裝をして私を迎へてくれました。

顧みますれば、昨年の今日は第一囘の裁判の日から五日目でした、事件發生以來一年餘になります。其の間にあなたから戴いたお慰めとお勵ましとを私は衷心から有難く思つてゐます、三ケ月の牢獄生活を通じて先づ心身とも健康であり得たのは、神の恩寵と共に、あなたの御厚情に負ふ所が多いことと深く感謝致します。

監獄生活は私にとつて決して樂なものではありませんでした。が、一種の修道生活と觀念して入りましたので、それは豫想したよりは樂であつたと云はれるでしよう。とりわけ御心配を戴いたのは身體の健康でしたが、お蔭樣で、私は在獄中唯の一回も風をひかず一日も病臥せずにすみました、尤も左手の凍傷で少々苛められ、消化系統は始終不順の狀態にありましたが、入監の時の體重が十五貫、出獄の時が十二貫八百目、三ケ月の減量が二貫二百目で、一日の平均減量が約二十五匁です、お之は異常な減量ではなく私のやうな種類の罪囚に普通の減量です。何分、一食平均二錢五厘で其他の食事がそれに應じた給與なのですから、これだけの健康を維持して出て來られたことの方が、私にはむしろ不思議に思はれる位です。

靈的生活の方面では、彼處の三ケ月は比較的多くの瞑想と祈禱との機會を私に與へてくれました、孤獨の中にあつてまた物的窮乏の中にあつて歡喜と平安とに溢れてゐた聖パウロや聖フランシスや聖ベルナルドやジョンバンヤンなどの言葉と行ひは、彼等に似通つた境遇に置かれて之を想起するとき、此の鈍重な私をも少からずインスパイヤするのを覺えました。ともかく、神に對してはヨリ敬虔に、人に對してはヨリ友愛に、眞理に對してはヨリ忠信でありたいとの願望を刺戟されて出て來ることのできましたのを、私は在監中の最大の賜物だと思つてゐます。

知的方面では西田桑木諸先生の著書を介してカント及新カント派の學說の一斑を伺ひ得ました。それは私にとつて大變に興味あるものでしたが、唯斯の方面に素養を缺いだ私には、理解したと云ふよりは、解らぬことが殖えたと言ふ方がむしろ適當であるのを遺憾とします。專門の方で『資本論』の大半とエッブの『勞働組合史』と『產業民主制』とを通讀し得たのが主な獲物でした。牢獄生活を通して私の單的確信は動搖することなく、むしろ確立されつゝあることを私は經驗しました。

斯樣な狀態に於て私は放免されました。そしていま私は淸新な世界と愛する友とに包まれた自由の今日を歡び得るだけでなく一年の過去の全體を牢獄の一日一日をすらも、感謝を以て顧ることができます。私は確信してゐます、私の喪ふた凡ては私にとつては不要なものか有害なものであり、私の獲た凡ては私にとつてなくてならぬ最善のものであることを。かくて私は事件以來殊に牢獄生活を通して維持し來つたもの、また新たに獲得したものを、此後の生活に於て益々維持發展させて行き度いと思つてゐます。心弱く力足らぬ私のことですからどれだけに成功できるかは未知數ですが。從つて私はあなたからの相變らずの激勵と御誘導とを願はずにはゐられません。

尙、お心にかけて下さつた留守宅でも、老母も姉も妻も子供も至極達者で私を迎へてくれました。其中でも進步の最も著しいので私を驚かしたのは、三度目のお正月をした小供の『望』でした。私の家庭の『望』と同じやうに、社會の見えぬ望みも、此の三ケ月の間に、同じ進展をなしたであらうことを、私は信じたく思ひます。

實はお目にかかつて御禮申上げたいのですが、當分田舍に退いて健康の回復をはかり度いと思ひますので、不本意ながら書中を以て御挨拶申上げます。　敬具

大正十年二月四日

森戸辰男

なほ私は今後專ら大原社會問題研究所（東京支部）に於て社會問題の研究に從事する積りです、從來通りの御懇情と御敎導とを願ひます。

謹啓

出獄後ゆつくりお伺ひしたいと思つてゐたのですが、急に大原社會問題研究所から歐米に參ることにきまり、あはただしく出發することになりました。期間は二年で先づドイツに行き、それからイギリス、フランスなどへ廻るつもりです。

無精者のことですから、一層の御無沙汰を致すかも知れませんが、どうか惡しからず。留守宅は從前通り東京市外東大久保二三六です。何かにつけお世話になるかも知れません。よろしくお願ひ致します。

お別れに臨み、遙かに御健康を祝します。

神戸港クライスト號内

三月一日　森戸辰男

洋行の途上より

いろ〳〵御高配を被りましたが、無事に神戸を解纜しました。

そして此港に二日間碇泊の後、愈々今日門司を、そして故國を去ります。

謹んで御健康を祈ります。

三月四日

門司港クライスト號にて

森戸辰男

懸賞長編小說募集

大阪朝日新聞の現代文藝に對する要求

隠れたる天才を發見すため＝勃興せる我が文壇に更に力強い生命を與へて見醒しい新生面を拓くため＝本社は左の賞を懸けて長編小說を募集します

◇一等賞金三千圓◇二等賞金二千圓

創作　に限る、飜案、飜譯はこれを採らず。時代は現代、新聞小說として連載に適するもの

回數　百二十回以上　一回十五字詰百二十行內外　全文に振假名を附すること

審査　は大阪朝日新聞社に於て之を行ふ

締切　來る七月三十一日限り

一、應募者の氏名は原稿に記入せず、原稿には必ず變名（平生慣用の雅號をも用ひぬこと）を用ひ別に住所氏名を記して嚴封し原稿と同時に本社學藝部宛送られたし。一、全編の（梗概百行內外）を別に附せられたし。一、入選せざる分の原稿は審査發表後返却す。一、應募に關する質問に對しては應答致さずと御承知ありたし。一、入選小說の著作權は本社の所有とす。

河北新報

組織變更

◎信用ある大新聞◎

大正八年秋組織改造後の本紙は政治、經濟、外交並外國電報に異彩を發揮し内外の報道機敏正確斯界の權威なり

讀賣新聞

明治七年創刊

新聞代價	一ヶ月（前金）	金九拾錢		
	三ヶ月（前金）	金貳円六拾錢		
	郵稅一ヶ月	金拾錢		
廣告料	五號活字十五字詰	一行	金壹円	
	[illegible]		金貳円	
振替貯金口座東京大一二番				
電話交換	（編輯用）	七〇一番	七二六番	八〇番
	（營業用）	三九五番	七〇二番	七〇三番
編輯兼發行人	[illegible]			

發行所

讀賣新聞社

東京市京橋區銀座一丁目一番地

面目一新

文藝欄、婦人欄の特設を誇とし紙面全體に創業の活氣と趣味横溢し記事に品位あり事務的にも家庭にも歡ばる

◎年中無休刊八頁◎

賀川豊彦著

死線を越えて

四拾版發賣

◇四六版ポイント組五百五拾頁◇定價金參圓◇

◇バイブル式裝幀天金函入美本◇送料拾八錢◇

二大新聞の批評 ◇

貧民窟の生活は食ふや食はずの生活である、人間を本能化した生活である、之を見て、主人公は矢張り人間に失望せぬのである、毎日貧民窟の小兒を相手に嬉々として遊んでゐる。

此現實の社會を見ては、他の凡ての社會が虛僞と虛飾の如く見える、著者は、鐵拳とピストルと病氣に日夜脅かされてゐる。之は眞劍勝負である、之に比ぶれば、他の小說家が美しき燈と、美しき衣服を探すを以て、人生探檢と稱するのを聞くと、全く馬鹿氣た感じがする。

著者は日本の社會に存在する缺陷と病氣とを吾々に見せた。此書が出でた以上、政治家も國民も、貧民窟の問題に知らぬ顏をして居る譯に行かぬ。余は人間の屑に敬意を表する主人公に敬意を表すると共に著者が貧民窟の問題を天下に提供せられたに對して、世人と共に感謝せざるを得ぬ。（主筆馬場氏執筆）

大阪朝日新聞評 雜誌『改造』に連載中から深い興味を覺えさせられた小說である。社會改造主義者として、人知れぬ苦慘を嘗めたらしい、此著者の過去のリミニッセンスを親しく會見して聞くやうな感がする。その幾分に自敍傳的色彩のあることも否まれない。神戸を舞臺として、そこに幾多の牢獄のやうな下層社會に生活してゐる人々の生活を寫した後半の叙述は、此人ならでは他に描き得まい。

社　振替口座東京八四〇二番 ◇



暗夜行路

志賀直哉

十五

謙作の寓居は三軒の小さい棟割長屋の一番奥にあつた。隣りは人のいゝ老夫婦で其婆さんに食事、洗濯その他の世話を頼んだ。其先きに松川といふ四十ばかりのノラクラ者がゐて、自分の細君を町の宿屋へ仲居に出して、それから毎日少しづつの小使錢を貰つて酒を飲んでゐると云ふ男だつた。

景色はいゝ所だつた。寢ころんでゐて色々な物が見えた。前の島に造船所がある。其所で朝からカーン〳〵と鐵槌を響かさせて居る。同じ島の左手の山の中腹に石切り場があつて、松林の中で石切りが絶えず歌を唄ひながら石を切り出してゐる。其聲は市の遙か高い所を通つて直接彼のゐる所に聽こえて來た。

夕方、延び〳〵した心持で、狭い濡椽へ腰かけて居ると、下の方の商家の屋根の物干しで、沈みかけた太陽の方を向いて子供が棍棒を振つて居るのが小さく見える。其上を白い鳩が五六羽忙しさうに飛び廻はつて居る。そして陽を受けた羽根が

狭色にキラ／＼と光る。

六時になると上の千光寺で時の鐘をつく。ごーんとなると直ぐゴーンと反響が一つ、又一つ、又一つ、それが遠くから歸つて來る。其頃から、晝間は向ひ島の山と山との間に一寸と頭を見せてゐる百貫島の燈臺が光り出す。それはピカりと光つて又消える。造船所の銅を熔かしたやうな火が水に映り出す。

十時になると多度津通ひの連絡船が汽笛をならしながら歸つて來る。舳の赤と緑の灯り、甲板の黄色く見える電燈、それらを美しい繩でも振るやうに水に映しながら進んで來る。もう市からは何の騒がしい音も聞こえなくなつて船頭達のする高話の聲が手に取るやうに彼の所まで聞こえて來る。

彼の家は表が六疊、裏が三疊、それに土間の臺所、それだけの家だつた。疊や障子は新しくしたが、壁は傷だらけだつた。彼は町から美しい更紗の布れを買つて來て、そのきたない所を隠した。それで隠しきれない小さい傷は造花の材料にする榕子の木の葉をピンで留めて隠した。兎も角、家は安普請で、瓦斯ストーヴと瓦斯のカンテキとを一緒に焚けば狭いだけに八十度までは温める事が出來たが、それを消すと直ぐ冷えて了ふ。寒い風の吹く夜などには二枚續きの毛布を二枚障子の内側につるして、戸外からの寒さを防いだ。それでも雨戸の隙から吹き込む風で其毛布が始終動いた。疊は表は新しかつたが、臺が波打つてゐるので、うつかり坐りを見ずに平つたい薤の瓶を置くと、倒した。其上疊と疊の間がすいてゐて、其所から風を吹き上げるので彼は讀みかけの雜誌を讀んだ所から、千切り／＼、それを卷いて火箸で其隙へ押し込んだ。

かう云ふ東京とは全く異つた生活が彼を樂ませた。彼は久し振りに落ちついた氣分になつて、計劃の長い仕事に取りかゝつたのである。それで彼は自分の幼時から現在までの自傳的なものを書かうとした。彼は父が海外留學中に生れた

兒だつた。そして父が何時歸つて來たか、それは覺えないが、父の留守中、祖母や母や兄や姉などと住んでゐた茗荷谷の小さい古ぼけた家を憶ひ起こす事が出來た。みし／＼いふ狹い梯子段を登ると、屋根裏のやうな天井の低い部屋があつて、其所で祖母がよく機を織つて居た事、夜は又茶の間の薄暗い釣洋燈の下で、祖母や母が、眞綿から絲を引き出し／＼してゐた事、その絲を紙を張つて澁をひいた味噌漉に溜めてある、それをいぢつて叱られた事、ぶん／＼云ふ絲車の響、それらが前の世の事のやうに淡く憶ひ浮んで來た。

或日、狐が振りかへり／＼悠々と生垣の間から出て行つた事、（それが狐といふ事は椽側で一緒に見てゐた祖母から教へられたのだが、）又或時、柿の木の高い枝にゐる油蟬を見て、非常に大きな蟬だと思つた事、それから多分同じ柿の木の下で近所の同年位の子供と「坊や」といふのは自分の事だと互に主張し合つた事などを憶ひ出した。

本郷龍岡町の家へ引移つたのは父が歸朝して間もなくの事だつた。或時女中に負ぶさつて父の食パンを買ひに上野の山下の方へ行つた歸途、池の端で龜の子を見てゐると、通りすがりの奇麗な奥さんが、彼が女中の背中で持たされてゐた食パンを包みのまゝツイと引き拔いて持つて行つて了つた事、それから舊藩主が死んだ時に、おかくれになつたといふのを「隱れん坊」と解つて、棺の後ろへ立て廻はした金屛風の裏を切りに探し廻はつた事、其葬式が傳通院であつた時に撞木で叩く小さい釣鐘の響に震るへ上つた事、それを叩いてゐる坊主を無慈悲な奴だと腹から憎らしく思つた事等、かういふ斷片的な記憶が、丁度沼水の底から沼氣のぶかり／＼と浮かんで來るやうに浮かんで來た。そしてそれらは何れも毒にも藥にもならないやうなものが多かつたが、只一つ、未だ茗荷谷に居た頃に、母と一緒に寢て居て、母のよく寢入つたのを幸ひ、床の中に深くもぐつて行つたといふ記憶があつた。間もなく彼は眠つて居ると思つた母から烈しく手をつねられた。そして、邪見に枕まで引き上げられた。然し母はそれなり全く眠つた人のやうに眼も開かず、口もき

かなかつた。彼は自分のした事を恥じ、自分の仕た事の意味が大人と變らずに解かつた。此の憶ひ出は實に不思議な氣をさした。恥ずべき記憶でもあつたが、不思議な氣のする記憶だつた。何が彼に左う云ふ事をさせたか。好奇心か、衝動か、好奇心なら何故それ程に恥じたか、衝動とすれば誰れにも既に其頃からそれが現はれるものか、彼には見當がつかなかつた。恥じた所に何かしら左うばかりは云ひきれない所もあつたが、三つか四つの子供に對し、それを道徳的に批判する氣はしなかつた。彼は前の人の左う云ふ惰性、そんな氣もした。こんな事でも因果が子に報ひる、と思ふと、彼は一寸悲慘な氣がした。

彼は左ういふ幼時の記憶から段々に書いて行つたのである。主に夜中から明け方までを仕事の時間にした。

一ト月ばかりは先づ總てが順調に行つた。生活も、仕事も、健康も。然し一ト月も終りの頃からは少しづつそれが亂れて來た。

彼は東京を出てから故意にお榮には餘り便りをしなかつた。それは一時彼の頭にこびり着いた妄想を振落したい氣持からもあつたが、一つは孤獨から弱々しくなつた自分に自分で抵抗するやうな心持もあつた。が、信行の方には割りに便りをした。然しそれにも彼は「これは東京ならば友達と雜談してゐる時間にその心持で書くのです」といふやうな云譯けを書いた。お榮からはよく長い手紙が來た。お榮は信行への手紙を大概讀んでゐるらしかつた。

仕事がうまく行かなくなるに從つて、生活の單調さが彼を苦しめ始めた。彼の一日々々は總て同じだつた。昨日雨で今日晴れたといふ他は一日々々が少しも變らなかつた。彼は原稿紙の一角毎に日を書き、それを壁へはつて置いて、一日々々と消して行つた。仕事が出來る間はまだよかつたが、氣持からも、健康からもそれが疲れて來ると、字義通りの消日になつた。誰れからも一人になる事が目的であつたにしろ、今は其誰れもゐない孤獨さに彼は堪えられなくなつ

た。下の方を烈しい響をたてて急行の上り列車が通る。烟りだけが見える。そして其響が聽こえなくなると暫くして、遠く弓なりに百足のやうな汽車が見え出す。黒い烟を吐きながら一生懸命に走つてゐる。が、それが、如何にものろ臭く見えた。あれで明日の朝は新橋へ着いて居るのだと思ふと、一寸不思議なやうな、羨ましいやうな氣がした。無爲な日を送つてゐる彼自身の明朝までは實際直ぐだつた。間もなく汽車は先の出鼻を廻はつて姿を隱す。

然し彼は東京へ歸らうとは却々思はなかつた。歸れば又來る事はなささうに思へた。今歸れば餘りに元の杢阿彌に思へた。出來榮は兎も角、兎も角も此仕事を仕遂げねばと彼は決心した。彼はよく無意味に郵便局や、停車場へ入つてはぶら／＼して居た。それは東京に一番近かい場所といふ氣持があつたからである。彼が來た時に二三寸しかなかつた髪が今は六七寸に延びてゐた。

彼は自分の頬の筋肉が變に緩んで了つたやうな氣がした。そして、今は眼もはつきりとは開いてゐられなくなつた。彼は何十日といふ間、朝から晩まで、絶えず陰氣臭い同じ顔をしてゐた事に心付いた。笑ふ事も、怒る事もない。第一胸一つぱいの呼吸すらしなかつた。

或る北風の強い夕方だつた。彼は何所か人のゐない所で、思ひ切りの聲を出して見ようと思つた。そして市を少し出はづれた濱へ出掛けて行つた。其所には瓦燒きのかまどが三つ程あつて、それが烈しい北風を受け、松の油がジり／＼と音を立てながら燃えてゐた。強い光りが夕闇の中で眼を射た。彼は暫くぼんやりそれを眺めてゐたが、暫くして海邊の石垣の方へ行つて、海へ向かつてその上へ立つた。然し彼には唄ふべき歌はなかつた。彼は無意味に大きい聲を出して見た。が、それが如何にも力ない悲し氣な聲になつて居た。寒い北風が背中へ烈しく吹きつける。瓦燒の黒い烟が風に押しつけられて、荒れた燻銀の海の上を、千切れ／＼になつて飛んで行く。彼は我れながら腹立たしい程意久地ない

氣持になつて歸つて來た。

「旦那さん、彼は儂が出しますけえ、どうぞ、何所ぞへ連れて行つておくんなはれ」こんな上手な事をいふ百姓娘のプロステイチユートがあつた。丸々と肥つた可愛い娘で、娘は愛されてゐるといふ自信から、よく僞りの悲しげな顔をして、一圓、二圓、の金を彼から卷き上げた。

或る長閑な日の午後だつた。彼は向ひ島の鹽田を見に、渡しを渡つて行つた歸り、島の向ふ岸まで出て、日頃頭だけしか見て居ない百貫島を全體見るつもりで、その方へぶら／＼と歩いて行つた。或る丘と丘との間のだら／＼坂へかゝると彼は上から下りて來る男と女の二人連れを見た。その一人がプロステイチユートらしかつた。彼は何氣なく竹藪について細い路へ曲がつた。そして十間程行つた所で立止まり、振りかへつて、往來の方を見てゐた。其娘だつた。長い袂の派手な羽織を着て、顔を醜い程に眞白く塗つてゐた。そして何か浮かれた調子で男へ話しかけながら通り過ぎた。男は中折れ帽を眼深かく被つた番頭といふ風の若い男だつた。

健康も氣分も、そして仕事も段々に面白くなくなつた。第一に肩が無暗と凝つた。頭が重く、首筋を擬ぎると、ジヤジヤと氣持の惡い音がした。食慾も衰へたし、睡眠も充分に出來なくなつた。うつら／＼と何かしら不快な夢を見つゞけた。

然し夜中仕事にかゝつてゐる時は、仕事は殆ど捗らぬまゝに妙に氣分だけが冴え／＼と、異狀の亢奮を覺える事が却つて多くなつた。彼は亢奮から狹い六疊間を、疊の下で根太板ががた／＼音をたてる程に無暗と歩き廻はつたりした。左ういふ時彼は總てと差し向ひになつたやうな、自分が非常に偉大な人間になつたやうな氣持になる。

夜の生活は多く左うであつたが、晝間は丁度反對に、彼は全くみぢめな氣持に追ひつめられてゐた。それは肉體から

も精神からも半病人だつた。物憂く眠く、眼は充血して、全で元氣がなくなつた。

或る時、隣りの婆さんに勸められて、寶土寺の石段下にゐる岩兵衞按摩といふ、以前、濱で小揚人足をしてゐた盲人の所へ行つて見たが、其腹の立つ程の荒療治も彼の肩には何の利き目もなかつた。彼は矢張り今は仕事を中止するより仕方なくなつた。

十六

春めいた長閑な日だつた。前の石垣の間から、大きなとかげが長い多節の後の太儀さうな身體を半分現はして、凝然と温めてゐる、左ういふ午前だつた。彼も幾らか輕い心持で　前の障子を一つぱいに開け、朝晝一緒の食事をしてゐた。向ひ島の山の上には靑く、うつすりと四國の山々が眺められた。彼は不圖旅を思ひ立つた。そして旅行案內を出し、讃岐行きの船の時間などを調べてゐると、隣りの婆さんが、

「よう、嗅ぎつけてをる」こんな事をいひながら前の椽へ來て腰を下ろした。飯時に何時でも來る近所の小犬が二疋濡椽の先に黑い鼻の先だけを見せてゐた。そのヒク〳〵と動くのが小さい二つの生物のやうに見えた。

「金ン比羅さんへ行くには連絡の方がいゝのかしら？」

「へえ、今日らは大方御本山さんへ參られる者が仰山出やんせうでの、商船會社の船はこんでいけやすまい」。

「二時ですネ」

「へえ、——あゝんさん、金ン比羅さんへ參られやすか」

「あゝ。それから部屋は此儘にしといて下さい。盜られても困らないものばかりだから」

「へえ。しえームりやせん」と婆さんは笑つた。

「大事なものは鞄へ入れとくから、それだけ預かつて下さい」

「へえ。――今日ら（こんち）は栖のお月様がよう見えやんせうの」

「お婆さんは行つて見たことがあるの？」

「えーえ」と否定して「先年お四國遍道に出やしての。其歸り船で通つたゞけムんすけ」

「なう。今晩栖でお月見をして、あした金ン比羅さんへ行つて、それから、あさつて、高松で、今度聞くといふお城の庭を見て來ませう」

「立派なものやさうにムすけのう。岡山のよりえゝんぢや云ひをられやした」

彼は食事の餘りを一つ皿に集めてそれを犬にやつた。一疋が切りに唸つて他を威嚇した。

「しつ、しつ」婆さんは腰かけた儘、藁草履をはいた足で其犬を蹴る眞似をした。

下の方から、隱居仕事に毎日商船會社の船つき場に切符きりに出てゐる爺さんが細い急な坂路をよち／＼と登つて來るのが見えた。

「歸つて來た」

「へえ」かういつて婆さんは笑つてその方を見てゐた。近所の六つばかりになる女の兒が自分の家の小さい門の前に立つて、

「お爺さーん」と大聲に呼んだ。爺さんは立止まり、腰をのして此方を見上げた。ぶく／＼に着ぶくれた爺さんの背中は幾ら腰をのしても未だ屈がつてゐた。そして、

「芳子さあ――」幅のある氣持のいゝ濁聲で呼びかへした。

「お爺さ——ん」

「芳子さあ——」

から甲高い聲と幅のある濁聲とが呼び交はした。そして爺さんは又前こゞみの姿勢に變はつてよち〳〵と登り出した婆さんは隣りへ歸つて行つた。

暫くして、謙作は金を取りに山を下りて行つた。市の郵便局は近かつた。貯金爲替と書いた口へ、彼は持つて來た爲替の紙を出すと、

「今日は午前中だけですがのう」と云はれた。日曜を彼は忘れてゐた。「今、決算を濟まして渡した所です」と局員は氣の毒さうにいつた。

彼は未練らしく二三歩下がつて頭の上の大時計を見た。二十分程過ぎてゐた。仕方なし、彼は旅を一日延ばす事にした翌日は薄日のさした、寒い、いやな日だつた。空模樣も本統でなく、風もあつた。彼は一寸迷つたが、矢張り出かける事にして、一時半頃汽船の出る所へ行つた。

着くのが三十分遲れた爲めに、それだけ二時發から遲れて、船は出發した。彼は祖父の着古るした、きたない二重廻しをきて、甲板へ出てゐた。船は細長い市に添ふて東へと進む。千光寺の山の中腹に彼の小さい家が一層小さく眺められた。先刻まで着てゐた、綿入れと羽織とが軒の物干竿に下がつてゐる。それも如何にも小さく眺められた。其前に婆さんが腰かけて此方を見てゐる。彼は一寸手を擧げて見た。婆さんも直ぐ不器用に片手を擧げた。そして笑つてゐるらしかつた。

山と山との間の一番奥にある西國寺といふ寺が見え出した。間もなく、船は淨土寺の前を過ぎ、市を出はづれて、舵

を南へ〳〵ととり、向ひ島を廻はつて、沖へ出て行つた。彼は院の島、百貫島、その位で島の名を知らなかつた。然し島は一つ通り越すと又一つと並んでゐた。島と島との間を見通せないので、只船で通つては灣曲の多い海岸を見ると餘り變りなかつた。

先刻まで薄日のさしてゐた空は何時かどんよりと曇つて、寒い風が西から吹いてゐた。彼は船室へ入らうかと思つたが、何かしらそれも惜い氣持から、二重まわしの羽根をかき合はせ、立てた襟に顔を埋めて、尙甲板のベンチへ腰を据えてゐた。

船は島と島との間を縫つて進んだ。島々の傾斜地に作られた麥畑が、一と畑毎に濃い緑、淡い緑と、はつきりくぎりをつけて、曇つた空の下にビロードのやうに滑らかに美しく眺められた。それから、島々の峯の線が如何にも力强く美しく眺められた。曇り日を背にした方が殊に輪廓がくつきりとよく見えた。彼は市の瓢箪屋で見た割れ瓢の割れ目の線を想ひ出した。自然の作る線、これには矢張り共通な力强さ、美しさがある事に感服した。

或る島は遠く、或る島は直ぐ側を通つた。少し人家のある濱邊には出鼻の潮風に吹き曲げられた一二本の老松の下に乾度常燈明と深く刻りつけられた古風な石の燈臺が見られた。他の島の若い娘が毎夜其燈明をたよりに海を泳ぎ渡つて戀人と會ひに來る。或る荒らしの夜、心變りのした若者は故意に其燈明を吹き消して置いた。娘は途中で溺れ死んだ。かういふよくある傳說にはどれも似合はしい燈明だつた。

阿武兎（アブト）の觀音と云ふのが見え出した。それは陸と島との細い海狹の陸の方の出鼻にある。拜殿が陸にあつて、奧の院は海へ出ばつた一本立ちの大きな石の上に、二間程に石垣を積み上げて、その上に建つてゐた。其間五六間が、かなりの勾配の廊下でつながつて居る。その他は自然のまゝで、人家もなく、如何にも支那繪を見る心持であつた。

其所を廻つて汽船は陸添ひに進む。庭に取り入れてい丶やうな松の生えた手頃な小さい島が幾つかあつて、やがて鞆の津に船は止まつた。仙酔島が靜かに横はつてゐる。繪葉書で勝手に想像してゐた向きとは全く反對側にそれがあつたので多少彼に物足らなかつたが、兎も角それは氣持のい丶穏やかな島であつた。町の方は人家でごちや／＼してゐた。保命酒釀造元とか、元祖十六味保命酒とかペンキで塗つた烟突が所々に立つてゐた。

彼は其晩此所で月見をするつもりだつたが、空模樣が迚も見られさうもないので、其儘乘り越す事にした。段々身體が冷えて不愉快になつて來た。彼は船室へ降りて行つた。二等といふので客は五六人しか居なかつた。その中に混つて彼も横になつた。船は少しづつ揺れて、ばたん／＼と胴を打つ波の音が聽こえた。彼は少し睡むかつたが、眠むれば風邪をひきさうなので又起きて、持つて來た小説本を讀み始めた。

「御退屈でムります」洋服の腕に二本金筋を巻いた船員が自分はレコード、蓄音機は水夫に持たせて入つて來た。「どうぞ、御自由に御散財下さりませ」笑ひながら、こんな事をいつて、大概は寢てゐるので、起きてゐた謙作の前にそれを置いた。

謙作は其儘本を讀んで居たが、誰も手を出す者がないので、レコードの函を引き寄せて見た。浪花節が多かつたが、義太夫もあつた。義太夫は好きだつたので、彼はそれらを三四枚續けてかけた。

「呂升の艶は別ちやのう」二人で寢ながら株の話をしてゐた一人がこんな事をいつた。其男は又謙作の方を向いて、「浮かれ節はありまへんかいな」といつた。

「う丶？」謙作は浪花節の事だらうとは思つたが、よく通じないやうな、そして故意に無愛想な顔をして、又義太夫をかけた。其男はそれなり默つた。一寸氣の毒な氣がして、彼は其次に吉原「藝者四季の唄」といふのをかけた。「春は花い

ざ見にごんせ、東山」といふ唄だらうと思つてゐると、最初ジイ〳〵いつてゐた喇叭から、突然、突拍子もない浮かれ調子で「春は嬉しや、二人揃ふて……」といふ唄が出て來た。氣六ツかしい不機嫌らしい顔が自身見えるだけに此浮かれ唄との滑稽な對照が自分でも一寸可笑しくなつた。其儘にしてゐると、夏は嬉しや、秋は嬉しやと蓄音機は不遠慮に浮かれた。ダン〳〵〳〵〳〵といふ汽罐の響き、ぼう〳〵と甲板で鳴らす汽笛、船の胴を打つ波音、それらと入れ混つて、凡そ不調和に「雪見の酒」と其所には浮かれてゐる。彼は蓄音機をやめて又甲板へあがつて行つた。

いつか、もう讃岐の海岸が近く見えてゐた。其所には三四人の客が立つて居た。

「事務長さん、金ン比羅さんのお山はどれですかいな」

「あれでムります」先刻蓄音機を持つて來た金筋を腕に卷いた男が指さして答へた。「あれが、その、象の頭に似居る云ふので、それで象頭山、金ン比羅、大權現、ですかいな、左う申すのやさうにムんす。あのこちら側に黒う見えとりますの。此所からはほんこまい森のやうにムんすけえ、そら、いたらエライ森でムんすが」

帆を張つた漁船が四五艘、黒ずんだ藍色の海を力強く走つてゐた。事務長は此邊が内海の眞ん中で西からも東からも汐が上げて來て、此所で又別かれて兩方へ干いて行くのだと説明した。

「來月は善通寺さんの御開扉で又一段と賑ふ事でムんせう」こんな事も云つた。

謙作は一人船尾へ行つて、其所のベンチに腰かけた。彼は象頭山、それから、それに連らなる山々を眺めた。彼は今事務長が云つた山よりも其前の山がもつと象の頭に似てゐると思つた。そして彼はそれだけの頭を出して大地へ埋まつてゐる大きな象が全身で立ち上がつた場合を空想したりした。それから起こる人間の騒ぎ、人間が其爲めに滅ぼし盡くされるか、人間がそれを倒すかと云ふ騒ぎ。世界中の軍人、政治家、學者が、智慧をしぼる。大砲、地雷、左ういふもの

は象皮病といふ位で其象では皮膚の厚みが一町位ある爲めに用をなさない。食糧攻めにするには糊めしと糞めしの間が五十年なので如何する事も出來ない。賢い人間は怒らせなければ悪い事はしないだらうと云ふ。印度の或る宗旨の人々は神だと云ふ。然し全體の人間は如何かして殺さうと樣々な詭計を弄する。到頭象は怒り出す。……彼は何時か自分が其象になつて、人間との戰爭で一人九番した。

都會で一つ足踏みをすると一時に五萬人がつぶされる。大砲、地雷、毒瓦斯、飛行機、飛行船、左ういふあらゆる人智をつくした武器で攻め寄せられる。然し彼が鼻で一つ吹けば飛行機は蚊よりも脆く落ち、ツェッペリンは風船玉のやうに飛んで行つて了ふ。彼が鼻へ吸ひ込んだ水を吐けば洪水になり、海に一度入つて、馳け上がつて來ると、それが大きな津波になる。………

「御退屈でムりました。もうあれが多度津でムります。十分で着きますで、御支度を……」から、事務長が知らせに來た。彼は退屈どころではなかつたのである。

ぼう〳〵と耳の底へいやに響く汽笛を切りにならしながら船は屋根の澤山見える多度津へ向かつて進んでゐた。

彼は他愛ない想像から覺めた。然しそれを左う滑稽とも彼は感じなかつた。馬鹿な「人間」を對手取る所が、大人氣ない變な氣もしたが、子供からの空想癖が、一人になつて話し相手もない所から段々に高じて來た此頃、彼は今した想像に對しても左う馬鹿々々しいとは感じなかつた。

彼は別に支度もなかつたので、洋傘を取りに一度船室へ降りて又出て來た。夕日が沖の島といふ上に赤く輝き出した甲板には十四五人の客が立つてゐた。

「金ン比羅さんへ參られますか」

「え、」
「お一人ですか」
「左うです」
「お淋しいですの」
「え、」
「お宿は？」
「何といふ家がい、んですか」
「先づ虎屋。それから備中屋ですが、これらはお一人で行かれても、どうですか」と其男が云つた。
謙作は只默頭いて見せた。
「よし吉と云ふのがよろしいでせう。俺も用は多度津ですが、今夜は其所へいつて泊まらう思ふとります。何んでしたら、御一緒に」
細でも手でも甚くきたない皮膚をした下品な廿五六の商人風の男だつた。其男はもう自分から一緒に泊まる事に決めて、「よし吉」のあり場所などを說明した。
多度津の波止場には波が打ちつけて居た。波止場の中には達磨船、千石船といふやうな荷物船が澤山、帆柱を林立させてゐた。
謙作は誰よりも先に棧橋へ下りた。横から烈しく吹きつける風の中を彼は急ぎ足に步いて行つた。丁度汐が引いてゐて、浮き棧橋から波止場へ渡るかけ橋が急な坂になつてゐた。それを登つて行くと、上から、その船に乘る團體の婆さ

ん達が日和下駄を手にさげ、裸足で下りて來た。謙作より三四間後に先刻の商人風の男が、これも他の客から一人離れて謙作を追つて急いで來た。謙作は露骨に追ひつかれないやうにぐん／＼歩いた。何所が停車場か分からなかつたが、訊いてゐると其男に追ひつかれさうなので、彼はいゝ加減に賑やかな町の方へ急いだ。

もう其男もついて來なかつた。郵便局の前を通る時、局員の一人が暇さうな顔をして窓から首を出してゐた。それに訊いて、直ぐ近い停車場へ行つた。

停車場の待合室ではストーヴに火がよく燃えてゐた。其所に廿分程待つと、普通より少し小さい汽車が着いた。彼はそれに乘つて金刀比羅へ向かつた。

十七

其夜彼は金刀比羅で、一人では泊めまいと云はれた宿屋へ行つて泊まつた。そして翌朝金刀比羅神社へ行つた。其所の寶物の或物が彼を樂ました。伊勢物語、保元平治物語などの昔の裝幀を彼は美しく思つた。それから日頃嫌ひな狩野探幽の雪景色を描いた墨繪の屛風もいゝと思つた。それ程に左ういふものに餓えてゐたやうにも彼は感じた。本社へ行くまでの道にも人工の美を見出した。

本社へ上がる急な石段がある、その前が殊にいゝやうに思つた。然し本社から奥の院までの道は最近に作つたものらしく、人工の美は皆無だつた。只尾の道で松ばかり見てゐた眼に色々變つた山の大きい木が物珍らしかつた。が、其内不圖その木の肌を氣味悪るく思ひ出すと、彼の弱つた神經はそれから甚く劫かされた。

午后、豫定に從つて彼は高松へ行つた。的てにして居た城内の庭は見られなかつたが、栗林公園といふのを見た。それから彼は町を少し歩いた。或る角に洋酒洋食品を賣る軒の低い、然し割りに充實した店があつて、其所へ入つた。尾の

道にはいゝ左ういふ店がないので何か罐詰めを買込んで行くつもりだつた。彼は默つて棚を探し歩いた。然し大和煮、五三燒、左ういふ屋の道にもある物ばかりで欲しいやうなものはなかつた。

「何が御入り用ですか」髮を油で光らした番頭だか、若主人だかゞ出て來た。

「舶來の肉の罐詰がありますか?」

「ございます」かういつて若い男は直ぐ奥から大きい濃藍色の罐詰を持つて出て來た。貼紙には Pure english oats と書いてある。

「これは肉だね?」

「左うです」と其男は何の遲疑なしに答へた。

謙作は罐を振つて見た。中で乾いたゴソツといふやうな音がした。彼はそれを返しながら

「肉かい?」と又云つた。其男は受取つた罐の貼紙を見ながら、至極流暢な發音で、

「えゝ、ピユーワ・イングリシユ・オーツ」と云つた。

彼は默つて其店を出た。一寸腹も立つたが、其若者の眼に映つた自分がどんな者だつたらうと思ふと、彼は初めて自身の見すぼらしい姿に心づいた。きたない鳥打帽、二十年も前に出來た黑絖羅紗の二重廻はし、鼻緒のゆるんだ安下駄、太卷きの洋傘、それに不精鬚を生やした物憂氣な顏……肉の罐詰に選り好みをする柄でなかつたに違ひない。然し彼はもう一度還へつて其所でそれを開けさして返えしてやらうかしらといふやうな小さな餘憤も感じた。

屋島へ行く事にして、俥で電車の出る所へ向かふ。志度寺行きの電車に乘る。彼が乘つた電車は空いてゐたが、歸つて來る電車はどれも一杯の客だつた。それは市の新聞社と電車の會社とが一緒になつて、屋島で寶探しとか、藝者役者

の變裝競爭とか云ふ催しをした、其歸り客だつた。彼が屋島で下りてからも未だ歸り客がゾロ〱と通つた。背金木綿の揃ひの手拭を首へかけたり鉢巻きにしたりした番頭小僧の連中、藝者を連れた醉漢、帽子のリボンから風船玉を上げてゐる子供連れの男、十日戎のほいかごのやうなかごに乘つた連中、書生、職員、その他荷をかついだ縁日商人等、種々雑多な連中が大概は赤い顏をして、疲れた身體を互にもたれ合つて、歸つて來た。彼は一人それらの連中とは全く異つた氣持で擦れ違ひに歩いて行つた。が、彼の心は淡い情緒を樂しんでゐた。子供の頃の龜井戸の藤見、大久保の躑躅見、それでなければ駒場の運動會の歸途、何かしら左ういふ漠然とした淡い情緒が起こつてゐた。平地の塵埃つぽい所から漸く坂道にかかる頃から歸り客も段々疎らになつて行つた。彼は松林の中の坂道を休み〱靜かに登つて行つた。高松からづつと續いてゐる鹽濱が段々下の方に見えて來た。鹽焼きの湯氣が小屋の屋根から太い棒になつて、夕方の穏やかな空氣の中に白く立つて居る。それが點々と遠く續く。彼の物憂い沈んだ氣分も流石に慰められた。

彼が上の平地へ上がつた頃は其所にはもう殆ど人影もなく、折りの壊れ、蜜柑の皮、そんなものが落ち散つてゐるばかりだつた。繪葉書や平家蟹の干物を賣る小さい家が店を仕舞ひかけてゐた。彼は其所で宿屋を訊くまでもなく歩いてゐる内に、自然に下の方に海を望むだ、小松林の前の宿屋へ出た。一組歸り遲れた客が離れの一つで騒いでゐたが、女中達は忙しく後片づけに立働いてゐる所だつた。

彼は海を見下ろす、崖の上の小さな風雅作りの離れに通された。右の方に夕もやに包まれた小豆島が靜かに横たはつてゐる。近かく遠く名を知らぬ島々が眺められた。遙か眼の下には五大力とか千石船とかいふ昔風な和船がもう帆柱に灯りをかゝげて休んでゐる。夕闇は海の面から湧き上がつた。沖から寄せるうねりの長い弓なりの線が、それでも暗い中に眺められた。────兎も角いゝ景色だつた。が、彼の心は不思議にそれを樂しまなかつた。

女中が食事を持つて來た。彼には殆ど食慾がなかつた。膳を下げる時に女中は
「お床はあちらへお延べ致しますから」といつた。
「支度が出來たら直ぐ知らして下さい」
彼の氣持は變に沈んで行つた。それは旅愁といふやうな淡い感じのものではなく、もつと暗い重苦しい氣持だつた。
間もなく女中が迎ひに來た。彼はそれに導かれて庭から直ぐ座敷の方へ行つた。裏の松林の上に、大きなバラ色の月が出て居た。庭へ入らうとする所に屋根のついた小さな門がある。その側きに、彼が通る殆ど足下に一人の男が死人のやうにぐつたりと俯伏しに倒れてゐた。髪のぼう／＼と延びた、乞食のやうな男で、寝たまゝ小便をしたらしく股の邊の地面が黒く濕つてゐた。
女中は、殆ど注意を拂はなかつた。然し彼は何となく氣になつた。座敷へ入ると、彼は、
「今の人は病氣ぢやあるまいね？」と訊いた。
「醉ふとりますの」
「此邊の人かい？」
「新太さんといふ獨者の乞食でムいます。今日のおふれまいで仰山飲みましたので」
宣德火鉢によく火がおこつてゐた。謙作はそれにあたりながら女中が部屋を出て行くのを待つてゐた。それは其所に出してある宿屋の寢間着を着るのが厭やだつたからである。女中は手持ち不沙汰に未だ其所にゐた。到頭彼は
「もうよろしい」と云つた。
「お召物をたゝんで參りませう」と女中が云つた。

「左うだな。……たゝまなくてよろしい」

女中は笑ひながら出て行つた。彼は直ぐ立つて羽織だけを脱ぎ、着のみ着のまゝ、帯の結目を前へ廻はして寝床へ入つた。

彼は寝ながら持つて來た本を擴ろげたが、どうしても、それに惹き込まれて行かなかつた。暗い淋しい氣持が廻はりからメめつけて來る。彼はそれにおさえられ、身動きもならず、只凝然としてゐるより仕方ない氣持だつた。實に靜かな夜だ。そして寒く、火のある部屋でも頬は冷え〳〵と、未だ足の先は温まりきらずにゐた。

戸外から先刻の乞食の鼾がかすかに聞こえて來た。

彼は眠むれぬまゝに、歸る家もなく、それを待つ人もない乞食の身の上を想ひ、それが丁度自分の身の上だと思はずにゐられなくなつた。自分の仕事が成功しようが、失敗しようが、それを心から喜ぶ者も悲しむ者もない、父や母や、同胞や、然しそれらは自分の家族ではない。それは差支えないが、…………こんな風に思つた。

彼は心から自分の孤獨さを感じた。それは今寒い空の下に醉ひ倒れてゐる乞食の孤獨さと變りない孤獨さだつた。彼は急にお榮に會ひたくなつた。

何といつても感情的に、一番近かい人間はお榮だ。其お榮が何故もつと本統に自分の生活に結びつかないのだらうそして、結びついてはいけないのだらう。自分にとつてもお榮にとつても實際氣持の上では殆ど肉身の近かさにゐながら、本郷の父が決めた關係、依然雇人、そして、自分の結婚と同時に身を退く筈の女として、何故二人共がそれを無條件に認めてゐたらう。此事は本統に何んといふ變な事だつたらうと彼は考へた。

祖父の妾だつた女と結婚する事は變な事だ。然し心にお榮を穢して居る事からすれば、實際の關係に進まない前に正

式に結婚して了ふ事の方がどの位氣持がいゝか知れない、と思つた。嘲罵の的となる事、それも自分の氣持をひきしめて呉れる。年の餘りに違ふ事、嘗て祖父の妾だつた事、此二つを別にすれば此結婚は自分にもお榮にも一番いゝ事だ。自分も落ちつけるし、お榮も本統の安定が得られるわけだ。何故自分は此事をもつと早く考へなかつたらう。

お榮と結婚するといふ考へは彼の氣持を明かるくした。此決心が尾の道へ歸るまで變らなかつたら、早速手紙を書かうと思つた。然しお榮が承知するかどうかが疑はれた。若し承知しないとすれば歸京しよう。そして自身彼女を勇氣づけよう。左う彼は考へた。

十八

翌日彼は尾の道へ歸つて來た。割りにいゝ天氣で、往きに見られなかつた鞆の津の月を見るにはいゝ日だつた。が、彼は左う落ちついてはゐられない氣持から直ぐ尾の道へ歸つて來たのである。

そして、其晩早速手紙を書かうとしたが、扨て、どういふ風にそれを切り出したものか、一寸迷つた。短刀直入に書いて了へば、一番簡單だつたが、餘りにそれは寢耳に水に違ひなかつた。寢耳に水をさゝれた人が狼狽して起き上がる時に此方が幾ら落ちついて理解の行くやう說明した所で、耳を貸す筈はない。そのやうなものだと思つた。これは矢張り信行に書いて、信行から靜かに話して貰らうより道はないと彼は考へた。

謙作は信行にあて、これまでお榮に對し左ふ云ふ衝動で隨分苦しんだ事から、屋島で結婚を想ひ立つまでを正直に書いた。

そして、然し此事は父上や義母上や、其他本郷の人達には甚だ不愉快な事であるのは勿論だが、愛子さんとの場合には父上は左ういふ事は自身やるやうと云ふお考へだつたから、改めて誰れにも相談はしないつもりです。相談する事で

思はぬ邪魔が入つても面白くないし、それに若し此事の爲めに今後本郷へ出入りを差し止められるやうな事があつても、それは父上や義母上としては無理ない事だから、僕は素直な心持でそれをお受けするつもりです。といふやうな事を書いた。

恐らくお榮さんは吃驚する事でせう。然し其所を君からよく理解の行くやう話して頂きたく思ひます。そして此事に關しては君にもお考へがあると思ひますが、同時に僕の性質も知つてゐて下さるのだから、甚だ蟲のいゝ事ですが、兎も角僕の心持をそのまゝにお榮さんに傳へて頂く事をお願ひします。と書いた。

彼は此手紙の他にお榮にも書いた。

大變御不沙汰してゐます。御變りない事と思ひます。……僕は此手紙で何んにも書きません。精しい事は總て信さんの方へ書きました。それはこれと同時に出しますから、恐らく此手紙を御覽になる翌日には信さんが行つて色々お話しする筈です。そしてそれはあなたを吃驚さす事です。然しどうか只驚いてゐずに、よく僕の心持を汲んで靜かに考へて下さい。そして憶病にならぬやう、何者も恐れぬやう、此事切にお願ひして置きます。彼はこんな風に書いた。

彼は此の二つの手紙を書き終ると、却つて變な氣落ちを感じた。これで自分の左う云ふ運命も決つて了つたと思ふと淋しい心持になつた。然しもう其事を迷ふ氣はしなかつた。そして、其時はもう夜も十二時過ぎてゐたが、此手紙を未だ投函しないといふ事で尙迷ふやうでは不愉快だといふ氣持から、提灯をつけ、それから彼は停車場まで、それを出しに行つた。

返事の來るまでが不安であつた。直ぐ返事を書くとしても間が三日かゝる、然し何かと愚圖々々してゐれば五日位はかゝるに違ひないと思つた。此五日間の不安な氣持が今から想ひやられた。彼はお榮に、「强くなれ、恐れるな」と書き

ながら、自身時々弱々しい氣持に陥ちる事を齒がゆく思つた。信行に對しても、自分の性質は知つてゐて呉れるのだからと、他人の考へでは動かされないからといふ氣勢を見せながら、未だに二つの反對な氣持が、自身の中でぶつかり合ふのを腹立たしくも情けなく感じた。

實際彼には同じ位に二つの反對した氣持があつた。此事がうまく行つて呉れゝばいゝといふ氣持と、うまく行かないで呉れ、といふやうな氣持と。何方が彼の本統の氣持かよく分からなかつた。何方にしろ決定すれば、彼はそれに順應した氣持になれるのだつた。然し左うはつきり決定しない内は變にかういふ反對した二つの氣持に惱まされる。それは癖で、又一種の病氣だつた。そして、結局はお榮の意志で運命を決める、それより他はないといふ受け身な氣持におさまるのであつた。

彼は心ではそんな狀態に居ながら、一方、急に肉情的になつた。お榮との結婚、此豫想は、樣々な形で彼の左う云ふ肉慾を刺激し出した。そして實際にも彼は共間に幾度か放蕩した。

六日目、到頭信行からの返事が來た。

お前の手紙見て、一時はかなり驚いた。自分として正直な事を云へば色々な理由で此事は思ひ止まる事が出來れば思ひ止まつて貰らひたいと思つた。然し前の事もあるし、又お前の性質として、行く所まで行かずにそんな事を云つた所で諾きさうもないし、一應お榮さんにお前の手紙を見せ、そして或る所は自分の口から補ひ、お前に頼まれたゞけの事をはにした上で、共結果と一緒に自分の考へもお前に書いてやるのが本統だと考へ直した。今日會社の歸り稲吉町へ行つて來た。

一ト言に云ふとお榮さんは承知しなかつた。お前がお榮さんに出した手紙も見せて貰つたが、お榮さんはあれで、大概

想像して居たらしくお前の手紙を見てそれ程驚かなかつた。そして寧ろ立派な態度で、それはいけない、と云ふ意味を云はれた。俺は感心した。かういふとお前は俺を如何にも頼み甲斐のない、お榮さんが左ういつて呉れるのを待つてゐたやうに思ふかも知れないが、——實際左ういふ氣持もあつたが、それにしろ、お前の手紙の意味を說明して一ト通りは勸める氣で行つたのだ。所が、お榮さんの態度は左ういふ隙を全で見せない程きつぱりしたものだつた。

お榮さんとは色々話した。お榮さんは風邪で二三日前から寢てゐたのだが、俺が行つたので起きられたのだ。

俺は今、此手紙で何も彼もお前に書かねばならなくなつた事を非常に心苦しく思ふ。俺はお前に對し、今まで本統に濟まない事をしてゐたのだ。そして今でもそれを打明けるのは非常に心苦しい。然し默つてゐて、此後何時までもお前を苦しめる事を思ふと、一時は崖から突落とすやうな事ではあるが、思ひ切つて書かねばならぬと決心した。

お前は母上と祖父上との間に出來た子供なのだ。精しい事は知らない。俺も中學を出る頃、神戸の叔母さんに聽いて初めて知つたので、俺がそれを知つてゐる事は父上でも義母上でも恐らく今だに知つてはゐられまい。それ故、俺にも精しい事を知る機會がない。又知りたくない氣持もあつて、その儘でゐるが、兎も角茗荷谷に自家があつた頃、父上が三年獨逸へ留學された、其間にお前は生れたのだ。そして、こんな事まで書くのはお前を一層苦しめるばかりだとは思ふが、知つてゐるだけは總て云ふ決心で書き出したから書く。自家の祖父上祖母上は父上へ秘密に墮胎して了はうとしたのださうだ。然し芝の祖父上が「あなたは此上にも罪を重ねるおつもりですか」と非常に怒られたさうだ。それ故左ういふ事なしに濟んだが、母上は直ぐ芝へ引とられて行つた。そして、芝の祖父上は何から何まで正直に書いて獨逸へ送られたといふ事だ。勿論離婚を覺悟してだ。然し父上からは、總てを許すといふ返事が來た。そして其手紙が來ると間もなく自家の祖父上は一人自家を出て何所かへ行つて了はれたのださうだ。

俺はお前が左ういふ呪はれた運命のもとに生れたと聞いた時、隨分驚きもし、暗い氣持にもなつた。そして同じ同胞でどうしてお前だけが別に扱はれてゐるのかといふ漠然とした子供からの疑問も解けた。そして俺は此事はお前も乾度今は知つてゐるに違ひないと考へてゐた。長い間には何かでお榮さんがそれを知らさない事はあるまいと思つたし、それでなくてもお前自身左ういふ疑問を起したかも知れないと考へてゐた。所が愛子さんの事で、お前が全くそれを知らずにゐる事を知つて實は俺も不思議に感じたのだ。俺は今日お榮さんと會つて此事でも感心した。お榮さんは父上との約束を守つてお前に話さなかつたのだ。「可哀想でそんな事、云へませんわ」とお榮さんは云つてゐられた。或はそれが本統かも知れない。然し何れにしろ、此長い年月、遂に話さないといふ事は普通の女には中々出來難い事だ。

今になつていふが、愛子さんとの事も、調はない原因は全く其所にあつたのだ。先方のお母さんは一方お前に同情してゐながら、いざとなると、其所までは出來なかつたらしい。これは然し慣習に從つて考へるあゝいふ人としては仕方がない。

あの時俺はお前が少しもそれを知らずに一人苦しんでゐるのを見て、これは苦しくても知らさねばならぬといふ氣持にもなつた。今云はなければ乾度後でお前に怨まれるとも思つた。然し一方では實に知らしたくなかつた。姑息といへば姑息な氣持だ。それを知つたお前が、只でも苦しんでゐる上に又それで苦しむ事も堪らなかつた。それから亡き母上の左ういふ事を暴露する事もつらかつた。其上に一番俺に問題だつたのはお前が小說家である以上、若し知れば、そして其事で苦しめば何の事、乾度それがお前の作物に出て來ない筈はないと思つたからだ。かういふとお前の仕事に如何にも理解がないと思ふだらうが、俺としては今更に母上のさういふ過失を世間に知らして、今、漸く老境へ入られようとする父上に又新しく苦痛を與へる事が如何にも堪えられなかつたのだ。父上が獨逸で其事を知られてからの苦しみ、

そして其苦しみから卒業されるまでの苦しみは恐らく想像以上に違ひない。其古傷を再び赤肌にする、これは考へても堪らない事だ。これは全く俺の弱い所から來た考へかも知れない、實際俺は段々年寄つて行かれる父上をどう云ふ事ででも苦しめるのは非常にこわいのだ。

然し同時にお前にも非常に濟まない氣でゐた。殊にお前のやうな仕事をする者に其者の持つて生れた運命を故意に知らさずにゐるといふのは惡い事に違ひない。愛子さんの事があつた時にもお前がどうしても愛子さんを貰ひたい、と云ひ張つたら、出來るだけの事をして掛合つて見て、それで若し駄目なら、其時は仕方がない、本統の事を打明けてお前に斷念して貰はうと思つたのだ。所が、幸にお前が思ひきるといふので實はほつとしたのだ。

神戸の叔母さんが俺にそれを打明けた時に「呪はれた運命」といふやうな言葉を使つた。そして俺もそんな風に矢張り考へてゐたが、後には段々お前の運命を左ういふ風に考へるのは少し邪氣のある小說趣味から來た考へ方だと思ふやうになつた。今後來るお前の運命がその爲めに必ずしも呪はれると決つた事はない。總てが無邪氣に順調に進んだならば、左ういふ風にして生れた事も呪はれた事にはならないのだ。俺は氣輕に考へようとした。總ては過ぎ去つた事だ。過去は過去として葬らしめよ。そして新しくよき運命を開いて行けばいゝのだ、と思つた。所が矢張り愛子さんの事などではそれが祟つたので、少しは〻な氣持にもなつた。然しそれとても左う大きく考へる必要はないと思つてゐたのだ。が、今度お前のいひ出した事で、若しそれをお前が押し通せば、これは少し危險だといふやうな氣がして來たのだ。左ういふ事が二重になる。それが何んとなく恐ろしい氣がしたのだ。

お榮さんが、いふのも、他の理由は兎も角、致命的にそれを否定される所は、左ういふ事が二重になるのを恐れてなのだ。

俺は大概の事は贊成したい。實際贊成出來た。然し今度の事はどうしても俺には贊成出來ない。何か暗らいものが向ふに見えてゐる。見す〳〵にその中へ進んで行くのを見るやうな氣がする。お前のお榮さんに對する氣持には同情するそれを不道德といふ風には考へない。然し道義的の批判は別として、何んだか恐しい。此感じは輕蔑出來ないものゝやうに俺は思ふ。

以上で大概書くべき事は書いた。俺は只此手紙がお前にどれ程大きい打撃を與へるか、それが心配だ。

直ぐ東京へ歸つて來ないか。それが一番いゝ。俺が行つてもいゝが、歸る方が早い。然し俺に來て欲しかつたら遠慮なく電報を打つて呉れないか。一緒に九州の方へ旅しても面白い。然しなるべく歸つて來ないか。

自暴自棄を起すお前でない事は信じてゐるが、隨分參る事と思ふ。何事も一倍強く感ずる性には一層の打撃だ。然しどうか勇氣を出して打克つてくれ。

お榮さんからは別に返事は出さない筈だ。未だ風邪も本統でないし、然しお前が歸ればお榮さんは隨分喜ぶ事と思ふ。俺も會ひたい。直ぐ歸る事望む。

かう書いてあつた。（續く）

抒情詩鈔

佐藤春夫

少年の戀

舊作「少年の戀」小曲十數編あり。そのうち二つ三つ。

1

野ゆき山ゆき海邊ゆき、
眞ひるの丘べ花を敷き、
つぶら瞳の君ゆゑに、
初こひの日のわがおもひ。

2

影おほき林をたどり
夢ふかきみ瞳を戀ひ

あたたかき眞晝の丘べ
花を敷き、あはれ若き日。

3

君が瞳はつぶらにて
君が心は知りがたし。
君をはなれた唯ひとり
月夜の海に石を投ぐ。

4

君は夜な夜な毛糸編む
銀の編み棒に編む糸は
かぐろなる糸あかき糸
そのらんふ敷き誰がものぞ。

少年と星

同じく英作

たかく
ただひとりに
きよく
かがやかに
汝よ
われの如く
――夕づつは
かく告げて瞬く。
われ
下界の少年に。

晝の月

野路の果、遠樹の上、
空澄みて晝の月かかる。

あざやかに且つは仄か、
消ぬがにしかも鮮か。
見かへればわが心の青空
おお、初戀の記憶かかる。

断章

さまよひくれば秋草の
一つのこりて咲きにけり
おもかげ見えてなつかしく
手折ればくるし花ちりぬ。

なみだ

埋火もきゆや泪の烹る音　芭蕉

あるはのきばゆたつけぶり、
あるはひをゆくたにのみづ、
あるはわがめにわくなみだ。
これをさだめとさとるゆゑ、
ぜひなきものと知るらめど、
とめてとまらぬものなれば、
せつなやあはれほそぼそと、
ひとすじにこそながるらん。

人に

真實ふかき戀あらば
わかれのこころな忘れそ
おつるなみだはただ秘めよ

ほのかなるこそ吐息なれ
数ならぬ身といふなかれ
ひるはひるゆえわするとも
ねざめの夜半におもへかし

水のほとりにて歌へる歌

切なき戀をするゆえに
月かげさむく身に沁む。
もののあはれを知るゆえに
水のひかりぞなげかるる。
うたかたの身とおもふとも
うたかたならずわが戀は。
げにいやしかるわれながら
うれひは清し君ゆえに。

琴うた

ふくかぜに消息をだにつけばやと思へども
よしなき野邊におちもこそすれ　　梁塵秘抄

かくまでふかき戀慕とは
わが身ながらに知らざりき。
日をふるまゝにいやまさる
みれんを何にかよわせん。

空ふくかぜにつげばやと
ふみかきみれどかひなしや、
むかしのうたをさながらに
よしなき野べにおつるとぞ。

人に

片こひの身にしあらねど

わが得しはただこころ妻
こころ妻こころにいだき
いねがてのわが冬の夜ぞ。
うつつよりはかなしうつつ
夢よりもおそろしき夢。
こころ妻ひとにだかせて
身も魂もおののきふるひ
冬の夜のわがひとり寝ぞ。

よきひとよ

よきひとよ、はかなからずや、
美しきなれが乳ぶさも
いくたびか吸ひけむくちも
手をとりて泣けるちかひも
わがけふのかかる歎きも
うつり香の明日は消えつつ
よきひとよ、地上のものは

切なくもはかなからずや。

海邊の戀

こぼれ松葉をかきあつめ
をとめのごとき君なりき
こぼれ松葉をかきあつめ
わらべのごときわれなりき
わらべとをとめよりそひぬ
ただたまゆらの火をかこみ
ふたりうれしく手をとりぬ
かひなきことをただゆめみ
入り日のなかに立つけむり
ありやなしやとただほのか
海べのこひのはかなさは
こぼれ松葉の火なりけり。

うぐひす

ひとり聽くようぐひす
ひねもす聽くようぐひす
君を見ざる日ようぐひす
海ちかき宿の庭のうぐひす
波の音にまじり啼くようぐひす。

感傷風景

そなたとわたしとは向ひあつて腰をかけ
そなたはまぶしげに西の方の山をのぞみ
わたしはうつとりと東の方の海をうかゞひ
山に御入日の影が剝まれ波には入日の光が漂ふ
しかし二人はにこにこして同じ思を樂しむ
とありし日のとある家の明るいバルコン
何も知らない家の主（あるじ）にはよき風景をほめ
ふたりはちらちら、お互の目のなかを樂しむ

幸く、そなたの目ほどの眺めも花もどこにあらうか
あゝ、思ひ出すまい、二人は庭のコスモスより弱く
幸福はつゝ卓上に落ちた鳥影よりなほはかなく
歎きは永く心に建てられた——あの新築の山莊のごとく。

わが溜息

わが靈は陰府にくだる細き路にして
わが溜息は陰府より洩るゝ風なれば
とほくかすかに通ひ來りてわが脣の上に消ゆ。
われはわれひとりしてわが溜息をもらし
その一息ごとに陰府の近さを測り知る。
人あり、これを、じこれを聞くとも
わが溜息をおもひやらずわが爲めに泣かず
たゞ身ぶるひしてれたすらにこれを惡み怖る
げにそは屍のにほひをおびて暗く冷く
光建しがたき底よりもるゝ風なれば。



和靈（にきたま）

久米正雄

一

私は其朝も毎もの通り、遅い朝飯の食卓の傍で、新聞を廣げながら箸を動かしてゐた。と何氣なしに目を走らせてゐた、讀賣新聞の婦人欄の中ほどで、私の眼はぴたりと止まらざるを得なかつた。「矢つ張り出てゐるな。」心の中でさう思つた。兼ねて彼らの結婚が、昨日と云ふ事は知つてもゐたし、さういふ報導に關しては兼ねて期してはゐたもの丶、さすがに胸がどきんとした。それは弱い心臓を持つてゐる私の癖で、精神的に頭へ響くといふよりは、寧ろ生理的に胸へ來たやうな氣がした。悲しいとか悔しいとか云ふ感情でなしに、たゞはつと衝撃を與へられて緊張した感じばかりだつた。心は割合に平靜だつたが、心臓の鼓動だけが、傍の火鉢の横にゐる母に、氣付かれやしないかと思ふ程だつた。私は呼吸を緊迫させて、その鼓動を抑へようとした。そして平氣な態度で其新郎新婦の相並んだ、寫眞姿に見入つた。胸騷ぎを他に氣取られまいとする心持と共に、慌て丶其記事を伏せたりする慌て方は、母が傍にゐない迄も、

私は私自身に見せたくなかつた。たゞ見榮と云つたのでは當らない、或る立派に受け應へて立つ姿を、私自身の中なる他人に見せたいと云つたやうな見榮からだつた。

寫眞版が精巧でない爲に、はつきり實物に迫る程ではなかつたが、兎に角私は杉浦が、苦り切つたやうな悲痛な顔をしてゐるのと、多子が少し俛向き加減にしたために、殆んど他人かと思はれる位面變りがして、さう美しくなく撮つてゐるのをぢつと隅から隅まで認めた。製版職工の失策か何かで、寫眞の右上部の空白が、ひどく白つぽく擦れて了つてゐるのまで見逃さなかつた。而してさういふ裕りが心にあるのを、自分自身に知らして安心させたやうな滿足と共に、其下の活字の報導をも、一字殘らず讀み盡した。そこには事實以外、何事もなかつた。その事實の簡明な記事は向うの家に對するのか、又は自分に對するのか、兎に角その新聞社の、一種の心遣ひがあるやうにさへ感ぜられた。私は多子がさう美人でなく撮れてゐるのと、その事實以外に何もない記事に淡い安心の喜びを覺えて、靜にその頁を伏せて初めから其處が開いた目的の、文藝欄の方へ目を移した。

次いで今度は少し聰明を以て、時事新聞の社會面を見たが、そこには別に何の記事もなかつた。其社には其頃私や當の敵手である杉浦の友人、池田が記者をしてゐた。その時分の社會部長をしてゐた茅野氏も、自分に同情を寄せてゐて與れたに違ひなかつた。そして彼らの約婚を發表した際も其池田の心遣ひで、私にも向うの家にもさう損傷を與へないやうな、公平な穩健な記事を出して與れたのだつた。——私は又淡い感謝の心を以て、安んじて其新聞の文藝欄に目を轉ずる事が出來た。

ふと氣が付くと、そこの讀み棄てゝ置いた讀賣を、母が取り上げて見てゐた。しかも婦人欄を見てゐるらしかつた。私は少しはつと思つた。併し困つたと思ふ當惑と共に、いつそ早く母も見て了つて與れた方が、さつぱりしていゝと云

ふ考へや、母がそれを見てどん風な態度を取るだらうといふ興味やらで、不安の中にもひそかに期待せざるを得なかつたが、さすがに其方を見てゐる譯には行かなかつた。私は風駛を遣り過ごすやうに、心の中で目を瞑つて時の立つのを待つてゐた。出來るならば、默つてゐて貰ひたい氣と、向うが何か云ふ前に、いつそ强ゐて此方から切り出さうかと迷ひながら。

が、そんな考慮を決定してゐる間もなく、殆んど直ぐに母は云ひ出した。

「何だか怖さうな人だね、」

母は此方を見てゐなかつた。玉が劣惡なので、横から見ると寧ろ靑つぽさうな老眼鏡で、今下に置いたらしい新聞の上を、わざと見離さないでゐるらしかつた。

「え、誰が。」と私は直ぐ受け返したが、其時母が初めてのやうに此方を見たので、何だか其返問のわざとらしさを見破られるやうな氣がして、すぐ取返すやうに續けた。「あゝ、杉浦がかい。」

「いえ、お嫁さんがさ。」

母はかう云つて、殆んど老母の型みたいに、眼鏡の上から斜に私をちつと見た。私は其顔に何となく浮んでゐる、敵意を認めない譯には行かなかつた。それは私の氣を兼ねて、と云ふより矢つ張り先刻の私の心持のやうに自分自身に對する見榮で遠慮しい〳〵ではあつたが、それでも正直で朴な憎惡を隱し得なかつたのだ。

「さうかねえ、さうでもないんだけれどねえ。」

私は思はずかう辯護的に云つた。而して何となく耻かしかつた。さう云はずにゐられない自分の微溫的な態度が、自痒いといふよりは、誰かに見透かされるやうな氣がしたのだつた。

「さうかねえ。寫眞で見るとさう見えるけれど……」

と母は、私の抗辯に遠慮しながら、自説を固執するやうに、もう一度ちらと新聞を見返して、冬子の寫眞の顔が、俯向いたためと版の網目の關係で、眉が上あがりになつてゐるため、險が生じた眼のあたりを眺めた。私は其上彼女の顔が、實物より尖つて寫つてゐるのは知つてゐた、が、其上の辯護はもうなし得なかつた。

母も默つて、其新聞を排けるやうに傍へやると、別な續き物を讀み初めた。私は少し胸に徹へながら、其樣子を知らないふりで見てゐた。而して何となく苦しくなつたので、丁度飯も終つたのを潮に、茶をぐつと飲み干して、自分の書齋へ入つた。

書齋で、矢つ張り母の方が正直だなと思つた。自分の態度には、微温的な性質に根ざしてゐるものはあつても、矢つ張り努めてゐる處がないとは云へない氣がした、少くとも洞察ある人の眼から見たら、矢つ張り憫れむべき儚ない努力と見られるだらうと思つた。立派に持ち堪へてゐるとは、結局平氣を裝ふといふことゝ、何ら異る處がないやうに思つた。矢つ張りそれではいけない氣がした。如何に性格的とは云へ、中途で激情を抑へて了はずに、もつと正直に、といふよりは正直らしく、嫉妬に憎惡や苦痛を發展させて、それを端的に表白しなければならぬ。そんな風に考へられた。

併しそれが私の性格から云へば、矢つ張り一種の無理な努力であるのを知らなかつた。

その日の午後近處の下宿にゐた法學士の矢田部が、勤め先の某經濟雜誌社から歸つて來ると、私を訪ねて來た。彼は私を慰める積りか、又は私がどんな顔をしてゐるか、兎に角樣子を見に來たに違ひなかつた。

矢田部は私と二三言應待した後、突然直ぐに云ひ出した。

「おい。今日の新聞に出をつた。奴等の寫眞見たか。」

纖細な神經を缺くといふのではないが、如何にも舊式の法學生タイプに鍛へ上げられた、無邪氣な彼の無遠慮には、私も時々辟易させられた。が今日はそんな所に辟易してはゐられないと思つた。

「あゝ見たよ。すつかり見た。」

私は惡びれずに直ぐかう答へた。その問題に關しては、無頓着な矢田部の事だから、早晩云ひ出すに違ひないから、此方から先廻りをして、云ひ出さうかとさへ、鳥渡考へてゐた位だつたから、さう努力もせず、躊躇もなくさう答へ得た。

「杉浦の奴、勝ち誇つた顔をしをるかと思つたら、厭に顰めつ面をしをつたなあ。」

私は微笑した。そして此微笑が、强ゐて作つたものゝやうに、矢田部に取られるのを、氣にしながらかう答へざるを得なかつた。

「うん。さうだつたね。だが、あの眉間皺は杉浦のいつもの癖だよ。」

「哲學者ぶつてるんだね。」

矢田部の感想は單純明快だつた。

「いや、實際杉浦だつて悲壯な氣がしたんだらう。」

私はかうは云つたが、直ぐ何となく悔ゐられた。何故私は、先刻からかういふ際に答ふべき感想として、心の中で取つて置いた事「いや、彼奴は世間の非難に對して、あの悲痛さうな顔で答へたんだよ。而して自分自身では、中根家のために殉教した積りか何かでゐるのだよ。」と、答へ得なかつたらうと思つた。が、今更どうしてもさうは云へなかつた。實際自分は自分の善意から云へば、決して不正直ではないのだが、惡意の方から云へば、正直だとは云へない氣がした。

而して此際善意に忠實であるより、惡意に正直である方が、男らしい態度でもあり、立派であるとさへ思はれて來た。そこに卑怯な感じがあつた。而してそれが矢田部に恥しかつた。

が、彼は毫もそんな事は感じないらしかつた。そして暫らく別な話へ移つた後、又突然云ひ出した。

「どうだい。何處かへ夕飯を食ひに出ようぢやないか。――實はな。僕君が今日悲觀しとりやせんかと思つたから、それで慰めようと思つて、誘ひに寄つたんぢや。したら。割合に元氣なんで安心したよ。だが、兎に角何處かへ行つて、一ぱい飲まうぢやないか。」

「うん。有難う。――ところが餘り元氣でもないでね。それで内心は、叩きのめされたやうに悲觀してるのかも知れないよ。」

私は苦笑しながら、自分自身への申譯のやうに、辛うじて諧謔的に正直になり得て、かう應じた。

「そんなら猶のこつちや。」

その單純明快な、こだはりのない矢田部の態度を、私は今更ながら羨まない譯には行かなかつた。

そして一緒に飯を食ひに出掛けた。

それから一兩日經つて、私が秋山に會つた時も、境地は別だがそれと同じやうな感想を得た。

秋山は私の親友でもあつたが、又杉浦の友人でもあつた。而して中根家とは、その事件の有無に係らず、不卽不離の適宜な關係を取つてゐた。彼は私や杉浦が、繁々と中根家へ出入し初めた頃から、東京を少し離れた軍港に、海軍の教官となつて赴任してゐたので、自ら其事件の渦中から逃れて、傍觀するといふ程冷淡ではなかつたが、實際適宜な距離を置いて接觸してゐた。彼は時々偶に中根家を訪ねて、問はれゝば初めて自分の意見を開陳する程度だつたし又度々私

たちとも合つたが多くは藝術上の話題ばかりに就て——それは實際意識的に選んだかの觀があつた。——談話を交換するに過ぎなかつた。が、私の方から持ち掛ければ、それは他人が容喙すべき事ぢやないが、と云ふやうな前提を置いて、強ゐて中へ立入つて來ないで、批評を下すと云つた風だつた。併し彼は其問題に就て、決して回避するとか、冷觀するとか云ふのではなかつた。彼は彼として、色々な意見も持つて居り、批判や感情も持つてゐて、それを池田や谷口やのやうな第三者には、隔てなく論議してゐた。

彼秋山は初めから、私と多子との問題には、餘り贊成ではなかつた。それは中根家に取つて、中根先生死後の家を後護してゐる積りの、かの先輩の弟子たちとは異つて、私が多子の配として不服だからといふ向うの家のための意味ではなく、寧ろ反對に、その結婚が附帶して來る境遇が、私に取つて不幸だから、私のために不贊成の意見を持つてゐたのだつた。聰明な彼は、初めから私たちのやうに、中根夫人をも買はなかつた。多子の價値をも認めなかつた。

「……それやあ君、君があゝいふ令孃階級の女性に、さう接した事がないので、最初が最良（エルステベスト）でさう思ふだけだよ」と私の其點に關する主張に際して、彼は抗辯した事さへあつた。が、併し私の心もちが、彼にもすつかり解ると、それならばといふので、彼も心持だけでは同情して與れてゐた。私に眞實の戀であるならば、それに依つて起る幸不幸は別問題として、同情しながら形勢を觀望してゐた。

その不卽不離の態度は、彼の聰明さからでもあつた。が、又もう一つの理由があつた。それは初め中根家では、故先生の遺志と云ふ程ではないにしても、その門下の最俊秀といふ所から、暗々の間に、多子の配偶の候補者として、秋山が擧げられてゐた。而して秋山に其當時もあつた約婚の人がなく、又秋山自身多子を氣に入つてゞもゐたならば、私たちが橫合ひから飛び出す事もなく、至極無事に圓滿な結果を見たかも知れなかつた。が、秋山の意はもう當時旣に男子を

ん今の細君の方に在つた。(それを私はどんなに感謝したか知れなかつた。)而してその男子さんが、その秋山が第一候補だつたといふ事を洩れ聞いて、自分のやうなものがある爲に、秋山が中根家の良婿といふ、立身出世の道を塞いだといふので、自分の方は關はないから、約束を取消して異れと迫つたとかで、美しい戀譲りの世話場さへ在つたのだつた。しかも秋山が、所謂五斗米の爲に、男子の膝を屈しなかつたのは、云ふ迄もなかつた。彼は後で私がその失戀の悲境にある眞最中に、私に遠慮しながら其人と結婚した。だから私はそれらの事を、只秋山に感謝してゐればよかつたのだつた。

それだのに私は、秋山のその隆々たる候補者の聲名を、嫉妬せずにはゐられなかつた。秋山がもう中根家の良婿とならないのは、解り切つてゐながらも、私の事と云へば、口を揃へて反對した弟子たちが、たとへにもせよ秋山ならばと云つたと云ふやうな事を聞くと、一種の嫉妬と羨望と從つて反感とを禁じ得なかつた。其上當時秋山が、文壇へ登場したばかりの名聲は、何と云つても嫉視を禁じ得ざるものがあつた。それと是とが結びついて、私は秋山に、或る敵意の氣持を持つてゐた。而してそれが秋山に反映した。そして聰明な彼の事だから、すぐ私の心持と共に、自分の地位を察した。而して彼がその問題に觸れて來れば、反對でも贊成でも、どつち道私から妙に底意を探られると思つたらしかつた。つまり彼は私の反照として擧げられたといふ事のために、強ゐて其の問題に觸れる事を遠慮したのだつた。

だから凡ての戰鬪が終つて、勝敗が決し、すべて傷つかない者がなかつた中に、彼は一人だけは觀戰してゐて、何の飛沫をも受けなかつた。彼が此の戰場に於ける、最も公平な觀察者であり、正當な批判者であると思はれた。而して事實彼は、その戰場を平靜と眺めながら、遠慮のない論評を下したものだつた。實際私の友人で、此の戰鬪に立合つたものは彼の外にも二三は在つた。が、齋木は向うの家に近寄り過ぎ、從つて又爭鬪の內部に近接し過ぎてゐた。池田は又向

う の家を離れ過ぎ、家庭の外部にゐて、たゞよく報告を聞いたに過ぎなかつた。併しそれだけに此二人の同情は、自分に厚くは感ぜられたが、それがどうも感情過重で、秋山ほど公平な見致に立つてゐないやうな氣がした。鈴木があれだけ向うの家に接觸してゐながら、餘りに私の敗北が悲慘だつたために、中根家の立場を認めつゝも、私に注いで呉れた同情、又殊に池田が、私に對する純粹な友情から、（杉浦の立場を認めつゝも）、私に示して呉れた同情は、同情それ自身は涙ぐましい程感謝されても、まだ事件の正當な批判から出たと云ふ、公平な根柢を持たない淋しさを私に感じさせた。猫可愛がりといふ可愛がりやうが、被愛者に一種の物足りなさを覺えさせるといふやうな意味で、それはどつちかと云へば、猫同情といふやうなものとさへ私には思はれた。其中に在つて、秋山の評價が、從つて其同情が、私にはひどく重大なものゝやうに思はれたのは無理もなかつた。私には秋山の態度がひどく氣になつた。秋山は私に同情してゐるには違ひなかつた。が、それと同時に、どの程度で向うに同情を持つてゐるか、それが鳥渡解らなかつた。彼は私には同情してゐるものゝ、杉浦から手紙を貰つたり、中根夫人と會食したりしてゐた。で、今度の結婚披露會などにも、出ないとは前に云つてゐたが、出たかも知れないと思つてゐた。その秋山に、それから二三日して、本郷の通りではたと出會つた時は、自ら私の氣持も緊張せざるを得なかつた。彼は例の唐本の書肆へ、「漁書に來た歸りらしく每もの洋書以外に、新聞に包んだ本包みを持つてゐた。

「今そこの松林堂まで來たんでね。これから君ん所へ寄らうかと思つてゐたんだ。」

「さうかい。そんなら戻らうか。」

併し二人は其儘話しながら散步する事にした。私は彼らの結婚式に關する感想を、秋山に聞きたくもあり、又觸れたくもなかつた。

「…君。君に清鑒を乞ひたい近作が二三句あるんだがねえ。——根を掘れば春雨竹の青さよな、と云ふのはどうだらう。」

秋山はそんな事を云ひ出した。

「さあ。——」私は鳥渡苦笑してゐた。

「駄目かな。——ちややあ、深川や早取寫眞冬の梅は？」

何とか答へなければならなかつた。

「うむ。いゝけれども少し古風だね。」

「さうだらう。これは傘雨宗匠に此間賞かされたんだよ。先生得意らしかつた。ちやあ、曇天の蛇動かずよ壺の中は？」

「氣味が惡いね。矢つ張り傘雨の御作かい。」

「さうちやない。僕んだ。鬼氣があるだらう。」

「大いに在るね。在り過ぎていけないね。」私もいつの間にか、少しづつ秋山に調子を合せてゐた。

「それちや穩な處で、曇天の水動かずよ芹の中、ならいゝだらう。仄かで。——」

實を云ふと私は、其時の少し重い氣分で、幾らか苦しかつた。が、鳥渡でもそんな樣子を見せては、敏感な秋山の調子を直ぐ挫くだらうし、又さういふさし障りのない俳句なんぞを話題にする秋山の心持も、感謝したい程解つてゐたので、努めて應じなければならなかつた。

「うむ、羨ましい心境だね。」

矢つ張り、ふと何氣もなく出て了つた私の心持は、敏感な秋山の口を噤ませて了つた。

薄い日影が、アスファルトの舗道と、大學の煉瓦塀へかけて、斜に照つてゐた。私は下を向いてアスファルトの繼ぎ目

の線を、踏まないやうにして歩いた。先刻まで、少し頻繁に通つてゐた學生の影が、もう疎らだつた。秋山は切れた話の緒を求め兼ねて、暫らく默つて歩いてゐたが、ふと街路樹の杭に衝き當らうとして、くるりと身を翻した。而して其途端に、何か話しかけたさうにして、ちらと此方を眺めたが、何故かよした。私は秋山が、此方の氣持を讀んで遠慮したなと思つた。何だか少し苦しくなつた。秋山は少し急ぎ足に、意地惡く默つて、颯々と歩むやうにしてゐた。私は何か話しかけたかつた。いつそあの事を云ひ出して了ひたかつた。が、早急にはどうも云ひ出せなかつた。私は遠く向うから來る電車が、通り過ぎて了ふまでには、秋山が何か話すだらうから、それまで自分から話しかけるのを待たうと考へた。が、その電車が割りに新らしい車體を浮かすやうに大きくなつて來ても、秋山は珍らしく喋らなかつた。私は今度は彼が反感を持つたのかと思つた。而してその電車が音を立てゝ通り過ぎるや否や、

「ねえ君。」と云ひかけずにはゐられなかつた。

「何だい。」秋山は細い顏で此方を見た。

「君は此間の結婚披露會へ行つたかい。」

「いや、行かなかつた。」彼は早口だが斷乎と云つた。「土曜日でなかつたし、わざ〳〵出て來るのも億劫だつたからね。此の前の土曜日に來た時、お祝ひの品を屆けて置いて、僕は失敬した。不純な氣持で出たつて、向うにも失敬だし、此方も不愉快なだけだからな。何しろ皆變だつたさうだよ。」

「ふうむ。——」私はもつと詳しく聞きたい衝動と、聞きたくない氣持とを鬪はせながら、矢つ張り結局は促すやうに云つた。「どうして。」

「何しろ何方かの端に集つた、小林だとか海田と云つたやうな連中の間では、新郎新婦を遠くから眺めながら、誰かゞ

杉浦をオセロだと云つたら、誰かゞ又否イヤゴーだと云つたんださ。そしたら例の青木がそれを聞いて、ひどく憤慨したさうだぜ。」

秋山も面白さうに、しかも自分のうまく反感を盛つて、そんな事を云つた。

私は何と答へていゝか解らなかつた。而し矢つ張りさうして、

「ひどい事を云ふ奴らだね。」としか云へなかつた。

私はさう答へながら、又厭な氣がした。何故その悪口を云つた人たちに、大つぴらに感謝すると云ひ得ないのか、何故その噂話に、思ひ切つて快哉を叫び得ないのかそうした方がどんなに男らしくて、正直で、氣持がよい事かと思つた。

秋山はもつと續けて云つた。

「新聞に寫眞が出てゐたね。」

「あゝ出てゐた。杉浦の奴、苦難を一身に背負つて立つたやうな顔をしてたぢやないか。」

私はその位が精々だつた。

「さうだつたかね。僕はよく見なかつたが、——あの寫眞を見てゐるとね。僕の家内の奴何と思つたか、何處かへ持つてちまつたんだよ。而して後でどうしたのかと思つたら、多子さんの姿の所を、剪刀（はさみ）で滅茶々々に突き破つてゐた。女性から見ると、あゝいふ事をした者は裏ぎり者のやうに憎いんだね。」

私はあの平素淑しい房子さんが、そんな事をしたかと思ふと、鳥渡妙な暗い感じがした。不思議な事には其瞬間、何だか秋山の細君に好意を持つては悪いやうな氣がした。難有迷惑と云つたやうな顔をせざるを得なかつた。それで。

「女つて、不思議に正義派だからね。」

と、から私ははぐらかすやうに云つて了つて、而して又悔ゐた、何だつて又心から房子夫人に、感謝の意を表し得ないのかと。——

「うん。みんなヒステリイに罹つてゐない奴はないからね。」

秋山は私に贊同するやうに、さう云つたのだつたが、その言葉は却つて私を、妙に淋しいものにさせた。私はそれを決して、單なる幼稚な正義心、乃至はヒステリイだとしたくなかつた。それならばそれで、何故初めから房子夫人の行爲を、もつと正面から大つぴらに受入れて、有難がらなかつたか。——私は私の卑劣を更に悔ゐなければならなかつた。

私が妙に默つたので、秋山は直ぐ話頭を轉じた。そして高等學校の横で別れた。

それと同じやうな事が、それからもつとずつと後にも、もう一度あつた。

牛込のS——社へ、用が在つて行つた歸りだつた。丁度月末の事で、用と云ふのは實は印税の前借りに行つたのだつた。縮み硝子を嵌めた、兩開きの大きな戸をあけて、玄關へ入ると、其處には私より直ぐ前に訪れたらしい、二人の私たちと同年輩位な來客が、主人が留守だと云ふので、歸らうとしてゐるところだつた。私は丁度出會頭で、少し慌てゝゐたのと、場所馴れぬ所へ、借金に來たといふ心配で、少し上つてゐたと見えて、それが誰だかよくも見ず、多分S——社關係の、靑年文士には違ひないと思つただけで、又さう深く氣にも留めなかつた。而して主人が居ないからと云つて歸されたのを玄關の隅で、鳥渡佇んでゐて見送ると、自分の方が少々困つたと思つた。

玄關で應接してゐる若い人が、二人の去つた後で、少しもじ〳〵してゐる僕に、

「何か御用でございますか。」と訊ねて與れた。

そこで僕は勇を鼓して、名を名乘つて、主人がゐないならば、代りの人にでも會ひたいと云つた。するとその靑年は

「少々お待ち下さい」と云つて引込んだが、又改めて出て來て、「主人がお目にかゝりますから、」と上へ請じた。私は不思議に思つたが、すぐ事情を了解した。そしてあの二人が、誰だつたらうと思つた。何だか鳥渡濟まないやうな氣がした。あの二人との位置の懸隔を得意になるべくは、餘りに露骨過ぎる氣がした。が、私は自分の用が足りる事に、何より急でなければならなかつた。

私は二階の應接間で、先づ主人の代理に出て來た駒井氏と、例の談判をしてゐると、階下から先刻の青年が上つて來て、私に電話を取次いだ。誰からだらうと私は疑つた。誰も私が此處にゐる事を知つてる者はない筈だつた。

「何でもお出になれば解るからつて、向うでは名前を仰有いませんでした。」取次いだ青年は云つてゐた。

駒井氏が傍から薄笑ひを含んで云つた。

「きつと井田さんと上山さんですよ。今貴方と入れ代りに、主人が會はずに返しましたから、其時貴方の居るのを知つてたんでせう。」

駒井氏は別に何とも思つてゐないらしかつた。が、私は妙に悪いやうな引目を感じながら、電話口へ出た。

すると駒井氏の云つた通り、それは矢つ張り井田氏と上山氏からだつた。二人は矢つ張り先刻歸りがけに、私が入るのを認めて、多分さうだらうと思ふから、まだＳ——社に居たら、是を機會に近附きになつて、一緒に茶でも飲みたいから、歸りに神樂坂の某カフエエへ寄つて呉れといふ用向だつた。私は妙な氣持で、今駒井氏と會つて、（とわざ／＼さう斷らずにゐられなかつた。）用談中であるから、用談が濟んだら直ぐ行くといふ、承諾の返事をせざるを得なかつた。

そして主人にも會ひ、用事も足して、それから指定のカフエエへ、何となく自然に強迫されるやうな思ひで、入つて

行つた。それが路次の奥にあるのも、烏渡其際浪漫的な印象を殘した。

入つて見ると二人は片隅の卓子に、もうウイスキイの杯を並べて、少し醉つてゐるらしかつた。

「あゝ。よく來て下さいましたね。井田君は君が怖れをなして、來て呉れまいと心配してゐたんですよ。」

上山氏は女のやうな優しい聲で云つた。顏も女のやうに色白で、娼婦のやうに色つぽく、眼の周りをほんのり紅く醉ひで染めてゐた。

「いや、僕たちと交際ふのが、御迷惑なのは解つてゐますけれどね。」

さう云はれた井田氏も、其心持ひしやげたやうな、淺黑い憂欝な顏に、處女みたいな可愛いゝ含羞を湛へ、詩人風な口籠りを以て、靜に微笑しながら云つた。その二人の言調は、直ぐ私を心安く思はせた。

私は申譯をして、そこの席に着いた。直ぐウイスキイが運ばれたが、私はそれを馳走になるのが、心苦しい氣がしてならなかつた。

上山氏が、私の其心持を察したものか、又は自分たちの事を、何よりも辯明して置く必要からか、直ぐから云ひ出した。

「實はね。私たちも先刻S――社へ遊びに行つたんですよ。ところが主人の奴私たちがお金でも借りに來たと見たか、居留守を遣つて會はないんでせう。私たちは何も金の事で行つたんぢやないんですけれどね。……さう見られても仕方がないでせうけれど、ほんとに今日はさうぢやなかつたんで、癪に支つたからかうして飲んでるんですよ。だから貴方も遠慮しないで、一緒に付合つて下さいな。」

事の眞偽は兎も角、さう云つて呉れたので、私も何となく安心した。而してやがて心置きなく、S――社での妙な侮

越な地位に對する濟まなさも忘れて、話し合つてゐた。すると上山氏が何かの序でに、私への親愛を表示するためか、こんな事實を話り出した。

「私たちはね。あの榎町の通りや何ぞで、よく杉浦に會ひますがね。二人とも彼奴が大嫌ひなんですよ。殊に此の井田君なんぞは、大人しい癖によほど憤慨してると見えて、此間なんざあ醉つ拂つたまぎれに、あの中根の門の所までわざ／＼出掛けて行つて、杉浦！。出て來い！。杉浦を出せ！。つて怒鳴つたりするんですからね。眞實ですよ。」

「五六遍怒鳴つたけれど、家の中からは誰も出て來なかつたね。僕はあの時實際、門を引倒してやらうかと思つた。」

あの優しげな詩をかく、大人しい井田氏自身も、少し醉つてそんな相槌を打つた。

「さうだつたね。君はあの時門の扉をどん／＼叩いて、それから身體で押してたよ。」

私はそれらの會話を、息を飮んだやうに默つて、苦笑を浮べながら聞いてゐた。どう挨拶していゝか解らなかつた。それで私が默つてゐた爲に、二人は又別な話へ移つた。私は其時寧ろ不興げな顏をして、傍を向いたに違ひなかつた。

後でその二人と別れて、家へ歸る途中、私は何故又あの時、二人の手を取つて私の心持を代辨して貰つた事を、感謝しなかつたかと思つた。而して自分が想像では、屢々神樂坂あたりでゞも醉つた時に、俥で中根家まで乘り込んで行つて、門を十字に開かせ、中へ躍り入つて面罵してやらうかなぞと、時に考へたのを思ひ出した。それだのにかの井田氏の行爲を聞いても、苦々しげな顏をするなぞとは、非常に男らしからぬ事だと思つた。

憎め！。もつと積極的に惡め！。何の關係もない第三者でさへ、あれだけ憎惡を持つてゐるものを、おまへは現在當事者でありながら、それにも劣る生溫さでどうするんだ。お前が是で憎みに徹し得ないやうでは、眞に腑甲斐ない限りではないか。——かう私の心の中で、鞭打するものがあつた。

かくして私は、努めて彼らを憎悪した。憎悪しなければいけないと思つて憎悪した。憎悪する事が自然であり、必然であると思つて憎悪した。

二

丁度流行性感冒が、猖獗になり初める頃の事だつた。

其頃は池田が、文壇に嘖々たる名聲を得出した時分で、彼は新聞社をよすと同時に、私の近所に移つて來て、其處で作家生活を營み初めたので、彼と私との往來は、今迄より可なり繁くなつた。それ前までは、どちらかと云へば中根家の近くに、彼の住居があつたために、私も何となく行き憎かつたし、又事實杉浦の方が、却つて散歩の序でに寄つたりして、割合に往來してゐるらしかつたが、今度は此方へ住居が近接して來たのと、同じ作家生活をしてゐるので、ずつと私の方が親しくなつてゐた。それにもと／＼彼は、杉浦たちの行爲を、仕方がないと理性で是認はしてゐるもの丶、たゞ杉浦とは、向うが訪ねて來れば世間話をすると云つた程度で、交際する事はやめなかつたが、中根先生との關係も薄かつたし、夫人の生活氣分とも肌が合はないので、さう向うの家へは同情も持つてゐなかつた。彼は杉浦がだん／＼中根家の生活氣分に化して、自ら成金ぶつて行くのを、苦々しく思つてゐたのも事實だつた。そして其反對に、作家生活の艱難を共にすると云ふ意味からだけでも、私とは親しくなつて行つたのだつた。杉浦と會つてゐても、彼は話題に窮するらしかつた。文壇の話をすれば、勢ひ私たちの動靜に觸れるだらうし、觸れゝば何らかの意味に於て、杉浦に厭な思ひをさせるに決つてゐた。それでさういふ問題を避けて、極く世間並な雜談しか出來ないと云ふ事は、自ら二人の友情を疎離させたらしかつた。私は時々池田から、そんな風な言葉を聞いた。

「……杉浦と話をしてゐても、二人の話の中味が違ふんで、ちつとも興味がないよ。向うの話ぢや精々疎水全集の賣行と

か、それに入れる書束の蒐集とか云ふ位なものだし、此方の話ぢやあ、今の文壇の事なんぞ向うで反感を持つだけだし……仕方がないから、まあ差し障りのない澤田の噂とか、日常生活の話とかをするんだが、さうすると着物の事なんぞ話す時銘仙なんてもう普斷着でなくちや着られないなんて云ふんで、癪に支つて了ふんだよ。そんならお前の着てゐる大島は、誰が拵へたんだつて云つてやり度くなるからね。」

それは池田が、幾らか私に對する親愛と同情とで、私にだけ少しは誇張して云つてゐるものには相違なかつたが かうして彼は疎くなりながらも、矢つ張り普通には交際してゐて、私が杉浦の噂を聞くのも、矢つ張り彼からが一番多かつた。彼もその多くは、もつと杉浦に近い澤田から取次ぐのだつたが、それでも私に取つては、唯一の情報局の觀があつた。澤田は吾々の間に等しく親しい友人だつたが、あの事件の最中は洋行してゐて、全く關知しなかつた。而して後で歸朝すると、前から杉浦とは少し親しくなる傾向のあつたのと、又二人の反文壇的な氣分――それは秋山や池田や私なぞが彼らに先んじて文壇に出たために、立遲れの形で反感を持ち出したらしかつた――で、より近く結び付けられてゐた。そして池田も澤田とは、前に其家に世話になつてゐたりした關係上、時に何のかのと往來してゐたので、池田が誰よりも、直接間接に杉浦に接する事が多い道理だつた。といふよりも彼が一番私に杉浦の事を話しいゝ境遇にゐたのだつた。

或日私は池田を訪ねて、四方山の雜談に耽つてゐた。主に文壇の話だつたが、其中にふと何かの機會で、池田がこんな事を云ひ出した。

「……時に君、君ももう知つてるか知らんが、昨日澤田が來ての話しにね。杉浦が流行感冒に罹つて、大學病院に入院してゐるとさ。」

「へえ！」私は初耳だつたので、島渡驚いた。

「澤田が見舞に行つてね。其歸りに寄つたんださうだが、大分悪いらしい。入院する位なんだから、よく／＼ないには定つてゐるが、何でも肺炎になりかけてゐるんで、ひよつとすると危ないかも知れないさうだよ。」

「ふうむ。さうかい。」

私はたゞそれだけしか答へなかつたが、其時の心の中を、ひら／＼と行き過ぎた、或る冷たいものゝ影を、自分でもはつきり感ぜざるを得なかつた。私は息を途斷らしたまゝ、自分の顏の色が變つたやうにさへ感じた。杉浦が死ぬかも知れない！　その事は冷りと頸へ觸れた惡魔の天啓だつた、私は直ぐ心の底で、彼が死んだら、どんなに清々するだらうと思つた。どんなに胸が霽れるだらうと思つた。それ見ろと云つたやうな、天が代つて仇を打つて呉れたやうな氣持と共に、彼の凡てが許し得るに違ひないと思つた。

實際私は、彼の過去の行爲を、決していつ迄も憎んでゐると云ふのではなかつた。寧ろ過去の行爲として、現在彼があゝして立派に存在してゐるのを――或意味に於て榮えてゐるのを、氣にせざるを得なかつたのだ。つまり世俗の諺と反對に、罪を憎んで人を憎まないのでなく、罪を許して人を憎んでゐるのであつた。私は實際杉浦が、あゝして中根家に引込んでゐてさへ、自分の仇敵が浮世の片隅に存在してゐて、何時自分の眼前に現はれるか解らぬと云ふ事は、一種不安な感じを齎した。私はよく杉浦が、大作をひつ提げて、再び文壇に現はれる時の事を豫想した。私がひどく日々の仕事に追はれ、新聞の續き物などに詰つて、苦しく情けない氣持になつてゐる時などは、よくそんな事を連想した。彼はあゝして暇もあり、生活も安定なんだから、必ず永い間に手をかけて、立派な作の一つや二つ出來ない譯がないと思つた。さうしてひそかに書いた大作を、世の中へ――多分その時はあそこの家に關係の深い、岩沼書店から刊行するだら

うと云ふやうた事まで想像した。――發表して、一擧にして吾々の文名を獲し、戀愛に於て勝者であつたばかりでなく、實際文學の上でも、自分に優る事を事實に於て證明されたら、果して自分はどんな氣持がするだらうと思つた。實際そんな事は、決してないとは限らなかつた。限らないではない。實際あり得べき、作つて然るべき事だと思はれた。自分たちがかうして、小刻みな仕事に追はれて、本氣な大作を〱と心では望みながら、だん〱一生を擦り減してゐる中に、彼は徐ろに養つた潜勢力で、盛り返して來る位普常の事だつた。實際彼の位置に、私がゐたと假定すれば必ずすると思つた。そして彼の名前には、それに依つて私が得たと同じ位、否今となつては寧ろそれ以上に、世間の興味が集つてゐるだらうし、又、やゝもすれば惡口を云はれ易い私の地位から、私に對する反感だけでゞも杉浦のさうした作物を、妙に世間が認めないとも限らなかつた。――さうなつたらどうだらう、と私はよく考へた。私にはさうなつたとして、それを笑つて過せるだらうか。喜んで認める程寬大でありうるだらうか。私には自信が無かつた。恐らくはさう云ふ窮地に陷つた場合、自分の心にある妙な弱者の聖者性と云つたやうなものが彼の作を喜んで認めたがるには相違ないと、ひよつと思ふ事もあつたが、併しそれまでに達する苦鬪は、思つて見るだに堪らない氣がした。又或る時はさう云ふ事があつたら　きつと自分も死身になつて、泣血の苦心をした力作を以て、それに對抗するだらうと思つた。そして結局は、自分の幸福だとも考へられた。出て來い！、さうも思つた。が、それでもそれは一種の、自己瞞着であり強がりに過ぎなかつた。矢つ張り眞實を云へば、いつ迄もあの片隅に引込んで居れ！たと云ふのが心の眞の叫びだつた。併し彼が此世に居る以上、而して自分が彼に對して、仇敵意識を持つてゐる以上、彼がいつ何時出て來ないとも限らなかつたし、出て來れば脅かされるに定つてゐた。私は實際よく新小說や、解放などの豫告、新聞の消息などに彼が創作を寄せるといふ報告を讀む度に、心の中でどきりとした。而してさう云ふ氣持を、更にはつきりさせ、卒業して了ふた

がく、戀と仕事との二つの競争に、徹頭徹尾敗けて[illegible]を、幾度か小説に構想してみた。この使ひ古されたテーマは私の取り扱ひやうに依つては、再び生々となる[illegible]かした。が、幾度か計畫しても、ほんとに自分を伸ばし切つて、そこに至る事が出來なかつた。其時分私は、友人からクープリンの「繪畫」と云ふ小説の話を聞いた。それは殆んど私の計畫と、同じものだつたが、併しその戀仇の畫家の傑作を裂くといふ其結末は、一應私の胸にぴつたりとは來ても、それだけでは何ら私の生活への暗示にはならなかつた。矢つ張りその不安は、一生私に祟るだらうと云ふ氣がした。その彼の存在が、ひよつとすると無くなるかも知れない！さう池田から聞いた時、私は思はず心の中で、死んで呉れ！どうか死んで呉れ！と願ふやうな心地になつた。それと同時に、因襲的道念の司配下にある私の他の心は、心弱き卑怯者よ、おまへは自分の力で彼の存在を征服し切れないで、そんなにまで天の力を借りたいのか、と責めてゐた。が併し自分が、積極的に願はないまでも、自然に死んで呉れたらどんなにいゝだらう。と、さういふ考へからは、到底脱する事が出來なかつた。

こんな事を考へて、息さへ窒迫してゐる間に、池田は猶も頓着なく、話し續けてゐた。

「何でも初めさう重くない流行感冒に罹つて、家に寢てゐたんだが、傭つた看護婦が妙な奴で、癒りかゝつた杉浦を眞つ裸にして、冷水で拭いたんだとさ。何でも醫者がさうしろと云つたと云ふんで、その看護婦の云ふ通り拭かしたら、それから更に病勢をぶり返して、肺炎になりかゝつたんださうだ。後でよく聞いて見ると、其看護婦つていふのが杉浦に惚れてゐて、夜中にそつと杉浦の病床へ入つて來たりしたんださうだ。而してその水浴も、杉浦を裸體にして拭きたかつたから、そんな嘘をついたんださ　だ。嘘かほんとか知らないが、杉浦も飛んだ奴に惚れられたもんだね。」

ひどういふ女にもせよ、杉浦が女性に對して、そんなにまで魅力を持つてゐるといふ證據になる話は、私に取つて不愉快だつた。

それから話頭を轉じた。そして他意なく他の話に打ち興じた後夜もかなり晩くなつてから私は家の方へ歸つて來た。途中一人になると、私は又しても杉浦の死の事に思ひ及んだ。彼が自分の行手の、自分の家からさう遠く離れてゐない所に、横はつてゐるのだと思ふと、何となく妙な因縁めいた氣がした。私は彼の病床の樣を想像した。彼の枕邊に、心配してついてゐるであらう冬子の姿を想像した。そしてそつと大學病院へ寄つて、彼らの樣子を見て來ようかと思つた。容態も聞き知りたい氣がした。「大分惡い」なぞと聞かされたらさぞ安心するだらうと思つた。が、そんな事は想像でなし得ても、迚も實行の出來る私ではなかつた。

池田の家から歸る道に、小さな神社があつた。その祠は小さかつたけれど、其近隣の緣日の中心でもあり、又何か御利益があるといふので、附近の人々の尊崇を集めてゐた。私の母なぞも、よくお參りに出かけた。私も屢々散歩に出た折などは、文運隆昌の祈願を籠めながら手を合した。一體私は子供の時から、うちの老母の感化でお祈りとかお詣りとか願がけとか、お守とか云つたものに、殆んど童話めいた迷信と、尊敬とを持つてゐた。私は半分以上本氣で、そこの不動さまの守護を信じてゐた。

其前を通りかゝつた時、私はふと立停つて、杉浦の死を祈らうかと思つた。而して祈つてやれと云つたやうな、妙に面白半分な衝動も手傳つて、つか／＼と其境內の方へ入つて行つて、祠の前に立つた。私は手を合せて、祈念した。が、さすがに杉浦の死を眞つ先に祈る事は出來なかつた。私は先づ自分自身の健康を祈つた。それから例に依つて、文運の隆盛を祈つた。而して偖それから、愈々杉浦の死を祈らうとして、自分はぐきりと行き詰つて了つた。何だかひどく恐ろ

しい事をするやうな心持と共に、人を呪へば穴二つと云ふ諺へが、はつきり思ひ出されたりした。そんな事は出來ないと思つても、時々祈つた後で、そんな氣持に惱まされでもしては堪らないと思つた。そして慌てゝ合掌した手を離すと、そこの暗い堂の前を逃げ出した。――堂は内部に灯一つ點いてゐないで、暗くしんとしてゐた。四邊には誰も見てゐるものはなかつた。

私はその堂の前を去つてから、併しまだ暫らくの間に、祈らないでよかつたといふ氣がしてゐた。が、思ひ切つて、自分の身命を賭しても、祈れたら猶よかつたらうとも思つた。併しそれから以後に、改めて祈りに行く勇氣は出もしなかつた。

それから二三日の間、私は心待ちに、杉浦が死にはしまいかと思つて待つてゐた。さういふ知らせが、文藝消息か雜報へでも出やしまいかと思つて、鳥渡胸を躍らかせて毎朝の新聞も見た。が、何の事もなかつた。

卻つてそれから十日ばかり過ぎて、私は杉浦が退院した事を、池田から簡單に聞いた。當が外れたと云ふよりか私は吻と息を吐くやうな氣落ちを覺えた。あの晩祈らなかつた事なぞが思ひ出された。そして卻つて無事でいゝのだといふ氣がした。

併し呪はなくても、穴は二つだつけ。と云ふのは、其後で私が、杉浦と同じ流行感冒にかゝつて了つた。杉浦の罹つたのは、その年の冬の初めの、十一月頃だつたが、感冒はそれから後に、更に其威を逞しくして、翌年の二月、猖獗の絶頂に達した。私は正月の末に芝居の用で大阪へ行き、歸りに底冷えのする京都で病菌を得て歸つたらしかつた。京都では舊友の矢田部が、此時分檢事になつて赴任してゐたが、私を祇園へ連れて行つて與れた。而して彼が京都大學にゐた時分、行きつけてゐて暫らく行かないと云ふ家へ、案内された。そこで私は眼鏡を寒さうにちらちらさせた舞妓が、襖障

子を開け放つた向うの、廣い板敷になつたところで、都踊りの雛型のやうな踊りを踊るのを、火鉢に獅嚙みついて見てゐた。寒さうに黑ずんだ鏡のやうな板敷で、此方の座敷の電燈がよく及ばないやうな中を、舞子たちのちらりほらり飜す袂や袖が、妙に儚ない冷たい色を帶びて、見てゐる私の脊や脇の下をぞく／＼させた。おまけに座にゐた一人の女が、流行感冒の後の、咳をげほ／＼させてお酌をした。‥‥

東京へ歸つて見ると、身體が妙に懶くて、熱があるやうな氣がした。が、平常風邪を引きつけてゐる私は、さう大した事に思はなかつた。それにもう、それで大阪へ行つた用事の二月にM――座で上演する私の芝居の稽古が、私と前後して一座も歸つて來たので、M――座の本家茶屋で初つてゐた。もう上場間際なので、押しても其處へは行かなければならなかつた。

私は其處へ行つて、もう出來上つた道具も見なければならなかつた。人氣と、燈火と、裝飾のない劇場の中は、吹き晒しのまゝと同じ事で、がらんとして、寒く埃つぽかつた。舞臺勿論、花道から平土間へかけて、塗り上げられた大道具が、一ぱいに乾してあつた。それが生ながらに、晝間の薄暗い光線の下では、呆けたやうな色を呈して、灰色寒く横つてゐた。私たちの見るべき道具は、舞臺の奧に立てかけて在つて、さすがに暖い色をしてゐたが、重ねて立てかけた道具の間の通路から、厭に冷たい風が吹いて來て、裾からずつと寒さが透み入るやうな氣がして、ゆつくり見てもゐられなかつた。平常は生暖い感じのする膠の香さへ、ぞつと鼻の穴を刺戟した。――道具其物には、殆んど異存はなかつたので、私は稽古場である茶屋の二階へ歸つた。

稽古はまだ初まつてなかつた。が、人々は集つて、一番目狂言の讀み合せをしてゐた。私は殆んど正座とも云ふべき所の、與へられた火鉢へ身體を寄せて、ぼんやり皆の讀み合せを聞きながら、待つてゐた。何だか身體を動かすのが大

費で、頭も疲れてゐるやうに底ほてりがしてゐた。私はぼんやり、早く稽古を濟ませたいと思つてゐた。

と、向うの下廻りの人たちが、多勢集つてゐる方で、遠慮しながらではあつた。急に動搖が起つて、皆々がそこの障子を開けて、戸外を眺め出した。讀み合せの聲に氣を取られて、私は少しも氣がつかなかつたけれど、微かな飛行機の爆音が聞えてゐた。丁度ステインソンといふ、狐のやうな顏の女流飛行家が來て、洲崎の埋立地で曲乘りをする日だつた。私も火鉢に噛みついてゐた身體を伸ばして、直ぐ傍の河岸に面した窓の障子を、がらりと開けて見た。雪催いの薄暗い、蔽ひかぶさるやうな空が、陰鬱に擴がつてゐた。私は鈍く光つた堀割の上の、向うの灰色の屋並と、そこらに亙つた枯柳を遠景に――劇場の前へ帆柱のやうに立つてゐる幟竿の間から、ずつと彼方の鉛色の空を眺めた。そこは一番に重く平板で明るみを湛へた所さへなかつた。その空の中途で、それも淡い鉛色をした一葉の飛行機が、小さくくるりくるりと旋轉してゐた。それを見ると私の頭は、淡い不思議な壓迫を感じた。私は旅疲れのせいだな、とふとさう思つた。而して早く家へ歸つて、寢れば直ぐ癒ると思ひ直した。雪催ひの重い空氣が、矢つ張り冷たい風となつて、窓から吹き込んだ。私はステインソンが、どうなつたかよく見究めもしないで、窓から首を引込めた。

それで稽古場からは、其日は早く歸つたけれど、家へ歸つて見ると、氣分はそんなでもなかつた。それに其日は丁度T――劇場の初日で、私たちの關係のある出し物が出てゐるのを思ひ出すと、あの場内は充分溫かだし自分も暖かくしてさへ行けば、こんな風邪心地位何でもないと思つた。そして澤山シャツを着て出かけて行つた。中でも外套を脫がないやうにしてゐた。其上抵抗療法の積りで、盛んにウイスキイを飲んだ。が、どうも醉心地が尋常でなかつた。身體中が惡く火照つてゐた。それで友人の久能木君が、何處かへ行かないかと誘ふのをさすがに斷つて眞つ直家へ歸つた。

その夜明けから苦しくなつた。朝起きられないので熱を測つて見たら、三十九度を越えてゐた。もう流行性感冒に

相違なかつた。癒るまでは、いつもの樂天家で自分だけは罹らないやうな氣でゐたが、矢つ張りとう〱罹つたかと思つた。

それから三四日の間は、同じ位の高熱の中に呻吟してゐた。もう紛れもない流行性感冒の、しかも惡性な奴だつた。醫師は、私と同じ中學を一年前に出た橋田と云ふ人が、直ぐ近所の町にゐたので、其人に賴つて診て貰つた。

橋田氏は他人事でない程熱心に診察して與れたが、狀態が容易でないのを見て取ると、自分の先生株に當るK——博士を招聘して、立合つて診て貰つて與れた。まだ其時は病勢はさう進んではゐなかつた。

が、その一兩日後、大雪が降つた日、私は朝の咳に、鮮な血が曳いてゐるのを自ら知つた。そして呼吸が困難なのを感じた。愈々肺炎になつたなと思つた。急いで橋田氏を呼んで診て貰つた。と、右肺がとう〱犯されてゐた。又K——博士が呼ばれた。診察の結果は、矢つ張り橋田氏と同じだつた。博士は色々な注意を與へて去つた。肺炎はまだ右一方だけだからいゝやうなもの〻、左へ傳染つたら大變だ。そんな事を橋田氏は私は聞かせて與れた。が、私はまだ心配はしなかつた。例の妙な樂天的氣質で、人が隨分此風邪で死ぬのを、毎日新聞や話で知つてゐながら、どうしても自分だけは死なない氣持がしてゐた。罹るまでは自分だけは罹らない氣でゐたが、罹つて了ふと今度は、自分だけ死なない氣でゐたのだつた。

併し、頭の下には氷枕、額には氷嚢、胸には前後左右に二つづつ、少し大きい氷嚢を抱かされて、火のやうに早い心臟の鼓動と、殆んど呼吸といふ程の間もない位、切迫した呼吸困難の喘ぎを自分が意識すると、矢つ張り自分も死ぬかも知れないとは思つた。カンフルとジガーレンが、三十分置きに注射せられた。それに依つても私は自分が瀕死の狀態に在るのを知つた。まだ死なない、まだ死なないと思ひながらも。……

此間の正月休みに來て、又日立鑛山へ歸つたばかりの叔父が、不意に現はれたのを見た時は、私もおやと思つた。是は俺は死にかゝつてゐるのだなと思つた。が、その氣持は、割合に平氣なものだつた。のみならず叔父が、殆んど問はず語りのやうに、「丁度又學校が休みになつたものだから鳥渡又來て見た。」と云つたのを、私は小供のやうに信じた。

「惡くすると死ぬな。」それだけは少くとも明白だつた。

私はうつら／＼とする高熱と、胸に波打つ鼓動と、淺く喘ぐ呼吸とで、苦しい中に考へた。自分が此儘死んだらどうだらうと。――色々な對人關係が思ひ起された。友人の秋山や池田や齊木や、其の他の人々がどんな顏をするだらうとか、自分の其後知り合になつた女の人で、誰が泣いて呉れるだらうとか、ひいては葬式の事や、後の遺稿の事などまで考へられた。そして、妙な虛榮心のある證據には、私の死の報導が、新聞にどの位の大きさで出るだらうとさへ思つた。が、何と云つても其際、一番私に早く浮んで、しかも永く心を惱ましたものは、矢つ張り杉浦との問題だつた。

私はふと杉浦が、曾つて私が、彼の死を願つたやうに、私の死を庶つてゐるに違ひはないと考へた。私の病氣の事はもう新聞にも出たゞらうし、又もう何度も見舞に來た齊木も、話したであらうから、中根家でも知つてゐるに違ひなかつた。さうとすれば彼らに取つて、私に取つて彼らが邪魔である以上に、邪魔であり憚りである私の、死を願はない筈はないと思つた。殊にあの强氣な、そんな事を何とも思はない、私のやうに心でふと思つても、すぐ氣が咎める男とは違つて、平氣でその位な事を思ふ杉浦が、心からさう願ふのは明白だと思つた。そしてそれは冬子とても同じだと思つた。彼女は氣を咎められても、ひそかに死んで呉れゝばいゝと、又これはもつと狹い實感で、女らしい殘酷さで、庶ふに相違ないと思はれた。私はかう云ふ場面を、まざ／＼と想像した。そこは小春日のぽか／＼當つた、中根家の椽側だつた。杉浦と冬子とは、二人の間に生れた赤ん坊を間に置いて、一方は新聞でも見ながら、一方は赤ん坊のための赤い

布——それがはつきり想像に浮んだ——か何かを仕事でもしながら、睦じく世間話でもしてゐる所へ、齊木が何時も知つた案内で、ずつと入つて來て、丁度池田が私に杉浦の事を知らして吳れた通りに甲ン高い調子で云ふ。

「君たちは知つてるか知らんが、久野が流行性感冒で、大變悪いんださうだよ。ひよつとすると死ぬかも知れない。」

「ふうむ。さうか。」から杉浦は云つて、傍にゐる冬子の方を顧みる。二人の目が合ふ。その目の中には、其時にはつと感じた思ひがはつきり出てゐるのを見合つて、怖ろしいやうに口を噤む。云ふまでもなくその思ひといふのは、「死ねばいゝ!」といふ事だつた。而してそれは齊木の前で、まさかに表現は出來なかつたが、さう思つたには違ひなかつた。事によると齊木の居なくなつた後か、又は寢物語の時にでも、その思ひをお互に云ひ合つたかも知れないと思つた。：：：まさか口には出さない迄も、さう思つた事に違ひはないと私は信じた。そんな事を考へるのは、自分の卑しい根性から出た、彼らに對する恥づべき邪推だとも思つたが、併しさう邪推する方がずつと正當でもあり、その位な事を思ふ權利が在るやうな氣で、私は憚りもなくそんな場面を想像した。

　彼らに對する想像は、引いて中根夫人にも及んだ。夫人に取つても、私の存在は苦になつてゐるに違ひなかつた。而して夫人も私があの時杉浦の死を神に祈らうかと思つた通りに、平素の信心深い心持から、必ずあの榎町のお釋迦樣へでも、祈つたであらうと想はれた。夫人は殆んど毎日、彼處へお百度を踏みに行くのを私は知つてゐた。それは願ひの筋があるといふよりも、たゞお釋迦樣がついてゐると思つて、氣强く立派に事を行ひ得るたいだ〱、平素よく話しては居たが、こんな際にはひよつと自分の死を、願をかけはしないだらうかとさへ思はれた。私は薄暗い夕方に、あのお釋迦樣の石疊の上を、夫人が特に茶屋に預けてある自分の度數測りを持つて、一度〳〵に堂前で押し頂くやうに糸を一本〳〵を外しながら、往つたり來たりしてゐるさま迄想像した。：：：：：：而して其呪を消すにはどうしたらいゝだらうと

思つた。私は床の中で、それに對抗するために、手を合せて例の不動様に守護を願つた。

それほどまでに、私の想像は高熱に浮かされた憎惡の中で育つて行つた。而して私は若し此儘死んだら、實際彼らの處へ化けて出るより外はないと思つた。お互ひに此世に生きてゐる間は、此世での運命若しくは因縁として、彼らの存在は或程度まで許して置けても、私たけが肉體を失つて、靈魂のみに歸つて了つたなら、その靈魂に許された力を擧げて、彼らの肉體的存在まで亡ぼさずには置けないと思つた。氷を抱きながら私の胸は火のやうに熱かつた。燃え立つやうな心臓と、高熱でくわッと音を立てゝゐるやうな頭痛と更に困難を極めて來た呼吸とで、その憎惡と怨恨とに喘ながら惡魔になつて横はつてゐた。

併しいつの間にか高熱の爲に、呪はれた私の身もうと／＼と和んで來た。夢とも現ともつかぬ、身體はぢつと壓し付けられてゐるが、頭はふら／＼と浮遊するやうな感じの、とろ／＼と薄明るい世界だつた。——私は眼を開いたまゝ、微睡(まどろ)んでゐたに違ひなかつた。

と、其時私は、前に意識的に持つた憎惡とは、まるで反對の事象にぶつつかつた。

……私は矢つ張り同じ病床に寝てゐた。而してもう死ぬのだといふことが、どうしてだかはつきり解つてゐた。解つてゐたが、私はさう驚きもしなければ、悲觀もしてゐなかつた。何だかほんとに死ぬんでなくて、たゞさう宣告されたといふだけの事だと、心の中では思つてゐた。死ぬんだが死にはしない。——まあ其狀態を云つて見れば、そんな風な氣だつた。私はそんな氣で病床に横りながら、誰かの來るのを待つてゐた。

そこへ看護婦が、不意に頭の上から現はれて、

「杉浦さんがおいでになりました。」と云つた。

私はどきりとして、「さうか。此方へお通し。」とか何とか口の中で云つた。而して心の中で思つた。「さうか。矢つ張り杉浦が來て呉れたか。」さう思ふと同時に、自分は先刻から、一生懸命で彼の來るのを、待つてゐたのだつたと思ひ返した。「さうか。矢つ張り來て呉れたか。ぢやあ、とう／＼謝まりに來たんだな。」私は繰返してさう思つた。

私は杉浦の來る方の、障子の方を見守つてゐた。それがもう大分煤けて、切り貼りの痕の目につくのが氣になつた。此間、K――博士が、それを輕蔑的に眺めたやうに思つたが、今日も杉浦に、そんなつまらない所で輕蔑されたくない氣があつた。杉浦が來るんなら、あんな障子も貼りかへさせて、自分の髯も剃つて置くのだつたと思つた。が、もう仕方がなかつた。杉浦がそんな所へ氣がつかないで呉れゝばいゝと思つた。

さう心配してゐる中に、杉浦がその障子をすつと明けて、中へ入つて來た。這入つて來て、いつの間にかそこへ座つた。幸ひに障子には目が付かぬらしい。

「やあ。よく來て呉れたね。」私はかう云つて、彼の顔を見返した。

「うむ。今日齊木が來てね。君の話を聞いたものだから、急に思ひ立つてやつて來た。どうだい容體は。」彼は親しげに訊いた。

「うむ。もう駄目らしい。――僕も死ぬ前に一度君に會ひたかつた。」さう云ひながら私は今迄彼に對して、あんなに惡意を持つてゐたのを、心の中で濟まないと思つた。

「僕も是非君に會つて、一言お詫びをしたいと思つてね。それでかうして突然來たんだ。――君、どうか許して呉れ給へ。そして元通り交際つて呉れ給へ。冬子も君さへ許して呉れゝば、喜んで往來すると云つてるよ。奥さんも非常にそれを望んでゐる。皆は家で僕の歸つて復命するのを待つてゐる。君さへ許して呉れゝば、すぐみんな此處へ來ると云つ

てゐるよ。」

「さうか、――僕は許すよ。許すとも。もと〳〵仕方がなかつたんぢやないか。僕だつて悪いんだもの。」

私はかう云つて、ちつと彼の顔を見返した嬉しくて、感動して、涙が溢れるのを、一生懸命堪へてゐた。此處で先に泣いては、杉浦に嗤はれる、そんな妙な反省があつたのだつた。

「さうか。有難う。みんなもどんなに喜ぶか知れない。ぢやあ直ぐ連れて來よう。」

かう云つて、杉浦は立つたやうだつたが、夫人や冬子たちが、直ぐそこらにゐると見えて、「おうい。早く來い。」と呼ぶやうに云つた。……私が其方を覗くと、向うの横町の電柱の陰に、肥つた夫人と、傘をさした冬子の姿が見えた。彼らは遠くからにや〳〵笑つて近付いて來た。私は急に胸が躍るのを抑へる事が出來なかつた。……

と、私はその半ば夢幻で、半ば意識的な假睡から、はつと吾に返つた。寢てゐたには違ひないらしい。足の方に入れた湯タンポの熱で、腰から下にべつとり汗をかいてゐた。

「お目がさめましたか。赤酒を上げませうか。」と看護婦が横合から云つた。

「いや、――」

私は今の事象を、矢つ張り結局夢幻だと知ると、何だか耻しいやうな氣がした。が、更に又殘り惜しいやうな氣がしてならなかつた。それで其氣分の續きを追うやうに、喉は渇いてゐたが、さう斷つたまゝ、身動きもしないで眼を閉ぢた。もう、それが一場の幻であつた事は、もうはつきり解つたが、その感動の名殘りが、妙に感傷的な氣持のまゝで、尾を曳いて殘つてゐた。涙が、實際先刻から少し濕るんでゐたトに、そーつとこみ上げて來た。

それと同時に私は、前に云つた通り、そんな夢を見た事が耻しかつた。夢といふよりそれは、自分が希望で作り上げ

た幻影だと云ふ氣がした。さう思ふと、私は何といふ甘い人間だらうと思つた。何て儚ない事を望んでゐる奴だらうと思つた。何て弱い男だらうと思つた。實は先刻も、あの憎惡と共に想像した時、私にもかう云ふ想像が、ふと浮び上つて來ないではなかつたのだ。それをたゞ私は、虫のいゝ、弱い自分を庇ふ如何にも儚ない想像だと思つて、すぐ叱り消したものだつた。

それが少しうと〳〵すると共に、自分にまざ〳〵と幻想となつて、浮び上つて來たのだ。

併し私はその幻想を起した事と、それによつて假りにも起された感動を、決して悔ゐる氣にはならなかつた。それほど私は感動してゐた。それは私に、心弱いと云はれても何でも、兎に角彼らを許すといふ、善意があるのを證據立てたやうな氣がした。たとひ幾らか意識が殘つてゐて、多少芝居氣はあつたにもせよ、許すといふ氣持が、私の本心に內在してゐるといい感じは、矢つ張り私を不快にはさせなかつた。

私は靜に自分を憫れみながら、しかもそれを是認する氣持で、泌々と涙ぐんだ。而して改めて思つた。

「さうだ。ほんとに私が此儘死んで了ふんなら、彼らに會つて一言許すと云つてやらう。矢つ張りその方が、私の取るべき道らしい。」

而して向うから、折れて出て來るのを待つてゐた夢幻の中の、あの弱い儚ない僥望に對しては、それを耻ちる代りに自ら進んで此方から彼等に、和解を申し出でる事に依つて、卑怯でなくなると思つた。

私は母を呼んで、杉浦に私が死ぬ前に一度會ひたいから、來て吳れるやうに傳へて貰はうと決心した。が、それはさすがに躊躇された。まだ死なない。まだ呼ぶのは早い。さう思つたからだつた。杉浦に傳へるにしても、愈々となつてからでいゝと思つた。まだ死ぬとはどうしても思はれなかつた。死なない中に、早まつてそんな事をして、又後で生きて

人々に喰はれでもしてはならないと云ふ氣もあつた。許すなら、死――私の此世のすべてが終る時、でなければならないと思つた。それで母を一應呼んだが、また其事は何にも云はずに了つた。たゞさう決心しただけで、私の心に妙な滿足があつた。

　まだゞ、まだ云ふのは早い。まだ〳〵だ。と思つてゐる中に、併し私は生命の危機を乘り越してゐた。熱度四十度三分。脈搏百二十五、呼吸五十を算した時でも、私は「まだゞ〳〵」と思つてゐた。そしてとう〳〵「まだゞ」で濟んで了つた。私は矢つ張り呪はれてはゐなかつた。

　病は私の思つてゐたより、ずつと重いものだつた。そしてそれが回復するまでは、又可なり永い間かゝつた。その回復期の永い間の、高熱で呆やけたやうな無爲な頭腦で、私は時々杉浦の事を考へた。

　あの時、とう〳〵お終ひまで死ぬと思はなかつたので、化物になつて出もせず、又許すと云つて手を取つて泣きもせず、かうして今迄通りに、共に天を戴いてゐるやうになつたのを、物足りない氣もした。あの時あの決心通りに、少しも後の事なんぞ顧慮せずに、許すと一言向うへ通じて置いたら、どうだつたらうなぞと思ふ事もあつた。そしたらそれが機縁になつて、二人の間がずつと平和に傾いてゐたかも知れないと悔まれる時もあつた。が、併し矢つ張り、あの儘でよかつたのだと一番多く思はれた。もう今更になつてどうにもしたい氣は出なかつた。この儘でいゝのだ。此儘が一番自然的なのだ。……そこに淋しい滿足があつた。

　けれども其頃の私の心は、何と云つても生き伸びたといふ歡喜や、生命拾ひをした感謝の念で、何に對しても和やかだつた。私は彼等に對して、もう病前の憎惡のやうな、激情を驅り立てる事なんぞ全く出來ないのを感じた。

　病癒えて、やうやく歩行が出來るやうになると、一番先に池田の家を訪ねた。

久しぶりで、もう幾らか袷ではぽか〳〵し過ぎる日を浴びながら、足試しの積りか何かで、ゆつくり〳〵ではあるが、併し撓まずに富坂を上つて行つた私は、輕く汗ばんだ身體を、暫らくで友の家の二階へ運び入れた時、云ひ知れない感情が迫つて、微笑と一緒に涙ぐんだりした。池田もあのしよぼ〳〵してはゐるが奥深い、人懐つこい眼をしばたゝいて喜び迎へて呉れた。

「よく來たなあ。――もうこんな所まで出られるのかい。」

「うん。どの位歩るけるかと思つて、試驗的に來て見た。何だか馬鹿に出て見たくなつてね。」

私は近くの砲兵工廠で、鐵砲を試射するらしい、爆音を物珍らしく聞き咎めながら、池田といろ〳〵な話をした。と何かの機會を捉へて、池田は云はう〳〵と思ひながら、躊躇してゐたらしく、又いつかのやうにこんな事を云ひ出した。

「君、實は今まで君の身體に障りでもすると惡いと思つて、少しも云はなかつたけれど、君の病氣の惡い最中にね、突然齊木が僕の處へやつて來て中根家の意志だが、君が金に困つてゐるやうなら、幾らでも出したいと云ふから、取次いで呉れと云ふ話だつたんだがね。」と、彼は目をぱち〳〵させて、私の顏を覗き込んだ。

「ふうむ。」私は意外な事を云ひ出したので、少し胸を灑ろかせながら、息を引緊めるやうにかう受ける外なかつた。

池田は持前の少し黄色な、焦き込んだ調子で續けた。

「無論僕は斷つたよ。君に云ふまでもないと思つて、きつぱりその申出を斷つたよ。だつて君、失敬ぢやないか。君とあゝいふ關係になつてゐるのに、幾ら君が病中困つてゐるからと云つて、今更そんな事を云ひ出すのは、君の弱身につけ込んで侮辱的恩惠を施すやうなものだからね。下品な言葉で云へば、金で面を張ると云つたやうなやり方ぢやないか。君だつてまさか敵のやうに思つてゐる家の、そんな恩惠を喜んで受けはしまい。」

と、彼は少し興奮して、益々目をぱち〳〵させながら、續けるのだつた。

「僕は一體そんな事を中根家が云ひ出すのが、非常にいけないと思ふんだ。よくもそんな事が云ひ出せたもんだと思ふんだ。今更そんな事を云ひ出せる義理ぢやないぢやないか。」

池田は私が、いろ〳〵な錯綜した感慨で、ただぎゆつと息窒つたまゝ、何とも答へずにゐる私の顔を見つめて、同意を促すやうに云ひ立てた。

が、私は、さう彼に云はれると、益々妙な氣になつた。彼の憤慨の語葉が、思ひの外に激しいのを聞くと、嬉しいやうな氣もしたが、併し實際心の奥では、その事實に對する池田の態度より何より、中根家が私に金を出さうと云つた、その事實だけが私の胸をぎゆつと摑んだ。好意不好意を穿鑿するよりも、向うが私にそんな風に心を動かして來たと云ふ事が、何だか私を妙に感動させた。矢つ張りさうだつたかと思つた。私は池田の言が終ると、何と答へたらいゝか鳥渡解らぬ氣持で、しかも答へを促がさるゝまゝに、思はずかう答へた。

「併し君はさう憤慨するけれど、先方はさう惡意でやつたんぢやないよ。」

池田は默つて私の顔を見てゐたが、何とも云はなかつた。そして何故か口を噤んで、不服さうに下を向いて了つた。

實際私は、池田から初め話を聞いた時から、先方に惡意があるとは、迚も信じられなかつた。却つて矢つ張り向うに償罪の意志があるといふ事が、心の底で非常に嬉しかつた。矢つ張り私が夢に見た通り、向うではあゝ云ふ場合どうかして折れて出たい氣持があるのだ。さう私は思つて了つた。で、池田が、續いて憤慨し出した時は、さうかな、成程さうも見られるな、少くとも私が彼らに見せた今迄の敵意に蔽せて、逆に私を押へ付けるやり方でないとも限らぬとも思つた。それとも齊木が使者に立つてゐるので、ひよつとすると齊木のさしがねかも知れぬとも思つた。が、そんな事

は問題でなかつた。それほど迄に私にはたゞその償罪の意志の表示が嬉しかつたのだ。殊に池田の憤慨に合はせるのは、彼にさう先を越されてゐては、私の性分として平常の場合でも抑切つて益々憤慨する氣にはなれなかつたのだ・・・・

暗く寒くならない中と思つて、私は歸途についた。そしてまだ妙に鎭まらぬ胸の中でその問題に就て考へながら歩いた。

果して先方では、池田の云ふやうに、惡意で申出たのだらうかと思つた。何だかそこに池田の、[illegible]所としての洞察はあるが、考へ過ぎてゐはしまいかと思はれた。あの申出が池田の云ふやうに見える事は事實だつた。此方にさう思はれても仕方がない事も事實だつた。が、併し向うとして見れば、此方がさう取りはしまいか位、考慮を拂つてゐるに違ひないと思はれた。さうまで無反省か、さうまで此方を見縊つてゐる筈はなかつた。寧ろさう取られるのを恐れながら、恐る／＼伺ひを立てたとも見れば見られない事はなかつた。幾ら惡辣無双の彼らとて、惡意でやるとすれば、此點に考慮を拂はない筈はなかつた。却つて此方から其點を見破られて、衝き返されでもしては恥の上塗りだ。――さう思はぬ筈はなかつた、果してさうだとすれば、その申出は、向うが此方からの拒絶に依つて、遂に顏を潰される事を犧牲にして迄、衷心からさう申出たものと見られた。而して池田の拒絶に依つて、向うが一種の侮辱を感じたに違ひない事は、いづれにしてもはつきり考へられた。

金を返した事、それは今更池田に、何の不服を云ふ所もなかつた。それだからそれは現に彼にも感謝した。實際自分がその話を直接聞いても、謂はれもない金を、喜んで受取る事はなかつたらうと思つた。併しその申出に對しては、實際ある感情で受納出來たかも知れないと思つた。さうしたなら、或ひは彼らとの關係も、少しは緩びがついてゐたかも知れないと思つた。少くとも私が病床で、彼らを呼び寄せて和解しようと思つて、それを果たさなかつた後で、あの時一

時の感銘にもせよ、さうしたらよかつたと思つたのと同じ程度で、淡い殘り惜しさの感じがないではなかつた。而して池田の好意は、非常によく解つてゐながら、少々そのきつぱりした態度を、恨むやうな氣さへあつた。

私は彼が、「病氣に障ると思つて默つてゐた。」と云つた言葉を、改めて思ひ返して見た。而してあれだけ人間の心持を解つてゐるべき筈の彼でさへ、矢つ張り人の氣を察する事は出來ないのだと思つた。而して若し私があの病中彼らの事を思ひつゞけてゐる時に、その言葉を聞いたなら、ひそかに淋しく微笑んだらうと思つた。そしてその心の動搖で自分が惡くなるやうな事は少しもなかつたに違ひないとも思はれた。さう云へば池田の考へ方は、あの申出に對する考察にしても、一應深くは入つてゐながら、妙に意地とか男子の體面とかに囚はれた、考へのやうに思はれてならなかつた。更に突込んで云へば其考へ方は、私一個の問題としてゞはなくて、彼ら友人が一種の見榮のために、彼等に取つて私が立派であらせたい爲に、さういふ所置を取つて呉れたのだと、少し難有迷惑に考へられないでもなかつた。彼ら友人たちは常に、私が凛として立つてゐる事を、彼らの見よいといふ立場からばかり望んだ。

秋山も、感激して許し合ふといふやうな事を一種の露西亞小說かぶれのした、アフエクテーションだと思ふやうな所があつた。池田はあんな事があつては、憎んで意地を張り通すのが、人間らしいと信じてゐるやうな所があつた。而していづれも彼らの概念に當て嵌めて、私を律しようとしてゐるやうに感じられてならなかつた。

私の失戀後の妄動も、たゞ彼らには意氣地なしとしか思はれぬらしかつた。而して自分の和解を欲する心も、又彼らから見れば、見つともない弱い努力と、蔑まれるに違ひなかつた。

私は淋しかつた。が、其心の奥には、微かな滿足が在つた。矢つ張りそれは、人の好意を信じた報酬だつた。今はたゞそれだけそつと持つてゐる外なかつた。……病後の心はひそかに涙ぐんでゐた。

三

澤田の歸朝が、杉浦と會ふ機會を、私は恐れながら待つてゐた。澤田は私たちがまだ仲がよかつた時分、私たちに並んで送られながら、横濱の埠頭を發つた。而して私と杉浦との事件は、恐らく杉浦からの手紙で知つたであらうとは思ふが、併し彼は吾々のいづれに對しても、友誼に於て前と變るべき筈はなかつたから、どつちかゞ避けなければ、又二人は他の友人たちが交つたとしても、同じ埠頭に相並んで澤田を迎へねばならなかつた。——私は杉浦と會ふのを怖れたが、又會つてみたい意志も可なり心の中で動くのを感じた。それは幾らか怖いもの見たさと云ふ感じにも似てゐた。會へばお互に、硬くなつて睨み合ふ形となるに違ひなかつた。が、又どんな事かで、和解の道へ導かれないとも限らなかつた。

それ前に私は杉浦と、偶然に二度ほど顔を合はしてゐた。一度は淺草の或る活動寫眞館でだつた。そこで活動同好會と云つたやうな、映畫見物の會が在つた時、幹事の高部君から案内状を貰つて行つてみると、高部君は殆んど何も知らずに、大宮といふ矢つ張り故先生の有力な門下で、私に取つては先輩であり、又あの問題の反對者であつた人と、一緒に杉浦をも招いで了つてゐた。私は遲れて行つて、戸外から入つたために、殆んど見えない暗闇の中に例の齊木の顔をやつと認めると、其横へ割り込まして貰つたが、ん〳〵眼が暗に馴れて來て、齊木の右にちやんとしてゐた、杉浦の顔を、ちか〳〵と映寫機からスクリーンへ送る光りの反映で、仄白く幻のやうに發見した時、ぎよつと驚いたのだつた。而して其場は、私の彼らに對する感じも生で、そして一緒に活動寫眞を見てゐるのが苦しくなつたし、又齊木や同じく行つてゐた臼田氏などの扱ひで、私だけが先に歸る事になつて話はついた。臼田氏は大宮氏の親友で從つて又中根家の連中とも知り合つて居り、それでゐて又妙な所から、私の知己の一人でもあつた。兎に角私はさういふ人から、矢つ張

り敗者として遇せられ、自分も亦自ら敗者として其場を逃げ出したのだつたが、これを後に小説に書いた事もあつた。

それから暫らくたつて、今度は實に偶然、本郷三丁目から區役所前までの一と停留場間を、同じ電車に乘り合せて行つた事があつた。私が三丁目から、急いで後ろの車掌臺から飛び乘つた電車の、中央の空席へ行かうと思つて、ふと車内へ歩み入らうとした時、私はふと前方の席に腰をかけて、ぢつと窓越しに外を眺めてゐる杉浦を、はつきり直ぐ認めて足を竦ませて了つた。杉浦の方では、氣がつかぬらしく、たゞ前の窓から外ばかり眺めてゐた。ひよつとすると氣がついても氣がつかないふりをしてゐたのかも知れなかつたが、兎に角私は、その此方を見ないのを幸ひ、彼に背を向けるやうにして、入口の隅へ身を寄せた。動悸が抑へても／＼どき／＼した。而して次の停留場で下りて乘り換へようかどうしようかと思つてゐた。又敗けて逃げたりしては見苦しいと云ふ氣がまだ在つた。それで眞面には見ない迄も向うが下りる迄電車に乘つてゐようと思つた。そして吊皮をぎゆつと握りしめてゐた。杉浦が自分を見出したら、どうするだらうと思つた。下りるかも知れないと考へた。さうなるといゝがと思つた。……と、區役所前まで來た時、私は矢つ張り考へ直して、餘程自分が下りやうかと思つて、そつと杉浦の様子を窺つたら、丁度彼が思ひがけなく、立つて割に廣い洋服の肩を見せながら、前方の運轉手臺の方へ行くところだつた。私は吻としながら、自分の持ち堪へてゐたのを祝福すると共に、杉浦が實際此處で下りるので下りたのか、私を知つて避けたのかと疑つて、そつと窓から彼の姿に注意してゐた。と、彼は後を顧みもせずに、區役所の角を大學病院の方へ曲つて行くのが、此方も遠ざかり行く電車の中から、人參色にくつきり見えた。……矢つ張り彼の下りる所だつたのだ。……

それはみんな可なり前の事だつた。だから今度會つたら……と、どうするともなく、時には寧ろ唾を吐きかけてやらうと思ふ事すらあつてだが、何とはなしに機會が待たれた。

さういふ點から云つて、迎へに出さへすれば、殆んど杉浦に會ふに定つてゐる澤田の歸朝日は、一兩日に迫つてゐたが、私はまだ行かうかどうしようかと思ひ惑つてゐた。

すると、前日の夕方、秋山と池田とが、揃て私の家に訪ねて來た。何か澤田の歸朝に就ての用件に違ひなかつた。で暫らく別の噂話をした後に、それとなく聞き出さうとした。

「君。澤田の船の着くのは何時だい。」

と、秋山は池田を顧みて、その顏色を窺つてからかう云ひ出した。

「君。實はね、僕たちはその澤田の歸朝の話で來たんだがね。明日は午前十時に着くんだけれど、君は迎へに行かないやうにして呉れないか。こんな事を云つて、君に氣を惡くされちや困るが、今日池田とも相談して、君は横濱へ來なくてもいゝだらうと云ふ事に決めたんだよ。決して止める譯ぢやないが、又杉浦と會つたりすると、君も不愉快だらうし又僕たちも甚だ所置に窮するからね。」

「ふうむ。さうかい。」私は何となく浮かぬやうな心持ながら、さう答へた。

と、池田も傍から云つた。

「別に君、行かなくつても不愉快ではないだらう。どうせ行つたつて詰らないからな。」

「さうだよ。」秋山も相槌を打つて續けた。「僕も行かないで濟めば濟ましたいと思ふよ――澤田には、よく事情を云つて置くから、決して惡く思はせたりしやしないよ。」

さうなつて來ると、二人の私の心持を忖つて、さう宥めるやうに云つて呉れるのが、少し腹立だしくもあつたが、もう跡も不服なぞは云へなかつた。私は氣を引立てゝ云つた。

「さうだね。僕も明日は失敬して、改めてお祝ひにでも行かうかと思つてゐたんだから、さうして呉れりや丁度いゝ。ぢやさうして呉れ給へ。」

「その代りと云つてはおかしいが、出迎へには杉浦が出て、それから吾々で歡迎會を開かうと思ふんだが、其時は君に出て貰うと。――さういふ事にしようぢやないか。」

「さうか。それも異存はないね。」

「ぢやさうして呉れ給へ。」

「さうしよう。」

そんな事で、事は決つて了つたが、私はそれでよかつたと、何となく安らかな思ひがすると同時に、何となく心待ちにしてゐた機會を、はつきり否定されたやうで、何處かに滿ち足りない思ひがあつた。

明くる日は、冬の事だつたが、うらゝかに晴れてゐると思つて、私は嫉みに似た心で空を仰いだ。而して今時分は、あの青い汐を泡みながら、岸壁に横づけされたであらう澤田の船や、迎へに出た一家の人々、秋山、池田、それから杉浦の姿を思ひ浮べてゐた。そして今日出迎へずとも、いづれ澤田が歸朝すれば、昔の友誼の復活を企てゝ呉れるかも知れない、さうしたら和解出來ない迄も、面白いと呆やり考へたりした。

が、其後も澤田は、矢つ張り二人を近づける事などは、決して出來ない事であるのみならず、却つて二人を侮辱すると思つたのか、決してそんな仲介の役などには出なかつた。

彼を通して、私は偶に噂を聞く位なものだつた。その中でも、杉浦が魚眼眞珠會社の重役になつたと云ふ話は、私たちを尠なからず微笑ませた。

私はいつの間にか、澤田の仲介なぞも斷念してゐた。而して今はたゞ、何か自然な機會か、若くは我武者羅な友人か何かゞ、無意識に、又は厭應なしに、二人を會はせてゞも呉れなければ、二人は顏を合せる機會もなからうと思つた。又さうまでして貰つて、會ひたくないのも解り切つてゐた。勿論會ひたいと云ふのではなかつた。出來るなら會ひたくないと云ふ方に近いのは當前だつた。が、それでも會つたら……而したらひよつと、……さう云ふやうな氣持が、ひそかな期待を持たせてゐた。刺戟を求むる氣持も、その中にはあつた。併しその機會はもう永く來さうもないのに、私はもう馴れ切つてゐた。

其時分の事だつた。前にも云つた臼田氏が、船舶の研究に、英國へ行く事に決つたのは、而して彼は其秋の末の一日朝早く東京驛を出發する事になつた。

その前晩に、私たちの知合だけで、送別會みたいな事をした時、臼田氏は呉々も云つた。

「君はいつも寢坊なんだから、明後日も決して見送りになんぞ來て呉れちやいかんよ。立つのが八時なんだからどうせ頼んだつてそんなに早く起きもしまいけれど……」

「えゝ。」

私は笑つて、さう曖昧に答へて置いたが、起きられたら、見送りに行かうと思つてゐた。親切で氣をきかして、さう辭退するのだとばかり思つたから、一つ思ひ切つて早く起きて、臼田氏を驚かしてやらう位の氣はあつた。

で、其朝七時頃に、ふと眼が醒めると、さうはつきり見送りに行くと定つても居なかつた決心を咄嗟に決めて、私は床を跳ね起きた。而してざつと顏を洗つたきり、もう時間の切迫したのを見ると、飯も食はずに東京驛へ向つた。

海上ビルデイングの前で下りると、私はその白煉瓦の全面に、ひんやりした朝の光が當つて、ふと中層頃に、太刀川

何とかと書いた金文字を、眩しく射返してゐるのを、眠く腫れぼつたい半眼に窄めて仰ぎながら、足はそれと反對に急いで運んでゐた。と、私の後から同じやうに急ぎ足で、前屈みに歩いて往く人が、ふいと横から覗き込んで、

「やあ、久野君ぢやないか。」

と、優しげな聲で呼びかけた。見るとそれは、中根先生の門下の先輩で一番先生の家へ接近してもをり、又私と冬子との問題の最も激しい反對者だつた大宮氏だつた。大宮氏が、今日出發する臼田氏の、親友である事は私も前からよく知つてゐた。而して此頃は大宮氏も、私の眞價だけは知つてゐると云つて、いつか臼田氏が何かの序に、私に話した事さへあつたので、今日此處での偶會は、不思議とは云へ偶然でない氣がした。

私は帽子を取つて挨拶して、それから並んで停車場の方へ向つた。

「まだ間に合ひませうか。」

「五分位あるでせう。」

二人はそんな位の事しか、別に話しもしなかつた。が、同一の人を送りに來たといふ事が、此頃やゝ反感の薄らいだ此人に、幾らか親しみを感じさせた。

切符を買つて、私の方が先に改札口から入つた。もう人々はみんな歩廊の方へ出でゐた。地下道を通りぬけて急いで階段を上つてみると、直ぐそこに人々が一ぱい立つてゐて、臼田氏はどこにゐるのか解らなかつた。私は少し昂奮したやうな氣分で、さつさと先に立つて、汽車の窓々を見配りながら、歩廊の先の方へとずん〳〵歩いて行つた。勿論窓の前に立つてゐる人々の後ろを。

と、中途まで行きかけると、後ろで、

「おい久野君、久野君、此處だよ。」

と、大宮氏が呼んだので、振り返つて見ると、そこに新聞社關係か何かの知らぬ友人たちに取卷かれて、臼田氏が白いとぼけたやうな顔を、新らしい洋服姿の上に浮かして立つてゐた。

「どこへそんなにずん／＼行くんだい。」

私は鳥渡赤くなつて、笑ひながら近づいて、それから大宮氏の後から改まつて挨拶した。

「君は到底來ないだらうと思つてゐたよ。ほんとに濟まなかつたね。こんなに早く起きたのは、何年にもない事だらう。」

そんな事を云つて、臼田氏は答禮してゐた。挨拶が終ると、私ばかりが見送り人ではないと思つて、二三歩引退つた。而して初めて四邊を見廻した。先程まで氣が付かなかつたが、周圍には私の知つてゐる人が、數多來てゐた。それで一々その顔に、私は笑顔で御辭儀をした。と、三四人先の、柱の横にゐたK——新聞の渡瀨君が、私を見つけて「やあ」と動いた時、それに答へて御辭儀をした後で、ふと見ると其後方に、茶色の新らしい中折帽を被つた、洋服の男が立つてゐるのを發見した。其顔を見た瞬間に、私は見たやうな人だなと思つた。而して其時は既に私の手は、自分の帽子にかゝつてゐた。杉浦だ！とすぐ思ひついた。といふよりも解つた。向うでも此方を見てゐた。けれども私は帽子にかゝつた手を、其儘止める事は出來なかつた。思ひ切つて鳥渡叮嚀に會釋した。すると向うでも、鳥渡心持どぎまぎしたらしかつたが、すぐ帽子を脱いで、同じやうな會釋を返した。私はそれを見ると、急に恥かしい事をした後のやうに、急いで身を退けて、人混みの間に目を轉じた。何だか胸が又どき／＼した。が、何だかそれは胸を緊めつけられるやうに妙に快よい壓迫だつた。私はそれをぢつと保つて、下を向いてゐた。

「暫らくでした。」と、例の活動寫眞の幹事役をしたK——新聞の渡瀨氏が、近づいて來て云つた。「其後どうですか。た

まには公園の方へも御出かけですか。臼田君が居なくなつて、一人肝煎が減つた譯ですけれど、又やらうぢやありませんか何でも今來てゐる『虎の爪痕』といふのが面白さうですよ。」

「さうですか。」私は仕方はしに、内心苦笑しながら應じてゐた。「ぢや又やりませう。その『虎の爪痕』といふのは、連續物ですか。」

私はあの活動寫眞で會つた時の、杉浦の事なぞを思ひ出しながら、胸一ぱいに妙な感慨を以つて、口ではそんな事を云つてゐた。

「さうです。ルス・ローランドのです。」

「ぢやユニヴアーサルのぢやないんですね。」

私はかう云ひながら、今胸にある事と少しも係りのない、つまらない事を云つてるなと自ら思つた。何だか妙に苦しいやうな泣きたいやうな思ひだつた。が、又對手にならずにはゐられなかつた。

「さうです。會社は何處ですか知りませんが、……」

私はその映畫の會社なぞは知らないでもいゝと思つた。何だか早く何處かへ脫れて、一人で今の妙な杉浦との對面をゆつくり考へたり思ひ返したりしたいと思つた。

其途端に向ふの柱につけてある鈴が、鐵の柱を顫はして鳴り渡つた。私は吻とした。臼田氏はもう何時の間にか、汽車に乘り込んで窓から首を出してゐた。そして杉浦の方にも私にも、一緒くたに別れの挨拶をしてゐた。

それから、すぐ又そこで、萬歲といふ聲が響いた。一つ所で云ふと、それが小團體へまで傳染つて、錯綜した別辭に交つてその叫びが幾度となく繰り返された。

けたゝましい鈴が間を置いて、又すぐ鳴り續いて、そして止んだ。步廊は鳥渡の間しんとした。

「それもいゝ、それもいゝ。」私は何ものにとも知れず、そんな呟きを洩するやうな心になつてゐた。……(大正十年三月)



ほるとがる女の手紙

大泉黑石

一

此國へ來た足で何故妾はすぐ葡萄牙へ引返さないのか、と云ふことを妾はあなた方御兩親へつぶさにお報せしなければならぬと思ひましたから、あまり長過ぎてお讀みづらいでせうが、とにかく巨細に書くことをおゆるし下さい。それは今朝のことでした。兄のアントニオや嫂のお留さんや、娘のヨアンナは、まだ階下の店で寢てゐました。太陽が此街を圍んでゐる丘の一番高い頂から出る少し前でした。妾は眼が醒めたので、寢床は其儘にして置いて露臺へ床几を持ち出して港の景色を眺めてゐたのでした。日の出前に吹いて來る肌觸のよい潮風が、朝霧に淡々しくぼかされてゐる男神岬といふ港口の涯先から一頻り動き出して、この露臺に夜つぴて引廻してある大きな日蔽の裾を捲りに來るのでした。すると日蔽の兩端に結りつけてある丸い鐵のたまの錘が、日蔽の裾に引摺られて、ごろごろごろごろと露臺の敷板の上を轉がる音が、睡眠不足の妾をも一度眠りへ誘ふて行きさうなのです。妾の次に早く起きるのは兄の子のヨアンナで、ヨアンナは起るや否や、ごそごそ二階の露臺へ上つて來てこの長崎の言葉で何かしら饒舌るのですけど、妾には何だかちつと

も無らないので、大抵うん〳〵と點頭いて見せると、ヨアンナは物足りないやうでも滿足なのです。たとへばヨアンナが露臺の下を覗いて何か口走る時には、足もとの濱邊に新らしいアポプラの花が咲いてゐるとか、青白い鮒口魚が波をくゞつてゐるとか、揚げ潮に水雲がふわ〳〵浮き上つて居ると言つた工合でした。ところが、その朝大抵やつて來さうな時刻になつて彼女は顔を見せません。たゞ、こそ〳〵一人で起きて窓を繰るやうな音は聞えてゐましたから、暫く心待ちに待つてゐたけれども、なかなか來る樣子がないので、どうしたのだらう？　また寢ちまつたのかしら、などと考へ乍ら、狹い板敷を行つたり來たりしてゐると、露臺の床を下からコツ〳〵と突く音がしました。それが餘り不意だつたので、ぎよつとして欄干の方へ跳びのきました。ところが、どうでせう。丁度露臺の眞下の濱にヨアンナが竹竿を持つて立つてゐるではありませんか。彼女はこんな惡戯者でした。ヨアンナは妾を見て

「叔母さん！　叔母さん！」

と言ひ乍ら、竹竿の先を欄干の處まで突き出して、何か說明らしいことを早口に饒舌りつゞけたかと思ふと、すぐ側の小さい棧橋から、表へ廻つて到頭二階へ上つて來ました。彼女は竹竿の先に突つかけてゐた白い圓い羊羹見たいな物を兩手に乘せて、態々妾へ見せに來たので、それは生きてゐる大きな傘水母だつたのです。

「ヨアンナ、有り難う。もう澤山です」

と云ふと、彼女は妾の氣嫌がうまく取れたと云ふ顔つきで、丁度海の上を漕いでゐた雜魚舟を目がけて、投げつける積りで、波の中へ放り込むと、舟の艫で一生懸命櫓を操つてゐた七八人の色の黑い裸の女が、こつちを見て口々に罵るやうな風をしました。それから妾がいゝから其儘にして置けと賴むのも聞かないで、さつさと夜具を疊んだり、蚊帳の釣手を外したりするのでした。ヨアンナはこんな子です。間もなくお留が箒を下げてにこ〳〵笑ひ乍ら

「ヨアンナはまた惡戯でせう」

と云つて部屋の掃除に來ました。

「俺がやるぞなもし」

とヨアンナはいきなりお留の手から箒を引つ奪つて、どしどし掃き立てました。お留は「いつもお早いのですね」と云つて手持ち不沙汰なものだから、直ぐ階下へ用足しに下ると、入れ違ひにお留の夫のアントニオが茶盆を抱へ乍ら、「昨夜も眠れなかつたかね」と云つて露臺へ出て來ました。「えゝ。蜴蜥や燕が五月蠅くつてね」と云ふよ。

「お前は燕や蜴蜥が怖いと見えるね。」とアントニオが云ふのでした。「怖かないけど、夜中に鳴くから厭ですよ。」「馴れて了ふと、それが愉快なんだ」「あんまり愉快つて代物でもないわ。いけ好かない泥見たいな畜生！」「でも、この街から燕や蜴蜥を取り去つて了へば、何にも殘らないのだからね。草花の色は美しくないし、小鳥にしたところで碌々囀りもない上に、翼からして、どれもこれも一樣に灰色なんだ。だから、街の人は燕に巣を拵へてやつたり、蜴蜥に餌を呉れたりして飼ふのだからね」「そう？」燕や蜴蜥を飼ふと云ふやうな話は一寸妾の好奇心を惹いたのでした。「お前だつて今に蜴蜥の聲が好きになるよ」「どうだか？」と妾は面白くもないと云つた風に微笑したのでした。夜半になると、濱邊のアポプラ畑から綠色の蜴蜥が露台へ上つて來て鳴くし、その上、露臺の庇に海燕が巣をかけてゐるので、時々目を醒すと、羽ばたきの音が耳につくのでした。

アントニオは、妾が濱へ下つてあの向ふ岸に建てゝある十字塔がぎら〳〵映つてゐる潮水で顔を洗つて居るうちに、露臺へ卓子を持ち出して、お茶を入れてゐました。妾が此街へ着いた翌る日に、あなた方へ送つた手紙に、アントニオの日常生活をあらまし記してゐた通り、彼は決つたやうに朝のうちだけ二階で過すのでした。

「今日は何をするんです。」

「何にもすることがないから、また臺から商品の虫干でもしやうかと考へてゐた處なのだ」

「妾に出來ることなら手傳ひませうか」

「すぐ國へ歸るお客さんに手傳つて貰つては氣の毒だからいゝよ。俺でなくつてもお留にも出來ることだから。」

あなた方の手でアントニオへ送り屆ける品物は、あらかたなくつてゐた處でした。いい塩梅に妾が共つて來た荷物があるので、アントニオの店は見られるやうなもの丶、それも直ぐ共一日で日本人の貿易商人の手に移つたので、殘り少なくなる有様でした。これから、妾どんなに悲しい話を書かねばならぬことでせう。

二

妾達は明日にでも乘つて歸らねばならぬあなた方に見送つていたゞいた、あのドミンゴー船を不意に燒かれて了つたからです。その様子をお話する前にこれだけのことを書かねばなりません。屋敷の二階で妾が歸國の荷造りをしてゐると、窓硝子が俄かに曇つたやうでしたから、全く何の用意もなく港口を眺めたのでしたが、その時あの麗はしい岬の影にぼやけた煙の柱が寂かに騰つてゐるのが見えました。けれども、格別氣にも留めなかつたのです。「あゝ。また今日も島火かしら？」と云ふやうや淡々しい淋しさの外に、妾の心を驚かすやうなものではなかつたのでした。島火と云ふのは、岬の影の小さい島（それは鼠島と云ひました）で、この一週間と云ふもの、虎烈拉のために、おびたゞしく斃れる市民の骸を燒き棄てゝゐたのでした。ところが日ぐれ頃になると、一つは夕陽の加減もあることでせうが、晝間ぽつと曇つてゐた二階の窓硝子が、まるで燻されたやうに蠢動く見えて、いつも、港の明るい波が、その硝子一枚の外側で、踊つてゐる景色もその時はひどく濁つてゐましたので、露臺へ出て見ると、三時間ばかり前までは、淺黄色に澄んでゐた空が、物凄く煙つてゐて、その影が港一面に映つてゐたのでした。「アントニオ！　アントニオ！　一寸此處に來てごらん」と妾は兄を呼びました。すると、アントニオは直ぐ階下から登つて來ました。「あの空模様はどうしたのでせう！」といきなら兄に縋りつくやうにして訴へました。アントニオは、その港の空の隅から隅まで見廻してから漸く驚いたと見えて、はじめて氣がついたやうに、

「どうしたと云ふんだらう？　どうしたといふんだらう？」

とまるで、檻の中の熊見たいに、狭い丸太組みの露臺を往つたり來たりして呟くのでした。

「火事かしら。それにしては馬鹿にひつそりしてゐるが、一體いつ頃から、あゝなんだい」

「妾が發見したのはたつた今なのですよ」

晝間見た煙の柱のことも忘れたわけではないけれども、まさか、あの細い煙が何時間つゞいたからとて、こう一面に港や市街を蔽ひ盡して了はうとは想像すら許さぬことでした。警鐘の響に餘つ程耳を澄してゐましたが、元々鳴つてゐないのですから聞える道理がありません。

「火事ではありませんよ。」

「すると、何だらう？」

火事でさへなければ、何も心配するには及ばないのに、どう云ふ譯だか、胸がどき〱して、氣の精か、丸太を踏まへてゐる足までが、心持ふるへて來ました。アントニオは妾よりも、どつちかと云へば、神經家で、日頃見馴れぬことに出逢ふと、たとへ、何でもないことにも、びくつく癖がありました。そして妾や、彼の妻のおとめに「あなた見たいな氣の小さい人が、よく日本まで渡つて來ましたねえ」などと笑はれては、その度毎に「以前はこうでもなかつたがねこつちへ來てから、いつの間に、こう臆病になつて了つたものかね」と自分でも、自分の物に怯え易くなつた性質が不思議に見えたやうです。こんな兄のアントニオ——それは妾がまだ葡萄牙の學校にゐる頃書物や芝居で觀た「クレオパトラ・エイ・アントニオ」の豪膽な英雄に似ても似つかぬ妾の兄のアントニオだから、決して見過すことが出來ぬことでした。

「今に消えて了つて、また夕燒の空が現はれるでせう」

と妾が云つたのに、彼は滅相もない話だと云ふ樣子をして、いつものやうに仰山たらしく

「何か變つた事件でも起つてるんぢやないかね」

と云ふのです。

「變つたことつて、こんな平和かな市に何が起るものですか」

妾はアントニオに心配をかける積りで呼んだわけではなかつたのでした。雲とも煙とも埃ともつかぬ朧ろげな薄い膜をかけたやうな空が突然妾の頭の上に流れてゐるのに出逢つた時、無意識に彼の名を呼んだわけなので、あとで、こんなことが彼の弱々しい、指の先で一寸觸つても、崩れさうに脆い心を驚かせたことになつて了つたと氣がつくと同時に氣の毒になりました。何故なら十二三年ぶりに見た彼は始終大きく小さく物に驚かされてばかりに居る性質に變つてゐたからでした。妾達のやうな葡萄牙人や、妾達とはいつも睨み合ひをしてゐる和蘭陀人を押し込めてゐるこの出島の廓に日夜見張りの役目をつとめてゐる役人が交代したと云つては、びくつくし、和蘭陀人が役人と立話をしたと云つてはそれを馬鹿々々しく氣に病むのでした。心配しても限りのないやうな些細な事柄にまで一一疑り深い目で眺めるのでした。妾とアントニオが佇んでゐる露臺の下は、港の波打際になつてゝ、大びらに出來るものなら、露臺の端から裸になつて海の中へ跳び込んだり、泳いだりしたい程。手近かに潮があげて來るのでした。（昨夜のやうに兄の子のヨアンナを裸にむいて秘然潮につけてやつたことはあるけれども）妾達――と云つても御存じの通り妾はつい四五日前の夏船で兄の屋敷へ來たのですが――の屋敷はこの廓の中の外國商館の一番はづれに建つてゐて、手前の並はみんな葡萄人、向ふ側は和蘭陀人の家ばかり、彼是七八十軒もあつたか？　だから、妾達の家で、少々聲高に、それも葡萄牙語で日本人や役人の噂をし合つた處で大丈夫なのに、兄は妾をこう言つて叱るのでした。「大體この廓に外國の婦人は入れないやうな規則になつてゐるのに、俺は役人に嘆願して、ほんの暫くしてまた外國へ戻すからと云つて置いてゐるのだから、役人の話は毛筋ほどして貰つても困る」。その時妾が不平らしく「だつて、外國の婦人と云つたところで、その人の妻でさへなければいゝと云ふのでせう？　それに妾とあなたの話は皆葡萄牙語なのでせう。」實際妾は先刻も一寸書いたやうに、一四五日前こつちへ來たばかりで、日本語は少しも知らないのでした。すると、それでも彼は「お前は剛情だね。たとへ

何處の言葉にしろ役人の噂だけは、やめて吳れと云つてゐるぢやないか」と云つた塩梅に、妙に解らないことを云つたことがありました。何だか話が邪道へ外れましたが、どう考へても解らぬ空合ひを（いやに小氣味は惡かつたけれども）眺め乍ら、何だらう、どうしたのだらう、などと埒のあかぬ押問答を繰り返してゐる時が、あの平和な猫の額見たやうな岬の蔭で、妾達の便船が、佛僧や信徒のために、靜かに燒かれてゐる時なのでした。それを妾達は、そうだと氣がつかぬのでした。でも何となく心配さうな目つきをして、一人でそわついてゐたアントニオは、一寸した出來事（例へば和蘭陀人が酒を呷つて仲間同志喧嘩をしたとか、廓門の外が騷がしいとか、波の色が厭らしくぎらつく日とか、門衛が代つた日とか）があると、直ぐ自分の側へ娘のヨアンナを呼ぶのですが、その時娘が居ないとなると、彼は妻のおとめや妾を追ひ立てるやうにして、ヨアンナを探させるのです。そして、ヨハンナを自分の側へ据へて置かないと、どうかされやしないかと云ふやうに凝ずとして落ちつけないのでした。そんな時は、勿論おとめや妾などにも足止めを食はせたものです。この時矢つ張りそうでした。「それ天地異變だ！」と云ふやうな、取つてつけた慌て方で、肝腎の空の事は放つといて。

「ヨアンナ！　ヨアンナ！」

と云ひ乍ら、階下を覗いて見て

「おや、ヨアンナはゐないかね？　ヨアンナはそこにゐませんか？」

と、店先でこそ／＼働いてゐたおとめに尋ねました。

「アントニオがそらまた始めた！」といふ風にお留から

「こゝに居ますよ」

と折返して來ることを彼は豫期してゐたらしい。妾も、二階へ上るときまで、ヨアンナは母親の側で、いらの木花で不格好な簪を拵へ乍ら遊んでゐるのを知つてゐたので、「何ぞのし？」と娘の方から、のそ／＼上つて來ることだと思つ

てゐたのでした。處がおとめの返事はあべこべでした。

「二階に行きましたろ」

「いゝえ！」

「ゐませんかのし？」

アントニオは、こゝまで來ると、半分血眼でした。血眼と云つても大袈裟ではないやうな狼狽へ方で

「何處へ行つたんだらう？」

とばた／＼梯子段を駈け下りて、駈け下りたかと思ふと、階下は一目で見透しのつく一間ですから、また二階へ引返して來て、

「ヨアンナの奴、またこつそり外へ出て行つたらしいね。油斷も隙も出來たものではない」と、癇の强さうな顳顬にみみず見たいな青筋を立てゝ、露臺の上から、海岸をぐる／＼見廻してゐました。

「近所の家へ退屈して遊びに行つたのでせう。子供だから仲々家にばかりゐる氣遣ひはありませんよ。」

妾は、この仰天屋の兄のする事を苦笑し乍ら見物する積りでした。

「お前は、さう云ふけれども、危なくつて仕樣がないのだ。お前が來る少し前も、廓の門の外へ、どうして出て行つたものか、あの橋の上で、通りがかりの子供に、こつぴどく酷められてゐたのを、やつと探し出したことがあるのだからね。」

「可哀さうに！」

今こそ兄の子が可愛いゝとは思ひます。そして「賢こい子ですね」などと兄を喜こばせることもありますが、最初の一日や二日は、睨みつけるやうにして自分の側から追つ拂つたものでした。彼女もまた妾を怖がつたものでした。

ヨアンナが馬鹿にされたり、輕蔑されたりしてゐるのは、廓の外を通つて行く市の子供や、こう云ふ妾ばかりではな

かつたのでした。葡萄牙人とも日本人ともつかぬ、例へば、首から上が葡萄牙人で、腰から下が日本人である彼女――鳥なら差し當り鴿の彼女――は――見たところ可愛らしいけれども、つぶさに眺むると、曇りを帶びた水色の眼を上下の瞼皮から放射して包む睫毛が眞つ黒であつたり、髮の生え際だけが、きわだつて茶色に光つてゐたり、淺黒い顔が顋の先で、桃の尻見たいに。ちよいと凹んで見えたり、頸筋から肩のふくらみへかけて急に白さが目立つて、腋の下の綿の花見たやうな纖い生毛が、その肩の方へ段々濃くなつて生えのびてゐると云つた工合で、何ともかんとも名狀の出來ない氣味悪さと厭らしさが、自然彼女を嫌ふやうにしたのです。こんな出來損ない見たいな奇妙な人種になつて生れた彼女は、丁度妾のはじめの心持ちと同じやうなところから、近所合壁の人達に、皮肉な冷やかな、嘲笑的な目で眺められたり、特別な取扱ひを受けたりしてゐるに違ひないと思ひました。ことに向ふ側に軒をつらねてゐる商賣仇の和蘭陀人がヨアンナに對する態度はてつきりそれなのでした。外國人の癖に、日本くんだりまで押し渡つて來て、變な女を廓うちへ引き摺り込んだり、珍妙な子どもまで拵へて！　どうするんだらう？　と云ふ風でなければヨアンナを捕へて「おい！　お前はゼルブネズかブルツズか」とか「おい！　お前のお袋の友達が來たよ」と云ひ乍ら、門衛の受付で鑑札を調べて貰つて、それから、だらしのない寢卷の上から、しごきの帶を締めた洗髮の賣春婦が、夕方頃からこの廓の家を一軒づつ覗いて歩るく姿を指して、にた〳〵笑ふ筈がありません。この和蘭陀人の見下げた言葉が、彼女に取つて有難い挨拶でないことも、ヨアンナ自身で今に解ることでせう。その時、この廓から一歩をも外へ踏み出すことを禁ぜられてゐるアントニオは、アントニオに限らず彼の妻おとめは、自分達の子供のために、一體どんな處置を取る積りなのか、そこまで突つ込んで聞いて見る勇氣もありませんから、默つて居ますが、そう云ふ世界で生れて十年と云ふ今日までまるつきり他の世界を識らずに、女と名のつく人間は妾（それもつい昨今の妾）を除けば一人もゐなくなるこの奇妙な男ばかりの島の彼方の隅では爪彈きされ、こつちの隅では悪態を吐かれて、人を見ると、この通りおど〳〵して穴の中へ逃げ込む鼠のやうに、きよろつく姿を見た時、妾は何と云ふ淺ましいことだらうと思つたものでした。妻を得れば

子供が出るでせう。然し目のあたりに、あの幽靈が白粉を塗つて夜と晝とを取り違へて出て來る繪が畫けさうな物凄い賣春婦が、遠慮會釋もなく廓の中の一筋の路を、べた〳〵と藁草履の尻を彈ねつ返し乍ら、無駄口を叩いたり、げらげらと虎魚(おこぜ)のやうな爛れた口をあけて笑つたりして、迂路つく景色を見てゐる妾には、「何故あなたはおとめと結婚したのでせう」とも言へないのでした。そんなことを考へるものだから、この間のやうに「ヨアンナは學校へやつてゐますか」と尋ねたわけなので、この廓の中に學校のないことは解り切つてゐるのに、何故そんな質問をするのだらうと云ふ風な口ぶりでアントニオは答へました。「やりたいけれども、そんな家がないからねえ。俺が學問でもしてゐると、こんな時に心配はないがなあ」と云つたかと思ふと、「お前の半分でもいゝから分けて貰へるものだつたら、こんな嬉しいことはないだらうがね」と染々した調子なのでした。妾がこんな話を切り出したのは、それが目的でもなければ、それでは妾が少しでもこつちへ滞在してゐる間、ヨアンナの手を取て教へて上げ樣と云ひだすための伏線でもなかつたのでした。

「困るわね。ヨアンナは讀むことも書くことも、ちつともいけないの?」その時彼は妾に向つて、面目なさゝうに點頭きました。

「この街にローマ・カトリック教の寺院があるでせう? ないことはありますまい?」「それはある。サン・ジュアント寺院があるよ」それ、あそこだと彼は二階の窓(それは、港口に烟の柱を發見した窓とは反對側の窓で、二階にはこの二つの窓つきりありません)越しに、直ぐ鼻の先に横つてゐる松山の麓を指して呉れました。サン・ジュアントと云へば、何だか妾達が十年も十五年も前に國のリスボン市で洗禮を受けた教會と同じ教派の寺院らしく聞えましたから、いい具合だと思つて、「そこへ寄宿させたらいゝでせう。ヨアンナが妾の娘だつたら、そうしますね。それが、一番賢い方法だと思ひますからね」とやゝ熱した口調でアントニオの頭から押つ被せるやうに言つてやると、彼は男の癖に、愚圖な、不得要領な、いゝとも、惡いとも、また有り難いとも、餘計なお世話だとも、つかぬ返事をし乍ら「どうかね」と云ふ程度で、話の的から逃げて了ひました。ついニ月ばかり前のことでした。それから、また前に逆戻して讀んでいた

ゞきたいのですが、あまりアントニオが一人で騒ぎ立てるものですから、お留まで二階へ上つて來ました。そのお留と一緒になつてうろついてゐるうちに

「あ！　あんな處に蹲んでゐる！」

とアントニオは到頭ヨアンナを見つけました。彼女は低い棧橋の下で裸になつて蟹の穴を探し廻つてゐたのでした。何處に着物を脫ぎ棄てたものか、無論その邊には見えないのでした。露臺から二三町はなれてゐる上に、棧橋の下は蔭になつてゐるので、今まで見えなかつたのでした。

「すまないがのし。お前一寸一走り濱へ行つて、ヨアンナを引つ張つておくれなもし」

と言つたかと思ふと、

「よか。よか。」

と今度は自分で階下へ駈け下りて行きました。

「いつもあんなですか。姉さん？」

と妾の側に來て、露臺の欄干に凭れ乍ら、濱を見下ろしてゐるお留に言ひました。妾が彼女にこうして話しかけるのは、ほんたうに稀なことなのでした。お留の方では、滿足に話が出來ないものだから、丸で口を利かうとはしませんし顏を合せる度に快よい、でも窮屈さうな會釋だけはするけれども、たゞそれだけのことで、妾に用があれば、大抵——と云ふよりも寧ろ——アントニオを通じて來たものでした。お留は不意打ちを食つたやうに目を圓くして、妾の言葉の意味を考へてゐるやうでしたから妾は今一度

「兄さんは、いつもあんな風に騒ぐのですか。お留さん？」

と云つてやると、彼女はあわてゝ、

「左樣（シーン・ミニエ・シニョレ）ですよ。左樣（シーン・ミニエ・シニョレ）ですよ。」

と言ひ乍ら、頬を赤らめて妾の言ふことが解つて好い塩梅だつたと云ふ風に、正直さうな笑ひを浮べるのでした。

「アントニオがリスボン港を出る時なんか、ひどい亂暴者でね。同じマトロスの仲間でも一科の强け者でしたから、妾や父は、あれで無事に航海を濟して歸つて來られるかしらと言ひ乍ら埠頭で見送つたものでしたけど、自分の國を離れて了ふと、あんなにまで溫順しくなるものでせうか」

と云つて見ました。腹の中では、お前さん見たやうな女と結婚したら、ヨアンナ見たやうな子供が出來て、こんな牢獄のやうな廓の中で生活してゐるうちに、だん／＼あんな人間に化つて了つたのかも知れないと云つた考へもあることはありましたけど。すると彼女は、得意さうに鼻の尖を微かに顫はせ乍ら、

「出島屋敷の中でアントニオは一番の賞暢者ださうですよ」

と覺束ない言葉つきでした。ヨアンナがアントニオに引摺られ乍ら、濱づたいに此方へやつて來るのを見てゐると、可哀さうになりました。

「あの子は友達がないので、ああして毎日遊んでゐるのを、父親の方では、もしものことがあつてはならないと云つて直ぐ家へ引つ張り込むのですよ。」

「誰か悪戯でもするのでせうか。」

「悪戯ならいゝのですけどね。あの子が表で遊んでゐますと、ひまな役人衆や和蘭陀が、酷めに來るのですよ。」

「何にもしないのに？」

「えゝ。それに懲りず親の目を盗んで、あんな隅まで行くんです。」

とお留は涙ぐましさうな聲でした。それはアントニオに聞いたことですが、お留の親類は、たとへ居留地の規則が變つてアントニオでもお留でも自由に街へ出られるやうなことになつても、寄せつけるものか、と云ひ合つて、今では彼女の親元とも往來してゐないのださうです。一つは貧乏であつた彼女の親が葡萄牙貿易で、いくらか資産を拵へたのを

嫉んですることでせう。「娘を異人に賣り飛ばして家庫を建てるやうな奴と親類づき合ひが見つともなくて出來るものか」とか「よく先祖に申譯がないことだ」とか頻りに罵るのださうです。妾はこちらへ着いた晩に品物の入札に來た彼女の父親と會いました時、そう思つたのですが、彼はこんな野蠻人の中に珍らしく妾達に理解を持つた人でした。彼は此處へ來る度に此淋しい三人の親子に土産を携へたり、不自由な用を足して呉れるのださうです。彼はヨアンナが可愛ゆくてたまらないやうにこの大きな子を抱いたり背負つたりしたのでした。「どうぞお留をお賴み申します」などと妾にも呉々言つたものです。この前の手紙にお話したかも知れませんが、この溫順しい商人の家に假寓してよかつた頃、アントニオとお留とは結婚したと云ふことでした。ヨアンナを見た時と同じやうに、妾は、お留を見たばつかりで、馬鹿に毛嫌ひしたものです。それは、この年になつてまだ獨身でゐる妾が、兄妹のつれあひを始めて見た時の嫉妬だと云ふ人があるかも知れませんが、それよりも、黃色い顏の彼女が兄の妻として、何だか妾までが侮辱されたやうに感じたからでした。

でも、同じ家にこうして三日四日とゐると、別に纒つた話はしないけれども、氣質のいゝ、アントニオとは反對に、物ごとに餘り執着のない爽ぱりした正直な女と云ふことが、段々呑み込めて來ました。アントニオが此牢獄のやうな廓なかで妻帶してゐることを同國人や和蘭陀人の手前、いくら恥がましく思つてゐるのに較べて、彼女が廓の人間の誰彼に對してでも平氣で居るところが、一面には無智々々して見えたこともあるけれども、この頃は、もうそんな感じはなくなつて、何かしら痛快でたまりません。そして、こんな女だと知らないものだから、最初この家で彼女を見た時に、ひどく馬鹿にしたり輕蔑したりしたことが、後悔されて來るのでした。例へば、船から出島の濱へ上つた晩などもさうでした。アントニオはヨアンナを肩車に乘せ乍ら役人の見張りつきで妾を渚まで迎へて呉れた時に、馬鹿に色の黑い脊の低い女がアントニオの後ろに佇んでゐるのを見ました。それがお留なのです。彼女は妾を迎へるために態々着物を着替へたり、自分の義理の妹の妾にどんな挨拶をして貰へるかしらと云ふやうな物腰で妾の顏色ばかり窺つてゐるやうで、

した。それからアントニオの家に落ちついて、(その時はじめて此露臺に立つて家の中の模様をぐるぐる見廻してゐたのですが)暫くして妾と兄と二人つきりになつたとき、妾は何と云つたか? よく覺えてゐる。「あの女は何ですか。アントニオ?」と云つたのでした。アントニオの手紙にあるお留と云ふ彼の妻だ、あれだ! とは無論推量の上でした。「俺の妻だよ。」「あなたの妻ですつて? あの醜い女が? あなたの手紙には、何だか大變立派な婦人とか…………由緒ある人の娘とか云ふ風に書いてありましたが。それがあの女なんですか」などと云つたものです。その時アントニオが「そうだとも。この町でも古い家柄の基督教信者なのだ」と彼女の辯護をするのと、「おくたびれでせう」と云ひ乍らおべりやすを硝子盆に山盛りに運んで來たのと殆んど同時で、アントニオの言葉がはつきり聞えたものらしく、彼女は夫の顔を見て感謝の表情をしました。彼女は扇で妾に風を送り乍ら、黄色い圓い顔に笑みの淺い、そして小さい目を眩しさうにしばたき乍ら物珍らしく妾を見るのでした。後で考へると、その時彼女は始めて外國の女と出逢つたのでした。「あたは葡萄牙語がおできなの?」と云ふと彼女はアントニオと顔を見合せて「少し(ペケノ)は……」と云ふのを一緒に親しみのある笑ひやうでした。彼女の後ろにはヨアンナが不思議な目を見張つて、妾をじろじろ覗見してゐましたから「子供も?」と聞くと、「いゝえ。娘はまるつきり駄目なのです。いくら教へても直ぐ忘れましてね。」とヨアンナを振り返ると、ヨアンナは階下へ逃げ出したのでした。すると、アントニオがヨアンナを追ひかけるやうに階下へ下つて、直ぐまた引つ返して來て「これを御覽。家内の學問帳なんだよ」と云ひ乍ら、小さい手帳を見せるのでした。おとめは、その手帳を妾に見られるのが、決りが惡いと見えて、小さい體を揺りつゞけて笑つたものでした。手帳には葡萄牙語と日本語が拙い手つきで、ごちやごちやと書きつらねてありました。彼女はこの帳面を仲介者にしてアントニオから、よたよたの葡萄牙語を稽古してゐることが解りました。アントニオは日本語が達者なのです。驚くばかり惡達者なのです。恐らく葡萄牙語よりも旨いのでせう。「どうだね。どうだね」と一一帳面を指して、俺の日本語はどんなもんだと云ふ格好なのです。「お菓子はいゝがですか?……エイ・セルヴイツ・ヴオスムセイ・チウン・プカツ・チ

ボル」と云つた調子に會話が滅茶苦茶に列べてあるので、かうして覺えた片言をつかつて彼女は妾に「お菓子はいかゞですか？」と硝子盆のおぺらやすを勸めたものでした。「なか／＼お上手だこと！」とか「よく覺えたものですね」などと言はうものなら、當のお留よりもアントニオの方が他愛もなく得意になつて喜ぶのでした。こんな、ちよい／＼したことから、自然に彼女と云ふものを、いくらか知るやうになつたけれども、それまでは、彼女を見たり、彼女の話をすると、わけもなく罵りたいやうな、荒々しい皮肉な、冷淡な感情が迫つて來て、何とも云へない異人種の同情に對する憎惡が言葉の端にも顔にも現はれて來るのでした。悧巧な彼女は、直ぐそれを見拔いて、成る可く妾に近づかぬ工夫をしてゐるらしいのでした。私の手前、異人種の女と結婚したことを肩身狹く思つてゐたアントニオも了ひには「何故お前はそんなにお留の惡口をいつたり嫌つたりするだい？ お留はもう日本人ではない葡萄人になつたんだ。今に國へ戻れば、ほんたうにそうなつて了ふのだ」と怒り出しました。それを階下で聞いてゐたお留は、後で聞いたのだが、一人でしくしく泣いてゐたさうです。ヨアンナは氣の強い、そして父親のアントニオよりも嚴しい躾けをするお留が泣くのを見て、一日ふさいでゐたさうです。妾を怖がるやうになつたのは、多分その時からだらうと思ひます。が、妾は段々彼女と親しくなりました。その一方では、妾は何だつて罪もない、と云ふよりも寧ろ妾の氣嫌を取つに來るやうな彼女を罵つたり嫌つたりしたのでせう？ と、こうして彼女と向き合ふ度に、濟まない濟まないと云ふ心で一杯になるのでした。はじめとは、まるであべこべに、大した才能のあるといふわけでも、大した財產の主と云ふわけでもないアントニオ――十年前水夫であつたアントニオを賴りに、この先どうするのか知らないけれども、兎に角こうして親類緣者と緣切つて居る彼女が、いぢらしくなつたわけでした。妾は彼女の話をこんな風に書いたのですから序に一昨夜の出來事もお話しなければなりません。それは彼女が突然の嚴しい頭痛で夕方から床についてゐた晩、丁度アントニオが二階でこそ／＼仕事をして（妾が土產に持つて來てあなた方お二人の寫眞の額を拵へてゐたのでした）ゐるとき、妾一人で、こつそりお留の寢床の側へ（それは店の奥でした）行つて「ちつとはいゝですか」と尋ねたと思つて下さい。彼女は蒼い

て起き上らうとしました。「そのまゝ寢てゐらつしやい。」妾は無理に寢かして置いて低い聲で、兄の耳を憚るやうに「アントニオは貴女によくしてくれますか？　お留さん。」と尋ねました。すると、彼女は蒼褪めた微笑を浮べ乍ら、突然妾の手を掴んで、涙の一杯たまつた目をぎら／＼輝かせたことでした。二階へ戻つてから、「今お留さんを見舞つて來ましたよ。大變いゝんですね」と云ふと、……あゝ。アントニオにこんな狂氣じみた仕草を妾は豫期しなかつたのでした。彼はやゝ暫く突つ立つたまゝ妾を凝視してゐました。次の瞬間に「有り難う！　有り難う！」とそれは恐ろしい聲で、妾の手を強く二三遍握つて振るのでした。それから「いつお前はそんな優しい氣になつたのだらう！」と云ふやうな顏一面に心から嬉しさうな微笑を浮べたものでした。それを見ると、たまらなくなつて妾は顏を外らして了ひました。妾の唇もぶる／＼顫へて來たからです。

そろ／＼ドミンゴー船の哀れな最後に近づかねばならなくなりました。

三

ドミンゴー船が和蘭陀商船と一緒に岬の蔭で燒き拂はれたことの判明したのが、その晩だつたのです。潮が滿ちて來て、露臺の脚まで、ぴちや／＼と暗い波の音がする頃、露臺へ出て見ました。妾の後からヨアンナもやつて來ました。お留も跟いて來ました。

「叔母さん。床の下がこげんに汚なくなつたぞなもし」

と云ひ乍らヨアンナは露臺の欄干の中から首をのべて海を覗きました。露臺に立つてゐると、波打際が丁度床の下まで擴がつて來るのでした。その露臺の脚を傳ふて、幽かな物音がゴトン、ゴトンと妾の耳に傳つて來る時分に、ふと氣づいたことですが、床の下は木の破片や、布の切れつぱしで一杯詰まつて居たのです。

「ちつとの間に隨分汚ない芥が流れて來たものだ」

と呟くと、お留が

「こんな筈はないのですけど。どうしたのでせうか。いつも上げ潮で米を磨いだり洗ひ物したりするのですけどね。」

妾の側に敷いてある露臺の踏み板を一枚、ごそ〳〵外して、その穴から海面を覗いてゐましたが、苦しさうな聲で

「ヨアンナ。お父さまに提灯に灯をつけて貰つてお出。」

と云つたのです。そのヨアンナが

「今夜は潮浴びを休めろつて云ふたぞなも。」

と云ひ乍ら、圓い小形の提灯を、ぶら〳〵下げて來ました。アントニオは妾達が床の下で、いつものやうに露臺の脚に掴まりながら、こつそり潮浴びするのだと思つたらしいのです。そのぶらぶら提灯をお留が板の剝がし目から腕まくらして、ぐつと床の下へ釣すと、妾は彼女と反對側の足場に蹲んで暗がりをちよいと物好きに覗いて見ると、どうでせう！露臺の脚に巻きついてゐるアボブラの蔓に遮ぎられて、充分見極めることは出來ないながらも、泡立つて押寄せて來る眞つ黑い波の表面が、燒け殘りの板や、油ぎつたどす黝い襤褸や、灰燼で蔽はれて、波が大きく揺れる度にどぶん、どぶんと鳴つてゐるのでした。それがまるで船火事の跡のやうな氣味の惡い海鳴なのです。お留は珍らしさうに、また

「どうしたと云ふのでせう？」

を何遍も繰り返し乍ら、あの麗しい渚が、どうすれば、こうひどく傷められるのだらうと云ふやうな驚いた目つきで妾を見詰めました。「アントニオにも一寸見せませう」と彼女は慌てゝ提灯を下げて梯子段を下つて行つたのです。アントニオが、またいつもの癖を出して仰天することだらうと思ふと、氣の毒とか、可哀さうとか云ふよりも、今度はそれが滑稽のやうでした。ヨアンナは板の目から、裾をまくつて、片足をぶら下げて見たり、そこから唾を吐いたりしてゐました。階下へ下つて行つたお留は下りたかと思ふと、梯子段の中頃から、跳び上つて戻つて來ました。その時の彼女の顔に現はれた一種の可笑しな驚怖を、妾は「何といふ珍らしいことだらう」と云ふ心持ちで眺めてゐると、彼女は、

妾を振り返りさま、驚きのうちにも、可笑しくつてたまらない風に微笑し乍ら、部屋の隅に据えてあつた古箪笥の抽斗を、慌てゝ引開けて、中から糊つけの浴衣を摑み出して、急いで着るのでした。彼女は今まで腰巻（ルスーチ）の上に短かい、それは乳房の下までしかない木綿襯衣を着てゐるだけでした。

「お客でも來ましたか？」

「いゝえ。お役人（プリーシエル）なんです！」

と云ひ乍ら、そゝくさと細帶を捲きつけて、ほつと安心したやうに、更めて、くす〳〵笑つたものです。

「お役人ですつて？　何しに來たんでせう」

「さあ。今店先で宿元（やど）と立ち話をしてゐましたが……もう歸つたかも知れません。一寸待つてゝ下さい。すぐ來ますから」

と彼女は妾を二階に殘して置いて、また、怖る、怖る、店の方へ行つたかと思ふと、

「マリアさん（ミニエル・シニヨレ・マリア）。マリアさん（ミニエル・シニヨレ・マリア）。」

と呼ぶのです。

「ヨアンナも連れて來てお呉れ」

と、それはアントニオの聲でした。そのヨアンナは妾よりも先に、どしん〳〵店へ下つてゆきました。

「お役人が、またこんな書つけを配つて來たんだ」

と云つてアントニオは柔かい大きな日本紙に葡萄牙文字で刷つたビラを奘れました時、何だか、自分に災でも降つて湧いたやうな、どきんとした次第です。が、それは妾達に無論大變な拘はりのあるものには相違ありませんでしたけど妾の本能的な咄嗟の恐怖は、それ以上だつたので、はじめは

「いやなことだわねえ！　どうしたものでせうか」

と云ふ位の當惑に過ぎないのでしたけれども、アントニオや。お留までが、更紗や絨氈を詰め込んだ硝子棚の前に、ぼんやり突つ立つたなりで、ひどく蒼褪めてゐるのを見ると、「あ！ 妾はもつと心配しなくてはならないのだつた！」と云ふやうな氣がして、そう云ふ氣がすると直ぐ、彼等夫婦に縋りつきたくなつて來ました。書狀（それは多分、日本政府の命令書とでも云ふのでせう）は恐ろしく短くて簡單なものでした。妾は記憶のために、それを此處に書きとめて置かうと思ひます。

布　令

一、出島在留異國人は今明日外出叶はぬ事
一、異國人今明日出島へ上陸叶はぬ事
一、伴天連の法を弘め候異國人と其家族及び召使ひ、並びに出島在住の異國人悉く改宗の事
　追而　今晩四ツの刻より、岩原鄕舊伴天連宗門サン・ジュアント寺に於て繪踏の事
　附　伴天連改宗忌避者訴人は、其品により、或は銀百枚夫より下は、其忠に隨ひ相計らはるべき事
右の條々違犯の輩に於ては嚴科に處せらるべきもの也仍て下知如件
　寛永七年八月十日

そして最後に乙名と云ふ出島役人の署名と捺印がありました。あなた方はこの手紙の、この條まで來ると、あの山鳩の塒見たいな部屋のよくリスボン港の見える窓下の卓子に倚り乍ら、お母さんに「これは一體どんな儀式のことだらう」と呑氣な相談をしかけることでせう。そして、これが宗教苦難の呼び出し狀だつたら、殉教者に取ては死刑の宣告書であることゝは夢にも思ひつかぬことでせう。こんなことに出遇つたことのない妾も、それは何だか解らないことでした妾を呼びつけて置き乍ら、そして妾にこの書面を見せて置き乍ら。彼等夫婦は、妾には事情を知らせたくない。困つたことになつたものだと云ふ樣子が、直ぐ妾の目についたのでした。妾さへ居合せなければこんな書面を何枚押しつけら

れても、困るには困つた處で「またか！」と云ふやうな軽い困惑で濟ましたかも知れません。それは後で解ることです
その證據には寺院に行つて繪踏みするといふ科條書が腑に落ち兼ねるので
「繪踏つて何でせう？」と言ふと、
「聖母と救世主の像を足で踏む改宗の試問のことだ。繪踏はこれで二度目なのだ。」
と、到頭自分達が内證でやつてゐる惡いことを知らせて了つたと云ふ風に答へたからです。
「あなたは一度やつたことがあるんですか？」
その時彼は、まことに止むを得ないと云つた樣子で、默つて點頭いたが。すぐ
「繪踏が濟み次第家へ歸つて清水で足を洗つて償罪の祈禱をしたよ。」
「それであなたいゝのでせうか。」
「よくも惡くも他に方法がないからね。でないと遠慮なく罰されるんだ。」
「罰されるつて?!」
妾は繪踏以上に驚きました。そして、つゞけ樣に「何故でせう？」とか「あなたの手紙に長崎は天主教は禁制だと書いてあつたから、承知はしてゐましたが、何だつて、そんな酷いことをするのでせう」と叫んだものでした。アントニオはそれから妾が何か口走るたびに「もちつと低い聲で云つてくれ。」とびくびくするのでした。お留もそんな顔付でした。
「どうせ決つた法律だから不法でも何でも、その通りしないと損だから、出島の外國人は皆上部だけ改宗した風で繪踏に行つたよ。」
「それで神樣に濟むでせうか。」
「神樣は賢明だから、そんな試問なんぞに引つかゝつて死なゝいでも許して下さるよ。」
それでも妾は安心が出來ないのでした。どちみち、なるやうにしかならないことだけど、そのどうにもならないこと

が、ひどく苦になつて、何だつてこんな馬鹿げた處へ來合せたのだらうと思はずにゐられないことでした。

「時々そんなことがあるのですか。」

と云ふと、アントニオは、もう豫め覺悟してゐたものらしい口つきでこう云ふのでした。

「外國から船が入る度にやるらしいね。」

「何故でせう?」

「佛教を弘めるためさ。」

と彼は投げやるやうに答へたとき、妾は自分で「何んと云ふ卑怯たことをするんだらう!」と呟くのも覺えぬほどでした。

この手紙をお讀みになるあなたがたも、こゝまで來て嘸吃驚なさることでせう。嘸怒られることでせう。うはべだけ佛教徒になると云つて見たところで、この通り腹の立つことですもの。こんなことに少しでも馴れて居るアントニオやこんなことを當り前の苦業だと考へてゐるやうな落着かたをしてゐるお留が憎らしくなつたものです。妾が一人で泣言を列べてゐると、アントニオは改宗忌避者の恐るべき最後を諄々と説くことでした。その話によると、(それはこの前の縮踏に逃げそこなつた日本人のことなのでした。何でも、二三百人ばかりの信者が首枷を入れられたり、苞に捲かれたり、割木に纒はれたり、枚に挾まれたりして破れ竹で脊中を叩かれるのもあるし、石を脊負はされるのもあつたと云ふことです。そのうちに刑場へ行着かぬ前に倒れて胸を割て死ぬものや、それはシナイの基督そつくりの姿で石や銅のサアルカセスの礫(クロス)を擔いで行倒れる者もあつたさうです。そんな行列を、街の佛教信徒は、酒宴を張り乍ら祝つてゐたさうです。その時からサン・ジュアン十寺院の門は鎖されて、主教や尼僧は居なくなつたのださうで、成るほど、そんな處からして、ヨアンナを寺院へ入れるやうに暗にすゝめた時に妙な生返事ばかりしてゐたのが解りました。「サン・ジュアント寺院が潰されて了つたなんて、その時はどうしても云へなかつたんだ。お前の驚く樣子も見たくないし、事情を打ち

あけるのが面倒だつたからだ。」と彼は云ふのでした。妾はこんな話を聞くと、氣が滅つて了つて、何だか身うちから、ぞく／＼顫ひが出たものです。妾とアントニオは店先に坐つてゐ乍ら、お留がヨアンナに着換へさせたり、妾に見せつけるやうに、二階の佛壇の中に押し込んであつた聖像を持ち出して、窓も戸もぴつたり締め切つた上で、梯子段の蔭になつてゐる壁をほじくり乍ら、それを手早く塗り込める處を、妾は何だか、夢のやうに、ぼんやり眺め乍ら、「賢こい女だ」と云ふ位にしか考へませんでした。お留は、「これで、留守に家中を掻き廻されても大丈夫だ」と云ふ樣子で、ヨアンナと一緒に、その壁に向つて合掌したり、妾達に、「そろ／＼仕度しては、どうでせう。」などゝ云ふ風でした。それから？　何と云ふ厭な光景でせう！

どうもかうも他に仕方がないから妾達は、まるで鎖に連れた罪人のやうに、廓の中を始めて出ました。廓の中はランプの光で、可なり明るいけれども、廓の門前から直ぐ市街へ掛けた石橋を渡り切ると、急に日がくれたやうに暗くなつて、妾達の前後にも、見たところ三十人ばかりの同國人が、ぞろ／＼歩いて行くに拘はらず、妾は烈しい恐怖に襲はれ通しでした。行列の一番先頭と尻とに、顔見知りの門衛が佩劍で跟いてゐました。妾はアントニオの後ろにゐるし、妾の後ろには、ヨアンナを連れたお留が、綱笠を被つて、しよぼ／＼ついて來るのです。饒舌ることは皆饒舌つて了つたと云つた樣子で、誰も彼も默つて、ぼと／＼ぼと／＼と、この出島橋から海岸を傳ふて、引つ張つて行かれる方角へ、まるで豚が追はれる形で歩いて行くのでした。今云つたやうに通路の左手が、直ぐ波戸場で、右の方が一面に壓し潰されたやうな街の家々が、もうその邊へ足を伸べてゐる松山の崖の下へ、散らばつてゐました。その家までは一二丁も間がありましたから街の人に顔を見られたら、嘲けられたりするやうな氣遣はありませんでしたが家々の軒先には、一様に赤い圓い提灯が點されてゐるのが、何だか妾達を弔ふために出してあるやうな氣がして、心細いものでした。海はいくらか波立つてゐました。そしてアントニオの家の露臺の床の上で聞くやうな物凄い響が、低い石垣を越えて來るのでした。空を仰ぐと、冷たい星の光が雨のやうに、ちら／＼降つて居るのでした。妾達――被骨迫者の群がこんな風をし

て、やつと辿りついた時は、もう八時過ぎで、出島の屋敷から美しく眺めた松山の松並木が、恐ろしく大きな眞つ黒い影を、サン・ジュアント寺院の鐘塔の空に物々しく擴げてゐました。その寺院の門前で妾達は暫く休んで、それから、一家族づゝ、そのアーチを潜ることを例の門衛から命ぜられました。そして、妾達は、その門の兩側に竹竿の先に大提灯を結びつけて、床几を列べてある處で、自分達の順番が巡つて來るのを待たねばなりませんでした、妾達の前後には十人ばかりの役人や繪踏執行官や、驗視人や、吟味役人が詰めて居ました。…………………妾はもうこの先をつゞけたくありません。あなた方もお聞にくいことでせう!! 何故なら、この先若し妾が一字でも一句でもつゞけて行くには、どうしても妾達の見苦しい苦難の有様を書かねばならなくなるのですから。そして、妾達と同國人の殆んど凡てが、この見苦しい試問と悲慘な苦業の門を潜つて出て行くまでの一部始終を物語らねばならないのですから。みじめなヨアンナをせめて世の中へ用のないこゝの尼僧にしやうと考へたことのあるサン・ジュアン寺院は、それから左程日數を經てゐない今日はじめて見たのですが、いつの間にか本蓮寺といふ佛宗の寺に替つてゐるのではありませんか。昨日まで、こゝに平和な日を送り乍ら天主の十誡を說いてゐたフェルヂナンドと云ふやうな主教やイサベラなどゝ云つた尼僧はどうしたのか、どこへ追はれたのか？

「あゝ。この前の日曜日まで御堂の前に神々しく立つてゐた聖母の石像が、もう失くなつてゐる。丁度、そこ、燈籠が見えるだらう。その直ぐ側に朱塗の佛像と蠟提が見えるだらう。あそこに俺達が醵金して拵へた聖母の大きな白い像があつたんだ！」

と床几の上でそつちの方角を顧でしやくつり乍ら、妾にアントニオがこう云ふのでした。こんな風に說明しても判然お解りにならないかも知れませんが、先づこう云ふ具合に、凡ての物が打ち破されて居る寺院の中で、佛侶立ち合ひの上妾達は踏みました。踏んだのではない後ろから突きのめすやうにして踏まされたのでした。何をですつて？ Que vergonha! Que pena! あなた方は妾達を乾度お責めになるやうな殘酷なことはならぬ筈でしたね。でなければ、妾は

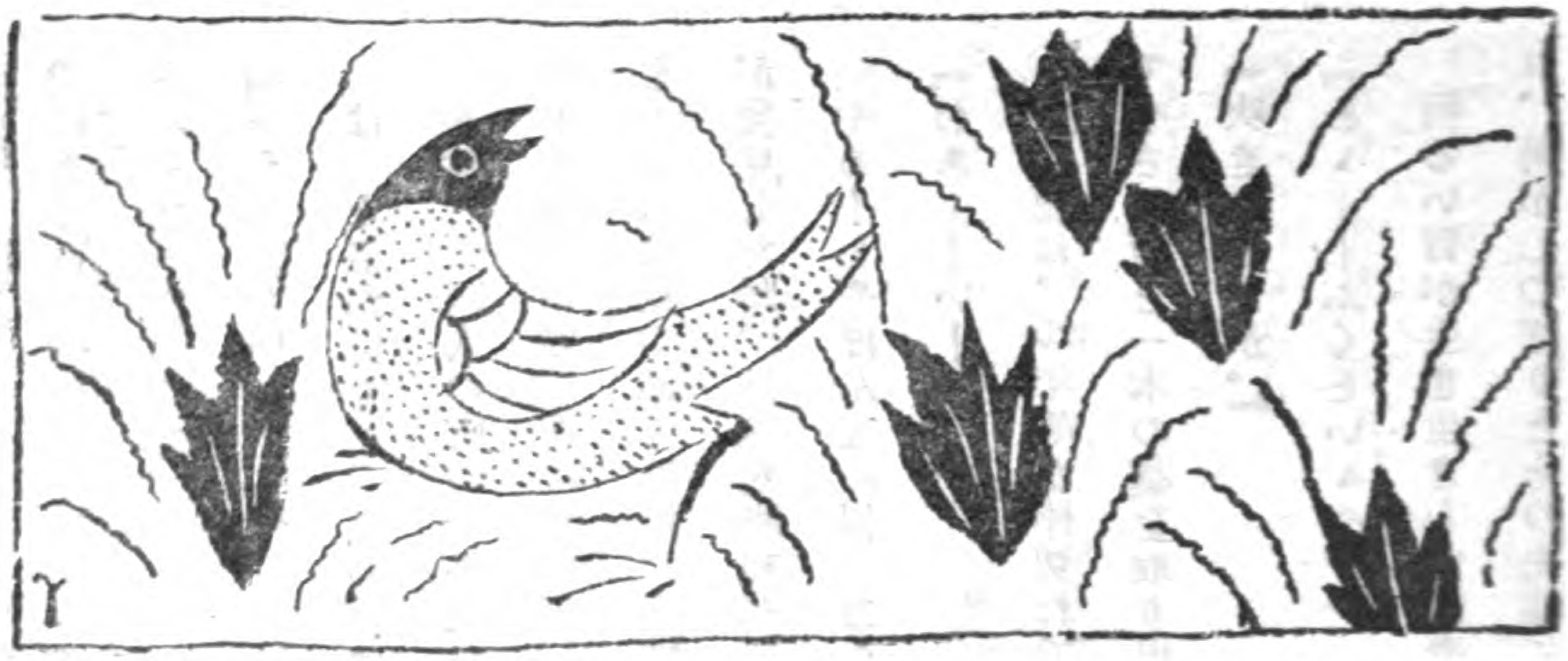
此處で自殺するか、苛遇者や無法者に殺されなければならなかつたからです。アントニオがおづ／＼例の細長い頤を突き出して、寺院の奥を、しやくつて見せて

「あそこに祭壇があつた。」

と云ふ場所には。無數の蠟燭が、がらんとした空虛を明々と照らしてゐました。その邊から燒硝子の兩側の窓の壁がぼろ／＼に崩れて、小さい鐘が轉がつてゐたり、刺繡りのある着物やダルマチカ見たやうな衣が、くしや／＼に揉んだなりで堆く小積んでありました。妾の隣りにアントニオ、アントニオから左へお留とヨアンナが順に列んでゐる直ぐ鼻つ先に、先刻御堂の入口で見た僧侶が、厚つぼたい手帳を抱へ乍ら、妾達の足の爪先を一心に見詰めてゐたが、到頭四人の名を讀み上げました。右の足の親指の爪先と左の足の親指の爪先が恐ろしい銀色の光が、ぎら／＼光り出したものでした。その銀色の細長い金屬板をまだ踏まぬうちに凝乎と見詰めてゐると、その金屬板がだん／＼妾の顔に向つて、ふら／＼浮き上つて來るのです。そうかと思ふと、この浮刻の板が、身ぶるひの出るやうな寒さを催して、ずん／＼谷底へ沈んで行くやうな氣持ちがしました。何となく烈しい眩暈のする刹那のことでした。こゝまで書きつらねると、もう愈々ドミンゴー船の凶事に近づいたことをあなた方もお悟りになる筈です。出島屋敷へ追ひ歸されて、家へ入るや否やお留とアントニオは戸締をして梯子段の蔭へ跳んで行つたかと思ふと、壁を掻きむしるやうに、中から聖像を取り出して二階の佛壇の中へ藏ひに行きました。外側から見ると、この小さい佛陀の殿堂は、眞個に佛陀が住んでゐるとしか見えません。それまでは、不安な藝當をして世間や役人の目をごま化してゐたのが、もう大丈夫だと云ふやうに安心して、一休みする前に「さあ。足を洗つて罪を悔ゆることだ」などゝ、厨房に汲み溜めてある、塩つぱい清水で、着物の裾をからげ乍ら、ざぶ／＼と洗つたわけでした。こんな子供だまし見たいなことでも、大變氣が休まるものです。足の水氣がすつかり燥いて了ふと、もう先刻の贖罪的な仕業に課せられる罪が、すつかり許されて了つたやうな氣がして、兄夫婦が平氣な顔をして「露臺で葡萄酒でもあけませうか」と云ひ乍ら、妾が、あなた方から預づかつた瓶の栓をあけやうと

する段になつても別段に、彼等の心持が不思議にも思へなくなつてゐました。その葡萄酒の小瓶を二階へ抱へ出した時でした。「難波船ですよ！」とお留が三度目にアントニオを驚かせたのは。それは難波船ではなくて、直ぐドミンゴー船と、それからドミンゴー船と一緒に燒かれた六隻の和蘭陀商船だと云ふことが解りました。濱邊には港詰や舟番所の小役人が、波に打ちあげられた燒け殘りの――でも船名だけは。どうやら讀めた――ぼろ〳〵になつた眞つ黒い七隻の船體を發見して、がや〳〵騷いで居ました。そして海の上を注進舟が往つたり來たりしてゐました。何と云ふ物狂はしい夜でせう。Olga！妾が晝間氣にとめないでゐた岬の蔭の煙の柱は、是等の船が人知れず燒けるのでした。翌朝放火犯人は捕はれました。それは數人の佛僧とその佛僧に唆かされた港外の海上生活者の群でした。そんな報知を門衛の役人に聞き乍ら、この手紙を夜通し書いて來たが、まだ頭も手も足、昨夜からのふるひが、止みません。妾は、隨分あなた方、を驚かせましたね。妾は、すつかり頭がぼんやりして了ひました。こんな譯で船が一月遲れます。アントニオやお留は月が變れば便船があるからと云つて慰めて呉れますし、ヨアンナは妾を歸しません。一と月遲れて歸れるのはいゝとして、も一度その時になつて昨夜のやうな恐ろしい經驗をしなければならないのではないかと思ふと、情なくなります。

あなた方の親愛なる娘マリア・ダ・コスタ。（完）



夕べの惱み

―ある不良者の手記―

島田清次郎

一九一六年夏の××日の夕暮である。私は終日の讀書で心から倦み果てゝ、近頃習慣に成つてゐる――窓に椅つて市街の雜音を漉すやうに暮れて行く戸外の色調に浸るべく、窓から顔を出した。銀色の空であつた。空の下には初夏が成長つてゐた。

家前の街路の向う側は狹い溝を隔てゝ廣々した屋敷跡で、私はその屋敷跡に何はばかるところなく氣隨氣儘に生ひ延びた雜草の青い色に初夏を見た。屋敷跡の奥なる割竹を結えた生垣の濃い新綠の向方には二階建などがちほゝ見える。漸く朱を帶びた杏果が垣の直ぐ上の葉蔭にぶらさがつて――屋敷跡　雜草を踏みにじり踏みにじり、白い細い一筋道が杏の樹の下迄續いてゐる。夏が親の寛大さで、子供達を

『いゝ兒、いゝ兒』

と。愛撫してゐるのだ。

私は茫然と其處らを見詰めてゐた。潑剌とした躍り上がりたい氣持が私の胸の中

でにえくりかへつてくる。放逸な悪戯つ氣がむくむくと大きくなる。そうして 空の銀色が垂れ下つて一味の幽鬱と深みとを塗りたくつた。

『おう、苦しいな——』

はつと氣が付くと、私の心は怯うろめいてゐた。

其時、三四人の町の子供達が夕餉を待つ間の所在なさを過すためにか、勇ましい歩調で空地へ駈けて來た。歡呼の渦の中には黒い髮を垂れちぢらした頰の紅く輝やいた少女が一人ゐた。子供らは溝の處で立止つた。青黒く油ぎつた水面を子供らは見つめてゐた。子供らの足音に驚いて泥にゝぐり込むだじみが又じわじわ水面に浮み出る赤い蠕動を子供らが發見した時、放逸な聯想が三人の口から一時に飛び出た。

『やあ！しやぼん玉に似てゐらあ！』

『わあ——い！』

女の兒は、少年等が棒切れで溝を濁してゐるうちに、小さな手を懷に入れ、薄赤色の帶の上をいじつてゐたが、やがて小さな瓶と一本の藁を取り出した。

『吹きましよか。』

『あゝ——ふくといゝや！』

明るい目が生き生きした輝やきに期待と好奇とをうるませて、小さな瓶に釘づけられた。少女の指に藁すべがつままれ、唇がしつぼりとその先端にまつはりついた強い壓迫に引きしめられた一瞬間が、空地の一隅の三人の子供の周圍を抱擁して、すべての萬象より斷絶した時が其處にあつた。

少女の心臓のあえぎが凡すべてをすつと貫き拔けた。ふうわりと美しい幼なきものの五彩の夢が青い空を背景に浮んだのであつた。

『やあ、出た、出た。』

『美しいのねえ！』

『あ――ら、』

子供らはきら〳〵と、複雜な色彩に輝やく、しやぼん玉に不可思議なる此世からなる夢を見た。其れは燕の喉のやうに紅かつたり、緞帳芝居の御姫樣の帶のやうに紫であつたり、異人の眼の如く靑かつたり、水晶の玉の樣に透つてゐた。

『やあ――い！』

自分らが或るものを創造した喜悦と、好奇心を充たした滿足と、……勝利の念が一樣になると、子供等は狂ひ廻り飛び上つた。少女の心臓のあえぎは次から次へ美しい夢の世界を創造し、そして次から次へと消えていつた。夕暮の色調はさうした間にも刻々に暗い一色に物象を融かさうとしてゐた。

『おう、苦しい――』

氣が付けば私の心は又、恁う叫んでゐるのであつた。黄昏の心であつた。賴り虚なき佗びしさがあつた。突き離された寂しさがあつた。暗い色、陰氣な色――私はそれを見ずにはゐられなかつた。

暗い色をじつと眺めてゐると、暗いながらも顯然とわかる自分の生活が思はれた。あらゆる自分の力を晦みにじられ心靈も肉體も疲れ果て、人生の痛手を堪えながら、都を逃がれて來た此の私！

『これつきりもう逢へないやうな氣がしますわ。――でもね、忘れないでね、お身體を御大切に、ね。』

『生命があつたら、又遇ひませう。』

私は女の最後のさようならのために汽車の窓近く差しのべたほつそりと靜脈のすきとほつてみえる蒼い腕と袖口をこぼれた薄青い襦袢とを、女の姉の心はこうもあらうかと思はれる尊い愛の心をこめて何時迄も見まもり、にぎりしめてゐた。

『あなた、お國へおかへりでしたら、何よりもお身體をお大切にして……。』さう言つて女は泣いた。然かも汽車は山や河をふみにじつて私を私の故郷へと運んでゐた。朝霧が淡白く層をなしてさつさつと過つていつたり、或山からは赤味を含むだ煙が白く流れてゐた。山峽の鐵橋を渡る時、私は橋下を流るゝ水を見てすべての醜くい感情が水と共に流れ去るのを感じてゐた。知りあひのある詩人の故郷では山から山を縫ふ樣に、桑の若芽がふき出てゐた。私は、ゆられ、移り變る自然に或時は親しく、或時は憎く、時には都の女の愛撫を戀ひ返したり時には苦しかつた都の生活を思つたり、又時には何がなく女のいとほしさに涙含むだり――しながら、刻々に高まる一つの不安に戰慄してゐた。故鄕には自分の家がないのだ。叔父の家がある許りだ。叔父の家、どうして再び其處へ行けやうか。汽車は右手に廣漠とはてしない海をひかへ容赦もなく走つてゐた。春光が幸福と光榮に白い波頭に輝やいて、色さめた傳馬舟の赤旗にも、もう北國たることを誇つてゐた。

――何につ！叔父さん、それで貴方、叔父だと云はれますか。さう貴方の了見許りで、この私はどうなるんです。

――貴樣、何んだその反言は。

――反言つて。……

――馬鹿め

――何が馬鹿です。私の言ふことだつて少しは聽いて呉れなくちやどうなるんです。叔父さんがなるんぢやないぢやありませんか。私がなるんぢやないですか。

――貴樣、未だ反言むくな。馬鹿奴！

――何んですつて!!

夜であつた。茶の間であつた。赤暗い電燈が皮肉な目付きで嘲笑つてゐた。其時の私の手が間近の火鉢を掴んで、茶の間の中央へ投げつけた。濛々とした灰神楽は、叔父の怒叫、叔母の哀號、私の拭い切れない涙を包むだまゝ、私を永遠に此の家へ還入るまいと、戸外に押し出したのであつたではないか。どうして再び歸れよう。汽車は絶間なく此の考をゆすぶつてゐた。……

『ぽつ。』

と思づいて私は追憶の糸を擬り切つた。先刻の子供の群はもう何處にか去つて、一際暗くなつた夕暮の空の彼方には一抹の褐色の斷雲が漂ふて、寂然とした市街の屋根に最後のさよならを告げてゐる。

私はふと眼を路の上手の溝にやつた。そして、青黒い水面から半分許り形をあらはしてゐる赤い錆の出たブリキのラツパを見出して、

『やあ！』と飛び上つた。

『俺は、俺はあのラッパだ！』

胸から込み上げて來る悲痛と歡喜との一色の感情に私は唯もう一心にそのラッパに見入つた。奇怪な幻想が頭の中で旋回した。

『あゝ、飛び上り度い！あゝ生きたい！自由になりたい自由になりたい！』

泥に沈むだラッパよ、苦しからう。私は狭い四疊半の牢獄を蛇がのたくるやうに暴れ廻つた。机の上のアイオの白い石膏像が私を憫めし氣ににらむでゐる。

夜がすつかり、蔽ふた。私は窓から暗い空と黒紫色の屋敷跡と、黒ずんだ木立と、木立を洩れる人家の灯火と、浮き出たやうな白い路を見るばかりであつた。時折、微風の頰をふれてゆく感觸の初々しさが處女の肉のやうに匂ひが高くあつた。

私は部屋にだらりと横はつた。自分自身を虐げる心がむくむくとわいて來た。

『俺は生きてゐるの？か屈辱と虚僞と、――ごまかしの生活をしてゐて、俺は自分の生命をあんまり輕んじてゐるではないか！』

――叔父さん、僕が悪かつたのです。どうぞ許して下さい。

『さう云つてしまつたとは！何と云ふ安價な俺の心なんだ。何が悪いのだ。眞實惡いとも思はないで、一時のごまかしに生きて行くこの醜劣な俺よ！』

――叔父さん、僕はもう東京で苦しんで來て、世間と云ふものも多少分りました。もう夢も醒めました。

『あゝ、どうしてこゝ俺はこんなに欺くことが上手なんだらう。夢が醒めた！うそだ！馬鹿！ナ馬鹿！』

二月の間の生活が、叔父の家で過ごされてゐると云ふことが私には自分自身の卑劣をまざまざと見せられることであり、たまらないことであつた。私は泣くに泣かれぬ心をすつぼり包むで天井の木目を數えて見た。――

……………――いつ！

「来たな！」

彼女は口笛のうまい女だ。私はむくりと起きて、窓から外を覗くと、暗い中に、屋敷跡にしよんぼり立つてゐる女の白い姿を認めた。帯が此の前と違つて真紅だ。

…………ぴいつ！

もういゝよ。お前も馬鹿だね。

何がなくとも私には憩があつた。

私は階下に下りた。階下では叔父と叔母と従兄が火鉢にあつまつて何か話してゐたが、ぱつたり止むで、私に六つの目が集注した。

——一體どんなつもりで居るのかな。

——ぐづぐづしとる間に直ぐ年老つてしもうになあ。

——政男にも困つたもんだ。

茶がそれぞれの手と口によつて呑まれる。

——身體も大分達者に成つたらしいに、未だ性根がつかんと見える。

——弱つたもんだ。

——ほんとにね。

三つの喉からふう——つと息が出る。

「一寸行つて参ります。」

『早やく歸つていらつしやい。』

私は外に出た。夜が私を包むだ、私は何もかも押しかくした。三度目の…ぴいつ！を聞いた時、熱い手にしつかと握られてゐる自分の右の掌を感じた。

『ふふ……。』

『あら、何がおかしいの？』

私が先刻の子供らのしやぼん玉を思ひだして笑つたのだとは誰が知らう！

『妾、家の手前は何とでも言ひますけれど、——可成遠いんぢやなくつて？

『遠かないさ。一里あるかなしだよ。』

『K村つて？何んだか聞いたやうな氣もするんですの。潟に近いんですつてね？——』

『潟は直ぐなんだ。A川の川口も近いしね。砂丘がずつと連なつてゐるんだ——ね、いらつしやい。僕の從姉の嫁入り先きがあるんだから。』

從姉？あはゝゝゝ。從姉さ。私の大切な、そして親切な從姉にも勝るお從姉樣だ。私は女がつと立止つたので其の顔に覗き込むだ。熱い肉體が單衣を透して私の肉體にぶつかつて、情熱が蔽ひ被るやうに、訴へるやうに私を征服しにかかつた。私は女の『ほうつ。』とつく長い腹底からの息を眞正面からぐつと喰ひ止めた。夜の闇に白く息は薄れていつた。

『從姉さんて如何んな方？』

そうれ、さう出なくちや嘘だよ。

『宜い人だよ。きつと好きになるよ。――僕が受合ふからね。』

宜い人?さうさ宜い人さ。此の俺に小遣錢を呉れたり、浴衣をI氏にかくして新調へて呉れたり、I氏の印章を自由に貸して呉れたり、――I氏と云へば、自分の妻の心が貧しい放浪者に傾むいてゐるのも知らないでおさまつてゐるのだからえらいよ。「人を満足する出家ですからなあ。」あはゝゝゝ。――此の女だつて自分の愛人の眞面目な戀を知らずに、

『從姉さんて何んな方?』

わあい!わあい!嘲笑へ、嘲笑へ!犬も地も俺と一緒に嘲笑へ!

『妾、何んだかお逢ひしたくなつてよ。お幾年?』

『二十三、――お前よりか六つ姉さんさ。僕よりか四つ、……。』

私は幸福であつた。私は一心に闇を見詰めた。もう市街は私の後方に取り殘され、黒い重たい塊となつて、鈍い灯が塊の所々に明滅して、空は飽迄深く暗かつた。暗の闇い彼方には、梨子畑を過ぎる一筋道が盡きて、永遠に流るゝ大川の水瀬の音は高らかに響き、夜の色に水が凄く光るのであつた。

『お前にはじめて逢つたのも恁んな夜だつたね。』

人通りのない屋敷町の夕、「政ちやん!?」小學を同じくした女は私を覺えてゐた。私は女の艶でやかさに眩落されるやうに感じた。しつぽりと肩が赤くぬれてゐた。

『大河に出たのね。』

女が小さく呟やいた。女の心にも夜の水の飛沫は感じられたらしかつた。私は、突然に、女がいじらしく、可愛ゆくてたまらぬ氣に襲はれて、女の顏をぐつと自分の頰にすり寄せた。

「え？」

え？でもなんでもないのだよ、私はお前が、かわゆくなつた！お前だけが私の歸鄕を待ちこがれてゐて吳れた！私は涙含むで來た。

小道の兩側は梨子畔であつた。竹垣にまつはりついた荊棘に女の衣物が時々引つかかつた。其度に夜露が頸筋にちらりと落ち込みほてつた緊張した頰と、しつとり冷氣を帶びた髮とが私の觸感に辛辣にゆれた。空は昏く地面は濕り夜は刻々に更けていつた。

可成急な坂をのぼると、其處は高い土堤通りで、河面が靑く光つてゐた。

私と女とは、その時、沈默のまゝ、土堤の上に突つ立つたのだ。どきどきと私の身内のあらゆる器官が何かの示威運動のやうに、一樣のリズムに融け合ふうとしてゐた。やがて時々來ると、すべての力が大きな一束になつて、一時にどつと突き出る――そんな衝動の豫感が私を深い不安におとし入れた。女も不安さうに胸に双手をあてゝ私の跡を追ふてゐた。（お前もかえ、俺だつて切ないよ。）私はぶるぶると慄えてきつと顏をあげ、四邊の情景に見入つた。

「妾、何んだか怖くなつて來たのよ――それに淒い晩よ」

然し、女よ。そんなに强く握る手を少しゆるめて吳れ。壯嚴な大自然が私の周圍に「これ見よ」と涉りに犇々と迫つてゐるではないか。

眞黑の空には、微妙な月光が漂ひ、白金の光りある雲の往來が見分けらるゝ程の明るさを生じてゐた。大空の下には

唯一色の暗闇がはびこつて、薄みどりの草原や、草原に點在する村々の柴耕や、村落の間を貫流する大川のうねる光たどが、はつきりとその暗闇に彫られてあつた。靜寂がうつすらと川霧に流れ、靜寂のうらを永遠につゞくであらう水の音が、人生の命のひゞきに合はしてゐるやうだつた。市街の灯火は遙か後方に輝やいてゐた。

『妾、怖いのよ！』

ごくりと喉が鳴つて、女が私にすがりついた。火花を散らして女の肉體が私にぶつかつた。黒髮が汗ばんでべつとり私にまつはりつく、女の瞳は何んでもを燒き盡すやうに炎え上つた。川瀨の音が靜々と私に肉迫する。

『何が怖いのだ。赤兒のやうに見つともないよ。え、幸さん。』

弱すぎるぢやないか、お前は。もう辛抱が出來ないのかい――

女の名は幸と云つた。

『だつて、妾――』

もう分つてゐるよ、それ程俺は鈍感でもないから。それにしてもお前は隨分弱いね。「だつて、妾。」だらう。えゝ、もう少し苦しめてやれ！どつちが強いか、――俺も大分怖く成りかけてゐるけれど。

土堤は河下につゞいて、川中には芝草に埋もれた砂洲が廣々とあつた。土堤から砂洲に渡る橋が水と空の間にくつきりと黑く見えた。川上を覗くと、水のうねりが魚の腹のやうに光つて、鐵橋が大きな陰影になつてゐた。

『彼洲へ渡らうよ。』

女の瞳がぱつと燃えた。私は右の腕を女の頸に卷きつけて、そして步き出した。步く度に女の肉體の曲りくねりが微かに空氣を動搖させた。それは恐ろしく魅力のあるものであつた。

私らは橋の袂に立つて黒々とすさまじい奔流を眺めた。私の心に一種の緊張がみなぎつた。私は空中に、うんと、兩手を伸して胸を大きく張つた。胎内の血がどき／＼と、熱烈な新鮮な力を全身によみがへらした。

『おう――い！』

と力一杯の聲を張り上げて、怒鳴り度い氣が渦巻き起つた。この氣持は旋風のやうに私の心を盲目にした。私は全く一瞬間、女を忘れてしまつた。私は唯自分にみなぎる潑剌たる力のみを意識した。

『わあ――い！』

その聲は森沈とした夜の大氣をつき破りつき破り、限りない草原や空中を、ぐる／＼漂え乍ら渦巻きいつた。川面をさゝとすべつて行くのを意識して私はたとへ難い勝利のおもひに打たれた。然しやがて其の聲も何所にか消えさつて、後には變らぬ靜かなる自然と人との沈默があつた。

『どうなすつたの!?』

女が俺にすがつて泣いてゐた。

『なんでもないよ。さあゆかう。』

腐りかけた橋は一足歩む度にゆれた。むくむくと白い川の泡沫が橋桁の隙間から見えた。今にも落ちさうな眩惑があつた。

『おう、怖いことよ！わたし。』

女は私にすがりついた。

私は橋の中央で立止まつた。橋が未だ揺れてゐた。切なさが犇々と私の胸にしみて來た。

『お前は僕を眞實に愛してるのかい。
女の瞳がうるんでゐた。うるんだ瞳の一重裏には、潜みかくした情熱が、眞赤に燃え立つてゐた。あゝ、罪だなあ。
とおもひながらも私は責めるのだつた。
『まあ、どうして、』
『お前は、眞實は愛してゐないんだらう。』
『どうして、今になつて、そんなことを仰るの。』
『きつとさうだよ、お前は僕をだましてゐるんだよ。』
『…………。』
女はぢつと私を見た。冗談だらうと推測して笑ひかけたが、私の眞實に怒つてゐるらしいのを認めて、もう一度確めるやうにぢつと見てゐる。私はそのづるい目差しにぶつかつた時、今迄ほんのお芝居にやつてゐたことが急にほんとに變つて行くのを感じた。次の瞬間にはたまらなく女が憎く、女が嫌になつてしまつた。もうもう、お前なんかは捨ててしまふんだ！
『僕は歸る！』
『あら！』
女の瞳に潜んでゐた炎がぱつとほとばしつた。
『つまらない、歸る！』
其時はもう私はもとのうそれかへつてゐた。私は歸り度くない氣に浸された。女が私の袖もとらへて哀願するやうに

白い面を上氣させて、おどおどしてるのを冷えやかに眺めた。もう一度私は低くつぶやいた。

『成る——。』

『政さん、それあ、あんまりぢやなくつて！』

私は女を見かへした。女はすつくと立つて、私の袖をはなしたまゝ、私をにらめてゐた。

橋下を水が流れ、橋は女の身肉と共にぶるぶる戰慄してゐる。

あゝ。それを俺は待つてゐたのだ。お前も愈々眞劍だね。——私は自分のぶるぶるふるえるのを止められなかつた。

嚴肅な死のやうな瞬間があつた。女と私のあらゆる障害物が一時にやぶられて、力強い魂が一つのリズムにとけ合つた

私は心から、女を抱きかかへた。

『幸さん！』

『ええ！』

どかどかと橋板を破るやうに私は女を抱擁したまゝ一さんに川洲の中へ走込むだ。しとやかな芝草が、今宵の私らのために柔らかいしとねを準備してゐて異れた。桑の木の茂みを通り抜けて、小さな丘の蔭の草原に私と女は一つに成つて投げ出された。

『幸さん！』

『え丶！』

魂の眞實切ないあえぎは川瀬の音に合奏した。……………

螢が靜かに流れて行く。闇が光を含むで薄れて行く、大河の響音が永遠にもつれ合ふ。——

私と女は一言も言葉を交へないで市街への路をとぼとぼと辿つた。

悲しい氣持であつた。魂がげつそりと空虚であつた。後につゞく女の低い足音に、私はうなだれ乍ら、づるさうに微笑むでゐる女を想像した。ぺつぺつ！私は唾を吐いた。實に、實に、嫌な奴！

『隨分おそくなつたのね。』

何と云ふ上ずつた調子だらう、私の胸に蠟燭の仄暗いゆらめきの樣に、－氏の夫人の羨ましい親切な言葉づかひがはひ込むでゐた。

『さうだらね。』

沈默。

『政男さん！』

えつ私は默つてゐた。

『政男さん！――あなたお家の首尾はいゝの？』

『えつ？』

『こんなに遲くなつても宜いんですか？。妾は大丈夫ですけれど。心配になつたよ。』

私はつと立止まりにかかつたけれど、思ひ切つて歩き乍ら考へた。女奴！と私はさげすんだ。然し私にとつては此の女の言葉は痛手であつた。私は女がさつきより刻々に強くなり行くのを感じた。私はぺつと唾を吐いた。然し心は既にしかまるやうな不安に苦しめられてゐた。女の注いだ毒汁はぐんぐん私に廻りはじめた。そう意識する間から女のづるい嘲笑が見えて來た。

生暖い風が、はたと私の顔をなぶつて過ぎて行つた。

「此の生温い風が……」と、私は考へた。

此の生温い風は、私の頬をなぶつて、眠りぼうけた梨子の花に雨の国の甘い夢でも結ばせて、ぽつと微笑をもらさす畷道の瓜のしやれ者の夜宴の席で一寸御辭儀をして、しやれ者が異國歸りの唐茄子に仕込まれた丁寧な返禮の過ぎないうちに、今寝床に這入りかけた稻の頭をなでつゝ一散ばしりに市街に入る。市街の中央の舊城の壘の窪地燕鳥の殘した蒼い糞の臭氣にたえかねて、方向を西南にとつて、或時大は町のしだれ柳の青い若葉にからかひ、或時は町角の交番の巡査の赤い鼻に接吻して、さてたまには暗い街もよからうと、空地の多い屋敷町に這入り込む。

「さあ」

と私は苦い氣持に、想像の力をゆるめてしまつた。如何うすることも出來ない焦燥と嫌惡が一樣になつた。とぼしい孤獨の念が次におこつた。

閉め切つた八疊の部屋がある。色のさめた所々つぎのあたつてゐる蚊帳が釣つてある。その蚊帳の中には三つの茶色の肉塊が轉がつてゐる。人間の言葉がごろごろと飛び出て來る。

――政男は未だ皈らんのか。

――もう十二時だのに何をしとるのだらう。

――大體、我儘だ！

「あゝ」

私は自分の胸を抱いたのであつた。自分丈が放逸に、仕度い放題に振まつて、のらくらと他人の汗を、他人の勞働を

澱んでゐるやうなすまない自責の心がわいて來た。ゆくりなくも私は、過日、從兄が泌々訴へた言葉が今更の如く思出された。

――政男君、僕あ無理を言ふんぢやないがね、人の感情や家の經濟をもう少し考へて見て呉れなくちや、父は父であゝして毎日勤めてゐるし、僕は僕で働いてゐるし、――それあ、たとへ毎年上る多少の年貢米はあつても、君が若い身體でさうしてぶらぶらしとると云ふことは、第一君自身恥づかしくないかね。――僕が汗水垂らしてもうけた金をむざむざ遊んで食はれるかと思へば、僕あ働く甲斐がない…………

『あゝ』

と、私は遂に立止まつて空を仰いだ。白く光つた空には往來する雲とてもなかつた。私は地にひざまづき、地に接吻して、

『おゝ、我を哀れみ給へ。』

と、祈念し度いやうな哀はれつぽい氣持になつた。私は心の中で叫んだ。

『叔父上、叔母上、そして親愛なる從兄よ、貴方らの言ふことは正しい。貴方らの言分は皆、有がたく尤なことです。――然しこの私も決してあなたらの思つてゐるやうな樂なのらくら者ではないのです。あなたらよりはもつと苦しいものと悲慘な、もつと眞面目な生活をしてゐるのです。

叔父上、叔母上、叔兄よ。私らは決して惡いのではないのですよ。もつと外の何かが惡いのです。』

泣き度い氣に襲はれて、眼をつむつた。あゝ、皆んな哀はれだ。睫毛に涙が不覺にも浮んで來た。都に殘して來た女の蒼白い顏がじつと涙のうちに動かなかつた。止度もない感激が私を夢幻の境に引きづり入れる。そのうちに、私は

『やあ！』と驚いて叫んだ。心配さうな邪淫の女の瞳がちらと閃めいて、哀はれな都の女の幻影があとかたもなく消え失せた。

『あなた、もし、政男さん、さつきから立止まつて何をしてゐらつしやるのよ、——政男さん。』

女はつづける。

『あなた、餘つ程變なのね。早く家へ歸らなくちや、妾だつて懸いわ。あら、まあ、泣いていらつしやるの、どうかなすつて？』

にくい女だ。けがらはしい奴だ！あゝ、俺は何んだつて女なんかと——。戀だ？えゝ、苦しい。いつそ、死んだ方が、死んだ方がましだ。みんな、世界中が消えてなくなれ！

私は又歩き出した。川瀬の響音がもうかすれかすれに聞えなかつた。道は直ちに市街に這入つた。平安な休息が、市街全體に惠まれてゐたが、その底に横はる大きな不安と苦惱は如何に力あるものであらう。私は軒々の赤ちやけた電燈などを數へて歩いた下駄が地面に當つては反響するのがわけもなく快よかつた。私は道を歩みつゝ、今度はおぼろ氣にI氏夫人の親切な慈愛と理解を戀ひ慕ふ心の育つのを意識した。空は全く暗かつた。

『妾、此處で失禮しますわ。』

其處は四つ角であつた。角の魚屋の店先につるした活動の赤いビラに、閉め切つた戸の隙間から微すかに明りの射してゐるのを二人は眺めた。女の嬌態はもう私の心を捕へることは出來なくなつてゐた。

『妾、失禮してよ。——隨分遲くなつたのね。——氣分はもうお宜しいの？』

そんな安つぽい同情は御免だよ。と思ひたら、私は一種の淡い哀愁をおぼえた。離れともない不思議な愛着が私の心

の何處かにこびりついてゐた。

『では、さようなら。何あに氣分なんか惡くないよ。――非常にうれしかつたよ。』

『さようなら、お休みなさい。』

女はいそいそと歩んでいつた。あはゝゝゝ、と私は笑つた。――直ちに一味の幽鬱と女をいぢらしと思ふ心と、女を喜ばしてやり度いと云ふ氣とが私に迫つた。ええ、――今夜の夢見のよくあるために！

ぴい――つ！

女は曲り角で、つと振り返つた。そして返禮の

ぴい――つ！

は、鋭く歡喜に波うつて街をつき抜けて響いた、その刹那、大磐石のやうな悲痛と孤獨と哀愁がぴつたり私を壓しつけて、身動きもならぬ境地に深く沈めてしまつた。

『苦しいな、』

涙は目縁迄充ち溢れたが、何かでせき止められる樣に一滴もこぼれなかつた。一さんに路を走る私の頬に夜氣はつきさす如く切れていつた。が、私は、駈けることを止めた。動悸は大きく鳴り響いて、ぐんぐん血の上るのが分つた。家は直ぐ私の前にあつた。

淋の色は青黑く神秘に光り半分首をもたげたラッパが夕ぐれと同じ位置に同じやうにゆつとつき出てゐた。私は一心にそれを見つめた。見つめてゐると、さつと不思議な幻影がきらめいて、闇を、空間をひよい〳〵と舞ふて行く……

『ふゝ…………………。』

奇妙な笑ひが私に込みあげて來た。それは恰然私のかはりに誰かゞ私の肉體を借りて笑つてるやうに、笑ひながら感じた。

『うつふゝ……………………。』

明日は女と一緒にK村へI氏夫人を訪ねて行くんだ。新綠のフレッシュな匂ひに蒸されてる閑寂な寺院の庭裡で俺は話すぞ。I氏夫人！――女奴！今夜はひどい目に合はしたね。明日は明日は復讐だ…………よくもこの俺に苦い汁をぶつかけたな。

――政男さん、あなた、家の首尾はいゝの？馬鹿！家の首尾なんかを俺が恐がつてゐると思ふのかい。

私は家の櫺子戸に手をかけた。持手の金屬が鋭い感じを與へた。私はぐつと力を入れて戸を開けにかゝつた。私は激しいショックに打たれて默然と戸口に突つたつた。

戸には鍵がかけてある！

頭の髮の先端から足指の爪先迄、鋭い辛辣な痛みがつきぬけた。

腹のどん底をぐり〳〵とさらえるやうに、強い恐ろしい笑ひが旋回して來て、突然口と鼻と目――身體のすべての穴からどつと刹那に暴發した。

『愈々、――だなあ！』

『わつは…………………………――。』

蛋の薄くなつた月光は冷めたく私を照らした。私の笑はなか〳〵に止まなかつた。笑ふ毎に身體中の貴いものがこと〳〵く逃げ出して行くやうで、――それは夕方子供らが戯んでゐたしやぼん玉の印象に似て、ぽつかりと空間に浮んでは消えていくのだつた。燕の喉のやうに赤かつたり、緞帳芝居の御姫樣の帶のやうに紫であつたり、異人の眼のやうに青かつたり、水晶の玉のやうに透ほつてゐたりした。……



潮風

里見弴

十一

夕闇のなかに、ポカリと浮んだもの〻やうな、列車の紅い尾燈が、見る〳〵小さくなつて行つて、踏切りのさきの曲で、やがて見えなくなつて了ふと、直衛は、なんとなく深い溜息をついた。――徐々に速力を加へて行く汽車について、悦三の振り動かすパナマに合せて、自分も片手を高く擧げながら、いつか陸橋の下まで來て、そこから、ぼんやりと紅いランプを見送つてゐたのだ。

程なく下りがはひると見えて、向側のプラットフォムには、三々五々人影が動いてゐるけれども、こつち側には、もう切符を受け取る驛夫さへゐなくなつて了つた。ふと、淋しくなつて行かうとする心を、ぢつと引き締めるやうにしながら、直衛は、陸橋を渡つて、片瀬行きの電車の停留所の方へ出た。

さつき悦三と一緒に、そこの改札口を出て來る時に、行き違ひにはひつて行つた、二十二三と見える美しい女のことが思ひ出された。親しげに、ニツコリ笑つて、輕

く頭をさげて行つたが、それについて、車窓から胸まで乘り出した悦三と、忩がはしく、こんな會話をとり交はした。

まづ口を切つたのは悦三だつたが——。

「今の女の人は誰だい」

「知らない」

「だつて、お辭儀をして行つたぢアないか」

「うん、さうらしかつた」

「あの時、俺のすぐあとから來たのは、君だらう？」

「あゝ」

「實ア、俺かと思つたんだけれど、どうも知らない人だし、多分あとから來る君の知つた人だらうと思つてたんだ」

「いや、知らない」

さう答へた瞬間に、發車の呼子が鳴つた。と、思はず知らず、直衛の口邊には、ニヤリと、意味ありげな微笑が浮んでゐた。假にも、自分の知つた人にして置きたい氣持が、決してなんのかんのと追究されッこのない二人の關係、——動きだした汽車と、プラットフオムとに引き別れて行く、その關係に乘じた、ふとしたいたづら心からだつた。

「ぢア、さよなら」

と、急いで帽子をとりながらも、その時悦三の唇は、（怪しいぞ！）と云ふやうな微笑で、引歪められてゐた。

チラと見たばかりだけれども、女の風俗は、そんなことに疎い直衛の目にも、すぐ東京もの、——而も花柳界關係のものらしく映つた。若し直衛が人に話すとすれば、少し頰を染めながら、「あくぬけのした」とでも形容するだらうと思

はれる女だつた。で、悦三が何か云ひ出すまでは、てツきり彼が、銭湯の間に知り合つた女だらう、と思つてゐたのだ。

（だが、さうでないとすると……）

片瀬行の電車のなかで、むき出しの頭を、心地よく窓からの風に吹かせながら、直衛は考へた。自分のすぐあとにはどんなやつが續いてゐたか、急いでゐたので、振り向いても見なかつたが、女の視線から云つて、さううしろと云ふことはない。慥に、悦三でなければ自分、自分でなければ悦三、と云ふ見當だつたが、では、人違ひだつたのかしら。

（それとも……）

と、彼は、すぐ物語めいた空想にはひつて行つた。子供の時分に、近頃に住んでゐて、よく一緒に遊んだ、と云ふやうな娘、――さう云へば、自分のちいさい頃には、體が弱くて、とても男の子と一緒になつて、荒ツぽい遊びが出來なかつたものだが、――さう云ふ娘たちの一人が、あんな風に生ひたつたのではあるまいか。そして、むかふでは、昨日のことのやうに覺えてゐる？　……さうだ、女はひどく變つて了ふけれど、俺たちは、まだこんなに書生々々してゐるから、さう吃驚するほど變つてゐはしまい。俺たちより慥に二つ三つ若いやうだが？　妹のところへ來た娘たちの一人かな。いや、俺も、隨分年下の女の子と遊んだから……。

けれども、これぞと云ふ心當りもなかつた。ないまゝに、いつかそれが、動かせない事實らしく思はれて了つて、今度は、鵠沼の停留所でおりると、そこに、――丁度伜が一寨もないとかなんとかで、女がまだぐづぐづしてゐる、と云ふやうな場面を、空想に描き始めた。

「暫でございました」

と、にこやかに笑ひかけながらも、今度はやゝ改つて、丁寧に小腰をかゞめる。――その瞬間に、自分も娘の名をはツ

と思ひ出して、

「お××さんでしたね。あんまり久振りなので、さつきはわかりませんでした」

「まア、隨分ですわ」

その調子があんまり色つぽかつたので、空想のなかの直衛が、グツとつまる、——同時に、我に返つて、思はず、ひとりでニヤリとした。

(川瀬のやつ、俺の知つてる女だのに、故意と知らんふりをしたと思つて歸つたらしいな。きつと、怪らんやつだ、なんて、少しくらゐやきもちをやいてるに違ひない)

それを思ふと可笑しかつた。(だけどまアいゝや。あいつは、今夜まツすぐにうちへ歸る筈はないんだから、このくらゐのハンディキャップを背負はしてやつて丁度いゝんだ)

きつと、明日あたり、待合か女郎屋から、羨しがらせの端書か手紙をよこすに違ひない。さうしたら、こつちも、「藤澤の終點ですれ違ひになつた人と、圖らず宿の廊下であつて、久闊を敍した。君が歸つて淋しいどころぢアない。丁度いゝ時に歸つてくれたと思つて、大に感謝してゐる。」とかなんとか。あべこべにやツつけてやらう、などゝ、心のうちに北叟笑んだりした。

すいた電車ではあつたが、鵠沼でおりたのは、直衛一人きりだつた。もとより、停留所には、空想の女は未、人ツ子一人ゐなかつた。それがあたり前であることを、重々承知してゐながら、なんとなく彼の心は淋しくされた。そこにすぐ浮んで來るものは、なんと云つても、一月半ばかりを、朝から晩まで顔を見あつて暮して來た悦三の姿だつた。——見れば見るほど黑々と日にやけた顔と、お祖母さんの形身だとか云ふ、洗ひ晒してけばだつてはゐるが、美しく紺の出

た蜻蛉飛白の上布との間に、クッキリと襦袢の襟ばかりを白く浮かせた取澄の悦二が、ありありと眼前にあつた。憎らしくなるほど、この友達をミスする心が深かつた……。

小松林の間の、例の定木をあてゝ引いたやうに一直線な道は、今日午ごろまで降り續いた雨に、しつとりと濡れ固つて、いかにも踏み心地がよかつた。直衛はまつすぐに海岸の方へ、あの、朝に夕に讃美歌の聲のおこつた家の前を通つて、橋を渡つて行つた。時々流れる雲に覆はれるけれども、いゝ月夜になつた。盛りの頃ならば、あつちこつちに散歩する人たちの姿が見えるのだけれども、もうそれもなかつた。直衛は、輕い勞れを覺えて、濱に引きあげられた漁船にあがつて、舳のところを枕に仰向にノウノウと身を横へた。伏目に足の方を見ると、馬鹿に遠く、自分の體がひどく長いもののやうに思はれる。そしてゆかたの紋の、月光をうけて白く光るところと、暗い蔭とを見詰めてゐるうちに、雪を頂いた山脈が、蜿々として連なつてゐるやうな氣持になつた。――いゝ心持だつた。が、それも永くは續かなかつた。

……いつの間にか彼は、從姉妹のかづ子のことを思つてゐた。客間のソフアにボコンと身を埋めて、お得意のショパンの夜曲を聞いてゐる彼だつた。ピッチリと合つた足袋が、ペタルを踏む……。と思ふと、舊式に、横に仕切つた三等車のなかで、「月見草」が、すぐ自分の眞ン前に、膝の上に教科書の風呂敷包を載せて、つゝましやかに伏目になつてゐる。……お才が、不機嫌なのかと思はれるほど眞面目くさつた顔つきで、散らかり放題になつた違棚の上を片づけてゐる。……砂の上に、はつきりと護謨裏の草履のあとが殘つてゐる。それを見詰めてゐるうちに、なんとも云はれず悲しい心持になる。深くはない、が、いかにも綺麗に澄んだ池を思はせるやうな、可愛いゝ、長閑な目。體との比例で、小さすぎるやうな氣がするほどチマチマとした首。すんなりと延びた手足。――それは、あの教會の連中の、名も知らない「彼女」だ。なんとなくその人が、直衛には、「思出の記」の敏子のやうな性分の娘に思はれてならない。「青竹を割つ

たやうな」スカッとした明るい氣持が、すれ迷つたばかりでも、こちらの胸に響いて來る…
（だけど、俺は、あの菊池愼太郎みたいな、あんなきざは云はない）
と思ふと、急に「彼女」が、晝も夜も思ひ焦れてゐる戀人のやうな氣がして來た。
（なあに、構ふもんか。俺たちはどん／＼戀をしなけれア嘘だ！）
と彼は、決然として心に叫んだ。（俺たちの戀する人は、どうせ俺たちと結婚できないにきまつてゐる。だけど、そんなことはちつとも構やしない。假令結婚できなくつたつて、眞からその人を戀して、機が熟してその戀を打ちあけるのが、何が惡いんだ。純な戀と結婚とは別問題だ。俺たちは、——少くとも俺は、今まであんまりそれをくつつけて考へすぎてゐた。俺と、互に戀を打ちあけた人が、世間と云ふものに縛られて、ほかに嫁入りすることになつたつて、自分さへ諦めれば、それでいゝんだ。どこにも差支はありやアしない。結婚の可能性がない限り、どんなに心で思つてゐても、互に戀を打ちあけてはならない、なんて思ふのは、馬鹿の骨頂だつた。そんな、そんな馬鹿げた理法はない！）
誰にともなく、喰つてかゝるやうに、そんなことを考へて、亢奮して、直衞は身を起した。見ると、雲が霽れて、海は美しく月光をあびてゐた。船から飛びおりた。
（月もいゝ、波もいゝ。雨に濡れた砂もいゝ。戀は尚更いゝ。……）
そんなことを思ひながら、直衞はぶら／＼と宿の方へ引き返して行つた。

十二

どうだね、少し觀察に馴れたものなら、字を見たばかりでもすぐ分る筈だが、いま俺は床の上に腹んばひになつてこの手紙を書いてゐるのだよ。その床と云ふのは、お才君にひいて貰つてゐたやうな、あんな薄ツぺらなちやん

ぢやないんだぜ。厚さ一尺五寸、幅はかれこれ五尺もあらうと云んだ。ところで、目下その幅が不必要に廣いが故に、從つてこの不必要な手紙を書く氣になつたんだが、――なんと、おわかりか。おわかりならば、歸らんせ、いつでもお誘ひ申します。直公返答、なんと〳〵。

月は鵠沼に限つて見えるんぢアない、……こゝは雨戸なき國にて、暑ければとて、灯を消し、障子をあけ放ちけるに、月かげ水の如く、軒の端に流れよりけるを、手もて汲むよと見えしは……。あとは虫が食つてゐて讀めない。

いま朝晝兼代の飯を濟せたところ。火曜日のことなれば、(と云つても通じまいが)令夫人には愛國婦人會に御出席。(と云つても通じまいが)かるが故に、枕頭に手提鞄をとりよせ、(大行李は新橋驛に一時預けの筈)レタアペエパアと萬年筆をとり出し、謹で君に一書を呈する次第である。

早く歸れ。歸りの汽車を電報で知らせろ。九月の避暑地なんてものは、堂々たる男子の永く留るべき所ではない。而も「彼女」は既に去つてないのぢアないか。前にも申す通り、月は鵠沼に限つたわけぢアない。君を引きとめてゐるものは經濟か?? 經濟なら、東京でも讀めるよ。下の一字だけぢアないかな?! なんと圖星だらう!

加賀ノ國の佗人　(と云つても通じまいが)

九月〇日　　川瀨ノ悅三

直衛相模殿

悅三歸つた翌々日の朝、烈しい吹き降りの、硝子戸をたてきつた蒸し暑い部屋で、直衛はこの手紙を讀んだ。いゝ心持に浮れきつてゐるのに、一寸反感も感じたが、あんまり豫想どほりだつたので、結局は可笑しかつた。(と云つても通じまいが)と註してある文句は凡そ見當がついたが、(下の一字だけぢアないかな?!)がわからなかつた。

（下の一字、さい、すむ、……なんだらう。すむ、すむ、と。さい。……はゝあ）

と、思ひついた。――お才のことに違ひない、と考へると同時に、直衛は、思ひがけなくも、たつた一人でゐながら、頬へ血がのぼつて行くのをどうすることも出來なかつた。

悦三の心がお才の方へ動いてゐると感じられたことこそあるが、直衛は、自分の心が一寸でもさう傾いたとは思はなかつた。もう一つ突込んで考へるならば、友達が、假令どんなに輕い程度にもしろ、好意を示してゐる女と知つては、直衛の氣持は、もう決してその方へは動かない筈なのだ。そのくらゐの「堅さ」は、十分もつてゐるつもりでゐるのだ。それどころか、さう云ふ「堅さ」は、云ひ換へれば一種の「弱さ」で、いつも必ずいゝことだとは思へなくなつてゐるくらゐなのだが、それにも拘らず、自分の性分としては、矢つ張りどうにもならないもののやうに、寧ろ悲觀して考へてゐたことだ……。

それだのに、いま、お才のことだな、と思ひつくと同時に、まるで永の年月自分一人の胸に秘めてゐた戀人の名を、いきなりピタリと云ひ當てられでもしたやうに、ヘッと杜胸（とむね）をつかれたのは……？　不思議ともなんとも、――直衛は自分ながらまるでわけがわからなかつた。殊には、（なんと、圖星だらう！）と云ふ文句があるだけに、一層カッとなつて了つた。赤くなつた頬を、あのいやに冷たい悦三の目が、どこかで見詰めてゐるやうな氣さへして來るのだつた。

けれども、少し落ついて考へてみると、この文句は、いかにも悦三らしかつた。と云ふのは、決して彼が炯眼だと云ふ意味ではなくて、一寸でも（或は中々一寸ではないのかも知れないが）好きになつた女を、友達と同じ屋根の下に殘して、自分だけ離れて了つたと云ふだけのことですら、もう輕い嫉妬を感じるのが悦三だ、――さう云ふ意味で、直衛は、（圖星だらう！）を、すぐにひつくり返して了ふことが出來た。

が、悦三の方はそれで片づいたとしても、どうにも仕樣のないのは、現にたつた今、自分の頰へのぼつた血だ。これをなんと解釋しよう。悦三の（國辱だらう！）には、なんの力もないとしても、自分自身の赤面は、これは動かせない事實だつた。――かう、咽喉でも締めつけるやうに、考へ迫つて來る自分の裡の或るものに向うて、直衞は、いきなり怒鳴り返した。

（それぢア、俺がお才に惚れてるつて云ふのか！　それが動かせない事實だつて云ふのか！）

そのものは、たゞニヤリと笑つて消えて行つた……。

とたんに、お才が、――當のお才が、お櫃の上にお膳を重ねて、はひつて來た。

「お待たせ申しました」

さつき洗面所から歸つて來た時、まだ掃除がしきれないで、そこらぱた／＼やつてゐたお才と、いま目の前のお才との違ひ……、いや、お才に變りはないのだけれども、直衞の心に起る氣持の相違は、時間で云つて、やつと三十分たつかたゝないうちに、かうも變つたお才と差向ひにならうとは、夢にも思ひよらないところだつた。――直衞は、わが胸の動悸を聞いた。體がなんとなくぎごちなくなつて了つた。胡坐のまゝでゐたものか、――いつもは大抵坐り直すのだが、そんなことまでが、一々意識的に考へられた。

射つけるやうな雨の足が、硝子の面にピシ／＼と音を立てゝゐた。氣がつくと、風の勢は益加つて、地響のやうな海聲がいつになく近く聞えた。――直衞は矢つ張り坐り直して、からの茶碗を默つて突き出しながら、目は庭の小松を見詰めてゐた。普段は死物のやうな氣がしてゐる樹木が、いかにも苦しげな表情を、生々と赤裸に現はして、烈しく風にもまれてゐる。灰色の空を、淡い煙のやうな雲が、低く、どん／＼走つて行く。

「まるで嵐……」

お才が獨語のやうに呟いた。

「うん」

初めてチラりと目を向けると、丁度直衛が今までしてゐたやうに、首を庭の方へ振り向けてゐた。——まるで動物の苦しみ叫つてゐるやうな小松の姿が、そのぢつと見据えた黑い瞳のなかに流れ込んで行くのを、はたから、手に取るやうにハツキリと感じて、直衛は、その瞬間、女の心をそつくり握りしめてゐるやうな嬉しさに浸つた……。

食後、どこからともなく吹き込む濱風に、氣持惡くヂトつく疊の上に腹匍ひになつて、悦三への返事を書き始めた。

持つてゐる手がベタ／＼しさうにとろけ切つた手紙、今朝拜見。豫め期したるところだから、別に可笑しくもない。と云ふと、貴樣のことだから、負惜みだと邪推するだらうが、さうでない證據は次の文句で知るべし。

古人曰、食ふてその味はひを知らず、と。いま食ひ終つた飯が實にその通り。お分りか。お分りならばどうとやらだ。この一句、なんと骨身にこたえやうがな、だ。

一人になつたら、なんだかへんにぼんやりして了つて、經濟も十頁ばかり讀んだきりだ。おまけに、今日は嵐のやうな吹き降りで、部屋のなかが薄暗くつて陰氣で仕樣がない。明朝起きてみて、こんなだつたら、豫定を變更して早く引き上げるかも知れない。

どうも、貴樣がゐた間ぢうの運動過多の結果だらうと思ふんだが、へんにグツタりして了つて、あたまにも體にも力がはいらないで困つてゐる。そのすきを目がけて、くだらない妄念が湧いたりする。ひよつとすると、貴樣の惡影響をうけて、精神的に墮落しかけたんぢやないかしら、と心配なくらゐだ。だが、どつちにしろ一時的の

現狀なことは慥だから、すぐ貴樣が得意になつて、惡魔のやうな嘲笑ひを泛へたつて無駄だよ。貴樣が加賀の國の住人にならうとどうしようと、俺の知つたことぢあない。そのやうに、俺だつて、(貴樣に云はせれば、そこが消極的で駄目なんだらうが)俺だけの立場はさう易く動かしやあしない。自分の性質に反した、早く云へば柄にない眞似をして、馬鹿をみたくはない。例へば、貴樣なら、そんなことをしてゐるうちに、悪い病氣に罹つたつて、平氣な、或は寧ろ得意げな顏をして、俺のとこなんかに吹聴に來るかも知れないが、若し俺がそんなことになつたら、――思つても身顫ひが出るくらゐだ。

まあ然し、成べくそんな病氣には取り附かれないやうにしろよ。(こゝを讀む時の、貴樣の苦笑ひが目に見えるやうだ。餘計なことを云つて了つたかな。)

グッタリ疲れて了つた代りには、俺の氣持は大分落ちついて來た。もう一時のやうに、馬鹿々々しく燃えやあしない。それだけ、ちつとは淋しい。今日は特に、「忙しい」と云ふのはこんなんだらうと思はれるやうな氣持だ。

勿論天氣のせいもあるが。

もういやになつたからよす。

直衛

悦三兄

それから狼藉のやうに、

歸京の時間は知らせる必要を認めないから、知らさない。

と、書いたが、一寸考へて、鋸の刃のやうな線を何本も重ねて、すつかり讀めなくしてから封筒に入れた。

十三

豫定してゐた日が來た。荷造りの時、直衛は、たうとう七八十頁讀み殘して了つた經濟の本を、(一寸殘念だつたなア)

と思ひながら、鞄のなかに擲り込んだ。

汽車は悦三が歸つたのと同時刻のを選んだ。矢張り早めに夕飯を濟して、荷物だけ先に俥で運ばせて、手ぶらで玄關に出た。宿の女將と、お種とがそこで待つてゐた。

「お世話さんでした」

「どうも失禮ばかり……。どうぞまたお出なほしなすつて……」

「どうぞ川瀬さんによろしく」

例の景氣のいゝ調子でさう云ふお種の聲を聞きながら、直衛はふり向いて、部屋からついて來たお才の手から、毛繻子の洋傘を受け取らうとした。何か云つたが、それは聞えないで、ひよいと洋傘を引つ込めるやうにして、先にすりぬけて式臺へおりると、お才は下駄をつつかけて、お種の隣に並んで立つた。改つて玄關に直されてみると、一寸氣がひけるほど薄べつたくなつて了つた下駄を穿きながら、直衛はそこで、これも一寸氣のひける太毛の傘を受け取つた。

「さよなら」

「さよなら。ご機嫌よろしう」

みんな揃つて頭をさげた。と、カチヤリと音がして、小砂利の上に何か落ちた。——お才の今朝結つたらしい銀杏返しの前櫛だつた。何故か、直衛はハツとした。殆ど、不吉な前兆と云へるやうな暗い氣持が、突嗟に彼の心を掠めた。餘り遠くない未來に、お才の身の上に何か兇事が起る、——少し誇張して言葉にすれば、そんな豫感だつた……。

背後見られる心地で、彼は急ぎ足に門を出た。繪端書や釣竿を買つたりした店や、氷水屋の前も、淡い別れの心持で過ぎた。道が東へ向くと、眞正面に、吃驚するほど大きな、黄色い月が、小松林の上に出かゝつてゐた。ふと彼は「月見草」を思ひ出した。これからかづ子、教會連中のなかの「彼女」、そして、お才へ來た時に、目のなかにぢつと涙がたまつて來た。——それを彼は、何か知ることの出來ない不吉な運命を、彼女のために悲しんでゐるのだ、と思つた……。

（つゞく）

of communism, where the administrator may he expected to have more power than he has ever had before. The danger can only be met by acknowledging the importance of creative work and the fact that the best creative work often does not commend itself to contemporaries. It is not in the least necessary that the artists and men of science should be rewarded for their work, since the best of them are indifferent to rewards and do their work merely because they love it. But it is necessary that they should be free to do it and free to make it known,— that, for example, a man of science should be able to print his work without having first to find favor in the eyes of officials. All this will come about of itself if communism comes as a liberation for the many, not as a punishment for the few, if it is love for the good we are creating that inspires us, and not merely hatred for the evil we are destroying. It would be demanding the impossible to suggest that hatred should be wholly absent as a generator of energy in the time of transition, but it is important that it should not be the fundamental motive. If hatred is the fundamental motive, the regime created will be oppressive and restrictive, not only where it must be, but also in many directions where oppression and restriction must be avoided if progress is not to cease. It is a world full of hope and joy that we must seek to create, not a world mainly designed to restrain men's evil impulses. Evil impulses must be restrained, especially during the time of transition while they are still strong, but this is an incidental part of our task, not its main purpose or inspiration. The main purpose and inspiration of any reconstruction which is to make a better world must be the liberation of creative impulses, so that men may see that out of them a happier life can be built than out of the present frantic struggle to seize and hold what others desire. Communism once established may so regulate the material side of existence as to enable men to take it for granted, and to leave their minds free to employ their leisure in those things which make the true glory of Man.

come. New growth will come from the creative people, the men of science, the artistis, the thinkers, many of whom very probably will be critics of the new order. Under the influence of commercialism, many men have come to think that the important progress is progress in the technical methods of production, better machinery, better means of communication, and so on. This has been true, since in the past labor was not sufficiently productive to provide a good life for all. But it is true no longer, and with our existing technical knowledge, if we had a scientific communist organization, every man could have enough without long hours of work. When once men have enough of material commodities, there is no great importance in providing them with a superfluity. It is only commercialism, the competitive struggle for markets, as reinforced by the luxury of the very rich, that has made mere quantity of goods seem so important. We have reached the point where we could organize our material resources in a way that would leave sufficiency and leisure for all. Therefore the important progress now is not in industrial production, but in ideas. One might hope that under communism the energy liberated from the production of luxuries and armaments would be employed in the pursuit of knowledge and in the beautifying of life, bringing back for the many that artistic excellence which existed in the pre-industrial era for the few. But if this is to happen, there must be freedom for the creative people, the men of science and the artists. They must not be controlled at every point by State officials, or obliged to do work at every moment which is pleasing to existing prejudices. Without freedom, the man who is ahead of his age is rendered impotent. All innovations are, to begin with, displeasing to the majority, yet without innovations no society can progress. Freedom for exceptional people, provided their work is creative and not predatory, is the most important condition of progress in any society. There is always a tendency for the administrator to think of himself as God Almighty, and to imagine himself capable of judging the good or bad in every new ideas. This tendency is dangerous, and would be particularly dangerous in the earlier phases

was a time when such ideals as God, country, family, could move men. This time is past. All such ideals were used by elderly rulers throughout the war to drive the young to slaughter each other in futile carnage. Most of the young at the time believed that the war was about something important, but now that it is nominally over, they see their mistake. Nothing good has come out of it except revolt against the system which caused it; the vices of the vanquished have been acquired by the victors, and the only new hope has come from Russia, the most defeated of all the nations in the great war. Communism is, I believe, the only faith which can restore happiness to the world, which can cure it of the sickness left by the war, which can give men the sense that their lives are capable of something better than pleasure, and can end the despair that drives men to frivolous cruelty. The faith of the Russian communists in the new thing they are endeavoring to create is rather crude, rather ruthless, possibly rather premature, but it makes their lives happy as hardly any western life is happy; it enables them to endure privations and dangers, and preserves throughout a kind of joy and freshness in the soul such as one does not find in the weary west. If there were no other argument for comminism, the fact that it is a creative faith which the modern man can believe would be alone enough to make it the hope of the world.

And this brings me to the second of the two characteristics which a good society must have. It must be progressive; it must lead on to something still better. Now fundamental progress seldom comes from those who fit comfortably and easily into the existing system. It is not, fer example, from trust magnates that we expect the inauguration of the new era. In like manner, if we imagine communism established, it will not be from those who administer it or from those who have the least difficulty in adapting themselves to it that new growth will

ists is unable to create in himself even a somblance of belief in the old order, the order which made the war and blockaded Russia, the order which devastates Ireland, starves Germany and Austria, imprisons or kills socialists, and amid the tottering ruins of our old civilization, pursues the old absurd diplomatic game of haggling for territories and arming against nominally friendly nations. This old order is no loger capable of bringing happiness. It is not only its nominal victims who suffer, it is not only the defeated nations or the proletarians who find that life has lost its meaning. Even the well-to do classes of Western Europe have no longer the sense of anything to live for. Having no purpose in life, they have plunged into a frantic pursuit of pleasure. But with every added pleasure comes added unhappiness; while the senses are gratified, the soul remains hungry—there is no inward sense of well-bring, but only futility and despair.

There is only one cure for this despair, and that is a faith that a man can believe. No man can be happy unless he feels his life in some way important; so long as his life remains a futile round of pleasures or pains leading to no end, realizing no purpose that he can believe to be of value, so long it is impossible to escape despair. In most men at the present time this despair is dumb and unconscious, and because it is unconscious, it can not be avoided. It is like a spectre always looking over a man's shoulder and whispering acid words into his ear, but never seen, never looked at face te face. Once acknowledged, once faced, this despair can be coped with, but it can be coped with onlp by a new belief, by something which supercedes the search for pleasure. Although it may sound old-fashioned to say so, I do not believe that a tolerable existence is possible for an individual or a society without some sense of duty.

There is only one kind of duty that the modern man can acknowledge without superstition, and that is a duty to the community. There

ordinary rapidity in all that makes what we call civilization, but step by step with this advance has gone a progressive disintegration of belief. I do not mean merely belief in religious dogma, though this also has played its part. I mean belief in all the assumptions on which the social order is based; all the sources of authority have become suspect and all inherited institutions have ceased to command assent. The war and the Russian Revolution gave the *coup de grâce* to such beliefs as remained. At the beginning of the war, democracy was still a fighting creed, something for which men were willing to die. At the end, poor President Wilson was left its one remaining votary, proclaiming his gospel in pathetic isolation to a world which shrugged its shoulders and went about its business as if he had not spoken. It may be that some element of injustice is essential to the existence of a social order, at any rate for many ages to come. But in ages of faith, men believe in the social order even when it makes them suffer, even when they are the victims of what to a later age appears unmerited misfortune. Nowadays this is not the case. The only men nowadays who believe in injustice are those who profit by it, and even they in their hearts feel that their belief is not genuine, but merely an embodiment of self-interest. I except from this indictment the big capitalists of America, who are more naive, more untouched by modern thought than any other set of men, with the exception possibly of a few Central African negroes. American business men still believe in the capitalist system, but business men elsewhere merely hope it will last their lifetime, provided they can obtain sufficient machine guns and ships to shoot down or starve those who advocate systems which, in their hearts, they know to be better. Such halfhearted belief does not bring happiness. The capitalists try to persuade themselves that their war against Russia is a holy crusade, but in this attempt they are very unsuccessful throughout Europe. And everybody except the capital-

workers. Their judgment of the society they aim at creating is, in fact, vitiated by the aristocratic fallacy. It may be that the evils of the present world must be cured one by one, that inequality of wealth must be tackled first, leaving inequality of power for a later stage, and inequality in the pleasantness of labor for perhaps a still later stage. It may be that a bureaucratic centralized State socialism is the necessary first step. It is not this that I am denying. What I am denying is that such a society is good in itself, and I do not think that any one who imagines with equal vividness the lives of all the members of the community, can remain contented with an ideal which confines initiative, power, and the use of intelligence to a few.

A society which is to bring diffused well-being not only to one class or to one type of character, but as far as possible to every member of the community, must not be too systematic nor too orderly. It must not be the kind of society which a man of administrative temperament plans in his head and enforces by bayonets and the criminal law. Different individuals have different needs and it is important to suit all needs that can be suited without damage to others. It is, of course, necessary to restrain predatory impulses. The lack of any such restraint is one of the gravest evils of the world as it is. But it is at least equally necessary to set creative impulses free. This is the danger of what one may call tight systems. A military machine or an industrial machine treats men as all alike, with the exception of the privileged few who direct it; it has no room for exceptions, no desire for the kind of work that would not be ordered from above, no toleration for the kind of person to whom it is difficult to become a mere cog in the machinery.

Perhaps the most important of all the qualities that a social system can possess, is that it must be such as people can *believe* in. Europe during the last five centuries has advanced with quite extra-

cial observers suppose, to a difference between the British and American temperaments, but to a difference in their geography and industrial antiquity. But even taking the capitalist case at its best, even considering America as it was forty years ago, it was only the men of unusual enterprise and push and unscrupulousness who came to the top. Such men are, by definition, the minority, and a society which suits only them cannot be considered satisfactory except by one who commits the aristocratic fallacy. I am afraid there are many socialists who commit the same fallacy; they imagine industry developed under State control, and they visualize themselves in that future millenium as part of the State control, not as part of the ordinary workaday labor. In a system of centralized bureaucratic State socialism, those who direct the machine will have all the advantages at present enjoyed by the captains of industry, with the exception of enormous wealth, which to a vigorous, executive and combative person is one of the smallest advantages of business success, being valued merely as a tangible proof of ability and power and as a means of acquiring the respect of the herd. But it is not only the great captains of industry who will enjoy an exceptionally agreeable life under State socialism, it is also the whole army of officials. It is obvious that the man who sits in a government office and spends his time interfering with other people, has a pleasanter life than the man who works in a mine or stokes a liner. Yet there are may forms of socialism which would do nothing to remedy this inequality. The industrial machine as it has been developed by capitalism is full of injustices other than the inequality of wealth. Unless these other injustices are also remedied, a socialistic society may be scarcely pleasanter to the average manual worker than the existing system. This is concealed from labor politicians and from men with bureaucratic minds, because they envisage themselves in the new order as leaders or officials, not as ordinary

two opposite fallacies to be avoided. We may call these respectively, the fallacy of the aristocrat and the fallacy of the outside observer. We considered a moment ago the fallacy of the outside observer. The fallacy of the aristocrat consists in judging a society by the kind of life it affords to a privileged minority. The ancient empires of Egypt and Babylonia afforded a thoroughly agreeable existence for kings and priests and nobles, but the rest of the community were mostly slaves or serfs, and must have had an existence composed of unremitting toil and hardship. Modern capitalism affords a delightful existence for the captains of industry; for them there is adventure and free initiative, luxury and the admiration of contemporaries. But for the great mass of the workers, there is merely a certain place in a great machine. To that place they are confined by the need of a livelihood, and no effective chöice is open to them except the collective stopping of the whole machine by strikes or revolutions, which involve imminent risk of starvation. Defenders of the capitalist regime are apt to vaunt the liberty which it grants to men of enterprise, but this is an example of the aristocratic fallacy. In new countries, such as the United States used to be, and such as South America still is, there may be some truth in it, and therefore in such countries one sees capitalism at its best, but in older countries whose resources are developed and whose population is nearly as great as present methods of industry can support, the supposed freedom of enterprise exists only for a few. The early history of railways in the United States is full of bold piratical adventures; the railroad kings of that period remind one of Elizabethan buccaneers. But a railway in modern England is a very sober affair; its capital is held largely by innumerable maiden ladies and orphans whose funds are administered by trustees, its directors are sleepy Peers, its policy is traditional, and it does nothing to encourage new men with bold schemes. This is not due, as superfi-

is something in which people have to live, and not merely something to be read about in books, or contemplated as we contemplate the view from the mountain top.

II.

So far we have been concerned with ways of judging a society which we believe to be mistaken. It is time to turn to those to which we can assent.

There are two elements in a good society, namely: first, the present well-being of those who compose it, and secondly, its capacity for developing into something better. These two do not, by any means, always go together. Sometimes a society in which there is little present well-being may contain witthin itself the seeds of something better than any previous system. Sometimes, on the other hand, a society in which there is much diffused well-being may be unprogressive, for a time static, and ultimately decadent. It is, therefore, necessary to take account of both elements as independent ingredients of the sort of society we should wish to see existing. If the science of social dynamics were more developed and the art of prophecy less insecure, progressiveness would be a much more important quality in a society than present well-being. But politics is so far from scientific and the social future so very uncertain, that present well-being, which is indubitable, must be allowed as much weight as an uncertain future good; although this future good, if realized, will outweigh anything merety present because of its longer extension in time. "A bird in the hand is worth two in the bush" — and this is particularly true when we are not sure there are any birds in the bush at all. Let us therefore begin with what makes the present well-being of a community.

In judging of the present well-being of a community, there are

like manner, social theorists create worlds in their imagination which they also see to be good in spite of the fact that they would be intolerable to live in. Such worlds are neat and tidy; everybody does at each moment something which is in accordance with the central plan, they obey the will of the administrator as the universe obeys the will of God. The theorist, of course, is always in imagination himself the administrator. This kind of social theory was made popular among professors by Hegel; it was used by him to laud the Prussian State and has been used by his academic followers to support the conservatisms of their several countries. Since the war, the Hegelian theory has been at a discount, having been supposed in some mysterious way to have inspired the invasion of Belgium; but in other forms a similar outlook remains common. Much of the belief in industrialism, particularly as applied to backward countries, is of this sort; it is intolerable to the industrially minded to think of lazy populations sitting under banana trees, eating the fruit as it drops, and being happy in unproductive idleness. Some forms of socialism are not free from this defect: they aim rather at creating the kind of State which is pleasing to theoretical contemplation than the kind which will suit with the temperaments of its citizens. A very great deal of imperialism is also of this sort; It is pleasant to see a great deal of one's national color on the map, and it is unpleasant to see one's dominions jagged and scattered owing to the intrusion of foreign territories. The habit of judging the State as it is to contemplate, not as it is to live in, arises from giving more importance to the faint and transient sentiments of an observer (when that observer happens to be oneself) than to the vivid and continual experiences of those who have to live under the government of the State. It is certainly a very potent source of bad social theory. Whoever wishes to be a social theorist should daily remind himself of the very simple, but important, maxim that a State

classes is stronger than love for the dispossessed ; there are some to whom mere benevolent feeling appears to be repulsive humbug, and who derive the zeal of their revolutioeary ardor mainly from the delight which they feel in the thought of punishing the bourgeoisie. Such men will, of course, always be found among the advocates of violent tactics, since without violence there is no satisfaction for their impulses. Patriotism and militarism have, in many men, a similar origin. The thought of fighting, or more probably, the thought of setting others to fight, is delightful to them, and patriotism recommends itself to them as a creed likely to produce fighting. I do not mean that men are conscious of these impulsive sources of their beliefs, but I do mean that such impulses operate in the kind of way studied by psycho-analysis, and I believe that it is of great importance to drag the operation of these impulses into the light of day, to be aware of their operation in ourselves, and to do what we can to make others similarly aware ; for an underground, unconscious forces operates against reason, eludes discussion, and makes objectivity impossible while it remains undetected.

Among writers on sociology and political theorists generally, a very common way of judging the social structure is by whether it constitutes a pleasant pattern to contemplate. Many social theorists forget that a community is composed of individuals and that whatever of good or bad it may contain must be embodied in these individuals. They think of the State as something having a good of its own, quite distinct from the good of the citizens ; and what they call the good of the State is usually, unconsciously to themselves, what gives them a certain æsthetic or moral satisfaction. We know that when God created the world he saw that it was good, obviously not from the point of view of the unfortunates who have to live in it, but from a higher point of view, presumably that of æsthetic contemplation. In

chines were illegal. Similariy, the artist will not enjoy the thought of a society where no man is allowed to paint unless his pictures are pleasing to the town council. And on this ground, many artists are opponents of socialism. Men of science struggled against the system which existed in the 17th century and compelled them to teach nothing contradictory to revealed religion; and in like manner intellectuals in Russia object to having to teach their subjects from a Marxian point of view. People who find a pleasure in ordering others about (and this includes most of the energetic people in the world) will not like anarchism, where every man can do as he pleases. They will be in rebellion against existing authority unless they are part of it, but will wish to replace it by their own authority, not to abolish it, because in a world where every man could do as he pleases, executive people would find no career. On the other hand, easy-going people will hate strenuous systems. They will oppose the setting up of drill and severe educational methods. During the war, they called such things "Prussianism". If they were better informed about Russia, they would now call them "Bolshevism". I confess to a temperamental sympathy with this point of view, and my sympathy is being daily confirmed by what I see of China, the most easy-going country left in the world. But this is not an easy-going age, nor one in which such temperamental preferences can be allowed to weigh. It is an age in which we have to think less of the present than of the future, less of the lives of our own generation than of the lives they are preparing for the generations to come.

Another thing which influences people, more or less unconsciously, in their judgment as to a suggested social system, is the question, whether the activities involved in the creating of it would be agreeable to them. I fear that revolutionaries are not always exempt from this motive. There are certainly some in whom hatred of the possessing

shall have what he himself produces. Early socialists in the days before Marx were apt to suggest this as a cure for the injustices of capitalism, but their suggestions were both utopian and retrograde, since they were incompatible with large-scale industry. It is, therefore, evident that the injustices of capitalism cannot be cured so long as the sacredness of private property is recognized. The Bolsheviks have seen this, and have, therefore, confiscated all private capital for the use of the State. It is because they have challenged man's belief in the sacredness of private property that the outcry against them has been so great. Even among professing socialists there are many who feel a thrill of horror at the thought of turning rich men out of their mansions in order to make room for overcrowded proletarians. Such instinctive feelings are difficult to overcome by mere reason. The few men who do so, like the leading Bolsheviks, have to face the hostility of the world. But by the actual creation of a social order which does not respect merely traditional prejudices, more is done to destroy such prejudices in ordinary minds than can be done by a century of theoretical propaganda. I believe it will appear, when time enables men to see things in due proportion, that the chief service of the Bolsheviks lies in their practical challenge to the belief in private property, a belief existing by no means only among the rich, and forming at the present time an obstacle to fundamental progress—so great an obstacle that only its destruction will make a better world possible.

Another thing which affects people's instinctive judgment of a social system, whether actual or imagined, is whether it would provide a career for the sort of person they think they are. One cannot imagine that Napoleon, even in youth, could have been very enthusiastic about dreams of universal peace; or that captains of industry would be attracted by Samuel Butler's "Erewhon", where all ma-

of the practice of burying the dead, which to them was just as shocking as the other to the Greeks. Such experiences of intercourse with other nations diminish the hold which merely inherited beliefs have upon the man who lives in a fixed environment. In our age, this effect is produced not only by travel and commerce, but also by the changes in social custom inevitably produced by the growth of industrialism. Wherever industry is well developed and not very new, one finds that religion and the family, which are the twin props of every merely traditional social structure, lose their hold over men's minds. Consequently the force of tradition is less in the present age than it has ever been before. Nevertheless, it is even now as great probably as all other forces combined. Take, for example, the belief in the sacredness of private property, a belief bound up originally with the patriarchal family, the right which a man was supposed to have to the produce of his own labor, and the right which he was able to extort to what he had conquered by the sword. In spite of the antiquity and diminishing strength of these ancient grounds of belief in private property, and in spite of the fact that no new grounds are suggested, the enormous majority of mankind have a deep and unquestioning belief in its sacredness, due largely to the taboo effect of the words "thou shalt not steal". It is clear that private property is an inheritance from the pre-industrial era, when an individual man or family could make an individual product. In an industrial system a man never makes the whole of anything, but makes the thousandth part of a million things. Under these circumstances, it is totally absurd to say that a man has a right to the produce of his own labor. Consider a porter on a railway whose business it is to shunt goods trains: what proportion of the goods carried can be said to represent the produce of his labor? The question is wholly insoluble. Therefore, it is impossible to secure social justice by saying that each man

that he himself and his friends will be the slave-drivers rather than the slaves. Another is not afraid of starvation, because he has a secret hoard and therefore believes that privation brings out the latent heroism in men. And so they differ as to the course which is best to be pursued, and the grounds of their differences remain obscure to themselves and others. Being obscure, they are suitable objects for endless quarrels. The only way to make people's political judgments more conscious, more explicit and therefore more scientific, is to bring to the light of day the conception of an ideal society which underlies each man's opinion, and to discover, if we can, some method of comparing such ideals in respect of the universality, or otherwise, of their appeal.

I propose first of all to examine some ways of judging a social system which are common but which I believe to be erroneous, and then to suggest the ways in which I think such judgments should be formed.

Among most people at most times, the commonest way of judging is simply by inherited prejudices. Any society which is not in a state of rapid transition has customs and beliefs which have been handed down from previous generations, which are unquestioned, and which it appears utterly monstrous to go against. Such are the customs connected with religion, the family, property and so on. The peculiar merit of the Greeks was due largely to the fact that, being a commercial and seafaring people, they came across the customs and beliefs of innumerable and widely differing nations, and were thus led to a sceptical examination of the basis of all such customs, including their own. If my memory serves me, there is somewhere in Herodotus a story of a conversation between some Greeks and a barbarian tribe, in which the Greeks expressed horror of the barbarians for the practice of eating their dead, but the barbarians expressed quite equal horror

WHAT MAKES A SOCIAL SYSTEM GOOD OR BAD?

By Prof. Bertrand Russell.

I.

Any man who desires, as I do, a fundamental change in the structure of society is forced, sooner or later, to ask himself the question: What is it that makes one social system seem to him good and another bad? This is undoubtedly very largely a matter of individual caprice. In history, for example, some prefer one epoch, some another. Some admire the polished and civilized ages, while others profess to admire the rude virtues of more barbarous times. One does not wish to think that one's political opinions result from mere fanciful preferences of this sort, yet I believe that an enormous proportion of political opinion comes, in the last analysis, from some untested, unexamined, almost unconscious love for a certain type of society actual or imagined. I think it is possible to arrive at something less subjective than such tastes and fancies, and I think the advocate of fundamental change, more obviously than any one else, needs to find ways of judging a social system which do not embody merely his individual tastes.

A man's proximate political opinions are defended by arguments—arguments as to the effect of this course or that: such a course will lead to war; such another to economic slavery; such another to starvation. But in choosing the danger we most wish to avoid or the advantage we most wish to secure, we are almost all of us dominated by some more or less vague picture of the sort of society we should like to see existing. One man is not afraid of war, because he has a picture of Homeric heroes whose fighting he finds it agreeable to contemplate. Another is not afraid of economic slavery, because he thinks

新刊紹介

■書翰（久保田萬太郎著）絲きり、お濟、妹におくる、月かげ以下氏の近業數編を蒐めたるもの（定價金二圓三十錢國文堂發行）

■井上和英大辭典（井上十吉著）斯學界の泰斗たる氏の苦心の結晶にして語辭の如き主として現代使用の見地より廣く一般に蒐集せる外特に英語學者の慣習及利便に注意し居り本邦和英辭書中理想的大著と云ふべきである（定價金八圓至誠堂發行）

■トルストイ全集、杜翁全集刊行會が、露國文學通の內田魯庵昇曙夢片上伸三氏を監修者として刊行した、本書は嘗に第三回の豫約に非常な歡迎を受けたので、今回更に第四回の豫約會員の募集を始めた、全十三卷上製四十五圓並三十五圓（毎月拂上三圓七十錢普二圓九十錢）で毎卷千頁の大册である、譯者は當代新進の文藝家が總出し、精神界の巨人の恆久の光を現はすに最も努力したのである（神田表神保町杜翁全集刊行會）

■宗教的奇蹟（柳宗悅著）頻繁たる靈驗を以て基督教に關する奇蹟を說けるものにして近來貴重なる著述と云ふべきである（定價金二圓叢文閣發行）

■土地（武者小路實篤著）一休に聞いた話、土地、Cの話、西伯と呂尙、小喜劇、小曲、佛陀と孫悟空等最近に於ける何れも氏の力作を蒐めたるもの（定價金一圓曠野社發行）

■樂園の途上（白鳥省吾著）一九一九年より一九二〇年に至る二ケ年間に於ける氏の詩八十一編を蒐めたるもの（定價一圓五十錢、叢文閣發行）

■岡田式靜坐法の研究（岸本能武太著）岡田式靜坐法の研究者として有名なる氏の近著にして詳細懇切なる記述を以て其奧義を教ふ（定價金三圓四十錢大日本文明株式會社發行）

■嘘の果（有島生馬著）婦人と一青年との間に取り交された、戀愛を手紙體に取扱へるもの近來の力作たるを失はぬ（定價一圓六十錢新潮社發行）

■靜かなる暴風（島田清次郎著）地上の續篇第三部である（定價金二圓新潮社發行）

■平和なる農業論（永田秀治郎著）標題の示す如く平易なる農業論である（定價一圓五十錢敬文館發行）

■社會經濟研究（法學博士堀江歸一著）最近に於ける著者の社會經濟現象に關する研究論策を蒐めたものにして不安なる現時の經濟生活に對する嚴正なる批判を見る蓋し必讀の好著たるを失はぬ（定價金二圓八十錢、芝三田國文堂發行）

■社會革命の將來（五來素川著）主として露西亞及獨逸に於ける現狀より說き起し世界に於ける革命の將來を論じたるもの（定價金二圓富山房發行）

■教育再造（下中彌三郎著）著者最近に爲したる教育に關する評論を蒐めたるものにして「教育家の努むべき道」以下讀むべきもの多し（定價金一圓六十錢啓明會發行）

■惱み（生田蝶介著）著者のさびしき過去に於ける記錄である「曇屋の二階」以下十一編を蒐めたり（定價金二圓三十錢博文館發行）

■文化生活と人間改造（帆足理一郎著）文化主義的見地に立脚する著者が文化生活を基調としての人間改造論にして混沌せる思想界に貴重なる貢獻を爲すものと云ふべし（定價二圓四十錢博文館發行）

■社會と我（納武津譯）ミシガン大學教授シー・エチ・クーレー氏の人間性と社會秩序を譯したるものにして原著は米國讀書界に於て信用と好評を博せるもの（定價金二圓[illegible]十錢日本評論社）

■現實を直[illegible]中野正剛著）下院の新人たる氏が現實を把握せんとして爲したる努力の結晶と云ふ（定價金二圓八十錢叢文社發行）

「見なれざる人」の正誤

本誌三月號叢文閣廣告中「見なれざる人」の著者、中川政とあるは、中川一政の間違ひです。右訂正いたします。

◇改造三週年

改造社編輯局編纂

文化哲學叢書

全部拾貳册

刊行の趣旨

世の文化生活を説くもの、多くは、その末節細葉に拘泥して、眞の文化生活の根源に觸れず、本社は、茲に見る所ありて、四月三日の三週年記念日を期して、茲に「**文化哲學叢書**」刊行を發表するに至れるは、深く時事に鑑みる所ありしに依る。その取材の範圍と、執筆者は、次號に詳載することとしたるが、監修者は、何れも當代稀に見るの碩學にしてその内容が、いかに權威あるものなるかを推知するに足る。

記念大出版◇

監修者（いろは順）

文學博士 波多野精一
文學博士 西田幾多郎
文學博士 朝永三十郎
文學博士 米田庄太郎
文學博士 田邊元
法學博士 左右田喜一郎
文學博士 藤井健次郎
文學博士 深田康算
阿部次郎

書目及び執筆者は五月號に於て詳報す
本書の内容は監修者に於て全責に任ず
斯の如き哲學界の完璧を網羅したるは
我學界に於ては未曾有のことにして
本社は社會に奉仕する一大決心を以て
多大の犧牲を拂ひ人類文化に貢獻せん
全卷拾貳冊、四千五百餘頁の一大冊子
「改造式」の裝禎を凝せる最新型の美本
壹冊の定價約貳圓五拾錢の豫[illegible]にして
豫約に應じて特價大割引提供の設あり
第壹卷は今秋を期して發賣せらるべく
一世を壓する權威の所產と大勞作とは
學者も青年も學校も家庭も必備の著作

編輯局より

□本誌も愈々三週年になりました。僅々數へ年三ツで、本邦雜誌界のレコード破りの大發展を遂げたのは、時勢の然らしむる所とは云へ、今日迄多大の援助を與へられた、御寄稿家の御盡力が、其大部分を占めて居ると思ひ、同人一同厚く感謝して居ります。

□四月三日の創刊紀念日には、御盡力を辱ふした御方々に謝意を表するため、一夕の會合を催したいと思ひます、何れ御案内を差出しますが、是非御繰合せの上御出席を御願ひ致しておきます。

□三週年紀念事業の一として、別項豫告の如く、『文化哲學叢書』の出版を計畫しました、更に五月號に於て、第二、第三の大計畫をも發表する段取になつてゐます。

□本社の世界的活動も、段々熟して來ました。そして歐米列國一流の學者思想家の寄稿も、續々机上に蓄積して來ました、來る五月號には米國勞働界の大立物ゴムパース氏の「日本の勞働者に寄す」と云ふ稿と、新マルサス主義研究の本家本元たる、米國のサンガア女史の長論文とを掲載の運びになつてゐます、新マルサスの元祖たる女史の寄稿は、此問題が徹底的に論究せられてゐることを豫告しておきます。

□又重任を帶びて加奈太に在る片山潜氏も、十數年振りに其鋭鋒を磨して日本の論壇に雄飛することになつた由で、此第一回を本誌に寄せられました。最初は自叙傳から發して、最近の活動に至る迄の苦酸の生涯を叙し、血と涙の半生を物語る痛恨淋漓たるものです、多分四五ヶ月は連載することになりませう。

□森戸辰男氏は、急遽旅裝を調べて、二月廿九日東京發で獨逸に向はれました、そして上海から獄中の感想に就て長い原稿を御送り下さつたのでしたが、〆切迄に間に合はなかつたので、五月號に廻しました、故に今月は「獄より出でゝ」、の消息丈と、船中よりの御便りを掲げて、「獄中記」の序としました。

□本號から連載する、阿部次郎氏の「北郊雜記」は、氏の哲學を背景として最も興味津々たる一文で、氏の勞作として聞えた「三太郎日記」の續篇と云つてよいものです。必ず諸君の求むる糧であることを信じます。

□同人室伏は二月末倫敦に着きました、彼の活動は、之からが本舞臺です。

冊數	定價	郵稅
壹冊	七十錢	二錢
半ヶ年	四圓二十錢	不要
壹ヶ年	八圓四十錢	不要

改造定價

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲若大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲見本御請求の節は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割増の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正十年三月二十日印刷納本
大正十年四月一日發行

本號特價　金壹圓三拾錢

編輯兼發行者　東京府中日黒七七〇　横關利藤太
印刷者　東京市京橋區南鍋町二ノ十七番地
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二

KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS. ETC.
EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
E: KAIZOSHA, 7 SAKURADAKUBO-CHO SHIBA, TOKIO

春は野に山に

三越の店には春の品物が一杯に、溢れて居ります

三越の四月の賣出しは、例年皆々様の大に期待さるゝ年中行事の一つであります、特に本年は品質が良く値段の廉い品を潤澤に取揃へ御高覧に供します

◆三越の四月◆

◆寄裂見切反物賣出し（一日より）
◆新製洋傘陳列（一日より）
◆五月人形陳列會（十日より）
◆銘仙新柄陳列（十五日より）

……定休日は……
十一日◆廿五日



東京市駿河町

三越呉服店